



第274図 2面I期全体図

第2節 第Ⅱ期 古代～古墳時代後期

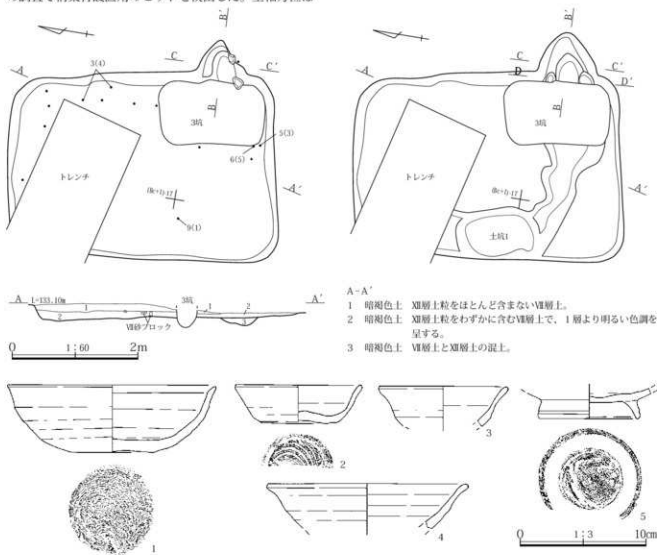
第1項 田口上田尻遺跡

(1) 竪穴住居

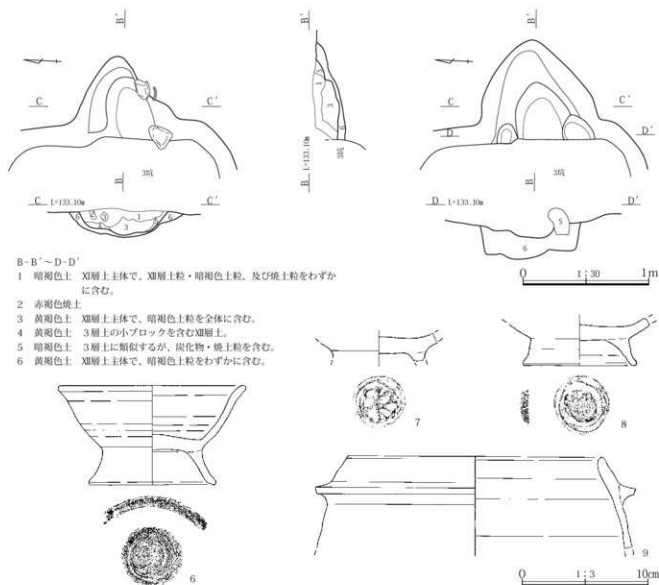
2号住居(第275・276図 P.L.61・245)

位置：Bc-15・16グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.99m×4.25m 残存深度：0.23m 主軸方位：E-11°-N 埋没土：Ⅶ層土を主体としており、わずかにⅧ層土粒を含む土層で埋没している。柱穴：なし カマド：南東コーナー近くの東壁に構築されている。壁との接続部分に袖構築材の跡が残されており、住居内にほとんど張り出さない釣鐘状の平面形となるタイプである。左袖は3号土坑との重複のため残存していないが、掘り方の調査で構築材設置用のピットを検出した。主軸方位は

E-10°-Nである。遺物：カマド焚口部が3号土坑によって攪乱されているため、カマド付近からの出土はほとんど無く、東壁近くからわずかに出土しただけである。1の須恵器坏は、3号土坑の調査時に検出したものであるが、当住居に帰属するものと判断した。他に足高台(6)、羽釜(9)などが破片で出土した。重複：カマド焚口部が3号土坑との重複によって失われ、北西コーナー部で3号住居と重複しているが、試掘トレンチで壊されているため新旧関係が判然としない。遺物の比較から3a号住居→2号住居の可能性が高い。所見：上層を復旧痕によって攪乱されているため、わずかに残存したに過ぎない。床面は平坦であるが、硬化した面は確認されていない。掘り方は、西壁中央に土坑状の浅い掘り込み(土坑1)が見られただけで、全体に掘り下げられていた。時期：10世紀後半



第275図 2号住居・出土遺物(1)



B-B'～D-D'

1 暗褐色土 X層土主体で、X層土粒・暗褐色土粒、及び焼土粒をわずかに含む。

2 赤褐色焼土

3 黄褐色土 X層土主体で、暗褐色土粒を全体に含む。

4 黄褐色土 3層土の小ブロックを含むX層土。

5 暗褐色土 3層土に類似するが、炭化物・焼土粒を含む。

6 黄褐色土 X層土主体で、暗褐色土粒をわずかに含む。

第276図 2号住居カマド・出土遺物(2)

3a号住居(第277～279図 P L.61・62・245・246)

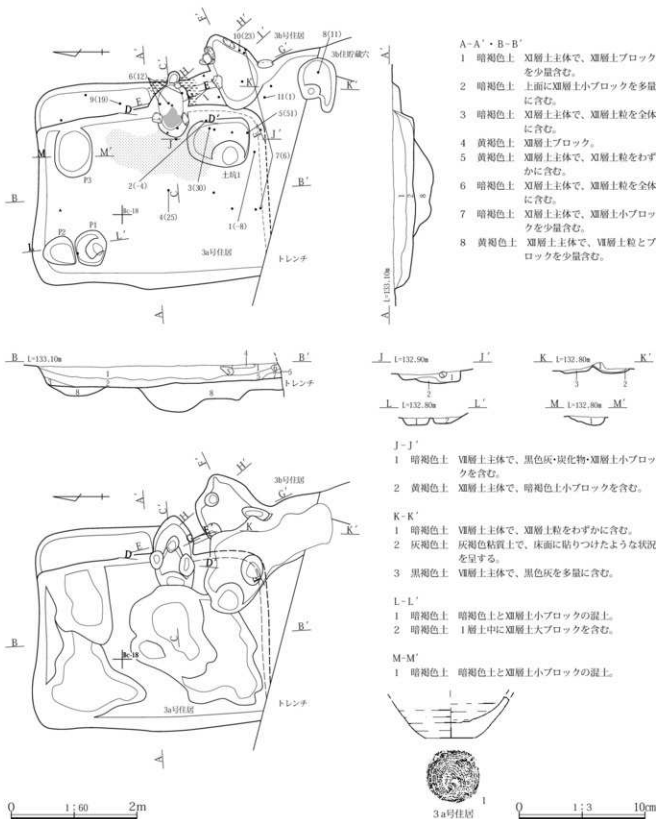
位置：Bb・Bc-17・18グリッド 形状：隅丸長方形 規模：(3.77)m×2.88m 残存深度：0.34m 主軸方位：E-3°-N 埋没土：VII層土を主体とする。柱穴：なし
カマド：東壁やや南寄りに位置すると考えられ、煙道がわずかに突出する凸字状の平面形のタイプである。壁との接続部分に袖構築材として礫を用い、燃焼部中央には礫を支脚として立て、その前面の底面は焼土化していた。カマド前面には比較的広範囲に灰の広がりがあり、一部は貯蔵穴の上部にまで及んでいた。主軸方位は、E-2°-Sである。遺物：遺物出土は多くないが、3b号住居と同時に調査を進めたため、埋没土中から出土した遺物については、どちらに帰属するべきか判別できないものもある。確実に当住居に伴う遺物は、カマドから出

土した羽釜(6)、カマドと土坑1との境で出土した須恵器器境(2)、土坑1内から出土した須恵器器境(3・5)などである。重複：3b号住居と重複しており、新旧関係は出土遺物の比較から3a号住居→3b号住居である。所見：遺構確認時点では、3b号住居とした住居しか認識できなかったが、調査途中で屋内に新たなカマドの存在に気づいたため、3a・3b号住居として2棟に分離した。カマド南側の南東コーナー部に当たるとされる位置で検出した0.98×0.76m、深さ0.17mの隅丸長方形を呈する土坑1を貯蔵穴として調査したが、前述のようにカマドから掻き出した灰が貯蔵穴上面にまで及んでおり、カマド使用時点で埋没していた可能性が高く、貯蔵穴ではなかったものと思われる。北壁は3b号住居と一致しており、ちょうど3b号住居を対角線方向に縮小し

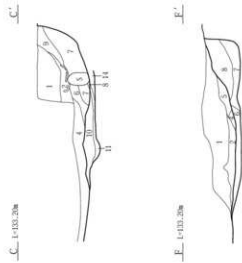
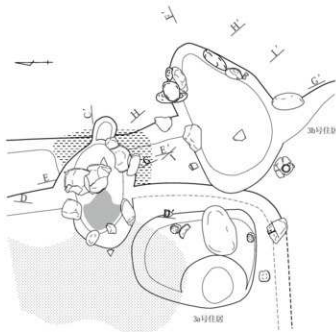
て建て替えたかのような位置関係となっている。床面精査時に北壁際にP1(径0.48m、深さ0.25m、不整形形)、P2(径0.46m、深さ0.10m、不整形形)、P3(0.78×0.58m、深さ0.13m、楕円形)を検出した。3カ所いずれも

位置的に柱穴とは考えられないが、土坑1が貯蔵穴でなかったとするとP3が貯蔵穴であった可能性がある。

時期：10世紀前半

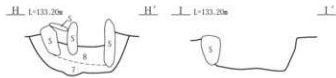
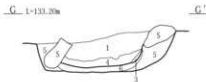
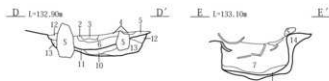


第277図 3a・3b号住居・3a号住居出土遺物(1)



C-C' ~ E-E'

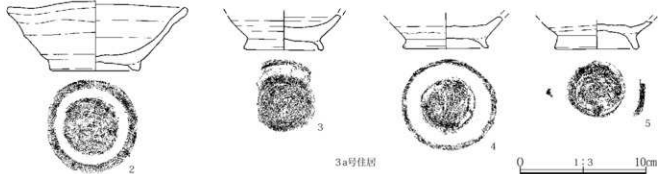
- 1 暗褐色土 XI層上主体で、焼土粒をわずかに含む。
- 2 赤褐色焼土 XI層上・XII層上粒を含む。
- 3 暗褐色土 XI層上主体で、焼土粒を全体に含み、やや赤みがかった色調を呈する。
- 4 黄褐色土 XII層上主体で、XII層上ブロックを多量に含む。
- 5 暗褐色土 XI層上主体で、XII層上粒を全体に含む。
- 6 暗褐色土 XII層上主体で、焼土粒を少量含む。
- 7 暗褐色土 XII層上主体で、焼土小ブロックを多量に、炭化物を少量含む。
- 8 暗褐色土 XII層上主体で、黒色灰・焼土粒を含む。
- 9 黄褐色土 XII層上。
- 10 暗褐色土 VII層上ブロック・XII層上ブロック・黒色灰・焼土大粒の混上。
- 11 黄褐色土 XII層上主体で、暗褐色土ブロックを少量含む。
- 12 黄褐色土 XII層上。(カマド構築材)
- 13 暗褐色土 XII層上粒と暗褐色土粒の混上。
- 14 暗褐色土 VII層上粒とXII層上粒の混上。



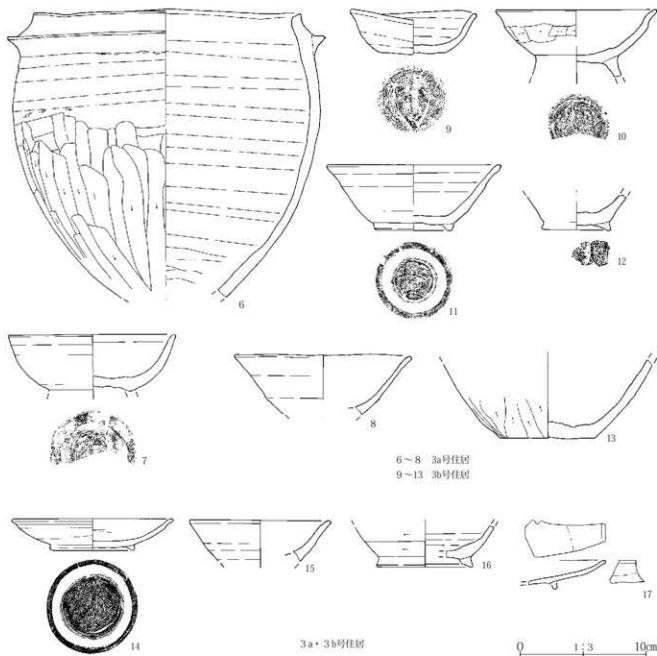
0 1:30 1m

F-F' ~ H-H'

- 1 暗褐色土 XI層上主体で、焼土粒をわずかに含む。
- 2 黒褐色土 XI層上をブロック状に、部分的に焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 XI層上主体で、XII層上粒を少量含む。
- 4 赤褐色焼土 XI層上粒・XII層上粒を含む。
- 5 暗褐色土 XI層上主体で、XII層上粒と少量の焼土粒を含む。
- 6 暗赤褐色土 XII層上主体で、XI層上粒・焼土粒を全体に含む。
- 7 黄褐色土 XII層上主体で、XII層上粒を少量含む。
- 8 暗褐色土 XI層上主体で、XII層上粒を少量含む。



第278図 3a・3b号住居カマド・3a号住居出土遺物(2)



第279図 3a・3b号住居出土遺物

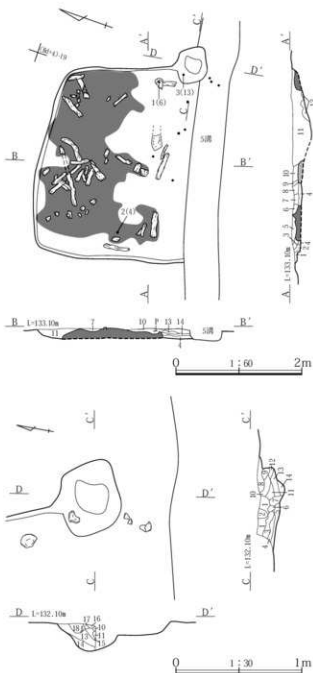
3b号住居(第277～279図 P L.61・62・246)

位置: Bb・Bc-17・18グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: (4.65)m×3.26m 残存深度: 0.12m 主軸方位: E-3°-N 埋没土: VII層土主体。柱穴: なし カマド: 東壁南寄りの位置に構築されており、当初は釣鐘状の平面形を持つタイプとして調査したが、掘り方の調査で凸字状の平面形タイプであることが確認された。袖部と煙道基部に構築材として礫を立てており、主軸方位は、E-25°-Nである。遺物: 確実に当住居に伴うと判断されるのは、カマド内から出土した土師器碗(10)、

カマド前面の床面から出土した須恵器碗(11)、貯蔵穴内から出土した須恵器碗(8)などである。重複: 2・3a号住居と重複しており、3a号住居→2・3b号住居という新旧関係である。所見: 東壁を基準として計測した住居主軸方位とカマド主軸方位に大きなズレが生じており、住居平面の捉え方を誤った可能性がある。カマド南側に西側の一角が深くなる不整形の浅い土坑(0.87×0.60m、深さ0.40m)が検出されており、位置から貯蔵穴と判断した。時期: 10世紀後半

5号住居(第280・281図 P.L.62・63・246)

位置: Bb-18グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 3.07m × (2.43)m 残存深度: 0.15m 主軸方位: E-14°-N 埋没土: 多量の炭化物と灰を含むⅧ層土主体。
柱穴: なし カマド: 東壁南寄りに位置すると思われるが、残存状態が悪く形状が判然としない。遺物: 炭化物に混じてカマド付近から須恵器環(1)、西壁寄りの床面から足高台(2)が出土した他、細い棒状の青銅製品が出土したが、状態が悪く実測掲載はできなかった。
重複: 南壁部分が5号溝(泥流復旧痕の可能性ある)に



第280図 5号住居・出土遺物(1)

よって壊されている他、古墳時代前期の6号住居と重複している。所見: 住居北半に炭化材と灰が多量に残されていた。炭化材の方向は一定していないが、上層の構造材である可能性が高い。部分的に焼土も形成されており、炭化材などが広範囲に及んでいることから、焼失した住居と考えられるが、遺物出土の極めて少ない状況は故意に焼失させたことを示唆している。貯蔵穴は南東コーナー部にあったものと考えられるが、5号溝との重複で失われている。時期: 10世紀後半

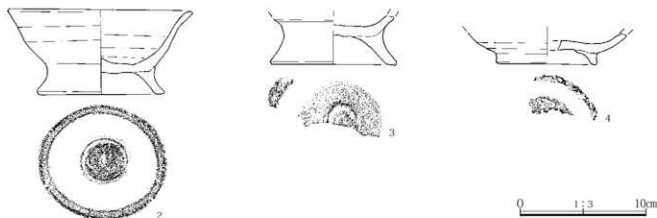
A-A'・B-B'

- 1 茶褐色土 炭化物・焼土粒を少量含むⅧ層土。
- 2 茶褐色土 As-C・炭化物を多量に含むⅧ層土。
- 3 茶褐色土 2層よりも炭化物・焼土粒が多いⅧ層土。
- 4 茶褐色土 炭化物・焼土粒を含まないⅧ層土。粒子が細かい。
- 5 茶褐色土 焼土粒・As-Cを含むⅧ層上で、炭化物の含有は3層より少量である。
- 6 黄褐色土 暗褐色土粒・炭化物・焼土粒を少量含むⅧ層土。
- 7 茶褐色土 炭化物を含むⅧ層土。
- 8 茶褐色土 As-C・炭化物を含むⅧ層土。
- 9 炭化材層 暗褐色土粒を含む。
- 10 茶褐色土 Ⅷ層土粒を多量に含むⅧ層土。
- 11 覆瓦層
- 12 暗褐色土 Ⅷ層土。
- 13 茶褐色土 炭化物・焼土粒を含むⅧ層土。
- 14 茶褐色土 4層より暗いⅧ層土。

C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 Ⅷ層土粒・炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 2 赤褐色焼土 焼土主体で、暗褐色土粒を全体に含み、硬くしまりが強い。
- 3 暗褐色土 Ⅷ層土と暗褐色土粒の混土。
- 4 暗褐色土 Ⅷ層土と暗褐色土粒の混土で、焼土粒を含む。
- 5 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、暗褐色土粒を含む。
- 6 赤褐色焼土 焼土主体で、暗褐色土粒を全体に含み、硬くしまりが強い。
- 7 黄褐色土 Ⅷ層土主体で、暗褐色土粒を少量含む。
- 8 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、焼土粒を含む。
- 9 赤褐色焼土 焼土主体で、暗褐色土粒を全体に含み、硬くしまりが強い。
- 10 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含むⅧ層土。
- 11 暗褐色土 Ⅷ層土と暗褐色土粒の混土。
- 12 暗褐色土 Ⅷ層土と暗褐色土粒・焼土粒の混土。
- 13 暗褐色土 12層に類似するが焼土粒をややく含む他、炭化物を含む。
- 14 黄褐色土 Ⅷ層土主体で、暗褐色土粒をわずかに含む。
- 15 黄褐色土 Ⅷ層土主体で、暗褐色土粒を少量含む。
- 16 赤褐色焼土
- 17 暗褐色土 Ⅷ層土粒を少量含む。
- 18 暗褐色土 13層に類似するが、より暗い色調を呈する。



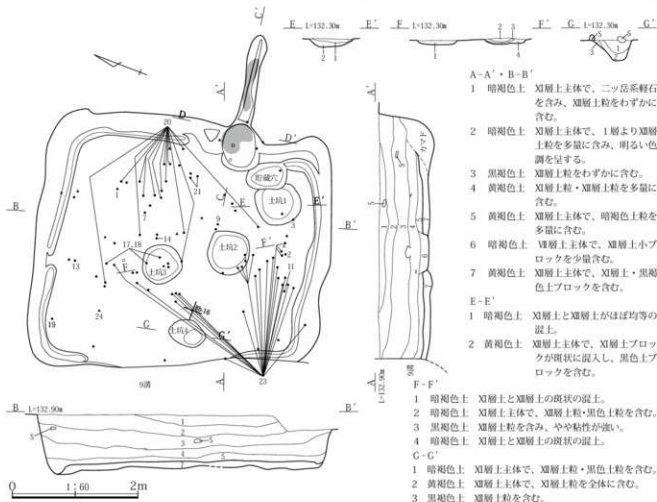


第281図 5号住居出土遺物(2)

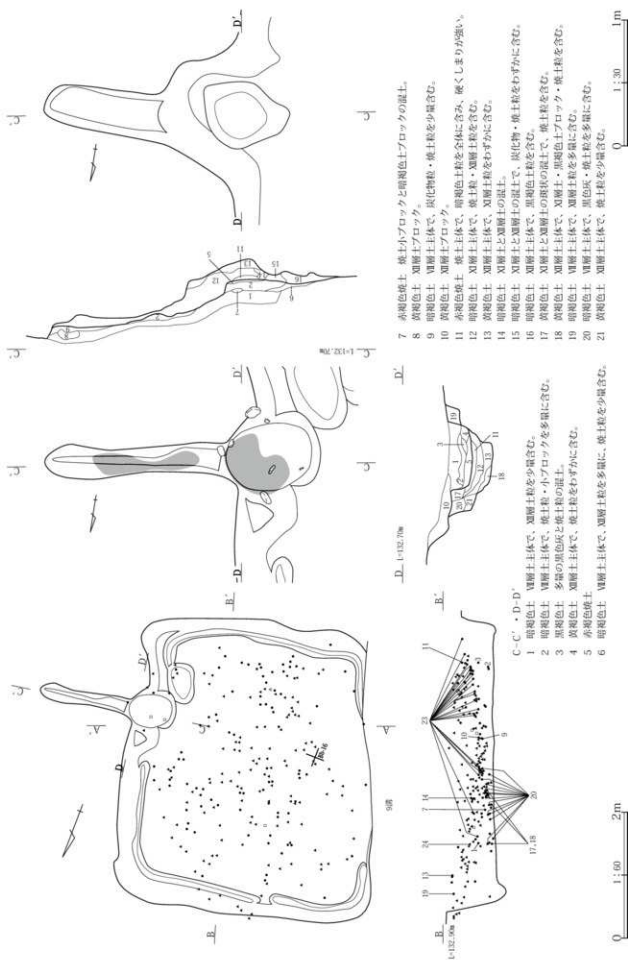
8号住居(第282～285図 P.L.63・246)

位置: Ba・Bb・15・16グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 3.98m×4.68m 残存深度: 0.79m 主軸方位: E-15°-N 埋没土: VII層土主体で、下層にXII層土粒を含む。柱穴: なし カマド: 東壁の南寄りに構築されている。煙道は1.50mほど屋外に延び、燃焼部が壁にわずかに掘り込まれた位置にあることから、カマド本体が

屋内に張り出すタイプと考えられるが、袖の痕跡が明瞭ではない。燃焼部奥側および煙道部が焼土化していた。主軸方位はE-10°-Nであり、北壁を基準として計測した住居の主軸方位とわずかのズレが生じている。遺物: 埋没土中から土器片が多量に出土した他、大小さまざまな礫140点以上、および鉄滓がわずかに出土した。特徴的な出土状況をしたのは、20の土師器甕が住居東半



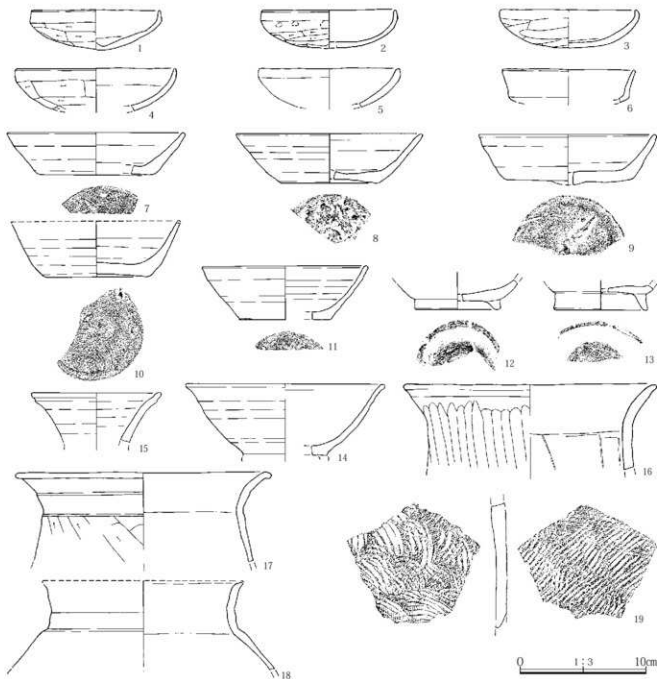
第282図 8号住居



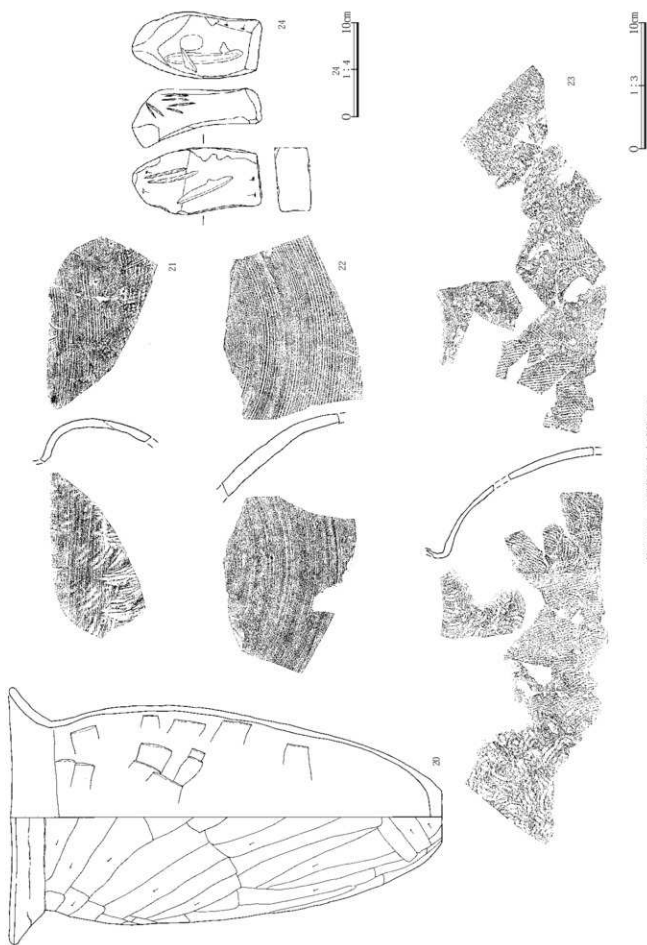
第283図 8号住居遺物出土状況・カマド

に、23の須恵器甕が西半にそれぞれ破片の状態で散在していたことである。また、北西コーナー近くの床面から24の砥石が出土したことが特筆される。掲載した遺物からもわかるように埋没土中の出土遺物には8世紀後半の遺物も混じっているが、20の土師器甕や1～3の土師器坏などが本来当住居の遺物と判断した。重複：北側で17号住居と、東側で20号住居と重複しているが、検出状況や残存状況から17号住居→8号住居→20号住居と考えられる。また、西側は1面の8号溝によって壁の一部が失われている。所見：東側で重複する20号住居は、カ

マダの状況などから当住居よりも新しい時期の遺構と考えられるが、遺構残存状況が悪く当住居の調査時点で正しく認識することができなかったために全体形を把握することができなかった。床面は平坦で掘えやすかったが、硬化面は検出されなかった。床面の調査段階で浅い土坑を5基検出したが、配置や規模から柱穴とは考えられず、南東コーナー付近で検出されたものが検出位置から貯蔵穴と判断した。カマド部分を除いて壁溝がほぼ全周していたものと考えられる。時期：7世紀後半



第284図 8号住居出土遺物(1)

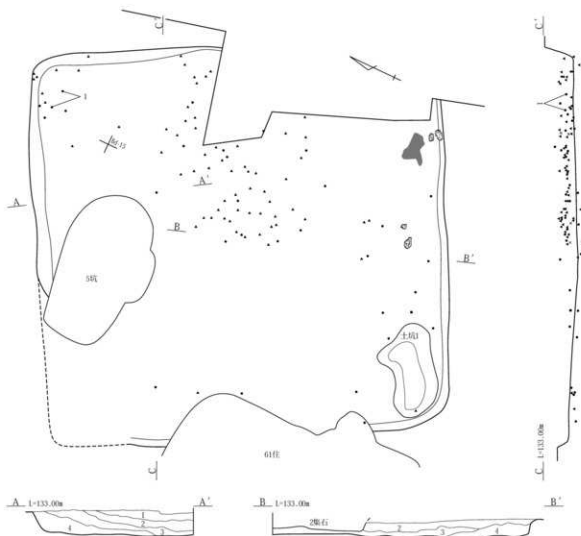


第285図 8号住居出土遺物(2)

11号住居(第286・287図 P.L.63・246)

位置: Bc・Bd-13～15グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 6.30m×6.48m 残存深度: 0.38m 主軸方位: E-31°-N 埋設土: VII層土を主体 柱穴: なし カマド: 未検出 遺物: 棒状礫や扁平な自然礫が北および東コーナー付近に集中し、南壁際に湾曲した棒状の鉄製品(6)が出土した。出土状態は良好ではないが土師器坏(1)などが当住居の時期を示すものと考えられる。重複: 61号住居と重複し、遺構の残存状況から11号住居→61号住居と考えられる。所見: II区とV区の調査区境にあたるために二次の調査で全体を明らかにした。II

区の調査で検出した部分については、比較的掘り込みがしっかりとしており、東壁から北壁の残存状況も良好であったが、西壁については土坑との重複もあり北壁と比較して掘えにくい状況であったため、東壁とは並行しない南に向かってやや開きぎみの不自然な平面形の住居として捉えた。V区の調査では、II区で掘えた西壁の延長上に壁を掘えることはできず、61号住居との重複のために失われたものと考えた。しかし、整理作業で遺構集中部分の図面を合わせていった時点で、V区の95号住居として調査した住居の南壁と11号住居の北壁が、95号住居の西壁と11号住居の東壁がそれぞれ並行し、それぞれの



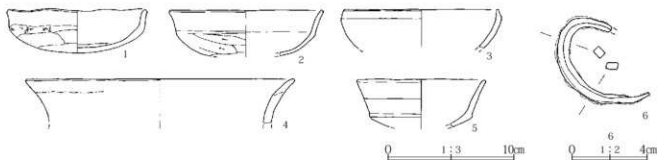
A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土粒を含み、しまりが弱い。
- 2 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土ブロックを多量に含み、全体にしまりが弱い。
- 3 暗褐色土 VII層土主体で、全体に明るい色調を呈し、全体にしまりが強い。
- 4 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土ブロックを少量含み、全体にしまりが強い。

0 1:60 2m

第286図 11号住居

距離がほぼ一致し、しかも11号住居床面の標高と95号住居掘り方として捉えた面の標高が一致していることなどから、11号住居と95号住居が同一住居であると結論づけた。また、65号住居として調査した部分についても、調査時点から65号住居と95号住居の南壁が一致する点と、平面形に不自然さを感じていたのであるが、95号住居と同様に11号住居の掘り方を別遺構と誤って捉えたと結論づけた。壁は検出部分においては垂直に近い良好な残存状態であった。床面はⅡ区では掘り方は行われていない



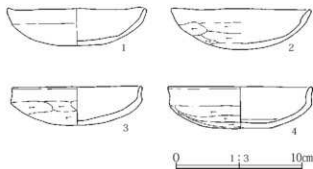
第287図 11号住居出土遺物

16号住居(第288～291図 P.L.64・246・247)

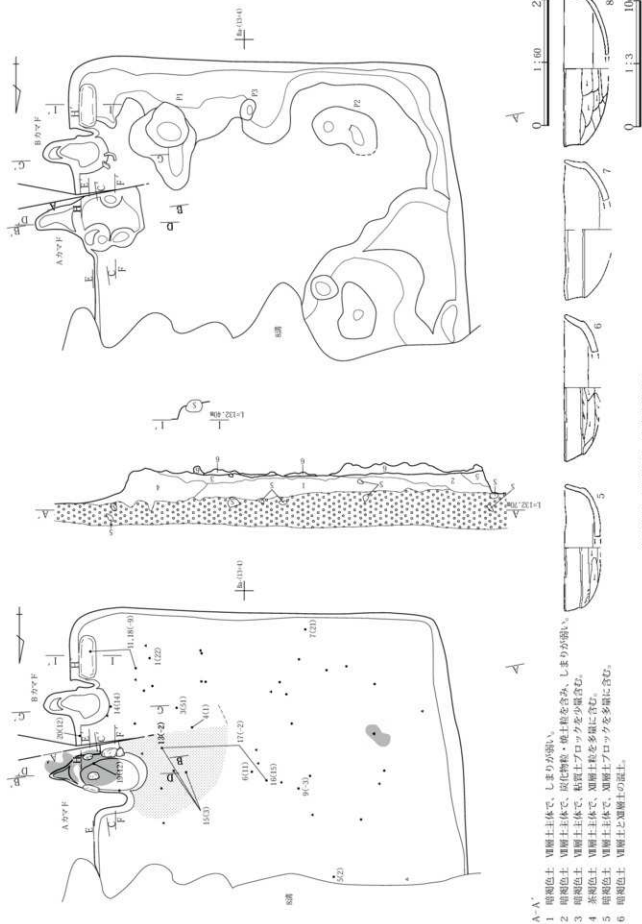
位置：At・Ba-13・14グリッド 形状：隅丸方形 規模：6.00m×(4.34)m 残存深度：0.34m 主軸方位：E-2°-S 埋没土：Ⅶ層土主体。柱穴：掘り方調査で、径0.60m前後、深さ0.38～0.73mの不整形のピットを3本(P1～P3)検出したが、南側の2本(P1・P2)は掘り直された痕跡があることから、建て替えされた可能性がある。カマド：カマドは東壁ほぼ中央とやや南寄りの2カ所で検出した。残存状態の良い北側のAカマドは、袖が屋内に張り出すタイプで、本来は煙道が長く伸びていたものと考えられ、主軸方位は、E-3°-Nである。礫を立てて燃焼部壁を構築しており、中央やや北寄りに支脚となる石を立てていた。南側で検出したBカマドも、袖がわずかに屋内に張り出して残存していることから、北側のAカマドとほぼ同形態と思われるが、袖構築材や支脚は残存しておらず、カマドのセクションに建て替えて壊された状況が看取できる。主軸方位はE-0°-Nである。遺物：床面中央付近に大型の扁平礫が出土した他、6・9の土師器環が床面中央から15の土師器甕がカマド前面から出土し、さらに北西コーナーに近いと思われる位置から炭化種実が1点出土した。南側で検出された古い段階のBカマド右袖に接するよう

と考え、V区では掘り方がされていたように捉えたことで齟齬をきたしているが、Ⅱ区は重複がなく検出状況が比較的良好であったことを勘案すると、掘り方はなくⅡ層土がそのまま床面となっていたものと考えられる。住居規模が大きいかかわりなく、柱穴となるような掘り込みはまったく検出されなかった。カマドは東壁中央付近に構築されているものと考えられ、貯蔵穴は調査できなかった南東コーナー部付近に掘削されていた可能性が高い。時期：7世紀後半

に、長さ68cm、幅28cm、厚さ20cmほどの角柱状の載石が水平の状態で見出されていた。重複：南東コーナー付近で60号住居と接している。新旧関係は出土遺物の比較から16号住居→60号住居と考えられる。所見：調査区域に位置していたためにⅡ・V区の二次の調査で全体を明らかにした。北側は1面の8号溝との重複部分の断面で床面が明確に捉えられ、それを裏付けるようにAカマド前面に硬化面が検出された。しかし、V区の調査では床面が捉えきれずに掘り方まで掘り下げてしまった。前述のようにカマドは新旧2カ所を検出したが、残存状況から北側のAカマドが最終使用されたものと考えられ、この新旧2時期が柱穴から捉えられた建て替えに対応するものと思われる。時期：7世紀後半



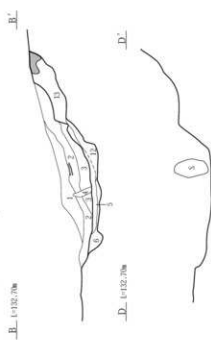
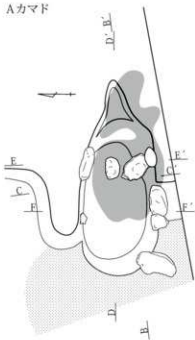
第288図 16号住居出土遺物(1)



A-A'
 1 暗褐色土 V層土主体で、しまりが強い。
 2 暗褐色土 V層土主体で、炭化物類・焼土粒を含み、しまりが強い。
 3 暗褐色土 V層土主体で、粘質土ブロックを少量含む。
 4 茶褐色土 V層土主体で、暗層土粒を多量に含む。
 5 暗褐色土 V層土主体で、暗層土ブロックを多量に含む。
 6 暗褐色土 V層土と暗層土の混土。

第289図 16号住居・出土遺物(2)

Aカマド



C, L-132.70m

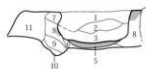
C'

E, L-132.70m

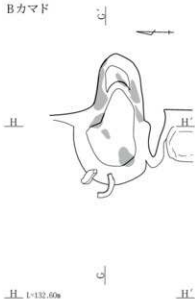
E'

F, L-132.70m

F'

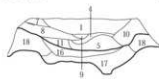


Bカマド



H, L-132.60m

H'

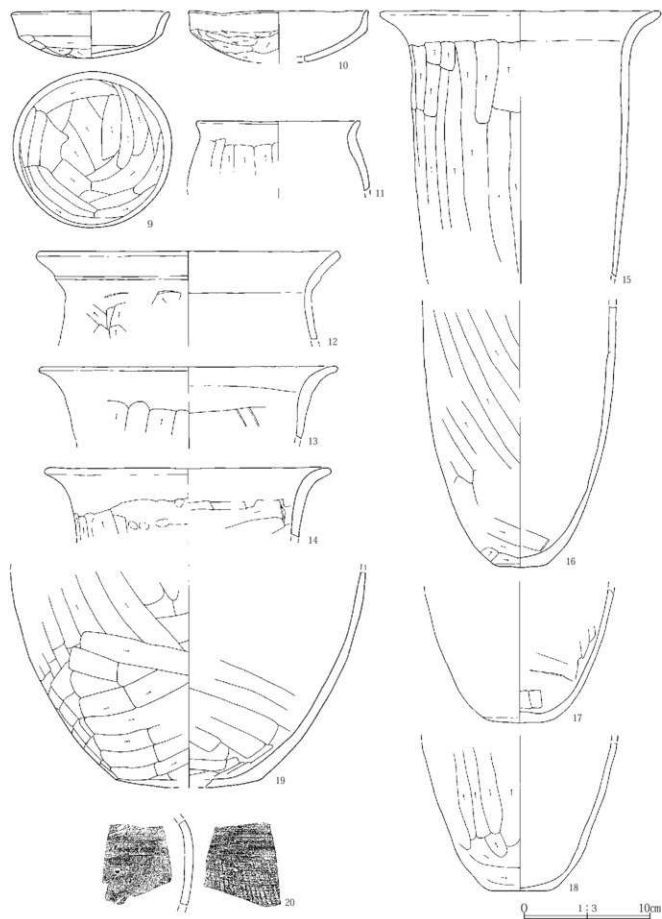


G-G'・H-H'

- 1 暗褐色土 X層上主体で、VII層土・焼土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 X層上土粒を少量、As-Cをわずかに含む。
- 3 暗褐色土 X層上との混土で、As-C・焼土粒をごくわずかに含む。
- 4 赤褐色焼土 焼土主体で、X層上土粒を含む。しまりがやや強い。
- 5 暗褐色土 X層上大ブロックを含む。焼土微・細粒をわずかに、As-C・炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 6 暗褐色土 X層上との混土で、焼土微粒・As-Cをごくわずかに含む。
- 7 暗褐色土 X層上との混土で、As-Cをごくわずかに含む。
- 8 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物・焼土粒は含まない。
- 9 にぶい黄褐色土 X層上微粒を含む。焼土微粒をごくわずかに含む。やや粘性がある。
- 10 黄褐色土 X層上主体で、暗褐色土小ブロックを塊状に、As-C・二ッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 11 暗褐色土 5層に類似するが、焼土微粒をごくわずかに含む。しまりがやや弱い。
- 12 にぶい黄褐色土 白色・黄色軽石微粒。焼土微・細粒をわずかに含む。
- 13 褐色土 焼土微粒をごくわずかに含む。軽石は含まない。
- 14 褐色土 12層に類似するが、軽石をごくわずかに含む。
- 15 赤褐色焼土 焼土粒とX層上の混土。
- 16 暗褐色土 X層上土・小ブロックを多量に、As-C・二ッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 17 暗褐色土 X層上主体で、As-C・二ッ岳系軽石、焼土微・細粒をわずかに含む。
- 18 褐色土 X層上主体で、As-Cをごくわずかに含む。

0 1:30 1m

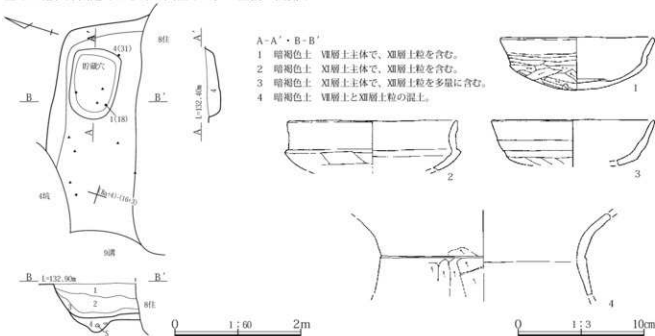
第290図 16号住居カマド



第291图 16号住居出土遺物(3)

17号住居(第292図 P.L.65・247)

位置: Ba・Bb-16グリッド 形状: 隅丸方形? 規模: (3.27)m×(1.40)m 残存深度: 0.54m 主軸方位: E-27°-N 埋没土: VII層土を主体として、VIII層土粒を含む。柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 貯蔵穴内から土師器坏(1)が、貯蔵穴際から土師器甕(4)が出土した他、床面近くから礫が出土した。重複: 西側は



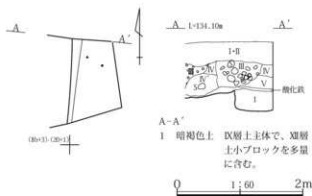
A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、XI層土粒を含む。
- 2 暗褐色土 XI層上主体で、XI層土粒を含む。
- 3 暗褐色土 XI層上主体で、XI層土粒を多量に含む。
- 4 暗褐色土 VII層上とXI層土粒の混土。

第292図 17号住居・出土遺物

19号住居(第293図 P.L.65)

位置: Bb-20グリッド 形状: 不明 規模: (0.85)m×1m 残存深度: 0.32m 主軸方位: 不明 埋没土: VII層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 礫と土器の小片が出土した。重複: 不明 所見: 調査区の際で壁の一部を検出したもので、全体像はまったく不明であるが、埋没土の状況から古代の遺構であることは確実と思われることからここで扱った。時期: 不明



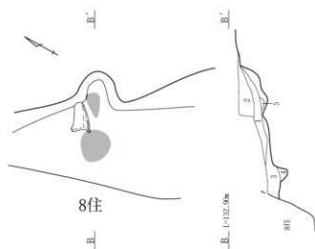
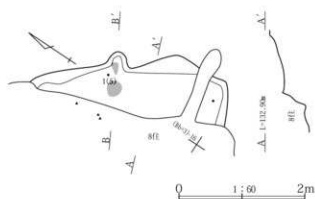
第293図 19号住居

20号住居(第294図 P.L.65・247)

位置: Bb-15・16グリッド 形状: 不明 規模: (0.81)m×(3.13)m 残存深度: 0.24m 主軸方位: E-35°-N 埋没土: VII層土主体の層。柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央に痕跡を検出した。東壁にわずかに掘り込まれた痕跡があるが、全体の形状は不明である。焼土が検出された位置が燃焼部であるとなると、カマド本体が屋内

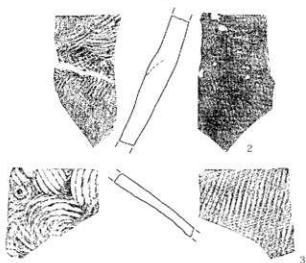
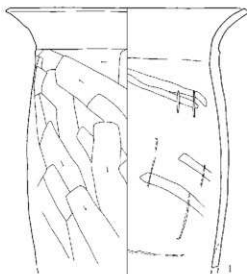
に張り出すタイプの可能性がある。遺物: カマドと見られる位置から土師器甕(1)が出土した。重複: 8号住居と西側で重複し、遺構の検出状況等から20号住居→8号住居と考えられる。所見: 8号住居との重複によって大半が失われている上に、カマドを含めて遺構の残存状況が極めて悪く、詳細を捉えることはできなかった。

時期: 7世紀後半



B-B'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、焼土粒・XII層土粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 VII層上主体で、焼土粒は含まない。
- 3 暗褐色土 IX層上主体で、XII層ブロックを少量、焼土粒をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 XII層上主体で、VII層土粒を少量含む。
- 5 赤褐色焼土 焼土ブロック主体。



第294図 20号住居・出土遺物

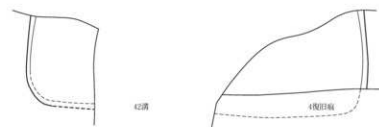
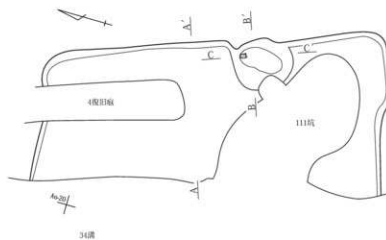
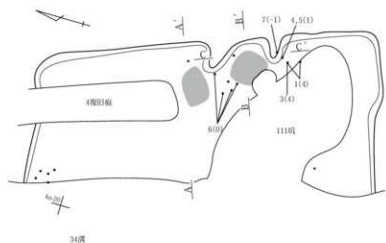
25号住居(第295～297図 P L.65・66・247)

位置：An・Ao-18～20グリッド 形状：隅丸方形 規模：(5.08)m×5.52m 残存深度：0.11m 主軸方位：E-23°-N 埋没土：VII層上主体の層。柱穴：未検出 カマド：東壁中央やや南寄りの位置に設置されていた。両袖が0.50mほど屋内に張り出した状態で残存しており、間の底面が焼土化していたことから、屋内に燃焼部を有するタイプと見られる。煙道は一段高い位置から掘り込んで屋外に長く延びていたものと思われるが、残存していなかったため不明であり、主軸方位についても計測できなかった。遺物：カマド周辺から土師器環(1・2)と土(4～7)が出土した。重複：中央部が1面の34・42号溝、111号土坑などに、西壁部は4号復旧痕によって削平されていた。所見：1面の遺構による攪乱が多

く、住居の四隅がかろうじて検出されたような状況である。検出面はXII層土相当の層であったが、全体に濁った色調を呈しており、遺構平面が捉えにくい部分があったために、南北の壁に食い違いができてしまった。貯蔵穴は111号土坑との重複部分にあった可能性が高いが、痕跡も確認できなかった。掘り方は不明である。時期：7世紀前半



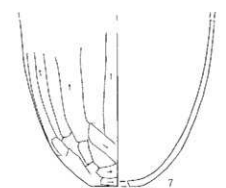
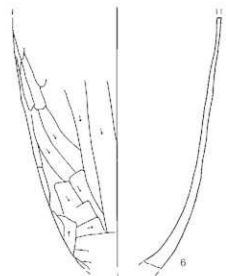
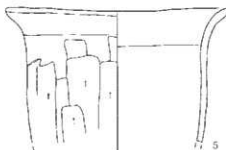
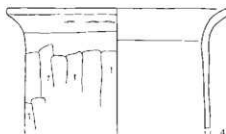
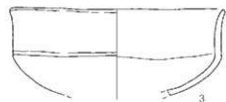
第295図 25号住居出土遺物(1)



A-A'

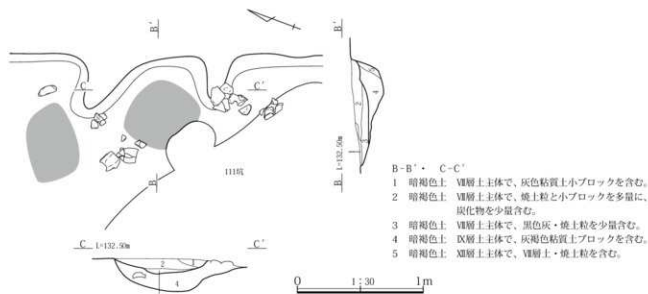
- 1 暗褐色土 VⅦ層土主体。
- 2 暗褐色土 VⅦ層土主体で、黒色灰・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 IX層土とⅧ層土の混土。

0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第296図 25号住居・出土遺物(2)

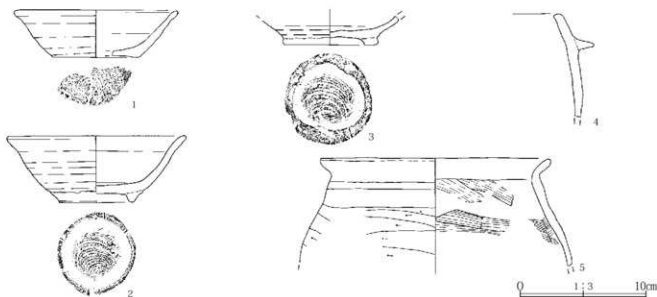


第297図 25号住居カマド

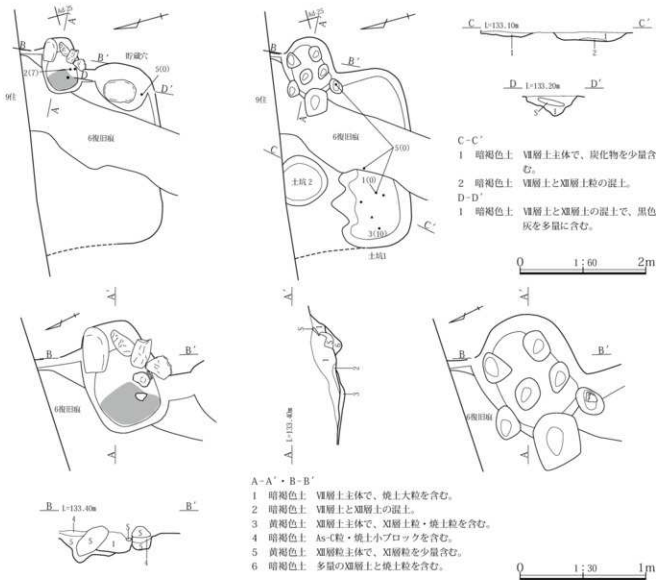
29号住居(第298・299図 P.L.66・247)

位置: Ac-24・25グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.87m×(2.06)m 残存深度: -1m 主軸方位: E-6°-S 埋没土: 不明 柱穴: 未検出 カマド: 東壁南寄りに検出した。燃焼部の焼土面が屋内に張り出した位置となっているが、これはカマド北側の東壁を掘り過ぎたことによるのであり、本来は、壁外に器設部を設けるタイプと考えられる。カマド奥壁の一部に礫が設置されていたが、掘り方の調査では礫を設置するためのピットが複数検出されている。また、燃焼部奥のやや北寄りの位置に検出したピットは、支脚を立てるためのピットと考えられる。 遺物: カマド内から須恵器壺(2)、貯蔵

穴から土師器甕(5)、土坑1から須恵器環(1)・埴(3)がそれぞれ出土した。 重複: 1面の6号復旧痕によって中央部が削平されている。 所見: 調査区の北西端で検出したもので、IX層中で確認をしたにもかかわらず、遺構の掘り込みが浅かったために、範囲を検出したに止まった。南東コーナー部には0.92×0.68m、深さ0.36mほどの楕円形を呈する貯蔵穴が検出されており、底面から0.20mほどの位置から扁平な大型礫が出土した。掘り方は、南西コーナー部に不整形の土坑1と中央部に円形を呈する土坑2を検出しただけであった。 時期: 10世紀前半



第298図 29号住居出土遺物



第299図 29号住居

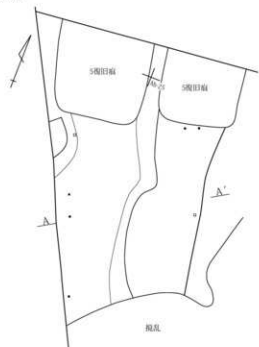
30号住居(第300図 P.L.66)

位置: Aa・Ab-24グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0.43m 主軸方位: 不明 埋没土: VII層土主体でXII層土をブロック状に含む層。柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 埋没土中から鉄滓が2点、および土器片がわずかに出土しただけで、掲載できるほどの遺物はなかった。重複: 1面の5号復旧痕などによって削平されている。所見: 復旧痕や溝などによって周囲が削平されているため、平面形などはまったくわからないが、2面相当の住居埋没土に類似する土層が面的に広がり、層中からわずかではあるが遺物の出土があったので、住居として扱った。時期: 不明

31号住居(第300図 P.L.66・247)

位置: Ad-19・20グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0m 主軸方位: 不明 埋没土: 不明 柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 遺物出土はあまり多くないが、カマド前面に当たる位置から須恵器(2)・土師器(3)が、北寄りの位置から須恵器(1)が出土した。特筆されるのは、西壁寄りと思われる床面から5の石製紡錘車が出土したことである。重複: 1面の8号復旧痕、39・40号土坑などによって周辺が削平されている。3面28号住居と東側で重複していたが、当住居の掘り込みが浅いために28号住居への攪乱は及んでいない。所見: 8号復旧痕がXII層中にまで及んでいるため、当住居は復旧痕間のわずかの範囲で床面を捉えたものである。時期: 9世紀前半

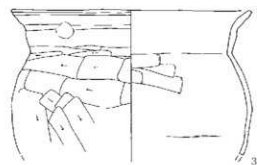
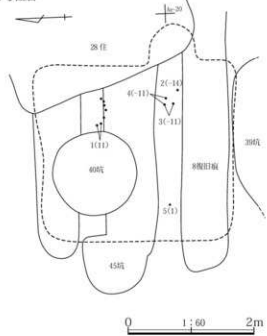
30号住居



A-A'

- 1 暗褐色土 IX層上主体で、As-Cを含む。
- 2 暗褐色土 IX層上主体で、As-CとXI層上ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 IX層上に類似。

31号住居



1~5 31号住居

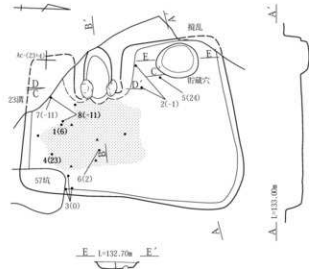
0 1:3 10cm

0 1:2 4cm

第300図 30・31号住居・出土遺物

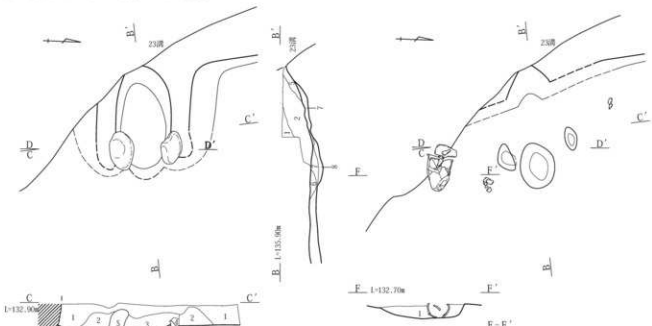
34号住居(第301・302図 P.L.66・67・247)

位置: Ab・Ac-23・24グリッド 形状: 隅丸台形 規模: 2.58m×3.46m 残存深度: 0.27m 主軸方位: W-5°-N 埋没土: VI層土主体の層。柱穴: 未検出 カマド: 西壁中央南寄りに検出した西向きに構築されたカマドで、主軸方位はW-5°-Sである。燃烧部が屋内に張り出して設けられるタイプと考えられ、袖は先端に磔を内傾して立てて構築材としていた。煙道は確認面が下がったために検出できなかったが、屋外に長く伸びていた可能性が高い。遺物: カマド南側から長胴の甕(7)が横位の状態で潰れて出土した。また、カマド前面の硬化した床面に近い位置から土師器環(4・6)・甕(8)が、貯蔵穴際から土師器環(5)が出土した。重複: 西側を1面の23号溝によって削平され、東側で33号住居を壊している。所見: 34号住居は、台形で小規模な上に西向きのカマドとなっている特異な例である。貯蔵穴は北西コーナー部で、0.67×0.55m、深さ0.11mほどの楕円形を呈する。カマドの前面には狭い範囲ではあるが、硬化面が検出された。時期: 7世紀後半



E-E'
1 黄褐色土: XI層土主体で、VII層土粒を少量含む。

0 1:60 2m



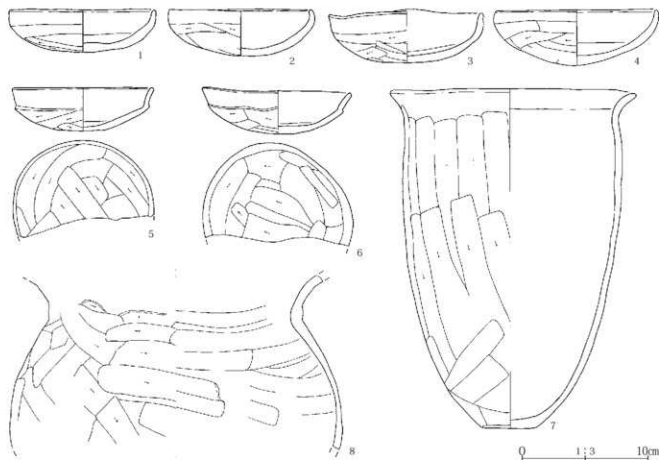
B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土: VII層土主体で、As-Cを多量に含む。
- 2 暗褐色土: VII層土とXI層土粒の混土。
- 3 暗褐色土: VII層土主体で、炭化物・焼土粒を含む。
- 4 黄褐色土: XI層土主体。
- 5 黄褐色土: VII層土とXI層土ブロックの混土で、焼土粒は含まない。
- 6 暗褐色土: VII層土主体で、黒色灰・焼土大粒を含み、粘性がある。
- 7 暗褐色土: VII層土主体で、焼土粒をわずかに含む。
- 8 暗褐色土: As-Cを少量、XI層土粒を多量に含む。

F-F'
1 暗褐色土: XI層土とXI層土の混土。

0 1:30 1m

第301図 34号住居

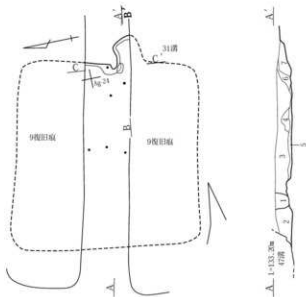


第302図 34号住居出土遺物

37号住居(第303・304図 P.L.67)

位置：Af・Ag-23・24グリッド 形状：不明 規模：不明
残存深度：0.23m 主軸方位：不明 埋没土：炭化物を含むⅦ層土主体の層。柱穴：未検出 カマド：東壁に検出したが、住居の南北規模が判明しないため、位

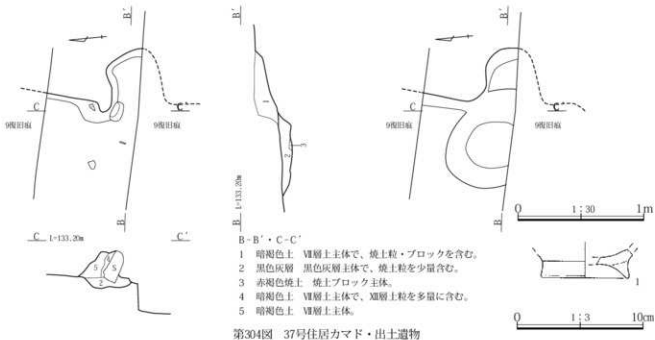
置関係は不明である。左袖部には構築材と考えられる礎が残っており、焼部が壁外に張り出したタイプのカマドである。南半分が攪乱されているため、主軸方位の計測はできなかった。遺物：床面付近から破片がわずかに出土した。重複：1面の9号復旧痕によって全体に削平されている。所見：復旧痕が東西方向に深くまで削平しているため、カマド北半およびその前面の床面が帯状に検出されるに止まった。したがって、平面形、規模など詳細はまったく不明である。時期：9世紀代



第303図 37号住居

A-A'

- 1 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅷ層土小ブロックをわずかに含み、粘性としまりが弱い。
- 2 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅷ層土粒・小ブロックを顕著に含み、粘性としまりが強い。
- 3 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、炭化物を少量含み、しまりが弱い。
- 4 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅷ層土粒、炭化物を多量に含み、3層よりやや粘性がある。
- 5 暗褐色土 Ⅶ層土とⅧ層土大粒・黒色灰・炭化物の混土。
- 6 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、焼土粒を多量に含み、粘性がやや強い。
- 7 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、焼土粒・ブロックを含む。

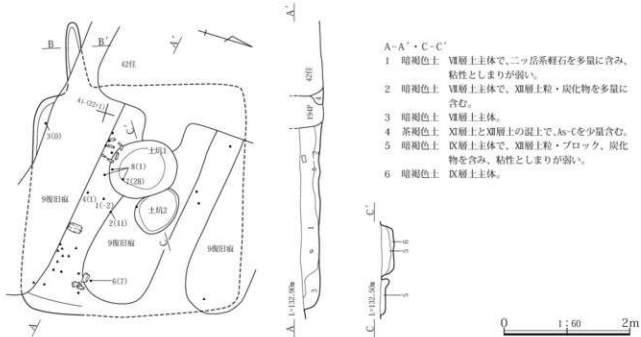


第304図 37号住居カマド・出土遺物

41号住居(第305・306図 P.L.67・248)

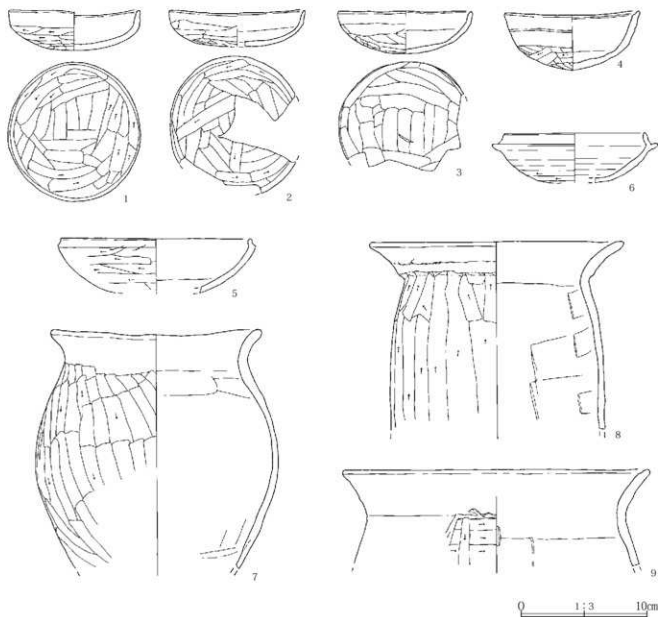
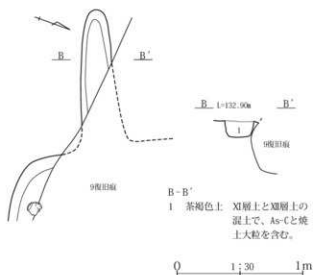
位置: Ah・Ai-21・22グリッド 形状: 不明 規模: 不明 残存深度: 0.28m 主軸方位: 不明 埋没土: VII層土主体で、二ッ岳系軽石類似の軽石が目立つ。床面近くの埋没土中には炭化物の含有が多い。柱穴: 未検出 カマド: 西壁南寄りに偏った位置に構築され、煙道で計測した主軸方位は、W-22°-Sである。煙道が長く伸びていることから、燃焼部が屋内に張り出したタイプと考えられるが、屋内部分は擾乱されているため判断とし

ない。遺物: 残存した床面中央から土師器環(1・2・4)、土坑1の上部から裏(7・8)、南西コーナー部から土師器環(3)が出土した他、南東コーナー部近くから須恵器蓋形の環身(6)が出土した。また、南東コーナー近くからは、床面からやや浮いた位置から棒状の自然礫が8点ほどまとまって出土した。重複: 北西部で42号住と重複し、復旧痕による擾乱のため直接に新旧関係を検証できなかったが、41号住居→42号住居と考えられる。所見: 住居の大半が9号復旧痕によって削平されている



第305図 41号住居

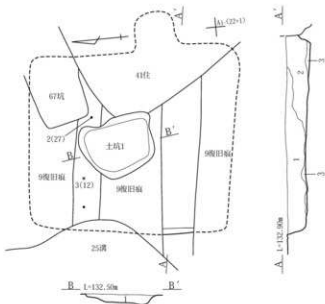
ため、床面・壁ともに帯状にしか残存していなかった。平面形は不明としたが、隅丸方形となる可能性が高く、カマドは南西コーナー寄りに位置していたものと思われる。西向きのカマドの事例は、当遺跡においてもいくつか検出されているが、総じて41号住居と近い時期に限られている。床面近くで検出された炭化材や埋没土下層の炭化物含有量の多いことは、41号住居が焼失している可能性を示唆するものである。床面精査の時点で、住居中央に1.10×0.89m、深さ0.19mと0.78×0.59m、深さ0.07mの2基の楕円形土坑(土坑1・土坑2)を検出したが、床下土坑と位置づけた。 時期：7世紀後半



第306図 41号住居カマド・出土遺物

42号住居(第307図 P.L.67・248)

位置: Ah・A1-22グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0.36m 主軸方位: 不明 埋没土: わずかに炭化物を含むⅦ層土主体の層。柱穴: 未検出 カマド: 東壁に構築されていたものと考えられるが未検出である。遺物: 帯状に残存した床面から須恵器埴(2)が出土した他、3の土鍋が出土したことが特筆される。重複: 東側で41号住居と重複していると思われるが、復旧痕などの攪乱によって直接に検証はできなかった。出



A-A'

- 1 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、燻層土粒・白色軽石を含み、粘性としまりが強い。
 2 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、炭化物をわずかに含み、粘性としまりが弱い。
 3 茶褐色土 Ⅶ層土と燻層土小ブロックの混土。

B-B'

- 1 黄灰色砂層 ややグライ化した砂層。暗褐色土粒を少量含む。

0 1:60 2m

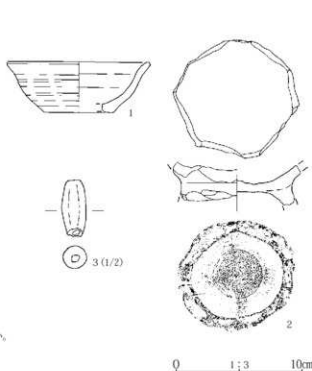
第307図 42号住居・出土遺物

46号住居(第308・309図 P.L.68・248)

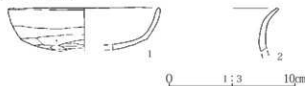
位置: A0-20・21グリッド 形状: 隅丸方形? 規模: (2.31)m×(3.61)m 残存深度: 0.09m 主軸方位: E-10°-N 埋没土: Ⅶ層土を主体とする層で、Ⅷ層土の大粒と炭化物の含有が顕著である。柱穴: 未検出 カマド: 東壁に設置されていたものと考えられるが、近世遺構などによる攪乱によって削平されたものと思われる。遺物: 小礫と土器片がわずかに床面付近に散在していた他、北寄りの床面で4カ所赤色顔料のようなものが出検された。重複: 1面の33・38号溝などによって北～東側が失われている。所見: 南壁と西壁の一部と床面が出検されただけで、カマド付近は削平を受けて

土遺物の比較から41号住居→42号住居と考えられる。

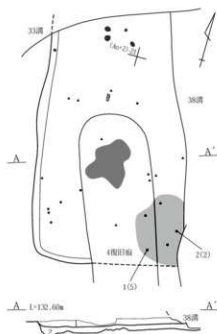
所見: 9号復旧痕による削平によって壁と床面の一部が帯状に検出されただけである。また、西側は25号溝による削平も受けているため、平面形も捉えることができなかった。床面精査の時点で中央部に1.16×0.91m、深さ0.15mの底部が灰色に変質した不整形土坑を1カ所(土坑1)検出したが、状況から42号住居に伴う土坑と判断した。時期: 10世紀後半



おり未検出である。床面はAs-Cを含むⅧ層土類似の土層で形成されており、硬化した面は確認されていない。床面の南寄りと北寄りの2カ所に焼土が確認され、中央西寄りの位置からは炭化物が面的に検出されたが、炭化材の出土はなかったので焼失したものは判断できなかった。掘り方は全体に10cmほど掘り下げられていた。時期: 8世紀代



第308図 46号住居出土遺物



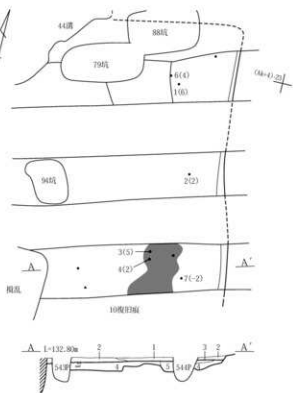
- A-A'
- 1 暗褐色土 VII層上主体で、Ⅷ層上大粒・炭化物を含み、硬くしまりが強い。
 - 2 暗褐色土 VII層上主体で、部分的に黒色灰・炭化物を含み、Ⅷ層上粒を少量含む。

第309図 46号住居

0 1:60 2m

48号住居(第310・311図 P.L.248)

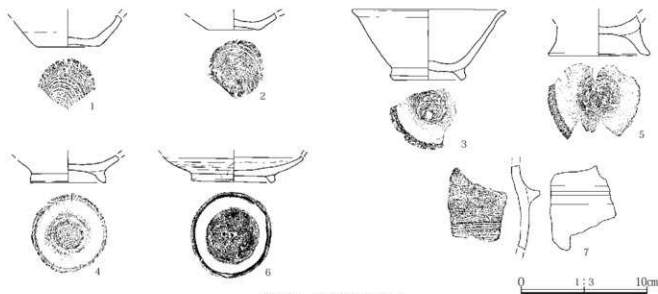
位置: Ak-22グリッド 形状: 南北方向に長軸を持つ長方形と考えられる。規模: 不明 残存深度: 0.07m 主軸方位: 不明 埋没土: 淡い色調のⅨ層土が主体で、炭化物を多量に含む。柱穴: 未検出 カマド: 未検出、東壁寄りの位置に炭化物が面的に広がって検出されたが、付近に焼土面は検出されなかった。遺物: 遺物は残存した床面に接して北寄りの位置で灰軸陶器碗(6)・須恵器環(1)、南寄りの炭化物が検出された位置で須恵器碗(3・4)・羽釜(7)などが出土した。重複: 北側で3面45号住居と重複しているものと考えられるが、全体に1面10号復旧痕や、土坑、溝によって攪乱されているため、新旧関係は確認することができなかった。所見: 復旧痕がⅧ層中にまで及んでいたため、床面のほとんどは削平されており、70cmほどの帯状にしか床面の検出ができなかった。掘り方は、床面よりも15cmほど下まで掘り下げられていた。床面の構築は、Ⅸ層土類似のものであり、住居を埋めていた土層との区別は炭化物の含有量が決め手となった。時期: 10世紀後半



- A-A'
- 1 暗褐色土 Ⅸ層土主体で、黒色灰・炭化物を多量に含む。
 - 2 暗褐色土 Ⅸ層土主体で、Ⅷ層上粒を少量含む。
 - 3 暗褐色土 Ⅸ層土とⅧ層上小ブロックの混土。
 - 4 暗褐色土 VII層上主体で、Ⅷ層上粒を多量に、炭化物粒をわずかに含む。
 - 5 黒褐色土 黒色灰とⅧ層上の混土で、炭化物をわずかに含む。

0 1:60 2m

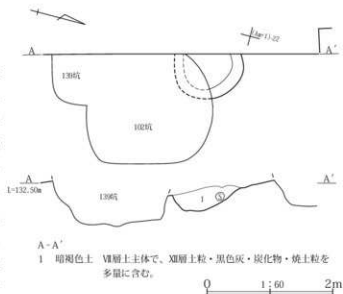
第310図 48号住居



第311図 48号住居出土遺物

50号住居(第312図 P.L.68)

位置:Am-21・22グリッド 形状:不明 規模:不明
 残存深度:0.18m 主軸方位:不明 埋没土:不明 柱
 穴:未検出 カマド:東壁と考えられる。遺物:なし
 重複:1面102・139号土坑と重複し、検出状況から50号
 住居→102・139号土坑と考えられる。所見:遺構確認
 段階で、I区の調査区西際に焼土粒と炭化物の集中する
 部分を検出し、これをカマド燃焼部から煙道部と判断し
 した。調査区際の土層断面で住居本体部分の情報が得られ
 るかと期待したが、土坑と復旧痕との重複によってほと
 んど残存していなかった。結果的に住居本体部分はI区
 とⅢ区を分ける市道下にあるため、調査することができ
 なかった。時期:不明



第312図 50号住居

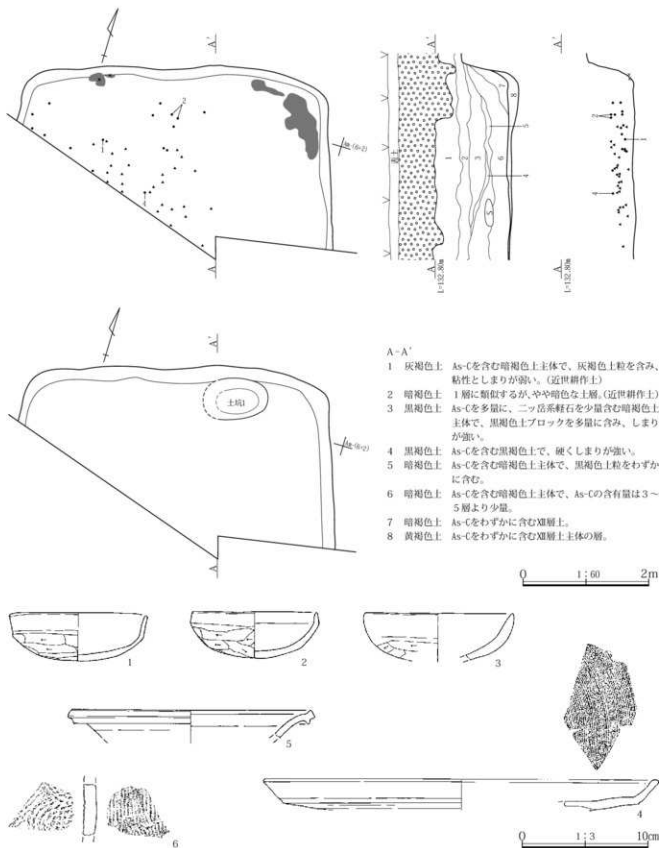
52号住居(第313図 P.L.68・248)

位置:AI・Am-6グリッド 形状:隅丸方形? 規模:4.93
 m×(3.08)m 残存深度:0.75m 主軸方位:E-18°-
 N 埋没土:上層はⅦ層土主体であるが、中層にⅨ層土
 類似の層があり、その一部は5cmほどの厚さで硬化して
 いた。下層はやや明るい色調を呈し、As-C含有量が中層
 と比較して少ない。柱穴:未検出 カマド:未検出
 遺物:礎を主体として間から土師器環(1・2)や須恵器
 盤(4)などが出土しているが、大半が埋没土中のⅨ層土
 類似の層中に集中したことから、52号住居築後に投棄さ
 れたものである可能性が高い。重複:調査部分につい
 てはなし。所見:西側をⅣ区、東側をⅥ区として2次

の調査を行った。上面に復旧痕が掘削されていたが、比
 較的浅い上に52号住居の掘り込みが深かったことから残
 存状態は良好であった。壁の残存も良好で断面で観察し
 た限り崩落の痕跡は認められない。床面は平坦で、As-C
 を含むⅨ層土類似土で構築されていた。北壁際および南
 東コーナー部際には炭化物が見られ、土層断面では炭化
 材も確認されていることから焼失した住居の可能性が高
 い。カマドは東壁に付設されたものと考えたが、調査区
 外であり検出することはできなかった。掘り方調査におい
 て、北壁の東寄り位置に楕円形の掘り込み(土坑1)
 を検出したが、浅く位置的にも貯蔵穴とは考えられず、
 貯蔵穴は南東コーナー部に掘削されていた可能性が高

い。埋没土中層に確認された硬化したIX層相当の層は、南から北に傾いた浅い窪み状の断面として捉えられており、道路遺構の断面に類似するものであるが、東西方向

に連続する硬化面は検出されていないので、道路遺構とは考えにくい。 時期：7世紀後半

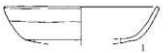


第313図 52号住居・出土遺物

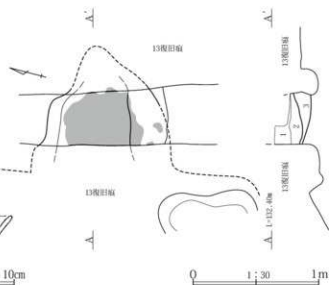
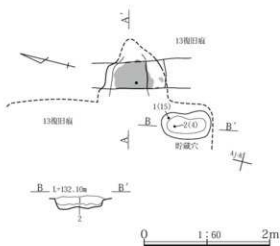
53号住居(第314図 P.L.68)

位置: AJ- 8グリッド 形状: 不明 規模: 不明 残存深度: - 主軸方位: 不明 埋没土: 不明 柱穴: 未検出 カマド: 東壁に付設されたものと考えられ、燃焼部だけを調査した。 遺物: 貯蔵穴から土師器環(1・2)が出土した他、カマド燃焼部から破片がわずかに出土した。 重複: 13号復旧痕によって削平されている。 所見: 検出したカマド部分を東端として西側に住居本体があったものと考えられるが、本体部分も含め13号復旧痕によって削平されている上に、西側は旧桃ノ木川の流れによって削られている。したがって調査できたのはカマド燃焼部の一部と、南東コーナー部に当たる位置に検出した貯蔵穴(0.80×0.44m、深さ0.18m、楕円形)だけである。 時期: 9世紀前半

- A-A'
- 1 灰褐色土 As-CとⅩ層土小ブロックをわずかに含む灰褐色土で粘性なし。
 - 2 赤色焼土 ニッ岳系小粒をわずかと暗褐色土粒を少量含む。
 - 3 黄褐色土 暗褐色土とⅩ層土の混上で、As-Cをわずかに含む。
- B-B'
- 1 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、Ⅹ層土小ブロックを含み、しまりが強い。
 - 2 黄褐色土 Ⅹ層土ブロックと暗褐色土ブロックの混上。



0 1:3 10cm

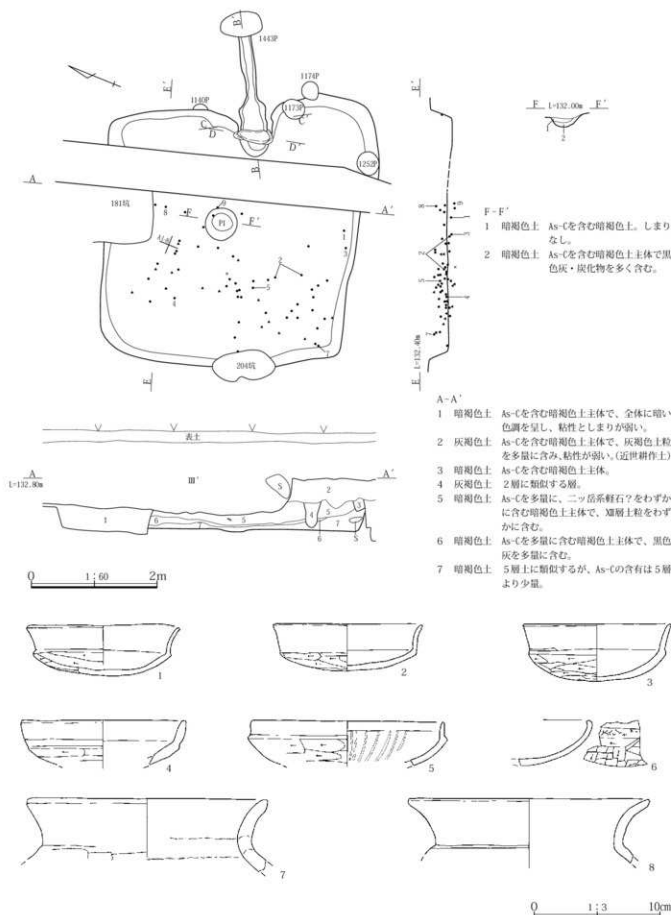


第314図 53号住居・出土遺物

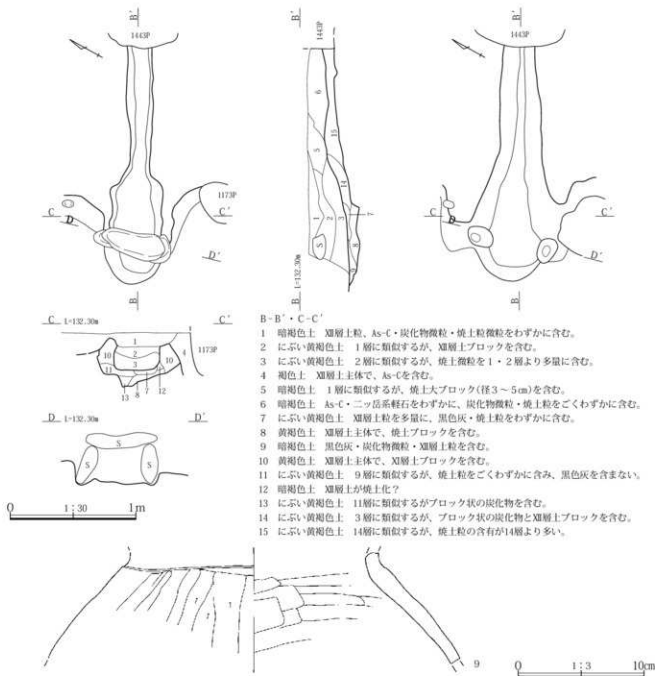
56号住居(第315・316図 P.L.69・248)

位置: Ak-AI- 7・8グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 4.02m×4.26m 残存深度: 0.50m 主軸方位: E-20°-N 埋没土: Ⅴ層土主体であるが、中層に2~15cmほどの厚さで黒色灰を多量に含む層が堆積していた。また、上層に比較して下層のAs-C含有量が少ない傾向がある。 柱穴: 未検出 カマド: 東壁のほぼ中央に位置している。主軸方位はE-27°-Nであり、住居の主軸とした方位よりやや北に振れている。カマド形態は、燃焼部が屋内に張り出し、煙道を屋外に長く伸ばすタイプである。両袖の先端には礫を立てて補強材とし、長さ57cmほどの扁平礫を天井石として使用していた。煙道は先端部がピットとの重複により確認できなかったが、最大で1.50mほどになる。 遺物: 小礫に混じって南壁際や中央付近から土師器環(1~3・5)、南西コーナー部から

土師器環(7)などが出土した。 重複: 北壁部に181号土坑と重複しており、土層の観察から56号住居→181号土坑という新旧関係である。 所見: 56号住居は調査区域に位置していたため、V区・VI区の2次調査で全体を明らかにしたが、V区に建設された橋台基礎のため、VI区調査ではV区の際まで調査することができず、間に未調査部分ができてしまった。壁の残存は良好で土層断面においても崩落の痕跡は見られなかった。床面は平坦に検出されたが、全体に柔らかく硬化面はまったく確認されなかった。貯蔵穴は確認できなかったが、平面確認ができないまま、南東コーナー部を全体に深く掘り下げたことから、本来この位置にあったものを調査時点で壊してしまった可能性がある。カマド付近からも遺物の出土は無く、時期を判断する材料が乏しい。 時期: 7世紀前半



第315図 56号住居・出土遺物(1)

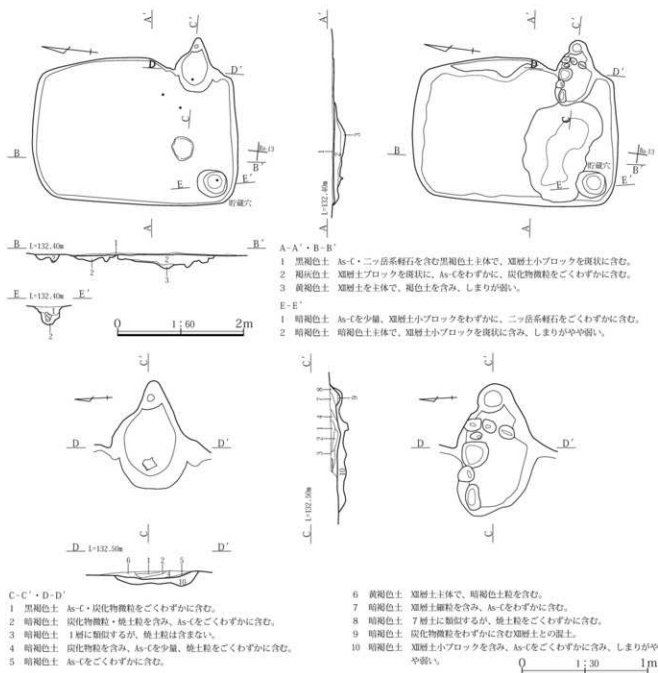


第316図 56号住居カマド・出土遺物(2)

59号住居(第317図 P.L.69)

位置:At・Ba-13グリッド 形状:隅丸長方形 規模:2.32m×3.27m 残存深度:0.03m 主軸方位:E-3°-N 埋没土:やや暗い色調のⅧ層土主体。柱穴:未検出 カマド:東壁南寄り、ほぼ南東コーナー部に接して検出した。主軸方位はE-5°-Nであり、煙出し部がわずかに突出するタイプである。遺構の残存状態が悪いため、袖の構造など明らかにすることができなかった。また、燃焼部の焼土の形成が弱く、カマド埋没土中にも焼土粒、炭化物がほとんど含有されていない。 遺物:

遺物出土は極めて少ないが、カマド正面の床面に扁平な礫が出土したことが特筆される。重複:なし 所見:Ⅷ層土上面での検出であったために残存が悪く、住居範囲がろうじて検出されたに止まった。床面はⅧ層土小ブロックを斑状に含む明るい色調のⅧ層土で形成されており、硬化面は確認できなかった。貯蔵穴は、南西コーナー部に検出した径0.47m、深さ0.28mの円形を呈する掘り込みと考えられ、埋没土中層から礫が出土した。掘り方は、カマド前面部分だけが不整円形の土坑状に掘り下げられていた。 時期:10世紀代

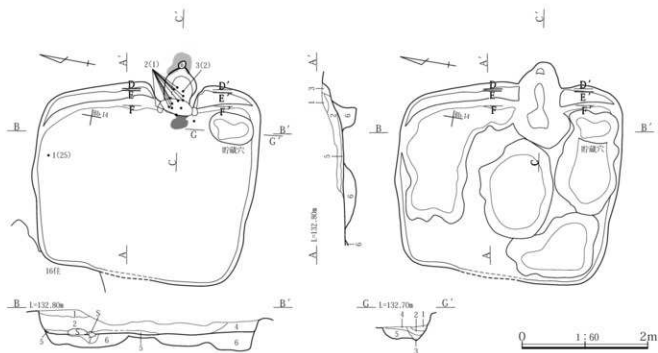


第317図 59号住居

60号住居(第318・319図 P.L.70・248)

位置: Ba・Bb-13・14グリッド 形状: 隅丸台形 規模: 3.19m×3.48m 残存深度: 0.38m 主軸方位: E-2°-S 埋没土: VII層土主体で燻層土ブロックを含有している。柱穴: 未検出 カマド: 東壁やや南寄りにE-3°-Sの主軸方位で設置されており、釣鐘状の燃焼部から煙出しがわずかに突出する平面形を呈している。両袖は壁との接点に礫を立てて補強材とし、長さ54cmほどの楕円形で扁平な礫を天井石としており、焚口部底面から天井までは17cmほどの間隔がある。燃焼部底面は一

面に焼土化しており、袖石側面も被熱のため変色していた。燃焼部には2・3の土師器裏が出土したが、3は正位であったが2は倒立しており、器設部に据えられた状態で検出されたものではない。煙道は周囲が焼土化していたことから明確に平面形を捉えることができた。遺物: カマドから土師器裏(2・3)が出土した以外には、西壁寄りの床面からやや浮いた状態で礫が出土した。重複: カマドから南東コーナー部で99号住居と重複するが、検出の状況から99号住居→60号住居と考えられる。所見: 遺構の確認はIX層土中から開始したが、平面形を

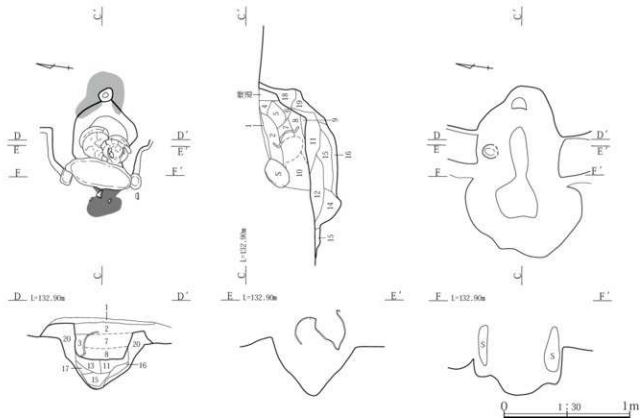


A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 埴層土細粒を含み、As-Cを斑状に、二ッ岳系軽石・炭化物微粒をこくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、埴層上大ブロックを含む。
- 3 にぶい黄褐色土 As-Cをわずかに含む埴層土との混土。
- 4 暗褐色土 埴層土細粒を含み、As-Cを斑状に、二ッ岳系軽石・炭化物・埴土微粒をわずかに含む。
- 5 褐色土 埴層土を含み、As-Cをわずかに含む。
- 6 黄褐色土 埴層土主体で、暗褐色土・As-Cをこくわずかに含む。
- 7 にぶい黄褐色土 埴層土を多量に、As-Cをわずかに含む。

G-G'

- 1 暗褐色土 As-C・炭化物微粒・埴土粒をわずかに含む、砂質で、しまりがやや弱い。
- 2 暗褐色土 1層上に類似するが、黒色灰を含む。
- 3 にぶい黄褐色土 軽石を含まず、炭化物微粒を含む埴層土との混土で、しまりがやや弱い。
- 4 褐色土 As-C・二ッ岳系軽石・炭化物・埴土微粒をこくわずかに含む埴層土との混土。
- 5 にぶい黄褐色土 埴層上ブロックを含み、As-C・二ッ岳系軽石・炭化物微粒をこくわずかに含む砂質土。



第318図 60号住居

捉えにくかったために、最終的にはⅩⅢ層土近くまで下げて行った。東側は近世において道路となっていた場所で、復旧痕が掘削されなかったために比較的残存状態が良かった。東壁に15~25cmほどの幅で床面から17cmほどの高さの位置にテラス状の平坦部を検出した。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出された0.71×0.50m、深さ0.23

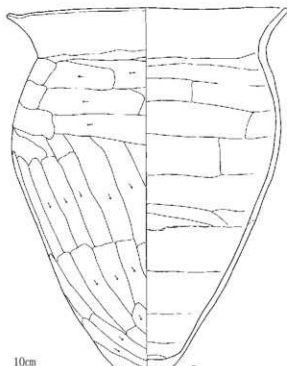
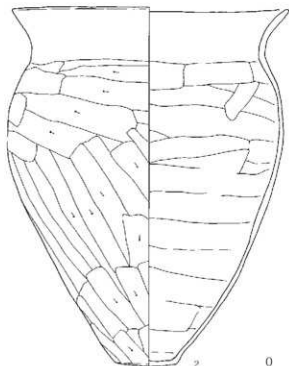
mの不整形円形を呈する掘り込みと考えられる。床面は平坦な面として検出したが、硬化面は確認できなかった。掘り方はほぼ全体に及んでおり、コーナー部と中央部の5カ所に不整形であるがやや深く掘られた部分がある。

時期：8世紀後半

C-C'・D-D'

- 1 にぶい黄褐色土 ⅩⅢ層土ブロックを全体に、As-C・ニッ岳系軽石、焼土微・細粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを少量、ニッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 3 にぶい黄褐色土 ⅩⅢ層土との混土で、As-C微粒をごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒・ⅩⅢ層土大ブロックを含み、As-Cをごくわずかに含む。
- 5 にぶい黄褐色土 炭化物・焼土細粒をわずかに、As-Cをごくわずかに含む。
- 6 暗褐色土 炭化物微粒・焼土細粒をわずかに、As-Cをごくわずかに含む。
- 7 暗褐色土 As-C微粒・ニッ岳系軽石微粒をごくわずかに含む、炭化物・焼土粒は含まない。
- 8 暗褐色土 As-C微粒・ニッ岳系軽石微粒・焼土微粒をごくわずかに含む。
- 9 暗褐色土 焼土微粒をごくわずかに含む、中央部に黒色灰をブロック状に含む、軽石は含まない。
- 10 暗褐色土 7層土に類似する。

- 11 暗褐色土 ⅩⅢ層土を少量、炭化物微粒、焼土微・細粒をわずかに含む。
- 12 暗褐色土 11層に類似するが、炭化物・焼土粒の含有は11層より多量。
- 13 暗褐色土 焼土ブロックを多量に、炭化物粒・ⅩⅢ層土ブロックを少量含む。粒子がやや粗くしまりがやや弱い。
- 14 暗褐色土 黒褐色土にⅩⅢ層土をわずかに含む。粒子細かく、やや粘質。
- 15 暗褐色土 14層に類似するが、ⅩⅢ層土を14層より多量に、焼土粒を少量含む。
- 16 黄褐色土 ⅩⅢ層土を多量に含む。上面は暗褐色が強い。
- 17 にぶい黄褐色土 ⅩⅢ層土主体で、少量の暗褐色土粒と焼土細粒をわずかに含む。
- 18 暗褐色土 As-CとⅩⅢ層土粒を少量含む。全体に粒子が細かい。
- 19 暗褐色土 15層に類似するが、焼土の粒径が大きい。
- 20 褐色土 ⅩⅢ層土を多量に、As-Cをわずかに含む。



第319図 60号住居カマド土層注記・出土遺物

61号住居(第320・321図 P.L.70・248)

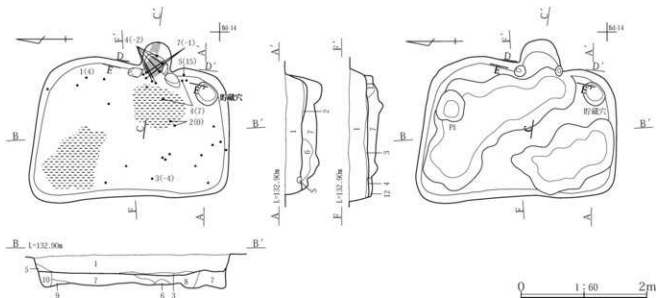
位置：Bc-13・14グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.14m×3.11m 残存深度：0.31m 主軸方位：E-7
 * - S 埋没土：Ⅶ層土主体で、ⅩⅢ層土小ブロックを含

む比較的均質な埋没土であり、床面近くの層中には炭化物微粒が含まれていた。柱穴：未検出 カマド：東壁中央のわずかに南寄りに位置している。袖は礫を立てており、わずかに屋内に張り出している。焚口部に礫が出

土しており、天井部に使用されていたものが落下したものと考えられる。平面形は、焼土が馬蹄形に検出されたので明瞭に捉えることができたが、煙出し部の突出は確認できなかった。焼焼部底面は焼土化が顕著であったが、上部の焼土化に反して奥壁側に焼土の形成は確認できなかった。主軸方位はE-12°-Sと、東壁から計測した住居主軸と比較してやや南に振れる傾向がある。遺物：カマド焼焼部から土師器裏(4・7)が出土した他、北東コーナー部近くから須恵器碗(1)、西壁際から黒色土器碗(3)が出土した。重複：11・95号住居と重複しているが、検出の状況から11号住居→95号住居→61号住居と考えられる。所見：遺跡内において、標高が高く安定し

た場所であったようで、住居の重複が激しい。重複については前述したとおりであるが、重複こそしていないが、西側から63号・62号・61号住居と同一線上を移動したかのような配置が見られる。床面は平坦に検出され、カマド前面に硬化面が確認された。貯蔵穴は、南東コーナーに検出した0.40×0.31m、深さ0.26mの楕円形を呈する掘り込みと判断した。掘り方は、全体に及んでおり、平均15cmほど掘り下げられ、北東・南西コーナー寄りの部分がわずかに深くなっていった。北壁東寄りに接する位置にP1(径0.43m、深さ0.38m、不整形円)を検出した他に、土坑、ピット状の掘り込みは検出されなかった。

時期：9世紀後半

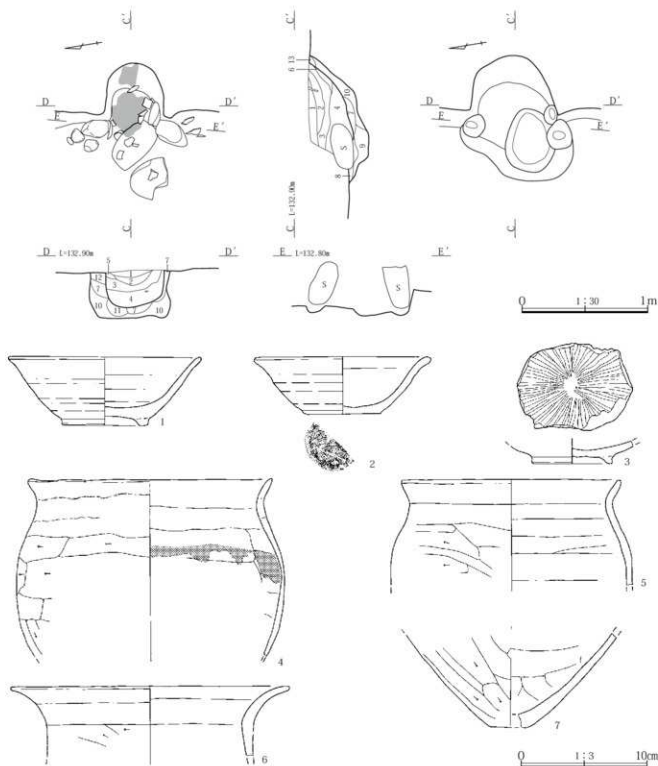


A-A'・B-B'・F-F'

- 1 暗褐色土 As-C、Ⅻ層上細粒・小ブロックを少量、ニッ岳系軽石をわずかに、黒色灰微粒をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 Ⅻ層上との混土で、しまりがやや弱い。
- 3 黒褐色土 As-C・Ⅻ層上細粒をわずかに、黒色灰微粒をごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 2層に類似するが、As-Cをごくわずかに含む。
- 5 暗褐色土 暗褐色土主体で、Ⅻ層上細粒・小ブロックを斑状に含み、しまりがやや弱い。
- 6 黒褐色土 Ⅻ層上小ブロックを含み、As-Cをごくわずかに含む。
- 7 灰黄褐色土 Ⅻ層上を全体に、As-C・炭化物細粒をごくわずかに含む。
- 8 黒褐色土 7層上に類似するが、ニッ岳系軽石・炭化物細粒をごくわずかに含む。
- 9 にぶい黄褐色土 Ⅻ層上主体で、軽石などは含まれ、しまりがやや弱い。
- 10 暗褐色土 Ⅻ層上ブロックを斑状に、As-Cをごくわずかに含む。
- 11 黒褐色土 Ⅻ層上細粒を含み、As-Cをわずかに、炭化物細粒をごくわずかに含む。
- 12 黄褐色土 Ⅻ層上主体で、しまりがやや弱い。

C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量、ニッ岳系軽石をわずかに、炭化物・焼土微粒をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 Ⅻ層上細粒を含み、As-Cをごくわずかに含む。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、焼土微・細粒をわずかに、炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 炭化物細粒を下面に少量、As-C、焼土微・細粒をごくわずかに含む。
- 5 にぶい黄褐色土 Ⅻ層上との混土で、焼土微粒をごくわずかに含む。
- 6 暗褐色土 炭化物微粒・焼土細粒をごくわずかに含み、軽石は含まない。
- 7 橙土 Ⅻ層上が焼土化したもので、白色軽石・炭化物粒をわずかに含む。
- 8 黒褐色土 炭化物粒を多量に、焼土粒を少量、Ⅻ層上土粒をわずかに含み、全体に細粒でしまりが強い。
- 9 暗褐色土 Ⅻ層上と暗褐色土の混土で、炭化物を少量、焼土粒をわずかに含み、層状に堆積しておりしまりが強い。
- 10 黄褐色土 Ⅻ層上主体で、炭化物・暗褐色土をわずかに含む。
- 11 暗橙褐色土 暗褐色土主体で、焼土粒を多量に(7層より少量)、炭化物粒をわずかに含む。
- 12 暗褐色土 1層に類似するが、ニッ岳系軽石・炭化物をわずかに含み、1層より硬質で粒子が細かくしまりが強い。
- 13 暗赤褐色土 Ⅻ層上が焼土化。砂質で、しまりが強い。



第321図 61号住居カマド・出土遺物

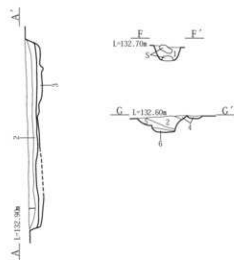
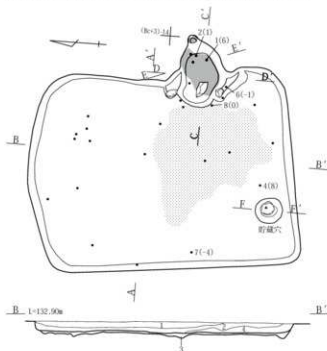
62号住居(第322・323図 P.L.71・248)

位置: Bb・Bc-13・14グリッド 形状: 隅丸長方形 規模:
 3.19m×4.21m 残存深度: 0.16m 主軸方位: E-6
 °-N 埋没土: VII層土主体であり、61号住居埋没土に
 類似している。柱穴: 未検出 カマド: 東壁南寄りに
 検出した。主軸方位は、E-10°-Nで住居主軸よりや

や北に振れている。平面形は煙出し部がわずかに突出す
 る凸字形である。両袖と考えられる位置から礎が出土し
 たが、両方とも据えられた状況にはないので構築材では
 ないであろう。しかし、燃焼部から出土した礫片は被熱
 痕跡があり、本来は礎を構築材としていた可能性が高い。
 燃焼部は全体に焼土化しており、カマド平面形も焼土の

範囲として明瞭に確認ができた。支脚は奥壁寄りに礎が2カ所、30cmほどの間隔を置いて立てられており、上端には1の須恵器碗が載せられていた。遺物：カマド支脚上端に須恵器碗(1)が載せられていたが、これはカマド構築材の一部と見られるものである。他に南壁寄りの位置から須恵器碗(4)、西壁際で須恵器裏の破片(7)が出土した。重複：11・63号住居と重複し、検出状況から11号住居→63号住居→62号住居と考えられる。所見：北壁西部および南壁は他遺構との重複がなく、比較的良好に検出することができたが、北東コーナー部は11号住居の埋没土内であったために明瞭には捉えることができ

なかった。床面は、カマド前面に検出した硬化面の延長として捉え、貯蔵穴は、南壁際西寄りの位置に検出した径0.40m、深さ0.22mの円形掘り込みと判断した。この掘り込みの上層と底面から扁平な礎が出土した。掘り方は、全体がわずかに掘り下げられており、中央部に検出した0.97×0.73m、深さ0.27mの楕円形の土坑2が最も明確なもので、他の掘り込み(土坑1・土坑3・土坑4)は形状もあまりはっきりとしないものである。この時点で掘り方底面はⅩ層土中に達していたために、重複している11号住居および63号住居の平面形が明瞭に把握することができた。時期：10世紀後半

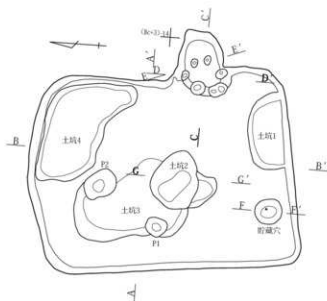


A-A'・B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量、ニッ岳系軽石・Ⅹ層土をわずかに、黒色灰をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 Ⅹ層土小ブロックを少量、As-Cをわずかに、ニッ岳系軽石・黒色灰をごくわずかに含む。
- 3 黒褐色土 Ⅹ層土大ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 Ⅹ層土小～大ブロックを現狀に、As-Cをわずかに含む。
- 5 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、黒褐色土粒を少量含む。
- 6 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、黒褐色土粒をわずかに含む。

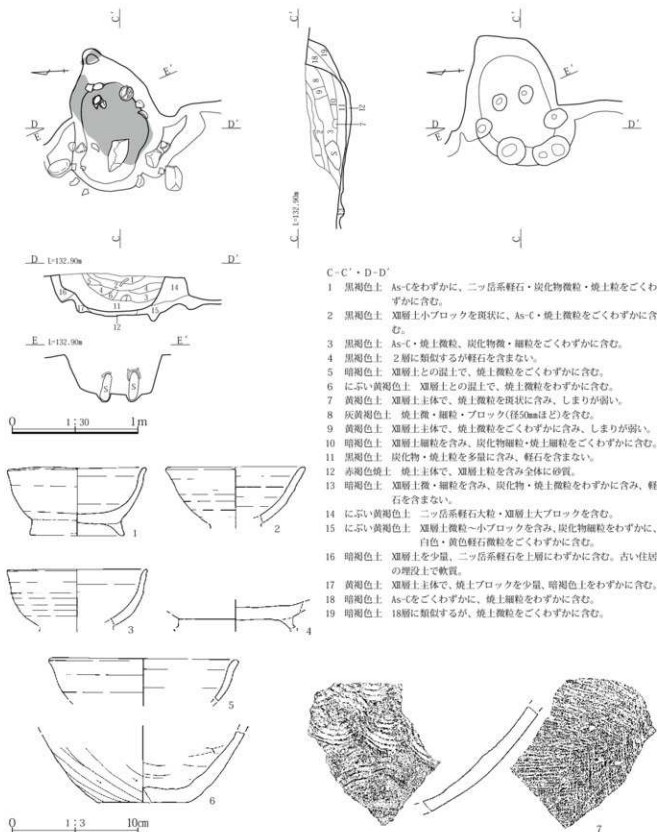
F-F'

- 1 暗黄褐色土 Ⅹ層土主体で、暗褐色土粒、炭化物をわずかに含み、Ⅹ層土より硬質でしまりが強い。



第322図 62号住居

0 1:60 2m



第323図 62号住居カマド・出土遺物

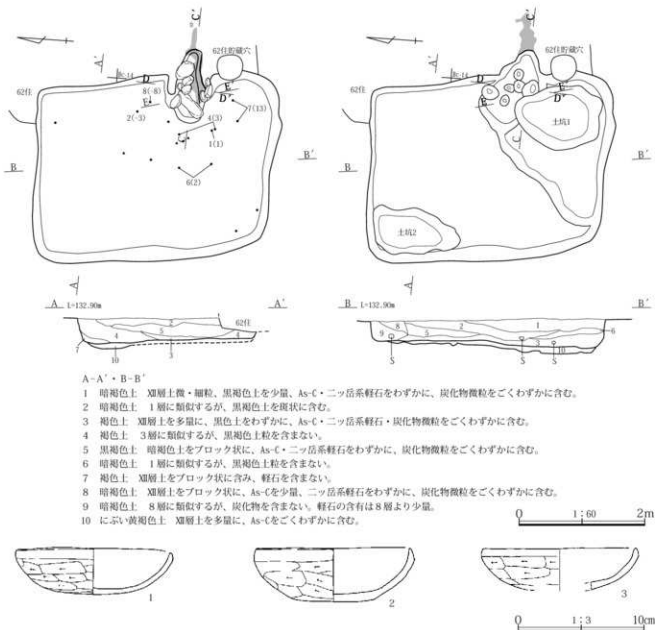
63号住居(第324・325図 P.L.71・72・248・249)

位置: Bb・Bc-13・14グリッド 形状: 隅丸長方形 規模:
2.95m×3.72m 残存深度: 0.39m 主軸方位: E-6

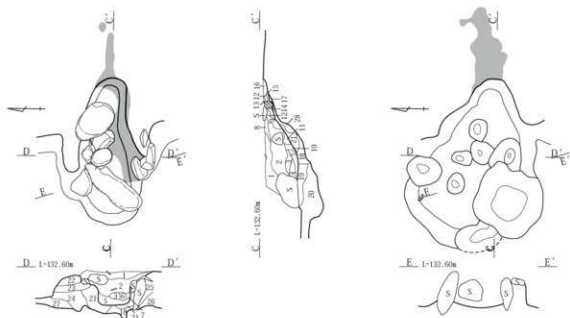
*-N 埋没土: VII層土を主体としており、中層に黒褐色を呈するブロックが目立っている。柱穴: 未検出
カマド: 東壁南寄りに検出した。主軸方位は E-0*-

Nであり、北壁で計測した主軸方位よりも南に振れている。カマド本体が屋内に張り出し、煙道が屋外に長く延びるタイプと考えられる。両袖先端には檜間の礎を構築材として35cmほどの間隔で立てており、この袖石に載っていたはずの長さ54cmほどの天井石は袖石間に落ちた状態で検出された。燃焼部からも礎が出土したが、底面から浮いた状態で出土しており、構築材の一部であるのか判断できなかった。唯一奥壁際の上から出土した扁平礎は、天井石であった可能性がある。側壁から奥壁は焼土化が顕著で、62号住居掘り方面には煙道痕跡の焼土が東に35cmほど延びていた。遺物：遺物出土はカマド周辺から土師器環(1・2・4)・須恵器横瓶(8)・須恵器

蓋(6)が、カマド南寄りの位置から土師器甕(7)が出土した。重複：62・75・97号住居と重複しており、遺構の検出状況から97号住居→75号住居→63号住居→62号住居と考えられる。所見：62号住居などと同様に、西から東に向かって直線的に重複している一群の住居の一端である。Ⅱ層下の礎層上面を床面としていたが、北西コーナー部とカマドから南東コーナー部に10cmほどの深さの掘りが見られた。南東コーナー部の掘り方調査時点で、1.35×1.04m、深さ0.18cmの卵形を呈する土坑1を検出したが、北側はカマド部分まで達していたことから貯蔵穴とは考えなかった。時期：8世紀前半



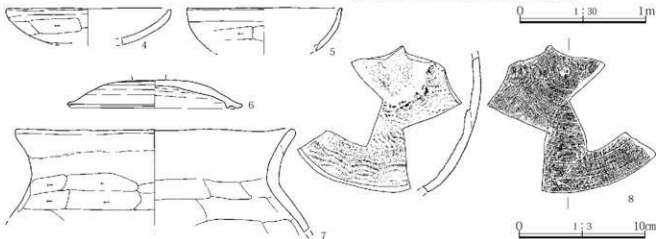
第324図 63号住居・出土遺物(1)



C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 ⅩI層土・二ッ岳系軽石・炭化物粒・焼土粒をわずかに含み、細粒でしまりが強い。
- 2 褐色土 酸化鉄に近い部分を含み、As-C・炭化物・焼土粒をわずかに含み、細粒でしまりがやや強い。
- 3 暗褐色土 炭化物粒をわずかに含み、焼土粒を含まず、粘性としまりが強い。
- 4 褐色土 焼土粒をわずかに含み、細粒で粘性としまりが強い。
- 5 暗褐色土 焼土ブロック(径20mmほど)を多量に含み、粗粒でしまりが強い。
- 6 黒褐色土 炭化物粒を右側を主体にして含み、粗粒でしまりがやや弱い。
- 7 暗褐色土 焼土ブロックを多量に、炭化物微粒をごくわずかに含む。粒子やや粗く、しまりがやや弱い。
- 8 黒褐色土 黒色土主体で、二ッ岳系軽石・As-C・炭化物微粒をわずかに含み、細粒でしまりがやや弱い。
- 9 褐色土 ⅩI層土・焼土粒を少量含み、やや橙色化傾向があり細粒でしまりが強い。
- 10 暗褐色土 ⅩI層土・炭化物・焼土細粒を少量含み、細粒でしまりが強い。
- 11 明褐色土 ⅩI層土主体で、焼土粒を多量に、炭化物粒をごくわずかに含み、細粒でしまりが強い。
- 12 暗褐色土 ⅩI層土を少量、焼土粒をわずかに含み、細粒でしまりが強い。
- 13 暗褐色土 ⅩI層土を少量含み、焼土粒などを含まず、細粒でしまりが強い。

- 14 暗褐色土 13層に類似するが、焼土粒をごくわずかに含む。
- 15 にぶい黄褐色土 ⅩI層土を多量に、焼土粒をわずかに含み、細粒でしまりが強い。
- 16 赤褐色焼土 焼土粒を全体に含み、細粒でしまりが強い。
- 17 黄褐色土 ⅩI層土を全体に含み、細粒でしまりが強い。
- 18 黄褐色土 ⅩI層土主体で、焼土粒をごくわずかに含み、細粒でしまりが強い。
- 19 にぶい黄褐色土 ⅩI層土を多量に、暗褐色土を少量、炭化物小ブロックをわずかに含み、粒子がやや細かくしまりがやや弱い。
- 20 褐色土 ⅩI層土と暗褐色土の混上で、軽石などを含まず、粒子がやや細かくしまりがやや強い。
- 21 にぶい黄褐色土 19層に類似するが、焼土小ブロックを含む。
- 22 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物・焼土粒を含まない。
- 23 褐色土 2層に類似するが、As-Cをごくわずかに含み、炭化物を含まない。
- 24 褐色土 ⅩI層土を全体に、As-C、焼土粒をわずかに含み、細粒でしまりがやや強い。
- 25 黄褐色土 ⅩI層土主体で、暗褐色土を少量、As-Cをごくわずかに含む。
- 26 暗褐色土 ⅩI層土微・細粒を斑状に、As-C、焼土粒をごくわずかに含む。
- 27 黄褐色土 25層に類似するが、軽石を含まない。
- 28 黄褐色土 ⅩI層土主体で、焼土粒をわずかに含む。

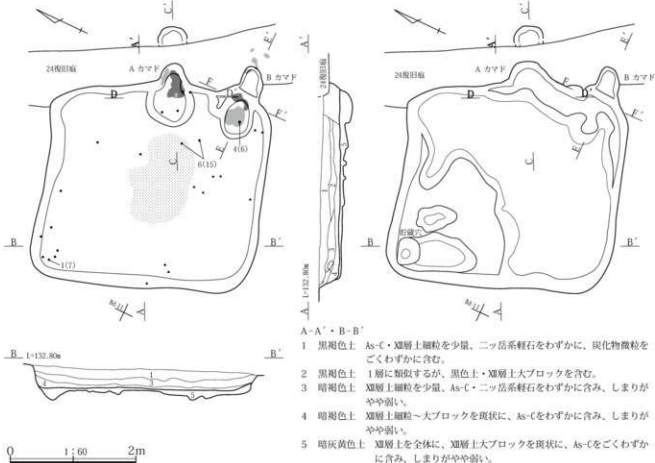


第325図 63号住居カマド・出土遺物(2)

64号住居(第326～328図 P.L.72・249)

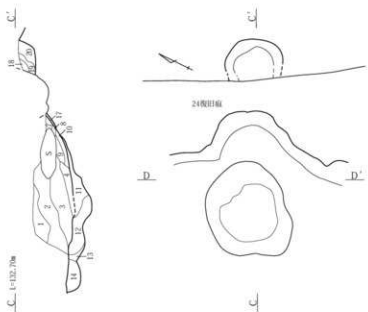
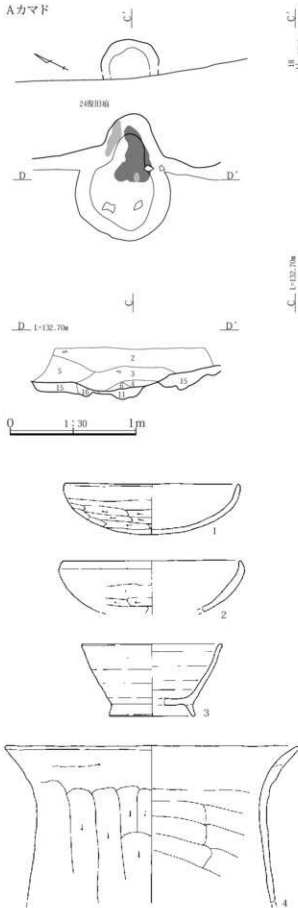
位置: Bd-10・11グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 3.22 m×3.53m 残存深度: 0.32m 主軸方位: E-21°-N 埋没土: VII層土主体で、中層に黒色土ブロック、下層にXI層土ブロック含有量が多く、全体にしまりが弱い。柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央と南東コーナー部にA・B新旧2時期のカマドを検出したが、残存状態から中央のAカマドが最終使用されたものと考えられる。Aカマドは、主軸方位がE-23°-Nであり、燃焼部は屋内側に検出されたが、袖構築材の痕跡もなく完全に壊された状況を呈していた。奥壁付近には焼土が形成されていたが、燃焼部底面には焼土が検出されなかった。煙道の先端は、0.50mほど東側の24号復旧痕の壁に検出されており、煙道はあまり長くないことが判明した。南東コーナー部のBカマドは、主軸方位がE-4°-Nであり、屋内側にはまったくカマド痕跡を残していない。コーナー壁部に焼土や炭化物が検出されたことからカマドとして認識したものであり、床面を若干掘り下げると燃焼部の焼土が現れた。このカマドについても煙道として残

存した部分よりも先に焼土が検出されていることから、煙道がさらに長く延びていた可能性がある。遺物: 遺物出土は極めて少なく、棒状の礫が壁際の床面付近から出土した他、南東コーナー部で土師器甕(4)、北西コーナー部で土師器杯(1)、中央部から須恵器甕の破片(6)が出土した。また、埋没土中からではあるが細片化した馬歯が5点出土したことが特筆される。重複: なし 所見: XI層土上面で検出したもので、東壁に沿って復旧痕が南北方向に掘削されていた他に、近い時期の遺構との重複は認められない。検出面が低かったことによる残存状態の悪さだけでなく、住居廃棄段階でカマドを含めて片付けを行ったらしく、ほとんど何も残されていない状況である。掘り方はほぼ全面が掘り下げられており、VII層土とXI層土ブロックの混土で床面を形成していた。Aカマドの前面にあたる住居中央部に狭い範囲ではあるが硬化面が検出された。貯蔵穴は、北西コーナー部に検出した0.45×0.35m、深さ0.20mの楕円形の掘り込みと判断した。貯蔵穴埋没土中からは、わずかではあるが土器片の出土があった。時期: 8世紀前半



第326図 64号住居

Aカマド

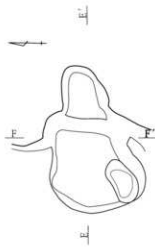
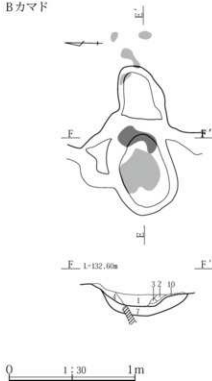


C-C'・D-D'

- 1 黒褐色土 As-Cを少量、炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 XI層上大ブロックを含み、As-Cをわずかに、焼土粒をごくわずかに含む。
- 3 にぶい黄褐色土 XI層上との混土で、As-Cをわずかに、炭化物細粒・焼土微粒をごくわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 4 にぶい黄褐色土 XI層上との混土で、炭化物細粒・焼土微粒をわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 5 暗褐色土 2層に類似するが、焼土粒を含まない。
- 6 にぶい黄褐色土 焼土粒を全体に、炭化物微粒をごくわずかに含む、全体に砂質でしまりが弱い。
- 7 暗褐色土 炭化物微粒・焼土細粒を含み、白色軽石をごくわずかに含む。
- 8 にぶい黄褐色土 炭化物・焼土微粒をごくわずかに含む。
- 9 暗褐色土 焼土粒を全体に、炭化物微粒をわずかに含む。
- 10 暗褐色土 炭化物微粒・焼土微・細粒をわずかに含む。下面に黒色灰を層状に含む。
- 11 暗褐色土 炭化物、XI層土微・細粒を含み、軽石は含まない。しまりが弱い。
- 12 にぶい黄褐色土 XI層土微・細粒を含み、As-Cをごくわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 13 黄褐色土 XI層上。
- 14 暗褐色土 As-C・二ツ房系軽石をわずかに、炭化物微粒をごくわずかに含む、XI層土微粒~小ブロックを含む。
- 15 にぶい黄褐色土 XI層土微・細粒を含み炭化物細粒・焼土微粒をごくわずかに含む、粘性がやや強い。
- 16 にぶい黄褐色土 XI層上との混土で、軽石は含まず、粘性がやや強い。
- 17 黄褐色土 XI層上土体で、As-C・焼土微粒をわずかに含む。
- 18 暗赤褐色土 焼土を多量に、As-Cをごくわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 19 暗褐色土 焼土を少量含む、軽石を含まず、砂質でしまりが弱い。
- 20 暗赤褐色土 焼土を多量に含む、軽石は含まず、砂質でしまりが弱い。

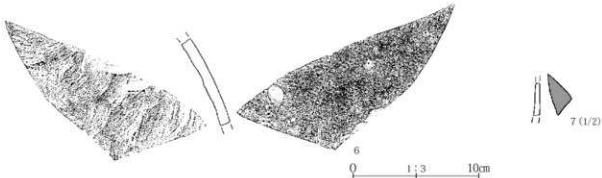
第327図 64号住居Aカマド・出土遺物(1)

Bカマド



E-E'・F-F'

- 1 暗褐色土 As-Cをごくわずかに、炭化物微粒・細粒、焼土微粒～小ブロックを含む。
- 2 褐色土 炭化物微粒をごくわずかに含み、全体に砂質でしまりが弱い。
- 3 褐色土 黒色灰・炭化物をブロック状に含み、砂質でしまりが強い。
- 4 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、As-C・炭化物微粒・褐色土をごくわずかに含む。
- 5 褐色土 Ⅹ層土を全体に、As-Cをごくわずかに含み、しまりが弱い。
- 6 暗褐色土 全体に砂質で、Ⅹ層土粒と焼土粒を全体に含み、As-Cをごくわずかに含む。
- 7 灰黄褐色土 上面に黒色灰・炭化物を含み、下面に炭化物を層状に含む。
- 8 黄褐色土 Ⅹ層土。
- 9 褐色土 Ⅹ層土を全体に、炭化物粒・焼土粒をごくわずかに含み、砂質でしまりが弱い。
- 10 褐色土 Ⅹ層土を全体に、As-Cをごくわずかに含み、砂質でしまりが強い。
- 11 暗褐色土 Ⅹ層土粒と焼土小ブロックを全体に含み、しまりが弱い。

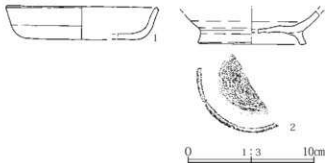


第328図 64号住居Bカマド・出土遺物(2)

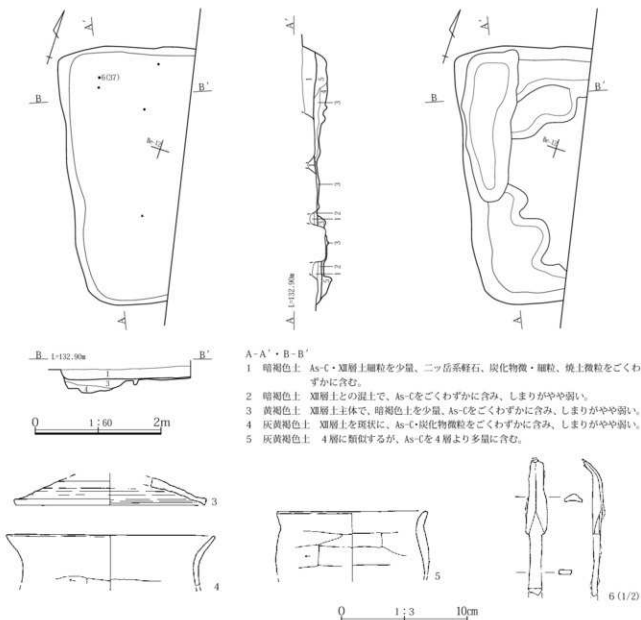
66号住居(第329・330図 P.L.72・73・249)

位置：Bd・Be-11・12グリッド 形状：隅丸方形？ 規模：(2.18)m×4.09m 残存深度：0.17m 主軸方位：E-26°-N 埋没土：Ⅶ層土主体で、埋没土最下層だけを検出したためか分層はできなかった。柱穴：未検出
カマド：東壁に付設されているものと考えられるが、道路下にあるため調査できなかった。遺物：床面付近からは礫が出土しただけで、埋没土中から土師器環(1)・須恵器碗(2)・蓋(3)などが出土した他、6の槍砲と見られる鉄製品が出土したことが特筆される。重複：北西コーナー部で68号住居と重複しており、検出状況から68号住居→66号住居と考えられる。所見：調査区の東

際で検出したもので、東半部分は道路下にあたるため調査ができなかった。Ⅹ層土をそのまま床面としていたが、壁際だけにわずかに掘り方が確認された。時期：8世紀後半



第329図 66号住居出土遺物(1)



A-A'・B-B'

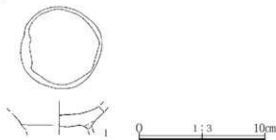
- 1 暗褐色土 As-C・Ⅷ層土細粒を少量、二ッ岳系軽石、炭化物微・細粒、焼土微粒をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 Ⅷ層土との混土で、As-Cをごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 3 黄褐色土 Ⅷ層土主体で、暗褐色土を少量、As-Cをごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 4 灰黄褐色土 Ⅷ層土を塊状に、As-C・炭化物微粒をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 5 灰黄褐色土 4層に類似するが、As-Cを4層より多量に含む。

第330図 66号住居・出土遺物(2)

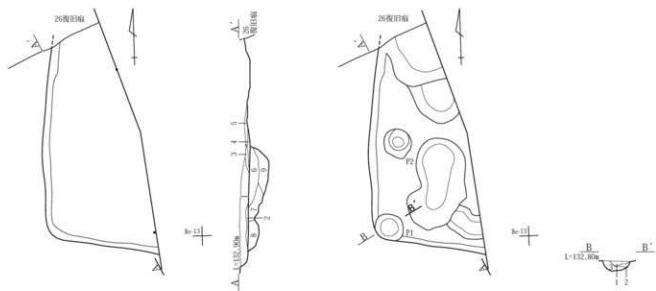
67号住居(第331・332図 P L.73)

位置: Bd-12・13グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: (1.91)m×(3.50)m 残存深度: 0.11m 主軸方位: E-5°-S 埋設土: Ⅷ層土主体で、中央部の中層に炭化物が集中していた。柱穴: 未検出 カマド: 東壁に付設されているものと考えられるが、南北道路下に当たるため調査ができなかった。遺物: 床面付近から土器片が2点出土した。重複: 近接する時期の遺構との重複はない。所見: 調査区の東縁で検出されたために、東側の2/3ほどは調査できなかった。Ⅷ層土上面で確認したために全体の残存は悪い。Ⅷ層土をそのまま床面としており、この時点でⅧ層土によって埋め戻された不整

楕円形の掘り方が数方検出された。また、南西コーナ一部でP 1(径0.40m、深さ0.23m、円形)を、西壁際中央部でP 2(径0.43m、深さ0.45m、円形)をそれぞれ検出したが、配置から柱穴とは判断しなかった。時期: 10世紀代



第331図 67号住居出土遺物



A-A'

- 1 暗褐色土 黒褐色土主体で、As-C・Ⅹ層土細粒を少量、二ッ岳系軽石をわずかに、炭化物・焼土微粒をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 Ⅹ層土との混上で、中央上面に炭化物を層状に含み、軽石などを含まずしまりやや弱い。
- 3 黒褐色土 Ⅹ層土微・細粒、炭化物小ブロックを含み、As-Cをごくわずかに含む。
- 4 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土との混上で、炭化物細粒をごくわずかに含む。
- 5 暗褐色土 Ⅹ層土細粒を現状に、As-C・二ッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 6 灰黄褐色土 Ⅹ層土微粒～小ブロックを少量、As-Cをわずかに、炭化物微粒をごくわずかに含み、しまりやや弱い。
- 7 灰黄褐色土 6層上に類似するが、As-Cをごくわずかに含み、二ッ岳系軽石は含まない。
- 8 灰黄褐色土 黒色灰小ブロックを含み、Ⅹ層土ブロックを現状に、As-Cをごくわずかに含む。
- 9 暗褐色土 Ⅹ層土細粒を現状に、As-C・炭化物微粒・灰白色粘土細粒～小ブロックをわずかに、焼土粒をごくわずかに含む。

B-B'

- 1 黒褐色土 As-Cと炭化物微粒をごくわずかに灰をブロック状に下部層に含む。Ⅹ層土ブロックをまだらに含み、しまりやや弱い。
- 2 黄褐色土 Ⅹ層土を主体とし暗褐色土ブロックを含みしまり弱い。
- 3 灰黄褐色土 As-Cをごくわずかに含み、Ⅹ層土を全体に含みしまり弱い。

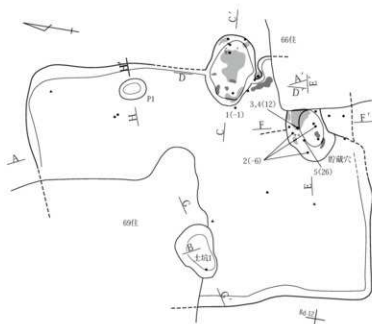
0 1:60 2m

第332図 67号住居

68号住居(第333～335図 P.L.73・249)

位置: Bd-11・12グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: (5.20)m×(3.30)m 残存深度: 0.17m 主軸方位: E-12°-N 埋没土: Ⅶ層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 東壁のやや南寄りに付設されており、Ⅹ層土中において遺構確認をしたために残存が悪く、燃焼部だけの調査となった。主軸はE-3°-Nであり、住居主軸よりやや南に振れている。カマド構造を正確に捉えることはできなかったが、時期から推して煙道が比較的長く屋外に延びるタイプである可能性が高い。袖が屋内に張り出していたものと考えられるが、構築材を据えるための掘り方は検出されなかった。燃焼部底面中央には焼土が形成されていた。遺物: カマド前面から土師器環(1)が口縁部を上にして出土した他、貯蔵穴とした浅い掘り込み内から土師器甕(2・5)が出土した。また、北東コーナー部に扁平な礫が置かれたような状況で出土した。

重複: 66・69号住居と重複しており、カマドの検出状況から68号住居→66・69号住居と考えられる。所見: 重複によって南東コーナー部および北西コーナー部が失われており、確認面がⅩ層土中であったこともあり、残存状態は悪い。床面は平坦に検出されたが硬化面はまったく確認されなかった。床面精査の時点で、南東コーナー部の屋内寄りに焼土と灰層を検出したために、重複を想定して70号住居として調査を進めたが、掘り方最下層に灰層が形成され、焼土は粒状となったものが埋没土中に入っていたものと見られることから、他住居のカマドとするよりは68号住居の貯蔵穴と見たほうが妥当と判断し、70号住居は削除した。カマドの正面西壁際で、0.83×0.60m、深さ0.32mの不整楕円形の土坑1を検出したが、検出位置から柱穴または貯蔵穴とは考えなかった。掘り方は、壁寄りの部分に検出され、Ⅶ層土とⅩ層土ブロックの混土が充填されていた。時期: 8世紀後半



- A-A'
- 1 黒褐色土 埴層上細粒・小ブロックを含み、As-Cを少量、二ッ岳系軽石をわずかに、炭化物微粒をごくわずかに含む。
 - 2 灰黄褐色土 埴層上小～大ブロックを頂状に、As-C・二ッ岳系軽石をわずかに含む。
 - 3 黄褐色土 埴層上主体で、As-Cを含む暗褐色土をブロック状に含む。

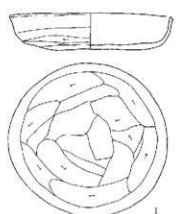
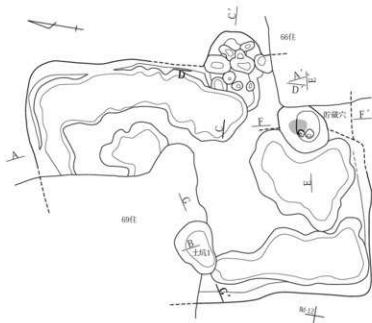


- B-B'
- 1 黒褐色土 埴層上微粒～小ブロックを含み、As-Cを少量、二ッ岳系軽石をわずかに、炭化物微粒・細粒をごくわずかに含む。
 - 2 黒褐色土 1層に類似するが、軽石の含有は1層より少量である。
 - 3 にふい黄褐色土 埴層上ブロックを頂状に、As-Cをわずかに含む。

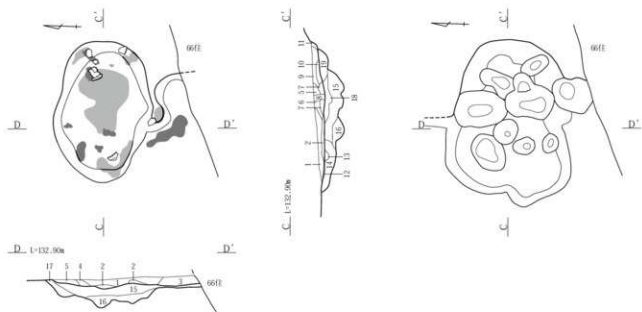
- H-H'
- 1 灰黄褐色土 埴層上ブロックを頂状に、炭化物微粒・細粒をわずかに、As-Cをごくわずかに含む。



- G-G'
- 1 黄褐色土 埴層上主体で、暗褐色土をブロック状に含む。
 - 2 黒褐色土 埴層上をブロック状に、As-Cをわずかに含み、軽石・焼土粒は含まない。
 - 3 暗褐色土 埴層上を少量、As-Cをごくわずかに含む。
 - 4 黒褐色土 埴層上小ブロックを少量、As-C・二ッ岳系軽石・炭化物微粒をごくわずかに含む。



第333図 68号住居・出土遺物(1)

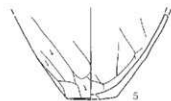
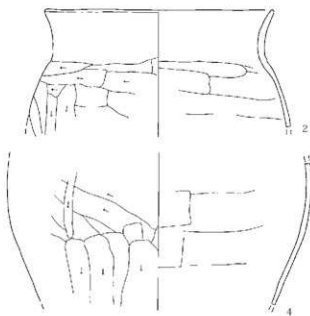


C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 白色・黄色軽石微粒を少量、炭化物微粒・焼土粒をわずかに含む。
- 2 黒褐色土 1層に類似するが、黒色灰を縞状に含む。
- 3 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物・焼土粒の含有は1層より少量である。
- 4 黒褐色土 2層に類似するが、焼土粒の含有はごくわずかである。
- 5 褐色土 Ⅹ層土を全体に、炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 6 暗褐色土 焼土微・細粒を少量、炭化物微粒をごくわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 7 赤褐色焼土 焼土上主体で、暗褐色土をわずかに含む、しまりがやや弱い。(擾乱?)
- 8 暗褐色土 焼土微粒をわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 9 暗赤褐色土 焼土粒を多量に、Ⅹ層土を少量、炭化物微粒をごくわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 10 暗褐色土 黒色灰をブロック状に、Ⅹ層土を少量、焼土微・細粒をわずかに含む。しまりが強い。

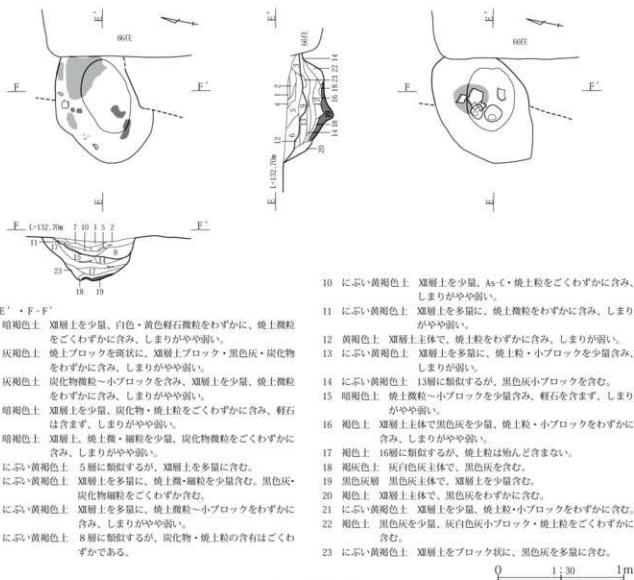
- 11 褐色土 Ⅹ層土を多量に含む、軽石などは含まず、しまりが強い。
- 12 暗褐色土 黒色灰、焼土粒・小ブロック、Ⅹ層土粒・小ブロックを含む。
- 13 暗褐色土 12層に類似するが、黒色灰・焼土粒の含有はごくわずかである。
- 14 褐色土 Ⅹ層土を全体に斑状に、As-C・ニッ岳系軽石をごくわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 15 暗褐色土 Ⅹ層土粒・小ブロックを少量、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに、炭化物微・細粒をごくわずかに含む。
- 16 黄褐色土 Ⅹ層土上主体で、暗褐色土をわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 17 暗褐色土 Ⅹ層土ブロックを少量含む、軽石・炭化物・焼土粒は含まず、しまりがやや弱い。
- 18 褐色土 焼土上主体で、炭化物を部分的にわずかに含む。
- 19 暗褐色土 Ⅹ層土粒・炭化物粒・焼土粒を多量に含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10m

第334図 66号住居カマド・出土遺物(2)



第335図 68号住居貯蔵穴

E-E'・F-F'

- 1 暗褐色土 Ⅹ層土を少量、白色・黄色軽石微粒をわずかに、焼土微粒をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 2 灰褐色土 焼土ブロックを斑状に、Ⅹ層土ブロック・黒色灰・炭化物をわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 3 灰褐色土 炭化物微粒~小ブロックを含み、Ⅹ層土を少量、焼土微粒をわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 4 暗褐色土 Ⅹ層土を少量、炭化物・焼土粒をごくわずかに含み、軽石を含まず、しまりがやや弱い。
- 5 暗褐色土 Ⅹ層土、焼土粒・細粒を少量、炭化物微粒をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 6 にぶい黄褐色土 5層に類似するが、Ⅹ層土を多量に含む。
- 7 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土を多量に、焼土粒・細粒を少量含む。黒色灰・炭化物細粒をごくわずかに含む。
- 8 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土を多量に、焼土微粒~小ブロックをわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 9 にぶい黄褐色土 8層に類似するが、炭化物・焼土粒の含有はごくわずかである。

- 10 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土を少量、As-C・焼土粒をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 11 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土を多量に、焼土微粒をわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 12 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、焼土粒をわずかに含み、しまりが弱い。
- 13 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土を多量に、焼土粒・小ブロックを少量含み、しまりが弱い。
- 14 にぶい黄褐色土 13層に類似するが、黒色灰小ブロックを含む。
- 15 暗褐色土 焼土微粒~小ブロックを少量含み、軽石を含まず、しまりがやや弱い。
- 16 褐色土 Ⅹ層土主体で黒色灰を少量、焼土粒・小ブロックをわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 17 褐色土 16層に類似するが、焼土粒は殆んど含まない。
- 18 褐色土 灰白色灰土主体で、黒色灰を含む。
- 19 黒色灰層 黒色灰主体で、Ⅹ層土を少量含む。
- 20 褐色土 Ⅹ層土主体で、黒色灰をわずかに含む。
- 21 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土を少量、焼土粒・小ブロックをわずかに含む。
- 22 褐色土 黒色灰を少量、灰白色灰小ブロック・焼土粒をごくわずかに含む。
- 23 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土をブロック状に、黒色灰を多量に含む。

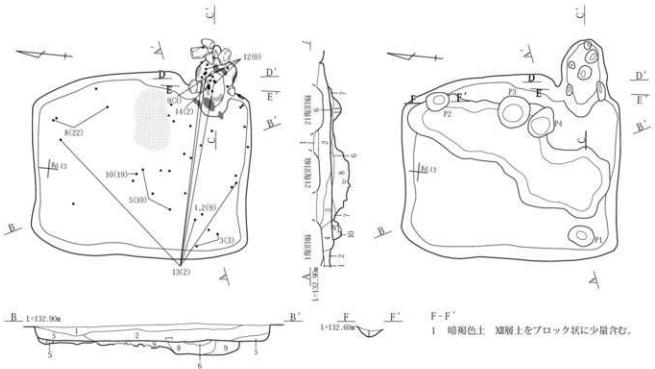
69号住居(第336~338図 P.L.73・74・249)

位置: Bc・Bd-12・13グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.97m×3.46m 残存深度: 0.25m 主軸方位: E-4°-N 埋没土: Ⅹ層土主体で、全体に暗色を呈する。柱穴: 未検出 カマド: 南東コーナーに接する位置に検出した。主軸方位はE-2°-Nで、住居主軸とほぼ一致している。燃焼部は壁側に掘り込んで構築され、煙道が短く張り出すタイプである。壁とカマドの接点に袖構築材として礫を左右に据えており、礫はどちらも上端が欠けているが、廃棄に伴って欠損した可能性が高い。構築材の礫は、燃焼部から煙道に移行する部分の両側にも据えられており、支脚には高さのあまりない礫を奥壁寄り位置に設置していた。燃焼部底面の焼土化は、両袖間が最も顕著であり、側壁は上半の焼土化が顕著で、

下半にはあまり形成されていなかった。遺物: カマドを含む南東側の遺物出土が多く、北西側にはほとんど出土していないが、これは復旧根による擾乱のためと考えられる。カマド内からは羽釜(12~14)と9の鉢が出土し、南西コーナー部近くからは須恵器環(1・2)が、P1内から足高台(3)が出土した。また、東壁際のやや北寄りの位置に土師器鉢が口を上にして埋められたような状態で出土したが、69号住居とは時期を異にする遺物であるため、本来は68号住居に帰属する遺物である可能性がある。重複: 68・71・76号住居と重複し、検出状況から68・71・76号住居~69号住居と考えられる。所見: 床面は礫層直上に形成されており、カマド正面北側の位置に、ごく狭い範囲ではあるが硬化面が検出された。北東コーナー部から対角線に細長い不整形に検出

された掘り方の調査で、南西コーナー部にP 1 (0.41×0.32m、深さ0.15m、楕円形)、北東コーナー部にP 2 (0.37×0.28m、深さ0.16m、楕円形)を検出したが、カマドとの位置関係からP 1を貯蔵穴と判断した。他にカマドの北西方向至近の位置にP 3(径0.50m、深さ0.31

m、円形)、P 4(径0.36m、深さ0.26、不整形円形)を検出したが、P 3に接して検出面よりも上位から69号住居に伴うとは考えられない土師器器が出土していることから、2カ所のピットは68号住居の掘り方である可能性がある。 時期：11世紀前半

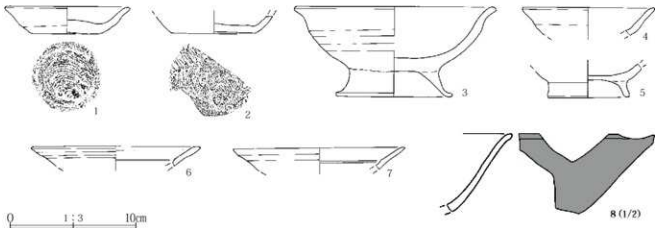


F-F' 1 暗褐色土 Ⅱ層土をブロック状に少量含む。

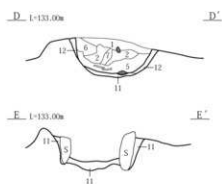
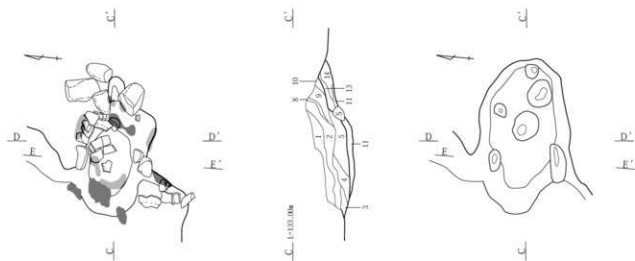
A-A'・B-B'

- 1 黒褐色土 Ⅱ層土細粒・酸化鉄をブロック状に、As-Cを少量、ニッ岳系軽石をわずかに、炭化物細・微粒をごくわずかに含む。
- 2 黒褐色土 1層に類似するが、酸化鉄を含まない。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、ニッ岳系軽石を含む。
- 4 暗褐色土 Ⅱ層土細粒を含み、As-C・ニッ岳系軽石・焼土微粒をごくわずかに含む。
- 5 黒褐色土 Ⅱ層土細粒～小ブロックを含み、As-Cをわずかに、ニッ岳系軽石・炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 6 黒褐色土 黒色灰を含み、As-Cをわずかに、焼土微粒をごくわずかに含む。
- 7 暗褐色土 Ⅱ層土を全体に斑状に、As-Cをごくわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 8 暗褐色土 Ⅱ層土微・細粒を含み、As-Cを少量、ニッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 9 暗褐色土 Ⅱ層土を全体に、部分的にⅡ層土ブロック(掘乱?)を含み、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 10 暗褐色土 Ⅱ層土を全体に、As-Cをごくわずかに含む、しまりがやや弱い。(P 1)
- 11 暗褐色土 Ⅱ層土を全体に斑状に、As-Cをごくわずかに含む。砂質で、しまりがやや弱い。(P 4)

0 1:60 2m

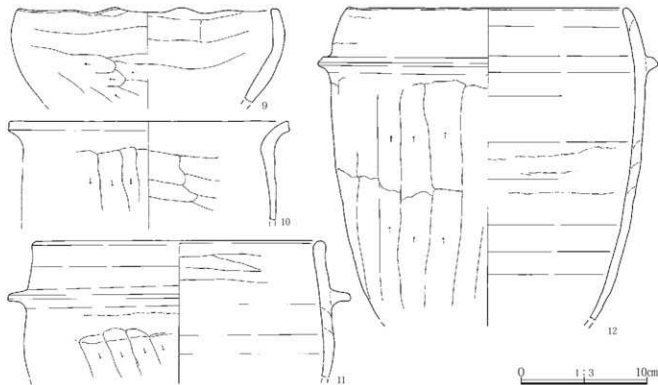


第336図 69号住居・出土遺物(1)

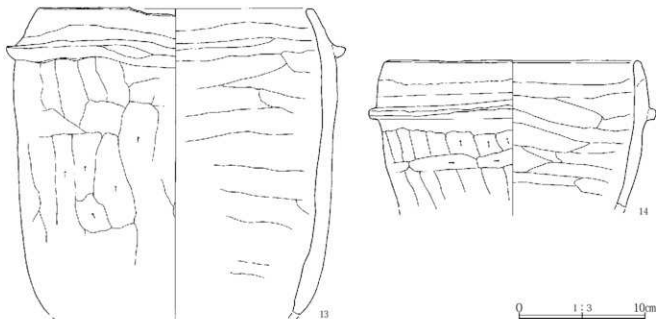


C-C' ~ E-E'

- 1 に深い黄褐色土 Ⅹ層土を含み、As-Cを少量、ニッ岳系軽石をわずかに、炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、焼土微粒をごくわずかに含む。
- 3 暗褐色土 黒色灰・焼土粒を含み、軽石は含まない。
- 4 に深い黄褐色土 Ⅹ層土を多量に、Ⅹ層土大ブロック・焼土微粒・左下面に黒色灰を含む。
- 5 に深い黄褐色土 下面に黒色灰を含み、焼土微・細粒をわずかに、As-C・ニッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 6 暗褐色土 2層に類似するが、焼土小ブロックを含む。
- 7 に深い暗褐色土 4層に類似するが、黒色灰は含まない。
- 8 橙褐色土 焼土主体で、混入物なく硬質。
- 9 暗褐色土 Ⅹ層土を全体に含み、に深い色調を呈する。
- 10 橙褐色土 焼土主体で、Ⅹ層土が焼土化したものと思われ、8層より粒子が粗い。
- 11 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、暗褐色土をわずかに含み、砂質でしめりが弱い。
- 12 に深い黄褐色土 Ⅹ層土主体で、暗褐色土を多量に、焼土ブロックを少量含む。
- 13 暗褐色土 Ⅹ層土を全体に、焼土細粒をごくわずかに含む。
- 14 暗褐色土 Ⅹ層土を全体に含み、ニッ岳系軽石を含む。



第337図 69住居カマド・出土遺物(2)

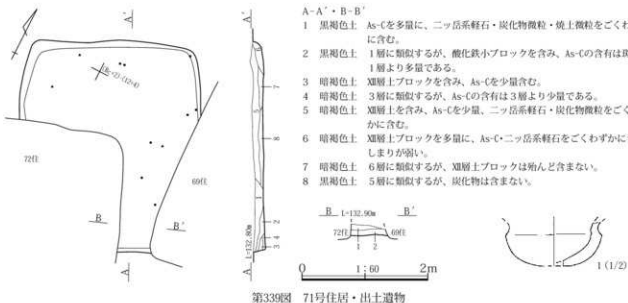


第338図 69号住居出土遺物(3)

71号住居(第339図 P.L.74)

位置: Bc-12グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.87 m×3.36m 残存深度: 0.19m 主軸方位: E-27°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 土器片と鏝がわずかに出土しただけで、住居の時期を特定できるような遺物出土はなかった。重複: 69・72・81号住居と重複し、検出状況から81号住居→71

号住居→69・72号住居と考えられる。所見: 69・72号住居との重複によってカマドを含む南側が失われているが、残存部分の壁は垂直に近く、床面は平坦で81号住居との重複部分を除いてはXII層土中に構築されていた。床面に斑に観察されたやや濁ったXII層土をさらに掘り下げてみたが、全体に細かな凹凸ができるだけで、明瞭な掘り方は確認できなかった。時期: 不明



第339図 71号住居・出土遺物

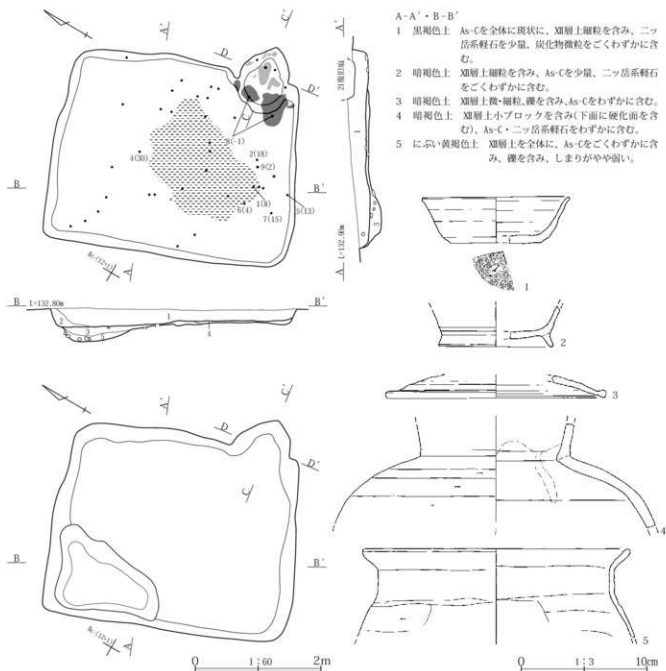
72号住居(第340・341図 P.L.74・249)

位置: Bc-11・12グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 3.12 m×3.92m 残存深度: 0.31m 主軸方位: E-22°-N 埋没土: やや暗色なVII層土主体で、しまりが弱い。

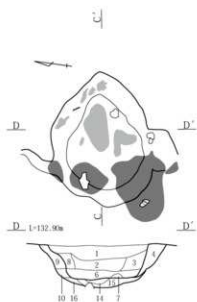
柱穴: 未検出 カマド: 東壁南端で南東コーナーに接する位置に検出した。主軸方位はE-13°-Nであり、西壁で計測した住居主軸方位よりやや南に振れている。確認はIX層土中で行ったが、焼土の形成によってカマド平

面を容易に捉えることができた。平面形は先端の尖った釣鐘状で袖部などに礎などの構築材はまったく検出されなかった。燃焼部はわずかに窪んだ状態で、奥側に特に焼土化し、焚口付近には灰面が広がっていた。壁は側壁と奥壁の上部の焼土化が顕著であった。燃焼部の掘り方調査においても支脚を据えた痕跡は検出されなかった。**遺物**：遺物は全体に散在しており、須恵器四耳壺(8)が、カマド焚口部から、須恵器環(1)、土師器甕(5・6)が南壁寄りの位置から出土した他、南寄りの硬化した床面近くから刀子(9)が1点出土したのが特筆される。重

複：71・73・76号住居と重複しているが、検出状況および残存状況から71・73・76号住居→72号住居と考えられる。**所見**：住居が集中している部分であるにもかかわらず、平面形が明確に捉えることができた。床面は礫層上面に達しており、北西コーナー部以外に掘り方は認められない。貯蔵穴は、掘り方調査においても検出されなかった。他の住居でも観察されているが、住居廃棄に際して土器などの廃棄行為をしていないことが特徴といえる。**時期**：9世紀後半

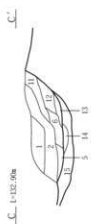


第340図 72号住居・出土遺物(1)

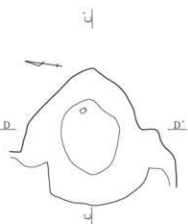


C-C'・D-D'

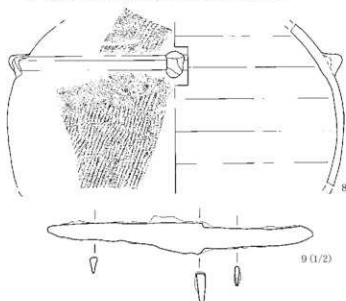
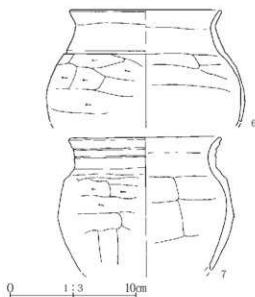
- 1 灰褐色土 ニッ岳系軽石を少量、炭化物・小礫をわずかに含み、焼土粒を含まず、細粒でしまりが強い。
- 2 暗褐色土 炭化物を少量、ニッ岳系軽石・焼土粒をわずかに含む。粒子やや細かく、砂質で、しまりあり。
- 3 暗褐色土 焼土粒(径5mmほど)を多量に含み、粒子がやや粗くしまりがやや強い。
- 4 暗褐色土 ニッ岳系軽石を少量、炭化物をごくわずかに含む。粒子細かく、しまりが強い。
- 5 暗褐色土 3層に類似するが、ニッ岳系軽石・炭化物微粒をわずかに含み、焼土粒はやや細かい。
- 6 暗褐色土 炭化物微粒を少量含む粒径の細かな砂質土で、しまりが強い。



C-C'・D-D'



- 7 暗褐色土 焼土粒主体。粒子細かく、軟質でしまりが弱い。
- 8 褐色土 焼土ブロックを多量に含み、ニッ岳系軽石を含む。粒子粗く、しまりがやや弱い。
- 9 暗褐色土 焼土粒を少量、炭化物粒をごくわずかに含み、粒子がやや粗く、10層より粘性としまりがやや強い。
- 10 明褐色土 灰層土主体で、炭化物をわずかに含む粒子の均一な土層で、しまりが強い。
- 11 暗褐色土 8層に類似するが、焼土ブロックを全体に散在状に含み、含有は8層より少量である。
- 12 暗褐色土 焼土塊・細粒を少量、炭化物微粒をわずかに、As-Cをごくわずかに含み、砂質でしまりが弱い。
- 13 暗褐色土 炭化物・焼土微粒をごくわずかに含み、軽石を含まず、砂質でしまりがやや弱い。
- 14 暗褐色土 焼土主体で、白色微粒・炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 15 明褐色土 灰層土主体で、暗褐色土を含み、炭化物粒をわずかに含み、くすんだ色調を呈する。
- 16 黄褐色土 灰層土主体で、As-C・炭化物粒をごくわずかに含む。

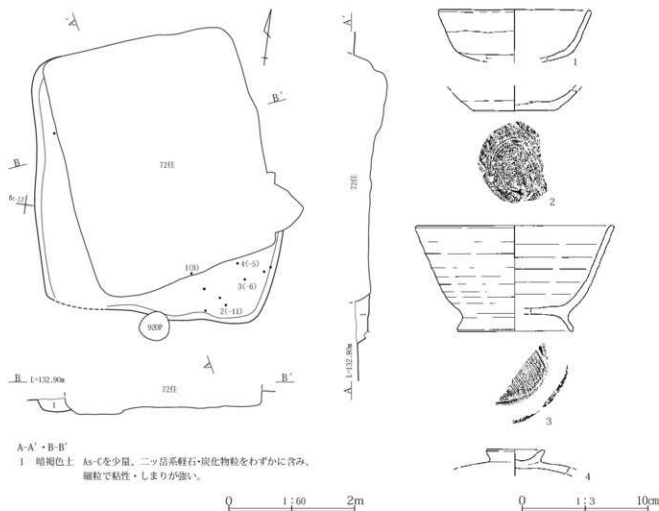


第341図 72号住居カマド・出土遺物(2)

73号住居(第342図 P.L.75・249)

位置: Bb・Bc-11・12グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 3.96m×(3.96)m 残存深度: 0.21m 主軸方位: E-2°-N
埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央に付設されたものと考えられるが、未検出。遺物: 南東コーナー付近の床面から、須臾器蓋(4)、環(2)、埴(3)および土師器環(1)が出土した。重複: 72・76・82号住居と重複し、

残存状況や検出状況から76号住居→73号住居→72・82号住居と考えられる。所見: 中央部分の大半とカマド部分は72号住居との重複によって失われており、西壁から南東コーナー部までの一部が残存した。床面は礫層直上であり、土器破片が散在した面として捉えた。残存した床面の精査では貯蔵穴と見られるような掘り込みを検出することはできなかった。時期: 8世紀後半

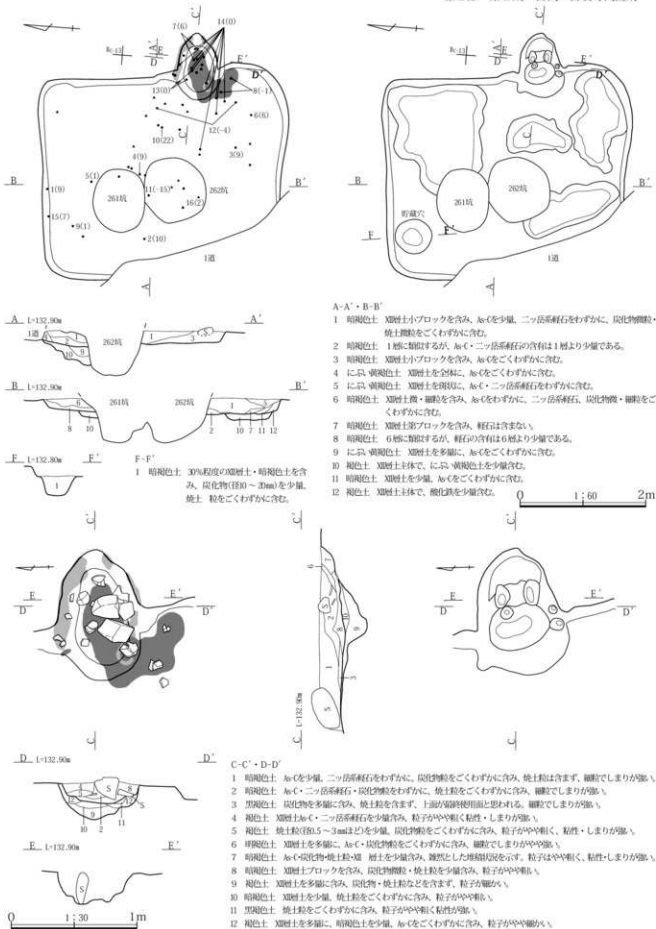


第342図 73号住居・出土遺物

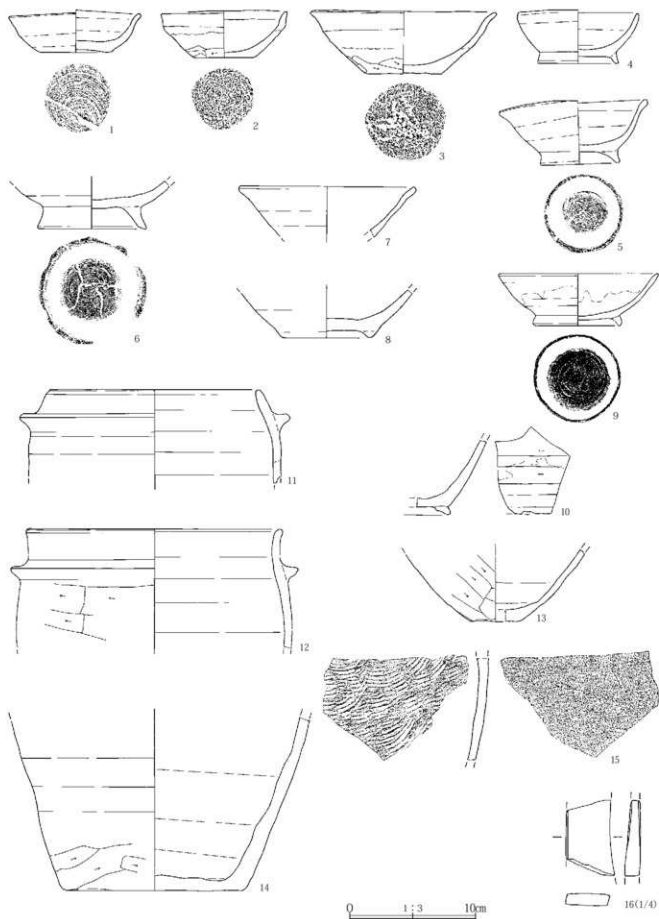
74号住居(第343・344図 P L.75・249)

位置: Bb・Bc-12・13グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 3.19m×3.85m 残存深度: 0.25m 主軸方位: E-8°-N 埋没土: VII層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに検出した。煙道部がわずかに突出する釣鐘状の平面形のタイプであり、主軸方位はE-6°-Nである。袖構築材は検出されていないが、燃焼部奥の左に偏った位置に支脚として礫が立てられており、また、燃焼部から出土した大形礫は被熱しており構築材である可能性があることから、袖部にも礫が構築材として使われていたものと思われる。燃焼部から右手方向に黒色灰層が広がっており、燃焼部底面の一部と壁部に焼土が形成されていた。掘り方調査において支脚奥に構築材の据え方と見られる1対のピットが検出された。遺物: カマド燃焼部から須恵器壺(7)と瓶(14)が出土した他、北西コーナー部の貯蔵穴の位置から灰釉陶器壺(9)と黒色土器壺、北壁際で須恵器環(1)、中央部から須恵器壺(4・

5)、土師器杯(2)、砥石(16)、南寄りの位置から土師器壺(3)などが出土した。埋没土中からは細片化した馬歯が2点出土した他、カマドの左手前面から扁平な大形礫が3点出土したが、床面から17cmほど浮いた位置からであり、住居の埋没過程で廃棄されたものと考えられる。重複: 南西コーナー付近を近世の道によって削平されている他、住居中央には261・262号土坑が掘削されている。所見: XII層土中で遺構確認をしたために壁の残存はわずかである。XII層土を直接床面としており、コーナー付近に浅い掘り方が検出され、わずかに濁ったXII層土が充填されていた。261・262号土坑は、遺構確認の段階では認識できず、土層断面観察において74号住居を掘り抜いていることが確認されたもので、74号住居に伴うものではない。貯蔵穴は、北西コーナー部に検出した径0.57m、深さ0.32mの円形を呈する掘り込みと考えられ、検出面よりわずかに浮いた位置から9の灰釉陶器壺が出土した。時期: 10世紀後半



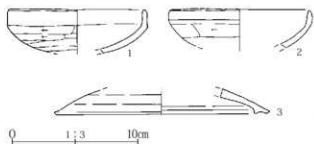
第343図 74号住居



第344図 74号住居出土遺物

75号住居(第345図 P.L.71・75・76)

位置: Bb・Bc-13・14グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: (1.96)m×(4.00)m 残存深度: 0.27m 主軸方位: E-17°-N 埋没土: VII層土主体で、XI層土小ブロックを含む。柱穴: 未検出 カマド: 東壁と考えられるが、重複のため未検出。遺物: 残存した南西コーナー部から礫と土器片が出土した。重複: 63・97号住居と重複し、検出状況から97号住居→75号住居→63号住居と考えられる。所見: 63号住居との重複によって大半が失われており、検出されたのは南壁から南西コーナー部と北西コーナー部だけである。床面精査時に床面の一部に濁ったXI層土類似の土が検出されていることから、掘り方があったものと考えられる。時期: 7世紀後半

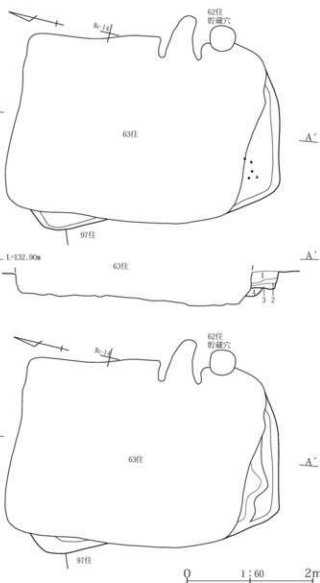


- A-A'
- 1 暗褐色土 XI層土微・細砂を含み、ニッ岳系軽石を少量、As-Cをわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 XI層土小ブロック・黒色灰・焼土ブロックを含み、As-C・ニッ岳系軽石をごくわずかに含む。
 - 3 暗褐色土 2層に類似するが、黒色灰・焼土粒を含まずおもしろみがやや弱い。
 - 4 褐色土 XI層土を全体に含み、おもしろみが弱い。

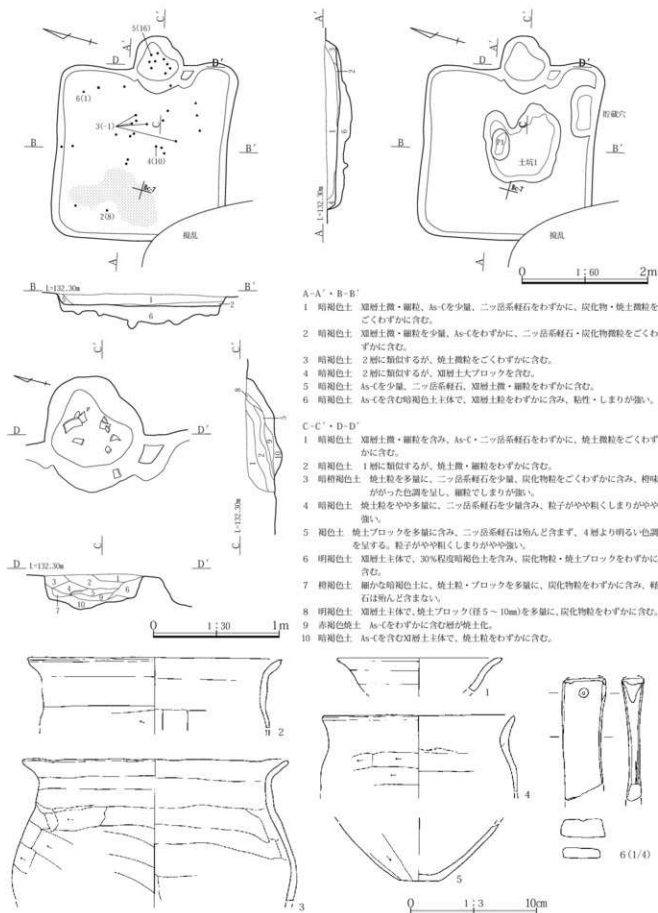
第345図 75号住居・出土遺物

76号住居(第346図 P.L.76・249)

位置: Bb・Bc-6・7グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 2.73m×2.77m 残存深度: 0.22m 主軸方位: E-14°-N 埋没土: VII層土主体で、焼土粒・炭化物粒を含む。柱穴: 未検出 カマド: 東壁ほぼ中央に検出した。XI層土を主体とする袖の痕跡が残っていることから、燃焼部の一部が屋内側に張り出したカマドで、主軸方位はE-13°-Nである。カマドの埋没土中には焼土大粒や炭化物が見られたが、奥壁寄りの一部を除いて燃焼部や側壁部に焼土化は認められず、灰層も検出されなかったため、使用面と掘り方の判別は困難であった。XI層土に塗するまで掘り下げたが、構築材の据え方などは検出されなかった。遺物: カマド燃焼部から土師器甕の底部(5)、住居中央部から土師器甕(3・4)が、北東コーナー部近



くから砥石(6)と鉄製品が2点出土したが、鉄製品については状態が悪いため掲載していない。重複: 77号住居と重複し、検出状況および残存状況から77号住居→76号住居と考えられる。所見: 床面は、VII層土主体の土で形成されており、XI層土ブロックが斑状に混入している。硬化面はカマド前部からは確認されず、北西コーナー部付近にだけ検出された。貯蔵穴は、床面精査では確認できなかったが、掘り方調査で南東コーナー部に0.83×0.35m、深さ0.22mの楕円形の掘り込みとして検出した。掘り方は全体に及んでおり、中央部だけが窪み状に深くなっていた(土坑1)。住居中央の遺物出土地点がほぼこの窪み状の掘り方と一致しており、窪み状の掘り方は、76号住居よりも新しい時期の土坑が重複していた可能性もある。時期: 9世紀後半



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 暗褐色土微・細粒, As-Cを少量, ニッ岳系軽石をわずかに, 炭化物・焼土微粒をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 暗褐色土微・細粒を少量, As-Cをわずかに, ニッ岳系軽石・炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが, 焼土微粒をごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 2層に類似するが, 暗褐色土大ブロックを含む。
- 5 暗褐色土 As-Cを少量, ニッ岳系軽石, 暗褐色土微・細粒をわずかに含む。
- 6 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で, 暗褐色土粒をわずかに含む, 粘性・しまりが強い。

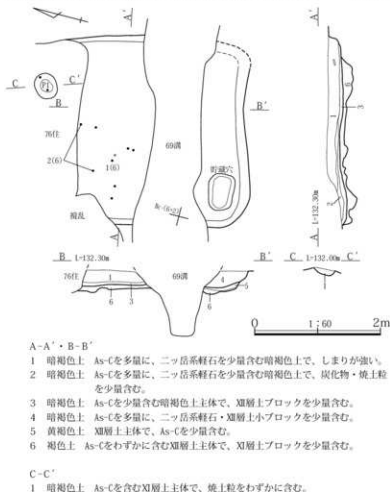
C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 暗褐色土微・細粒を含み, As-C・ニッ岳系軽石をわずかに, 焼土微粒をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが, 焼土微・細粒をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒を多量に, ニッ岳系軽石を少量, 炭化物粒をごくわずかに含み, 相味がかった色調を呈し, 細粒でしまりが強い。
- 4 暗褐色土 焼土粒をやや多量に, ニッ岳系軽石を少量含み, 粒子がやや粗くしまりがやや強い。
- 5 褐色土 焼土ブロックを多量に含み, ニッ岳系軽石はほとんど含まず, 4層より明るい色調を呈する。粒子がやや粗くしまりがやや強い。
- 6 明褐色土 暗褐色土主体で, 30%程度暗褐色土を含み, 炭化物粒・焼土ブロックをわずかに含む。
- 7 暗褐色土 細かな暗褐色土に, 焼土粒・ブロックを多量に, 炭化物粒をわずかに含み, 軽石はほとんど含まない。
- 8 明褐色土 暗褐色土主体で, 焼土ブロック(径5~10mm)を多量に, 炭化物粒をわずかに含む。
- 9 赤褐色土 As-Cをわずかに含む層が焼土化。
- 10 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で, 焼土粒をわずかに含む。

第346図 76号住居・出土遺物

77号住居(第347図 P.L.76)

位置: Bb・Bc-6 グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 3.00m×(2.70)m 残存深度: 0.22m 主軸方位: E-17°-N 埋没土: VII層土主体で、中層に焼土粒と炭化物粒をわずかに含む。柱穴: 未検出 カマド: 東壁に設置されたものと考えられるが、69号溝によって失われたものと思われる。遺物: 北寄りの位置から土師器環(1)と小型甕(2)が出土した。重複: 北側で76号住居と重複しており、検出状況から77号住居→76号住居である。また、69号溝との重複によって中央部が失われている。所見: 東壁は直線的で良好な検出状況であったが、

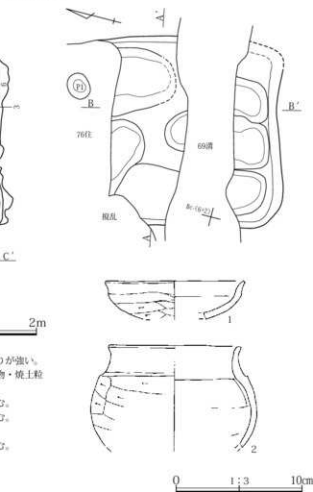


第347図 77号住居・出土遺物

78号住居(第348・349図 P.L.76・249)

位置: Bc・Bd-5 グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.41m×4.00m 残存深度: 0.18m 主軸方位: E-16°-N 埋没土: VII層土が主体であり、壁際に崩落と見られるXI層土ブロックが多い。柱穴: 床面の精査を行ったところ6カ所に円形を呈するピット(P1～P6)を検出したが、柱穴と考えられるような配置となっていなかつ

たため、柱穴とは認定しなかつた。カマド: 東壁中央のわずかに南寄りに検出し、想定される主軸方位はE-16°-Nであり、住居主軸方位と一致している。カマド構築材はまったく残存していなかったが、掘り方調査で左袖部に構築材据え方と見られるピット状の掘り込みが検出されたことから、本来は礫のような構築材が使用されていた可能性がある。また、この位置に構築材があつた

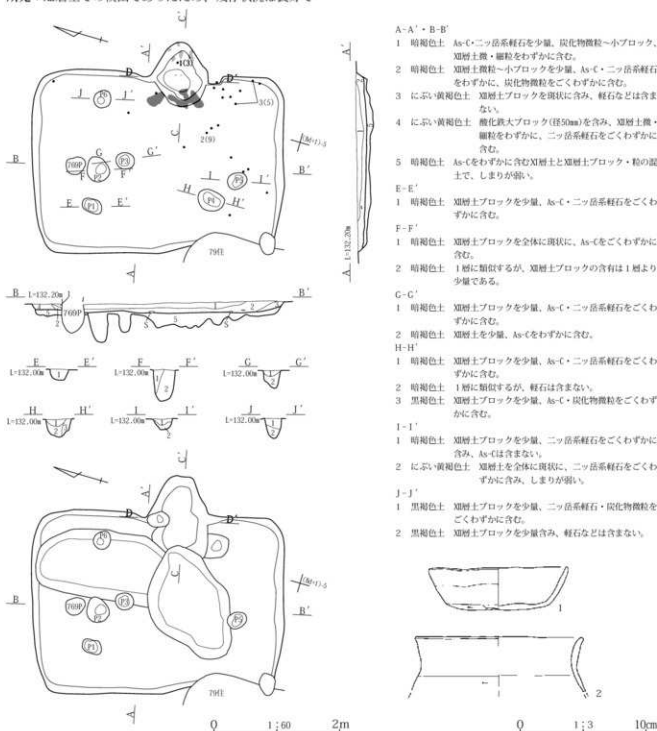


ため、柱穴とは認定しなかつた。カマド: 東壁中央のわずかに南寄りに検出し、想定される主軸方位はE-16°-Nであり、住居主軸方位と一致している。カマド構築材はまったく残存していなかったが、掘り方調査で左袖部に構築材据え方と見られるピット状の掘り込みが検出されたことから、本来は礫のような構築材が使用されていた可能性がある。また、この位置に構築材があつた

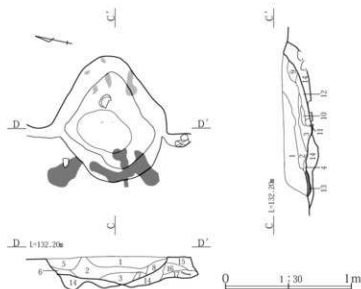
たと仮定すると、カマドは燃焼部のほとんどが壁外に位置するタイプとなろう。焚口部には黒色灰層がわずかに残存し、煙道へと連なる奥壁部に焼土がブロック状に検出された。**遺物**：カマド燃焼部から土師器環(1)が、南側の壁寄りの床面から土師器裏(3)が出土した。**重複**：79・98・103号住居と重複するが、検出状況などから98・103号住居→78号住居→79号住居と考えられる。**所見**：Ⅻ層土での検出であったため、残存状況は良好で

はないが、平面形などは明確に捉えることができた。床面はⅫ層土ブロックとⅧ層土ブロックの混土で形成されており、硬化面の形成は確認されなかった。掘り方は全体に掘り下げられていたが、カマド前面に不整楕円形を呈するやや深くなる部分があった。貯蔵穴と見られる掘り込みは、掘り方調査においても検出できなかった。

時期：9世紀前半

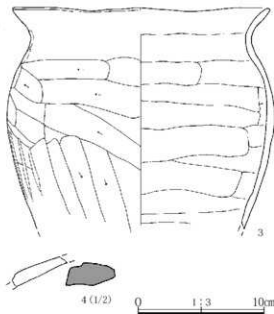
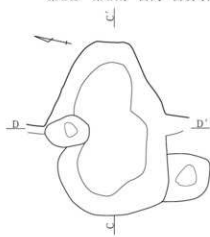


第348図 78号住居・出土遺物(1)



C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 X層土・AsC・ニッ浜系砂石をわずかに、炭化物・細砂、焼土粒をごくわずかに含む。
- 2 褐色土 X層土ブロックを全体に、炭化物・細砂をわずかに、AsC・焼土粒をごくわずかに含む。
- 3 暗褐色土 X層土を全体に、焼土粒・細砂を少量、炭化物粒をわずかに、黒色炭ブロックをごくわずかに含む、軽石は含まない。
- 4 褐色土 X層土を全体に、黒色炭・炭化物を微量に含む。
- 5 暗褐色土 ニッ浜系砂石・炭化物粒(径1～5mm)をわずかに、焼土粒をごくわずかに含む、細砂でしまりが強い。
- 6 暗褐色土 X層土主体で、暗褐色土粒を含み、微細とした堆積状況を示す。
- 7 暗褐色土 X層土ブロックを含み、他層との境界に炭化物粒をわずかに含む。
- 8 褐色土 X層土と30%程度の暗褐色土の混成土で、炭化物を少量、焼土粒をわずかに含む。
- 9 褐色土 暗褐色土主体で、焼土ブロック(径5～20mm)ほどを含み、炭化物をごくわずかに含む。
- 10 褐色土 焼土ブロック(径5mmほど)主体で、30%程度の暗褐色土を含み、炭化物・軽石は含まない。
- 11 暗褐色土 X層土主体で、30%程度の暗褐色土を含み、炭化物をごくわずかに含む。
- 12 暗褐色土 焼土ブロック(径2～10mmほど)を多量に、黒色炭・炭化物をわずかに含む、軽石がやや粗くしまりが強い。
- 13 黒色炭層
- 14 褐色土 X層土主体で、炭化物・焼土粒を含み、AsCを少量含む。
- 15 暗褐色土 暗褐色土ブロックとX層土ブロックとの混成土で、AsCをわずかに含む。
- 16 暗褐色土 AsCを比較的多量に含む暗褐色土。
- 17 暗褐色土 AsCを比較的多量に含む暗褐色土主体で、炭化物をわずかに含む。

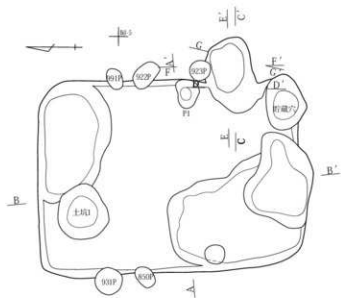
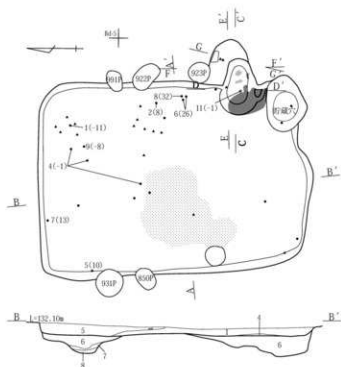


第349図 78号住居カマド・出土遺物(2)

79号住居(第350・351図 P L.77・250)

位置: Bc-4・5グリッド **形状:** 隅丸長方形 **規模:** 3.06m×4.35m **残存深度:** 0.18m **主軸方位:** E-3°-N
埋設土: VII層土主体。 **柱穴:** 未検出 **カマド:** 東壁の南に偏った位置で検出した。新旧2時期のカマドがほぼ同位置で重複するものとして調査をしたが、形状や焼土の形成状況から古い段階として調査したカマドが本来のすがたであると結論づけた。平面形は釣鐘状を呈し、主軸方位はE-7°-Nである。袖部分に構築材の残存は見られなかったが、燃焼部奥の左壁に1カ所礫が構築材として使用されていた。壁面の焼土化は顕著ではなく、右袖部近くの一部分だけに認められた。燃焼部底面は、やや左側に偏って比較的大い範囲が焼土化していた。 **遺物:** 遺物出土は壁寄りの部分に偏っており、東壁際から須恵器(2)と灰釉陶器(6)、北東コーナ部付近から

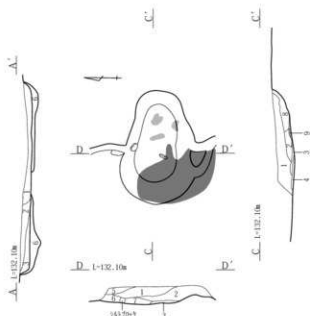
灰釉陶器(4)・羽釜(9)が出土し、カマド右袖部に当たる位置から11の土鍾が1点出土した他は、礫の出土がやや目立った。 **重複:** 78・103号住居と重複しており、検出状況などから103号住居→78号住居→79号住居と考えられる。 **所見:** XI層土での遺構確認のため壁の残存はわずかであったが、南壁以外は直線的に検出された。床面は、VII層土主体でX層土ブロックを含む斑状の土で形成されており、カマド正面の西壁よりの床面には狭い範囲ではあるが硬化面が検出された。貯蔵穴は、南東コーナ部に検出された0.88×0.63m、深さ0.27mの不整楕円形を呈する掘り込みと考えられる。掘り方は南西コーナ部と北東コーナ部の2カ所に顕著で、北西コーナ寄りに不整楕円形を呈する径0.78m、深さ0.41mの土坑1と、カマド北側の東壁に接するようにP1(0.45×0.34m、深さ0.36m、不整楕円形)を検出した。 **時期:** 10世紀前半



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-C, 炭化物微・細粒, XI層土微粒~大ブロックを少量, 炭化物微・細粒をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが, As-Cを1層より多量に含む。
- 3 灰黄褐色土 XI層土微粒~小ブロックを全体に斑状に, As-Cをごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 XI層土を斑状に, As-C, 炭化物微・細粒をごくわずかに含む。
- 5 暗褐色土 As-Cを斑状に, ニッ岳系軽石を少量, XI層土微粒~小ブロックをわずかに, 炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 6 暗褐色土 As-Cを含むXI層土主体で, XI層土ブロック粒・小ブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 As-Cを含むXI層土とXI層土粒の混上。
- 8 暗褐色土 As-Cを含むXI層土ブロックと炭化物の混上。

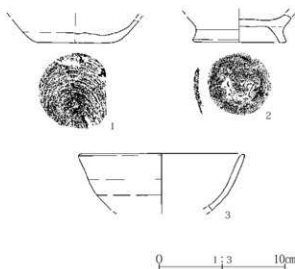
0 1:60 2m



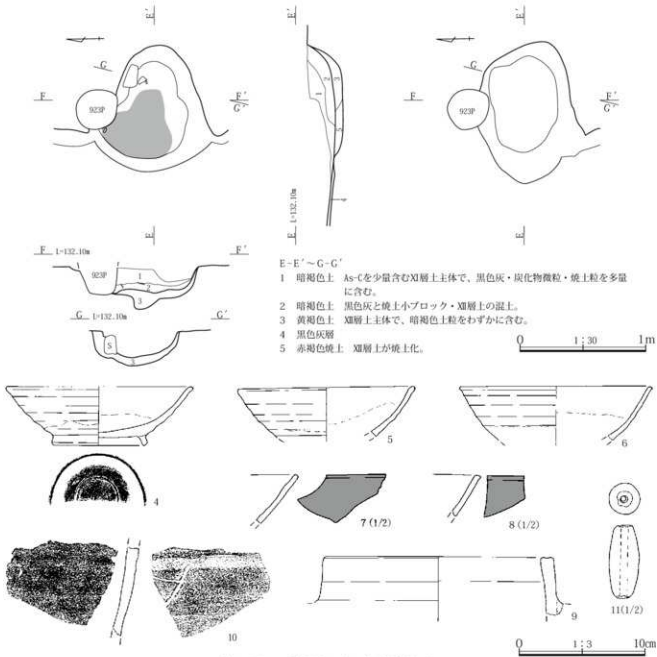
C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 XI層土微・細粒を含み, As-Cをわずかに, ニッ岳系軽石・炭化物小ブロックをごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 XI層土微・細粒を含み, As-C・ニッ岳系軽石・焼土微粒~小ブロックをわずかに含む。
- 3 暗褐色土 XI層土を少量, 焼土微粒をわずかに含み, 軽石は含まない。
- 4 にぶい黄褐色土 XI層土を全体に斑状に, 炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 5 暗褐色土 大きめの炭化物を含み, XI層土ブロックをわずかに含むしまりの強い砂質。
- 6 褐色土 XI層土を少量, ニッ岳系軽石をわずかに含み, 炭化物・焼土粒を殆んど含まず, 雑然とした堆積状況を示す。
- 7 黄褐色土 XI層土主体で, 焼土ブロックを多量に, 炭化物粒をごくわずかに含み, 明るめの色調を呈する。
- 8 暗褐色土 2層に類似するが, 焼土粒は含まない。
- 9 褐色灰土 黒色灰を層状に, 焼土微粒をごくわずかに含む。

0 1:30 1m



第350図 79号住居・出土遺物(1)



第351図 79号住居カマド・出土遺物(2)

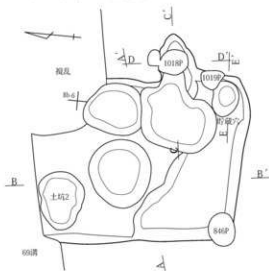
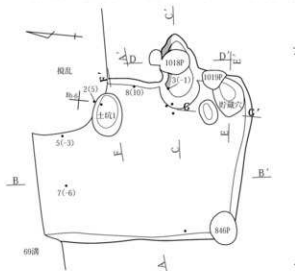
80号住居(第352・353図 P L.77・250)

位置: Ba・Bb・5・6グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.55m×(3.07)m 残存深度: 0.32m 主軸方位: E-7°-N 埋没土: VII層土主体と考えられるが、Hr-FAの含有は明瞭ではない。柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに偏った位置に検出され、想定される主軸方位はE-9°-Nである。平面形は釣鐘状を呈し、左側壁部の焼土化が著しい。燃焼部には1018号ピットが重複しているため焼土化の状況はわからなかった。カマド埋没土中層に煙道部から焚口部まで焼土粒を多く含有する層が形成されていたが、天井部の崩落を想定するほどの

焼土の状況ではなかった。焚口部には厚さ4cmにも及ぶ黒色灰層が形成されており、灰面はカマド前面の床面にまで広がっていた。袖等に構築材の残存及び掘り方において痕跡も検出されず、燃焼部中央には1018号ピットが重複するため、支脚の有無も確認できなかった。遺物: カマド内から須恵器埴(3)が、北寄りの位置から土師器甕(7)と須恵器埴(2)などが出土した。重複: 近い時期の遺構との重複は認められないが、北東コーナー部は複乱で矢われ、北壁は69号溝によって削平されている。また、住居中央を東西に64号溝が重複している。所見: Ⅱ層土中で検出したもので、西壁と南壁の残存は良好で

あったが、カマド北側の東壁は攪乱などによって残存していなかった。床面はカマド焚口部に検出した灰面の延長で捉えたもので、平坦であったが硬化面の形成は認められなかった。床面精査で、カマド北側の東壁に接する位置、および南東コーナー部のカマド寄りの位置の2カ所で楕円形の掘り込みが検出された。カマド北側の掘り

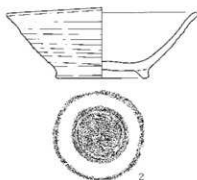
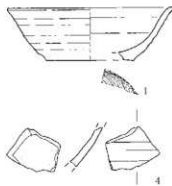
込み(土坑1)は、 $0.68 \times 0.47\text{m}$ 、深さ 0.09m であり、南東コーナー部の掘り込みは、 $(0.60) \times 0.46\text{m}$ 、深さ 0.22m とはほぼ同規模であったが、位置から南東コーナー部の掘り込みを貯蔵穴と判断した。掘り方は全体に及んでいたが、北寄りに土坑状に深く掘削された部分(土坑2)が認められた。 時期：9世紀後半



A-A'・B-B'

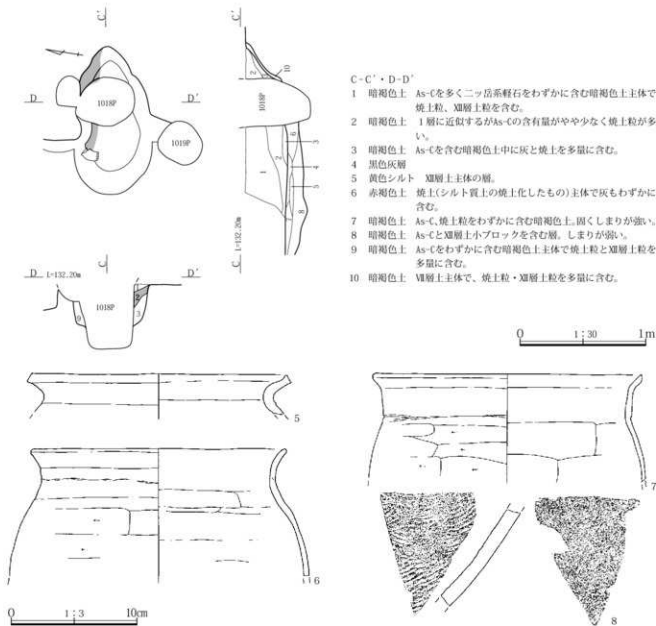
- 1 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土主体で、炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土主体で、焼土粒・X層土粒を含む。
- 3 黄褐色土 X層土ブロックと暗褐色土ブロックの混上。
- 4 暗褐色土 X層土ブロック主体で、暗褐色土を含む。
- 5 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土とX層土ブロックの混上。
- 6 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体。
- 7 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、焼土粒をわずかに含む、粘性が強い。
- 8 暗褐色土 X層土ブロックを塊状に、As-Cを少量、焼土粒をごくわずかに含む。
- 9 黄褐色土 X層土主体で、暗褐色土をわずかに含む。
- 10 暗褐色土 8層に類似するが、炭化物粒・焼土粒をわずかに含む。
- 11 黄褐色土 X層土主体で、暗褐色土をわずかに、As-Cをごくわずかに含む。
- 12 に近い黄褐色土 X層土を多量に、As-C・焼土粒をごくわずかに含む。
- 13 黒色灰層 黒色灰を全体に、X層土をブロック状に少量含む。

0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第352図 80号住居・出土遺物(1)



第353号 80号住居カマド・出土遺物(2)

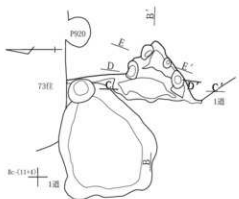
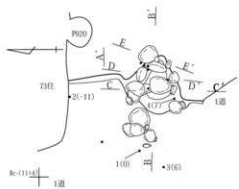
82号住居(第354・355号 P.L.77・78・250)

位置：Bb・Bc-11グリッド 形状：不明 規模：不明
 残存深度：0.12m 主軸方位：不明 埋没上：Ⅻ層土粒
 を含むⅦ層土主体で、酸化鉄の凝集が認められる。柱
 穴：未検出 カマド：東壁に検出したが、住居平面が不
 明なために相対的位置関係は不明である。左袖部には扁
 平な礫が重なって出土しており、袖の構築材であった可
 能性が高い。燃焼部側壁には楕円形の礫が内傾して立て
 られており、煙道部との境にはやや小振りの礫が1対垂
 直に立てられていた。これらの礫を覆うように扁平な礫
 が多数出土しているが、大半はカマド構築材として使用
 されていたものと考えられる。同様にカマド前面の床面

C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 As-Cを多く二ッ活系軽石をわずかに含む暗褐色土主体で
 焼土粒、Ⅻ層土粒を含む。
- 2 暗褐色土 1層に近似するがAs-Cの含有量がやや少なく焼土粒が多
 い。
- 3 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土中に灰と焼土を多量に含む。
- 4 黒色灰層
- 5 黄色シルト Ⅻ層土主体の層。
- 6 赤褐色土 焼土(シルト質土の焼土化したもの)主体で灰もわずかに
 含む。
- 7 暗褐色土 As-C、焼土粒をわずかに含む暗褐色土、固くしまりが強い。
- 8 暗褐色土 As-CとⅫ層土小ブロックを含む層、しまりが強い。
- 9 暗褐色土 As-Cをわずかに含む暗褐色土主体で焼土粒とⅫ層土粒を
 多量に含む。
- 10 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、焼土粒・Ⅻ層土粒を多量に含む。

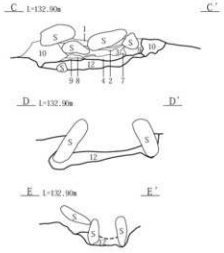
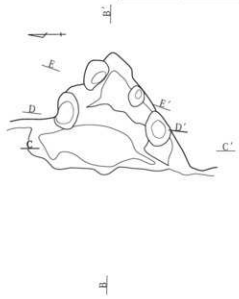
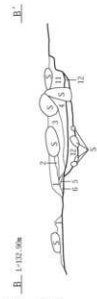
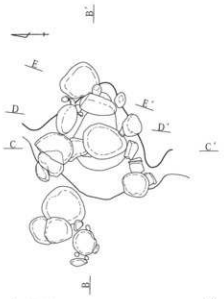
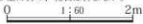
から出土した扁平礫についてもカマド構築材である可能
 性がある。構築材の位置から想定したカマド主軸方位は、
 E-14°-Sである。掘り方の調査では、燃焼部の掘り
 込みは顕著でなく、側壁に立てられた構築材の掘え方が
 明瞭に捉えられた。燃焼部から焚口部にかけて使用面と
 思われる面に黒色の灰面が検出され、特に焚口部には3
 cmほどの厚さの灰層が残存した。側壁の一部には焼土化
 した部分も認められたが、燃焼部底面に焼土化はみられ
 なかった。遺物：カマド右袖部付近から羽釜(4)が出
 土した他、カマド前面の床面から灰軸陶器皿(3)と須恵
 器碗(1)が、カマド北側のやや浮いた位置から灰軸陶器
 碗(2)が出土した。重複：北側で73号住居と重複し、



A-A'

- 1 黒褐色土 Ⅹ層土微・細粒を含み、As-Cをわずかに、ニッ岳系軽石・炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 2 黄褐色土 Ⅹ層土を全体に、暗褐色土をわずかに含む。
- 3 褐灰色土 Ⅹ層土微・細粒を含み、As-C・酸化鉄微粒をごくわずかに含む。
- 4 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土を多量に、As-C・酸化鉄微粒をわずかに含む。
- 5 にぶい黄褐色土 4層に類似するが、小礫を含む。
- 6 褐灰色土 Ⅹ層土を全体に斑状に、As-Cをごくわずかに含む。

- 7 褐灰色土 6層に類似するが、軽石などを含まない。
- 8 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土主体。
- 9 暗褐色土 酸化鉄をわずかに含む暗褐色土主体で、Ⅹ層土を斑状に、As-Cをごくわずかに含む。
- 10 褐灰色土 酸化鉄を多量に、As-C・ニッ岳系軽石、Ⅹ層土微・細粒を少量含む。
- 11 暗褐色土 Ⅹ層土を斑状に、As-Cをごくわずかに含む。
- 12 褐色土 Ⅹ層土主体で、酸化鉄を多量に含み、軽石は含まない。



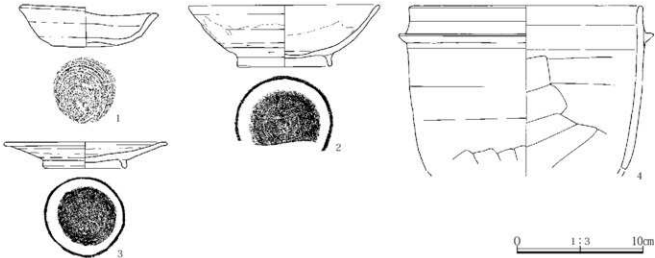
- B-B'-E-E'
- 1 暗褐色土 酸化鉄を含み、As-C・ニッ岳系軽石を少量、炭化物微粒をわずかに含む。
 - 2 褐色土 Ⅹ層土を全体に含み、軽石などは含まない。
 - 3 灰黄褐色土 Ⅹ層土微・細粒を少量、As-Cをわずかに、炭化物微粒・焼土粒をごくわずかに含む。
 - 4 灰黄褐色土 4層に類似するが、下面に黒色灰を含む。
 - 5 黒褐色土 黒色灰を少量、Ⅹ層土をごくわずかに含む。
 - 6 黒色灰層 Ⅹ層土微粒を含む。
 - 7 暗褐色土 Ⅹ層土を含み、軽石などは含まない。
 - 8 黒褐色土 Ⅹ層土を含み、黒色灰・炭化物をわずかに含む。
 - 9 黒褐色土 多量の炭化物に、暗褐色土を少量、Ⅹ層土をわずかに、焼土粒をごくわずかに含み、細粒でしまりが強い。
 - 10 灰褐色土 Ⅹ層土を多量に、炭化物をわずかに、As-C・ニッ岳系軽石をごくわずかに含み、細粒でしまりが強い。
 - 11 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石・炭化物粒をわずかに含み、細粒でしまりがやや強い。
 - 12 褐色土 炭化物を少量、ニッ岳系軽石をわずかに含み、細粒でしまりが強い。



第354図 82号住居

検出状況から73号住居→82号住居である。所見：1面1号道路との重複によってカマド周辺以外は失われている。北壁は明瞭に捉えられていないが、73号住居との重複部分に北東コーナー部が位置した可能性が高い。カマドが東壁の北寄りに設置される例はほとんど見られない

ことから、82号住居が東西に長い長方形平面でない限り、かなり小規模な住居であったことになる。残存した床面は平坦であるが、硬化面はまったく形成されていなかった。カマド北側に1.85×1.61m、深さ0.20mの不整楕円形の掘り方が検出された。 時期：10世紀後半

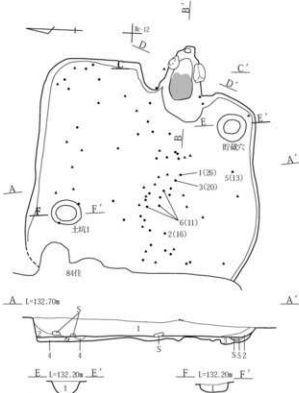


第355図 82号住居出土遺物

83号住居(第356・357図 P.L.78・250)

位置：Bb-11・12グリッド 形状：隅丸方形？ 規模：(3.15)m×3.44m 残存深度：0.41m 主軸方位：E—

5°-S 埋没土：As-C含有量の多いⅧ層土主体で、全体に暗色を呈している。また、壁際にはⅫ層土ブロックを多く含む壁の崩落層が形成されていた。 柱穴：未検



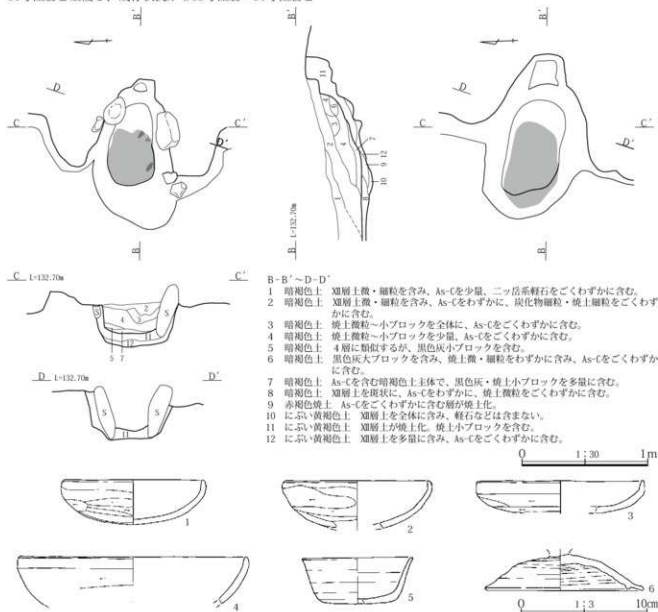
- E-E' 1 に赤い・黄褐色土 Ⅷ層土を全体に、Ⅷ土ブロックをこくわずかに含む。
F-F' 1 に赤い・黄褐色土 Ⅷ層土を全体に、As-C・炭化物微粒をこくわずかに含む。

- A-A' 1 暗褐色土 Ⅷ層土微粒～小ブロックを含み、As-Cを多量に、二ッ岳系軽石を少量、炭化物微粒・細粒をわずかに含む。
2 暗褐色土 Ⅷ層土を塊状に、As-Cを少量含む。
3 褐色土 Ⅷ層土主体で、暗褐色土を含み、As-Cをこくわずかに含む。
4 に赤い・黄褐色土 Ⅷ層土を多量に、As-C・二ッ岳系軽石をこくわずかに含む。
5 褐色土 Ⅷ層土主体で、大礫を含む。

第356図 83号住居

出 カマド：東壁中央やや南寄りに検出した。煙道がわずかに突出した釣鐘状の平面形を呈し、両袖部がわずかに屋内に張り出した構造であり、主軸方位はE-4°-Sである。袖部に構築材は検出されなかったが、煙道との境近くの側壁に礫が1対外傾して立てられていた。燃烧部には5cmほどの厚さの黒色灰層が残存し、灰層の下には焼土面が形成されていた。この焼土は屋内側に張り出した掘り方でも確認されていることから、燃烧部の主体は屋内側にあったものと考えられる。遺物：埋没段階で廃棄された状況で礫が多量に出土しているが、これに混じて中央部から須恵器蓋(6)・土師器环(1~3)が、南壁際から須恵器环(5)などが出土した。重複：84号住居と重複し、残存状況から83号住居→84号住居と

考えられる。所見：Ⅹ層土中で平面が明瞭に捉えられたもので、特に北東コーナー付近の残存が良好である。南西に向かってわずかに傾斜する地形の場所にあるため、南壁の残存はあまり良好ではなく、西壁は84号住居との重複によって失われている。床面は平坦に検出されたが、硬化面の検出はなかった。床面精査によって南東コーナー部に径0.45m、深さ0.24mの円形を呈する土坑1、北西コーナー部付近から0.47×0.39m、深さ0.12mの楕円形掘り込みをそれぞれ検出したが、位置関係から南東コーナー部の掘り込みを貯蔵穴と判断した。北壁から西壁、さらに南壁に沿って0.80mほどの幅で浅い掘り方が検出された。時期：8世紀前半



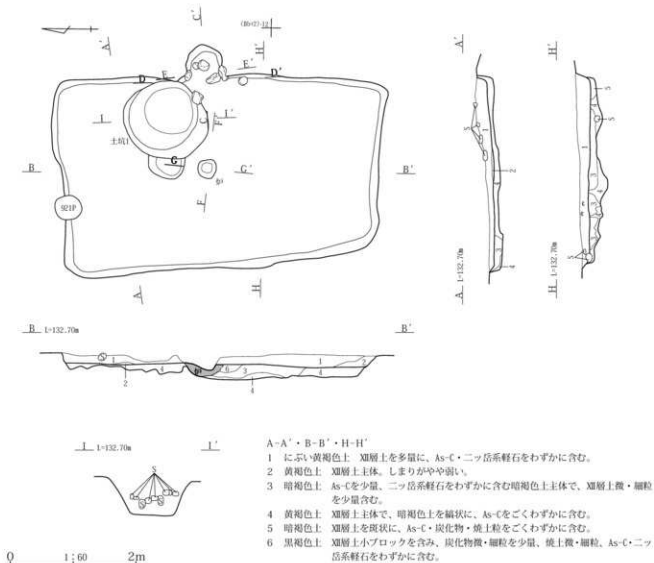
- B-B' ~ D-D'
- 1 暗褐色土 Ⅹ層土微・細粒を含み、As-Cを少量、二ッ岳系軽石をごくわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 Ⅹ層土微・細粒を含み、As-Cをわずかに、炭化物細粒・焼土細粒をごくわずかに含む。
 - 3 暗褐色土 焼土微粒~小ブロックを全体に、As-Cをごくわずかに含む。
 - 4 暗褐色土 焼土微粒~小ブロックを少量、As-Cをごくわずかに含む。
 - 5 暗褐色土 4層に類似するが、黒色灰小ブロックを含む。
 - 6 暗褐色土 黒色灰小ブロックを含み、焼土微・細粒をわずかに含む、As-Cをごくわずかに含む。
 - 7 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、黒色灰・焼土小ブロックを多量に含む。
 - 8 暗褐色土 Ⅹ層土を炭状に、As-Cをわずかに、焼土微粒をごくわずかに含む。
 - 9 赤褐色焼土 As-Cをごくわずかに含む層が焼土化。
 - 10 赤い黄褐色土 Ⅹ層土を全体に含む、軽石などは含まない。
 - 11 赤い黄褐色土 Ⅹ層土が焼土化、焼土小ブロックを含む。
 - 12 赤い黄褐色土 Ⅹ層土を多量に含む、As-Cをごくわずかに含む。

第357図 83号住居カマド・出土遺物

84号住居(第358～365図 P.L.79・80・250)

位置：Ba・Bb-11・12グリッド 形状：隅丸台形 規模：2.16～3.14m×5.27m 残存深度：0.23m 主軸方位：E-3°-N 埋没土：Ⅶ層土主体で、南側ほどⅧ層土粒を多量に含む。柱穴：未検出 カマド：東壁中央やや北寄りに検出した。想定される主軸方位はE-5°-Nで、住居の東壁を基準として計測した主軸とほぼ一致している。平面形は角鐘状を呈し、煙道部がわずかに突出する傾向が窺える。壁との接合部に礫を立てて袖構築材としている。燃焼部からも礫の出土があったが、底面から浮いた状態であり、構築材として使用されていたものであるかは判断できなかった。埋没土中に焼土粒の含有は多かったものの、焼土の形成は右側壁部に顕著であった他は燃焼部底面も明瞭でなく、灰層の形成もな

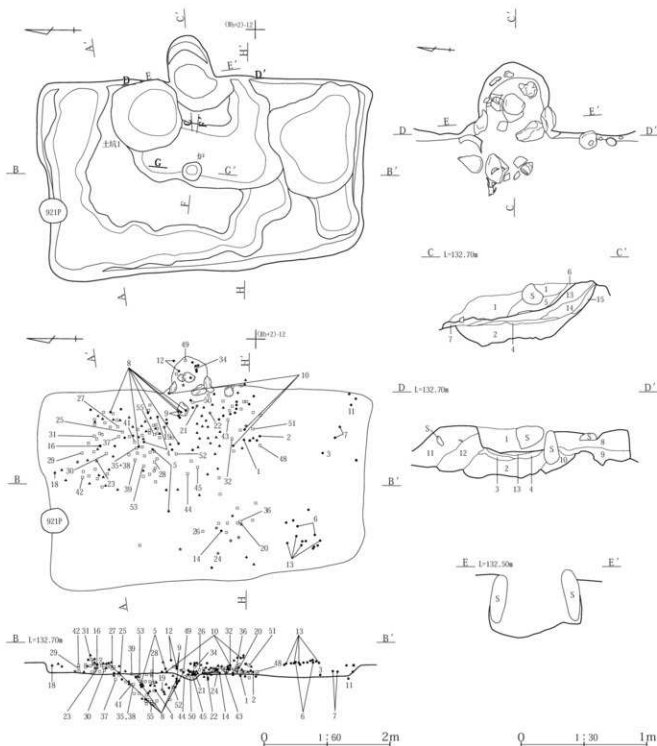
かった。遺物：カマド前面に特に顕著であったが、住居内全体から椀形鍛冶滓(25～52)、再結合滓(53)、鉄塊系遺物(55～57)、鞆の羽口(19～24)など鍛冶遺構を特徴付ける遺物が出土した。土器ではカマド内及び前面から土師器甕(8～10)が、作業坑と見られる土坑1から須恵器環(4)、南東コーナー部付近から須恵器瓶(7)と土師器環(3)、南西コーナー部土師器甕(13)と壺が出土した他、埋没土中から17の刀子が1点出土した。礫を含めた遺物出土は、東側が厚く西に行くにしたがって薄くなる傾向が認められ、床面から浮いた位置で出土した遺物については、東側からの廃棄が想定される。重複：83・113号住居と重複し、検出状況や遺物から113号住居→83号住居→84号住居と考えられる。所見：南北に重複する2棟の住居を想定し、84・85号住居として調査を



A-A'・B-B'・H-H'

- 1 にふい・黄褐色土 Ⅷ層土を多量に、As-C・二ッ岳系軽石をわずかに含む。
- 2 黄褐色土 Ⅷ層土主体。しまりがやや弱い。
- 3 暗褐色土 As-Cを少量、二ッ岳系軽石をわずかに含む暗褐色土主体で、Ⅷ層土微・細粒を少量含む。
- 4 黄褐色土 Ⅷ層土主体で、暗褐色土を縞状に、As-Cをごくわずかに含む。
- 5 暗褐色土 Ⅷ層土を斑状に、As-C・炭化物・焼土粒をごくわずかに含む。
- 6 黒褐色土 Ⅷ層土小ブロックを含み、炭化物微・細粒を少量、焼土微・細粒、As-C・二ッ岳系軽石をわずかに含む。

第358図 84号住居



C-C'・D-D'

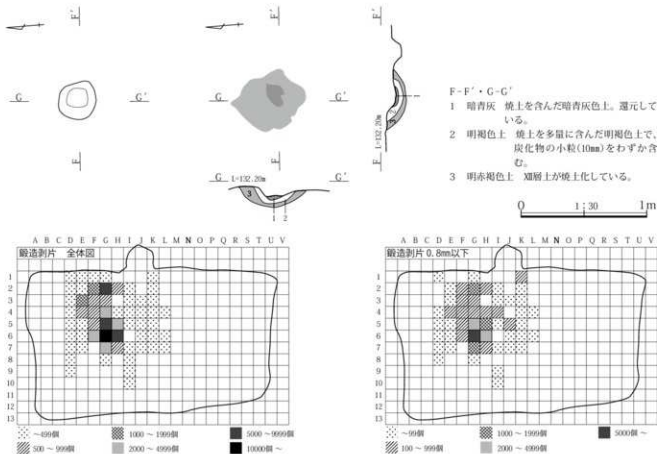
- 1 にぶい黄褐色土 埴土を現狀に、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに、炭化物・細粒・焼土小ブロックをごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを少量、ニッ岳系軽石・炭化物・細粒・焼土粒をごくわずかに含む暗褐色土主体で、埴土ブロックを現狀に含む。
- 3 にぶい黄褐色土 埴土との混土で、As-C・ニッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 黒色灰小ブロックを含み、埴土を少量含む。
- 5 暗褐色土 埴土主体で、焼土ブロックを多量に、黒色灰・炭化物粒を少量含む。
- 6 暗褐色土 埴土と焼土ブロックの混土。
- 7 にぶい黄褐色土 1層に類似するが、埴土を全体に含む。

- 8 にぶい黄褐色土 1層に類似するが、炭化物・細粒を1層より多量に含む。
- 9 暗褐色土 2層に類似するが、焼土・細粒を2層より多量に含む。
- 10 暗褐色土 2層に類似するが、埴土ブロックをごくわずかに含む。
- 11 暗褐色土 埴土ブロックを含み、As-Cを少量、ニッ岳系軽石をわずかに含む。
- 12 にぶい黄褐色土 埴土を多量に、As-Cをごくわずかに、ニッ岳系軽石・炭化物・焼土粒をごくわずかに含む。
- 13 暗褐色土 焼土・細粒を少量、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに、炭化物・細粒をごくわずかに含む。
- 14 暗褐色土 13層土に類似するが、黒色灰小ブロックを含む。
- 15 暗褐色土 13層土に類似するが、焼土粒の含有はごくわずかである。

第359図 84号住居掘り方・遺物出土状態・コマド

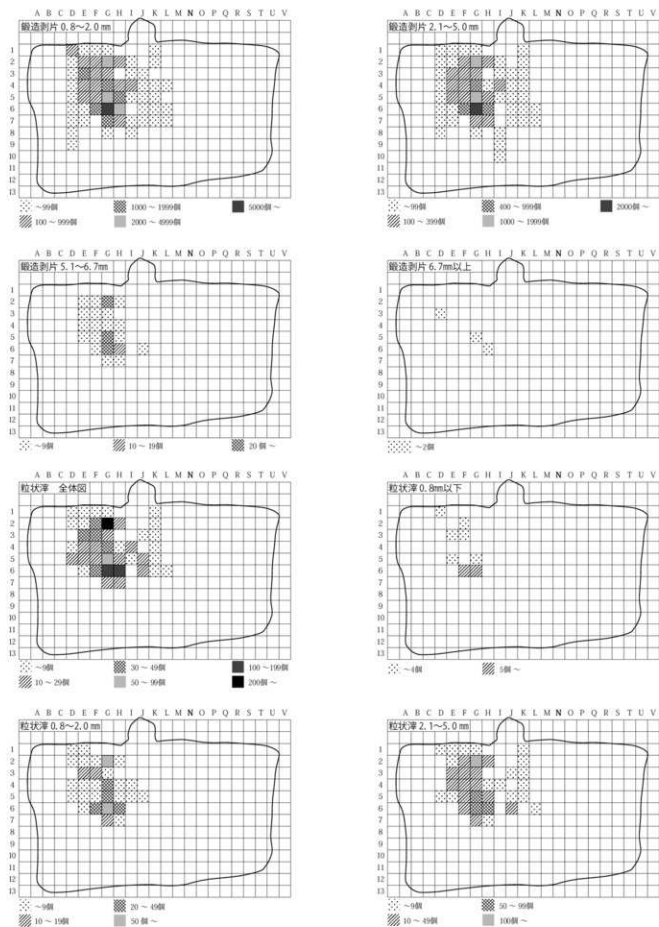
進めたが、85号住居とした南側の住居にはカマドがなく、84号住居と東西壁が一致するなど、別な住居とするには不自然な状況が看取されたので、報告段階では1棟の住居として扱うことにし85号住居を削除した。84号住居は、カマドが設置されており住居としての体裁があるために住居として報告したが、いわゆる鍛冶遺構である。カマド左前面に径1.28m、深さ0.60mの円形の作業坑(土坑1)と、この作業坑の南西至近の位置に径0.30mほどの炉を備えている。炉は、炉壁や羽口は残存せず、浅い窪み状を呈する底面だけが検出された。窪みの中央が青灰色に還元された状態で、周囲が径0.50mほどの範囲で焼土化していた。床面からやや浮いた位置から大小の礫が出土しているが、カマド付近から出土した中に小形ではあるが破熟した花崗岩が含まれており、鍛冶作業の台石として使われたものと考えられ、礫に混じって輪の羽口、楕円鍛冶滓なども出土した。鍛冶剥片は、出土状況を図化することはできなかったため、床面近くの埋没土を対象として25cm方眼に区切って取り上げて洗い出しを行った。その出土傾向を濃淡で示したのが第360～362図で

ある。この図からも判断されるように作業坑と炉周辺からの出土が顕著であり、この場において鍛造作業を行っていたと見て良いであろう。遺構内の施設配置や鍛造剥片の分布から具体的な作業が復元できる遺構であり、その内容については第9章第2節で若干の考察を加える。鉄滓に混じって環状の鉄製品(15)が出土したが、ここで製作された製品とは考えられず、また、工具とも考えられないことから、素材であった可能性がある。鍛冶関連遺物が床面ばかりでなく、浮いた位置からも出土している点について、住居埋没過程における廃棄を想定したいところであるが、84号住居と近い時期の鍛冶遺構は60mほど南東に行った田口下田尻遺跡5号住居しかなく、ここから廃棄されたとは考えにくい。したがって、84号住居の廃棄段階で、埋め戻しを行った可能性が高いと考えている。床面は、炉などの検出面として捉えたが、硬化面の形成はなかった。貯蔵穴は掘り方の調査においても検出されず、掘り方は北壁、西壁、南壁に沿う形で帯状に掘り窪められていた。 時期：8世紀後半

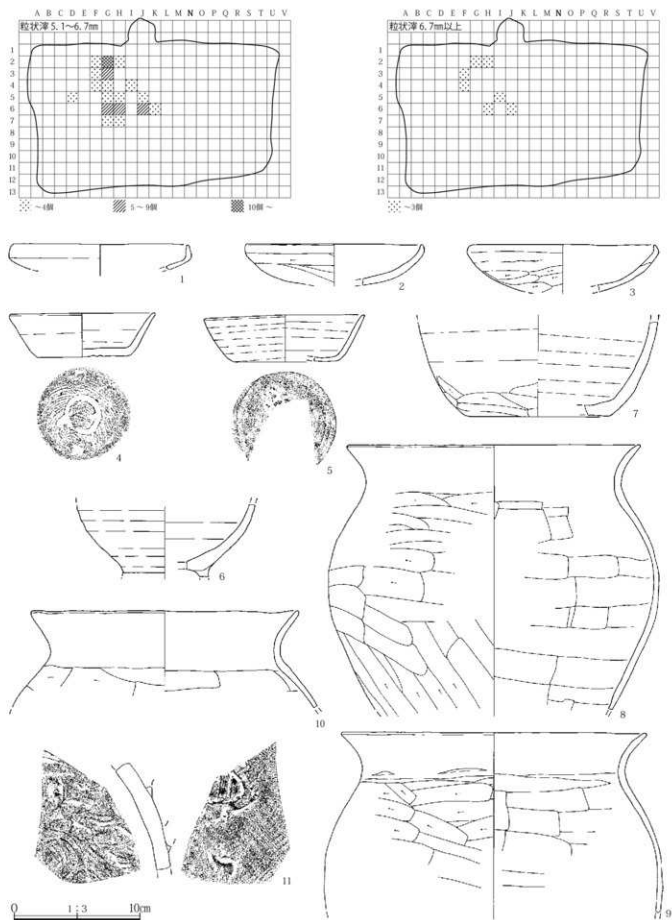


第360図 84号住居炉・鍛冶関連遺物分布図(1)

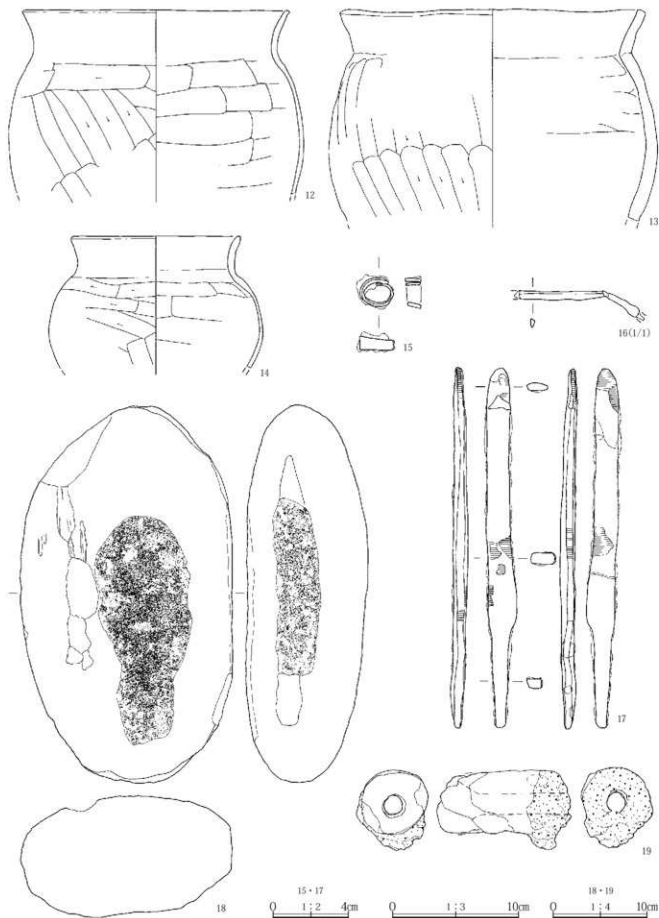
第5章 2面の調査（中世～古墳時代後期）



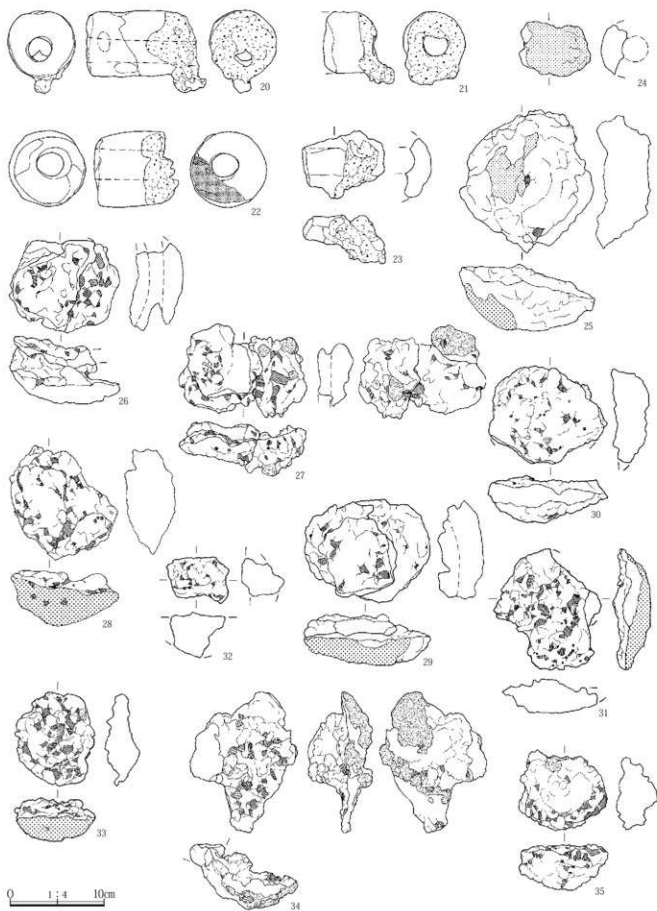
第361図 84号住居鍛冶関連遺物分布図(2)



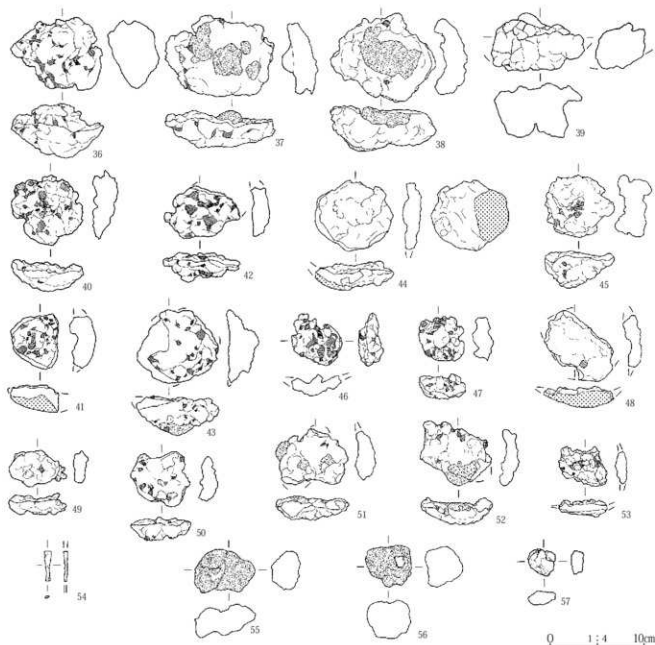
第362図 84号住居竪穴関連遺物分布図(3)・出土遺物(1)



第363図 84号住居出土遺物(2)



第364図 84号住居出土遺物(3)



第365図 84号住居出土遺物(4)

86号住居(第366・367図 P.L.80・251)

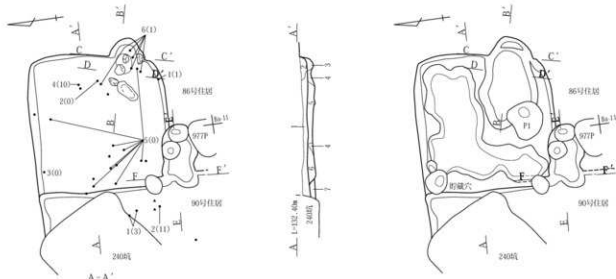
位置：At・Ba-11グリッド 形状：隅丸方形 規模：
 (2.22)m×2.19m 残存深度：0.09m 主軸方位：E-
 4°-S 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：
 東壁の南寄りに検出し、平面形から主軸方位をE-10°
 -Sと想定した。カマド部分には礫が比較的目立ち、3カ
 所立てたような状況が窺えるものがあった。これらが左
 右袖、支脚であったとすると当初想定した主軸方位より
 も北に振れたカマドであった可能性がある。カマドの埋
 没土中に焼土粒は検出されているが、焼土面は残存して
 いなかった。また、燃焼部底面付近においても灰層の残

存は明瞭でなかったが、カマド前面の床面には広範囲に
 わたって黒色の灰面が検出された。遺物：カマド燃焼
 部から須恵器甕(6)が、西寄りの床面から須恵器甌(5)
 がそれぞれ破片の状態出土した他、南東コーナー部
 から須恵器坏(1)、北壁際西寄りで埴(3)が出土した。
 重複：90号住居と重複しており、検出状況から90号住居
 →86号住居と考えられる。所見：Ⅸ層土中で確認され
 たが、地形的に西側に向かって下がっていく場所であ
 ったためか、あまり残存していなかった。床面は灰面の延
 長で捉えたが、硬化面の形成は認められなかった。床面
 精査の時点では確認できなかったが、掘り方の調査にお

いて北西コーナー近くで検出した径0.35m、深さ0.30mの円形の掘り込みを貯蔵穴と判断した。 時期：10世紀後半

90号住居(第366～368図 P.L.81・251)

位置：At-10・11グリッド 形状：不明 規模：不明
残存深度：0.17m 主軸方位：E-4°-S 埋没土：

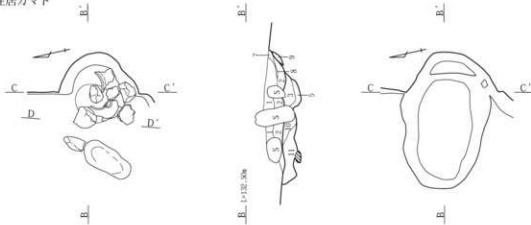


A-A'

- 1 暗褐色土 Ⅹ層土細粒・小ブロックを少量、As-C・二岳系軽石をわずかに、炭化物微・細粒をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 Ⅹ層土・As-Cを少量、炭化物細粒をごくわずかに含む。
- 3 暗褐色土 Ⅹ層土ブロックを少量、As-Cをごくわずかに含む。
- 4 褐色土 Ⅹ層土を多量に、暗褐色土を少量含む。
- 5 暗褐色土 3層に類似するが、炭化物小ブロックをごくわずかに含む。
- 6 暗褐色土 Ⅹ層土ブロックを塊状に、As-Cをわずかに含む。
- 7 暗褐色土 As-C・Ⅹ層土ブロックを少量、二岳系軽石をわずかに含む。(90住)

0 1; 60 2m

86号住居カマド



C 1-132.50m



B-B'・C-C'

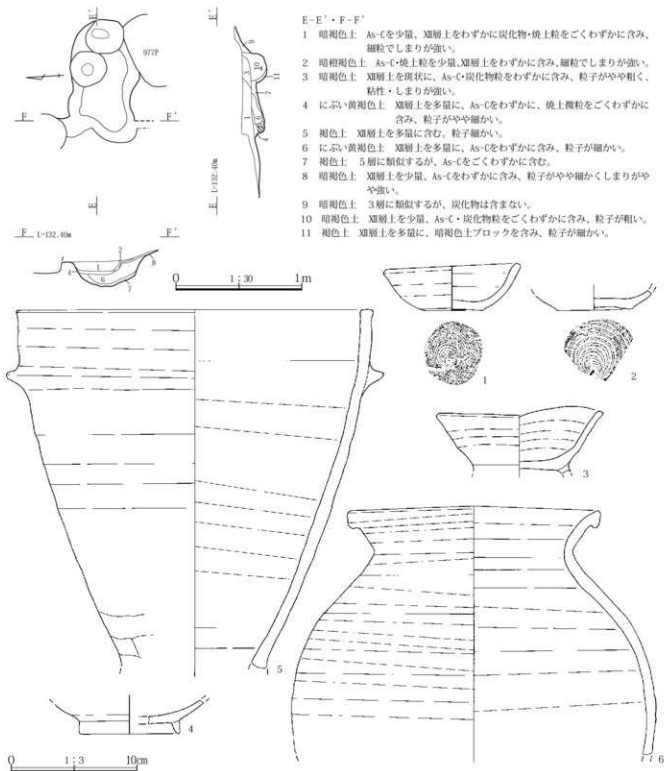
- 1 暗褐色土 Ⅹ層土を少量、As-C・炭化物・焼土微粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、As-C・炭化物・焼土微粒の含有は1層より少量である。
- 3 暗褐色土 As-Cを少量、Ⅹ層土細粒をわずかに含む。
- 4 黒褐色土 As-C、Ⅹ層土細粒・小ブロックをわずかに含む。
- 5 暗褐色土 Ⅹ層土を全体に、As-C・炭化物微粒をわずかに含む。
- 6 褐色土 Ⅹ層土を全体に、As-Cをわずかに含む(粗の攪乱)
- 7 褐色土 黒色灰を塊状に、焼土細粒をごくわずかに含む。
- 8 暗灰色土 黒色灰主体で、焼土微粒をごくわずかに含む。
- 9 褐色土 Ⅹ層土を全体に含み、軽石などを含まない。
- 10 褐色土 Ⅹ層土を多量に、As-Cをわずかに含む。
- 11 暗褐色土 Ⅹ層土をブロック状に、上面に黒色灰を層状に、As-Cをわずかに含む。

0 1; 30 1m

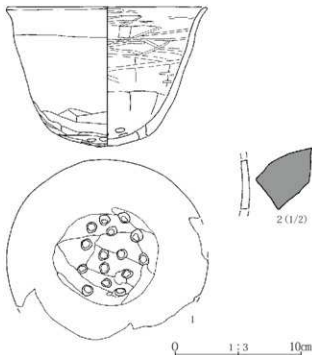
第366図 86・90号住居

Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：86号住居の床面調査でカマドを検出したもので、大半は削平されていたため掘り方だけを検出したに止まった。掘り方平面形をもとにした主軸方位はE-7°-Sである。焼土の形成もほとんどなく、構造材も検出されなかった。 遺物：カマド前面から土師器甕(1)が出土した。 重複：86・

110・111号住居と重複しているが、90号住居の残存状況が悪く、直接に新旧関係の検証ができなかった。 所見：カマドを検出したことで認識した住居であり、西側部分についてはまったく捉えることができず、詳細については不明である。 時期：7世紀前半



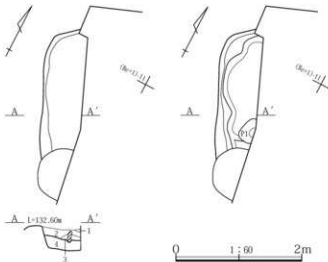
第367図 90号住居カマド・86号住居出土遺物



第368図 90号住居出土遺物

87号住居(第369図 P L.80)

位置: Bd・Be-10・11グリッド 形状:不明 規模:(0.63)



A-A'

- 1 暗褐色土 X層土粒を少量、As-Cをわずかに、ニッ房系軽石をごくわずかに含む。
- 2 黒褐色土 X層土粒・As-Cを少量、ニッ房系軽石をごくわずかに含む。
- 3 暗褐色土 X層土を多量に、As-Cをごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 4 褐色土 X層土を全体に含み、軽石などを含まず、しまりがやや弱い。

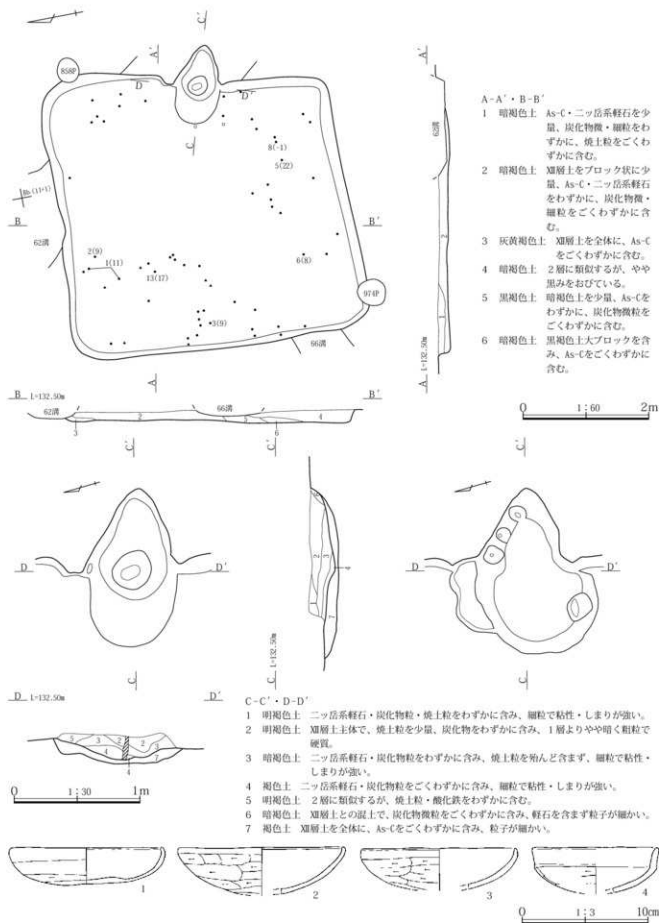


第369図 87号住居・出土遺物

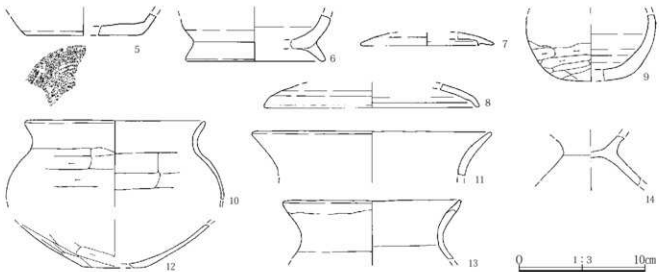
m×(2.04)m 残存深度:0.35m 主軸方位: E-25°-N 埋没土: VII層土主体であり、下層ほどX層土粒を多量に含む。柱穴:未検出 カマド:未検出 遺物:埋没土中から土師器環(1)が出土した。重複:不明 所見:調査区の東側で北西コーナー部だけを検出した。南側は掘乱を受けており、復旧痕が深くまで及んでいたために、埋没土は最下層だけが残存したにすぎない。床面は平坦に検出されているが、遺物出土も見られず詳細は不明である。掘り方は全体に行われていた可能性があるが判然としない。西寄りの位置に径0.42m、深さ0.16mほどの不整形円形を呈すると思われるP1を検出した。 時期:7世紀代

88号住居(第370・371図 P L.81・251)

位置: Ba・Bb-10グリッド 形状:隅丸方形 規模:4.42m×4.66m 残存深度:0.20m 主軸方位: E-3°-S 埋没土: VII層土主体で、As-C含有量が少ない。柱穴:未検出 カマド:東壁の中央に検出され、釣鐘状の平面形を呈している。構築材はまったく検出されず、平面形から想定した主軸方位はE-18°-Sで、西壁で計測した住居主軸方位より南に振れている。袖の痕跡は検出されなかったが、燃焼部の窪みか壁側に偏った位置であることから、カマドは屋内側にはほとんど張り出さないタイプであろう。側壁から煙道部までの間は焼土化しており、カマド平面が明瞭に捉えられたが、燃焼部底面にはほとんど焼土が認められない。遺物:遺物は全体に散在するような出土状態であった。特に北東側にやや集中する傾向があり、土師器環(1~3)・甕(13)などが出土した。また、南西部で須恵器埴(6)、南東部では須恵器環(5)・蓋(8)が出土した他、カマド前面の浮いた位置から鉄滓が出土した。重複:91号住居と重複し、検出状況から91号住居→88号住居である。 所見:北東コーナー部以外の部分はIX層土中で平面の確認ができた。壁は南側の91号住居との重複部分以外は下部がX層土を掘り抜いて構築されているため、明瞭に捉えることができた。床面は一部X層土が確認される面として捉え平坦に検出したが、硬化面は観察できなかった。床面精査で柱穴や貯蔵穴にあたるような掘り込みは検出できず、下部に重複する91号住居の平面形が確認できたため、掘り方は行われていないと判断した。 時期:8世紀前半



第370図 88号住居・出土遺物(1)

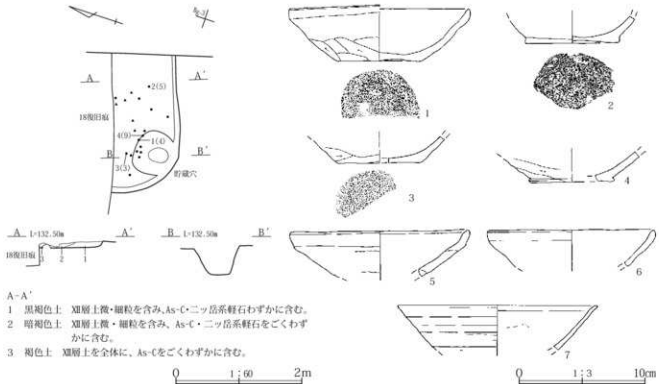


第371図 88号住居出土遺物(2)

92号住居(第372図 P.L.82・251)

位置: Bf- 2・3グリッド 形状: 不明 規模: (2.22) m×(1.05)m 残存深度: 0.08m 主軸方位: E-20°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 貯蔵穴とした掘り込み際から土師器環(1・4)が出土し、埋没土中から灰軸陶器碗(7)などが出土した他、礫の出土が目立った。重複: 93号住居と重複し、検出状況から93号住居→92号住居である。所見: 調査区の南東端に検出したもので、東側は道路下になり、北

側は18号復旧痕によって削平されているため、南西コーナー部だけが調査された。床面は硬化面や灰面などがなく、下面に93号住居が重複しているため掘えにくく、結果的には遺物出土面として掘えた。床面の調査では判然としなかったが、全体に掘り下げた時点で、南西コーナー部に接して径0.70m、深さ0.46mの円形を呈する土坑状の掘り込みが検出されたため、これを貯蔵穴と判断した。 時期: 10世紀前半



第372図 92号住居・出土遺物

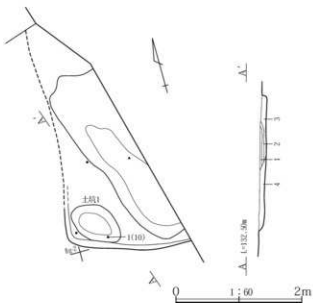
A-A'

- 1 黒褐色土: XI層土微・細粒を含み、As-C・ニッ岳系軽石わずかに含む。
- 2 暗褐色土: XI層土微・細粒を含み、As-C・ニッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 3 褐色土: XI層土を全体に、As-Cをごくわずかに含む。

94号住居(第373図 P.L.82・251)

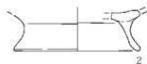
位置:Bg-1・2グリッド 形状:不明 規模:(1.98)m×(2.87)m 残存深度:0.08m 主軸方位:E-15°-S 埋没土:Ⅶ層土主体であるが、Ⅻ層土ブロックの含有が多く、全体に明るい色調を呈する。柱穴:未検出 カマド:未検出 遺物:出土は微量で、南西コーナー部の土坑1とした掘り込みから須恵器環(1)が1点出土した。重複:93号住居と重複し、遺物から93号住居→94号住居である。所見:調査区の南端で検出した。検出された場所は泥流の復旧痕が深くまで及んでいたため、遺構確認面をⅫ層土中まで下げなければならず、必然的に遺構の残存状態は不良となった。93号住居は早い

段階から捉えられたが、94号住居は当初遺構の存在が認識できず、10世紀代の遺物の出土したことで新しい段階の遺構が重複していることに気づいた。しかし、93号住居との重複部分の壁は明確に捉えることはできず、結果的に南西コーナー部から南壁の一部の検出に止まった。床面はⅫ層土ブロックが斑状に入る面として捉えたが、93号住居床面との違いが分からないような状況であった。南西コーナー部に0.87×0.56m、深さ0.08mの楕円形を呈する掘り込み(土坑1)を検出し、この上面から須恵器環(1)が出土しており、極めて浅いが貯蔵穴の可能性はある。時期:10世紀後半



A-A'

- 1 暗褐色土 As-C少量含むⅫ層土主体で、Ⅻ層土粒をわずかに含む。
- 2 黄褐色土 Ⅻ層土ブロックとⅫ層土ブロックの混土。
- 3 暗褐色土 As-Cを含むⅫ層土主体で、Ⅻ層土ブロックを多量に含む。
- 4 褐色土 As-Cを均一に含むⅫ層土主体で、Ⅻ層土小ブロックを多量に含む。

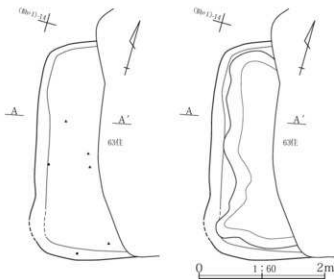


0 1:3 10cm

第373図 94号住居・出土遺物

97号住居(第374・375図 P.L.71・75・76)

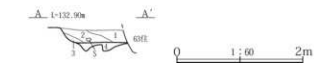
位置:Bb-13グリッド 形状:隅丸方形? 規模:(1.67)m×3.47m 残存深度:0.23m 主軸方位:E-13°-N 埋没土:Ⅶ層土主体で、Ⅻ層土ブロックを含む。柱穴:未検出 カマド:未検出 遺物:床面からは礫が4点出土しただけで、土器片が床面から浮いた位置でわずかに出土した。重複:63・75・99号住居と重複し、残存状況から99号住居→97号住居→75号住居→63号住居と考えられる。所見:63号住居との重複によって、カマドを含む東側2/3ほどが失われているものと考えられる。Ⅻ層土中で確認を行っているため残存状況はあまり良好ではなく、全体を検出できた西壁に崩落の痕跡は見られない。床面は平坦に検出され、全体に掘り方が見ら



第374図 97号住居

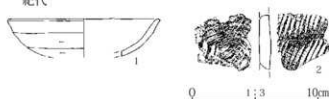
れ、XII層土ブロックとVII層土の混土で埋められていた。調査された部分では掘り方調査によっても柱穴、貯蔵穴

と見られる掘り込みは検出されなかった。 時期：8世紀代



A-A'

- 1 褐色土 XII層土を全体にブロック状に、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石、XII層土微・細粒を少量、炭化物微・細粒をわずかに含む。



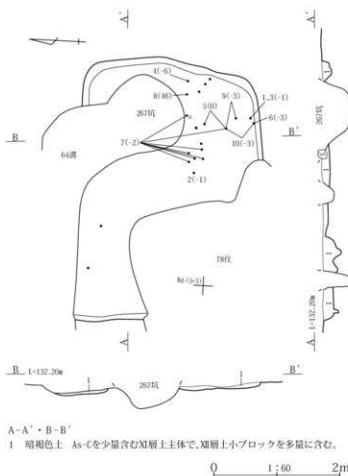
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、XII層土小ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 XII層土をブロック状に、As-C・ニッ岳系軽石をごくわずかに含む。

第375図 97号住居土層断面図・出土遺物

98号住居(第376～377図 P.L.82・251)

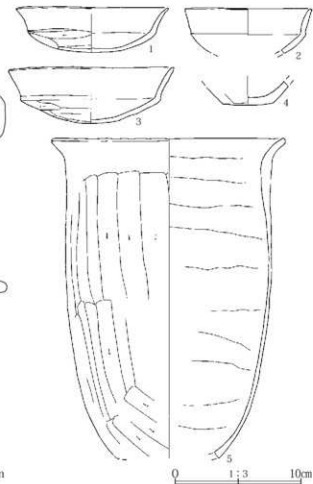
位置：Bc・Bd-5グリッド 形状：不明 規模：不明
残存深度：-1m 主軸方位：不明 埋没土：不明 柱穴：未検出 カマド：未検出 遺物：南東コーナー部付近に掲載した土師器甕や坏が同一面で集中して出土しており、焼土と炭化物が付近に見られることから、カマド近くの床面出土遺物と考えられる。 重複：78号住居と重複し、検出状況から98号住居→78号住居である。 所見：98号

住居を検出した場合は、近世段階で広く削平を受けているため平面をほとんど留めず、遺物が面的に集中したために住居の存在を認識した。図化した隅丸長方形の平面形は、掘り方の検出された範囲であり、住居平面とは必ずしも一致していない可能性がある。遺物の集中した部分には炭化物と焼土が検出されており、この位置にカマドが位置していた可能性が高いが、カマド構造を捉えられるような残存状況ではなかった。 時期：7世紀前半

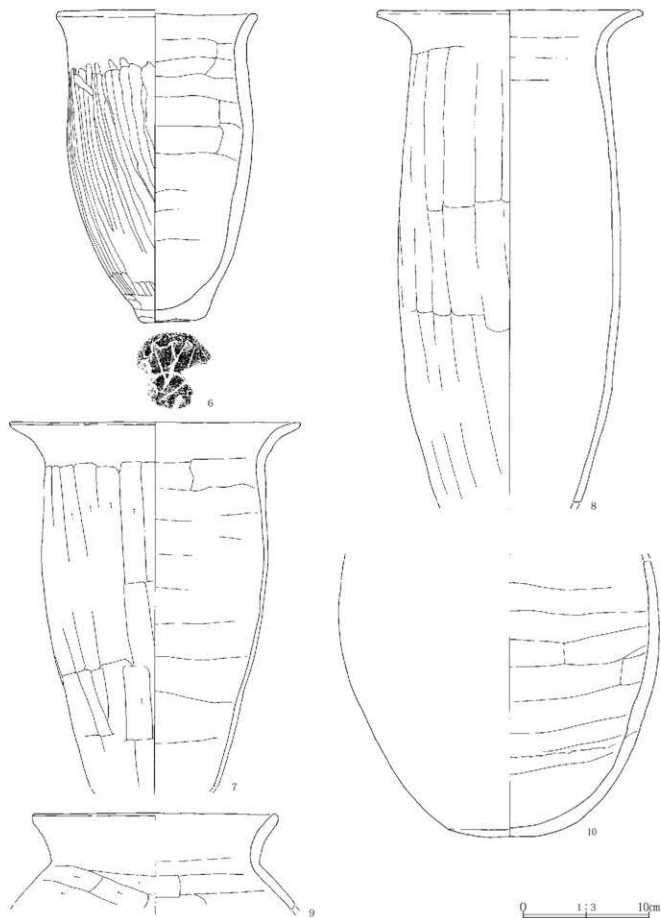


A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量含むXII層土主体で、XII層土小ブロックを多量に含む。



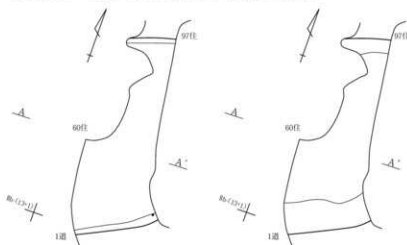
第376図 98号住居・出土遺物(1)



第377図 98号住居出土遺物(2)

99号住居(第378図 P.L.83)

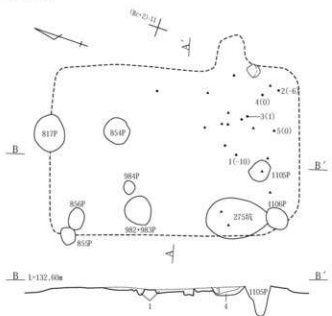
位置: Bb-13グリッド 形状: 不明 規模: (1.31)m × 2.98m 残存深度: 0.20m 主軸方位: E-27°-N
埋没土: VII層土主体で、XI層土粒とブロックを含む。
柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 床面付近からの遺物出土は皆無であった。重複: 60・97号住居と重複しており、検出状況などから99号住居→60・97号住居と考えられる。所見: 東側を97号住居、西側を60号住居



第378図 99号住居

101号住居(第379・380図 P.L.83・252)

位置: Bb・Bc-10・11グリッド 形状: 不明 規模: 不明 残存深度: 0m 主軸方位: 不明 埋没土: 不明
柱穴: 未検出 カマド: 扁平な礫の集中した場所の東側に1点だけ礫が立った状態で検出された場所があり、この礫がカマドの右側の袖構築材であった可能性が高い。しかし、燃焼部にあたる部分には酸化鉄の凝集は認められたものの焼土は検出されず、また灰面も形成されていなかった。遺物: カマド前面と見られる位置から灰軸陶器壇(4)が口縁部を下にした状態で出土した他、足高台壇(2)・坏(1)、須臾器甕(5)が出土した。また、同じ位置で扁平な礫が集中して出土したことが特徴的である。重複: 不明 所見: 復旧痕や1号道などによる削平がXI層土中にまで及んでいた場所に検出したもので、礫や遺物が同一面から出土した。壁はまったく残存しておらず、柱穴、貯蔵穴となるような掘り込みも検出できなかった。掘り方は、中央部に不整形に行われており、カマド正面にあたる位置に土坑1(径0.74m、深さ0.22m、円形)と土坑2(0.72×0.54m、深さ0.36m、楕円形)の2基を検出した。時期: 10世紀後半



第379図 101号住居

との重複によって失い、南西側は近世の1号道で削平されているため、検出されたのは北壁、南壁の一部とこの間の床面である。床面はXI層土中に構築されており、中央部にVII層土とXI層土の混土が認められたことから浅い不明瞭な掘り方があったものと考えられる。検出部分においては柱穴や貯蔵穴にあたる掘り込みは検出されていない。時期: 不明



- A-A' 1 暗褐色土 XI層土大ブロック(粗粒乱)を含み、As-Cを少量、ニッ层系軽石をわずかに含む。
2 褐色土 XI層土を多量に含み、軽石は含まない。
3 灰褐色土 白色・黄色軽石微粒を多量に、XI層土を少量、酸化鉄をわずかに含む。
4 灰褐色土 3層に類似するが、軽石の含有は少量である。
5 黄褐色土 XI層土主体で、酸化鉄・暗褐色土を少量、As-Cをわずかに含む。
6 黄褐色土 XI層土主体で、As-C・暗褐色土をわずかに含む。

0 1:60 2m

- A-A'・B-B' 1 にふい黄褐色土 XI層土を多量に、暗褐色土を少量、As-Cをごくわずかに含む。
2 黄褐色土 XI層土主体で、暗褐色土ブロック(粗乱)を含む。
3 暗褐色土 XI層土微・細粒を斑状に、As-C・ニッ层系軽石をわずかに、炭化物微粒・焼土微粒をごくわずかに含む。(土坑1)
4 暗褐色土 XI層土微・細粒を斑状に、As-Cをごくわずかに含む。(土坑1)

0 1:60 2m

いるため、検出することができなかった。床面と考えたⅧ層土の面でP 1 (0.59×0.45m、深さ0.15m、楕円形)、P 2 (0.41×0.26m、深さ0.19m、楕円形)、P 3 (0.93×0.51m、深さ0.10m、不整楕円形)のピット状の掘り込みを検出したが、位置などから柱穴、貯蔵穴とは考えなかった。 時期：不明

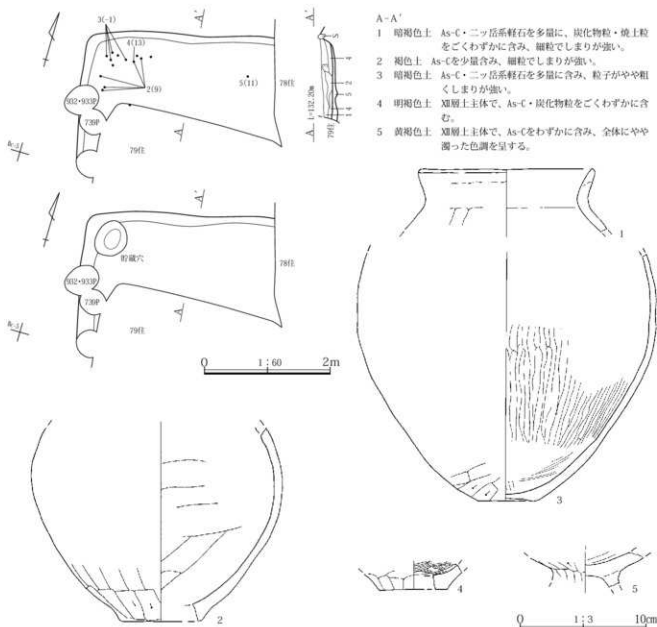
103号住居(第382図 P L.252)

位置：Bc- 5グリッド 形状：隅丸方形？ 規模：(3.21)m×(2.00)m 残存深度：0.18m 主軸方位：E-14°-N 埋没土：上層はAs-C、二ッ岳系軽石の比較的多いⅧ層土主体で、下層はAs-Cを含むⅧ層土が主体。 柱穴：未検出 カマド：未検出 遺物：北西コーナー部および

貯蔵穴と見られる掘り込み内から土師器(2・3)などが出土した。 重複：78・79号住居と重複し、検出状況から103号住居→78号住居→79号住居と考えられる。

所見：78・79号住居との重複で大半の部分を失っており、検出したのは北西コーナー部付近だけである。遺構確認面がⅧ層土中であつたため、壁の残存高はなかったが北壁、西壁ともに壁崩落の痕跡はなく直線的に検出された。床面はやや濁ったⅧ層土類似の土であり、平坦には捉えられなかった。北西コーナー部に検出した0.57×0.48m、深さ0.05mの楕円形の掘り込みは、浅すぎるくらいはあるが土器片の出土もみられたことから貯蔵穴と考えた。

時期：7世紀前半

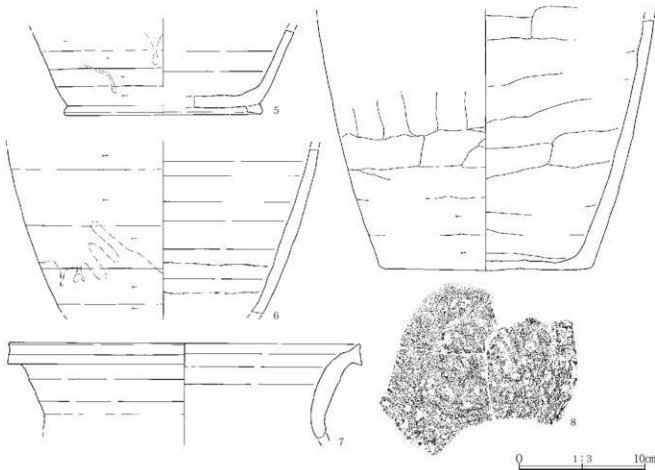
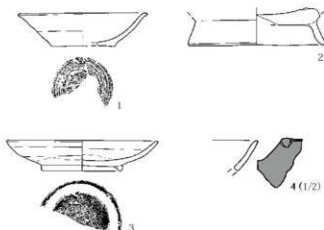
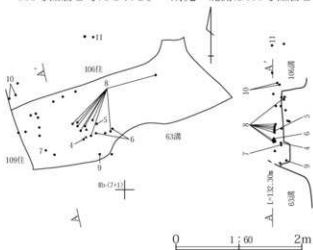


第382図 103号住居・出土遺物

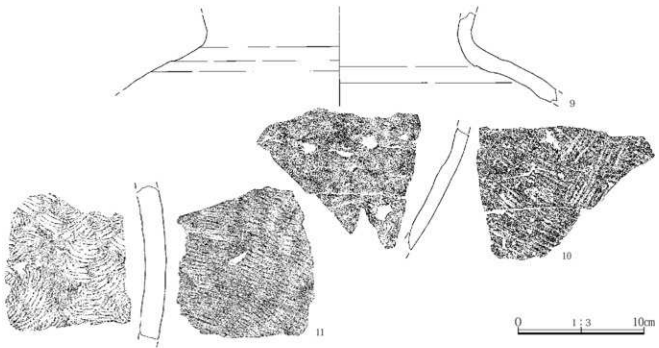
105号住居(第383・384図 P.L.83・252)

位置: Ba・Bb-7グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0.22m 主軸方位: 不明 埋没土: VII層土主体
 柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 床面として
 捉えた面よりやや浮いた位置に灰釉陶器瓶(5・6)、須
 恵器瓶(8)などが集中して出土した。重複: 106・109
 号住居と重複し、検出状況から109号住居→105号住居
 →106号住居と考えられる。所見: 北側は106号住居と

の重複によって、南側は63号溝との重複によってそれぞれ失われ、さらに東側は病院の建物によって擾乱されているため、検出できたのは南北幅1.20mほどの帯状の床面だけで、壁はまったく残存していなかった。床面はVII層土相当の土層を取り去った下に検出した明るい色調のIX層土面と判断した。狭い範囲の検出であったため、住居形態など詳細は不明である。時期: 10世紀後半



第383図 105号住居・出土遺物(1)

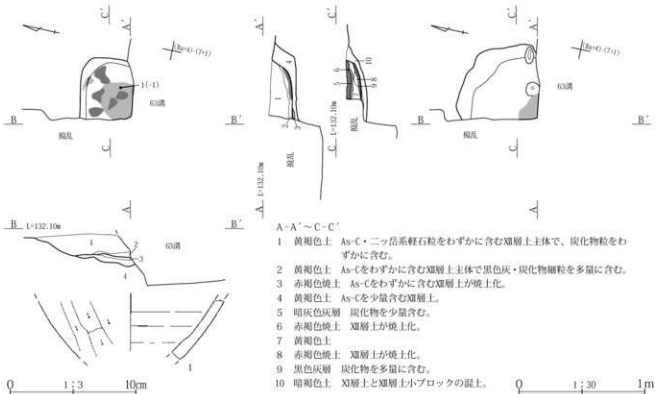


第384図 105号住居出土遺物(2)

109号住居(第385図 P.L.83)

位置: Ba-7グリッド 形状: 不明 規模: 不明 残存
 深度: -1m 主軸方位: 不明 埋没土: VII層土 柱穴:
 未検出 カマド: カマドの一部だけを検出したもので、
 東壁に設置されたものと考えられる。遺物: 燃焼部から
 羽釜と見られる小破片が出土した。重複: 105号住
 居と重複し、検出状況から109号住居→105号住居と考え

られる。所見: 105号住居の調査時点では平面的に検
 出することはできず、西側の断面において炭化物と黒色
 灰を検出したことから精査を行った結果、炭化物粒の比
 較的多い部分を掘り下げたところ、下部から炭化物層と
 焼土層が間層を挟んで2面検出されたためカマドと判断
 した。南側が失われているため平面形や構造は不明であ
 る。時期: 10世紀代



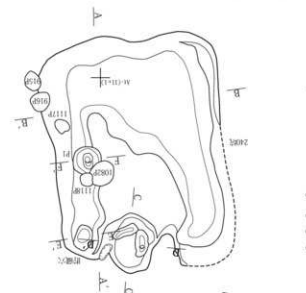
第385図 109号住居・出土遺物

A-A'～C-C'

- 1 黄褐色土 As-C・二ツ岳系軽石粒をわずかに含む畑層土主体で、炭化物粒をわずかに含む。
- 2 黄褐色土 As-Cをわずかに含む畑層土主体で黒色灰・炭化物細粒を多量に含む。
- 3 赤褐色焼土 As-Cをわずかに含む畑層土が焼土化。
- 4 黄褐色土 As-Cを少量含む畑層土。
- 5 暗灰色灰層 炭化物を少量含む。
- 6 赤褐色焼土 畑層土が焼土化。
- 7 黄褐色土
- 8 赤褐色焼土 畑層土が焼土化。
- 9 黒色灰層 炭化物を多量に含む。
- 10 暗褐色土 畑層土と畑層土小ブロックの混土。

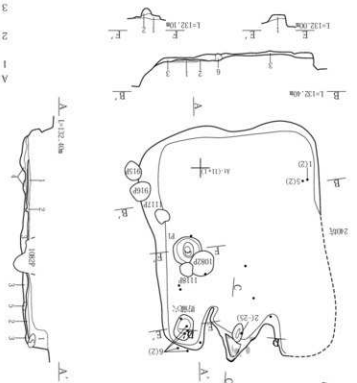
第386図 110号住居

- 1 1 階 明土土 加層土小アロウツタを含み、As-C・ニッ房赤輝石、炭化物
質・細粒をわずかに、黄土黒粒をごくわずかに含む。
E-F
1 1 階 明土土 加層土黒・細粒を含み、As-Cを少量、炭化物粒をこ
ろわずかに含む。
1 1 階 明土土 1 階に相当するが、輝石・炭化物は含まない。
- 2 2 階 明土土 加層土黒・細粒を含み、As-C・ニッ房赤輝石をこ
ろわずかに含む。
3 3 階 明土土 加層土黒・細粒を含み、As-Cをこ
ろわずかに含む。
4 4 階 明土土 加層土と黄土上で、As-Cをこ
ろわずかに含む。
5 5 階 明土土 As-C・ニッ房赤輝石をこ
ろわずかに含む。明土土主体で、
加層土黒細粒を含む。
6 6 階 明土土 加層土と黄土上で、輝石などを
含む。



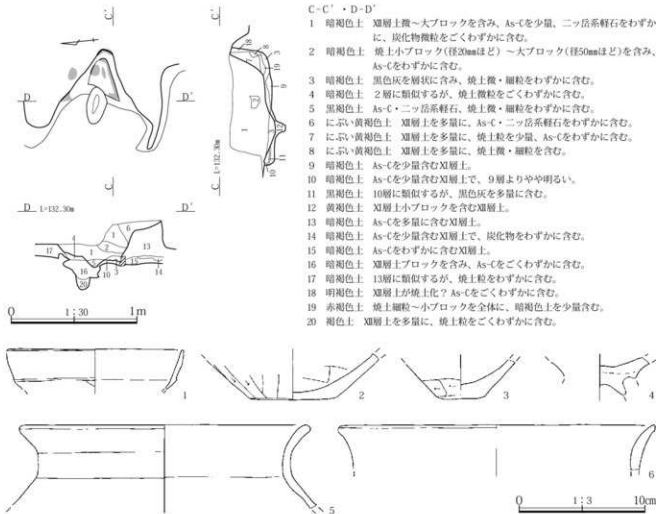
から上師器集の底部(2)か、北西コーナー部近くの北東
際から上部器集(1)・糞(5)が出土した。重葺: 90・
111号住居と重葺し、出土状況から111号住居→110号住
居であることは確定であるが、90号住居との新旧関係は
不明である。所見: 覆土
240号土坑による削平のため不明である。確認
されるまで及んでいない場所で見出されたもので、確認
は加層土中であつた。240号土坑との重複によって住居
中央部から北東コーナー部が削平を受けている。北東
コーナー部以外の壁は検出されたが、蛇行するような壁
面となつていゝ部分があり、崩落などによつて形状が変
化してしまつた可能性が高い。床面は、As-C含有量が理
想上と比較して少なく、炭化物粒と凝土粒を含む層の検
出面として捉えたが、硬化面や遺物の集中などは見られ
なかつた。貯蔵穴は、南東コーナー部に0.40×0.27m、
深さ0.28mの楕円形の掘り込みとして検出した。掘り方
は、カマ前部分を削り、壁に沿つて深く掘削されて
おり、南壁中央に接するような位置にP1(径0.45m、
深さ0.18m、円形)を検出した。時期: 7世紀前半

- 1 1 階 明土土 加層土小アロウツタを含み、As-C・ニッ房赤輝石、炭化物
質・細粒をわずかに、黄土黒粒をごくわずかに含む。
E-F
1 1 階 明土土 加層土黒・細粒を含み、As-Cを少量、炭化物粒をこ
ろわずかに含む。
2 2 階 明土土 加層土と黄土上で、輝石・炭化物は含まない。



110号住居(第386・387図 P. 84)

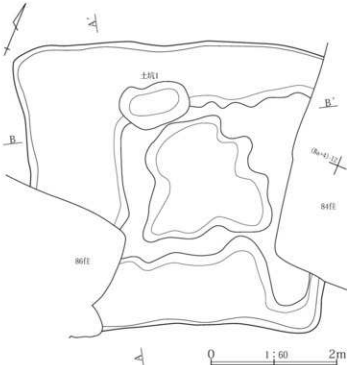
位置: A1-11・12(フ) F 形状: 隅丸長方形 規模: 3.42
m×2.73m 残存深度: 0.35m 主軸方位: E-4°-
N 埋設上: 加層土主体。柱穴: 未検出 カマ下: 東
壁中央に検出され、残存した部分は三角形の平面形を有
し、燃焼部が掘内側に設けられた構造であつたものと考
えられる。燃焼部と燃焼部中央を結んだ方位はE-13°
-Sと、住居西壁で計測した住居主軸方位とは大きく異
なつていゝ。燃焼部底面は床面よりわずかに低く設定さ
れ、構造は5~6m上がった位置から掘削されていゝ。
この構造との段差部分には楕円形ピットが検出されてお
り、この位置に支脚が据えられていゝ可能性がある。袖
部には行袖の上部から露み出していゝが、平面に置か
れたような状況であり、構築材として使用されていゝたも
のとは考えにくい。他に構築材の痕跡も認められないこ
とから、加層土を掘り残した部分を造としてつたものと
考えられる。壁口の下部から薄く黒色灰層が検出されて
おり、使用の継続性が窺われる。遺物: カマ下燃焼部



第387図 110号住居カマド・出土遺物

112号住居(第388・389図 P.L.84)

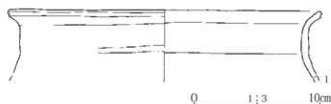
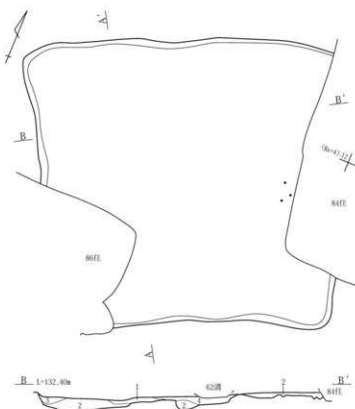
位置:At・Ba-11・12グリッド 形状:隅丸方形 規模:(4.71)m×4.41m 残存深度:0.07m 主軸方位:E-22°-N 埋没土:Ⅶ層土主体 柱穴:未検出 カマド:東壁に設置されたものと考えられるが、84号住居との重複で失われたものと考えられる。遺物:床面付近からは破片がわずかに出土しただけで、掲載した土師器裏(1)は埋没土中から出土したものである。重複:84・86号住居と重複し、検出状況から112号住居→84・86号住居である。所見:復旧痕が深くまで及んでいたため、遺構確認をⅩ層土中まで下げて行ったところ、ほぼ床面と見られる面が露出することになり、かろうじて住居範囲を捉えることができた。掘り方は、壁に沿った部分に顕著に行われており、3面の住居掘り方に類似しているが、掘り方埋没土中に二ッ岳系軽石と見られる白色軽石がわずかに認められたこ



第388図 112号住居掘り方

とから2面として扱った。他に、北壁寄りの位置に土坑1(1.10×0.65m、深さ0.22m、楕円形)を1基検出した。

時期：9世紀代



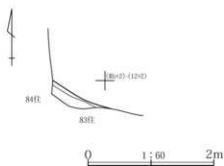
A-A'・B-B'

- 1 にぶい黄褐色土 Ⅷ層土を多量に、As-Cをわずかに含む。
- 2 黄褐色土 Ⅷ層土主体で、As-Cをわずかに含む暗褐色土。
- 3 暗褐色土 As-Cをやや多量に、二ツ岳系軽石・Ⅷ層土ブロックを少量含む。
- 4 灰褐色土 酸化鉄を全体に含むⅧ層土で、As-Cを少量、二ツ岳系軽石をわずかに含む。
- 5 にぶい黄褐色土 Ⅷ層土を多量に、As-C・二ツ岳系軽石をわずかに含む。

第389図 112号住居・出土遺物

113号住居(第390図 P L.84)

位置：Bb-12グリッド 形状：不明 規模：不明 残存深度：0.18m 主軸方位：不明 埋没土：Ⅶ層土 柱穴：未検出 カマド：未検出 遺物：なし 重複：83・84号住居と重複し、検出状況から113号住居→83号住居→84号住居と考えられる。 所見：83・84号住居との重複で大半が失われ、北壁のごく一部が検出されたもので、詳細は不明である。 時期：不明



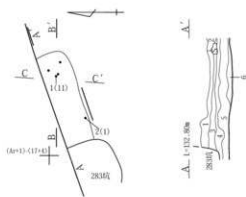
第390図 113号住居

115号住居(第391図 P L.84)

位置：Ar-17グリッド 形状：不明 規模：不明 残存深度：0.13m 主軸方位：不明 埋没土：明るい色調のⅦ層土主体。 柱穴：未検出 カマド：南東コーナー部に設置されていたものと考えられ、右袖部に構築材の礫が1点残存し、燃焼部の右袖部に偏った位置に礫を支脚

として据えていた。燃焼部底面はわずかに焼土化していたが、壁には明確には残存しなかったため、平面形も判然としない。 遺物：カマド燃焼部から1の羽釜が、その西寄りの位置から2の羽釜が出土した。 重複：116号住居と重複し、検出状況から116号住居→115号住居である。また、西側で283号土坑とした中世の墓坑と重複

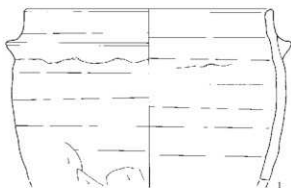
している。 所見：調査区際に検出されたもので、116号住居の埋没土掘削過程で検出されたもので、存在を認識した時点ですでに南壁などは掘削して消失してしまっ



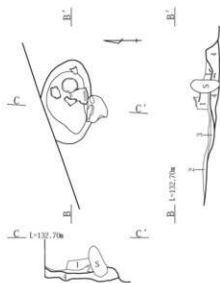
A-A'

- 1 褐色土 As-Cを多量に含むXII層上。
- 2 褐色土 1層に類似する
- 3 褐色土 As-Cを多量に含むXII層土主体で、地山の灰白色土ブロックをわずかに含む。
- 4 暗褐色土 全体にAs-Cを多量に含む砂質土で、炭化物微粒・焼土微粒をわずかに含む。
- 5 褐色土 As-C・二ッ岳系軽石を少量、炭化物、焼土微・細粒をわずかに含むXII層上。
- 6 黄褐色土 XII層上を全体に含み、暗褐色土をブロック状に含む。

0 1; 60 2m



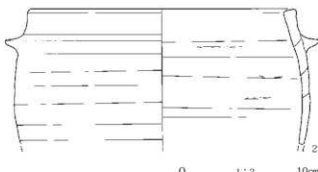
た。したがって調査できたのはほぼカマド部分だけとなった。 時期：10世紀前半



C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 As-Cをわずかに含むXII層上。
- 2 暗褐色土 As-Cをわずかに含むXII層土主体で灰を多量に含む。
- 3 黒色灰層
- 4 暗褐色土 As-Cをわずかに含むXII層上で、わずかに炭化物粒を含む。

0 1; 30 1m



第391図 115号住居・出土遺物

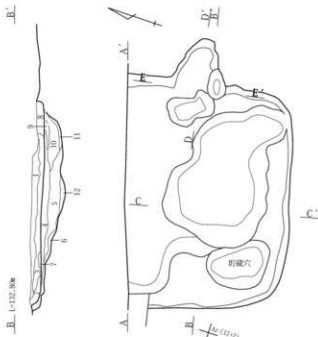
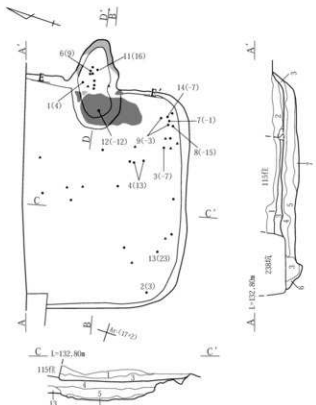
116号住居(第392・393図 P.L.84・85・252)

位置：Ar-17グリッド 形状：隅丸長方形 規模：3.47m×(2.61)m 残存深度：0.18m 主軸方位：E-17°-N 埋没土：明るい色調のVII層土主体で、As-C含有量が多い。柱穴：未検出 カマド：東壁の南寄りに検出した。116号住居のカマドはII区の調査を進めていた時点で存在が確認されていたもので、形状は釣鐘状を呈し主軸方位はE-17°-Nである。壁面上位の焼土化は顕著で、燃焼部中央も比較的厚い焼土層が形成されていた。袖構築材は残存せず、痕跡も認められない。燃焼部

はわずかに掘り窪められており、焚口部には厚い黒色灰層が形成されていた。遺物：カマド燃焼部から土師器環(1)・甕(11・12)、須恵器環(6)が出土した他、南東コーナー部から須恵器環(7)・埴(8)・皿(9)などが、さらに貯蔵穴から土師器台付甕の脚部(13)が出土した。断面が方形を呈する棒状の鉄製品(15)は埋没土中から出土したものである。重複：115号住居と重複し、検出状況から116号住居→115号住居である。また、西寄りで280号土坑とした中世の墓坑と重複していた。所見：XII層土中で遺構確認をしたために壁はわずかの残存となっ

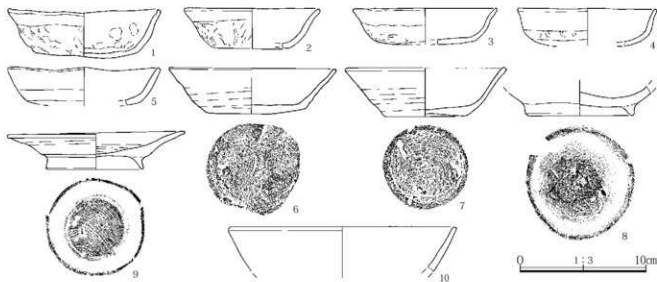
た。床面はカマドからの灰面の広がりから捉えたもので、平坦に検出されているが硬化面は形成されていない。南東コーナー部には良好な状況の遺物出土が認められることから、貯蔵穴の存在を想定したが掘り込みはなく、代わって南西コーナー近くに1.00×0.67m、深さ0.36mの

不整形円形の掘り込みが検出されたため、これを貯蔵穴と判断した。掘り方は全体に深く行われており、Ⅶ層土を主体とし、Ⅻ層土ブロック、炭化物粒、灰などを含む土で埋没していた。 時期：9世紀後半

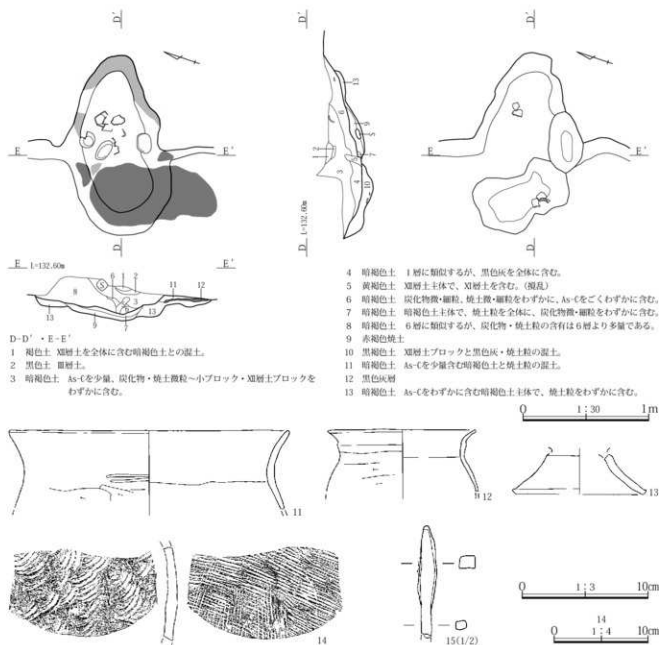


- A-A' ~ C-C'
- 1 褐色土 As-Cを多量に含むⅫ層土。
 - 2 褐色土 1層に類似する。
 - 3 褐色土 As-Cを多量に含むⅫ層土主体で、地山の灰白色土ブロックをわずかに含む。
 - 4 暗褐色土 全体にAs-Cを多量に含む砂質土で、炭化物微粒・焼土微粒をわずかに含む。

- 5 褐色土 As-C・二ッ岳系軽石を少量、炭化物、焼土・細粒をわずかに含むⅫ層土。
- 6 黄褐色土 Ⅻ層土を全体に、暗褐色土をブロック状に含む。
- 7 褐色土 As-Cを多量に含むⅫ層土主体で、Ⅻ層土粒を多量に含む。
- 8 褐色土 As-Cを多量に含むⅫ層土で、黒色灰を含む。
- 9 暗褐色土 黒色灰を樹皮に、As-C・焼土微粒をわずかに含む。
- 10 褐色土 As-C・炭化物、焼土・細粒をわずかに含むⅫ層土。
- 11 褐色土 As-Cを少量含むⅫ層土で、Ⅻ層土をブロック状に含む。
- 12 暗褐色土 As-C・二ッ岳系軽石をごくわずかに含むⅫ層土で、Ⅻ層土ブロックを含む。
- 13 褐色土 As-Cをわずかに含むⅫ層土で、炭化物の微粒子をごくわずかに含む。



第392図 116号住居・出土遺物(1)



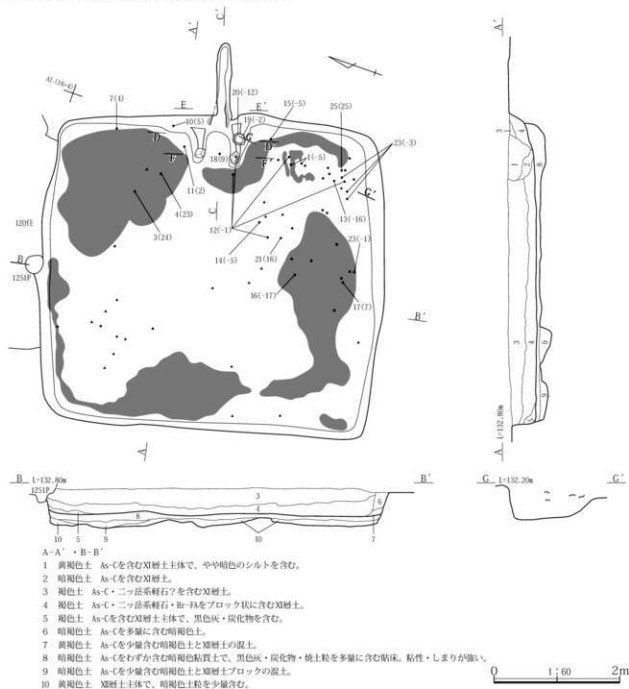
第393図 116号住居カマド・出土遺物(2)

117号住居(第394～398図 P L.85・86・252・253)
位置: Ak-AI-15・16グリッド **形状**: 隅丸五角形 **規模**: 4.97m×5.44m **残存深度**: 0.46m **主軸方位**: E-15°-N **埋没土**: VII層土類似で色調の明るい土層で、壁寄りの最下層上面に炭化物と焼土の層が見られる。また、下層にIIr-FAと思われるブロックを含む。 **柱穴**: 未検出 **カマド**: 東壁中央に検出され、主軸方位はE-15°-Nで、西壁で計測した住居の主軸方位と一致している。屋内に燃焼部が設けられ、7cmほどの段差をもって煙道が1.15mほど壁外に傾斜して延びている。左右袖部共に先端部には礎を構築材として立てており、さらに

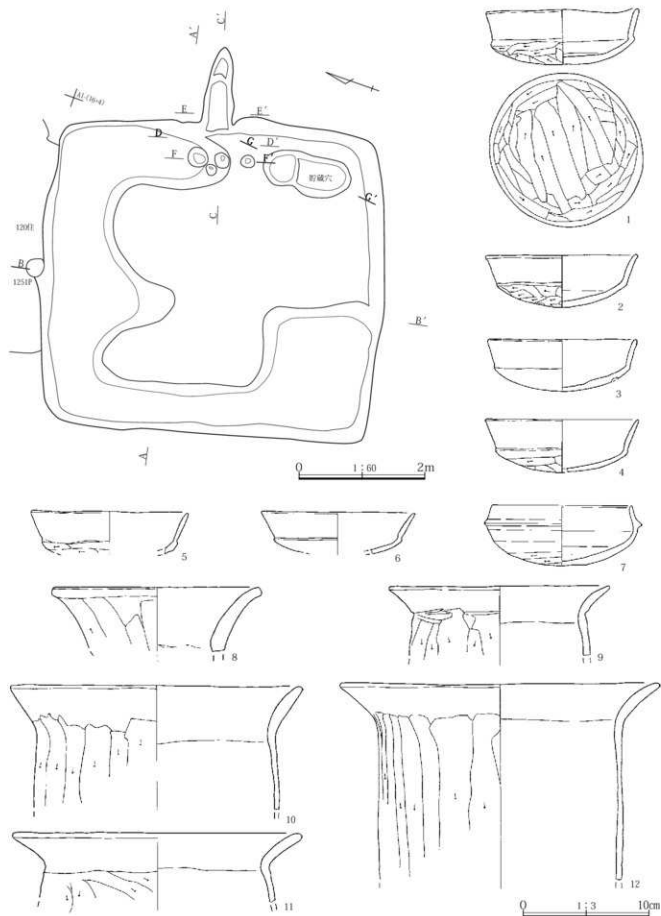
右袖部基部には19・20の土師器甕を逆さに重ねて立てており、これらを刈藪土相当の土を用いてカマド本体を構築していたものと考えられる。燃焼部に焼土の形成は顕著ではなかったが、煙道の入口付近は厚く焼土化していた。また、焚口部から右袖部の南側にかけて灰面が検出された。 **遺物**: カマド燃焼部から土師器甕(18)が、カマド周辺から土師器甕(10・11)などが出土した他、土師器坏(1)・壺(23)などは南東コーナー部の貯蔵穴付近から出土した。また、24の鉄製品は埋没土中から出土したものである。 **重複**: 北側で120号住居と重複し、検出状況から117号住居→120号住居である。 **所見**: 南壁中

尖がわずかに南に張り出し、五角形状を呈する特異な平面形を呈する。床面は埋没土よりも暗い色調で、焼土、灰、炭化物を多く含む土層で、しまりが強かったために比較的容易に捉えることができた。床面精査では柱穴は検出されず、南東コーナー部のカマド寄りの位置に径0.60m、深さ0.55mの不整形円形を呈する貯蔵穴を検出した。この貯蔵穴の南側には1.10×0.65m、深さ0.30mほどの楕円形を呈する掘り込みがあることが掘り方調査で判明したが、重複であるのか本来の貯蔵穴であるのか判断できなかった。埋没土調査時点で検出された壁寄りの炭化物と

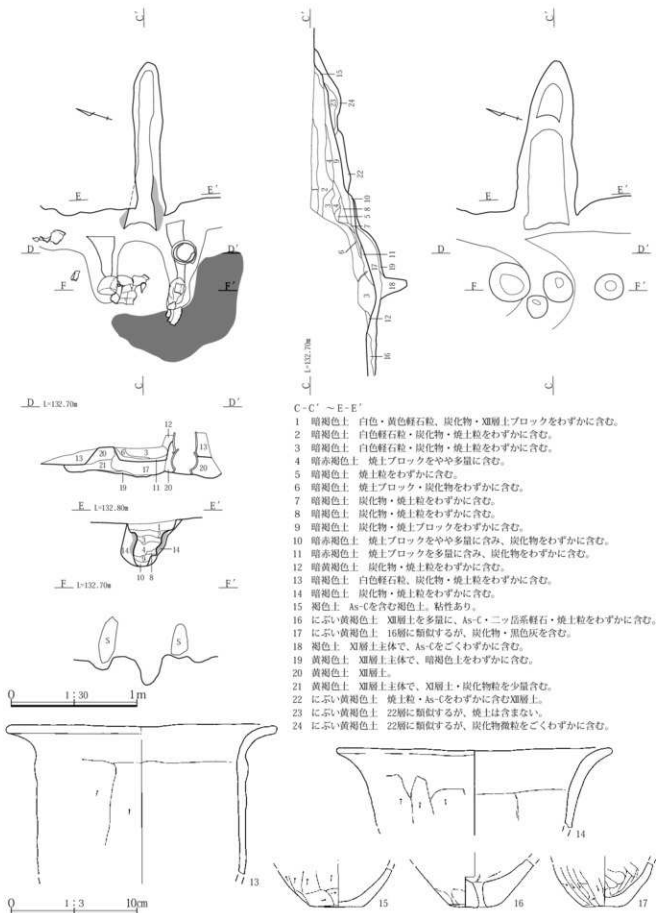
焼土の広がりは、壁側から屋内に向かってわずかに傾斜していたことから、埋没過程における炭化物と焼土が廃棄された可能性もある。しかし、検出された部分において炭化物と焼土は混じることなく上下の関係を保っていることから、炭化物下に焼土が形成されたと考えたほうが自然な解釈である。炭化材の残存こそなかったが、埋没途中段階で上屋が焼失したのと考えられる。掘り方は壁寄りの部分がやや深く掘削される傾向がある。時期：7世紀前半



第394図 117号住居



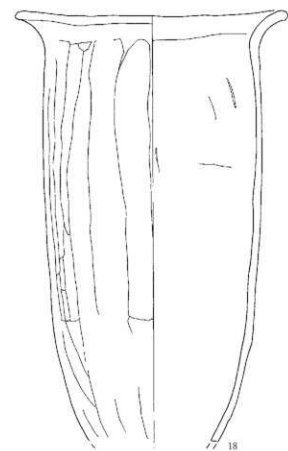
第395図 117号住居掘り方・出土遺物(1)



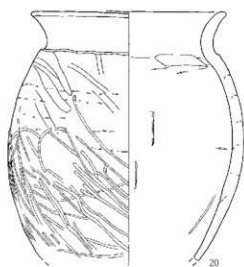
C-C' ~ E-E'

- 1 暗褐色土 白色・黄色軽石粒、炭化物・矽層上ブロックをわずかに含む。
- 2 暗褐色土 白色軽石粒・炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 白色軽石粒・炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 4 暗赤褐色土 焼上ブロックをやや多量に含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む。
- 6 暗褐色土 焼上ブロック・炭化物をわずかに含む。
- 7 暗褐色土 炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 8 暗褐色土 炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 9 暗褐色土 炭化物・焼上ブロックをわずかに含む。
- 10 暗赤褐色土 焼上ブロックをやや多量に含む、炭化物をわずかに含む。
- 11 暗赤褐色土 焼上ブロックを多量に含む、炭化物をわずかに含む。
- 12 暗黄褐色土 炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 13 暗褐色土 白色軽石粒、炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 14 暗褐色土 炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 15 褐色土 As-Cを含む褐色土。粘性あり。
- 16 にぶい黄褐色土 矽層上を多量に、As-C・二ツ岳系軽石・焼土粒をわずかに含む。
- 17 にぶい黄褐色土 16層に類似するが、炭化物・黒色灰を含む。
- 18 褐色土 矽層上主体で、As-Cをごくわずかに含む。
- 19 黄褐色土 矽層上主体で、暗褐色土をわずかに含む。
- 20 黄褐色土 矽層上。
- 21 黄褐色土 矽層上主体で、矽層土・炭化物粒を少量含む。
- 22 にぶい黄褐色土 焼土粒・As-Cをわずかに含む矽層上。
- 23 にぶい黄褐色土 22層に類似するが、焼土は含まない。
- 24 にぶい黄褐色土 22層に類似するが、炭化物微粒をごくわずかに含む。

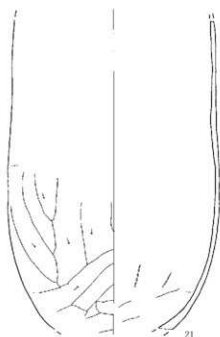
第396図 117号住居カマド・出土遺物(2)



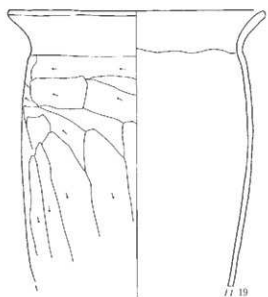
18



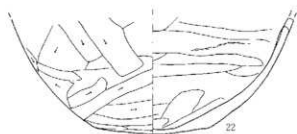
20



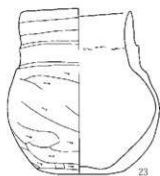
21



19



22



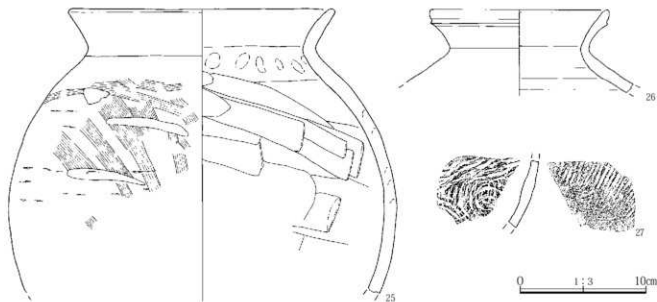
23



24(1/2)

0 1:3 10cm

第397圖 117号住居出土遺物(3)

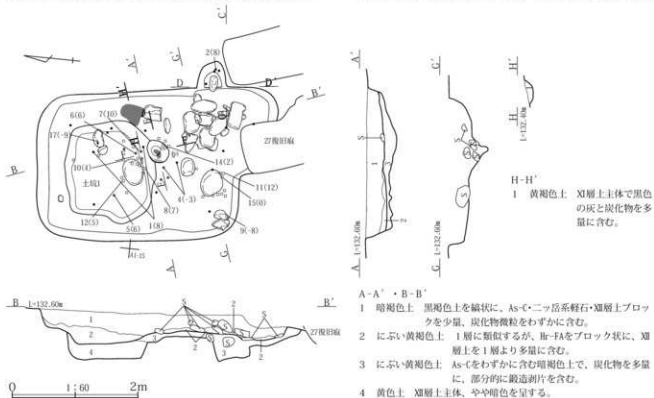


第398図 117号住居出土遺物(4)

118号住居(第399～401図 P.L.86・87・253)

位置: A1-14・15グリッド 形状: 張り出しを持つ隅丸長方形 規模: 2.40m×3.28～3.82m 残存深度: 0.28m 主軸方位: E-9°-N 埋没土: VII層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに偏った位置に検出した。奥行きが極めて狭いかまどで、主軸方位はE-0°-Nである。燃烧部中央に礫を1点検出したが、据えられた状況にはなく礫下に間層をはさんで焼土層が形

成されていることから、構築材がそのまま残されたものではない。カマドは煮炊き具を据えることができなかったのではないかと思えるほどに小規模であり、通常の住居と同様の使用がされていたものか疑問である。遺物: 床面に扁平な礫が集中し、間から鉄滓(8～16)や輪の羽口(4～7)、鍛造剥片が出土した他、作業坑と思われる土坑上面から砥石(17)が出土した。須置器院(2)はカマド燃烧部から出土したもので、当住居の時期を判断す

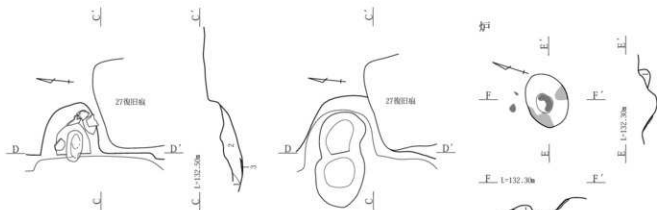
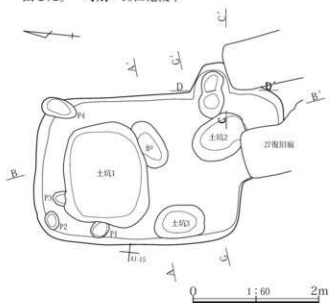


第399図 118号住居

- A-A'・B-B'
- 1 暗褐色土 黒褐色土を編状に、As-Cニッ岳系軽石・畑層土ブロックを少量、炭化物微粒をわずかに含む。
 - 2 にふい黄褐色土 1層に類似するが、H-FAをブロック状に、畑層土を1層より多量に含む。
 - 3 にふい黄褐色土 As-Cをわずかに含む暗褐色土で、炭化物を多量に、部分的に鍛造剥片を含む。
 - 4 黄色土 畑層土主体、やや暗色を呈する。
- H-H'
- 1 黄褐色土 XI層土主体で黒色の灰と炭化物を多量に含む。

ることができる遺物である。重複：27号復旧痕によって南壁の一部が削平されている以外重複はない。所見：南壁の東側1/2だけが南側に張り出す特異な平面形を有している。床面中央から0.40×0.30m、深さ0.13mほどの不整形円形を呈する缸を検出したが、Ⅻ層土がやや焼土化して橙色に変色した程度で、中央部に還元した部分は検出されなかった。缸の北側には、1.43×1.64m、深さ0.45mの不整形の作業坑(土坑1)が検出され、出土遺物の中に鉄滓や、大型の砥石などがあることから鍛冶遺構とみて良いであろう。南壁寄りの礎群の中には、小振りではあるが台石と思われる被熱した花崗岩が出土しており、住居廃棄段階で片付けられているものと考えられる。カマド正面の位置からは、礎の入った土坑2(0.91×0.65m、深さ0.32m、楕円形)を、西壁に接して土坑3(0.79×0.52m、深さ0.05m、楕円形)を検出した他、

4カ所の小規模なピット状の掘り込み(P1～P4)を検出した。時期：10世紀後半

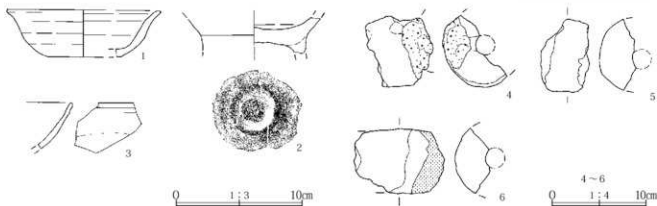


C-C'・D-D'

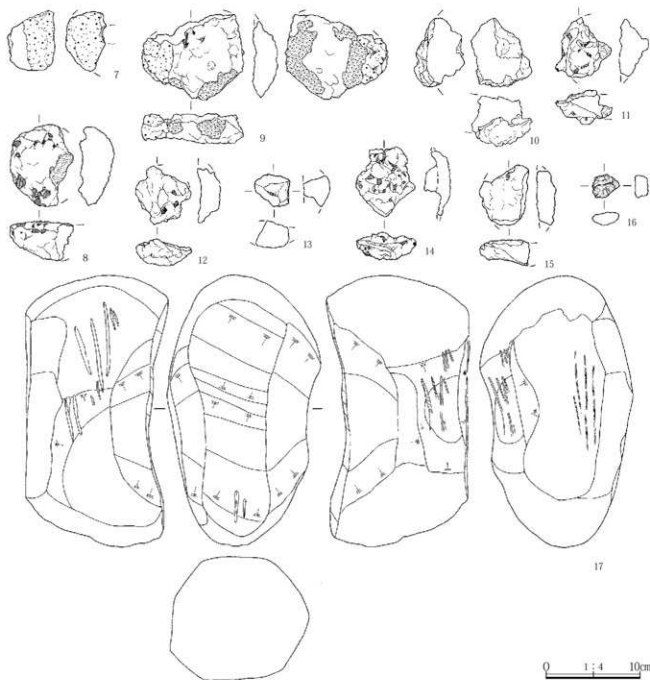
- 1 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、Ⅻ層土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土とⅫ層土ブロックの混上。
- 3 黒色灰層
- 4 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、Ⅻ層土ブロックを含む。
- 5 暗褐色土 As-C少量を含む暗褐色土ブロックと焼土粒・ブロックの混上。

E-E'・F-F'

- 1 暗褐色土 Ⅻ層土主体でわずかに灰を含む。



第400図 118号住居掘り方・カマド・缸・出土遺物(1)

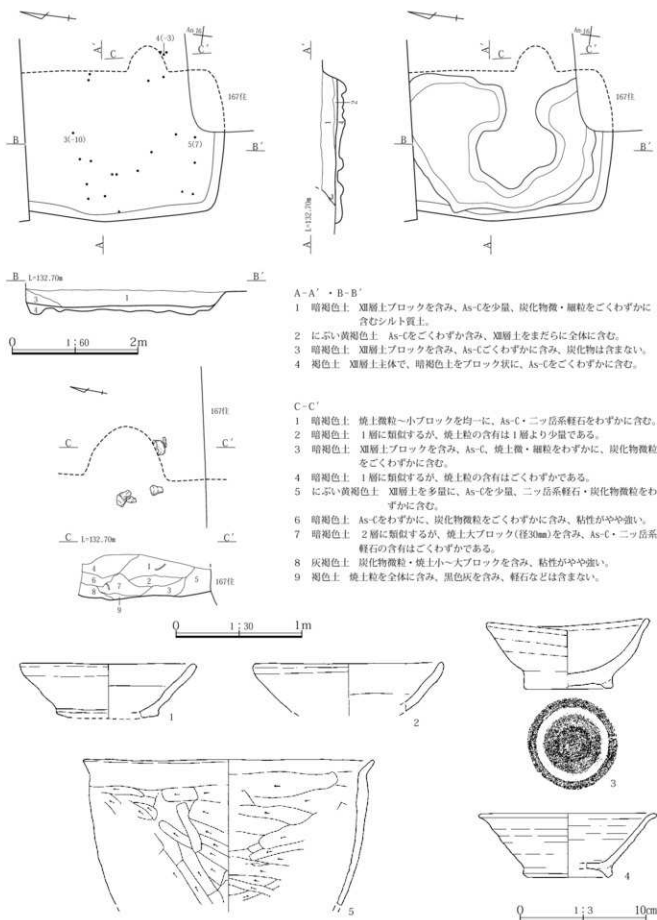


第401図 118号住居出土遺物(2)

119号住居(第402図 P.L.87・88・253)

位置:Am-15・16グリッド 形状:隅丸長方形 規模:
(2.38)m×(3.17)m 残存深度:0.27m 主軸方位:E
-7°-N 埋没土:Ⅶ層土主体であるが、As-Cの含有
量が少ない。柱穴:未検出 カマド:東壁南寄りと考え
られるが判然としない。燃烧部と考えた部分に焼土を
検出したが、壁に焼土はまったくなく、構築材は検出さ
れず、またその痕跡もないため平面形も捉えられなかつ
た。遺物:4世紀代や7世紀代の遺物出土が目立って
いたが、カマドと考えられる位置から須恵器碗(4)が、

中央北寄りの位置から碗(3)が出土したことから時期を
判断した。重複:167号住居と重複し、遺物の時期か
ら167号住居→119号住居である。所見:Ⅸ層土中で二
ツ岳系軽石の混入土の範囲として遺構の存在を認識した
が、平面形が捉えにくく、カマドも平面的には確認がで
きなかったため東壁は掘り過ぎてしまい図化することは
できなかった。床面はⅪ層土中と判断したが平坦な面と
しては捉えられず、細かな凹凸が認められた。時期:
10世紀後半



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 Ⅹ層上ブロックを含み、As-Cを少量、炭化物微・細粒をごくわずかに含むシルト質土。
- 2 にぶい黄褐色土 As-Cをごくわずかに含む、Ⅹ層上をまだらに全体に含む。
- 3 暗褐色土 Ⅹ層上ブロックを含み、As-Cごくわずかに含む、炭化物は含まない。
- 4 褐色土 Ⅹ層上主体で、暗褐色土をブロック状に、As-Cをごくわずかに含む。

C-C'

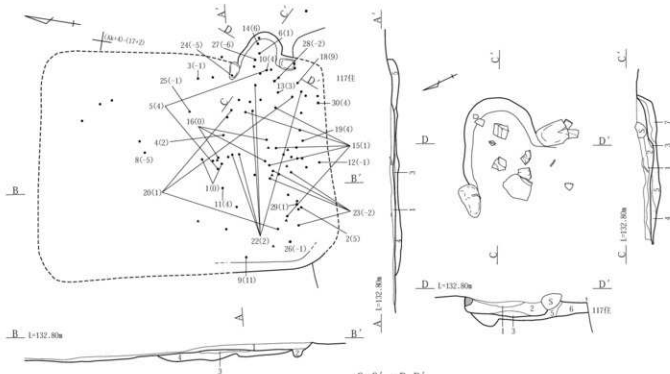
- 1 暗褐色土 焼土微粒～小ブロックを均一に、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、焼土粒の含有は1層より少量である。
- 3 暗褐色土 Ⅹ層上ブロックを含み、As-C、焼土微・細粒をわずかに、炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 1層に類似するが、焼土粒の含有はごくわずかである。
- 5 にぶい黄褐色土 Ⅹ層上を多量に、As-Cを少量、ニッ岳系軽石・炭化物微粒をわずかに含む。
- 6 暗褐色土 As-Cをわずかに、炭化物微粒をごくわずかに含む、粘性がやや強い。
- 7 暗褐色土 2層に類似するが、焼土大ブロック(径30mm)を含み、As-C・ニッ岳系軽石の含有はごくわずかである。
- 8 灰褐色土 炭化物微粒・焼土小～大ブロックを含み、粘性がやや強い。
- 9 褐色土 焼土粒を全体に含む、黒色灰を含み、軽石などは含まない。

第402図 119号住居・出土遺物

120号住居(第403~406図 P.L.88・89・253・254)

位置: Ak-16・17グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0.06m 主軸方位: 不明 埋没土: VII層土相当の土と考えられるが、二ツ岳系軽石は確認できなかった。柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに偏った位置と考えられるが、壁が検出できなかったために正確な位置関係は不明である。左右袖部には礎を構築材として使用しており、燃焼部は壁外に位置するものと考えられ、想定される主軸方位はE-0°-Nである。燃焼部に焼土はほとんど確認されず、焚き口から屋内側にかけてわずかに灰面が検出された。遺物: 南寄りの床面と見られる位置に遺物が集中しているが、北側部分が北に傾斜するような削平を受けているため、本来南側と同様に遺物の密集があったものが失われた可能性が高い。須恵器環(1)・埴(4)などは中央部、埴(5)はカマド前面と中央部の破片が接合したものである。須恵器瓶(15)・甕(22)は破片で散在したものが接合し、灰軸陶器埴(12)は南壁

際と見られる位置で、瓶(16)は中央部から出土したものである。他に鉄製品の出土がやや多く、南壁寄りの位置から東西に分かれて鎌の断片が2点(29・30)出土しているが同一個体の可能性がある。また、南西コーナー部付近からは工具状鉄製品(26)が、カマド燃焼部から断面方形の棒状鉄を曲げた製品(27)、及び不明の鉄製品(28)がそれぞれ出土した。重複: 117号住居と重複し、遺物の比較から117号住居→120号住居である。所見: IX層土中での遺構確認であったが、住居掘り込みが浅かったものと思われ、確認時点ですでに床面近くに達していたものと考えられる。したがって西壁のごく一部を除いて住居平面形を捉えることはできず、遺物の出土範囲から住居の範囲を推定した。柱穴、貯蔵穴は検出されず、掘り方の調査で、中央西寄りの位置に2.05×1.37m、深さ0.13mの不整楕円形の掘り込みを検出した。時期: 10世紀後半



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土。
- 2 暗褐色土 As-Cをやや多量に含む暗褐色土で、1層よりしまりが強い。
- 3 黒褐色土 黒色灰を多量に含む粘質土。
- 4 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色粘質土。
- 5 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色粘質土主体で、炭化物を多量に含む。

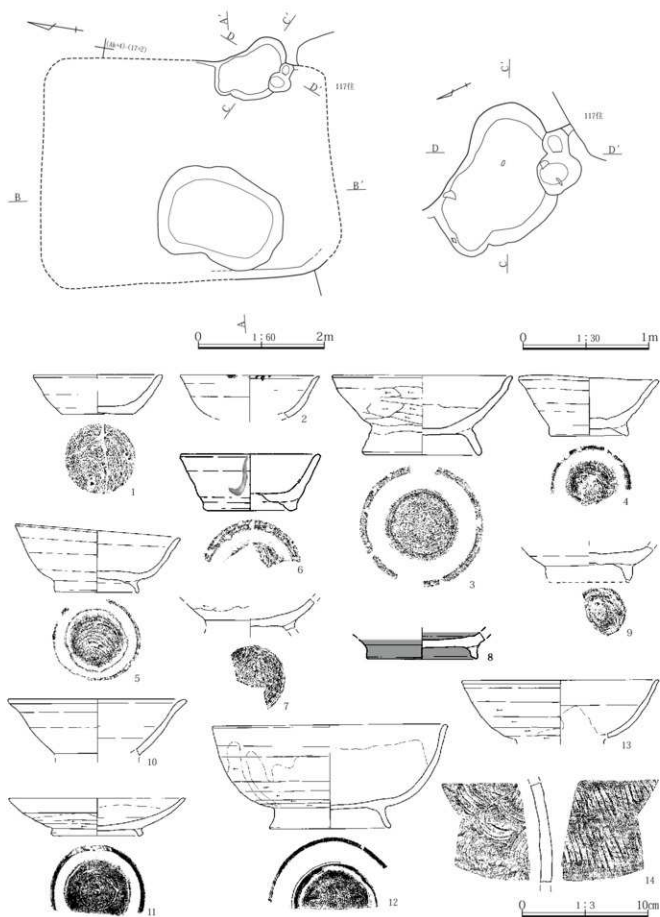
0 1:60 2m

C-C'・D-D'

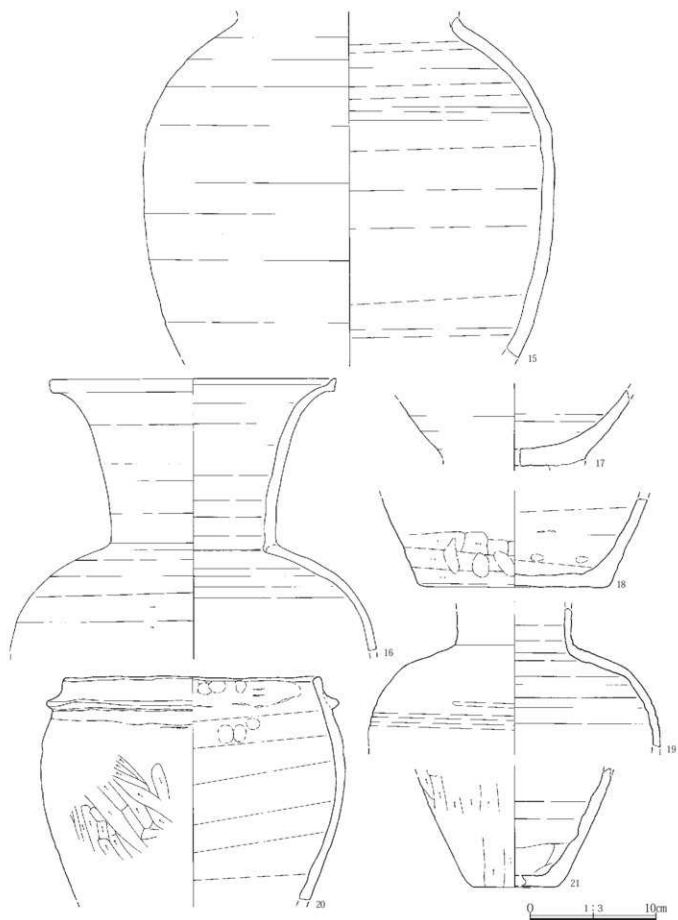
- 1 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土。
- 2 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、黒色灰・焼土粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを多量に含む。
- 4 黒褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、黒色灰を多量に含む。
- 5 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、焼土大粒を含む。
- 6 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土とⅧ層土ブロックの混土。
- 7 褐色土 As-Cを含む。

0 1:30 1m

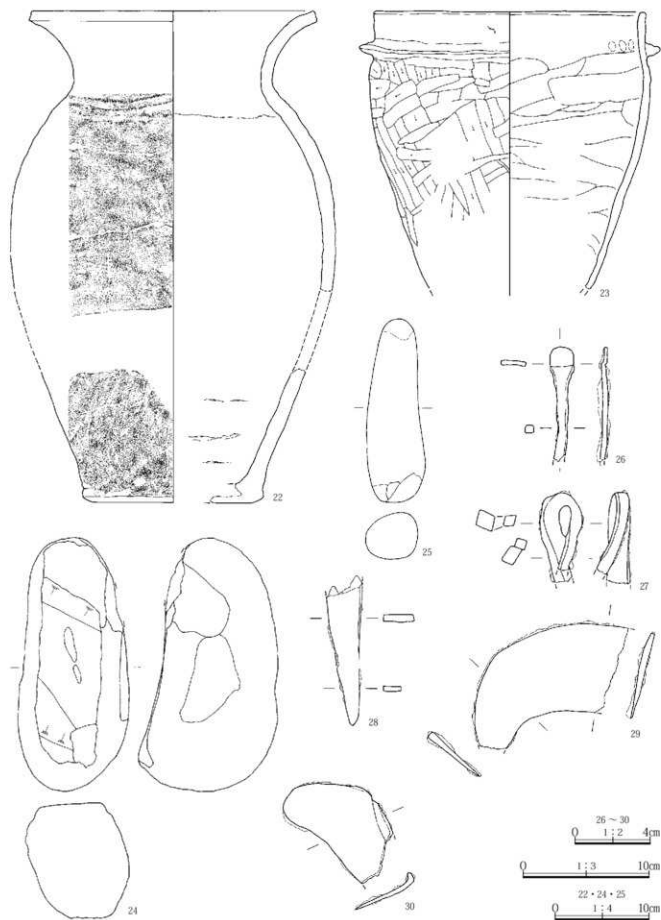
第403図 120号住居



第404図 120号住居掘り方・カマド・出土遺物(1)



第405図 120号住居出土遺物(2)

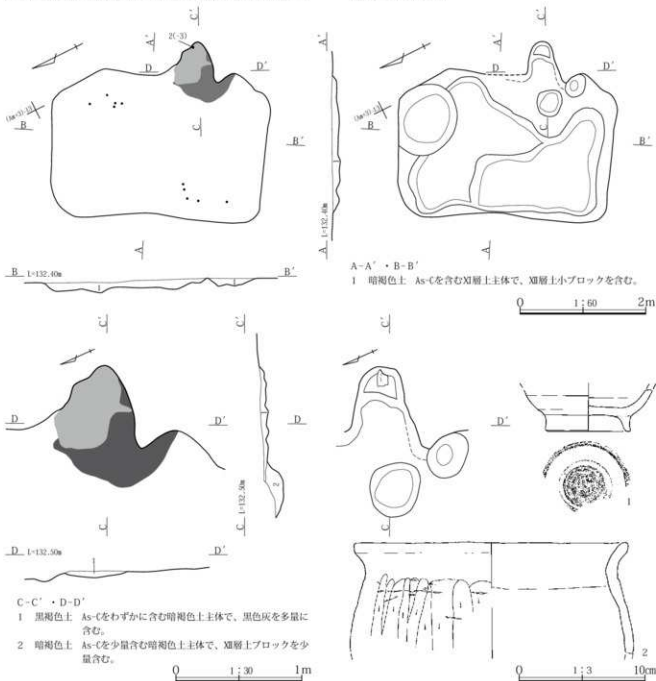


第406図 120号住居出土遺物(3)

121号住居(第407図 P.L.89)

位置: Am-12・13グリッド 形状: 隅丸長方形 規模:
 (2.19)m×(3.35)m 残存深度: 0 m 主軸方位: 不明
 埋没土: VII層土相当 柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南
 寄りと考えられる位置に、焼土と灰の範囲として検出し
 た。上部構造はまったく残存せず、掘り方だけを調査し
 た。焚口部前面に径0.37m、深さ0.12mほどの円形のピッ
 ト状の掘り込みを検出した以外に、カマド構築に関わる
 ような掘り込みは検出されなかった。遺物: 掘り方
 わずかに破片と棒状の礫が出土した。掲載した土釜(2)

と須恵器境(1)は埋没土中の出土である。重複: なし
 所見: IX層土中で確認をしたが、住居の掘り込みが浅かっ
 たものか確認時点で壁はまったく残存しなかったため、
 掘り方の調査だけで終了した。埋没土の最下層がごくわ
 ずかに残存したものと考えられ、かろうじて住居の範囲
 は捉えることができた。掘り方はほぼ全体に認められ、
 特に北東コーナー部に1.17×1.00m、深さ0.30mの楕円
 形を呈する土坑状の掘り込みを検出したが、貯蔵穴と見
 るには住居規模に比較して大き過ぎるものと思われる。
 時期: 10世紀後半

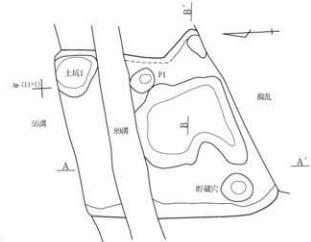
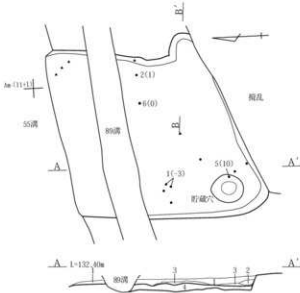


第407図 121号住居・出土遺物

125号住居(第408・409図 P.L.89・90・254)

位置:A1・Am-10・11グリッド 形状:隅丸長方形 規模:2.55m×(3.07)m 残存深度:0.17m 主軸方位:E-1°-S 埋没土:Ⅷ層土主体で、しまりが弱い。柱穴:未検出 カマド:東壁の南寄りに位置すると思われる。南側が攪乱されて調査できなかった上に焼土の形成、灰層の残存などがなく、さらに構築材なども残存していないことから、詳細については不明である。遺物:カマド左脇で検出した径0.35m、深さ0.26mのピット状の掘り込み底面近くから灰軸陶器埴(2)が出土し、西寄りの床面付近から須恵器環(1)が出土した。また、ピットの西側から鎌の破片が3点出土したが、形状から同一個体(6)と考えられる。重複:近い時期の遺構との重複はない。所見:カマドから南西コーナー近くまでは攪乱を受けているために調査できず、北側は2面55号溝に

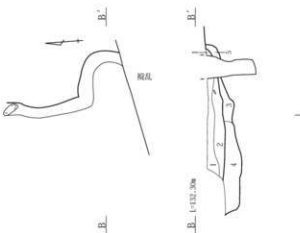
よって削平を受け、さらに中央部分は1面89号溝によって東西方向に掘削されていた。床面は、埋没土と異質なⅧ層土ブロックが斑状に検出された面として捉えたが、平坦な面とはなっていない。調査時点では、前述のカマド左脇で検出したピット状の掘り込みP1(径0.35m、深さ0.26m、円形)を貯蔵穴と考えていたが、検出位置や規模の点からは南西コーナー部に検出した径0.45m、深さ0.39mの円形の掘り込みが貯蔵穴であった可能性が高い。また、北東コーナー部と考えられる位置に径0.65m、深さ0.29mほどの不整形円形を呈する土坑1が検出され、底面近くから礫が出土しているが、掘り方段階で掘削されたものか、床面から掘削されたものであるのか明らかにすることはできなかった。時期:10世紀後半



A-A'

- 1 暗褐色土: As-C・炭化物微粒をわずかに含む暗褐色土で、Ⅷ層土ブロックを含む。全体に砂質。
- 2 暗褐色土: 炭化物・灰白色粘質土ブロックを含む暗褐色土。
- 3 暗褐色土: 1層に類似するが、Ⅷ層土ブロックを斑状に含み、軽石・炭化物の含有は1層より少量である。
- 4 暗褐色土: As-Cをわずかに含むⅧ層土主体で、Ⅷ層土ブロックを多量に含む。

0 1:60 2m

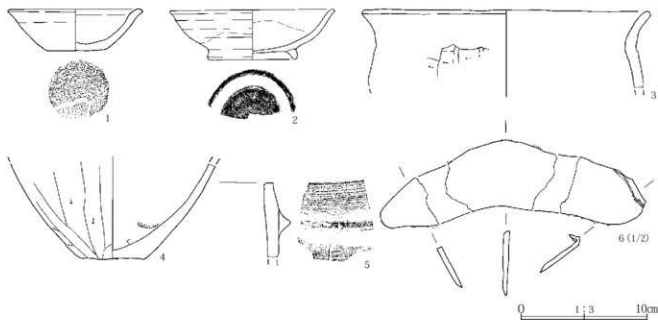


B-B'

- 1 暗褐色土: As-Cを少量、炭化物微粒をわずかに含む暗褐色土。
- 2 暗褐色土: 1層に類似するが、黒色灰・炭化物・微粒を多量に、焼土粒をわずかに含む。
- 3 にぶい黄褐色土: Ⅷ層土を多量に、炭化物微粒・焼土粒を含む。
- 4 にぶい黄褐色土: Ⅷ層土を斑状に、As-C・黒色灰・炭化物をごくわずかに含む。
- 5 灰褐色土: Ⅷ層土ブロックを斑状に含み、軽石などは含まない。

0 1:30 1m

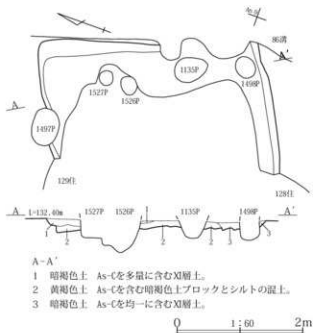
第408図 125号住居



第409図 125号住居出土遺物

126号住居(第410図 P.L.90)

位置: Am-8・9グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: (2.15)m×3.51m 残存深度: 0.10m 主軸方位: E-29°-N 埋没土: As-C含有量の多いⅦ層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 埋没土中に小破片が出土しただけで、床面近くからの遺物出土は皆無であった。重複: 128・129号住居と重複し、検出状況などから129号住居→126号住居→128号住居と考えられる。所見: 当初は126号住居の存在が認識できず、128・129号住居を先行調査したために、南北壁と東壁の一部が検出されただけで、床面は壁際のごく狭い範囲を捉えることができた。カマドは東壁南寄りに設置されていた可能性があるが、86号溝との重複により失われたものと考えられる。時期: 不明



第410図 126号住居

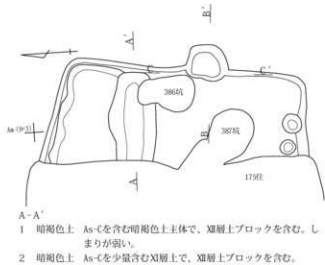
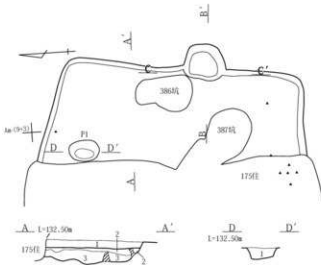
127号住居(第411図 P.L.90)

位置: A1・Am-8・9グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: (1.60)m×4.13m 残存深度: 0.12m 主軸方位: E-8°-S 埋没土: XII層土ブロックを含むⅦ層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央の南寄りに検出され、推定される主軸方位は、E-5°-Sである。燃焼部底面だけが残存したと思われるが、焼土や灰層は形成されておらず、袖等の構築材の痕跡も検出されなかった。遺物: 南東コーナー部近くの床面に扁平な礫

が1点出土した他、石製椎錘(7)と見られるものは埋没土中から出土したものである。また、須恵器環(1)などはすべて埋没土中の出土である。重複: 西側で175号住居と重複し、検出の状況などから175号住居→127号住居と考えられる。所見: 当初は175号住居が認識できず、127号住居と175号住居を一体の遺構として調査を開始した。埋没土を掘り下げていく途中で中央付近にカマドとこれに続く壁の線が検出されたため、新たに検出された住居を175号住居として分離したが、この時点で西

側は127号住居の床面と考えられる面よりも掘り下げてしまっており、西側の床面については記録することができなかった。残存した東側床面は、扁平な礫の下面として捉えた。掘り方は北側に行われており、北壁に接

するように0.48×0.34m、深さ0.28mの楕円形を呈するP1を検出した。カマドの状況、遺物の出土状況など生活痕跡の希薄な印象を受けた。 時期：8世紀後半



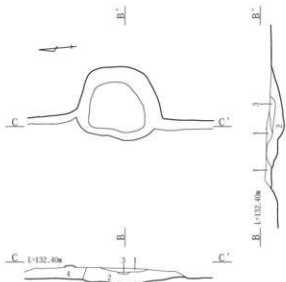
A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、燧層土ブロックを含む。しまりが強い。
- 2 暗褐色土 As-Cを少量含むXI層土で、燧層土ブロックを含む。
- 3 にぶい黄褐色土 燧層土粒を多量に、As-C粒をわずかに含む。

D-D'

- 1 暗褐色土 As-Cごくわずかに含むXI層土で、燧層土を斑状に含む。

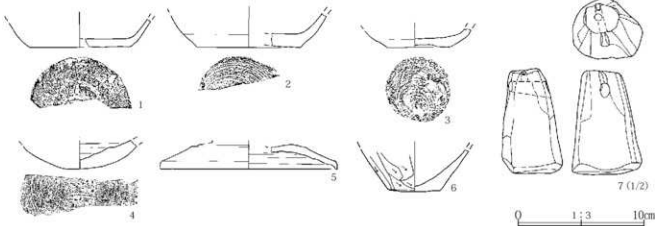
0 1:60 2m



B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土で、黒色灰を多量に含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土。
- 3 赤褐色焼土
- 4 黒褐色土 As-Bを多量に含む黒褐色土で、燧層土粒を含む。しまりなし。

0 1:30 1m



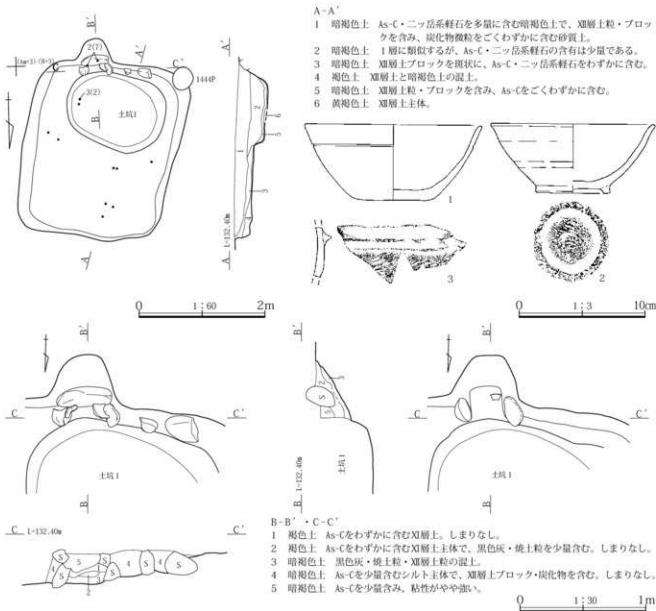
第411図 127号住居・出土遺物

128号住居(第412図 P.L.90・91・254)

位置:Am-8・9グリッド 形状:隅丸長方形 規模:2.82m×2.43m 残存深度:0.28m 主軸方位:S-12°-W 埋没土:ⅩⅧ層土粒とブロックを含むⅦⅧ層土。柱穴:未検出 カマド:南壁の東寄りに検出した。壁との接続部分に礫を構築材として1対立て、大形礫を渡して天井を構築していた。壁外の掘り込みはわずかで燃焼空間が確保されていないと考えられることから、カマド本体が屋内に張り出す構造で、検出した礫はカマド奥の天井石であった可能性がある。残存した部分において計測した主軸方位はS-0°-Wであり、東壁から計測した住居主軸方位とズレがある。遺物:カマド焚口部から須恵器碗(2)が出土した他は、床面から若干深い位置から

小片が出土した。重複:126号住居と重複し、検出及び残存状況から126号住居→128号住居と考えられる。

所見:南向きのカマドを持つ稀有な例である。床面はⅩⅧ層土の面として捉えており、掘り方は認められない。カマドの前部からは1.61×1.18m、深さ0.15mの楕円形を呈する土坑1が検出された。床面の調査段階まで平面形が明確には捉えられなかったことから、当初は住居に伴う土坑と考えていたが、カマドの燃焼部が土坑によって壊されている可能性があることや、埋没土の断面観察から住居が完全に埋まりきらない時点で土坑1が掘削され、その後住居と一連の埋没経過をたどった可能性が高いことなどが判明したため、土坑1は住居に伴うものではないと結論づけた。時期:10世紀前半



第412図 128号住居・出土遺物

130号住居(第413～416図 P.L.91・92・254・255)

位置: An・Ao-10・11グリッド 形状: 隅丸L字形?

規模: 2.94～4.12m×2.55～4.75m 残存深度: 0.33

m 主軸方位: E-30°-N 埋没土: VII層土主体 柱

穴: 未検出 カマド: 東壁の北寄りに検出した。平面形

は三角形を呈し、残存部分で想定した主軸方位はE-27

°-Nで、東壁で計測した住居の主軸方位とほぼ一致し

ている。壁との接続部分に礎を構築材として立てている

が、右袖部構築材は、廃棄に伴って壊されたものか、燃

焼部に倒れていた。燃焼部奥の左側に偏った位置に、小

振りの棒状礎を立てて支脚としており、この支脚周りか

ら左袖部にかけては焼土の形成が顕著であった。遺

物: カマド前から南側張り出し部にかけて、床面に接

するように須恵器製の破片が集中しており、接合をした

ところ20～23の4個体の裏であることが判明した。また、

土師器環(1)などは須恵器製破片に混じって床面付

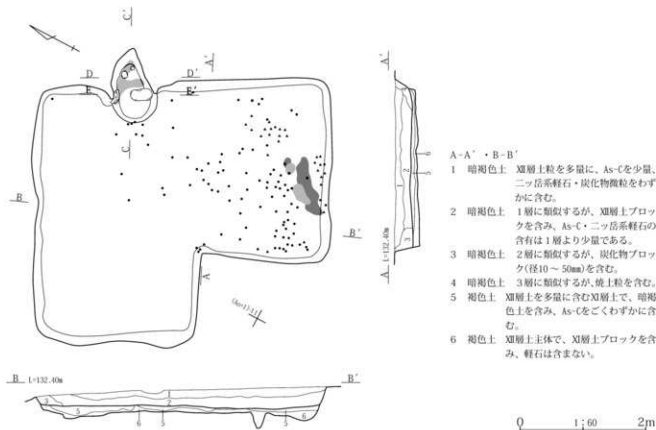
近から出土したものである。さらに南壁中央部と南東

コーナー部近くの2カ所にいわゆる「こもあみ石」と呼ば

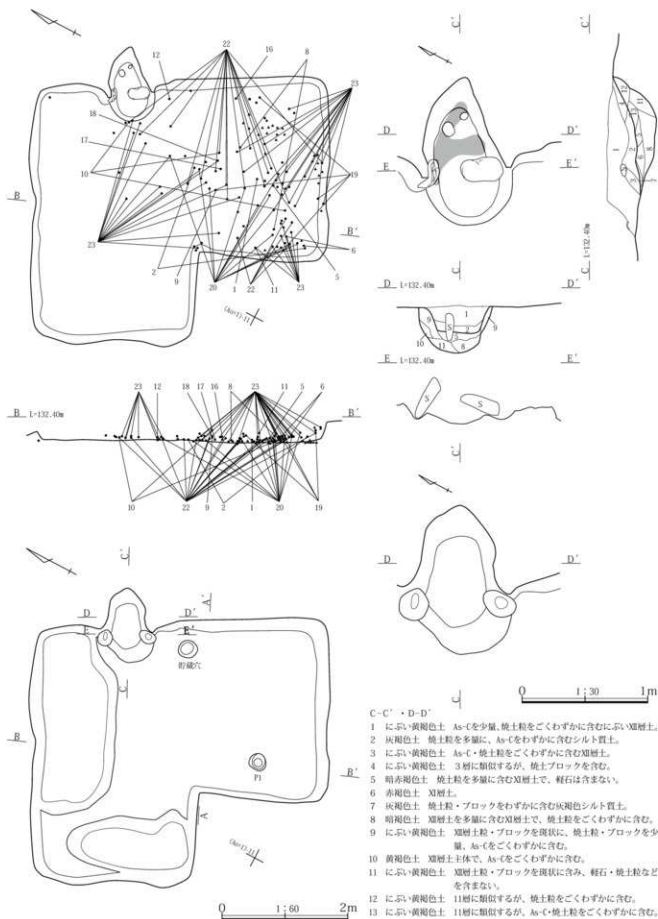
れている棒状礎が集中していた。重複: 134号住居と

重複し、検出状況から134号住居→130号住居である。

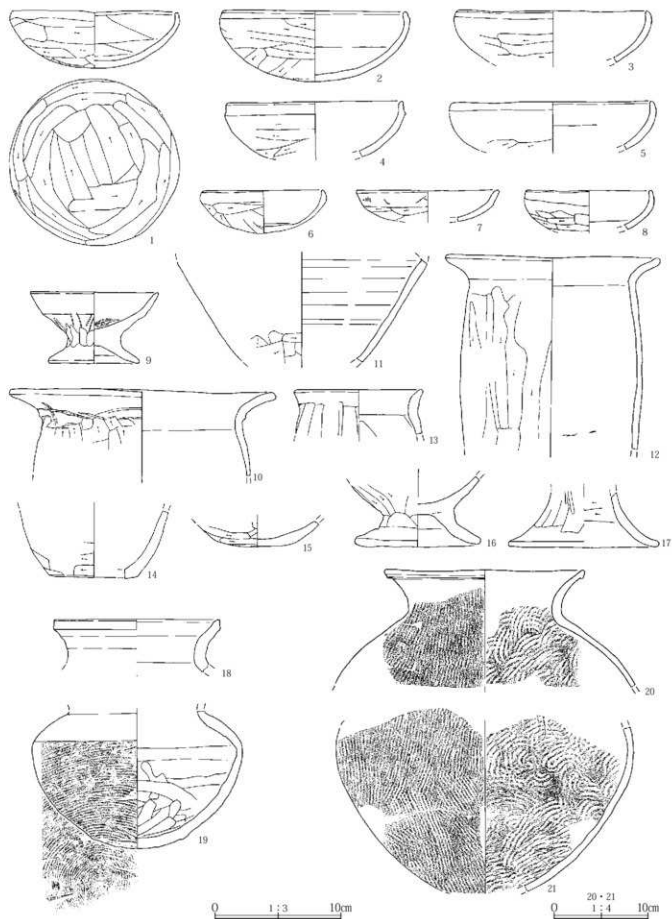
所見: IX層土中で遺構の確認を行い、当初は隅丸方形の住居として調査を開始したが、南西コーナー部として捉えていた場所については調査開始直後にIX層土が検出されたために、平面形の見直しを行った結果、南側に張り出しを有する「L」字形の平面形となる住居であることが判明した。カマドの南側で検出された径0.28m、深さ0.19mの円形を呈するピット状の掘り込みを貯蔵穴と仮定すると、本来は東壁中央にカマドを設置した東西長4.12m、南北長2.55mの東西長軸を有する隅丸長方形が基本形であり、この南壁に東西2.94m、南北2.00mの長方形の張り出しを設けたものと思われる。遺物の多くはこの張り出し部の床面から出土しており、南壁際には焼土と炭化物も検出されている。130号住居と同様の平面形を有する住居は、他遺跡での検出例はあるものの田口上田尻遺跡、田口下田尻遺跡では1例だけであり特異な存在である。掘り方は全体に認められたが、北壁と西壁に沿ってやや深く掘削された場所があった。張り出し部に径0.26m、深さ0.25mの円形を呈するP1を検出した他に、柱穴となるような掘り込みは検出されなかった。時期: 8世紀前半



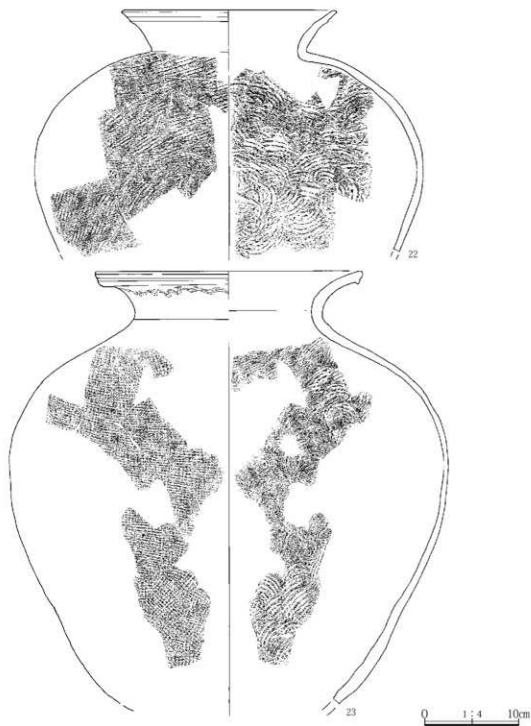
第413図 130号住居



第414図 130号住居遺物出土状況・掘り方・カマド



第415圖 130号住居出土遺物(1)



第416図 130号住居出土遺物(2)

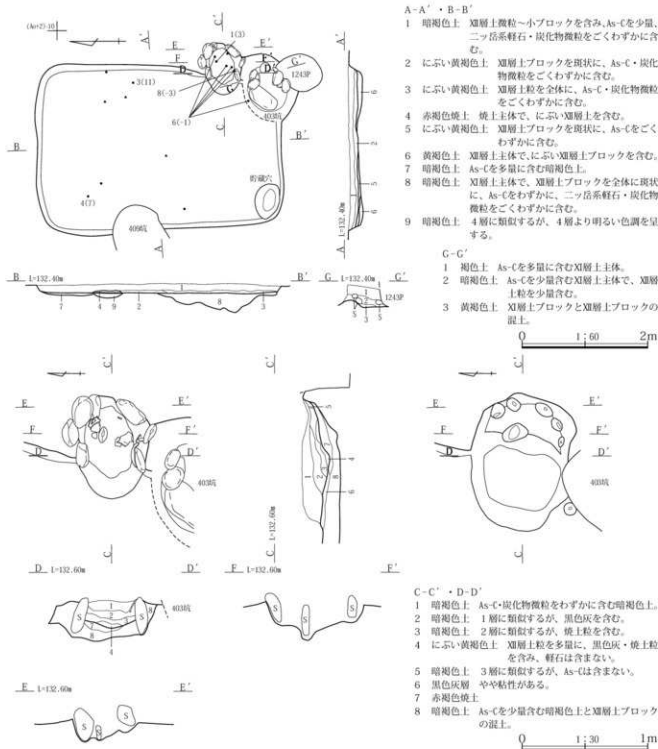
131号住居(第417・418図 P L.92・255)

位置:An・Ao-9・10グリッド 形状:陶丸長方形 規模:
2.73m×3.92m 残存深度:0.15m 主軸方位:E-1
°-N 埋設土:Ⅶ層土主体 柱穴:未検出 カマド:
東壁の南東コーナー近くに偏った位置に検出した。側壁
には左側壁に4個、右側壁に3個の礫を構築材として立
てており、燃焼部奥の左に偏った位置に棒状の礫を支脚
として設置していた。構築材間の中間を通る線をもとに

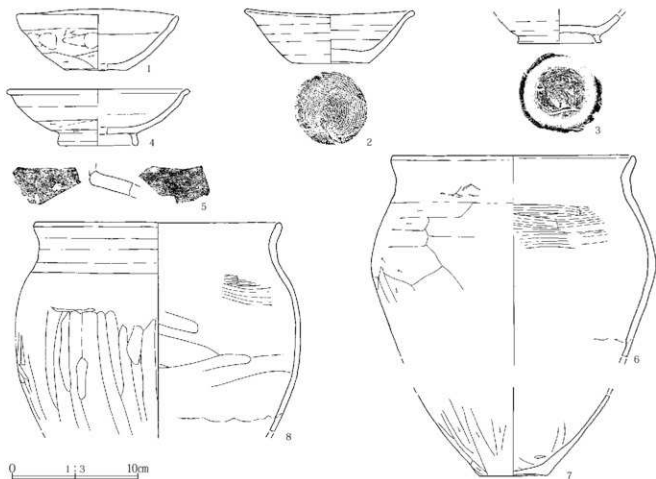
して計測した主軸方位はE-7°-Nである。燃焼部底
面には5~7cmの焼土層が形成されており、焚口部には
粘性のある黒色灰層が残存していた。側壁にまで礫を多
用しているにもかかわらず、焚口部の天井構築材が検出
されなかったが、南東コーナー部に重複していた403号
土坑内に被熱によってはげた痕跡のある楕円形を呈する
大形礫が出土しており、これが構築材であった可能性が
ある。 遺物:カマド燃焼部から土師器環(1)・土釜(8)

が出土した他、北西コーナー部近くから灰釉陶器塊(4)が出土した。重複: 132号住居と重複し、検出状況から132号住居→131号住居と考えられる。所見: IX層土中で確認したもので、二ッ岳系軽石の細粒の有無によって比較的平面の確認は容易であった。床面はカマドの灰面の検出面として捉えたが、硬化面の検出はなかった。北寄りの床面に焼土が検出されたため、屋内がも想定し

たが、調査の進捗に伴って132号住居のカマド煙道部の一部であることが判明した。南東コーナー部には403号土坑が重複しており、当初は貯蔵穴かとも考えたが、一部カマド部分にまで及んでいたことから、住居よりも新しい土坑と結論づけた。貯蔵穴は、掘り方調査で南西コーナー部に検出した0.55×0.38m、深さ0.13mの楕円形を呈する掘り込みの可能性が高い。 時期: 10世紀前半



第417図 131号住居



第418図 131号住居出土遺物

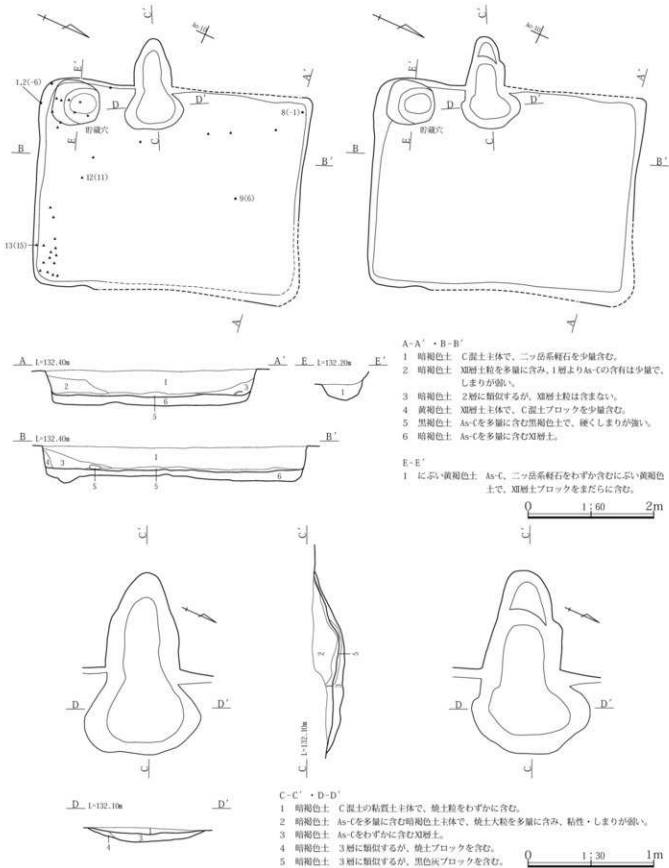
132号住居(第419・420図 P L.93・256)

位置: A0-9・10グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 3.25 m×4.18m 残存深度: 0.38m 主軸方位: W-22°-S 埋没土: VII層土主体であるが、南壁際にIX層土粒主体の層が認められる。柱穴: 未検出 カマド: 西壁中央やや南寄りに検出されたが、上半は131号住居との重複によって失われており、燃焼部下半から煙道の一部だけが残存したものと考えられることから、掘り方までを含めて調査を進めた。残存部の中軸線をもとに計測した主軸方位はW-25°-Sであり、南壁で計測した住居の主軸方位とはほぼ一致している。燃焼部の主体は壁外にあったものと考えられるが、燃焼部から続く窪みは屋内にも及んでいることから、焚口部から燃焼部の一部は屋内に張り出して構築されていたものであろう。煙道部は燃焼部から一段上がった位置から掘削されており、131号住居の床面に検出した焼土が煙道の延長線上にあることを勘案すると、比較的長く煙道が南西方向に延びていたものと考えられる。遺物: 北西コーナー部に土師器

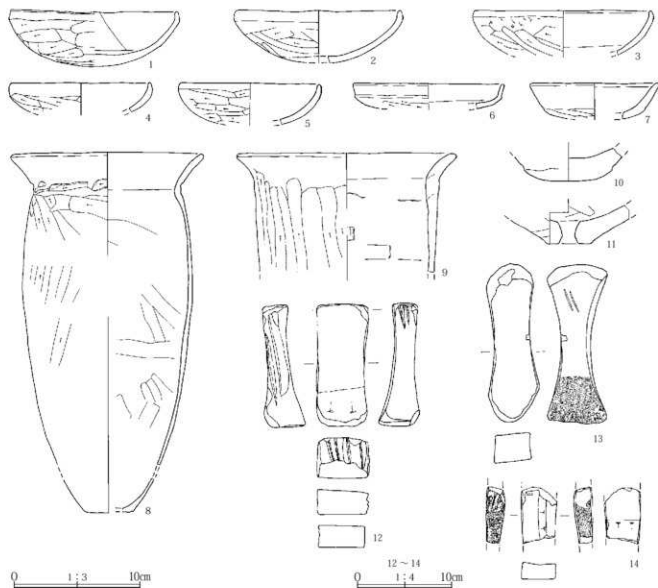
甕(8)が破片の状態出土し、南東コーナー部には壁上から転落したかのように礫が床面から浮いた位置で壁際に集中しており、それに混じって砥石(13)が集中部の最上位から出土した。また、砥石(12)が南壁寄りの位置から出土した他、南西コーナー部の貯蔵穴上部に礫が集中していた。重複: 131・134号住居と重複しており、検出状況から134号住居→132号住居→131号住居という新旧関係である。所見: IX層土中で確認を行ったが、当初カマドの存在が認識できなかったため、古墳時代前期の住居1棟との想定で調査を開始した。ところが、調査が床面検出の段階近くまで進んだ時点で、埋没土中層に堆積していたAs-C純堆積層が南側では検出されず、土層断面に重複する住居が捉えられたことから132号住居と134号住居の2棟の住居に分離をした。しかし、この時点で、132号住居の壁と床面の大半は掘削してしまったために残存せず、かろうじて南東と南西コーナー部を含む南壁と、東西方向に設定したセクションベルト部分で北西コーナー部から北壁の一部を調査することができ

た。検出した壁はほぼ垂直で、床面は平坦で5 cm前後の厚さで硬く締まった層が観察された。貯蔵穴は南西コー

ナー部で、0.70×0.75m、深さ0.25mの南北方向にわずかに長い隅丸長方形を呈していた。 時期：7世紀後半



第419図 132号住居

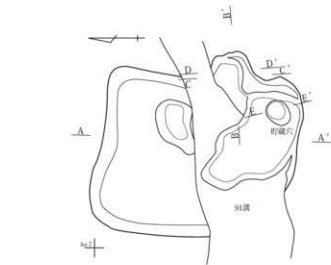
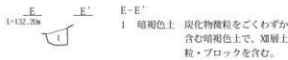
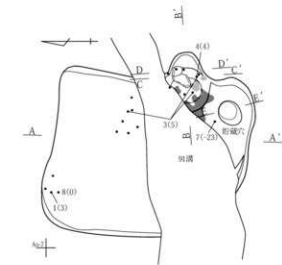


第420図 132号住居出土遺物

135号住居(第421・422図 P.L.94・256)

位置: A₀-6グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.59m×3.15m 残存深度: 0.12m 主軸方位: E-2°-S 埋没土: VII層土主体であるが、酸化鉄の凝集が著しい。柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに検出された。掘り込みが浅く状態は良好ではないが、構築材と見られる礫が左側壁部に2点倒れた状態で出土し、右袖部には構築材の礫が立った状態で検出された。91号溝との重複によって左袖部は失われているが、燃焼部を壁外に設けた釣鐘状の平面形となるタイプと考えられ、想定される主軸方位はE-4°-Nである。燃焼部は窪み状で底面は焼土化しており、焚口部から屋内側には黒色灰の面が広がっていた。遺物: カマド内から須恵器碗(3・

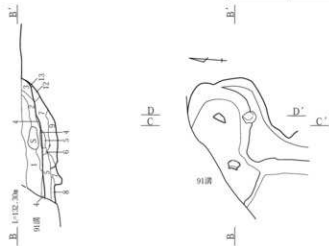
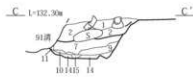
4)が、北西コーナー部から羽釜(8)が出土した他、埋没土中から棒状の鉄製品が1点(9)出土した。重複: 136・137・138号住居と重複し、検出状況から138号住居→136・137号住居→135号住居と考えられる。また、住居中央部は91号溝との重複で削平されている。所見: XII層土中で平面の確認を行ったが、住居の掘り込みが浅かったものと見られ、壁の大半は失われていた。床面はカマド焚口部に検出した黒色灰の検出面として捉えたが、平坦には検出されたものの硬化面の検出はなかった。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出され、0.42×0.35m、深さ0.25mの楕円形を呈する。掘り方は全体に及んでいたが、カマド寄りの2カ所が不整形に周辺よりやや深く掘り込まれていた。時期: 10世紀前半



A-A'

- 1 暗褐色土 Ⅹ層土粒を含み、As-Cを少量、炭化物微・焼土粒をわずかに含む。
- 2 灰褐色土 1層に類似するが、酸化鉄を含む。
- 3 褐色土 1層に類似するが、酸化鉄を含む。
- 4 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土ブロックを含み、As-C・炭化物微粒をわずかに含む。
- 5 灰褐色土 As-Cを少量、二ヶ岳系軽石をわずかに含む褐色土上で、Ⅹ層土粒・ブロック、酸化鉄を含む。
- 6 暗褐色土 黒色灰・焼土粒・ブロックを含む暗褐色土。
- 7 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土との混上。

0 1:60 2m

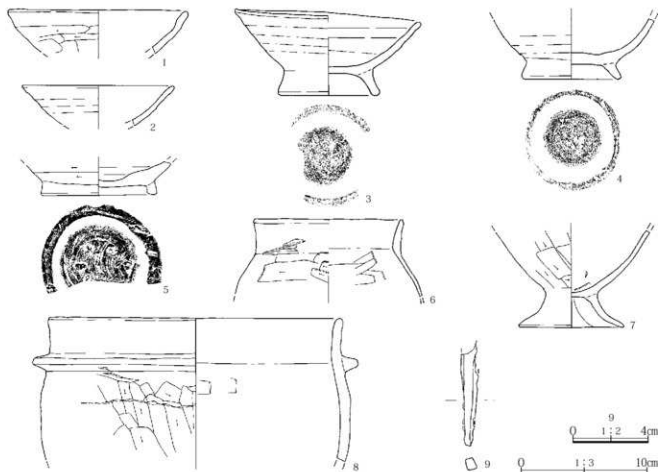


B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、炭化物粒・焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、黒色灰・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物・焼土粒を含まない。
- 4 黒色灰層
- 5 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色粘質土で、焼土粒を少量含む。
- 6 黄褐色土 Ⅹ層土ブロック。
- 7 褐色土 As-Cをわずかに含むⅩ層上で、焼土粒をわずかに含む。
- 8 褐色土 As-Cをわずかに含むⅩ層上で、炭化物を含む。
- 9 褐色土 As-Cをわずかに含むⅩ層上で、焼土粒を多量に含む。
- 10 褐色土 黒色灰・焼土粒を含む褐色シルト質土。
- 11 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、酸化鉄を含む。
- 12 にぶい黄褐色土 炭化物粒を含むにぶいⅩ層土。
- 13 褐色土 As-Cを含む褐色土。
- 14 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、焼土粒を少量含む。
- 15 黄褐色土 Ⅹ層土ブロック。

0 1:30 1m

第421図 135号住居

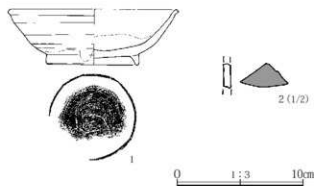


第422図 135号住居出土遺物

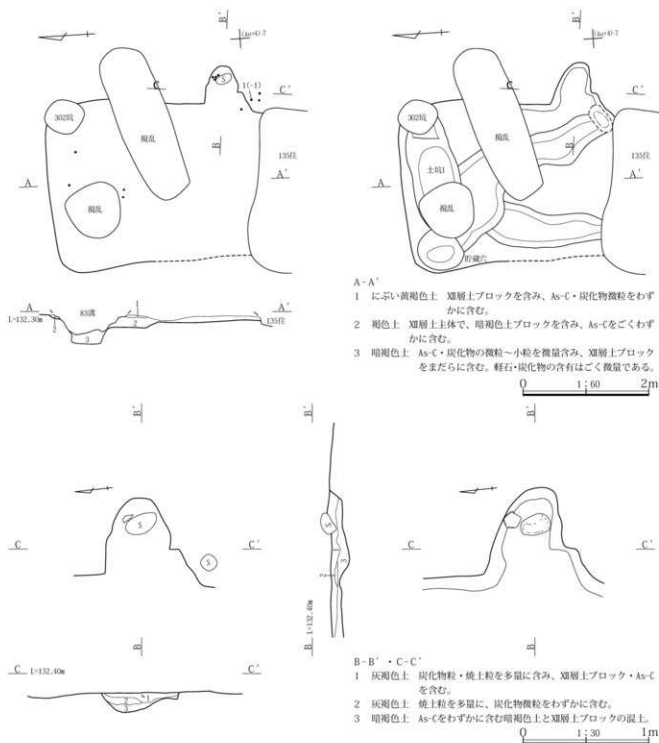
136号住居(第423・424図 P L.94・256)

位置:A0-6・7グリッド 形状:隅丸長方形 規模:2.67m×(3.38)m 残存深度:0m 主軸方位:E-3°-N 埋没土:不明 柱穴:未検出 カマド:東壁の南寄りに位置しており、カマド平面の確認時点の形状から計測した主軸方位は、E-5°-Sである。確認時点で既に側壁などは残存せず、燃焼部底面だけが残存した状況であるため、構造の詳細は不明である。燃焼部中央に検出された礫は、設置されたような状況にはないが構造材であった可能性が高い。 遺物:残存状況が悪いため遺物出土もほとんど見られなかったが、カマド南側から円礫とともに灰軸陶器碗(1)が出土した。また、掘り方で検出された北壁近くの掘り込み中からわずかな遺物出土が見られた。 重複:135号住居と重複し、検出状況から136号住居→135号住居と考えられる。 所見:Ⅱ層土中で平面確認を行ったところ、構築面からの掘り込みが浅かったものか、かろうじて住居の輪郭とカマドを捉えることができた。したがって壁はまったく残存しておら

ず、床面もすでに削平してしまったものと考えられ、結果的に掘り方だけの調査となった。掘り方の調査では、北寄りに(1.60)×0.76m、深さ0.45mの隅丸長方形となると思われる土坑状の掘り込み(土坑1)を検出した。また、北西コーナー部に検出した径0.72m、深さ0.30mの円形を呈する掘り込みは、位置から貯蔵穴と考えられる。 時期:10世紀前半



第423図 136号住居出土遺物

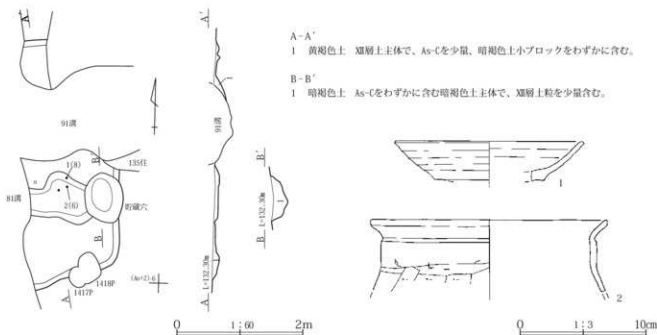


第424図 136号住居

137号住居(第425図 P.L.94)

位置: An・Ao-5・6グリッド 形状: 隅丸長方形?
 規模: (1.52)m×3.97m 残存深度: 0m 主軸方位:
 不明 埋没土: 不明 柱穴: 未検出 カマド: 未検出
 遺物: 掘り方の調査で中央部から須恵器坏(1)と土師器
 甕(2)の破片が出土した。重複: 135号住居と重複し、
 検出状況から137号住居→135号住居と考えられる。所
 見: Ⅱ層土中の確認によって検出したが、81・91号溝に

よって中央部から西側が削平され、北東部は135号住居
 との重複によって失われているため断片的な検出であっ
 た。検出された時点で床面よりは下がった状態であった
 ため、掘り方だけの調査を行った。掘り方調査で東壁に
 接する位置で検出した0.80×0.60m、深さ0.27mの楕円
 形の掘り込みが貯蔵穴であるとなると、カマドは東壁の
 中央付近に設置されていたものと考えられるが、91号溝
 との重複によって失われている。時期: 9世紀後半

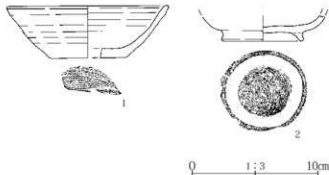


第425図 137号住居・出土遺物

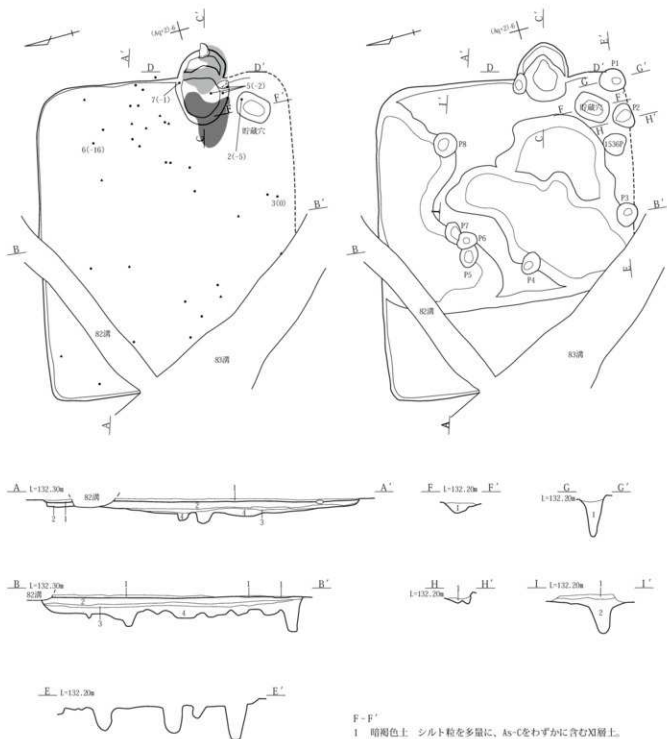
139号住居(第426～428図 P L.95・256)

位置:Ap・Aq-5・6グリッド 形状:隅丸長方形 規模:4.92m×(4.09)m 残存深度:0.05m 主軸方位:E-13°-S 埋没土:As-Cを比較的多く含むⅦ層土主体。柱穴:未検出 カマド:東壁中央のやや南寄りに位置しているものと考えられ、右側壁の焼土化した部分から主軸方位をE-15°-Sとする釣鐘状の平面形をしていたものと考えられる。右袖部と燃焼部奥壁には礫が構築材として使われていたが、左袖部には残存していなかった。しかし、掘り方の調査で左袖部にあたる位置から楕円形を呈するピット状の掘り込みが検出されており、本来はここに礫が立てられていたものと考えられる。燃焼部は全体に焼土化しており、焚口部から右側に灰面の広がりが見られた。遺物:カマド内から土師器甕(5・7)が、南東コーナー部の貯蔵穴内及び南壁際と見られる位置から須恵器碗(2・3)が出土した。重複:179号住居と重複し、検出状況から179号住居→139号住居と考えられる。所見:Ⅷ層土中で平面の確認を行い、カマドを含む北側は比較的明瞭に捉えることができたが、南東コーナー部を含む南壁は重複遺構がない場所でも判然としなかった。床面は、カマド灰面の広がった面の延長として、また、屋内で出土した扁平礫の下面の位置として捉えた。平坦ではあるが、硬化面はまったく検出されなかった。床面精査の時点ではピットなどはまったく認識する

ことができず、掘り方の調査で10カ所のピット状の掘り込みを確認した。それらの中で、カマド南側至近の位置に検出した0.55×0.40m、深さ0.16mの隅丸長方形を呈する掘り込みは、位置や規模の点から貯蔵穴であった可能性が高い。ピット状の掘り込みは、P1(0.41×0.34m、深さ0.54m、楕円形)、P2(径0.35m、深さ0.16m、不整形形)、P3(径0.33m、深さ0.36m、円形)、P4(0.35×0.27m、深さ0.17m、楕円形)、P5(0.36×0.28m、深さ0.18m、楕円形)、P6(0.32×0.26m、深さ0.25m、楕円形)、P7(0.37×0.26m、深さ0.15m、楕円形)、P8(径0.37m、深さ0.49m、円形)の8カ所検出した。P1、P3、P8のように比較的深いものも存在したが、配置が一でないため柱穴とは考えなかった。時期:9世紀後半



第426図 139号住居出土遺物(1)



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 ⅩⅢ層上を含み、As-C・炭化物微粒をわずかに、二ヶ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 2 暗褐色土 As-C微粒を均一に多量に含む粘質土で、しまりが強い。
- 3 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土とⅩⅢ層上小ブロックの混土。硬くしまりが強い。
- 4 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土とⅩⅢ層上ブロックの混土。

F-F'

- 1 暗褐色土 シルト粒を多量に、As-Cをわずかに含むⅩⅢ層上。

G-G'

- 1 暗褐色土 As-Cをわずかに含むⅩⅢ層上主体。

H-H'

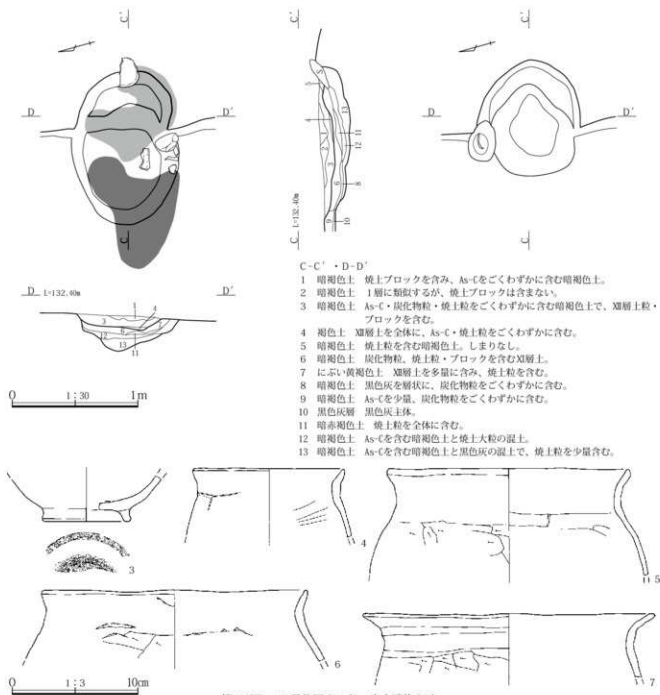
- 1 暗褐色土 As-Cを多量に含むⅩⅢ層上土主体で、焼土粒を多量に含む。

I-I'

- 1 暗褐色土 As-C・ⅩⅢ層上大粒を少量含む。しまりが強い。
- 2 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土とⅩⅢ層上ブロックの混土。

0 1; 60 2m

第427図 139号住居



第428図 139号住居カマド・出土遺物(2)

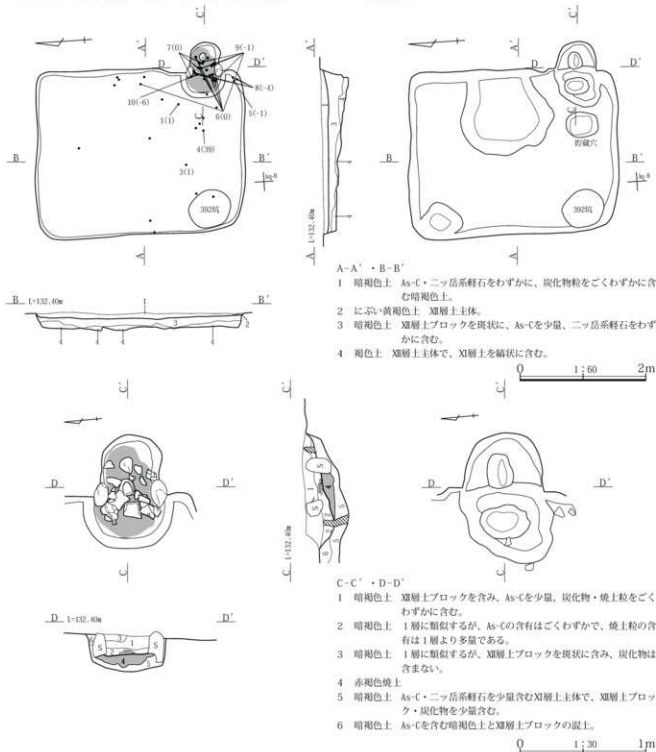
141号住居(第429・430図 P.L.95・256)

位置:Ap-Aq-8グリッド 形状:隅丸長方形 規模:2.62m×3.62m 残存深度:0.07m 主軸方位: E-1°-S
埋没土:炭化物粒を微量に含むVII層土主体。柱穴:未検出 カマド:東壁南端の南東コーナーに接する位置に検出された。主軸方位はE-5°-Sであり、釣鐘状の平面形を有している。壁との接点に礫を1対立てて袖構築材としており、袖間の屋内側を半円形に窪めて焚口としている。袖構築材より20cmほど奥まった左寄りの位置に礫を1点支脚として立てており、カマド本体を完全

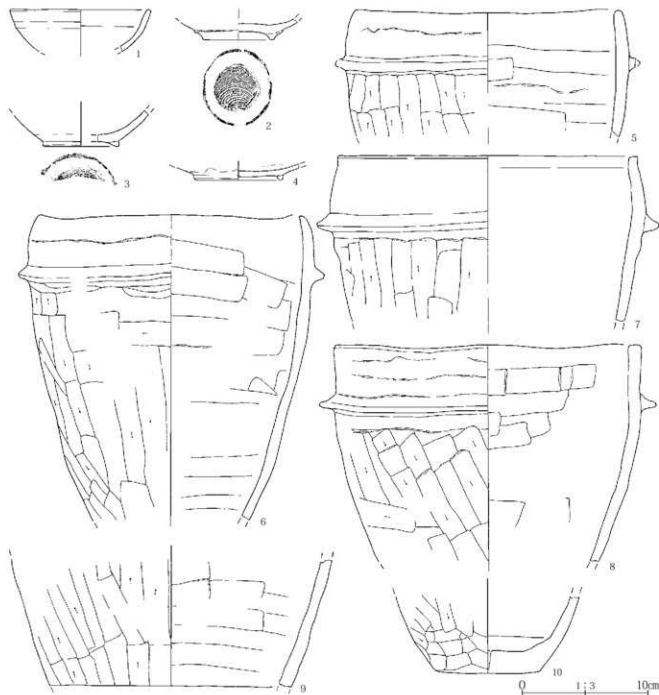
に壁外に設置していることがわかる。袖部に使用されていた礫は、被熱によって変色し表面が脆くなっており、燃焼部底面には8cmほどの厚さの焼土層が形成されていることなど、使用頻度の高さを物語っている。遺物:床面付近からは灰釉陶器皿(4)などがわずかに出土しただけであり、羽釜(5～10)はカマド内とその周辺に集中した。重複:160・178号住居と重複しており、検出状況から178号住居→160号住居→141号住居と考えられる。所見:細層土中の確認であり、確認面が低かったことから壁高の残存は良好ではないが、擾乱されることなく全

周検出することができた。床面は、遺物出土面及びⅩⅡ層土ブロックが斑状に目立つ面として捉えたものであり、平坦に検出されたが硬化面の検出はなかった。床面精査の時点では貯蔵穴などを検出することはできなかったが、掘り方の調査で、カマドの前面から0.50×0.40m、深さ0.31mの隅丸方形の掘り込みが検出され、内部からわずかではあるが遺物の出土があった。他にも北西コー

ナー部から掘り込みを検出しているが、窪み状のもので土坑状を呈さないことから、検出場所はきわめて例外的ではあるが、前者が貯蔵穴である可能性が高い。掘り方は、全体がわずかに掘り下げられていたようであり、東壁に接する位置に不整形形の窪みを検出したが、土坑と呼ぶほどには掘り方がはっきりしていなかった。時期：10世紀後半



第429図 141号住居

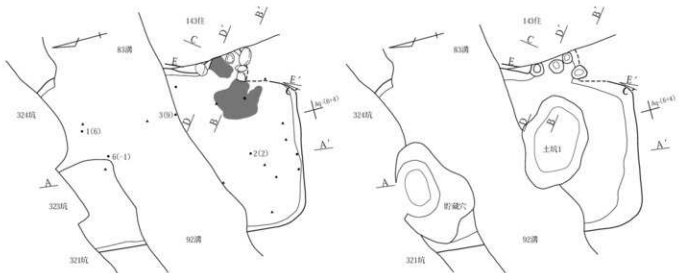


第430図 141号住居出土遺物

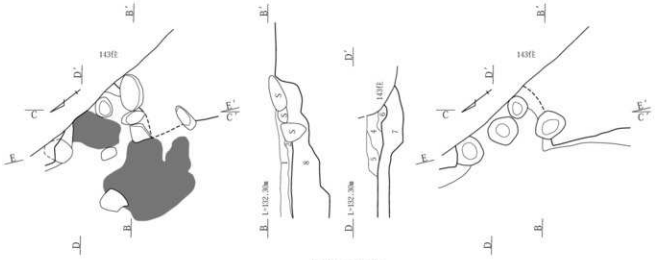
142号住居(第431・432図 P.L.95・96・256)

位置：Ap・Ag-6・7グリッド 形状：四丸台形 規模：2.21～(2.82)m×(4.12)m 残存深度：0.11m 主軸方位：E-10°-S 埋没土：Ⅷ層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁南寄りに検出され、煙道部は143号住居との重複で失われていた。主軸方位は概ねE-30°-Sであり、南壁を基準として計測した住居主軸方位よりも南に大きく振れている。カマドと東壁との接点部分に礫を立てて袖部を構築しており、右側壁に2ヵ所礫が残

存していることから、本来は左側壁にも礫が使用されていた可能性がある。袖構築材より25cmほど奥まった右寄りの位置に支脚として楕円礫が据えられており、燃焼部を壁外に持つ釣鐘状平面のカマドと考えられる。支脚手前の燃焼部底面には焼土が形成され、焚口部から右側床面にかけて薄い黒色灰層が広がっていた。カマドの南側の壁に食い込むように扁平礫が立って検出されており、カマドの作り替えも想定してみたが、焼土や灰などはまったく検出されなかったことから、カマドとは考えな



- A-A'
- 1 暗褐色土 Ⅱ層上粒を含み、As-Cを少量、二ッ岳系軽石・酸化鉄をわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 1層に類似するが、焼土粒を含む。
 - 3 暗褐色土 As-Cを均一に多量に含む暗褐色粘質土主体で、二ッ岳系軽石をわずかに含む。
 - 4 灰褐色土 As-Cを含む灰褐色粘質土。
 - 5 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土とⅡ層土小ブロックの混土。
 - 6 暗褐色土 As-C・二ッ岳系軽石を含む暗褐色土。しまりが強い。
 - 7 黄褐色土 Ⅱ層土主体で、暗褐色土小ブロックを含み、As-Cを少量含む。

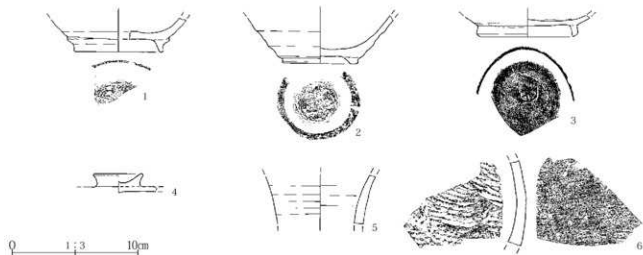


- B-B' ~ D-D'
- 1 暗褐色土 Ⅱ層上ブロックを含み、As-Cを少量、二ッ岳系軽石・炭化物微粒をこくわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 炭化物粒・焼土粒・黒色灰ブロックを含み、As-Cをこくわずかに含む。
 - 3 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物粒・ブロックを含み、二ッ岳系軽石は含まず、As-Cの含有はこくわずかである。
 - 4 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、焼土大粒を多量に、炭化物を少量含む。粘性・しまりあり。
 - 5 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色粘質土主体で、炭化物粒を少量含み、焼土粒をほとんどふくまない。
 - 6 赤褐色土 As-Cをわずかに含む暗褐色土と焼土大粒の混土層。
 - 7 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、焼土大粒をわずかに含む。
 - 8 暗褐色土 As-Cを少量含む。粘性が強い。

第431図 142号住居

かった。**遺物**:床面付近に扁平な礫が比較的多く、これに混じって須恵器碗(1・2)、灰軸陶器碗(3)などが出土した。**重複**:143・179号住居と重複しているが、検出状況や残存状況から179号住居→142号住居→143号住居と考えられる。他に、北側は92号溝や323号土坑などとの重複によって削平を受けている。**所見**:Ⅹ層土中で平面確認をしたため、壁の残存状況は良好ではなく、92号溝より北側部分についてはほとんど残存していなかった。床面は礫の出土面、及びカマド灰層の検出面

として平坦に捉えられたが、硬化面は検出されなかった。床面精査の時点では貯蔵穴と考えられるような掘り込みは検出できなかったが、掘り方の調査で北西コーナー部に寄りに検出した不整形楕円形の窪みと0.90×0.62m、深さ0.32mの楕円形の掘り込みが貯蔵穴の可能性が高い。掘り方は全域に及んでいたが、カマド前面に1.50×1.00mの不整形楕円形の範囲(土坑1)が特に深く掘削されていた。**時期**:10世紀前半

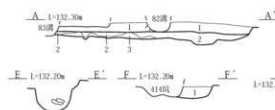
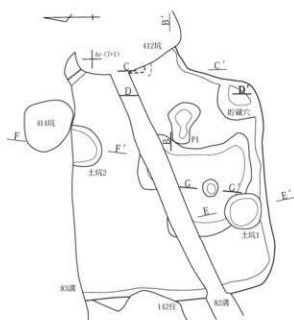
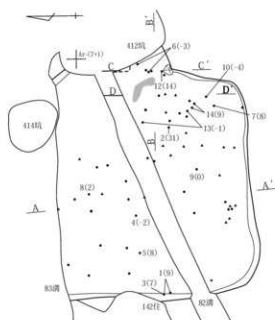


第432図 142号住居出土遺物

143号住居(第433・434図 P L.96・97・256)

位置:Aq・Ar-6・7グリッド **形状**:隅丸方形? **規模**:3.62m×(3.12)m **残存深度**:0.11m **主軸方位**:E-5°-N **埋没土**:炭化物粒をわずかに含むⅧ層土主体。**柱穴**:未検出 **カマド**:東壁南寄りに位置するものと考えられる。右袖部と燃焼部の一部以外は412号土坑との重複によって失われている。右袖部には礫が立てられた状態で残存しており、屋内側にカマドが張り出していた痕跡がないことから、燃焼部を壁外に置く構造であったものと考えられる。釣鐘状の平面形であった可能性が高いが、主軸方位の計測はできなかった。燃焼部は床面よりもわずかに掘り窪められており、底面には薄い黒色灰層が残存していた。**遺物**:礫の出土が目立っており、これに混じって中央部で須恵器環(2)が出土した他、西壁際で須恵器環(1)・碗(3)が、中央寄りの位置で灰軸陶器碗(4・5)が出土した。また、羽釜(12)などはカマド内及びその前面からの出土である。**重複**:142・144号住居と重複し、検出状況から142・144号住居→143号住

居と考えられる。他に82・83号溝との重複で中央部分と北側が削平されている。**所見**:Ⅹ層土中から平面確認を試みたが、重複関係が捉えにくかったために、最終的にはⅩ層土中まで下げて行った。南東コーナー部から西壁までは比較的良好に捉えることができたが、東壁の特にカマドの北側は土坑・溝との重複によってわずかな部分しか残存していなかったため判然としない。床面は、遺物の出土面及びカマド灰面の延長として比較的容易に捉えることができた。床面の精査で、南東コーナー部が0.50mほどの範囲で0.24mほど窪んでいることが判明した、掘り方は判然としないがこの位置が貯蔵穴と考えられる。掘り方は全体に及んでいたが、南壁の中央やや西寄りに、壁に接して径0.58m、深さ0.35mの円形を呈する土坑1、及び83号溝によって北半が削平されているが、径0.62m、深さ0.21mの円形を呈すると思われる土坑2を検出した。他に住居南寄りの中央部が不整形にやや深く掘り込まれており、その東側に不整形のP1(0.65×0.48m、深さ0.17m)が検出された。**時期**:10世紀前半



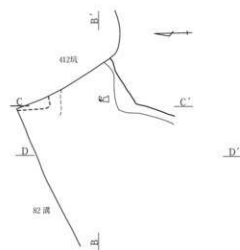
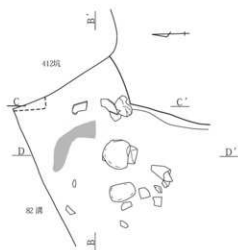
A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、ニッ岳系軽石・炭化物粒を少量含み、硬くしまりが強い。
- 2 暗褐色土 廻層土ブロックを含み、As-C・ニッ岳系軽石を少量、炭化物粒をごくわずかに含み、しまりがやや強い。
- 3 褐色土 廻層土粒・ブロックを斑状に、As-Cをわずかに含む。

F-F'

- 1 灰褐色土 As-C細粒を均一に含むシルト質土で、硬くしまりが強い。

0 1:60 2m

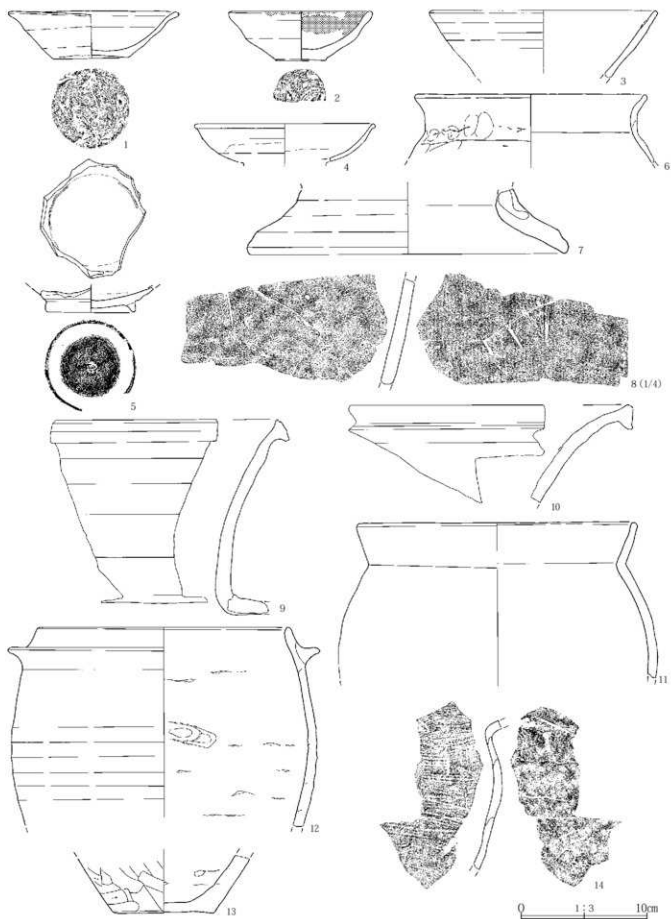


B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土 As-C細粒を比較的多量に、ニッ岳系軽石・炭化物粒を少量含み、硬くしまりが強い。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、焼土粒・小ブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、焼土粒・小ブロックの含有は2層より少量である。
- 4 にぶい黄褐色土 廻層土粒・ブロックを斑状に、炭化物粒・焼土粒をごくわずかに含む。
- 5 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土と廻層土の混土で、焼土粒を多量に含む(一部は焼土主体)。

0 1:30 1m

第433図 143号住居

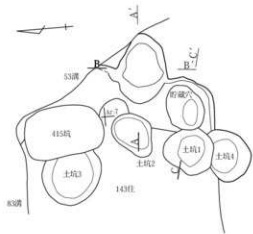
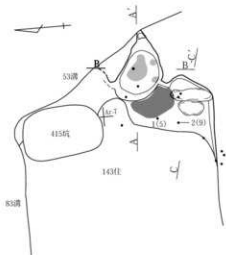


第434図 143号住居出土遺物

144号住居(第435・436図 P.L.97)

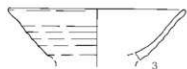
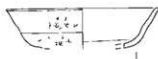
位置: Aq・Ar-6・7グリッド 形状: 不明 規模: (0.85)m×(3.03)m 残存深度: 0.10m 主軸方位: E-0°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 東壁南寄りに位置し、煙道部がわずかに突出する凸字形を呈する平面形を有している。想定される主軸方位は、E-6°-Sであり、南壁で計測した住居主軸方位より南にわずかに振れている。袖部や側壁に構築材となるような礫は検出されず、掘り方においても痕跡はなかった。また、支脚も検出されず、同様に掘り方で支脚を据えるためのピットなどはなかった。燃焼部底面の中央部が特に焼土化が顕著で、側壁の一部にも焼土が形成されていた。焚口部から屋内の右側に薄い黒色灰層の広がりが認められた。遺物: 遺物の出土はわずかで、カマド前から土師器環(1)、貯蔵びから須恵器碗(2)が出土した。重複: 143号住居と重複し、検出状況から144号住居→143号住居と考えられる。また、北側は83号溝との重複で、東側は53号溝との重複によってそれぞれ削平さ

れている。所見: カマドから南東コーナー部がかりうじて残存した住居である。床面はカマド灰層の検出面として捉えたもので、カマド前面にも硬化した面は検出されなかった。南東コーナー部の床面には、被熱によってはげた痕跡のある長さ67cmの棒状礫、及び41cmほどの長さの楕円形を呈する礫が並行して検出された。これらの礫は、どちらも平坦な面を上にして置かれたような状態であり、使用されていた状態を示しているものと考えられるが、下部から0.72×0.61m、深さ0.19mの楕円形を呈する貯蔵穴と見られる掘り込みが検出されており、当該時期の住居に付設された貯蔵穴の機能は見直す必要があるものと考えられる。他に掘り方として土坑1(径0.66m、深さ0.17m、不整形形)、土坑2(0.78×0.55m、深さ0.13m、不整形楕円形)、土坑3(径0.91m、深さ0.15m、円形)を検出した。土坑4(径0.67m、深さ0.17m、円形)としたものは住居外になってしまうため、144号住居に伴うものではないであろう。時期: 9世紀前半

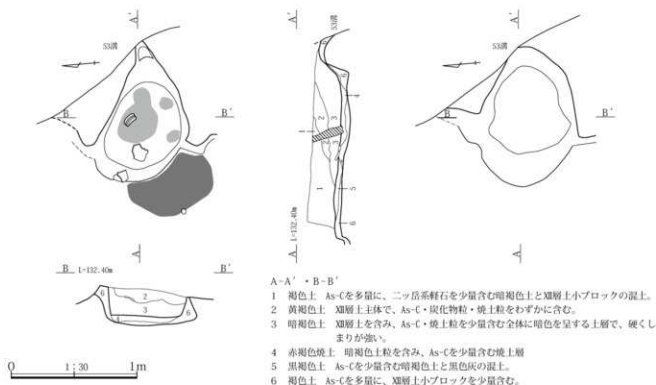


C-C'

- 1 暗褐色土: Ⅹ層土を基底に、As-C・ニッ品系輝石を少量含む暗褐色土。
- 2 暗褐色土: As-Cを少量含むⅩ層土主体で、Ⅹ層土小ブロックと炭化物を均一に含む。



第435図 144号住居・出土遺物

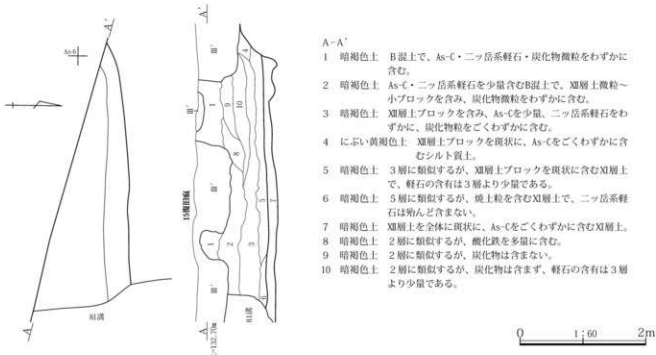


第436図 144号住居カマド

145号住居(第437図 P.L.97)

位置: An-5・6グリッド 形状: 不明 規模: (4.27) m×(1.57)m 残存深度: 0.39m 主軸方位: E-2°-N 埋没土: Ⅶ層土主体で、下層には二ッ岳系軽石が目立たない。柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 埋没土中から土器片がわずかに出土した。重複: 東側

は81号溝との重複で失われている。所見: 調査区の南端で検出され、北西コーナ部付近から北壁の一部だけが調査された。埋没土上層であるが、二ッ岳系軽石の含有が確認されるので、古墳時代後期以降の住居であることは確実視される。検出部の床面は平坦で、掘り方は全体に及んでいた。時期: 不明

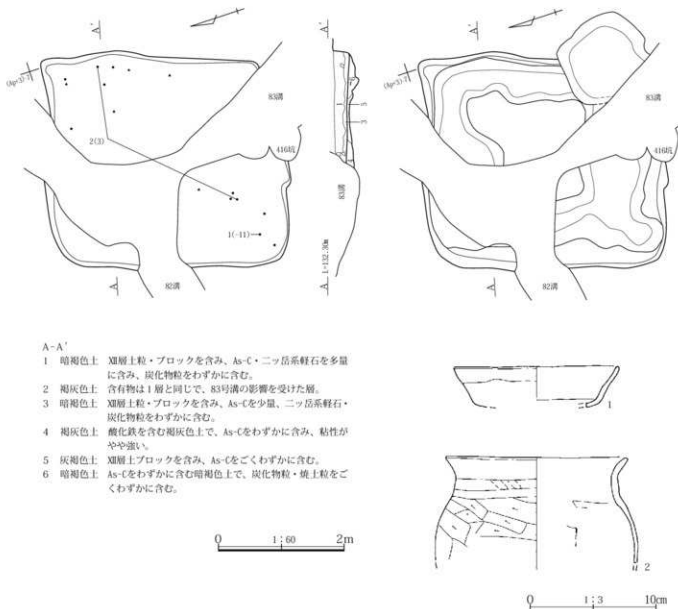


第437図 145号住居

147号住居(第438図 P.L.98・256)

位置：A0・Ap・6・7グリッド 形状：隅丸長方形 規模：3.43m×3.82m 残存深度：0.26m 主軸方位：E-18°-S 埋設土：As-C・ニッ岳系軽石の含有の多いⅧ層土主体 柱穴：未検出 カマド：カマドが設置されていたと思われる位置に土坑が重複しているため検出できなかった。遺物：土師器張(2)は北東コーナー部近くと中央南寄り出土した破片が接合したものであり、坏(1)は南西コーナー部から出土した。重複：東側で179号住居と重複しているが、検出状況から179号住居→147号住居である。その他1面の82・83号溝によって一部が削平されている。所見：Ⅷ層土中で確認された

もので、壁の残存はわずかである。床面はⅧ層土ブロックが斑状に検出された面として捉えたが、検出した部分において硬化面は検出されなかった。東壁南寄りに径1.40mほどの不整形形の土坑が重複しており、カマドはこの土坑との重複によって失われたものと考えられる。掘り方は、全体に及んでいるが、住居中央部と比較すると壁寄りがわずかに深く掘削されており、3面の住居の掘り方に類似している。貯蔵穴は、掘り方調査においても残存する3カ所のコーナー部付近には痕跡も検出されていないことから、南東コーナー部に掘削されていたものと思われるが、83号溝との重複によって削平されたものであろう。時期：9世紀後半

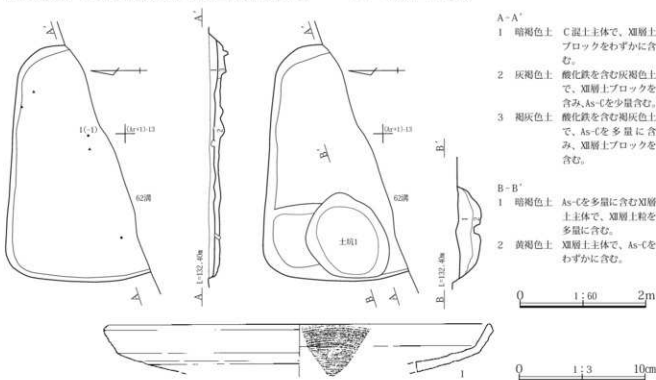


第438図 147号住居・出土遺物

150号住居(第439図 P.L.98)

位置: Aq・Ar-12・13グリッド 形状: 隅丸長方形?
 規模: 3.71m×(2.33)m 残存深度: 0.08m 主軸方位:
 E-3°-S 埋没土: IX層土類似の土主体。柱穴:
 未検出 カマド: 東壁に設置されていたものと見られる
 が、62号溝との重複で失われたものと考えられる。遺
 物: 床面から須恵器の破片が出土した。重複: 南半が
 62号溝との重複で失われている。所見: XII層土中で平
 面の確認を行い、As-Cの有無によって比較的明瞭に平面
 形を捉えることができた。重複する62号溝は幅が1.50m
 ほどであり、この溝の南側には住居の延長が確認されて

いないので、150号住居の平面形は、東西方向に長い隅
 丸長方形を呈していた可能性が高い。埋没土は薄く最下
 層が残存したものと見られるが、色調の明るいIX層土類
 似の土であった。二ツ岳系軽石の有無が判然としなが
 ら、床面から須恵器の破片が出土していることから2面の住
 居とした。床面は、遺物の出土面及び酸化鉄が凝集し褐色
 を呈する面として捉えたが、床面の精査によって柱穴、
 貯蔵穴は検出されなかった。掘り方は全体に及んでおり、
 この段階で、北西コーナー近くで、1.48×1.17m、深さ
 0.37mの不整楕円形の掘り込み(土坑1)を1カ所検出し
 た。時期: 7世紀代



第439図 150号住居・出土遺物

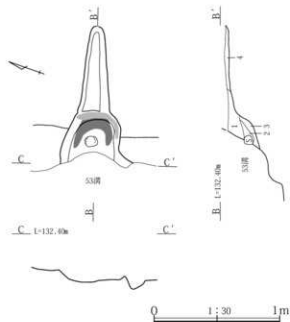
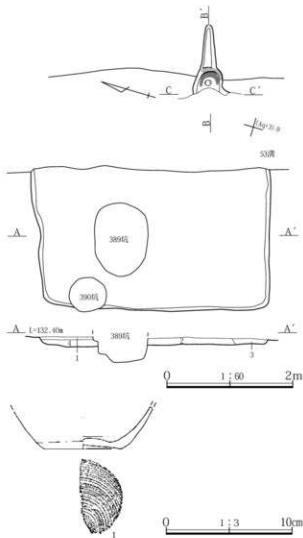
152号住居(第440図 P.L.98)

位置: Ap・Aq・8・9グリッド 形状: 隅丸方形? 規
 模: (2.24)m×3.66m 残存深度: 0.10m 主軸方位:
 E-20°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カ
 マド: 東壁南寄りに偏って検出され、煙道で計測した主
 軸方位はE-18°-Nであり、南壁で計測した住居主軸
 方位とほぼ一致している。燃烧部の一部が壁を掘り込
 んだ位置に検出されているが、形態から推して燃烧部主
 体は屋内側に張り出して設置されていたものと考えら
 れる。燃烧部奥壁の焼土化は顕著で底面には灰層が残さ
 れており、燃烧部中央のやや左寄りの位置に、棒状の礫を

屋内側に傾けて立てて支脚としていた。煙道は燃烧部
 底面から0.20mほど上がった位置から0.70mほど壁外に
 伸びていた。遺物: 埋没土中からわずかに土器片が出
 土した。重複: 161号住居と重複し、検出状況から161
 号住居→152号住居と考えられる。所見: XII層土中
 の平面確認を行い、161号住居との重複部分はやや捉え
 にくかったが、北側部分については埋没土中にAs-Cの含
 有が多かったことから明瞭に検出することができた。床
 面は、161号住居との重複のない部分についてはXII層土
 が床面となっていたため比較的容易に捉えることができ
 た。貯蔵穴は床面の調査では検出されず、53号溝との重

複によって失われたものと考えられる。東側で53号溝と重複しており、東壁と共にカマドも削平されているものと考えていたが、53号溝東壁面に凝集した酸化鉄層の中にわずかに焼土が確認され、調査を進めたところ燃焼部の一部と煙道が残存していることが判明した。しかし、煙道が長く壁外に伸び、燃焼部を屋内側に持つようなカマドは、長方形平面の長辺側の南寄りに偏って付設され

ることは稀である。通常は、正方形または長方形平面の短辺中央に付設される例が多い傾向がある。こうした傾向を考慮すると、152号住居のカマドは、当初の想定通り53号溝との重複によって失われており、ここに報告したカマドは、下部に重複する161号住居に伴うものである可能性もある。 時期：8世紀代



A-A'

- 1 灰褐色土 As-Cを多量に含む灰褐色土。
- 2 灰褐色土 As-Cを少量、ニッ岳系軽石をわずかに含む灰褐色土。
- 3 暗褐色土 As-Cを少量、炭化物微粒をごくわずかに含む砂質土。
- 4 褐色土 As-Cを少量含むX層土。

B-B'

- 1 灰褐色土 As-Cをわずかに含む灰褐色土で、酸化鉄を含む。
- 2 褐色土 酸化鉄を含む褐色土で、焼土粒をわずかに含む。
- 3 褐色土 2層に類似するが、黒色灰・炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土で、焼土粒をごくわずかに含む。

第440図 152号住居・出土遺物

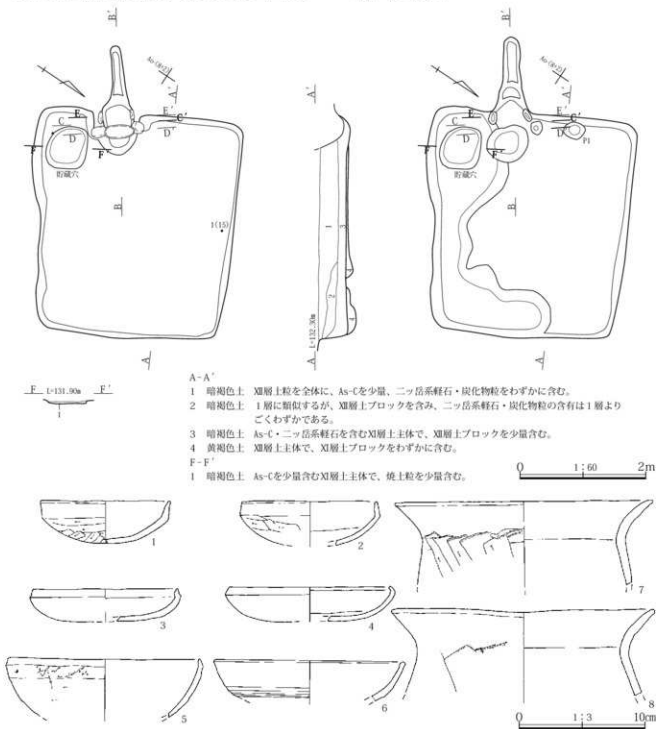
153号住居(第441・442図 P.L.98・99・256)

位置：A0- 8 グリッド 形状：隅丸台形 規模：3.52m × 2.88 ~ 3.27m 残存深度：0.45m 主軸方位：W-29°-S 埋没土：Ⅻ層土ブロックを含む均質なⅦ層土主体。柱穴：未検出 カマド：西壁中央のやや南寄りに検出した。屋内に燃焼部を設け、両袖部先端及び基部に礎を構築材として立てていた。先端部の礎は0.6mほどの間隔で内傾して立てられており、上に長さ50cmほどの礎を載せて焚口部の天井を構築していた。礎を覆って

いたのはⅫ層土であり、カマド本体は地山のⅫ層土を用いて構築していたものと思われる。燃焼部底面及び壁は焼土化が顕著で、特に袖部の断面においては内奥までの焼土化が観察された。煙道は燃焼部底面から0.3mほど上がった位置から壁外に1.0mほど伸びていた。カマドの主軸方位はW-35°-Sであり、西壁で計測した住居主軸方位よりもわずかに南に振れている。 遺物：北壁際の床面から浮いた位置から土師器環が1点出土した以外に、埋没土中からわずかに土器片が出土した。 重複：

163号住居と重複し、検出状況から163号住居→153号住居である。 所見: XI層土中で平面確認を行い、当初は163号住居との分離ができず同時に調査を進めたが、163号住居の床面に至って153号住居の平面が確認できたために先行して調査を行った。壁は北壁の残存が特に良好で、崩落などはほとんど見られず垂直に近い立ちあがりであった。床面は、南側の掘り方の行われた一部を除いてXI層土中に構築されており、埋没土との違いが明瞭で

あるため捉え易く、全体に平坦に検出されたが硬化面はまったく検出されなかった。南西コーナー部の床面から長さ30cmほどの礫が1点出土しており、その周りに0.68×0.63mの隅丸長方形の焼土粒を含む部分が確認されたため、貯蔵穴との想定のもとに調査をしたが、0.04mほどの深さしかなかった。他に西壁に接するような位置にP1(0.34×0.25m、深さ0.09m、楕円形)を検出した。 時期: 7世紀後半



A-A'

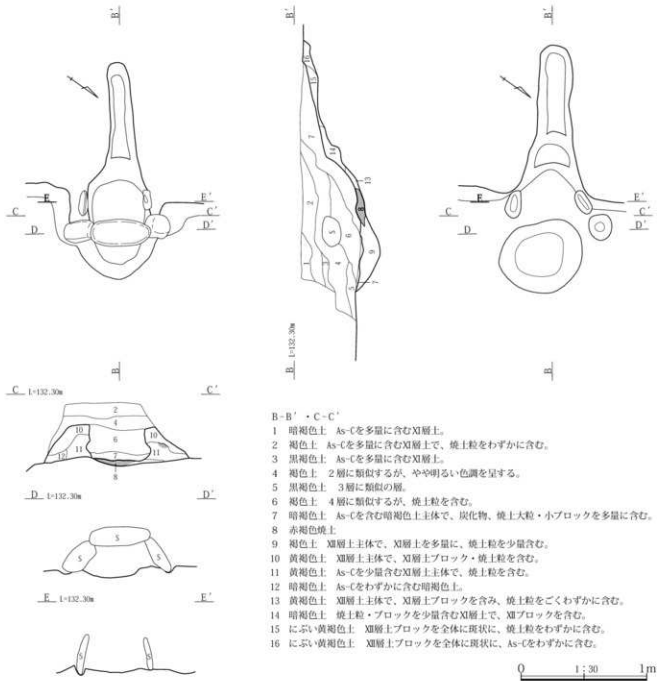
- 1 暗褐色土 XI層土粒を全体に、As-Cを少量、二ツ岳系軽石・炭化物粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、XI層土ブロックを含み、二ツ岳系軽石・炭化物粒の含有は1層よりごくわずかである。
- 3 暗褐色土 As-C・二ツ岳系軽石を含むXI層土主体で、XI層土ブロックを少量含む。
- 4 黄褐色土 XI層土主体で、XI層土ブロックをわずかに含む。

F-F'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量含むXI層土主体で、焼土粒を少量含む。

0 1:60 2m

第441図 153号住居・出土遺物



第442図 153号住居カマド

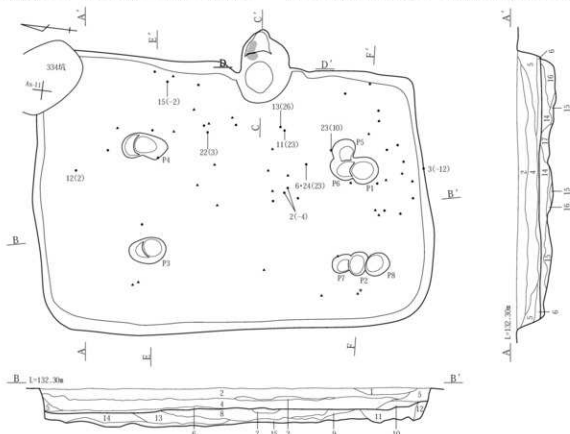
154号住居(第443～445図 P L.99・256・257)

位置: Ar・As-9・10グリッド 形状: 隅丸台形 規模: 3.37～4.42m×6.25m 残存深度: 0.38m 主軸方位: E-10°-N 埋没土: 軽石含有の多いVII層土が主体で、壁際に壁崩落土と見られるXI層土ブロックが混入する。柱穴: 床面の調査時点では柱穴を捉えることはできなかったが、掘り方の段階で検出されたP1(径0.44m、深さ0.57m、円形)、P2(0.30×0.39m、深さ0.48m、楕円形)、P3(径0.40m、深さ0.43m、円形)、

P4(0.34×0.54m、深さ0.54m、不整楕円形)の4本を柱穴と判断した。P1-P2間1.50m、P3-P4間1.60m、P1-P4間3.40m、P2-P3間3.30mであり、P1には柱穴の掘り直しと見られるP5(径0.37m、深さ0.45m、円形)とP6(径0.43m、深さ0.50m、円形)が重複し、P2にはP7(0.28×0.35m、深さ0.58m、楕円形)とP8(0.35×0.40m、深さ0.44m、楕円形)が重複していた。また、P3とP4には掘り直しは検出されなかったが、北側に柱の抜き取りと見られる浅い掘り込

みが見られた。カマド：東壁中央のわずかな奇りに検出され、確認段階で焼土化した内壁によって輪郭を明瞭に捉えることができた。平面形は煙道部がわずかに突出する凸字形を呈すると思われ、主軸方位はE-9°-Nと西壁を基準として計測した住居主軸方位と一致している。燃焼部を壁外に設け、屋内にまったく張り出さないタイプと見られるが、構築材や支脚がないため判然としない。燃焼部底部の焼土化はあまり顕著でないが、壁面は内奥まで焼土化していた。焚口部から右寄りの床面に

は黒色灰の薄い層が広がっており、右手前に灰の掻き出しが行われたものと考えられる。遺物：掘り方からやや屈曲した棒状の鉄製品が1点(25)出土した他、床面付近から出土した遺物は破片ばかりで、中層に裸の出土が目立った。重複：155・156・157号住居と重複し、検出状況と出土遺物から155→156・157号住居→154号住居と考えられる。所見：IX～XI層土で平面確認を行い、比較的良好に外形を捉えることができた。当該時期の住居としては大形に属し、カマド位置もほぼ中央であり異



A-A'・B-B'

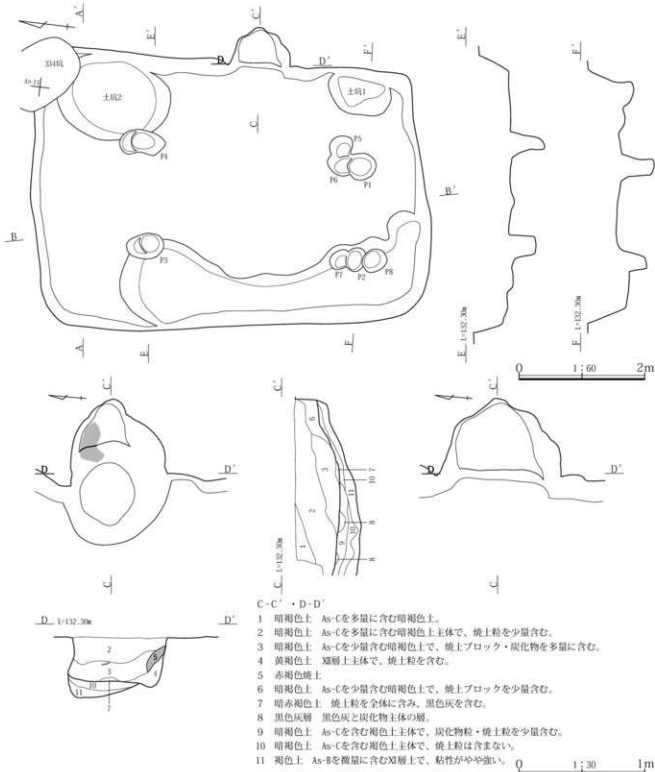
- 1 黒褐色土 As-Bを含む黒褐色土。(土坑)
- 2 暗褐色土 As-C・二ッ岳系軽石粒を多量に含む暗褐色土で、硬くしまりが強い。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、やや暗い色調を呈し、しまりがさらに強い。
- 4 暗褐色土 2層に類似するが、やや明るい色調を呈する。
- 5 暗褐色土 2層に類似するが、Ⅹ層土粒・ブロックを多量に含む。
- 6 暗褐色土 暗褐色土とⅩ層土の混土で、しまりが強い。
- 7 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土ブロックを含み、As-C・二ッ岳系軽石を少量、炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 8 にぶい黄褐色土 7層に類似するが、Ⅹ層土ブロックは含まない。
- 9 暗褐色土 炭化物粒・ブロックを多量に含む、Ⅹ層土ブロックを含み、As-C・二ッ岳系軽石を少量、焼土粒をわずかに含む。
- 10 暗褐色土 9層に類似するが、焼土ブロックを含む。
- 11 暗褐色土 9層に類似するが、炭化物ブロックは含まず、炭化物粒・焼土粒の含有はごくわずかである。
- 12 暗褐色土 11層に類似するが、焼土粒は含まない。
- 13 暗褐色土 Ⅹ層土ブロックを含み、As-Cを少量、二ッ岳系軽石・炭化物粒・焼土粒をごくわずかに含む。
- 14 褐色土 Ⅹ層土ブロックを全体に斑状に、As-Cを少量、炭化物粒をごくわずかに含む。
- 15 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、Ⅹ層土ブロックを含み、As-Cをごくわずかに含む。
- 16 にぶい黄褐色土 Ⅹ層土を多量に、As-Cをごくわずかに含む。
- 17 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、Ⅹ層土を塊状に含む、軽石などは含まない。

第443図 154号住居

0 1:60 2m

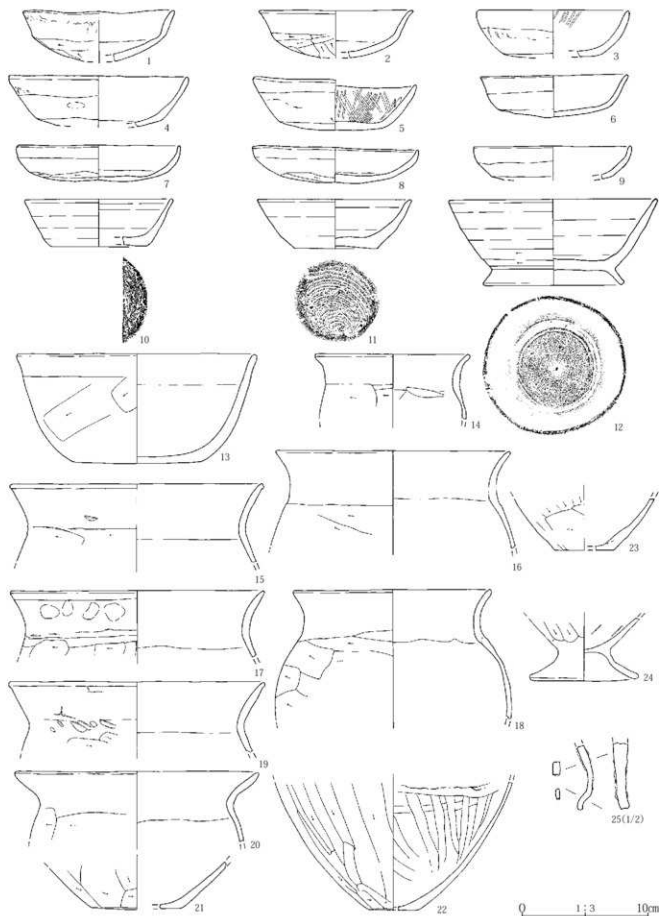
例である。掘り込みが深く、相対的に壁の残存も良好で垂直に近い状態であった。床面はカマド灰面の広がった面、及び遺物の出土面として捉えたが、硬化というほどに硬くなっていたわけではなく、4～5cmほどの厚さに締まりの強い暗褐色土とⅫ層土の混土が床面構築に使用されていた。南東コーナー部には1.03×0.60m、深さ0.39

mの不整形円形の土坑状の掘り込み(土坑1)が検出されており、位置から貯蔵穴と考えられる。掘り方は全体に及んでおり、西壁に沿った部分が帯状にやや深くなり、北東コーナー部には1.82×1.37m、深さ0.14mの楕円形を呈する土坑2が検出された。 時期：8世紀後半



第444図 154号住居掘り方・カマド

第5章 2面の調査（中世～古墳時代後期）

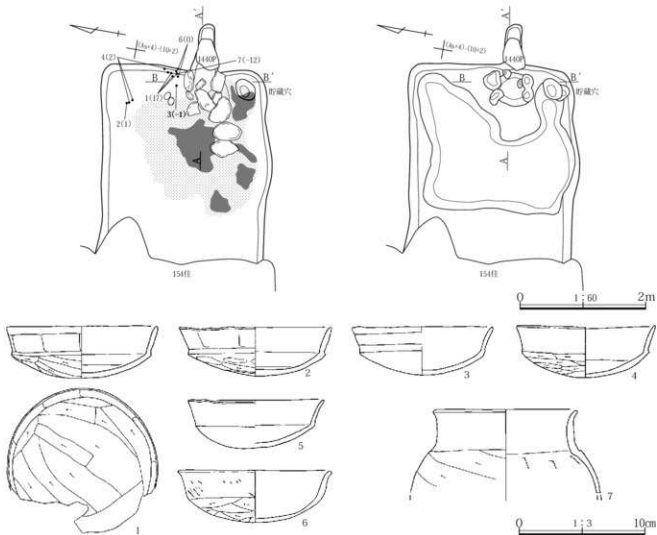


第445図 154号住居出土遺物

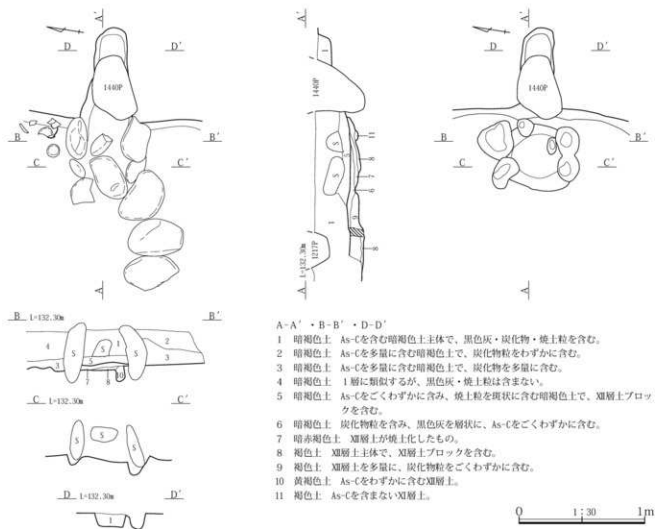
156号住居(第446・447図 P.L.100・257)

位置:As-9・10グリッド 形状:隅丸長方形 規模:(3.05)m×2.61m 残存深度:0.28m 主軸方位:E-10°-N 埋没土:炭化物を多量に含むⅧ層土主体。
柱穴:未検出 カマド:東壁中央やや南寄りに検出された。屋内部分には壁寄りに大形礫、屋内側に小形礫をそれぞれ30cmほどの間隔を置いて立てて袖構築材としていた。したがって、カマド本体が屋内側に張り出して構築され、煙道だけを壁外に伸ばして掘削したタイプである。主軸方位はE-6°-Nであり、北壁で計測した住居主軸方位よりはわずかに南に振れている。燃焼部付近から屋内側には、扁平な大形礫が集中していたが、大半の礫は床面との間に5cm程度の間層があり、被熱痕跡も見られないことから、カマド構築材ではなく魔絶後に廃棄されたものと考えられる。遺物:カマド左袖の北側に土師器環(3・6・7)が床面付近から、1がやや高い位置

で出土した。また、2・4の環は北東コーナー近くの床面から重なったような状況で出土した。重複:154号住居と重複し、検出状況から156号住居→154号住居と考えられる。所見:やや小形で主軸方向が長い隅丸長方形を呈すると考えられるが、西壁は154号住居との重複で失われているため、主軸方向の規模は不明である。床面は、カマド前面の広い範囲に硬化面が検出されたことから明確に捉えることができた。炭化材の断片がカマド付近の埋没土中に多く認められたが、床面付近に集中するということではなく、焼土の形成もまったくみられなかったことから、焼失家屋であるとの判断はできなかった。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出された0.36×0.28m、深さ0.11mの不正楕円形を呈する掘り込みと思われる。掘り方は、東壁から西へ2.3mほどの範囲だけに行われていた。時期:7世紀前半



第446図 156号住居・出土遺物



A-A'・B-B'・D-D'

- 1 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、黒色灰・炭化物・焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土で、炭化物粒をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土で、炭化物を多量に含む。
- 4 暗褐色土 1層に類似するが、黒色灰・焼土粒は含まない。
- 5 暗褐色土 As-Cをごくわずかに含み、焼土粒を斑状に含む暗褐色土で、ⅩⅡ層土ブロックを含む。
- 6 暗褐色土 炭化物粒を含み、黒色灰を層状に、As-Cをごくわずかに含む。
- 7 暗赤褐色土 ⅩⅡ層土が焼土化したもの。
- 8 褐色土 ⅩⅡ層土主体で、ⅩⅡ層土ブロックを含む。
- 9 褐色土 ⅩⅡ層土を多量に、炭化物粒をごくわずかに含む。
- 10 黄褐色土 As-Cをわずかに含むⅩⅡ層土。
- 11 褐色土 As-Cを含まないⅩⅡ層土。

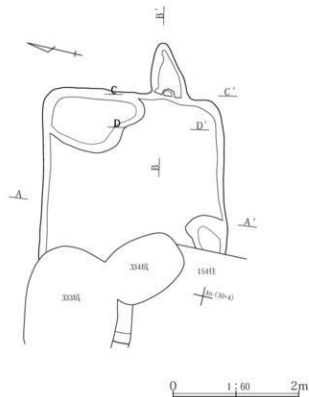
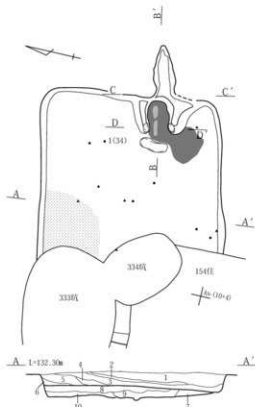
0 1:30 1m

第447図 156号住居カマド

157号住居(第448・449図 P.L.100)

位置:As-10・11グリッド 形状:隅丸長方形 規模:3.45m×2.90m 残存深度:0.30m 主軸方位:E-11°-N 埋没土:Ⅶ層土及びⅩⅡ層土 柱穴:未検出 カマド:東壁の南寄りに検出された。カマド本体を屋内に張り出して構築し、煙道だけを壁外に伸ばしている。燃焼部の側壁から奥壁、及び底面の一部には焼土が形成されていた。また、燃焼部から屋内の右手前方向に薄い黒色灰層が広がっており、灰の掻き出し方向が把握できる好例である。ⅩⅡ層土を使用してカマド本体を構築し、左右の袖先端に、0.3mほどの間隔で礎を構築材として立てており、その前面の床面から焚口部の天井石と見られる大型礎が1点出土している。カマドの主軸方位はE-11°-Nであり、住居主軸方位と一致している。遺物:埋没土中から破片がわずかに出土した。重複:154号住居と重複し、検出状況から157号住居→154号住居である。

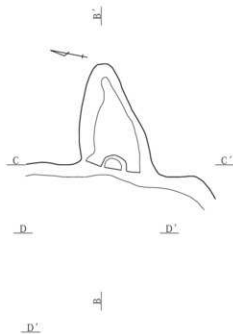
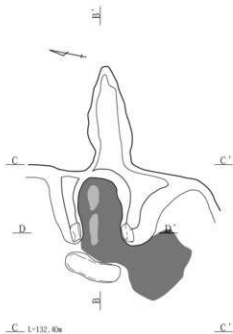
また、北西コーナー部は333号土坑との重複によって失われている。所見:規模・形態ともに156号住居と相似であり、时期的にも近いと考えられることから関連の強い遺構と思われる。南北方向の土層断面観察によれば、北側から埋没していった様子が捉えられるが、ⅩⅡ層土を主体とするブロック状の層が見られ、不自然な堆積状況を示している。中層には南に傾斜する厚さ4cmほどの硬化した層が検出されたが、位置からして床面ではあり得ず、道路をも想定したが連続する面は確認できなかった。しかし、下層の不自然な堆積と一連のものであると想定すると、157号住居は人為的な埋没であった可能性が高い。床面はカマドからの灰の掻き出された面として捉えたが、床面の精査によって貯蔵穴・柱穴の検出はなかった。掘り方は全体に及んでおり、特に北東コーナー部付近がやや深く掘り込まれていた他、南壁中央部に0.13mほど深くなる部分が認められた。時期:7世紀代



A-A'

- 1 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石粒・廻層土を多量に含む暗褐色土で、硬くし
まりが強い。
- 2 灰色土 ニッ岳系軽石粒を含む灰色粘質土。
- 3 褐色土 As-C・ニッ岳系軽石を含む褐色土と廻層土の混土。
- 4 黄褐色土 廻層土主体。
- 5 褐色土 As-C・ニッ岳系軽石を多量に含む褐色土で、廻層土を含む。

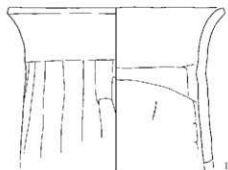
- 6 褐色土 5層土に類似するが、廻層土の含有は5層より多量である。
- 7 褐色土 廻層土ブロックを全体に塊状に、As-Cを少量、炭化物粒をこくわず
かに含み、やや明るい色調を呈する。
- 8 にぶい黄褐色土 廻層土ブロックを含み、As-C・ニッ岳系軽石を少量、炭化
物粒をわずかに含む。
- 9 にぶい黄褐色土 廻層土ブロックを全体に塊状に、As-Cをわずかに含む。
- 10 黄褐色土 廻層土主体で、廻層土を塊状に含む。



第448図 157号住居

B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、XII層土粒・炭化物粒をわずかに含む。
- 2 褐色土 As-Cを少量含むXII層土主体で、焼土ブロックを多量に含む。
- 3 褐色土 As-Cを含むXII層土主体。
- 4 暗褐色土 As-C・焼土粒をごくわずかに含むXII層土。
- 5 褐色土 焼土粒をブロック状に塊状に、As-Cをごくわずかに含むXII層土。
- 6 暗褐色土 I層に類似するが、炭化物は含まない。
- 7 褐色土 XII層土を全体に含むXII層土。
- 8 暗褐色土 As-Cを少量含むXII層土で、XII層土をブロック状に、炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 9 黒褐色土 As-Cを少量含む黒褐色土で、焼土粒をわずかに含む。
- 10 暗褐色土 炭化物粒をごくわずかに含むXII層土。
- 11 にぶい黄褐色土 XII層土を多量に、As-Cをごくわずかに含む。
- 12 黒色灰層
- 13 赤褐色焼土
- 14 黄褐色土 As-Cを含むXII層土主体で、炭化物粒・焼土粒を少量含む。
- 15 黄褐色土 As-Cをわずかに含むXII層土。
- 16 暗褐色土 As-Cを含むXII層土主体で、焼土粒をわずかに含む。
- 17 黄褐色土 XII層土主体で、XII層土ブロックを少量含む。
- 18 黄褐色土 XII層土主体でXII層土ブロックを含む。
- 19 褐色土 XII層土ブロック・As-Cをごくわずかに含む。



0 1:3 10cm

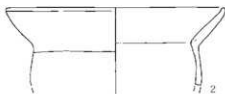
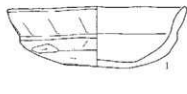
第449図 157号住居カマド土層注記・出土遺物

158号住居(第450～452図 P L.100・101・257)

位置:Ar・As-11・12グリッド 形状:隅丸台形 規模:3.36～3.73m×3.91m 残存深度:0.27m 主軸方位:W-17°-S 埋没土:As-C含有の多いVII層土主体。柱穴:未検出 カマド:西壁の南寄りに検出され、主軸方位をW-23°-Sとしたカマド本体を屋内に張り出させたタイプである。両袖はVII層土類似の土で構築されており、礫などの構築材は見られなかった。燃焼部中央のやや奥側に礫を立てて支脚としており、煙道は燃焼部底面と段差なく壁外へ1.05mほど伸びていた。支脚より屋内側及び煙道側壁の一部には比較的厚い焼土層が形成されており、煙道部中ほどにも焼土層がわずかに検出されているが、これは煙道天井の痕跡の可能性がある。遺物:カマド右袖基部に1の土師器環が1点口縁部を上向き状態で出土しているが、これは袖内部に埋め込まれてい

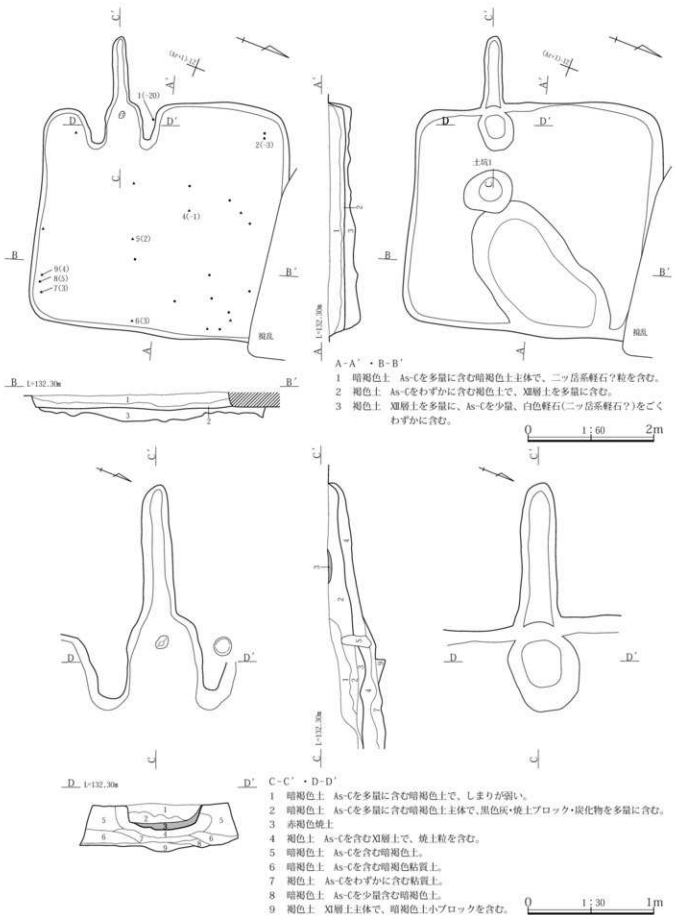
た遺物の可能性がある。また、埋没土中から中央に2カ所穿孔された板状の鉄製品が1点(3)出土した他は、破片と礫が床面付近に散在していた。重複:159号住居と重複し、検出状況から159号住居→158号住居である。所見:XII層土中で平面の確認を行い、As-Cの含有を指標にして明確に輪郭が確認できた住居である。床面は、カマド燃焼部から連続する面、及び遺物出土面として捉えたもので、As-Cの含有が少なくXII層土の含有割合の多い土で構築されていたが、硬化面はまったく認められなかった。床面の精査においては、柱穴・貯蔵穴は検出されず、掘り方の調査においてもカマド前面に径0.70m、深さ0.35mの不整形円の掘り込み(土坑1)を1カ所検出した以外に、貯蔵穴などの痕跡も確認されなかった。

時期:7世紀前半

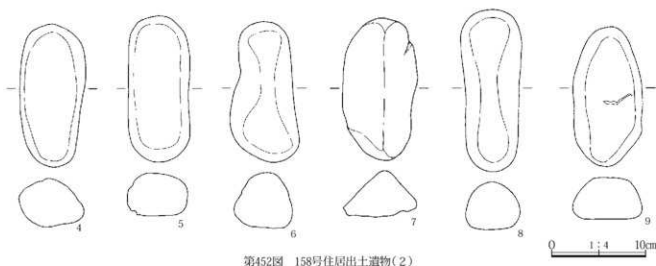


0 1:3 10cm

第450図 158号住居出土遺物(1)



第451図 158号住居

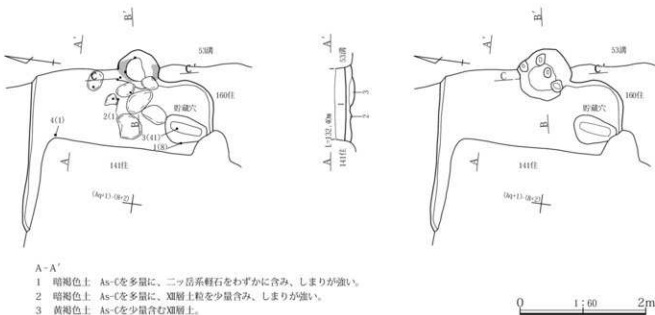


第452図 158号住居出土遺物(2)

160号住居(第453・454図 P.L.101・257)

位置: Aq-8グリッド 形状: 隅丸方形? 規模: (2.60)m×2.35m 残存深度: 0.17m 主軸方位: E-3°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央に検出したが、53号溝によって上部の大半が削平され、燃焼部だけが捉えられた。したがって正確な平面形状が捉えられなかったことから、主軸方位は計測できなかった。燃焼部底面は焼土化していたが、支脚痕跡や袖構築材などは残存せず、掘り方においても明確な痕跡は検出されなかった。遺物: カマド前面の床面から礫に混じって灰釉陶器碗(2)が出土し、これらの上層から扁平な大形礫が3点出土した。特筆される遺物は、北壁寄りの床面から出土した鉄鍬(4)である。重複: 141・

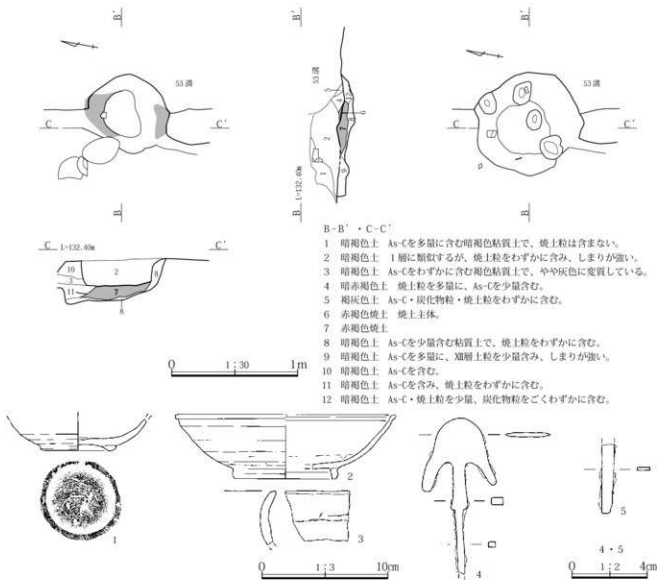
178号住居と重複し、検出状況から178号住居→160号住居→141号住居と思われる。所見: 西側を141号住居、東側を53号溝との重複によって削平されているため、わずかにカマドから南東コーナー部、及び北壁が残存した。床面は、カマド前面を主体に全体の1/3程度を検出した。床を構築している土は、埋没土と同程度のAs-Cを含有しているが、XII層土粒を含み、埋没土よりも締りが強く一部硬化していたことから容易に捉えることができた。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出されることを予測していたが、やや西寄りに偏った位置で検出した0.68×0.45m、深さ0.38mの不整形円形を呈する掘り込みが該当するものと考えられる。掘り方は全体に及んでいたものと思われるが、詳細は不明である。時期: 10世紀前半



A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、二ツ岳系軽石をわずかに含み、しまりが強い。
- 2 暗褐色土 As-Cを多量に、XII層土粒を少量含み、しまりが強い。
- 3 黄褐色土 As-Cを少量含むXII層土。

第453図 160号住居

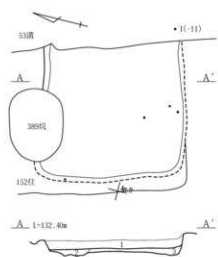


第454図 160号住居カマド・出土遺物

161号住居(第455図 P L.101・102・257)

位置: Ap・Aq-8・9グリッド 形状: 隅丸長方形?
 規模: (2.13)m×2.23m 残存深度: 0.14m 主軸方位:
 E-16°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カ
 マド: 152号住居に伴うとしたカマドが161号住居のカマ
 ドの可能性ある。 遺物: 53号溝底面で口縁部を上
 にして出土した土師器環(1)が161号住居に伴うものであ
 る可能性がある。 重複: 152・178号住居と重複し、検
 出状況から178号住居→161号住居→152号住居の可能性
 が高い。 所見: 当初は161号住居の存在はわからなかつた
 が、152号住居の掘り方調査において南側に重複する
 住居のあることが判明した。東壁は53号溝との重複に
 よって失われているが、53号溝の東壁近くに位置してい
 たと仮定すると、東西方向が長辺となる隅丸長方形平面

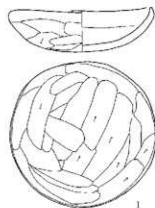
を有するものと考えられ、152号住居としたカマドが161
 号住居に伴うものであるとすると短辺の中央に位置する
 ことになり、より自然な位置関係となる。また、152号
 住居の床面とカマド燃焼部底面との比高が比較的大きい
 のに対して、161号住居では床面標高が152号住居よりも
 0.15mほど下がった位置にあることから、床面と燃焼部
 底面との比高が縮まり、こちらも不自然さが払拭される。
 以上のことから152号住居のカマドとして報告したものは、
 161号住居に伴う可能性があるが、どちらも直接に
 確認されたものではないため、調査時点の見解を優先し
 て報告した。53号溝底面の1の土師器環が出土した位置
 が貯蔵穴に当たるものと考えられるが、貯蔵穴底面だけ
 が残存したもので平面形など詳細は不明である。 時期:
 7世紀後半



A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、二ッ岳系軽石を均一に少量含み、しまりが強い。
- 2 暗褐色土 XII層上粒を多量に、As-Cを少量、二ッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 3 褐色土 XII層上粒・ブロックを含み、As-C・二ッ岳系軽石を少量含む。

0 1:60 2m



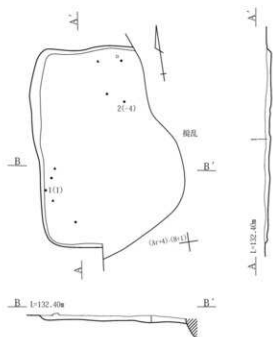
0 1:3 10cm

第455図 161号住居・出土遺物

162号住居(第456図 P.L.102・257)

位置:Ar-8 グリッド 形状:隅丸長方形 規模:(2.28)m×3.17m 残存深度:0.07m 主軸方位:E-8°-S 埋没土:VII層土主体で、締りが強い。柱穴:未検出 カマド:未検出 遺物:西壁際から灰軸陶器碗(1)などの破片がわずかに出土した。重複:東側が病院建物によって攪乱されている。所見:1面調査の時

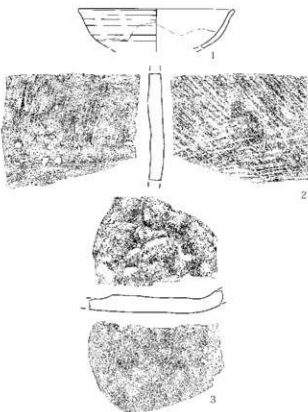
点で建物による攪乱部分の壁面に住居の掘り込みを確認した。2面調査においてIX層中では確認できず、XII層まで下げた時点で、平面形を捉えることができた。確認面が下がったために残存状況は不良で、壁の残存もわずかである。床面はXII層土中にあり掘り方は行われていない。時期:10世紀前半



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、二ッ岳系軽石をわずかに含み、しまりが強い。

0 1:60 2m



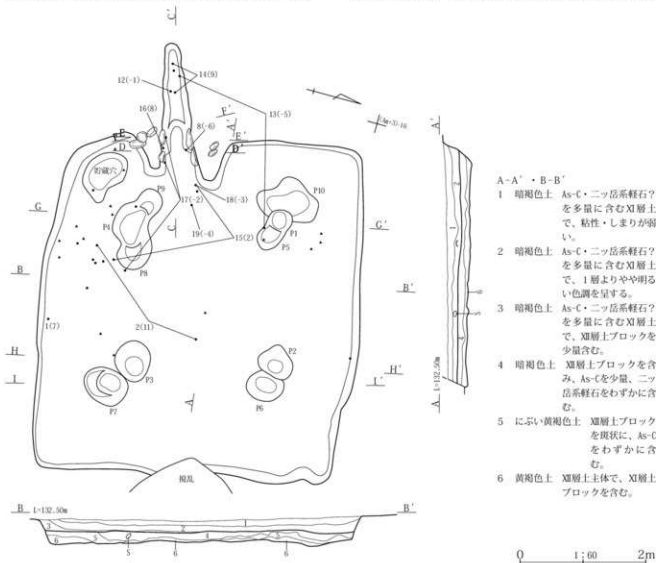
0 1:3 10cm

第456図 162号住居・出土遺物

167号住居(第457～460図 P.L.102・103・257)

位置: Am・An-15・16グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 5.36m×5.13m 残存深度: 0.25m 主軸方位: W-13°-S 埋設土: VII層土主体 柱穴: 検出位置から柱穴と見られる掘り込みを9カ所検出した。検出の状況から最終的な柱穴は、P 1(径0.37m、深さ0.65m、円形)、P 2(0.58×0.45m、深さ0.45m、不整楕円形)、P 3(径0.58m、深さ0.55m、円形)、P 4(0.72×0.55m、深さ0.52m、楕円形)の4本で、柱穴間の距離は、ほぼ2.30m前後と揃っている。P 1にはP 5(径0.35m、深さ0.59m、円形)、P 2にはP 6(0.60×0.48m、深さ0.47m、楕円形)、P 3にはP 7(0.72×0.56m、深さ0.54m、楕円形)、P 4にはP 8(0.65×0.50m、深さ0.43m、楕円形)とP 9(径0.40m、深さ0.34m、円形)の柱穴が重複しており、1段階前の柱穴であった可能性があり、わず

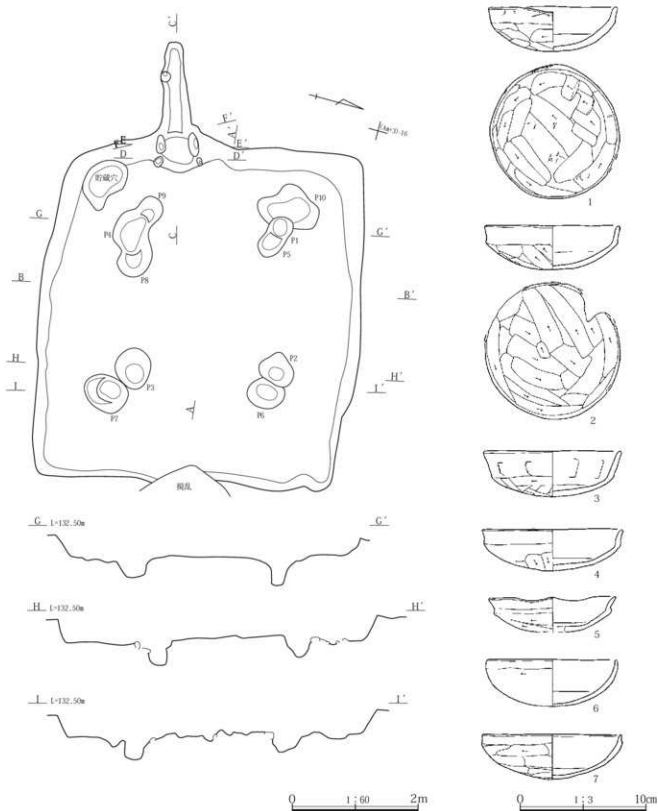
かに西側に柱穴位置を移動させて建替えが行われたものと考えられる。P 1の西側にP 10(1.00×0.70m、深さ0.44m、不整形)が重複しており、P 9に対応する柱穴である可能性もあるが、やや規模が異なっていることから柱穴には含めなかった。カマド: 西壁中央のやや南寄りに検出した。屋内側に0.75mほど張出した袖が検出され、煙道が壁外に1.50mほど伸びていることが確認されたことから、燃焼部が屋内に設けられたカマドであることがわかる。袖の内壁に当たる部分には左右2カ所に礎を立て、袖基部の内部になる位置には、やや小振りの礎が左右各3点据えられていた。右袖先端には、土師器長胴甕が1点、口縁部を下にして据えられており、これらをやや粘性のあるXI層土で覆ってカマド本体を構築していたものと考えられる。左袖は右袖と同じ位置までは残存しておらず、本来は先端に甕が据えられていたもの



第457図 167号住居

と思われるが、廃棄に際して破壊されたものか痕跡も検出されなかった。袖間中央と煙道中央を結んだ位置で計測したカマド主軸方位は $W-19^{\circ}-S$ であり、住居北壁で計測した住居主軸方位よりもやや南に振れている。煙

道部の焼土はあまり顕著でなかったが、燃焼部底面には厚さ8cmほどにもなる焼土が形成されていた。遺物：南壁中央で壁上から落ち込んだような状況で完形の土師器環(1)が出土し、カマド焚口に当たる位置から土師

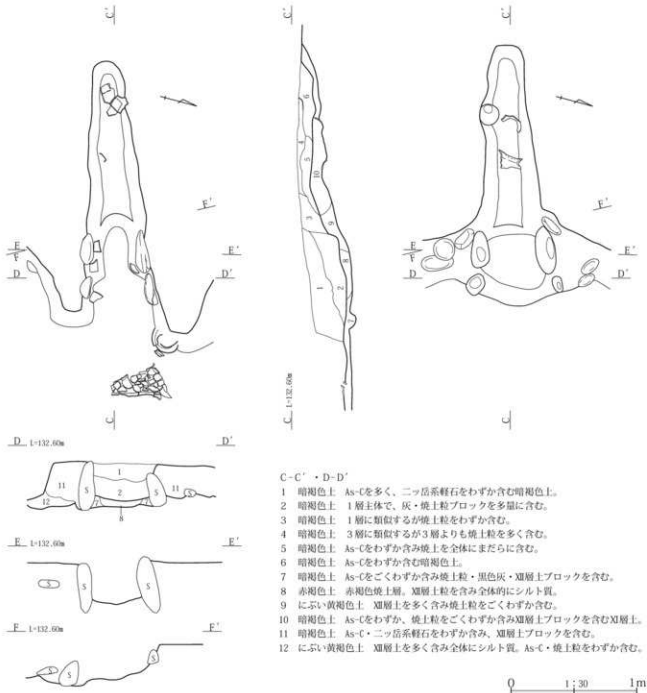


第458図 167号住居掘り方・出土遺物(1)

器裏(18・19)が横位に潰れた状態で出土した。他にカマド煙道部及び南西コーナー部の貯蔵穴周辺に破片がやや多く出土した。重複：北西コーナー部で119号住居と重複し、検出状況から167号住居→119号住居と考えられる。所見：ⅩⅩ層土中で確認を行い、墓によって攪乱されていた東壁以外の部分は比較的良く確認することができた。東壁はⅩⅩ層土の深い位置まで掘削されていたため、結果的には床面は壊されてしまい掘り方として位置を捉えた。床面は西側2/3ほどを確認することができた

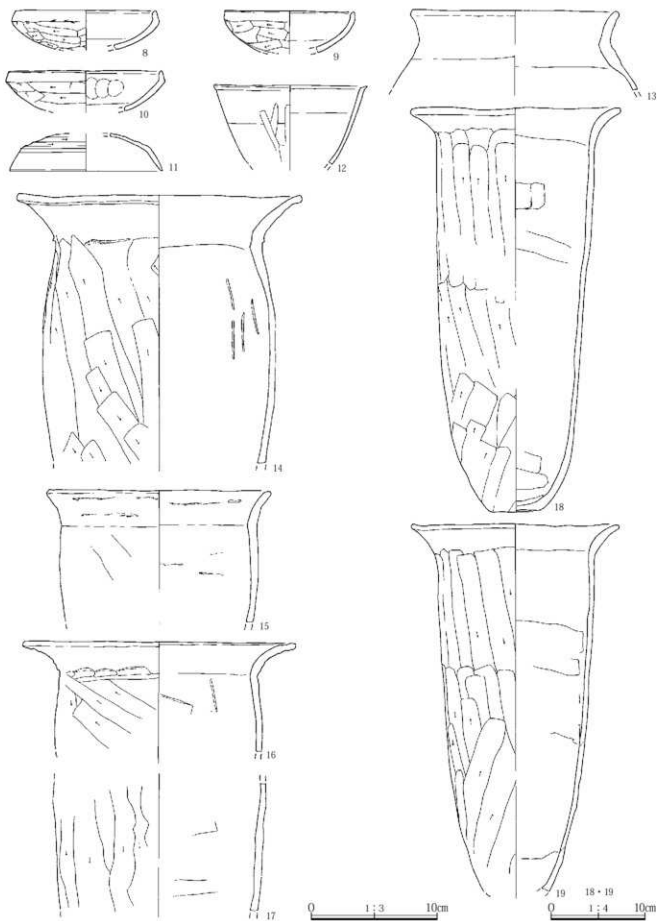
が、硬化面は検出されなかったため、遺物の出土面として捉えたもので、ⅩⅩ層土ブロックの含有量が埋没土と比較すると多い傾向がある。貯蔵穴は床面精査の際に南西コーナー部に検出され、0.80×0.55m、深さ0.35mの楕円形を呈している。土器片がわずかに出土した以外に特に際立った特徴は見られない。掘り方は全体に及んでおり、柱穴は掘り方調査において検出したものである。

時期：7世紀後半



第459図 167号住居カマド

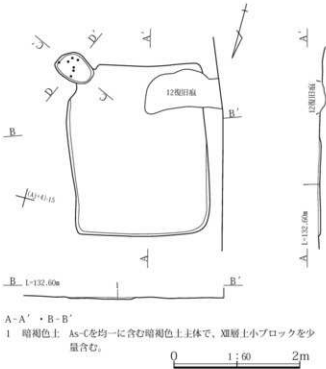
第5章 2面の調査（中世～古墳時代後期）



第460図 167号住居出土遺物(2)

168号住居(第461図 P.L.103)

位置: Aj-15グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.18m×2.70m 残存深度: 0.04m 主軸方位: E-15°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 南東コーナー部に検出したもので、平面形が確実に捉えられないが、主軸方位はE-25°-Sと推定した。燃焼部底面が残存したものと考えたが、焼土の形成はなく、わずかに焼土大粒が集中して検出されたことでカマドと判断した。基本的には燃焼部が壁外に設けられたタイプと

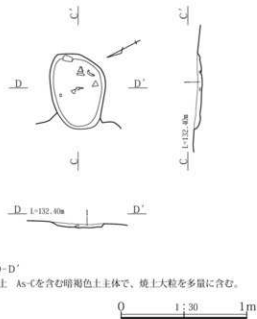


第461図 168号住居

170号住居(第462・463図 P.L.103・104・258)

位置: Aj-14・15グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 3.51m×3.98m 残存深度: 0.30m 主軸方位: W-15°-S 埋没土: As-C含有量がやや少ないⅦ層土相当の土層主体で、下層に炭化物和灰の含有が多い。柱穴: 未検出 カマド: 西壁中央南寄り検出したが、煙道部は調査区境に伸びていたため調査ができなかった。袖は屋内に張り出しており、先端に礫が設置されそこに天井石が載った状態で残存した。支脚は、カマド両側の住居壁を結んだ線上に位置しており、燃焼部主体が壁をわずかに掘り込んだ位置であったことがわかる。燃焼部側壁は比較的奥まで焼土化していた。両袖の中央と煙道入口を結んだ位置を計測した主軸方位はW-24°-Sであり、167号住居と類似してカマドの主軸方位が住居主軸

考えられるが、構造の詳細は不明である。遺物: カマド燃焼部と考えられる場所から土器片がわずかに出土した。重複: 近い時期の遺構との重複はなく、1面の12号復旧痕によって西壁の一部が削平されている。所見: Ⅻ層土で確認を行った結果、かろうじて平面形を捉え得る程度しか残存していなかった。カマドの残存状況から見て、検出時点で床面はすでに失われていたものと考えられ、検出したのは掘り方の一部と思われる。時期: 不明

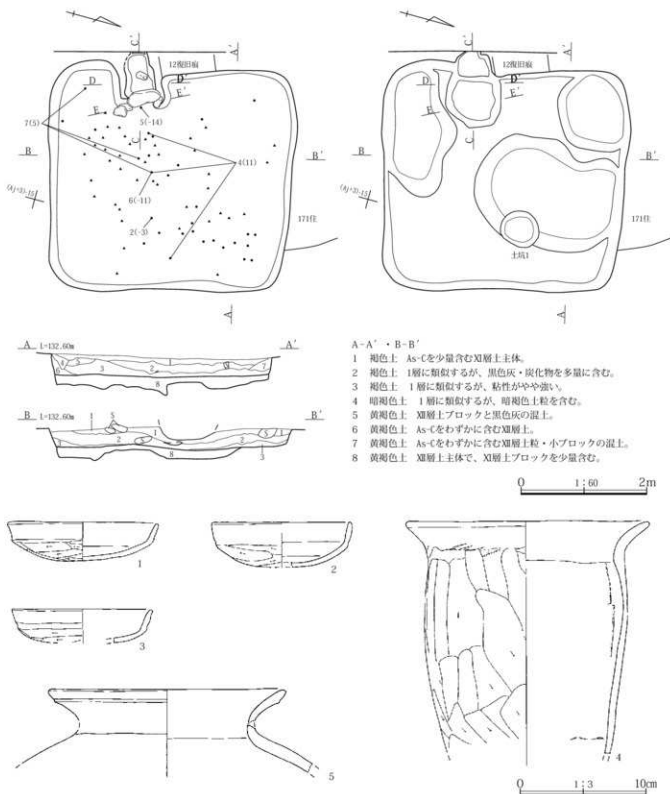


168号住居

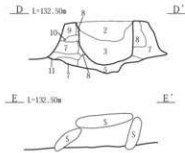
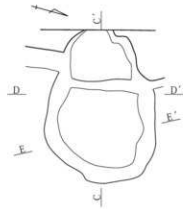
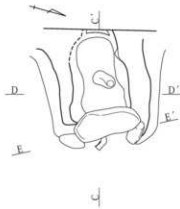
方位と比較してやや南に振れる傾向が認められる。遺物: 床面から浮いた位置に扁平な礫が集中して出土しており、住居埋没過程の中で集中的に廃棄されたものと考えられる。土器は完形に近いものは土器器裏2点(6・7)で中央から、口縁部付近が残存した須恵器裏は、北東コーナー部近くの埋没土中から出土したものであり、それ以外の破片は壁間から出土した。重複: 169・171号住居と重複し、検出状況から169・171号住居→170号住居と考えられる。所見: Ⅻ層土中でAs-Cの含有を指標として住居範囲を確認した結果、壁は全周比較的良好な状態で検出することができた。床面を構成するⅪ・Ⅻ層土ブロックの混土と、炭化物和灰を多く含有する埋没土との違いが明瞭であり、床面は比較的容易に捉えることができた。床面精査において柱穴、貯蔵穴と思われる掘り込

みは検出できなかった。掘り方は全体に及んでいたが、特に南西・北西コーナー部及び中央北寄りの位置がやや深く掘り込まれていた。この中央の掘り込みの東寄りの位置から径0.56m、深さ0.31mの円形を呈する土坑1が検出され、底面から口縁部の欠損した小形丸底壇が出土

したが、170号住居の埋没土中から出土した遺物と比較すると明らかに古く、170号住居に伴う可能性が低いことから、重複している171号住居の貯蔵穴が、痕跡的に残存した可能性がある。 時期：7世紀前半



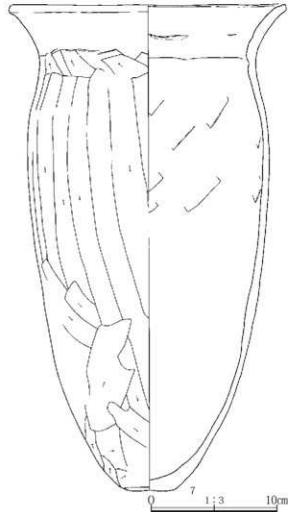
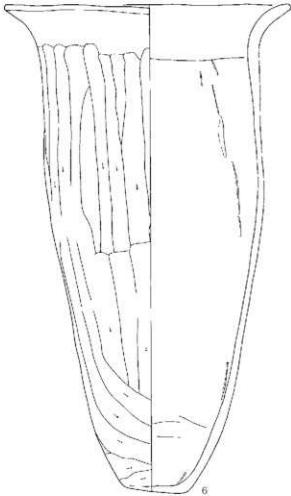
第462図 170号住居・出土遺物(1)



C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 白色軽石粒・XI層上粒・炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 2 暗黄褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、XI層上ブロックを少量含み、しまりが強い。
- 3 暗黄褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、焼土粒・小ブロックを少量含み、しまりが強い。
- 4 暗黄褐色土 As-Cをわずかに含む粘質土。
- 5 暗黄褐色土 XI層上主体で、XI層上ブロック・焼土粒を含む。
- 6 黄褐色土 XI層上主体で、XI層上粒を含む。
- 7 黄色土 XI層上。
- 8 赤褐色焼土 XI層上が焼土化。
- 9 黄褐色土 XI層上。
- 10 暗褐色土 As-Cを少量含むXI層上。
- 11 暗褐色土 10層に同じ。

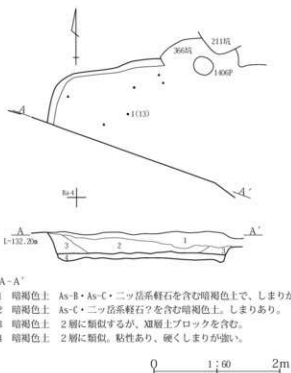
0 1:30 1m



第463図 170号住居カマド・出土遺物(2)

172号住居(第464図 P.L.104)

位置: At・Ba- 4 グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: 2.71m×(1.67)m 残存深度: 0.45m 主軸方位: E-7°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 埋没土中からわずかに破片が出土した。重複: 東側は366号土坑などとの重複によって失われている。所見: 調査区南端で検出したもので、南側2/3程度が調査区外に位置しているものと考えられる。埋没土の状況からカマドが設置されている時期と見て間違いはないが、カマドは調査区外の東壁南寄りにあるもの

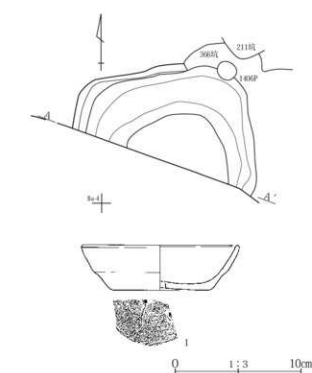


第464図 172号住居・出土遺物

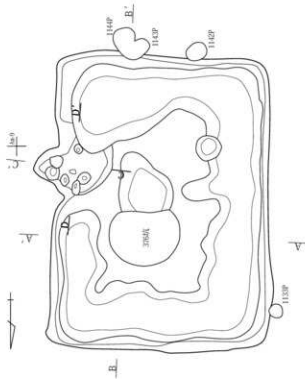
175号住居(第465・466図 P.L.104・258)

位置: Al- 8・9 グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 3.41m×4.67m 残存深度: 0.32m 主軸方位: E-0°-N 埋没土: As-C含有がやや多いVII層土主体で、締りが弱い。柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央南寄りに検出された。わずかに袖の痕跡が認められることから、燃焼部は屋内側にわずかに張り出して構築されていたものと考えられる。掘り方の調査で、ピット状の掘り込みが数カ所検出されており、袖などに構築材が使用されていた可能性があるが、まったく残存していなかった。燃焼部底面は焼土化しており、焚口部付近には掻き出された黒色の薄い灰層が残存していた。想定されるカマドの主軸方

と思われる。西側の壁は比較的残存状態が良好であったが、東側は土坑と関連するものかV層土が深くまで及んでおり、中世段階で上部が擾乱されている。床面は、VII層土類似の土層によって構築されており、硬化と表現するほどに硬くはないが、粘性があり締りがある。検出された部分においては、貯蔵穴、柱穴となるような掘り込みは掘り方調査においても検出されなかった。掘り方は全体に及んでおり、細かな凹凸を捨象してみると壁に沿ってやや深く掘り込む傾向が窺える。時期: 8世紀代

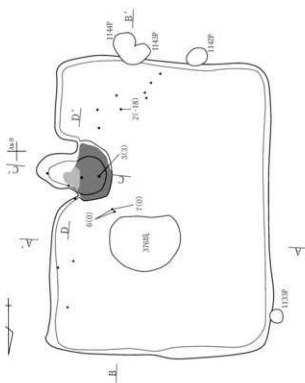


位は E-1°-S であり、西壁をもとに計測した住居主軸方位とほぼ一致する。遺物: 須恵器と土師器の破片の他に、羽口1点、7の棒状の鉄製品が出土した。重複: 127号住居と重複し、検出状況から175号住居→127号住居である。所見: 127号住居と同一遺構として調査開始したが、埋没土の掘り下げが進んだ段階でカマドが確認されたために175号住居として分離した。想定した主軸方位には若干の違いが認められるものの、127号住居とは北壁・南壁の位置はほぼ一致しており、建て替えなどのような関係であった可能性があろう。掘り方は壁に沿ってわずかに深く掘られており、この段階においても柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。時期: 8世紀後半

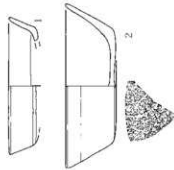
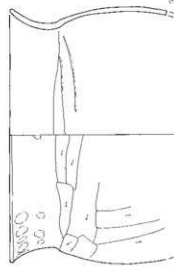
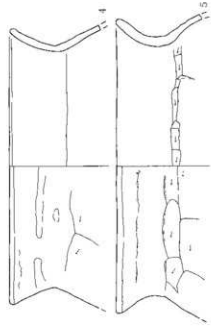


A・A'・B・B'

- 1 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、燧石土ブロックを含み、しまりが強い。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、燧石土粒・ブロックを含み、しまりが強い。
- 3 暗褐色土 As-Cを多量に含み、しまりが強い。
- 4 暗褐色土 燧石土ブロックを含み、As-C・焼土粒・ブロック(径10～30mm)、炭化物を少量含む。
- 5 にお、黄褐色土 4層に類似するが、燧石土粒を多量に含み、燧石土ブロックは含まない。
- 6 にお、黄褐色土 燧石土ブロックを多量に、As-Cを少量、炭化物を少量含む。
- 7 にお、黄褐色土 5層に類似するが、炭化物をくわずかに含み、燧石土は含まない。

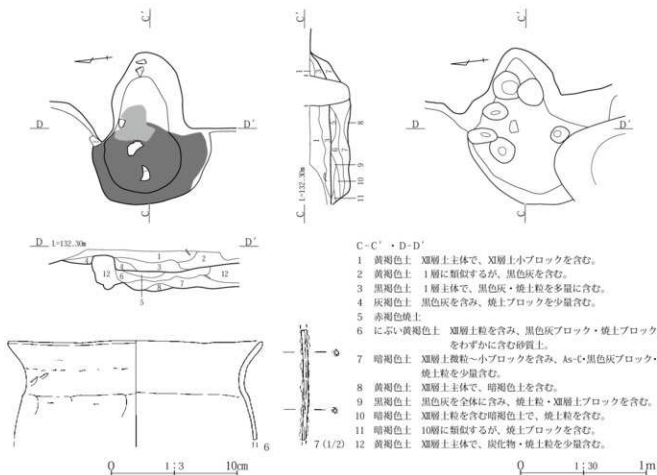


R. 1-12.5m
1:60 2m



1:3 10cm

第465図 175号住居・出土遺物(1)



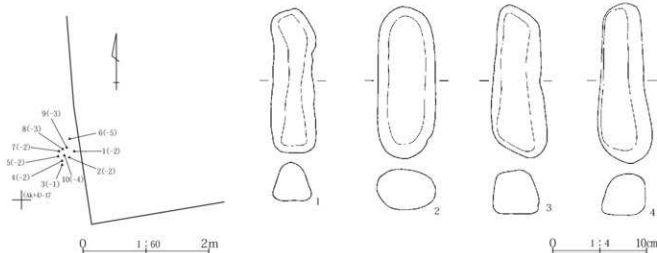
- C-C'・D-D'
- 1 黄褐色土 X層土主体で、X層土小ブロックを含む。
 - 2 黄褐色土 1層に類似するが、黒色灰を含む。
 - 3 黒褐色土 1層主体で、黒色灰・焼土粒を多量に含む。
 - 4 灰褐色土 黒色灰を含み、焼土ブロックを少量含む。
 - 5 赤褐色焼土
 - 6 にぶい黄褐色土 X層土粒を含み、黒色灰ブロック・焼土ブロックをわずかに含む砂質土。
 - 7 暗褐色土 X層土微粒～小ブロックを含み、As-C・黒色灰ブロック・焼土粒を少量含む。
 - 8 黄褐色土 X層土主体で、暗褐色土を含む。
 - 9 黒褐色土 黒色灰を全体に含み、焼土粒・X層土ブロックを含む。
 - 10 暗褐色土 X層土粒を含む暗褐色土で、焼土粒を含む。
 - 11 暗褐色土 10層に類似するが、焼土ブロックを含む。
 - 12 黄褐色土 X層土主体で、炭化物・焼土粒を少量含む。

第466図 175号住居カマド・出土遺物(2)

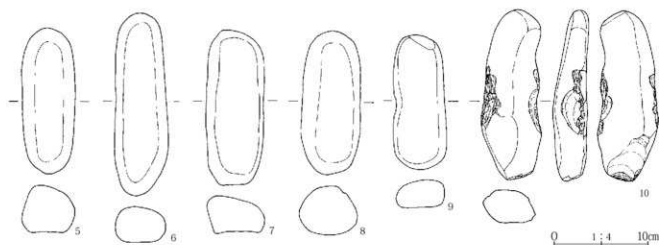
176号住居(第467・468図 P L.105)

位置: Ak-17グリッド 形状: 不明 規模: 不明 残存深度: 0m 主軸方位: 不明 埋没土: VII層土 柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 棒状礫が10点一方所に集中して出土した。 重複: 不明 所見: 2面遺構の確認時点で、調査区際のVII層土類似の土層中で棒状礫が面

的に集中出土したために、住居床面の一角との想定のもとに精査を行ったが、壁などはまったく検出することができなかった。棒状礫の出土状況は、これまでの調査事例と比較して住居床面から出土する状況に酷似しているため、住居の一角が残存したものと見て間違いはないであろう。 時期: 不明



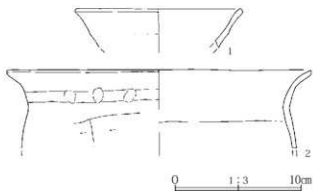
第467図 176号住居・出土遺物(1)



第468図 176号住居出土遺物(2)

179号住居(第469図 P.L.98・105)

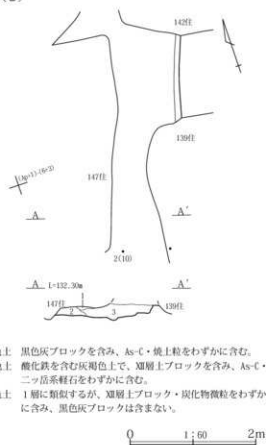
位置: Ap・6グリッド 形状: 不明 規模: 不明 残存
 深度: 0.20m 主軸方位: E-17°-S 埋没土: VII層
 土主体 柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 破片出土。
 重複: 139・142・147・180号住居と重複し、検出状況及
 び出土遺物の比較から179号住居→180号住居→139・147
 号住居→142号住居と考えられる。 所見: 住居との重
 複及び溝による削平などがあり、東壁と床面のごく一部
 を検出したもので、住居の一部であることは確実である
 が詳細は明らかにできなかった。 時期: 9世紀代



第469図 179号住居・出土遺物

180号住居(第470図 P.L.105)

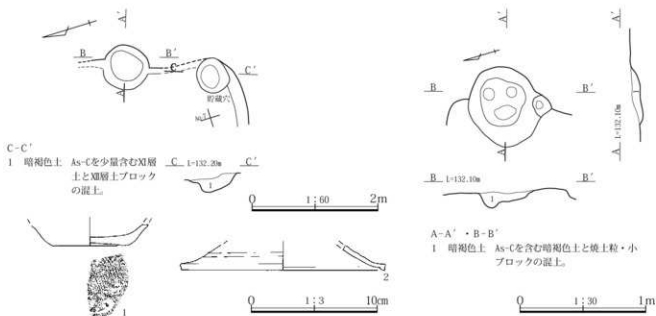
位置: Ap・Aq-6・7グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0.10m 主軸方位: 不明 埋没土: 不明
 柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに位置しているもの
 と思われ、焼土粒と小ブロックが集中する範囲をカマ
 ド燃焼部の痕跡と捉えた。したがって袖などの痕跡はす
 でなく構造の詳細は不明である。 遺物: 埋没土中か
 らごくわずかに破片が出土した。 重複: 139・142・179



A-A'

- 1 灰褐色土 黒色灰ブロックを含み、As-C・焼土粒をわずかに含む。
- 2 灰褐色土 酸化鉄を含む灰褐色土で、XI層土ブロックを含み、As-C・ニッ係系軽石をわずかに含む。
- 3 灰褐色土 I層に類似するが、XI層土ブロック・炭化物微粒をわずかに含む、黒色灰ブロックは含まない。

号住居と重複しているが、検出状況から179号住居→180
 号住居→139号住居→142号住居と考えられる。 所見:
 遺構の掘り込みが浅かったようで、XI層土中の平面確認
 では壁の残存はほとんど見られなかった。その上周囲で
 他の遺構と複雑に重複しているため、断片的な検出と
 なった。その結果、カマド痕跡と南東コーナー部と思わ
 れる位置から、径0.48m、深さ0.13mの円形を呈する貯
 蔵穴と見られる掘り込みを検出した。 時期: 9世紀代



第470図 180号住居・出土遺物

(2) 溝

7号溝(第471図 P.L.105)

位置: Ba ~ Bd-15・16グリッド 規模: 11.80m × 1.70m 残存深度: 0.43m 走行方位: E-23°-N 遺物: 灰軸陶器の破片がわずかに出土した。 所見: II区の東寄りの部分は、復旧痕が浅い位置で終わっているため、古代の遺構などが比較的良好に残存していた場所である。7号溝は、この部分の1号溝と市道との間に検出した。Ⅵ層土を取り去った面の下層で遺構の確認ができ、溝の堆積土中にAs-Bの混入が認められないことから古代の遺構と見てよいであろう。西側は1号溝やその西側の8号溝との重複によってわからないが、東側については、田口下田尻遺跡II区44号溝が7号溝延長線上に乗っており、さらに規模的にも類似していることから、44号溝へとつながっていたものと考えられる。底面は両端がやや窪んでおり、粗粒砂などの堆積が認められないことから通水されていた可能性は低い。また、底面に明確な硬化面も検出されていないことから道路とも考えにくい。

17号溝(第471図 P.L.105)

位置: Bb・Bc-16グリッド 規模: (2.50)m × 0.35m 残存深度: 0.13m 走行方位: E-20°-N 遺物: なし 所見: 2号住居との重複で東側が削平されており、全体を知ることはできない。当初は黒褐色を呈する埋没土の状況から古墳時代前期の遺構と考えていたが、上層はⅦ層土類似であることが判明したことから2面として

扱った。18号溝とは走行方向は異なっているが、埋没土をはじめとする状況が類似していることから、密接な関係にあるものと思われるが、具体的な内容は不明である。

18号溝(第471図 P.L.105)

位置: Bc-16グリッド 規模: (2.75)m × 0.46m 残存深度: 0.16m 走行方位: N-7°-W 遺物: なし 所見: 2号住居と7号溝との間に検出したもので、埋没土などが17号溝と類似しており、関連する遺構である可能性が高い。しかし、検出した範囲も狭く機能等詳細について判断する材料に乏しい。

71号溝(第471図 P.L.106)

位置: Bb-13グリッド 規模: 1.60m × 0.35m 残存深度: 0.41m 遺物: 釘と思われる鉄製品(1)が1点出土した。 所見: 97号住居の調査に伴って検出したもので、住居との重複によって大半が失われたものと考えられる。溝として扱ったが、掘り方も曖昧で深さも一定しないため全体の様相は不明である。

74号溝(第472図)

位置: Ba-7・8グリッド 規模: 1.58m × 0.54m 残存深度: 0.27m 遺物: なし 所見: 病院の建物による擾乱を受けなかったわずかの空間で検出したもので、106号住居との重複で南側が不明瞭になっている。掘削の状況から溝であることは確実であるが、本来の規模は推定することができない。

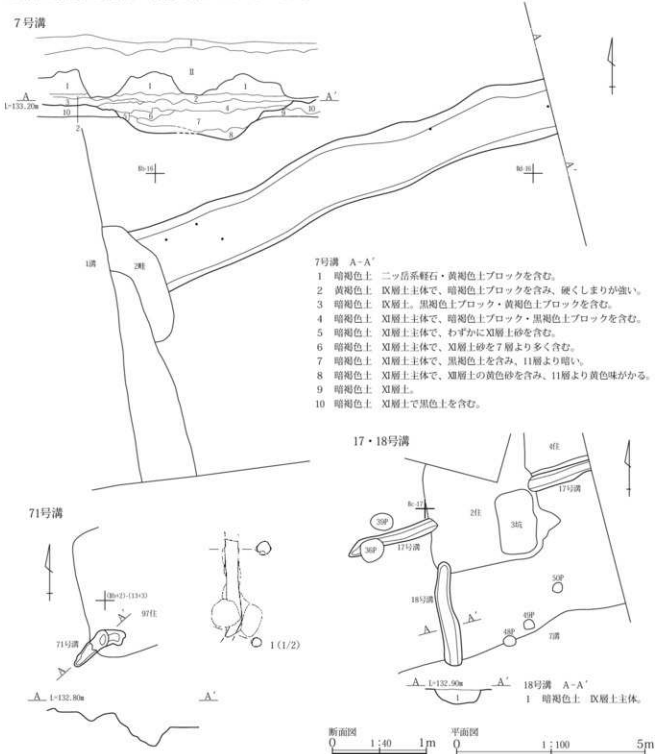
81号溝(第472図 P.L.106)

位置: An・Ao- 5～8グリッド 規模: 14.45m×0.54

～1.86m 残存深度: 0.64m 走行方位: N-3°-W

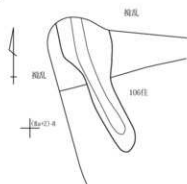
遺物: 須恵器の破片が出土。 所見: 調査区南端で検出したもので、条件の良い場所での走行方位の計測値を掲載したが、小さく蛇行しており一定していない。掘り方も曖昧で北端部は先細りの状態で終わっていることから

先に延びていた可能性が高い。堆積土層中にはAs-C及び二ツ岳系軽石と思われる軽石が認められ、溝の検出面より上層にV層土があることから2面II期の遺構であると判断した。埋没土下層に粗粒砂などの堆積は認められず、通水された溝ではないものと思われるが、掘り方が曖昧であり区画を目的とした溝とも考えにくい。

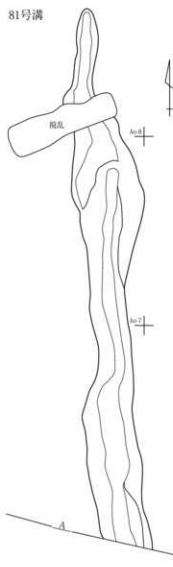


第471図 7・17・18・71号溝・出土遺物

74号溝

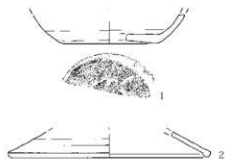
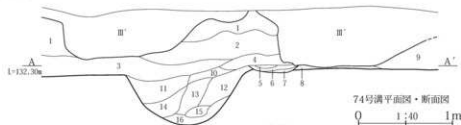


81号溝

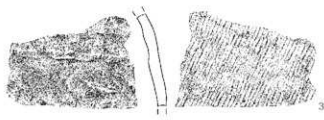


81号溝 A-A'

- 1 暗褐色土 B層上でAs-C・ニッ岳系軽石・炭化物の微粒をわずかに含む。
- 2 黒褐色土 1層に類似するが、As-Cの含有量が多い。
- 3 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石を少量含むB層上で、XII層上微粒～小ブロックおよび炭化物微粒をわずかに含む。
- 4 灰黄褐色土 XII層上ブロックを斑状に含み、As-C・炭化物微粒をごくわずかに含み、粘性がやや強い。
- 5 灰黄褐色土 4層に類似するが、灰色粘土の小ブロックを含む。
- 6 灰黄褐色土 4層に類似するが、酸化鉄を含む。
- 7 褐色土 XII層上を全体に含み、灰黄褐色土・酸化鉄を含むXII層上。
- 8 褐色土 7層に類似するが、酸化鉄をほとんど含まない。
- 9 灰褐色土 As-Cを少量含む灰褐色土で、XII層上を斑状に含み、酸化鉄を含む。
- 10 暗褐色土 3層に類似するが、As-C・ニッ岳系軽石の含有はごくわずかである。
- 11 暗褐色土 As-Cをわずかに含み、境上の細粒・炭化物の微粒をごくわずかに含む。
- 12 にぶい黄褐色土 XII層上ブロックを全体に斑状に含み、酸化鉄を含むにぶい黄褐色シルト質土。
- 13 暗褐色土 XII層上ブロックを斑状に含み、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに、炭化物の微粒をごくわずかに含む。
- 14 暗褐色土 11層に類似するが、ニッ岳系軽石をわずかに含み、XII層上ブロックを含む。
- 15 にぶい黄褐色土 12層に類似するが、境上の微粒～細粒を少量含む。
- 16 褐色土 XII層上が主体で、XII層上を斑状に含む。



81号溝



第472図 74・81号溝・出土遺物

(3) 土坑

埋没土や検出状況、出土遺物などから2面II期に帰属す

ると考えた土坑は多数あるが、個別記載をせずに計測値等の基本的な項目を一覧で提示した。

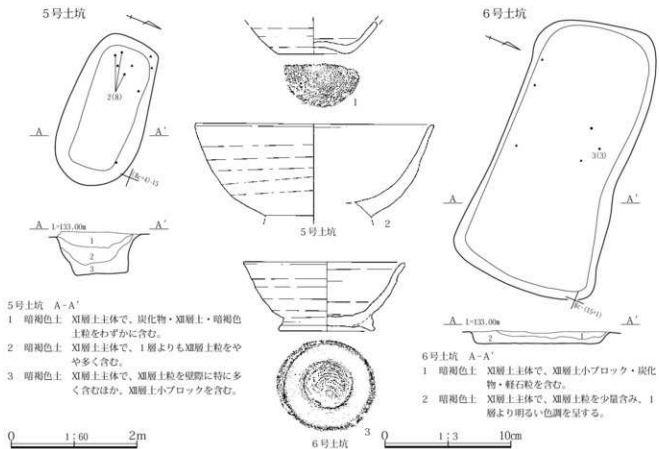
第8表 田口上田尻遺跡 II期土坑一覧表

番号	種類	P.L	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考	
5	土坑	473	106	Bc-14	竪丸長方形	2.45×1.25×0.65	E-0°-N	須恵器	Ⅱ期土	10世紀後半
6	土坑	473	258	Bb・Bc-14・15	竪丸長方形	4.42×1.95×0.20	E-0°-N	須恵器	Ⅱ期土	10世紀後半
7	土坑			As-14	竪丸長方形	1.42×0.93×0.24	E-15°-N			
10	土坑	474	106	At-14	楕円形	0.90×0.78×0.07	N-7°-W		Ⅱ期土	
12	土坑	474	106・258	At・Ba-14	楕円形	1.97×(1.25)×0.60	E-0°-N	土師器	Ⅱ期土	7世紀後半
13	土坑	474	106	Ar-20	楕円形	1.16×0.92×0.22	N-2°-E			
15	土坑	474	106	Ar-20	竪丸方形?	1.64×1.34×1.00	N-22°-W		Ⅱ期土	
16	土坑		106	Ar-19・20	楕円形	1.20×0.80×0.23	N-12°-W			
18	土坑		106	Ar-19	竪丸方形?	1.22×(0.56)×0.32				
19	土坑		106	Ar・As-20	楕円形	1.75×1.03×0.98	E-42°-N			
20	土坑		106	Aq・Ar-20	不整楕円形	2.25×1.47×0.25	N-15°-W			
28	土坑			Bb-18	楕円形	0.91×0.71×0.25	E-0°-N	須恵器		
29	土坑			Bc-18	円形	0.89×-×0.37				
30	土坑			Bc-17	竪丸長方形	1.20×0.96×0.13	E-10°-S			
31	土坑		106	Ar・As-20	不整形	1.67×(0.67)×0.50				
32	土坑	474	107	Ar-20	楕円形	1.75×1.35×0.68	E-40°-N		Ⅱ期土	
33	土坑	474	107	Ar-19	不整形	1.53×-×0.27			Ⅱ期土	
36	土坑			Ba-15・16	不整形	(4.24)×(1.92)×0.55		灰釉陶器		10世紀代
37	土坑			Ar-15	不整形	(3.08)×(1.47)×0.16				
38	土坑	474	107	Ar・As-16・17	竪丸方形	1.30×1.20×0.13	E-22°-N		Ⅱ期土	
39	土坑			Ad-19	不整形	(3.26)×(2.45)×0.28				
41	土坑	474	107	Ac・Ad-22	不整形	2.27×1.44×0.21				
42	土坑	474	107	Ac-20・21	竪丸方形	2.48×2.38×0.68	E-0°-N		Ⅱ期土	
43	土坑	474	107	Ac-20・21	竪丸方形?	(0.88)×(0.82)×0.24	N-6°-W		Ⅱ期土	
44	土坑	474		Ad-20・21	竪丸長方形?	1.42×(1.12)×0.25	E-23°-N		Ⅱ期土	
46	土坑	474		Ad-21	竪丸長方形	2.93×(1.03)×0.40	E-14°-N			
58	土坑	475		Ad-22	竪丸方形?	1.25×0.96×0.20	E-6°-N		Ⅱ期土	
63	土坑	475	107	Al・Aj-21	円形	0.90×-×0.23			砂質土	
64	土坑	475	107	Aj-21	不整形	1.05×-×0.32			Ⅱ期土	
68	土坑			Ah-22	不整形	0.99×(0.78)×0.40				
69	土坑			Ag・Ah-21	不整形	24.6×1.50×0.16				
82	土坑			Aj-19	楕円形	(0.67)×0.65×0.14	N-0°-E			
83	土坑	475	107	Aj-22	竪丸長方形?	(1.37)×1.46×0.50	N-24°-E			
87	土坑	475	107	Aj-20	不整楕円形	1.18×0.76×0.27	E-24°-N		Ⅱ・Ⅲ期土	
105	土坑			Aj-21	不整形	0.70×(0.47)×0.41				
106	土坑			Ak-20	竪丸方形	0.65×0.65×0.09	N-0°-E			
121	土坑			Ae-22	楕円形	0.88×0.52×0.11	N-8°-W			
125	土坑	475		Ap・Aq-20・21	円形	1.49×-×0.16			Ⅱ期土	
126	土坑	475		Aq-21	円形	1.43×-×0.16			Ⅱ期土	
132	土坑			Ad-23	不整形	(0.54)×0.70×0.20				
133	土坑			Ao-20	不整形	(1.00)×1.14×0.17				
136	土坑			Ad-20	不整形	1.20×0.81×0.26				
138	土坑			Ak-21	楕円形	0.86×0.60×0.14	E-18°-N			
149	土坑	475	107・258	Ag-14	竪丸長方形	1.71×0.92×0.50	E-6°-S	灰釉陶器	Ⅱ期土	10世紀前半
175	土坑	475		Al・Aj-10	円形	1.33×-×0.35		金属製品		
188	土坑	475		Ak-8	楕円形	1.25×0.82×0.35	E-18°-N		Ⅱ・Ⅲ期土	
189	土坑			Aj・Ak-8・9	不整形	1.95×(2.30)×0.20				
190	土坑	475		Ak-9	竪丸長方形	(0.95)×1.04×0.25	E-17°-N		Ⅱ・Ⅲ期土	
191	土坑	476	107	Ak・Al-6・7	竪丸方形	2.27×2.02×0.10	E-19°-N		Ⅱ期土	
192	土坑			Al-16	不整形	20.0×(1.32)×0.50				
193	土坑	476	107	Al-15	楕円形	1.28×0.60×0.10	E-0°-N		Ⅱ期土	
198	土坑			Al-15	不整形	(2.90)×(0.52)×0.61				
199	土坑			Al-15	不整形	6.30×(0.25)×0.90				
204	土坑			Ak-7	楕円形	1.00×0.43×0.15	N-20°-W			
206	土坑	476	107・258	Bb・Bc-5・6	楕円形	1.77×1.07×0.16	E-2°-S	緑釉陶器	Ⅱ期土	10世紀代
208	土坑	476	107	Bb・Bc-6	竪丸長方形	1.83×1.10×0.15	N-18°-W		Ⅱ期土	
209	土坑	476	108	Bd・Bc-6・7	竪丸長方形	3.47×2.84×0.19	E-37°-S		Ⅱ期土	
210	土坑	476		Ba-4	竪丸長方形	1.56×(0.74)×0.27	N-13°-W		Ⅱ期土	
217	土坑			Bb-5	楕円形	0.55×0.35×0.53	N-30°-W			
218	土坑			Bc-5	楕円形	0.80×0.65×0.26	E-40°-S			
219	土坑			Bc-11	楕円形	0.87×0.55×0.13	N-8°-E			8世紀代
220	土坑			Ba・Bb-12	楕円形	0.87×0.84×0.26				
222	土坑	476		As-13	円形	1.50×-×0.17			Ⅱ期土	

第5章 2面の調査(中世～古墳時代後期)

番号	棟号	P.L	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考
223	土坑	476	108	At・Ba-10	竪丸長方形	1.53×1.50×0.45	N-4°-E	炭化種実出土 灰釉陶器	10世紀代
224	土坑	476		At・Ba-10	不整形	0.60×-×0.36			
225	土坑	477	108	Bc・Bd-7	円形	1.52×-×0.19			
227	土坑			Bd-7	不整形	1.95×(0.86)×0.13			
228	土坑	477	108	Bd-6・7	円形	1.05×-×0.15			
229	土坑	477		Bc-6	楕円形	1.57×1.47×0.60	E-25°-N		
230	土坑	477	108	Bd・Be-6	竪丸長方形	1.16×1.12×0.21	E-23°-N	灰釉陶器	10世紀代
231	土坑			Bd-13	円形	0.61×-×0.34			
232	土坑	477		Ba-5	楕円形	0.90×0.36×0.08	E-37°-S		
234	土坑			Bc-3	楕円形	1.37×1.07×0.40	N-25°-W		
235	土坑			As・At-12	楕円形	0.60×0.46×0.18	E-37°-N		
236	土坑	477		As-11	竪丸長方形	2.20×1.14×0.24	E-13°-N		
239	土坑	478		At-10・11	竪丸長方形	3.15×1.31×0.12	N-33°-W		
240	土坑	478	108+258	At-11	竪丸長方形	3.33×1.62×0.49	E-37°-N	灰釉陶器	10世紀代
241	土坑	478	108	As・At-11	竪丸長方形	2.04×1.93×0.34	N-20°-W		
245	土坑	477		As-12	楕円形	1.03×0.80×0.25	E-23°-N	土師器	10世紀代
247	土坑			Bb・Bc-5	楕円形	(0.61)×0.33×0.30	N-6°-E		
248	土坑	477		Bb・Bc-5・6	竪丸長方形	1.00×0.98×0.18	N-4°-W	灰釉陶器	10世紀代
249	土坑			Bd-7	楕円形?	2.26×(1.18)×0.25			
250	土坑			Ba-4	竪丸長方形	1.30×(0.69)×0.14	N-24°-W		
253	土坑			Bb-5	不整形	0.86×(0.37)×0.18			
254	土坑			At-10	楕円形	0.71×0.60×0.25			
255	土坑			At-10	竪丸長方形	1.58×(0.90)×0.16	N-30°-W		
256	土坑	477		Bb-5・6	竪丸長方形	(1.35)×1.37×0.25	N-15°-W		
257	土坑	477		Bb-4	竪丸長方形	1.71×(0.65)×0.48	E-21°-N		
258	土坑	477		Bc-5	楕円形	1.17×0.75×0.28	N-34°-W		
260	土坑			Bb-10	竪丸長方形	0.62×0.60×0.42	N-30°-W		
261	土坑	477		Bb-12・13	楕円形	1.00×0.83×0.25	E-17°-N		
262	土坑	477		Bb-12	円形	1.07×-×0.17			
263	土坑	478	258	Ba・Bb-6	竪丸長方形	1.58×(0.80)×0.26	E-4°-N	緑釉陶器	10世紀代
264	土坑	478		Bc-6・7	不整形	2.08×1.64×0.20			
265	土坑			Bb・Bc-6	不整形	3.48×(0.62)×0.37			
266	土坑			Bc-4	円形	0.83×-×0.22			
268	土坑			Ba-4	楕円形	1.00×0.70×0.18	N-8°-W		
275	土坑			Bb-10	楕円形	(0.93)×0.63×0.30	N-15°-W		
276	土坑			Bb-6	不整形	1.70×(0.78)×0.12		灰釉陶器	10世紀代
277	土坑	478		As・At-12	楕円形	1.33×0.46×0.25	E-24°-N		
282	土坑	478		Aj・Ak-15・16	不整形	1.34×-×0.18			
294	土坑			Al-8	円形	0.70×-×0.17			
300	土坑		258	Am・An-6	円形	0.74×-×0.23		灰釉陶器	10世紀代
301	土坑			Al-9	楕円形	0.86×0.41×0.37	E-15°-N		
302	土坑			Aj-7	不整形	0.61×-×0.18			
304	土坑	478	108	An-8	円形	0.84×0.84×0.08			
305	土坑	478	108	An・Ao-8	不整形	1.65×-×0.29		金属製品	7世紀代
312	土坑	479		As-4・5	不整形	(1.60)×1.20×0.13			
317	土坑	479		Am・An-6	不整形	0.67×0.57×0.11	N-9°-E		
318	土坑	479		An-6	不整形	0.82×-×0.16			
319	土坑			Ak-12	竪丸長方形	1.21×(0.85)×0.48	E-17°-N		
326	土坑	479	108	Ar-11	楕円形	1.35×0.83×0.20	E-8°-S	土師器	10世紀後半
331	土坑	479		Ar-11	円形	0.62×-×0.18			
332	土坑	479	108	Ar-11	楕円形	1.11×0.80×0.09	N-14°-W		
333	土坑	479	108	Ar・As-11	竪丸長方形	1.89×1.47×0.48	E-7°-N	須恵器	10世紀後半
334	土坑	479	108	Ar・As-10・11	竪丸長方形	(1.11)×0.94×0.36	N-42°-W		
335	土坑	480	108	Aj-11	円形	1.18×-×0.36			
336	土坑	480	108	Aj・Aq-11	円形	1.01×-×0.30			
337	土坑			Aj-11・12	不整形	1.04×0.73×0.10	N-44°-E		
340	土坑	479		Aj・Ar-10・11	竪丸長方形	2.15×1.92×0.31	E-17°-N	土師器	10世紀代
341	土坑	479		Aj・Ar-10	楕円形	(1.10)×0.55×0.15	N-13°-W		
345	土坑			Ap-12	円形	0.55×-×0.06			
346	土坑	480		Ap・Aq-12・13	楕円形	0.95×0.75×0.13	N-0°-E		
347	土坑	480	108	Al-12	楕円形	1.23×0.77×0.15	N-9°-W		
348	土坑	480		Aj・Ar-8・9	不整形	1.30×1.09×0.29	N-0°-E	灰釉陶器	10世紀代
351	土坑		108	Ak-12	不整形	0.60×(0.30)×0.14			
352	土坑			Ak-12	不整形	0.70×(0.38)×0.10			
355	土坑			Am-11	楕円形	(0.86)×0.80×0.15	N-10°-W		
357	土坑			As・At-4	円形	1.13×-×0.25			
368	土坑	481	108+258	Ba-4・5	竪丸長方形?	(2.70)×1.92×0.25	N-8°-W	灰釉陶器・ 緑釉陶器	10世紀後半
369	土坑			An-9	不整形	0.58×(0.20)×0.25			

番号	挿図	P.L.	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没上	備考
370 土坑	480	109	Ar-7	円形	0.68×-×0.53		須恵器		
375 土坑			Ba-3・4	不整形	(0.97)×(0.42)×0.06				
377 土坑	479		Am-Aa-6	隅丸方形	0.83×0.77×0.10	E-9°-S		Ⅷ層土	
380 土坑		109	Am-12・13	楕円形	0.81×0.81×0.15	E-13°-N			
384 土坑			Aq-Ar-9	楕円形	0.84×0.54×0.42	N-0°-E	須恵器		
388 土坑			Aq-Ar-9	不整形	(0.70)×0.70×0.22				
390 土坑		109	Ap-9	円形	0.59×-×0.31				
392 土坑			Ap-8	円形	0.65×-×0.24		灰燼陶器		10世紀代
393 土坑			As-9	円形	0.40×-×0.17				
398 土坑			Aq-5	不整形楕円形	0.48×(0.33)×0.45		須恵器		
400 土坑			Ao-7	楕円形	0.51×0.40×0.13	E-0°-N			
403 土坑			Ao-9	不整形	1.15×(0.67)×0.33				
404 土坑		109	Ar-13	不整形円形	0.64×-×0.17				
405 土坑			Ao-6	円形	0.50×-×0.22				
408 土坑			Ao-6	楕円形	0.93×0.55×0.40	N-21°-E			
409 土坑		109	Ao-9	不整形	0.97×(0.72)×0.32	N-12°-W			
410 土坑		109	Ao-9	隅丸方形	(0.68)×0.85×0.30	N-3°-W			
411 土坑	480		Ar-7・8	不整形円形	1.25×-×0.24		土師器	Ⅷ層土	9世紀後半
412 土坑			Aq-Ar-6・7	隅丸長方形?	1.70×(0.70)×0.28	N-17°-W			9世紀後半
413 土坑			As-10	楕円形	0.40×0.30×0.37	N-14°-W	須恵器		7世紀代
414 土坑	480	109	Aq-7	不整形円形	0.81×-×0.42		灰燼陶器	Ⅷ層土	10世紀代
415 土坑	480	109	Aq-Ar-7	楕円形	1.27×0.80×0.14	N-0°-E	須恵器	Ⅷ層土	9世紀代
416 土坑			Ap-6	不整形	(0.50)×0.53×0.18				
417 土坑	480	109・258	Ak-14	楕円形	1.30×0.85×0.15	E-20°-N	須恵器	Ⅷ層土	
418 土坑			Ak-14	円形	0.85×-×0.24				
419 土坑	480	109	Aj-Ak-14	円形	1.05×-×0.20			Ⅷ層土	
420 土坑		109	Aj-14・15	楕円形	0.67×0.50×0.13	E-0°-N			
425 土坑			Ap-14	不整形	1.10×(0.73)×0.25				
427 土坑			Al-14・15	円形	0.57×-×0.33				
428 土坑			Am-15	円形	0.57×-×0.20				
429 土坑		109	Ap-9	不整形	0.72×0.35×0.18				
430 土坑		109	Ap-9	楕円形	0.62×0.48×0.18	E-27°-N			
431 土坑		109	Ap-8・9	楕円形	0.97×0.54×0.16	N-13°-E			



5号土坑 A-A'

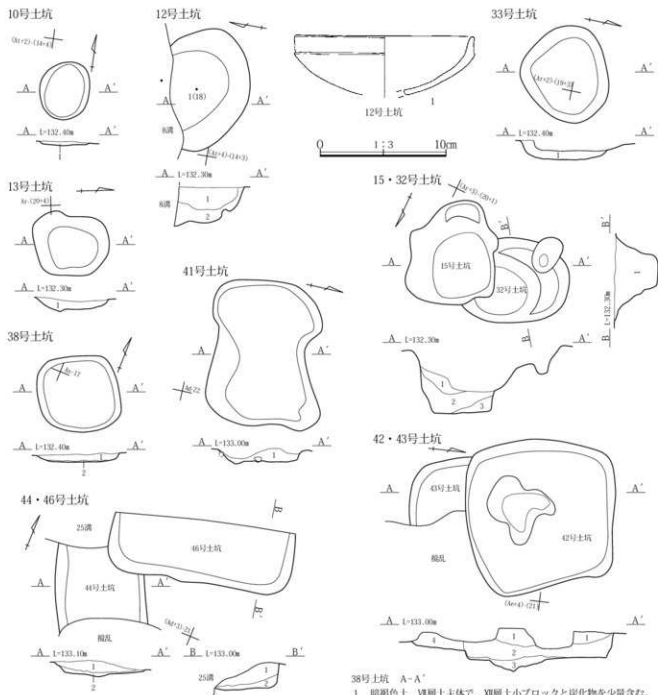
- 1 暗褐色土 XI層上主体で、炭化物・Ⅷ層土・暗褐色土粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 XI層上主体で、1層よりもⅧ層土粒をややく含む。
- 3 暗褐色土 XI層上主体で、Ⅷ層土粒を顕著に多く含むほか、Ⅷ層土小ブロックを含む。

6号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 XI層上主体で、Ⅷ層土小ブロック・炭化物・軽石粒を含む。
- 2 暗褐色土 XI層上主体で、Ⅷ層土粒を少量含み、1層より明るい色調を呈する。

第473図 5・6号土坑・出土遺物

第5章 2面の調査(中世~古墳時代後期)



10号土坑 A-A'

1 暗褐色土 XI層上主体で、XII層上小ブロックをわずかに含む。

12号土坑 A-A'

1 暗褐色土 IX層上主体で、ニッ岳系軽石が多い。

2 暗褐色土 VII層上と砂の混土。

13号土坑 A-A'

1 暗褐色土 XI層上主体で、XII層上小ブロックを全体に含む。

15号土坑 A-A'

1 黄褐色土 XII層上小ブロックと暗褐色土小ブロックの混土。

2 黄褐色土 XII層上主体で、暗褐色土粒を多く含む。

3 黄褐色土 XII層上主体で、暗褐色粘質土小ブロックを含む。

32号土坑 A-A'

1 暗褐色土 XI層上小ブロックと暗褐色土・XII層上ブロックの混土。

33号土坑 A-A'

1 暗褐色土 XII層上小ブロック・粒子和暗褐色土ブロックの混土。

38号土坑 A-A'

1 暗褐色土 VII層上主体で、XII層上小ブロックと炭化物を少量含む。

2 暗褐色土 VII層上主体で、粘性が強い。

41号土坑 A-A'

1 暗褐色土 少量のAs-Cと、XII層上粒・ブロック・川原石を含む。

42・43号土坑 A-A'

1 暗褐色土 XII層上粒・小ブロックを含む。

2 暗褐色土 XII層上粒を全体に含み、1層より明るい色調を呈する。

3 暗褐色土主体で、XII層上ブロックを斑状に含む。

4 暗褐色土 As-Cを含み、1層よりも暗い色調を呈する。

44号土坑 A-A'

1 暗褐色土 As-CとXII層上粒を含む。

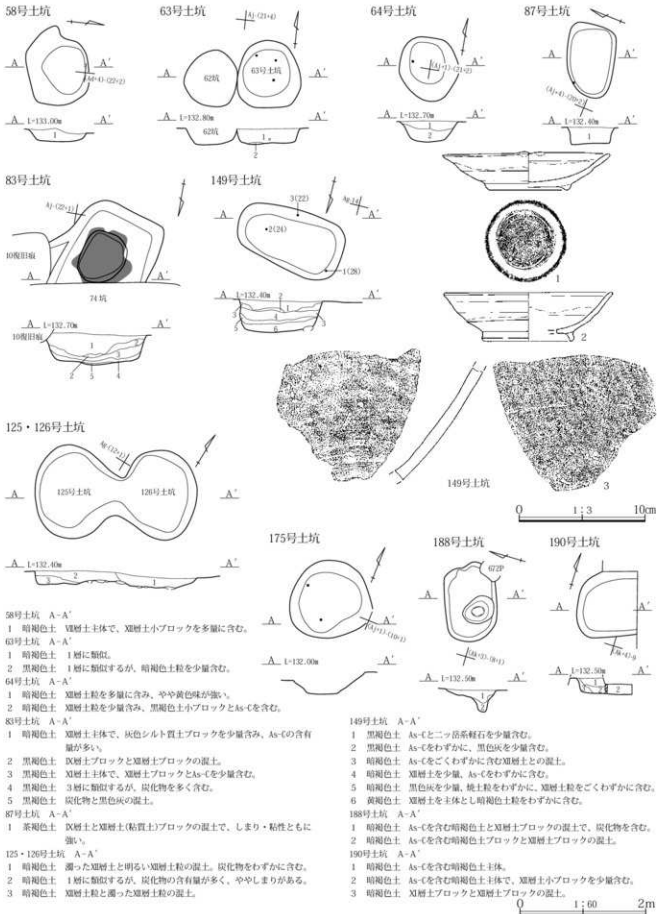
2 黄褐色土 XII層上主体で、暗褐色土粒を含む。

46号土坑 B-B'

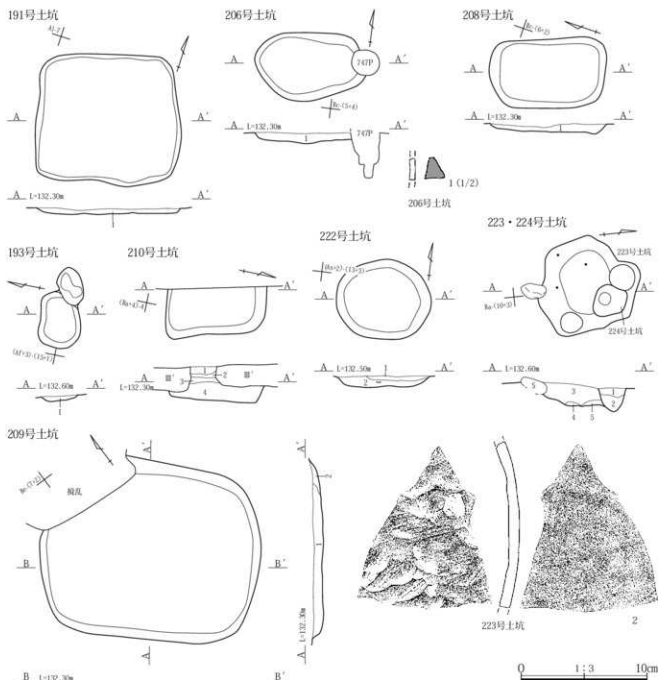
1 暗褐色土 XI層上主体で、XII層上粒を少量含む。

2 暗褐色土 XII層上主体で、XII層上粒を1層より多く含む。

第474図 10・12・13・15・32・33・38・41~44・46号土坑・出土遺物



第475図 58・63・64・83・87・125・126・149・175・188・190号土坑・出土遺物



191号土坑 A-A'

1 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、褐色の粘質土ブロックを少量含む。

193号土坑 A-A'

1 暗褐色土 暗褐色土と珪質土との混土で、As-Cを少量含む。

206号土坑 A-A'

1 褐色土 珪質土とAs-Cを少量、二ッ岳系軽石をごくわずかに含み、粘性がやや強い。

208号土坑 A-A'

1 灰褐色土 As-Cと二ッ岳系軽石を少量、珪質土粒を含む。

209号土坑 A-A'

1 褐色土 酸化鉄と炭化物粒をわずかに、珪質土粒を少量、礫と砂粒を含む。

2 褐色土 1層に類似するが、礫は含まず珪質土粒の含有量が多い。

210号土坑 A-A'

1 褐色土 酸化鉄を全体に塊状に含み、As-Cをごくわずかに含む。

2 褐色土 1層に類似するが、As-Cの含有量が多い。

3 灰褐色土 酸化鉄を少量含み、As-Cを少量含む。

4 灰褐色土 As-Cと珪質土小ブロックを少量含む。

222号土坑 A-A'

1 黒褐色土 As-Cをごくわずかに含み、珪質土微粒～大ブロックを塊状に含む。

2 暗褐色土 1層に類似するが、明るい色調を呈する。

223・224号土坑 A-A'

1 暗褐色土 珪質土を塊状に含み、焼土粒・炭化物の微粒をごくわずかに含む。

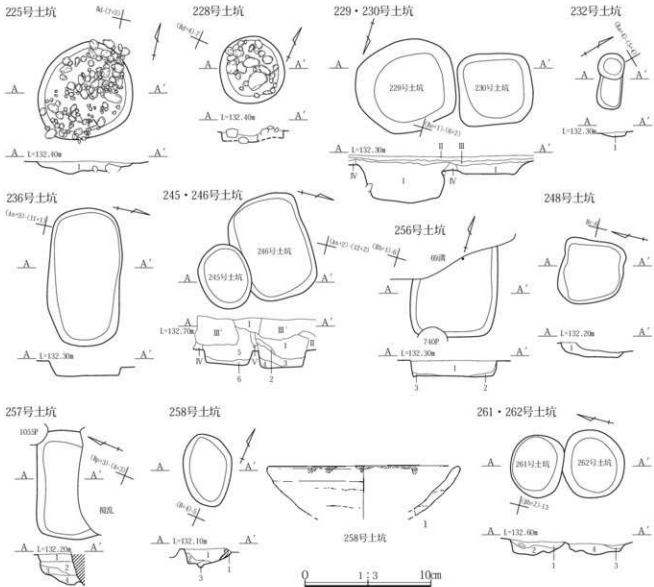
2 暗褐色土 珪質土の小ブロックを少量含み、炭化物の微粒をわずかに含む。

3 灰黄褐色土 珪質土のブロック・菱の種を少量、炭化物の微粒～小ブロックを塊状に含み、焼土粒の小粒をごくわずかに含む。

4 褐色土 褐色土を主体とし、灰黄褐色土との混土。

5 黄褐色土 珪質土を主体とし、暗褐色土との混土。

第476図 191・193・206・208・209・210・222・223・224号土坑・出土遺物



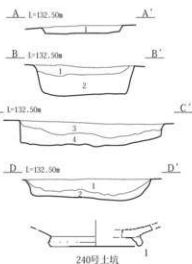
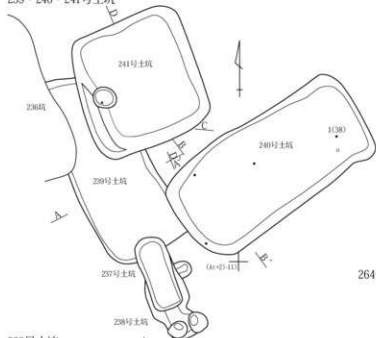
- 225号土坑 A-A'
- 1 暗褐色土 礫と砂粒を含む暗褐色土主体で、畑層土ブロック、As-Cと二ッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 228号土坑 A-A'
- 1 灰褐色土 畑層土を全体に含み、酸化鉄を現状に、As-C・炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 229・230号土坑 A-A'
- 1 暗褐色土 畑層土粒・小礫・As-Cと二ッ岳系軽石をわずかに含み、炭化物微粒をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 232号土坑 A-A'
- 1 灰褐色土 畑層土粒を含み、As-Cをわずかに含む。
- 245・246号土坑 A-A'
- 1 にぶい・黄褐色土 畑層土ブロックを全体に含み、As-Cをわずかに、炭化物粒、焼土小ブロックをごくわずかに含む。
 - 2 にぶい・黄褐色土 1層に類似するが、畑層土ブロックの含有は少量で、焼土粒を含まない。
 - 3 にぶい・黄褐色土 1層に類似するが、焼土粒を含まない。
 - 4 にぶい・黄褐色土 畑層土を多く含み、軽石などを含まず、しまりやや弱い。
 - 5 灰黄褐色土 畑層土粒・小ブロックを全体に含み、As-Cを完全に現状に、二ッ岳系軽石・炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 246号土坑 A-A'
- 1 灰黄褐色土 畑層土を少量、As-Cをごくわずかに含む。
- 256号土坑 A-A'
- 1 暗褐色土 畑層土粒とAs-Cを少量含む。二ッ岳系軽石と炭化物微粒をごくわずかに含む。

- 2 灰黄褐色土 畑層土粒を全体に含み、軽石などを含まない。
 - 3 暗褐色土 畑層土粒を少量含む、As-Cをわずかに含む。
- 257号土坑 A-A'
- 1 褐灰色土 畑層土ブロックを全体に含み、As-Cと二ッ岳系軽石をわずかに、炭化物微粒をごくわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土主体で、畑層土の小ブロックを含む。
 - 3 暗褐色土 As-Cを少量に含む暗褐色土主体で、畑層土粒を含む。
 - 4 暗褐色土 畑層土主体で、暗褐色土粒を少量含む。
- 258号土坑 A-A'
- 1 黒褐色土 畑層土粒・小ブロックを少量、As-Cと二ッ岳系軽石をわずかに、炭化物微粒をごくわずかに含む。
 - 2 黒褐色土 畑層土粒を少量、As-Cと炭化物粒をごくわずかに含む。
 - 3 灰黄褐色土 畑層土粒を現状に含み、二ッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 261・262号土坑 A-A'
- 1 暗褐色土 As-Cと二ッ岳系軽石をわずかに含み、細粒でしまりが強い。
 - 2 褐色土 暗褐色土と畑層土の混土で、As-Cをごくわずかに含み、細粒でしまりが強い。
 - 3 暗褐色土 4層に比べやや明るい色調で、炭化物粒をわずかに含み、細粒でしまりが強い。
 - 4 暗褐色土 As-Cと二ッ岳系軽石・焼土粒・炭化物粒をわずかに含み、粗粒でしまりが強い。

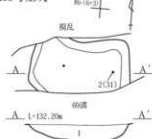
0 1:60 2m

第477図 225・228・229・230・232・236・245・246・248・256・257・258・261・262号土坑・出土遺物

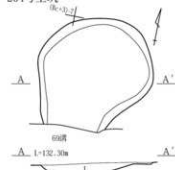
239・240・241号土坑



263号土坑



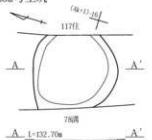
264号土坑



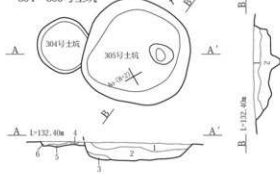
277号土坑



282号土坑



304・305号土坑



239号土坑 A-A'

1 暗褐色土 As-Cとニッ岳系軽石を少量含み、畑層土粒を混状に含む。

240号土坑 B-B'・C-C'

1 暗褐色土 畑層土粒を含み、As-Cを少量、ニッ岳系軽石・炭化物微粒をごくわずかに含む。

2 暗褐色土 1層に類似するが、軽石の含有量は少なく、下面に炭化物小ブロックを含む。

3 暗褐色土 畑層土粒~小ブロックを含み、As-Cとニッ岳系軽石・炭化物粒と微粒をわずかに含む。

4 暗褐色土 3に類似するが、ニッ岳系軽石を含み、炭化物をごくわずかに含む。

241号土坑 D-D'

1 暗褐色土 畑層土小ブロックとAs-Cを少量含み、ニッ岳系軽石をわずかに、炭化物粒をごくわずかに含む。

2 暗褐色土 畑層土粒を全体に混状に含み、As-C、炭化物粒をごくわずかに含む。

263号土坑 A-A'

1 暗褐色土 As-Cを多く、ニッ岳系軽石と炭化物を少量含み、しまりが強い。

264号土坑 A-A'

1 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土と畑層土粒・小ブロックの混土。

277号土坑 A-A'

1 に近い黄褐色土 畑層土を多く含み、As-Cを少量含む。

2 暗褐色土 畑層土を少量含み、As-Cをわずかに含む。

282号土坑 A-A'

1 暗褐色土 As-Cとニッ岳系軽石を少量含み、畑層土微粒・小ブロックを混状に含む。

304・305号土坑 A-A'・B-B'

1 暗褐色土 As-Cとニッ岳系軽石を少量、畑層土ブロックを混状に、炭化物粒をわずかに含む。

2 暗褐色土 含有物は1層に類似するが、畑層土ブロックを全体に含む。

3 暗褐色土 As-Cをごくわずかに含むシルト質土。

4 褐色土 畑層土粒を含むが、軽石などを含まず、粘性がやや強い。

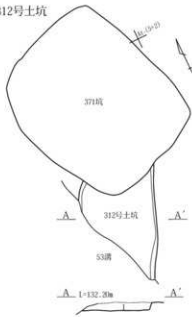
5 に近い黄褐色土 畑層土粒を多く、As-Cをごくわずかに含む。

6 褐色土 畑層土粒を全体に、As-Cをごくわずかに含む。

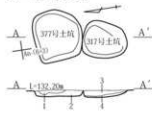
0 1:60 2m

第478図 239・240・241・263・264・277・282・304・305号土坑・出土遺物

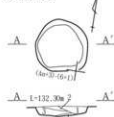
312号土坑



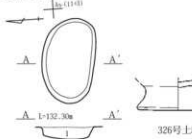
317・377号土坑



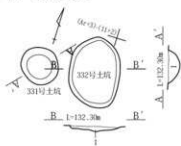
318号土坑



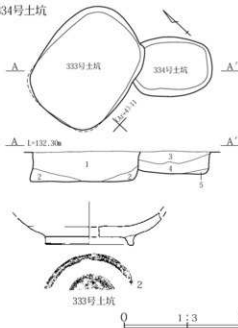
326号土坑



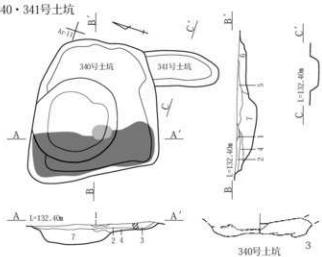
331・332号土坑



333・334号土坑



340・341号土坑



312号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 As-Cと二ッ岳系軽石を少量含む。炭化物の微粒をわずかに含む。
- 2 黒褐色土 As-Cを少量含む灰褐色シルト質で、燻土粒～小ブロックを含む。
- 3 黒褐色土 As-Cと二ッ岳系軽石を少量、炭化物をわずかに、燻土粒～小ブロックを全体に塊状に含む。
- 4 黒褐色土 3層に類似するが、軽石の含有が微量。
- 5 褐色土 燻土主体で、燻土粒を含むほか、軽石などを含まない。

318号土坑 A-A'

- 1 に近い黄褐色土 燻土を多く、酸化鉄とAs-Cを少量含む。
- 2 灰褐色土 As-Cを少量含む灰褐色シルト質で、燻土をブロック状に、炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 3 に近い黄褐色土 As-Cをごくわずかに含む。燻土をブロック状に含む。
- 4 に近い黄褐色土 3層に類似するが、酸化鉄を含む。

326号土坑 A-A'

- 1 褐色土 As-Cをわずかに含む燻土主体で、燻土ブロックを少量含む。

331号土坑 A-A'

- 1 褐色土 As-Cを含む燻土と燻土ブロックの混土。

332号土坑 B-B'

- 1 褐色土 As-Cを含む燻土。

333・334号土坑 A-A'

- 1 灰黄褐色土 As-Cを多く含む、二ッ岳系軽石と炭化物粒を少量含む灰黄褐色シルト質で、燻土粒～小ブロックを含む。
- 2 に近い黄褐色土 As-Cと二ッ岳系軽石を少量含む。炭化物をわずかに含むシルト質で、燻土粒～小ブロックを含む。
- 3 黒褐色土 As-Cと二ッ岳系軽石を少量、炭化物をわずかに、燻土粒～小ブロックを全体に塊状に含む。
- 4 黒褐色土 3層に類似するが、軽石の含有が微量。
- 5 褐色土 燻土主体で、燻土粒を含むほか、軽石などを含まない。

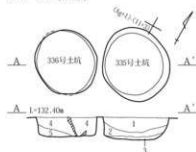
340号土坑 A-A'・B-B'

- 1 褐色土 炭化物粒を含む。焼土粒を全体にブロック状に、As-Cをわずかに含む。
- 2 灰黄褐色土 As-Cを少量含む灰黄褐色土で、炭化物粒～小ブロックを多く、燻土をブロック状に含む。焼土粒をごくわずかに含む。
- 3 灰黄褐色土 1層に類似するが、炭化物の含有量が多い。
- 4 に近い黄褐色土 燻土粒を多く、As-Cをわずかに含む。
- 5 灰黄褐色土 As-Cを少量、二ッ岳系軽石・焼土の微粒～小粒をわずかに含む灰黄褐色土。
- 6 に近い黄褐色土 燻土をブロック状に全体に含む。As-Cと二ッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 7 暗褐色土 含有物は6層に類似するが、炭化物の微粒をごくわずかに含む。

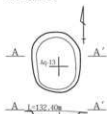
0 1:60 2m

第479図 312・317・318・326・331・332・333・334・340・341・377号土坑・出土遺物

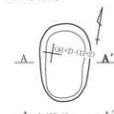
335・336号土坑



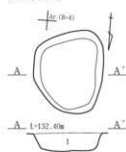
346号土坑



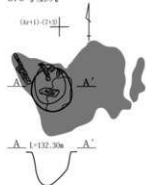
347号土坑



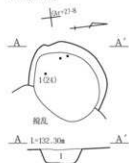
348号土坑



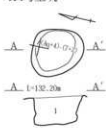
370号土坑



411号土坑



414号土坑

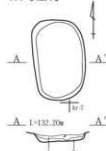


411号土坑

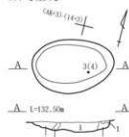


415号土坑

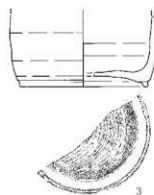
415号土坑



417号土坑



419号土坑



417号土坑

0 1:3 10cm

335・336号土坑 A-A'

- 1 灰黄褐色土 As-Cと二ッ岳系軽石をわずかに含み、刈層土粒を含むが、酸化鉄を含まない。
- 2 灰黄褐色土 1層に類似するが、軽石の含有がごくわずか。
- 3 濃い黄褐色土 刈層土ブロックを塊状に含み、軽石などの含有物を含まない。
- 4 灰黄褐色土 刈層土粒と酸化鉄を含み、As-Cと二ッ岳系軽石をわずかに含む。
- 5 灰黄褐色土 刈層土ブロックと酸化鉄を含み、As-Cをごくわずかに含み、しまりがやや弱い。

346号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 刈層土ブロックを全体に含み、As-Cを少量含む。
- 2 黄褐色土 刈層土を主体とし、刈層土ブロックを含む。根カクランの影響か?

347号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 酸化鉄を含んだ暗褐色土で、刈層土の微粒・小粒を含み、As-Cをわずかに含む。

348号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 二ッ岳系軽石をわずかに含む暗褐色土で、刈層土ブロックを塊状に含み、As-C・炭化物の微粒~小ブロックを少量含む。

411号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-C細粒を均一に含み、硬くしまりが強い。

414号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを多く、二ッ岳系軽石を少量含む暗褐色土で、全体にやや灰色ぎみに変質している。しまり強い。

415号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cと焼土大粒を多く含む刈層土。
- 2 茶褐色土 As-Cを均一に含むシルト質土。

417号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量含み、刈層土を塊状にわずかに含む。
- 2 濃い黄褐色土 刈層土を主体で、1層をブロック状にわずかに含む。

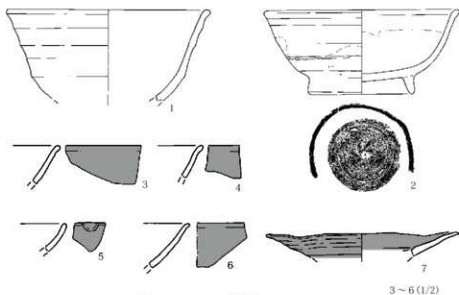
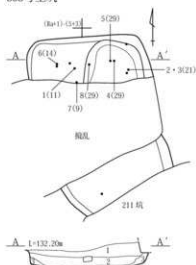
419号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量含み、刈層土を塊状にわずかに含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、色調はやや暗く、二ッ岳系軽石をわずかに含む。
- 3 濃い黄褐色土 刈層土を主体で、暗褐色土を少量含む。

0 1:60 2m

第480図 335・336・346・347・348・370・411・414・415・417・419号土坑・出土遺物

368号土坑

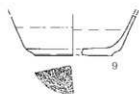


368号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土主体で、炭化物と矽層土粒を含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、全体に粘性が強い。
- 3 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土と矽層土小ブロック・粒の混土。



368号土坑



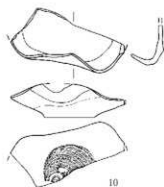
219号土坑



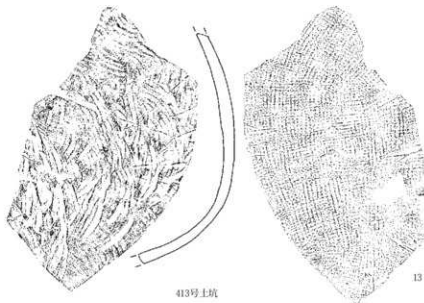
412号土坑



413号土坑



300号土坑



第481図 368号土坑・出土遺物

第2項 田口下田尻遺跡

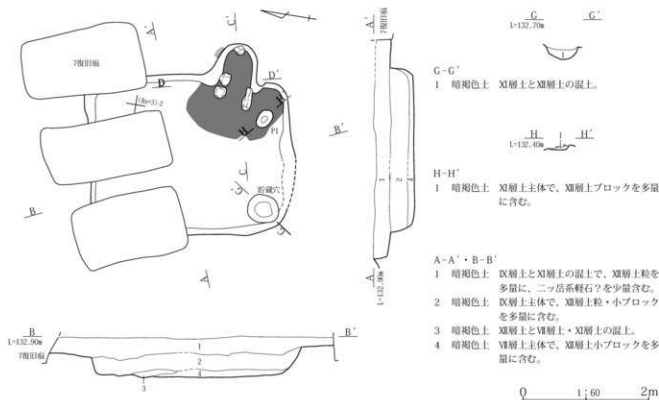
(1) 竪穴住居

1号住居(第482図 P.L.111・258・259)

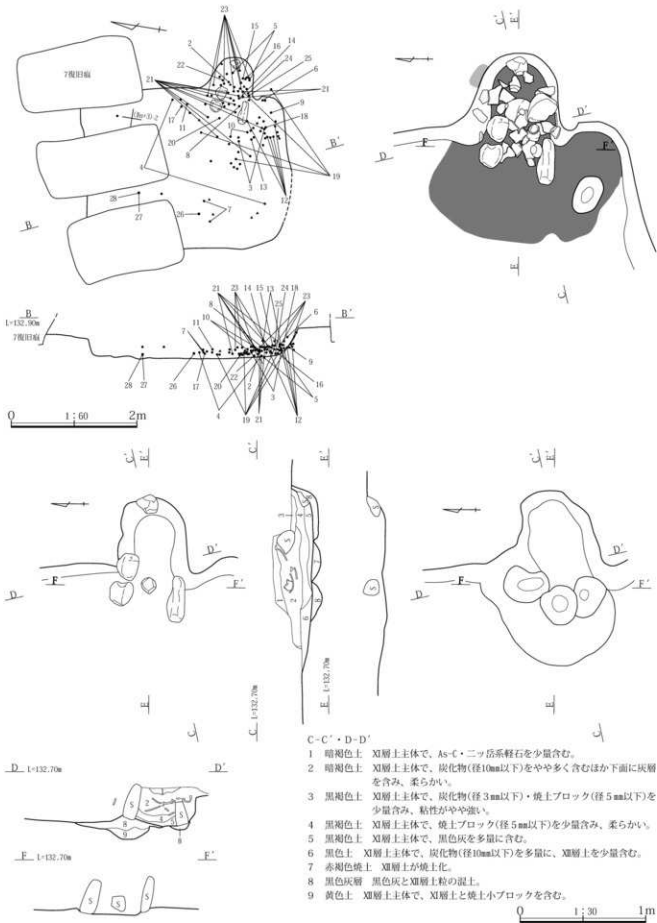
位置: Bn-1・2グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.53m×3.21m 残存深度: 0.40m 主軸方位: E-12°-N 埋没土: VII層土 類似層が掘り込み上部を覆っており、埋没土はXI・XII層土主体である。柱穴: 未検出 カマド: 東壁南寄りの南東コーナー部に接する位置で検出した。左袖部に2点、右袖部に1点、及び奥壁に1点、礫が構築材として据えられた状態で検出され、燃焼部からはいくつか浮いた状態の礫も出土した。また、袖構築材の間に1点礫が検出され支脚の可能性を検討したが、燃焼部底面から浮いた位置であるため、使用状態とは考えられない。これらの構築材のあり方からカマド本体が屋内にも若干張り出して構築されていたものと考えられる。燃焼部底面には焼土の形成こそ希薄であったが、黒色の灰層が良好に残っており、灰層の広がりや焚口部から南東コーナー部にまで及んでいた。想定される主軸方位はE-0°-Nであり、北壁で計測した住居主軸方位

よりもやや南に振れている。遺物: カマド燃焼部及び周辺や西寄りの床面近くから多くが出土した。種類は比較的豊富で、坏(2~4)・埴(5~12)・足高台の埴(13~17)・黒色土器埴(18)・羽釜(21)・甗(24・25)など須恵系の系譜の土器が主体で、わずかに土師器系譜の坏(1)・土釜(19・20)などがある他、鉄鍬(26)・鎌(28)が出土している。重複: 7号復旧痕によって北側が削平されている他に、近い時期の遺構との重複は見られない。所見: 7号復旧痕の壁面で遺構の存在は予測されていたが、XII層土まで確認面を下げた時点で平面を捉えることができた。住居北半は復旧痕との重複で大半が失われ、南壁の一部も同様に失われた部分があった。床面はXII層土であり、埋没土も類似する土層であったために、明瞭に捉えることはできなかった。しかし、破片を主体とした遺物が面的に出土したことから、その出土面を床面と認識した。この段階で、カマド南西方向にP1(0.33×0.21m、深さ0.11m、楕円形)と、南西コーナー部に径0.47m、深さ0.19mの円形を呈する掘り込みを検出したが、位置及び規模から後者が暗蔵穴と考えられる。

時期: 10世紀後半



第482図 1号住居

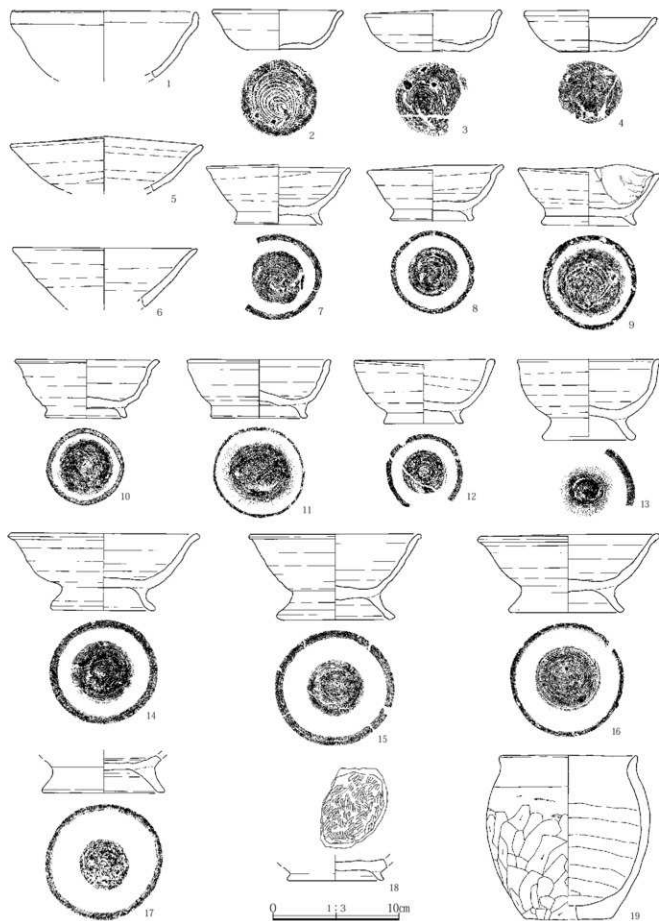


第483図 1号住居遺物出土状況・カマド

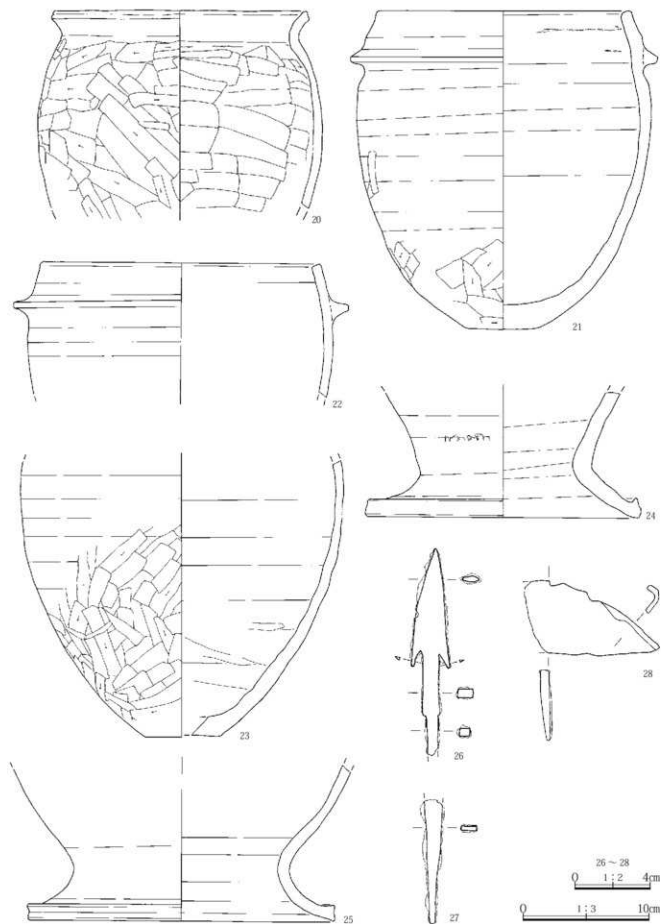
C・C'・D・D'

- 1 暗褐色土 XI層上主体で、As・C・ニッ房系軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 XI層上主体で、炭化物(径10mm以下)をやや多く含むほか下面に炭層を含み、柔らかい。
- 3 黒褐色土 XI層上主体で、炭化物(径3mm以下)・焼土ブロック(径5mm以下)を少量含む、粘性がやや強い。
- 4 黒褐色土 XI層上主体で、焼土ブロック(径5mm以下)を少量含む、柔らかい。
- 5 黒褐色土 XI層上主体で、黒色灰を多量に含む。
- 6 黒色土 XI層上主体で、炭化物(径10mm以下)を多量に、XII層土を少量含む。
- 7 赤褐色焼土 XII層土が焼土化。
- 8 黒色灰層 黒色灰とXII層土粒の混土。
- 9 黄色土 XII層上主体で、XII層土と焼土小ブロックを含む。

0 1:30 1m



第484図 1号住居出土遺物(1)

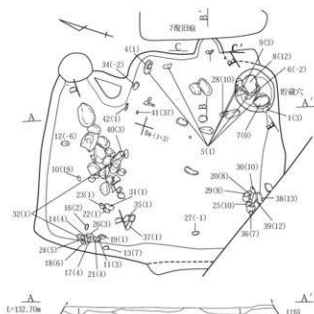


第485図 1号住居出土遺物(2)

2号住居(第486～488図 P.L.112・259・260)

位置: B1・Bm-1 グリッド 形状: 張り出しのある隅丸長方形 規模: 2.32～3.34m×2.42～3.86m 残存深度: 0.58m 主軸方位: E-20°-N 埋没土: IX層土主体で、土層断面では周囲からの自然埋没の様子が看取できる。柱穴: 未検出 カマド: 張り出し状の東壁中央に検出された。燃烧部中央から屋内側、及び奥壁から煙道部は7号復旧痕との重複で失われているため、カマドの構造などの詳細は不明である。わずかに残された燃烧部断面では東に向かって傾斜する残存部の中央で計測した主軸方位はE-20°-Nであり、住居南壁から求めた住居主軸方位と一致している。遺物: 貯蔵穴から土師器環(1)・壘(5・6)が、北東コーナー部から土師器小形壘(4)が、その西側床面から刀子が2点(41・42)出土した。また、須恵器壺(7)・横瓶(8)の破片が比較的多く出土したが、全体像を窺い得るまでの破片はなかった。その他、西壁北寄りの位置に棒状礫が1点集中し、同様に南西コーナー部に近い位置には棒状から不定形を呈する礫が10点集中し、さらに、北側張り出し部には大形礫が同一面に集中していた。他に、貯蔵穴とした場所

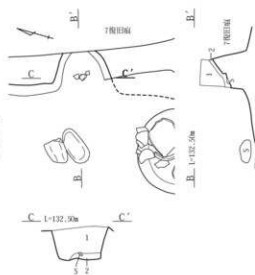
から時期が明らかに下る酸化焰焼成の埴(9)が1点出土しており、この部分で認識できなかった土坑などの重複があった可能性がある。重複: 東側で13号住居と重複し、検出状況から13号住居→2号住居である。また、7号復旧痕によって南側の一部が壊されている。所見: 平面形が北側に張り出しを有する特異なものであり、その張り出し部に大形礫が集中したことから土坑等との重複を考えたが、土層断面からは重複関係が捉えられず、また、張り出し側に位置する部分から棒状礫の集中が確認されたことから、同一住居における張り出しと結論づけた。カマドと壁の関係から推して、南北方向に長辺を有する隅丸長方形の南側だけを東に張り出したと見るよりは、本来は東西方向に長辺を有する3.34×2.42mの隅丸長方形の住居として計画されたものの西寄りの部分を、北に1.0mほど張り出したとするほうが適当であろう。床面は平坦であるが硬化面は検出されず、南東コーナー部に径0.62m、深さ0.18mの円形を呈する貯蔵穴を検出した。張り出し部に集中した礫群は、同様な事例が同遺跡内に数例認められるが、その意味については明らかにできなかった。 時期: 8世紀前半



- A-A'
- 1 暗褐色土: IX層土主体で、XI層土小ブロックを少量含む。
 - 2 暗褐色土: IX層土主体で、XI層土の含有は1層より多量である。
 - 3 暗褐色土: XI層土主体で、XI層土ブロックをわずかに含む。

0 1:60 2m

第486図 2号住居

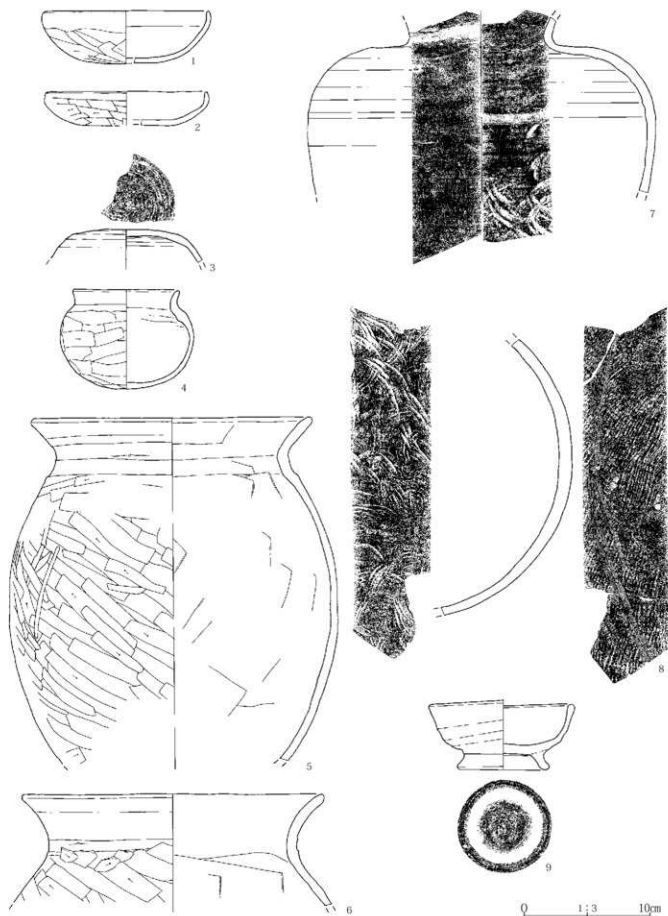


- 4 暗褐色土: XI層土主体で、わずかにXI層ブロックを含み、3層よりも全体に暗色を呈する。
- 5 暗褐色土: XI層土主体で、XI層土粒・小ブロックを含む。

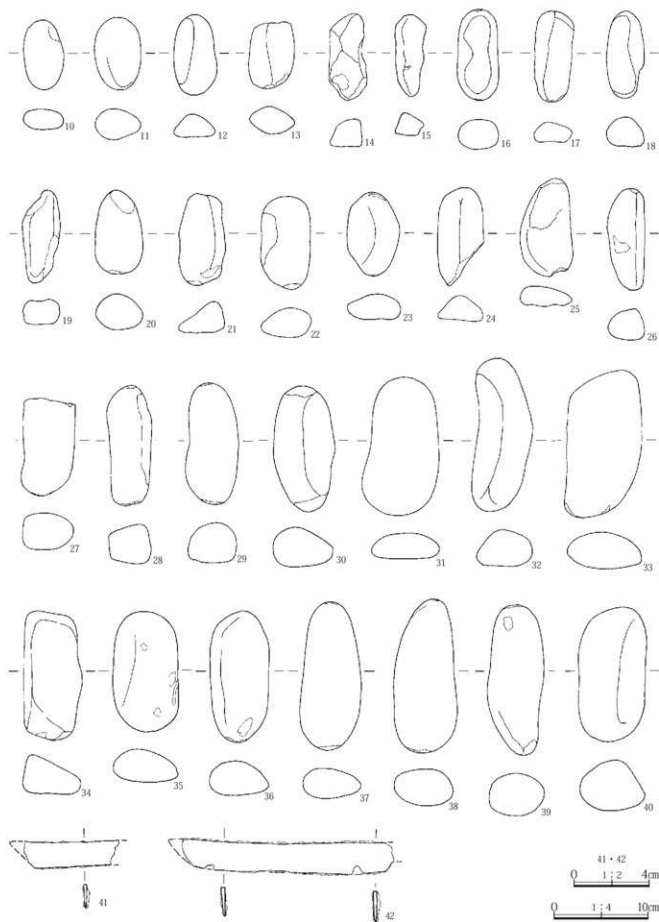
B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土: IX層土とXI層土の混土。
- 2 暗褐色土: IX層土とXI層土の混土で、埴土大粒を少量含む。

0 1:30 1m



第487图 2号住居出土遺物(1)

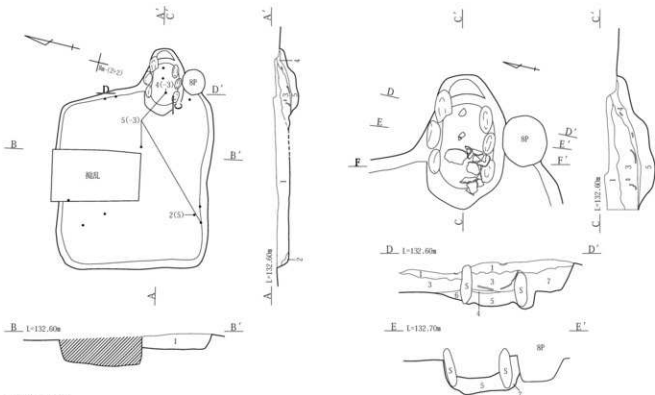


第488図 2号住居出土遺物(2)

3号住居(第489・490図 P.L.112・260)

位置: B1・Bm-1・2グリッド 形状: 隅丸台形 規模: 2.60～2.87m×2.43m 残存深度: 0.18m 主軸方位: E-15°-N 埋没上: VII層土主体で、XI層土ブロックを多量に含む。壁際に崩落と見られるXI層土ブロック主体の層が見られた。柱穴: 未検出 カマド: 東壁南寄りで南東コーナー部に接する位置で検出し、構築材間の中央を結んだ線で計測した主軸方位はE-8°-Nであり、住居西壁を基準として計測した住居主軸方位よりは南にわずかに振れている。燃焼部側壁には大形の楕円扁平礫を各3点構築材として立てており、屋内側の礫は、住居壁よりもわずかに屋内に張り出していることから、カマド本体がわずかに屋内側に張り出して構築されていたものと考えられる。燃焼部底面の焼土化は顕著で、攪乱されたような状況は認められなかったが、支脚は痕跡

も検出されなかった。煙道は、燃焼部底面からわずかな段を有して短く掘削されていた。遺物: カマド燃焼部に土師器甕(4・5)の大形破片が出土した他は、小破片がわずかに床面近くから出土した。3の黒色土器環と1の模倣環は埋没土中の出土であり、2の土師器環が床面付近から出土したものである。埋没土中から灰軸陶器碗の破片が3点ほど出土しているが、明らかに新しい時期のものであり、3号住居に伴うものではなく重複などによる紛れ込みである。重複: 南東コーナー部が8号ピットとの重複によって壊され、中央部から北壁中ほどは攪乱により失われている。所見: XI層土中で平面確認をしたもので、床面はXI層土中に構築されており硬化した面は検出されなかった。床面精査を行ったが、貯蔵穴、柱穴に成り得る掘り込みは皆無であり、掘り方も行われていなかった。時期: 7世紀後半



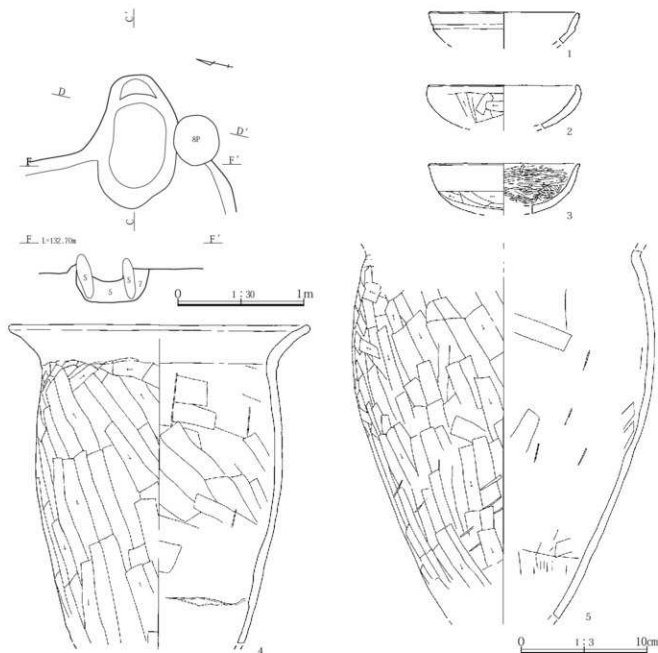
A-A'～F-F'

- 1 暗褐色土 XI層土主体で、XI層土ブロック(径30mm以下)・As-Cを多く、二ツ岳系軽石・炭化物(径5mm以下)を少量含む。
- 2 暗褐色土 XI層土主体で、XI層土ブロック(径10mm以下)を多量に含む。
- 3 暗褐色土 XI層土主体で、As-Cを多く、二ツ岳系軽石・炭化物(径5mm以下)を少量含む。
- 4 暗褐色土 XI層土主体で、XI層土ブロック(径10mm以下)・As-C・炭化物(径5mm以下)を少量含む、柔らかい。
- 5 暗褐色土 2層に類似するが、焼土ブロック(径5mm以下)をわずかに含む。
- 6 暗褐色土 3層に類似するが、3層との境界部分が特に焼土化。
- 7 にふい褐色土 XI層土主体で、XI層土ブロック(径10mm以下)を多く含む。

0 1:60 2m

0 1:30 1m

第489図 3号住居

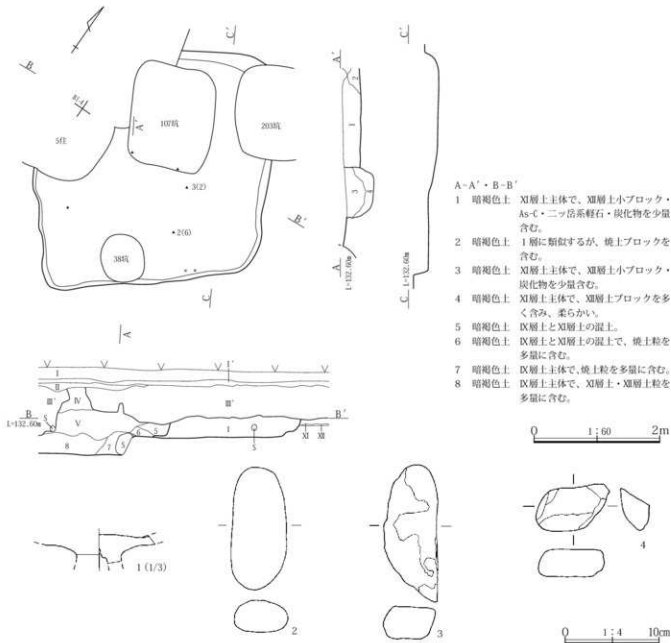


第490図 3号住居カマド掘り方・出土遺物

4号住居(第491図 P.L.113)

位置: B1-3・4グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 3.74 m×3.65m 残存深度: 0.22m 主軸方位: E-40°-N 埋没土: IX層土主体で、XI・XII層土ブロックを含む均質な土層であり、分層はできなかった。柱穴: 未検出 カマド: 東壁北寄りに設置されていた可能性があるが、203号土坑との重複によって失われたものと考えられる。遺物: 床面付近から礫が5点出土した他、土器片の出土は埋没土中からもごく少なかった。また、南壁際で炭化物がわずかに出土した。重複: 西側で5号住居と重複し、検出状況から4号住居→5号住居である。

他に107号土坑(墓坑)、38・203号土坑によって東壁の一部から床面が削平されている。所見: 1区は南北の2次に分けて調査を行ったが、ちょうど境に位置していたために一度に全体を明らかにすることができなかった。埋没土中に二ツ岳系軽石が確認できなかったことから、3面の住居である可能性もあるが、埋没土が3面の遺構埋没土と比較すると違和感があることから土坑との重複によってカマドが失われているものと考え2面の遺構に含めた。床面はXII層土中に構築され、平坦であるが硬化面の検出はなく、掘り方も行われていない。時期: 不明



第491図 4号住居・出土遺物

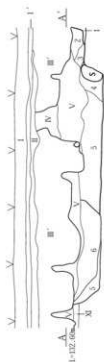
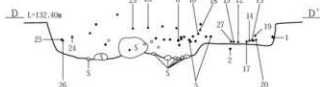
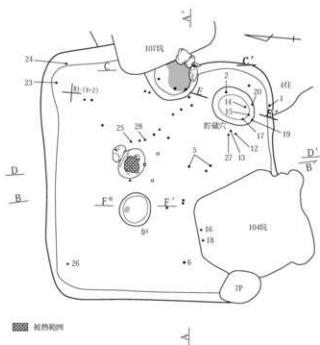
5号住居(第492～495図 P.L.113・114・260・261)

位置：Bk・B1-3・4グリッド 形状：隅丸方形 規模：3.81m×3.63m 残存深度：0.42m 主軸方位：E-6°-N 埋没土：壁際にⅩ層土小ブロックの目立つ層があり、上層はⅦ層土主体で、炭化物粒をわずかに含む。柱穴：未検出 カマド：東壁中央に検出され、燃焼部西半から煙道部は、107号土坑との重複で失われている。右袖には、楕円形の大型礫が使用されており、住居壁よりも屋内側に張り出した位置で検出されていることから、カマド本体は屋内側にも張り出すタイプと考えられる。右袖構築材の東側からも礫が2点検出されているこ

とから、燃焼部側壁は両側ともに礫で構築されていた可能性が高い。燃焼部底面は焼土化して検出されたが、灰の抜き出しの痕跡はみられなかった。遺物：土器はごく少なく、1の土師器環と貯蔵穴から出土した2の土師器環が5号住居の時期を特定し得る遺物である。特筆される遺物としては、中央やや北寄りに検出された台石及び浅い掘り込みを中心として多数の鍛造剥片、及び櫛の羽口、鉄滓がわずかに出土し、西壁寄りの床面からは鉸具(6)が出土した。また、北東コーナー部付近の床面からやや浮いた位置からウシの下顎骨が出土した。重複：104・107号土坑との重複によって南壁の一部とカマ

下東側が壊されている。また、東側で4号住居と重複し、検出状況等から4号住居→5号住居である。 所見：南北2次の調査で全体を明らかにしたが、東壁については107号土坑との重複部分を境に南北でずれが生じてしまったが、カマドとの位置関係から南側の壁が本来の位置であり、北側は東にやや掘り過ぎている。貯蔵穴は南東コーナー部に検出された0.71×0.56m、深さ0.06mの楕円形を呈する掘り込みと考えた。床面はⅫ層土類似の土層で構築され、中央には大形の花崗岩が平坦面を上向きに据えられていた。平坦面は被熱によって赤く変色し、礫表面にはハゼや鉄錆の付着が見られた。礫周辺からは多数の鍛造刺片や輪の羽口、鉄滓が出土しており、礫の西側至近の位置に、0.50m、深さ0.08mの円形を呈する

掘り込みが検出され、底面の一部に焼土が形成されていた。こうした状況から、5号住居では鍛造作業が行われており、被熱した花崗岩は作業台(台石)であり、西側の掘り込みは鍛冶炉であった可能性が高い。しかし、鍛冶炉では底面中央が青灰色に還元し、周辺に赤褐色焼土が形成されることが多いのであるが、5号住居の場合被熱の度合いが弱いことが異質である。また、鍛冶炉には大型の作業用土坑が伴うことが多いが、掘り方の調査においても検出されていない。5号住居の東側にはやや低い地形の場所があり、2面の確認面で多くの鉄滓や輪の羽口が出土していたが、この場所は位置的に見て5号住居の鍛冶作業に伴う廃棄場所であった可能性が高い。 時期：8世紀前半



E-E' 1-132.10m

E-E' 1 暗褐色土 Ⅻ層土主体で、全体に強い暗色を呈する。

F-F' 1-132.00m

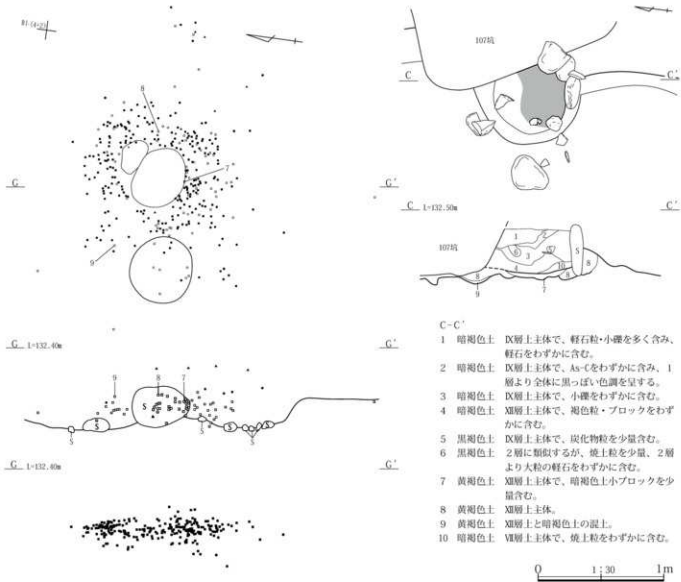
F-F' 1 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、炭化物粒を多く含み、やや暗色を呈する。

A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 Ⅺ層土主体で、Ⅻ層土・Ⅻ層土小ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 Ⅺ層土とⅫ層土の混土。
- 3 暗褐色土 Ⅺ層土とⅫ層土の混土で、焼土粒を多量に含む。
- 4 暗褐色土 Ⅺ層土主体で、焼土粒を少量含む。
- 5 暗褐色土 Ⅺ層土主体で、Ⅻ層土・Ⅻ層土粒を多く含む。
- 6 暗褐色土 Ⅺ層土主体で、Ⅻ層土・Ⅻ層土小ブロックを含み、全体に暗色を呈する。

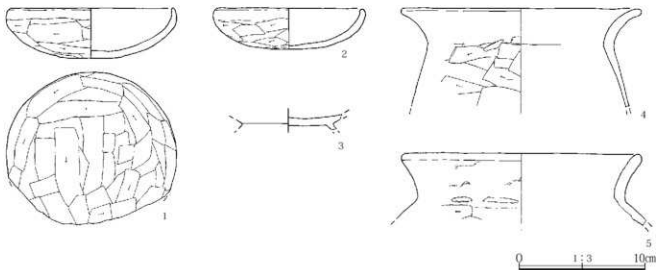
0 1:60 2m

第492図 5号住居

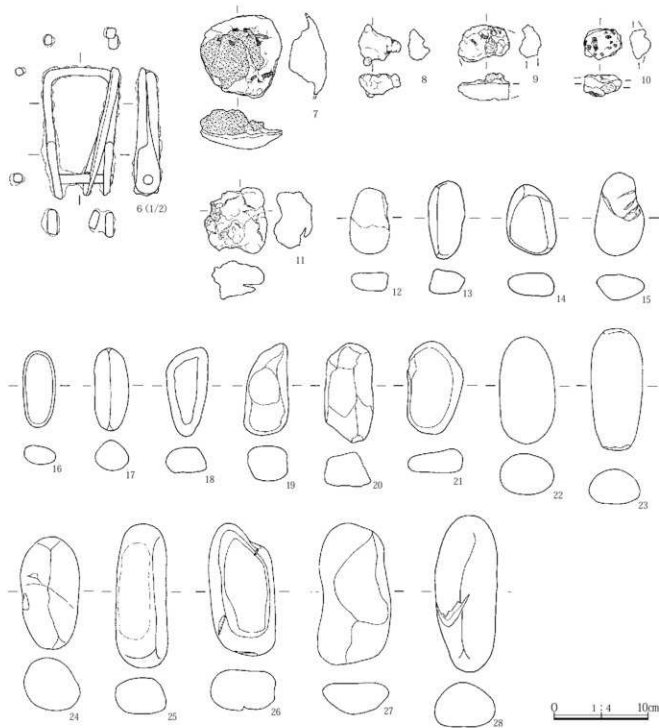


- C-C'
- 1 暗褐色土 IX層上主体で、軽石粒・小礫を多く含む、軽石をわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 IX層上主体で、As-Cをわずかに含む、I層より全体に黒っぽい色調を呈する。
 - 3 暗褐色土 IX層上主体で、小礫をわずかに含む。
 - 4 暗褐色土 X層上主体で、褐色粒・ブロックをわずかに含む。
 - 5 黒褐色土 IX層上主体で、炭化物粒を少量含む。
 - 6 黒褐色土 2層に類似するが、炭土粒を少量、2層より大粒の軽石をわずかに含む。
 - 7 黄褐色土 X層上主体で、暗褐色土小ブロックを少量含む。
 - 8 黄褐色土 X層上主体。
 - 9 黄褐色土 X層上と暗褐色土の混上。
 - 10 暗褐色土 VII層上主体で、炭土粒をわずかに含む。

第493図 5号住居カマド・鍛冶関連遺物出土状況



第494図 5号住居出土遺物(1)



第495図 5号住居出土遺物(2)

7号住居(第496・497図 P.L.114)

位置：Bh-2グリッド 形状：不明 規模：不明 残存
 深度：不明 主軸方位：不明 埋没土：Ⅶ層土 柱穴：
 不明 カマド：東壁に設置されていたことは確実である
 が、位置は不明。 遺物：カマド燃焼部から土器破片が
 わずかに出土したが、掲載し得る遺物は1の須恵器境
 だけである。この遺物の体部外面には焼成後の刻書よう

な痕跡がある。重複：8・16号住居と重複し、検出状
 況から16号住居→8号住居→7号住居である。所見：
 調査区の西端で検出したもので、カマド燃焼部だけが調
 査された。復旧痕が深くまで及んでいるため、残存が悪
 く構造等は判然としないが、燃焼部の形状から燃焼部を
 壁外に設けたタイプと考えられる。時期：9世紀代

8号住居(第496・497図 P.L.114・261)

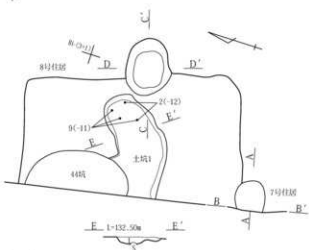
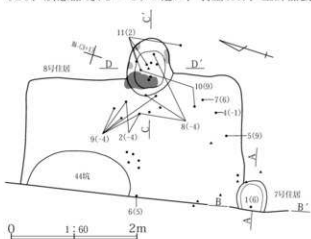
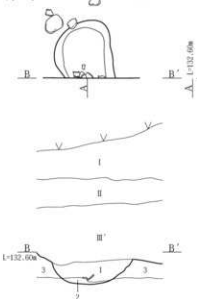
位置: Bh・B1-2・3グリッド 形状: 隅丸長方形?

規模: (2.09)m×3.42m 残存深度: 0m 主軸方位:

E-20°-N 埋没土: VII層土主体と思われる。柱穴:

未検出 カマド: 東壁中央わずかに北寄りに位置しており、燃焼部底面だけを検出したため、全体の構造は把握できなかったが、燃焼部主体を壁外に設けたタイプのカマドであろう。残存部分から想定される主軸方位はE-18°-Nであり、住居主軸方位とほぼ一致している。燃焼部奥壁側はわずかに焼土化していたが、底面中央付近は灰の残存はあったものの、焼土の形成はほとんど見られなかった。遺物: カマド燃焼部と掘り方で検出された不定形の掘り込み底面から遺物が出土した。土師器環(2)、須恵器壺(3～5)の他に、羽釜(11)、土師器裏

(8・9)、灰陶器壺(6)、把手付瓶(10)が出土している。重複: 44号土坑との重複で北寄りの床面が壊されている他に7・16号住居と重複し、検出状況から16号住居→8号住居→7号住居である。所見: 調査区の西端で検出したもので、西側1/2は道路下に位置しているため調査できなかった。天明泥流の復旧痕が深くまで及んでいたため、平面の確認をXII層土中で行ったところ、壁はまったく残存せずかろうじて色調の微妙な違いから住居範囲を捉えることができた。床面はXII層土中に平坦に構築されていたが硬化面は認識できず、中央部にやや色調の暗いVII層土で埋没した東西に長い不定形の浅い掘り方が検出された。貯蔵穴に成り得るような掘り込みは調査された範囲には検出されなかった。時期: 10世紀前半

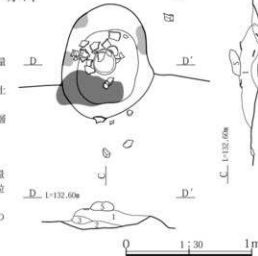
7号住居
カマド

A-A'・B-B'

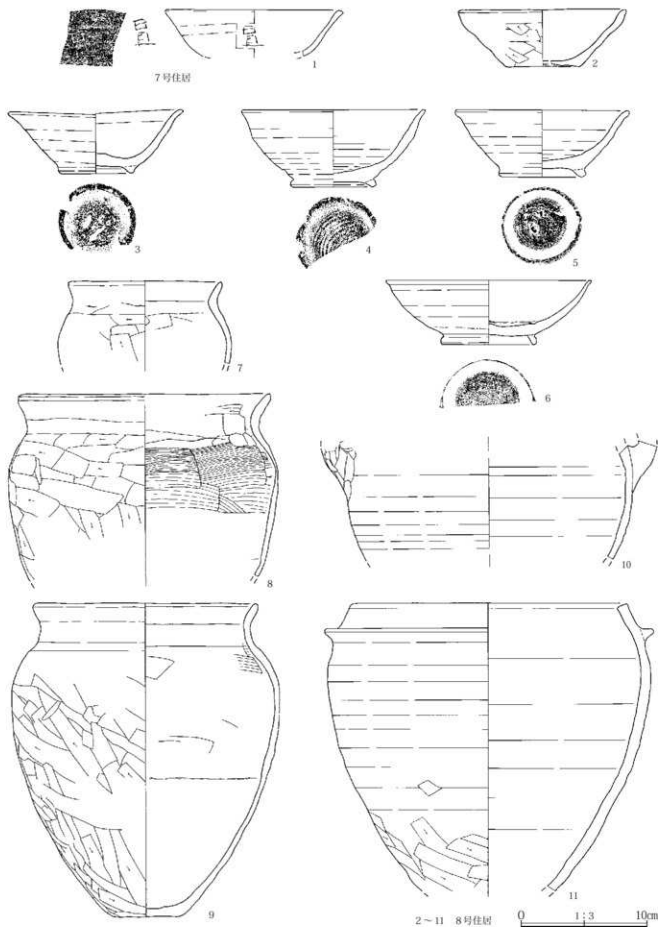
- 1 暗褐色土 C 混土主体で、焼土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 C 混土主体で、黒色灰・焼土細粒を含む。
- 3 暗褐色土 C 混土主体で、XII層土・XII層土粒を多く含む。

C-C'・D-D'

- 1 黒褐色土 D 混土主体で、黒色灰を多量に、XII層土ブロック・焼土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 XII層土粒と黒色灰・焼土粒の混土。
- 3 黄褐色土 XII層土ブロック。

8号住居
カマド

第496図 7・8号住居

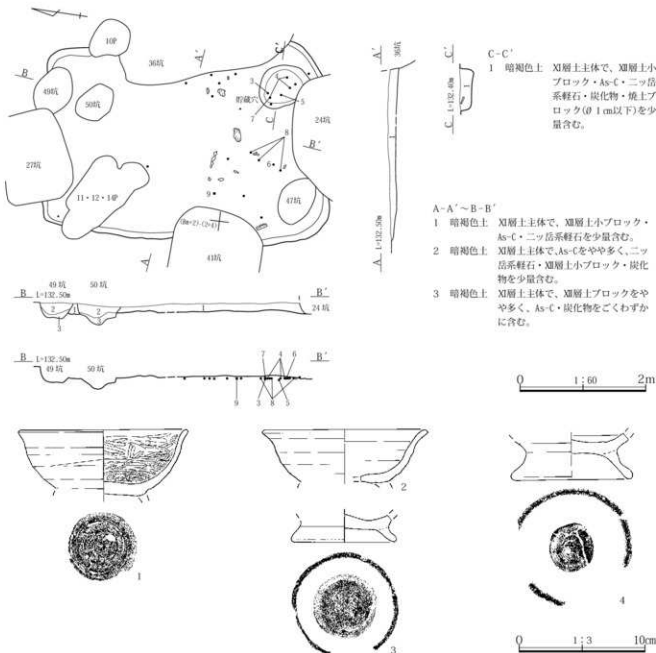


第497図 7・8号住居出土遺物

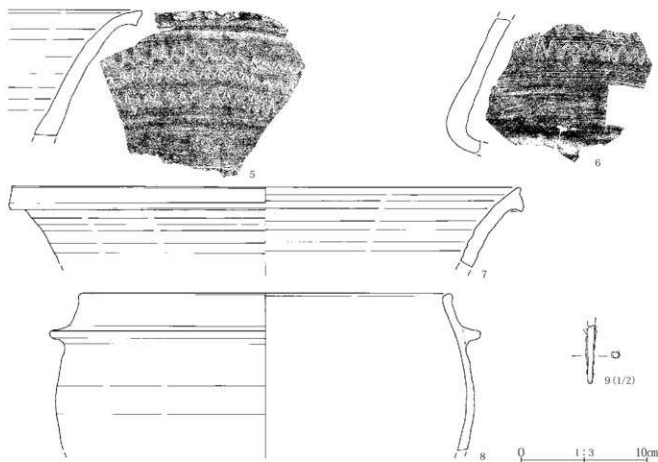
9号住居(第498・499図 P.L.115・261)

位置: Bm-2・3グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 3.18m×4.54m 残存深度: 0.13m 主軸方位: E-6°-N 埋設土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 東壁に設置されていたものと考えられるが、36号土坑との重複により失われている。遺物: 南側の床面付近からの遺物出土が目立っており、西壁寄りの床面から9の釘と見られる鉄製品が出土した。遺物の種類は、須恵器埴(2)・黒色土器埴(1)・羽釜(8)の他、須恵器大甕の口縁部破片(5・7)などであり、灰軸陶器埴の破片も出土しているが、小片であるため掲載しなかった。重

複: 24・27・36・41・47・49・50号土坑との重複で、壁の多くが失われている。所見: 天明泥流の復旧痕が全面に掘削されていた場所に検出したもので、確認はXI層土中で行ったために壁の残存はわずかであり、さらに前述のように土坑との重複によって多くの部分が失われている。床面はXI層土中に平坦に構築されており、掘り方はまったく行われていない。南東コーナー部に唯一検出された0.83×0.64m、深さ0.22mの不正円形を呈する掘り込みが貯蔵穴と考えられ、VII層土を主体とし、炭化物、焼土粒をわずかに含む土が充填されていた。時期: 10世紀後半



第498図 9号住居・出土遺物(1)



第499図 9号住居出土遺物(2)

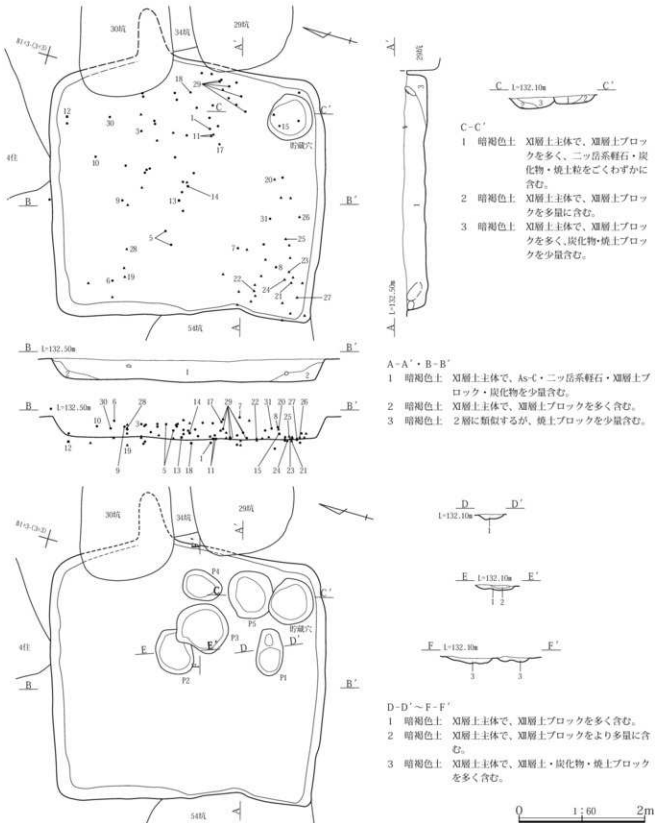
10号住居(第500～502図 P L.115・261・262)

位置：Bk・B1-2・3グリッド 形状：隅丸五角形状
 規模：3.34～4.10m×4.36m 残存深度：0.35m 主軸方位：E-20°-N 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：未検出 遺物：土師器坏(1)・皿(4・5)・甕(9)などがほぼ全体から、灰軸陶器塊(30)、緑軸陶器皿(29)、鉄製品(11・12・17)が東寄りに偏って、棒状礫(21～27)が南西コーナー部に集中して出土した。鉄製品の中で11は、壺蓋の帯端金具と考えられる。重複：29・30号土坑との重複でカマド及び東壁の一部が失われている他、北壁で4号住居とわずかに重複しており、検出状況から10号住居→4号住居と考えられる。埋没土中から白磁片が1点出土していることから、位置は特定できないが中世以降の土坑等との重複もあったものと考えられる。所見：Ⅷ層土中で平面確認を行い、土坑との重複のために平面形が捉えにくく、結果的に五角形状を呈する特異な形状となった。東西南北2カ所の土層断面観察においては、壁側からの自然堆積と判断され、他の住居との重複は想定していなかった。しかし、出土遺物

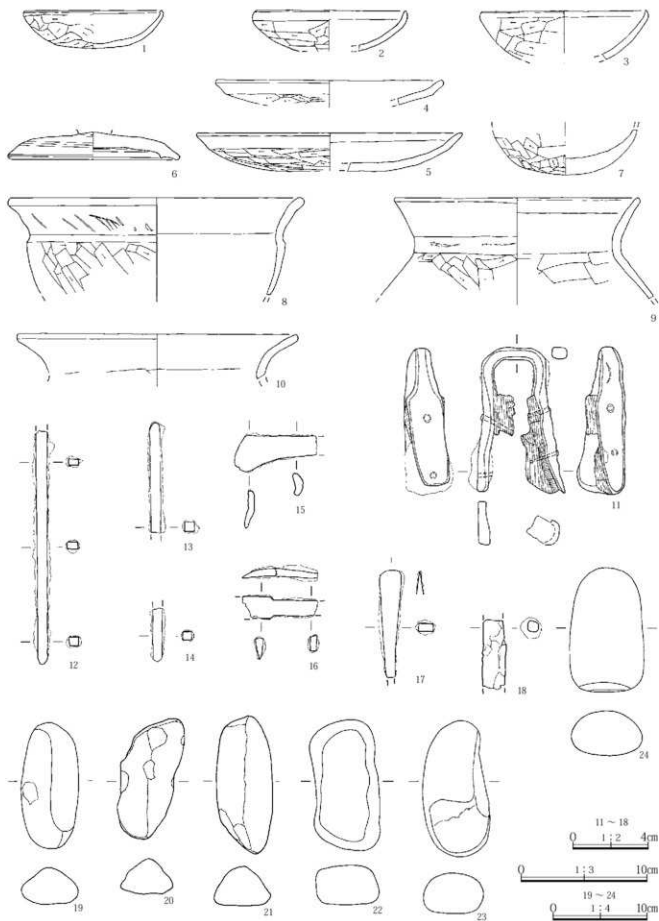
を見ると、1～10などに代表される8世紀前半の遺物と、29～31などのような10世紀代となる遺物が混在しており、10号住居が単独の住居でないことは明らかである。10世紀代の遺物は、概ね東側に集中する傾向があることから、東側で10世紀代の住居が重複していたものを認識できなかったものと考えられるが、壁の方位から推して北壁、西壁、南壁は8世紀代の住居に伴うものであり、東壁が10世紀代の住居に伴うと考えられる。掘り方の調査において、東寄りの一角に、P1(0.73×0.42m、深さ0.21m、楕円形)、P2(0.72×0.58m、深さ0.08m、楕円形)、P3(径0.79m、深さ0.07m、円形)、P4(0.64×0.47m、深さ0.08m、楕円形)、P5(径0.72m、深さ0.17m、円形)の5カ所の土坑状の掘り込みと、径0.72m、深さ0.12mの円形を呈する貯蔵穴と考えられる掘り込みを検出したが、東側から北側にかけては皆無であることから、こうした掘り込みは10世紀代の住居の掘り方として行われたものと考えられる。カマドはどちらも東壁の北寄りに偏った位置に設置されていたものと考えられ、8世紀代のカマドは10世紀代の住居との重複で失わ

れ、10世紀代のカマドは30号土坑との重複によって失われたものと考えられる。各遺物の帰属については、施釉陶器(29・30)、鉄製品(11～18)は10世紀代の住居に伴うものであり、土師器(9・10)、棒状礫(19

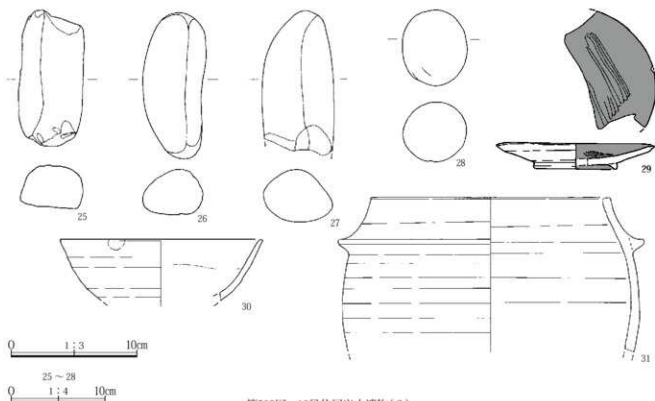
～28)は8世紀代の住居に伴うものであろう。前述の南東コーナー部に検出した貯蔵穴については、10世紀代の住居に伴うものと考えた。 時期：8世紀前半・10世紀代



第500号 10号住居



第501図 10号住居出土物(1)

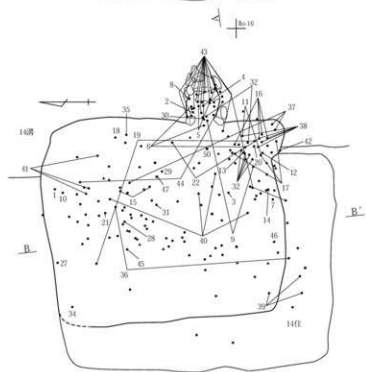
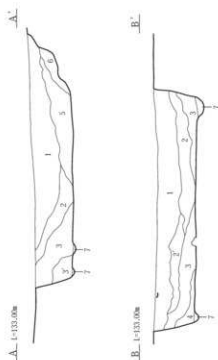
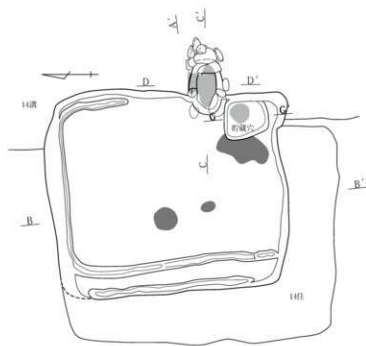


第502図 10号住居出土遺物(2)

11号住居(第503～508図 P.L.115・116・262・263)

位置: B0-15・16グリッド **形状:** 隅丸長方形 **規模:** 3.24m×3.81m **残存深度:** 0.58m **主軸方位:** E-6°-N **埋没土:** 暗い色調のⅦ層土主体。 **柱穴:** 未検出 **カマド:** 東壁中央南寄りに検出した。袖構築材などの位置から想定した主軸方位はE-3°-Nであり、北壁で計測した住居主軸方位と大差ない値である。燃焼部底面は床面よりもわずかに低い位置にあり、側壁には礎を立てて並べているが、屋内側に張り出した位置からは1点も出土していないことから、壁外にカマド本体を設けたものと考えられる。奥壁の天井部には大形礫が横渡しにして使用されており、焚口部なども同様の構造であった可能性が高い。やや大型の棒状礎を燃焼部中央わずかに左に偏った位置に立てて支脚としていた。燃焼部底面及び側壁は赤褐色に焼土化している部分が多く、黒色の灰は、焚口部及び南東コーナー部の貯蔵穴西側に検出された。 **遺物:** 南壁際や南東コーナー部の貯蔵穴、及びカマド燃焼部から須臾器環(2・4・5)・埵(6・8・11)・黒色土器罐(22)や羽釜(38)小形の土釜(37)などの出土が目立ち、灰釉陶器埵・皿の破片の出土数が多く、緑釉陶器の破片も2点(34・35)出土した。さらに刀子(47)や棒状の鉄製品の出土もあり、バラエティに富んでいる。また、

埋没土中から骨片が1点出土した。 **重複:** 西側で14号住居と重複し、東側のカマド部分で14号溝と重複しており、検出状況及び残存状況から14号溝→14号住居→11号住居と考えられる。 **所見:** IX～XI層土での確認を行ったことから、遺構の残存が良好であった。14号住居と同時に検出されているが、14号住居のカマドの検出状況から新旧関係が明確であったため、分離して調査を行った。壁は全周良好な状態で検出され、土層断面の観察でも崩落などは観察されなかった。床面はⅩⅢ層土中に平坦に構築されており、カマド前面を含めて硬化面は検出されなかった。北東コーナー部から北壁、及び西壁に沿っては、幅0.15m、深さ0.06mほどの壁溝が設けられており、西壁に沿った壁溝には、東に0.25mほどの間隔を置いてもう1条の壁溝が平行している。共に床面調査の段階で検出したものであり、新旧関係は捉えることができなかった。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出した0.72×0.55m、深さ0.08mの南北に長辺を有する長方形の掘り込みであり、カマドからと見られる焼土が底面付近から、黒色灰層が西側床面に広がっていた。掘り方の調査では、円形及び楕円形を呈する掘り込み6カ所(土坑1～土坑6)と、ピットを5カ所(P1～P5)検出した。 **時期:** 10世紀後半



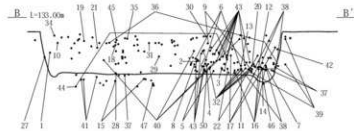
A-A'・B-B'

- 1 黒褐色土 As-C・ニッ岳系軽石を多く、炭化物・焼土ブロックを少量含む、硬くしまりが強い。
- 2 黒褐色土 As-C・ニッ岳系軽石・XI層上ブロック・炭化物を少量含む。
- 2' 黒褐色土 XI層上主体で、XI層上ブロックを多く含む。
- 3 黒褐色土 As-C・ニッ岳系軽石・炭化物をわずかに含む、柔らかい。
- 3' 黒褐色土 XI層上主体で、XI層上ブロックをやや多く含む。
- 4 暗褐色土 XI層上主体で、XI層上ブロックをやや多く、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物をわずかに含む、柔らかい。
- 5 暗褐色土 XI層上・XI層の混土で、As-C・ニッ岳系軽石を少量含む。
- 6 にぶい褐色土 XI層上主体で、As-C・ニッ岳系軽石・XI層上ブロックをわずかに含む。
- 7 暗褐色土 XI層上主体で、XI層上ブロックを多く含む、柔らかい。

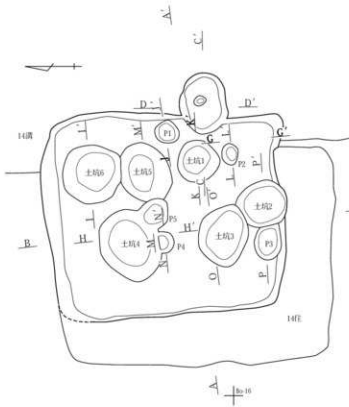


C-C'

- 1 暗褐色土 XI層上主体で、炭化物を多く含む。
- 2 暗褐色土 XI層上主体で、XI層上ブロックを多く含む。

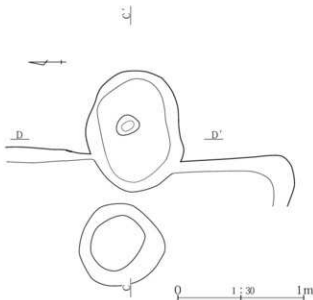


第503図 11号住居



第9表 11号住居 土坑・ピット計測表

番号	規模	深さ	形状
土坑1	0.67	0.26	円形
土坑2	0.82	0.29	円形
土坑3	0.98×0.80	0.21	楕円形
土坑4	1.16×0.98	0.26	楕円形
土坑5	1.00×0.80	0.22	楕円形
土坑6	0.92	0.25	円形
P 1	0.35	0.22	円形
P 2	0.33×0.27	0.14	楕円形
P 3	(0.53)×0.43	0.18	楕円形
P 4	0.35	0.11	円形
P 5	0.45	0.20	円形



第504図 11号住居掘り方・カマド掘り方



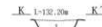
H-H'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、VII層上・XII層上ブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 VII層上主体で、VII層上・XII層上ブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 VII層上主体で、VII層上・XII層上ブロック、炭化物を少量含む。



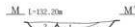
I-I'・J-J'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、XII層上ブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 VII層上主体で、XII層上ブロックを多量に含む。



K-K'・L-L'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、XII層上ブロック・炭化物を多く含む。



M-M'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、XII層上ブロックを多く、炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 VII層上主体で、XII層上ブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 VII層上主体で、XII層上ブロックを多く、炭化物を少量含む。



N-N'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、XII層上ブロック・炭化物を多く含む。



O-O'

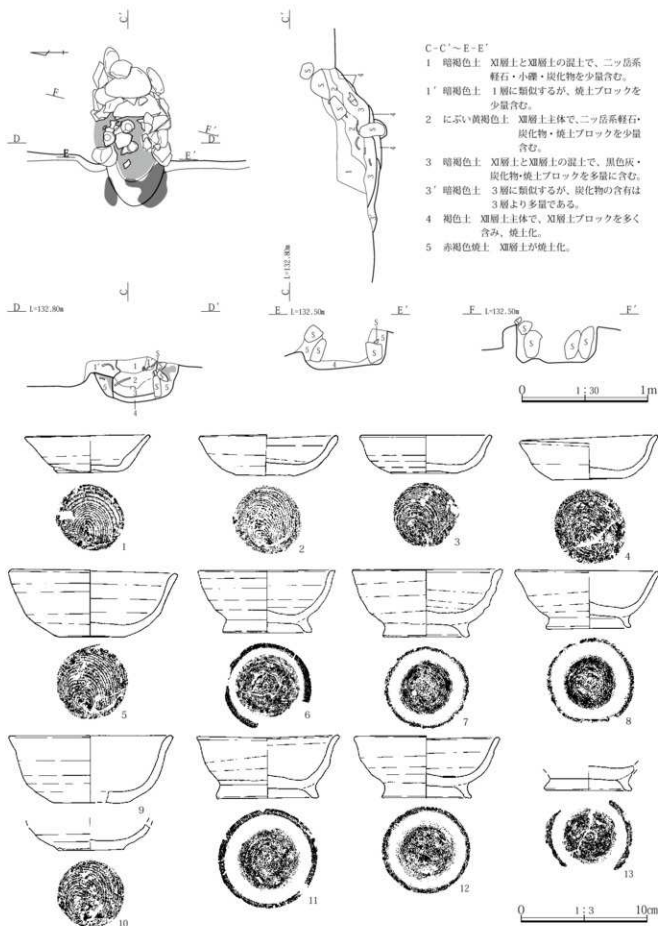
- 1 暗褐色土 VII層上主体で、XII層上ブロックを多く、炭化物を少量含む。



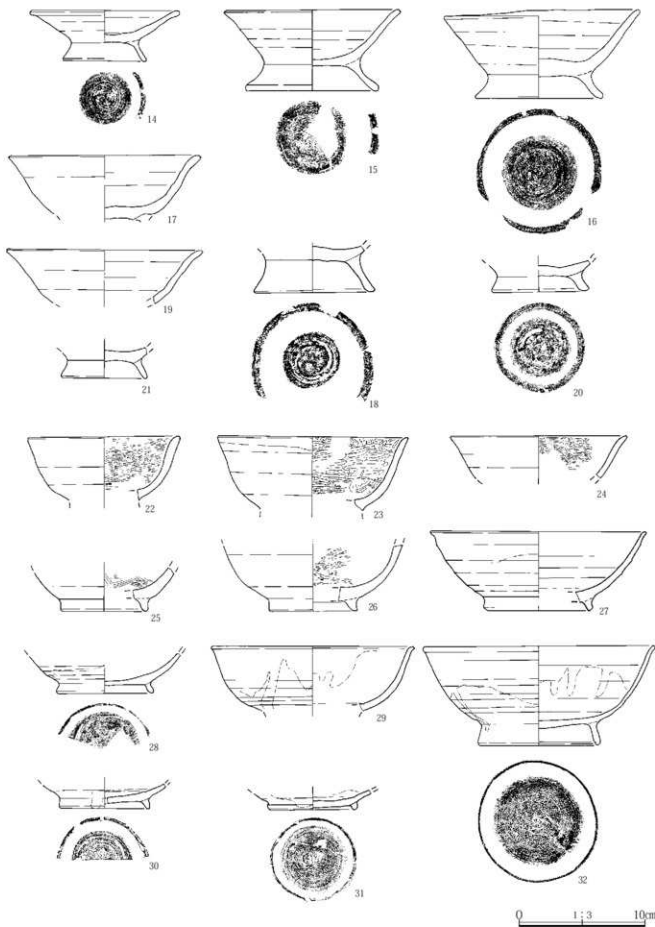
P-P'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、XII層上ブロック・炭化物・焼土ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 VII層上主体で、XII層上をやや多く、炭化物・焼土ブロックをわずかに含む。
- 3 暗褐色土 VII層上主体で、VII層上・XII層上ブロックを少量含む、炭化物をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 VII層上主体で、VII層上・XII層上ブロックを多く含む。

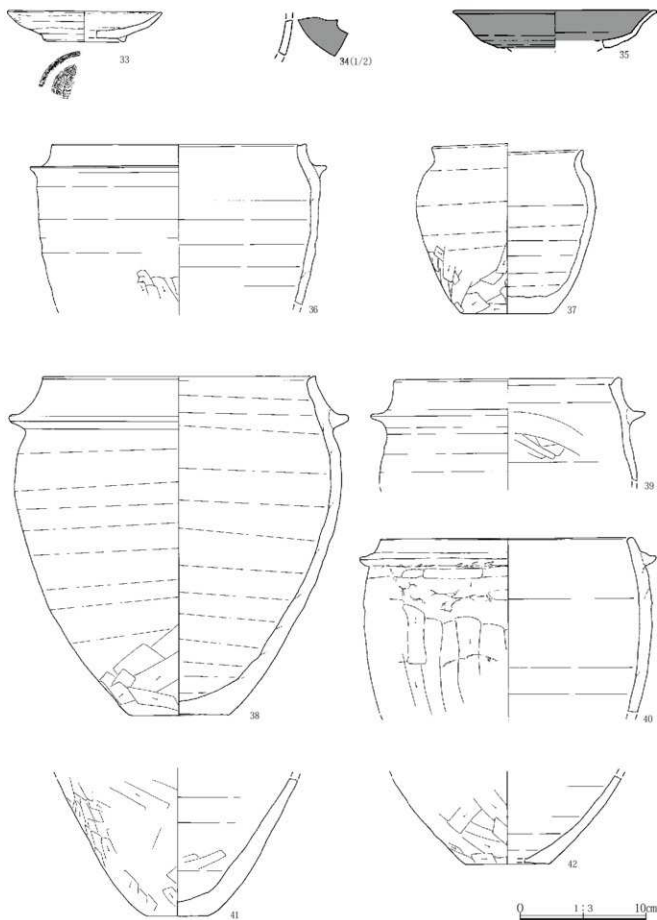




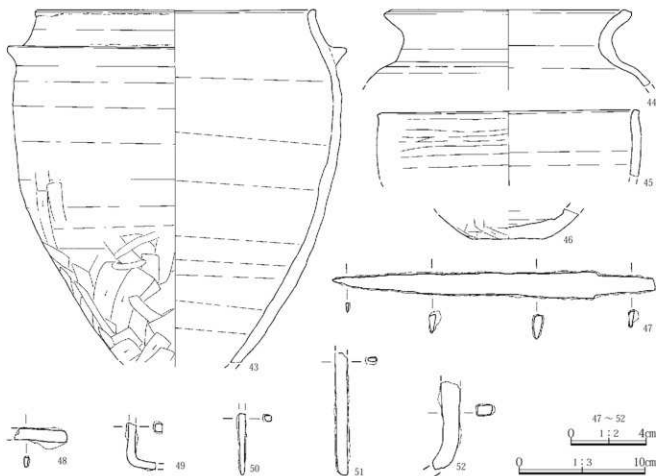
第505図 11号住居カマド・出土遺物(1)



第506图 11号住居出土遺物(2)



第507図 11号住居出土遺物(3)



第508図 11号住居出土遺物(4)

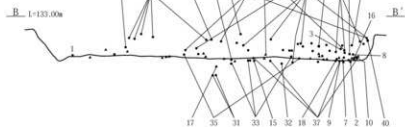
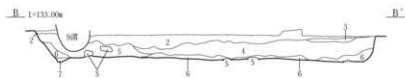
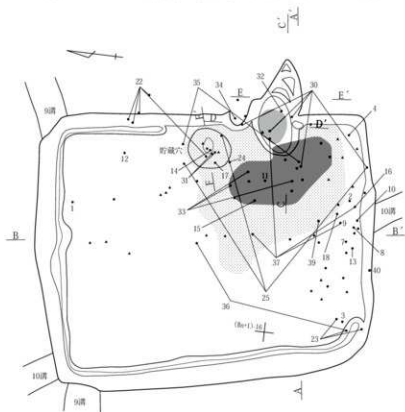
12号住居(第509～513図 P.L.117・263・264)

位置：Bm～Bo-15・16グリッド 形状：隅丸長方形 規模：4.30m×5.25m 残存深度：0.60m 主軸方位：E-6°-N 埋没土：下層の主体はⅦ層土であるが、上層にはⅤ層土類似の土が堆積していた。柱穴：未検出 カマド：東壁の南寄りに検出された。燃焼部底面は床面よりわずかに掘り窪められており、中央部は焼土化していた。右袖部には礫が1点検出されており、構築材として据えられたものと考えられることから、本来は他の住居と同様に少なくとも両袖部及び焚口天井部などに礫を構築材として使用していた可能性が高いのであるが、構築材とみられるような礫はカマド内には残されていないことから、住居廃絶時に取り壊されたものと思われる。カマド平面形から主軸方位を想定した値はE-3°-Sであり、住居東壁を基準として計測した住居主軸よりやや南に振れている。遺物：カマド前面から南壁寄りの位置に、礫に混じって破片が多く出土した。須恵器杯(2～3)・碗(8)・足高台の碗(10)など、酸化焙焼

成された須恵器系諸の供膳具が主体で、羽釜(30)の他に土釜(37)が出土した。また、肩部に穿孔のある突帯を廻らせた瓶(34)と思われる破片が出土している。施軸陶器では灰軸陶器碗(22)が主体で、緑軸陶器碗(27)は25号住居の碗と接合した。また、刀子(38)と見られる鉄製品も出土した。重複：9・10号溝によって壁のこく一部が壊されている他に、近い時期の遺構との重複は見られない。所見：住居の埋没過程の中で埋まりきらずに窪地化していたものか、埋没土上層にB混土(V層土)の堆積が見られる。復旧痕による擾乱が深くに及んでいなかったため下層の残存が良好で、平面確認をⅨ層上面で行うことができた。壁の傾斜は比較的緩やかであるが、東壁と北壁は直線的に検出されており壁の崩落によって傾斜が緩やかになったものとは考えられない。床面はカマドからの灰の掻き出しの広がる面として捉えたが、この面の直下はカマド前面の広い範囲で硬化面が形成されており、確実に床面が捉えられた住居の一つである。カマドの左手至近の位置に検出した径0.62m、深さ0.26mの円

形の掘り込みが貯蔵穴と考えられる。この貯蔵穴の北側の東壁から南西コーナー部まで、上幅0.15m、深さ0.07mほどの壁溝が廻っている。南東コーナー部より西寄りの南壁に接する位置に、長さ50cmほどの扁平な礫が床面に水平に埋め込まれたように出土し、その下部に0.71×0.43m、深さ0.14mほどの楕円形の掘り込み(土坑1)が、

さらにこれに接して土坑2(0.66×0.56m、深さ0.14m、不整楕円形)が検出されている。通常貯蔵穴が検出される位置であり、カマド関連の施設の可能性がある。他に中央部にP1(径0.30m、深さ0.04m、不整円形)、P2(径0.29m、深さ0.05m、不整円形)の2カ所の浅いピットを検出した。 時期:10世紀後半



A-A'・B-B'

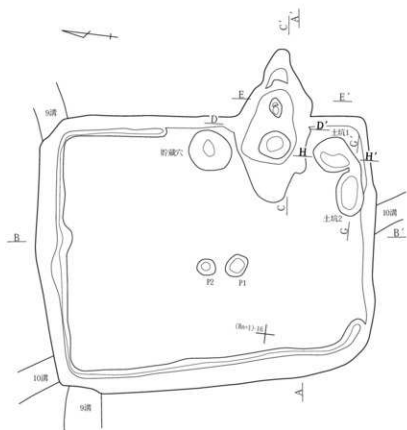
- 1 黒褐色土 As-Bを多く含むⅧ層土主体で、ニッ岳系軽石・明褐色土ブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 Ⅷ層土とⅩ層土の混土で、As-B・ニッ岳系軽石をやや多く含む、明褐色土ブロック・炭化物・As-Cを少量含む。
- 3 暗褐色土 川砂の堆積したもので粒子が細かい。
- 4 暗褐色土 Ⅹ層土主体で、Ⅹ層土ブロックをやや多く含む、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。
- 5 暗褐色土 Ⅹ層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石・Ⅹ層土ブロック・炭化物を少量含む。
- 6 黒褐色土 Ⅹ層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含む、粘性が強い。
- 7 暗褐色土 Ⅹ層土とⅩ層土の混土で、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物をこくわずかに含む。



F-F'

- 1 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、ニッ岳系軽石・Ⅹ層土ブロック・炭化物を多く含む。
- 2 黒褐色土 Ⅷ層土主体で、Ⅹ層土ブロック・ニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。
- 3 黒褐色土 Ⅷ層土主体で、Ⅹ層土ブロックを多量に、ニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。

第509図 12号住居



G-G'

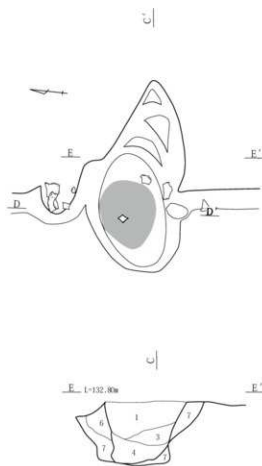
- 1 暗褐色土: VII層上主体で、二ッ岳系軽石・XII層上ブロック・炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土: VII層上主体で、XII層上ブロックをやや多く、二ッ岳系軽石・炭化物をわずかに含む。



H-H'

- 1 黒褐色土: VII層上主体で、二ッ岳系軽石・XII層上ブロック・炭化物をやや多く含む。
- 2 暗褐色土: VII層上主体で、XII層上ブロックを多く、二ッ岳系軽石を少量含む。
- 3 に近い黄褐色土: XII層上主体で、VII層上ブロックを少量含む。

0 1:50 2m



E 1:32.80m



C 1:32.80m

D-D' 1:32.80m

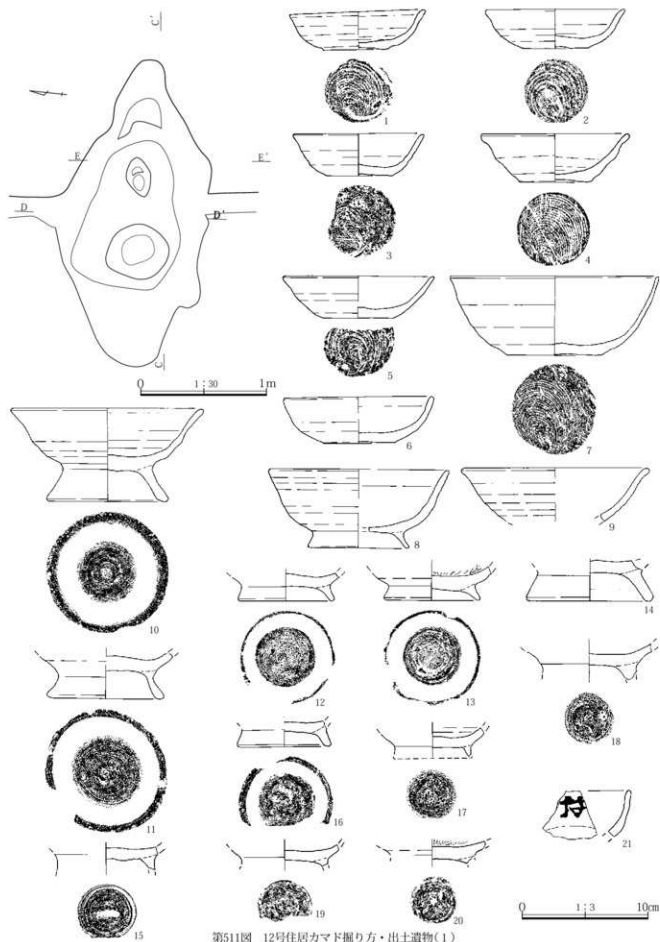


C-C'・E-E'

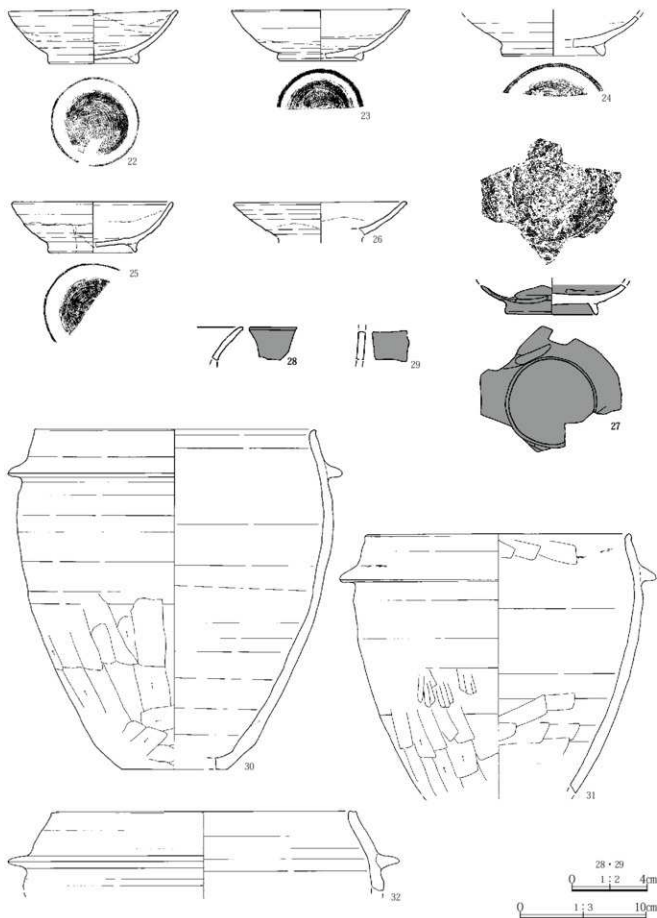
- 1 黒褐色土: VII層上主体で、二ッ岳系軽石をやや多く、炭化物・焼土ブロックを少量含む。
- 1' 暗褐色土: 1層に類似するが、焼土ブロックの含有は1層より多量。
- 2 暗褐色土: VII層上主体で、XII層上ブロック・炭化物・焼土ブロックを多く、二ッ岳系軽石を少量含む。
- 3 暗褐色土: XII層上主体で、XII層上ブロック・焼土ブロックを多量に含み、粘性がやや強い。
- 4 黒褐色土: XII層上主体で、黒色灰・炭化物・焼土ブロックを多量に含む。
- 5 暗褐色土: VII層上主体で、焼土粒を少量含む。
- 6 暗褐色土: VII層上主体で、二ッ岳系軽石をやや多く、XII層上ブロックを少量含む。
- 7 暗褐色土: VII層上主体で、XII層上ブロックを多く、二ッ岳系軽石を少量含む。

0 1:30 1m

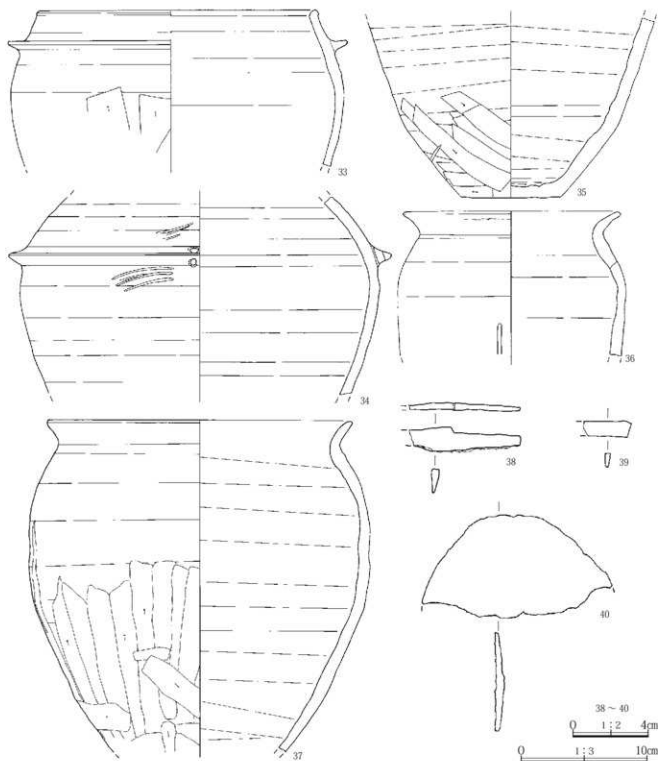
第510図 12号住居掘り方・カマド



第511図 12号住居カマド掘り方・出土遺物(1)



第512図 12号住居出土遺物(2)



第513図 12号住居出土遺物(3)

14号住居(第514図 P L.117・264)

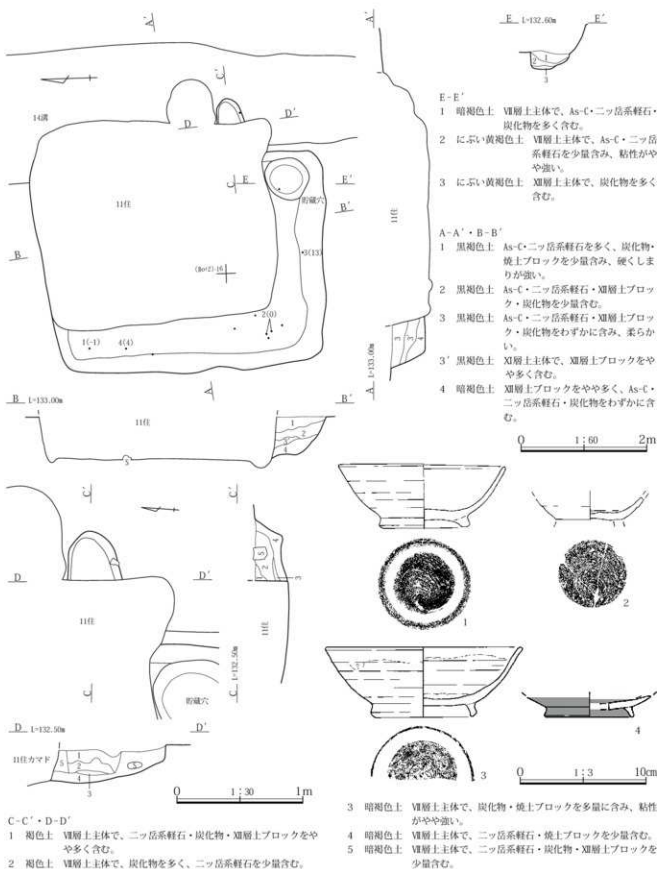
位置:Bo-15・16グリッド 形状:隅丸長方形 規模:3.35m×4.35m 残存深度:0.59m 主軸方位:E-1°-N 埋没土:やや暗い色調のⅦ層土主体。柱穴:未検出 カマド:東壁南寄りに偏った位置に設置されているが、11号住居との重複によって主体部分は失われ、煙道

の一部がわずかに残されていた。遺物:南壁から西壁寄りに残存した床面付近から須恵器碗(1)、灰釉陶器碗(3)、緑釉陶器碗の小片(4)などと礫が出土した。重複:東側で11号住居、14号溝と重複し、検出状況から14号溝→14号住居→11号住居と考えられる。所見:11号住居との重複によって大半が失われており、南壁から西

壁及び床面の一部だけが残存していた。南東コーナー部には、径0.64m、深さ0.26mの円形を呈する貯蔵穴が横

出され、炭化物を多量に含む土によって埋没していた。

時期：10世紀前半

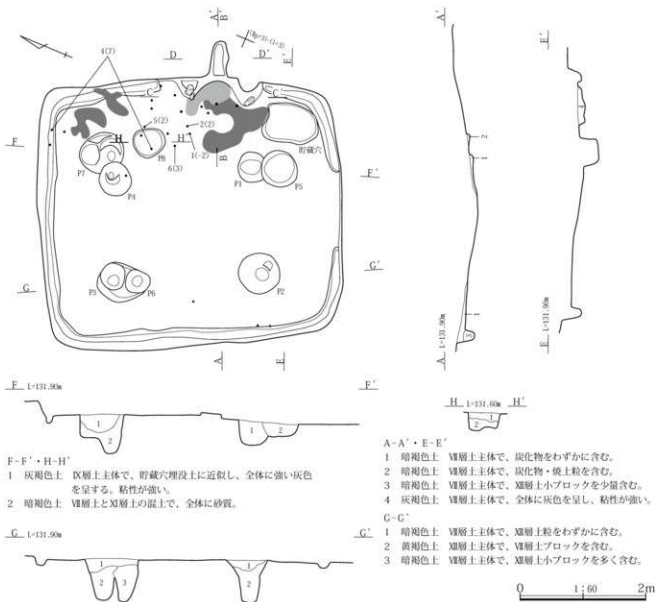


第514図 14号住居・出土遺物

15号住居(第515・516図 P.L.118・264)

位置：Bo・Bp-1～2グリッド 形状：隅丸長方形 規模：4.25m×4.75m 残存深度：0.25m 主軸方位：E-24°-N 埋設土：最下層だけしか認識できなかったが、炭化物をわずかに含むⅦ層土主体であった。柱穴：床面より下位の位置で検出したP1(径0.46m、深さ0.50m、円形)、P2(径0.65m、深さ0.67m、円形)、P3(径0.43m、深さ0.65m、不整形円形)、P4(径0.51m、深さ0.71m、円形)の4カ所が配置から見て柱穴と考えられ、P1-P2間は1.70m、P3-P4間は1.75m、P2-P3間は2.33m、P4-P1間は2.20mである。また、P1にはP5(径0.57m、深さ0.37m、円形)、P3にはP6(径0.37m、深さ0.69m、円形)、P4にはP7(径0.67

m、深さ0.63m、円形)がそれぞれ重複しているが、重複する方向にばらつきがある上に深さの違いもあることから、柱穴の掘り直しとは考えにくい。P4の南東の位置にP8(径0.47m、深さ0.21m、不整形円形)を検出したが、これも柱穴とは無関係で機能は不明である。カマド：東壁南寄りに検出した。検出面が低かったために残存が不良であったが、壁外には煙道だけが検出され、屋内に袖の痕跡が残っていたことから、カマド本体が屋内に設けられたタイプと見られる。煙道部から計測した主軸方位は、E-20°-Nである。両袖部からは礫が出土しているが、いずれも小形であり立てられたような痕跡がないことから、構築材とは考えなかった。燃焼部底面には焼土が形成され、カマドの右手側から正面に黒色灰



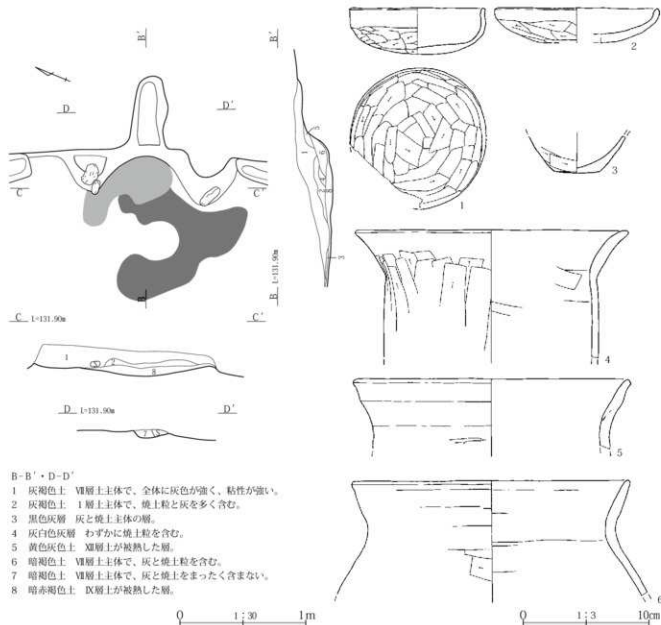
F-F'・H-H'
 1 灰褐色土 Ⅷ層土主体で、貯蔵穴埋設上に近似し、全体に強い灰色を呈する。粘性が強い。
 2 暗褐色土 Ⅶ層土とⅧ層土の混土で、全体に砂質。

A-A'・E-E'
 1 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、炭化物をわずかに含む。
 2 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、炭化物・焼土粒を含む。
 3 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、燻層土小ブロックを少量含む。
 4 灰褐色土 Ⅶ層土主体で、全体に灰色を呈し、粘性が強い。
 G-G'
 1 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、燻層土粒をわずかに含む。
 2 黄褐色土 Ⅷ層土主体で、燻層土ブロックを含む。
 3 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、燻層土小ブロックを多く含む。

第515図 15号住居

面の広がりが出された。遺物：カマド周辺の特に北側部分に破片が比較的多く出土したが、実測できたものは土師器環(1・2)と甕(3～6)だけであった。また、埋没土中から細片化した馬歯が1点出土したが、住居に伴うものであるか不明である。重複：近い時期の遺構との重複は認められない。所見：検出された場所は、南北方向の低地を想定していた場所で、Ⅶ層土相当の土層が厚く堆積していた上に、1面の道路による攪乱や古代の道路が上部に重複しており、当初は住居の存在そのものが認識できなかった。低地部について全体に掘り下げていく過程で、中位にⅢ層土類似の黄褐色を呈する洪水堆積層が出され、この上面においてⅦ層土の堆積し

た住居の平面を確認した。洪水堆積層は中央部が窪み南側に傾斜していたため、住居中央部の床面及び南壁の中央部は、確認時点では掘削してしまい検出できなかった。残存した床面は洪水堆積層中に構築されており、硬化した面は皆無であった。また、カマド部分を除いて幅0.20m、深さ0.10mほどの壁溝が廻っていたものと考えられる。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出された0.85×0.62m、深さ0.11mの不整楕円形を呈する掘り込みが該当するものと考えられる。北東コーナー付近で壁側から傾斜した出土状況で炭化物が出土しているが、焼失による建築部材の残存ではなく廃絶後に東側から廃棄されたものと思われる。時期：7世紀後半



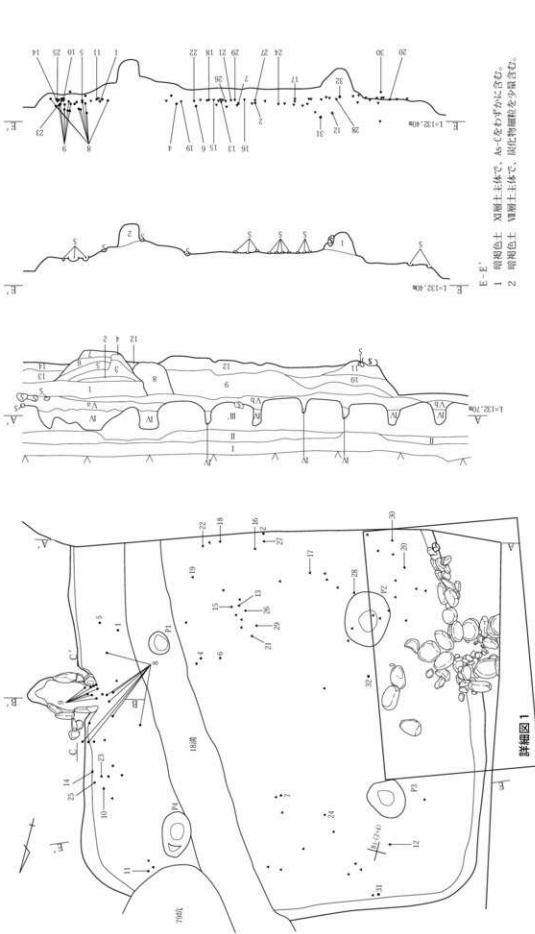
第516図 15号住居カマド・出土遺物

16号住居(第517～521図 P.L.119・120・264・265)

位置: Bh～Bj-1～3グリッド **形状:** 隅丸方形 **規模:** 6.33m×(6.07)m **残存深度:** 0.47m **主軸方位:** E-20°-N **埋没土:** XI層土ブロックとVII層土の混土。

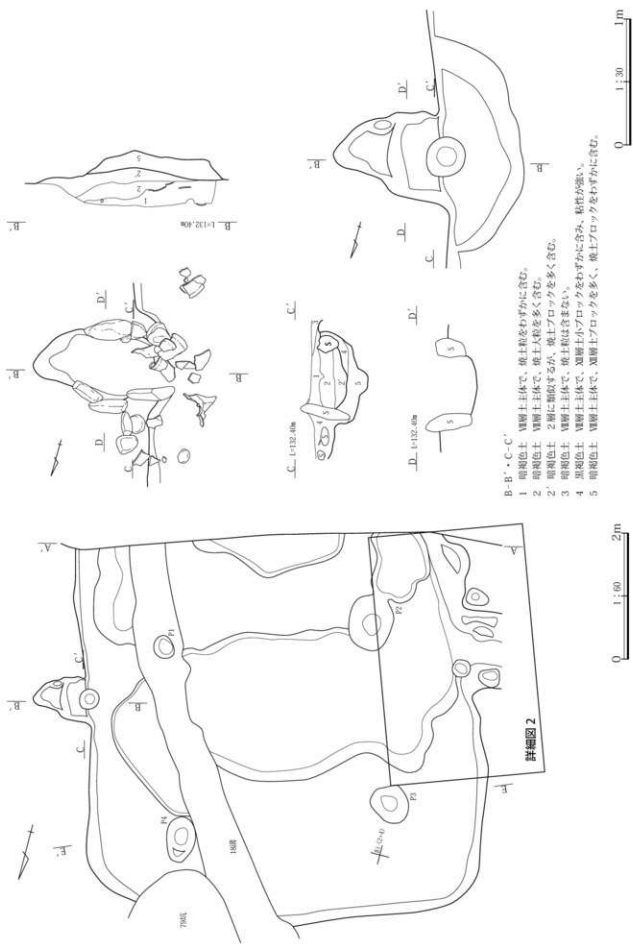
柱穴: P1(径0.32m、深さ0.68m、円形)、P2(0.86×0.69m、深さ0.44m、楕円形)、P3(径0.63m、深さ0.49m、不整形円形)、P4(0.72×0.45m、深さ0.55m、楕円形)の4カ所を配置から柱穴と判断した。いずれの柱穴も礫層中に掘り込まれていた。P1-P2間は3.30m、P3-P4間は3.40m、P4-P1間は3.00m、P2-P3間は2.85mである。 **カマド:** 東壁中央に設置されており、袖部構築材の礫が室内にわずかに張り出した位置に検出されているが、燃焼部の主体は壁外に位置している。燃焼部両側壁にも礫を立てているが、奥壁には礫は見られない。燃焼部の埋没土下層には多量の焼土粒が認められたが、底面に焼土は形成されていない。掘り方において、カマド中央に円形のピット状の掘り込みが検出されており、この位置に支脚が据えられていた可能性がある。袖構築材の位置から求めたカマド主軸方位はE-15°-Nであり、東壁で計測した住居主軸方位とは微妙なズレが生じている。 **遺物:** カマド焚口部に長胴の土師器甕の大形破片(9)が、住居北東部の一角から土師器甕の頸部から口縁部にかけての破片(10・11)が出土し、床面から土師器環(1・2・5)や胴部の張りの強い甕(7)が出土した。土錘(12)や礫(30)が出土した他、棒状礫が床面付近から多数出土しているが、大小様々でありすべてがいわゆる「こもみ石」と見るには無理であろう。特筆されるのは、3カ所に穿孔された板状の鉄製品である。片側は欠損しているが、もう一方は角に丸みがあり、その形状と穿孔から推して鉋尾の裏金の可能性が高い。また、埋没土中から焼骨と見られる細片が1点出土した。 **重複:** 7・8・21号住居と重複し、検出状況及び出土遺物から21号住居→16号住居→8号住居→7号住居である。また、18号溝との重複によって東寄りの床面と南北両壁の一部が壊されていた。 **所見:** 調査区の南西部に検出した住居で、南壁の部分は調査区外であり、明らかにすることはできなかったが、柱穴の配置から南に0.3～0.4mほどの位置に南壁が位置していると見て良いであろう。床面は灰面や硬化面などの明確な指標がなかったため、遺物の出土面、及び下層の礫層の一部と見られ

る小礫が検出された面として捉えた。床面中央部には小礫が少なく暗褐色土が見られたため、この部分には掘り方があるものとして調査を進めたが、わずかに掘り進められていたにすぎなかった。掘り方の調査時点も含めて掘り込みは柱穴以外に検出されず、貯蔵穴はなかったものと考えられる。16号住居で特筆されるのは、西壁中央部に設けられた石組みの施設である。西壁のちょうどカマドの正面に当たる位置に、壁面に礫を立て並べ、その一角から礫を3～4段平積みにして壁面とした側溝状の施設が西側に延びていた。礫間の距離は0.25～0.30mほどであり、西側が現道下になるため調査できなかった。どの程度西側に延びていたものか明らかにすることができなかった。検出当初は、新しい時期の遺構が重複しているものと考えていた。しかし、この施設の埋没土は、住居埋没土と明確に分離できない上に、礫の立てられている面が西壁と一致し、さらに部材と見られる礫の一部が住居床面から出土していることなどから推して、16号住居に付属する施設と結論づけた。また、カマドの正面に当たる位置に構築されていることも偶然とは考えにくい。ただし、施設の全体像がわからないため、どのような目的で構築されたものであるかはわからないが、南壁中央やカマド向いの壁中央に設けられる張り出しなどと同様な施設の可能性がある。 **時期:** 7世紀後半



- A-A' 1 暗褐色土 As-多量層に、As-c・ニッ石系軽石を含む。
 2 暗褐色土 B 混土主体。
 3 暗褐色土 B 混土主体で、灰層土粒を少量含む。
 4 暗褐色土 B 混土主体で、灰層土ブロックを含む。
 5 暗褐色土 B 混土主体の層と灰層土主体の層の圧層。
- 6 暗褐色土 B 混土主体の層と灰層土主体の層の圧層で、粘着がやや強い。
 7 暗褐色土 B 混土主体の層と灰層土主体の層の混土。
 8 暗褐色土 灰層土主体。
 9 暗褐色土 灰層土主体で、灰層土小ブロックをわずかに含む。
 10 暗褐色土 灰層土主体で、灰層土ブロックを多く含む。
 11 暗褐色土 灰層土主体の層と灰層土ブロックの混土。
- E-E' 1 暗褐色土 灰層土主体で、As-cをわずかに含む。
 2 暗褐色土 灰層土主体で、炭化物層粒を少量含む。
- 12 暗褐色土 灰層土主体の層と灰層土ブロックの混土で、塊土ブロックを多く含む。
 13 暗褐色土 灰層土主体。
 14 暗褐色土 灰層土と灰層土の混土。

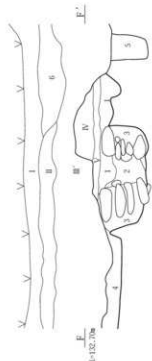
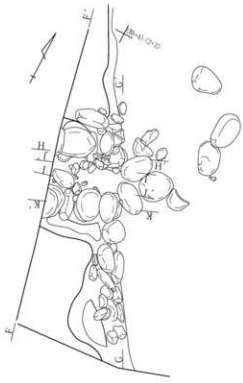
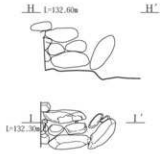
第517図 16号住居



- B・B'・C・C'
- 1 暗褐色土 V層土主体で、硬土粒をわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 V層土主体で、硬土大粒を多く含む。
 - 2' 暗褐色土 2層に類似するが、硬土ブロックを多く含む。
 - 3 暗褐色土 V層土主体で、硬土粒は含まない。
 - 4 黒褐色土 V層土主体で、燧層土小ブロックをわずかに含む、粘性が強い。
 - 5 暗褐色土 V層土主体で、燧層土ブロックを多く、硬土ブロックをわずかに含む。

第518図 16号住居掘り方・カマド

詳細図1



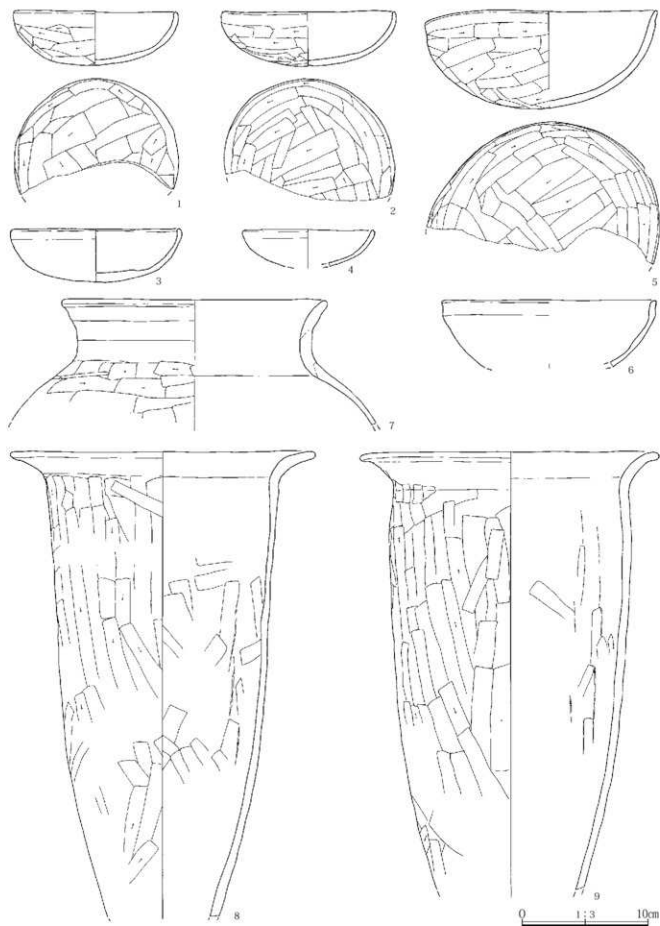
詳細図2



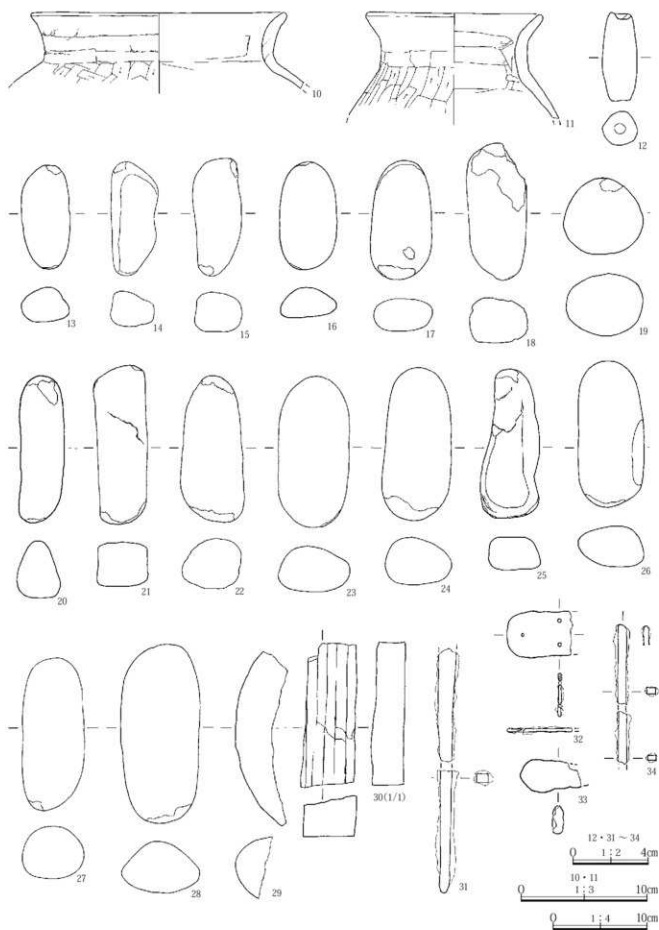
- F-F'
- 1 暗褐色土 W層土主体で、As・Feを均一に含む。しまりが顕著。
 - 2 暗褐色土 暗褐色土主体で、刈層土・刈層土粒を均一に、As・C・堆土粒をわずかに含む。
 - 3 暗褐色土 刈層土主体で、刈層土粒を多量に、As・Cを少量含む。2層よりやや暗色を呈する。
 - 4 暗褐色土 W層土と刈層土の混土。
 - 5 暗褐色土 As層土と刈層土の混土。
 - 6 灰色土 現代の水口堆積土。



第519図 16号住居詳細図



第520図 16号住居出土遺物(1)



第521図 16号住居出土遺物(2)

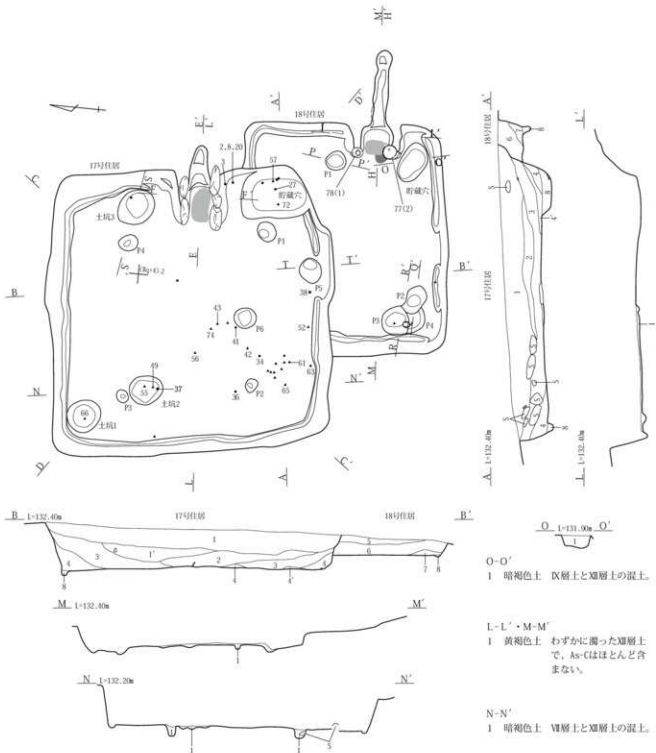
17号住居(第522～529図 P.L.120・121・265・266)

位置: Bq・Br-1・2グリッド **形状:** 隅丸方形 **規模:** 4.50m×4.39m **残存深度:** 0.75m **主軸方位:** E-4°-N **埋没土:** 色調の暗いⅧ層土主体で、As-C含有量が多く、壁際からの自然埋没と見られる。**柱穴:** 床面の精査によって検出したP1(径0.28m、深さ0.38m、円形)、P2(径0.23m、深さ0.20m、円形)、P3(径0.22m、深さ0.20m、円形)、P4(径0.31m、深さ0.40m、円形)の4カ所を配置から柱穴と判断した。P1-P2間2.40m、P3-P4間2.40m、P4-P1間2.20m、P2-P3間2.05mであり、やや平行四辺形ぎみの配置である。**カマド:** 東壁ほぼ中央に設置されている。屋内側に軸が長く伸びており、左袖部に2カ所、右袖部に3カ所の礫が0.35mほどの間隔を置いて構築材として立てられており、この礫を芯としてⅧ層土でカマド本体を構築していたものと考えられる。煙道は燃焼部底面から0.40mほど上った位置から壁外に掘削されているが、検出された部分では0.37mほどしか残存していなかった。燃焼部底面には焼土が0.04mほどの厚さに形成されていた。構築材の中央と煙道部から計測したカマド主軸方位はE-6°-Nであり、住居北壁で計測した主軸方位とほぼ一致している。**遺物:** 北西、南西、南東の各コーナー部から住居中央に向かって傾斜した状況で多量の礫が出土しており、埋没過程の中で周辺から廃棄されたものと考えられる。特に南東コーナー部の礫に混じって馬歯が9点ほど出土しており、18号住居の出土として取り上げた1点についても17号住居に廃棄されたものの一部と見られる。出土遺物は破片が多いが種類は豊富で、土師器杯(1～18・20・21)・皿(22)・長胴甕(31～35)・球胴甕(27・28)・暗文土器杯(19)、須恵器高杯(24)・甕(36)などの他、紡錘車(37)がある。また、床面付近から棒状礫が比較的多量出土した。**重複:** 18号住居と重複し、検出状況及び残存状況から18号住居→17号住居である。**所見:** 17号住居の礫の出土量は、異常なほどに多量である。北西、南西、南東コーナー部の3方向から住居中央に向かって廃棄された状況を窺うことができる。対照的に北東コーナー部からはほとんど礫の廃棄が行われていない。南東コーナー部から廃棄された礫は列状を呈し、南西コーナー部から廃棄された礫は面的な広がりを見せている。これらの礫は、壁際から住居中央に

向かって一定の傾斜を有しており、中央部から出土した礫は床面に直接接していた。つまり、礫の廃棄は、壁寄りの部分に埋没土が形成され始めた比較的早い段階に行われたものと見られる。また、礫が折り重なるような出土状況を示していることから、時間をかけて徐々に廃棄されたものではなく一連の作業として廃棄された可能性が高い。南東コーナー部付近に集中した馬歯についても礫の廃棄と一連のものと考えられる。壁の残存は比較的良好で、カマド設置部分を除いて幅0.15m、深さ0.08mほどの壁溝が廻っている。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出された1.08×0.85m、深さ0.13mの長方形を呈する掘り込みが該当するものと考えられる。また、この対角となる北西コーナー部にも径0.50m、深さ0.08mの円形を呈する土坑1が検出された他、P3の南側近至の位置に土坑2(径0.53m、深さ0.07m、不整形円形)、カマド北側に土坑3(径0.51m、深さ0.18m、不整形円形)をそれぞれ検出した。17号住居で特筆されるのは南壁のやや東寄りの1.20mほどの範囲が0.30mほど南に張り出しており、この部分に径0.42m、深さ0.22mの円形を呈するP5が検出されている点である。また、床面中央やや南寄りの位置に、径0.34m、深さ0.08mの円形を呈するP6があり、底面付近から焼土が検出されている。**時期:** 7世紀後半

18号住居(第522～525・529図 P.L.122・267)

位置: Bq・Br-1グリッド **形状:** 隅丸長方形 **規模:** 3.70m×3.15m **残存深度:** 0.39m **主軸方位:** E-5°-N **埋没土:** 色調の暗いⅧ層土主体で、As-C含有量が非常に多い。**柱穴:** ビット状の掘り込みは4カ所ほど検出されているが、配置が規則的でなく、柱穴とは考えられないため、未検出である。**カマド:** 東壁の南寄りに偏った位置に設置されている。屋内に軸を延ばし、先端には底部の欠損した土師器の長胴甕を逆さに設置して構築材としており、Ⅷ層土相当の土でカマド本体を構築していた。燃焼部は屋内側にあり、燃焼部底面から0.10mほど上った位置から煙道を壁外に1.15mほど掘削していた。燃焼部底面には焼土が形成されており、黒色灰層もわずかに検出された。燃焼部中心と煙道から計測したカマド主軸方位は、E-0°-Nである。**遺物:** 床面からの遺物出土は極めて少なく、17号住居に見られたような礫の集中も皆無である。住居の時期を示す



第522図 17・18号住居

遺物は、袖構築材として据えられていた土師器甕の2点(77・78)であり、他に暗文土器環(76)の小片が出土している。重複：17号住居と重複し、検出状況などから18号住居→17号住居である。所見：掘り込みは17号住居と比較して深くはなかったが、ⅩⅩ層土中にまで達していたことから、平面形を明確に捉えることができた。検出された壁はいずれも直線的に崩落による変形は認められなかった。南壁では一部途切れていたが、幅0.12m、深さ0.14mほどの壁溝が廻っていたものと思われる。床面

はⅩⅩ層土中に平坦に構築されており、掘り方は行われていない。南東コーナー部には、0.63×0.38m、深さ0.21mの楕円形を呈する掘り込みが検出されたが、位置から貯蔵穴と見て良いであろう。ピットは、カマド北側にP1(径0.31m、深さ0.10m、不整形円形、南西コーナー部に重複するようにP2(0.46×0.31m、深さ0.20m、楕円形)、P3(径0.42m、深さ0.22m、円形)、P4(径不明、深さ0.17m、形状不明)を検出したが、前述のように柱穴とは考えられない。時期：7世紀後半

17号住居



S-S'

- 1 暗褐色土 ⅦⅦ層土とⅩⅩ層土の混土。
- 2 黄褐色土 ⅩⅩ層土主体で、暗褐色土を少量含む。
- 3 黄褐色土 ⅩⅩ層土主体で、暗褐色土粒をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 ⅦⅦ層土主体で、ⅩⅩ層土粒を多く含む。



T-T'

- 1 暗褐色土 ⅦⅦ層土主体で、ⅩⅩ層土粒を少量含む。
- 2 黄褐色土 ⅩⅩ層土主体で、ⅦⅦ層土を少量含む。

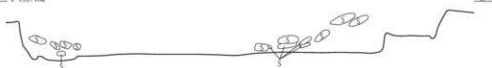
18号住居



R-R'

- 1 暗褐色土 ⅩⅩ層土とⅩⅩ層土の混土。

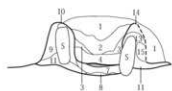
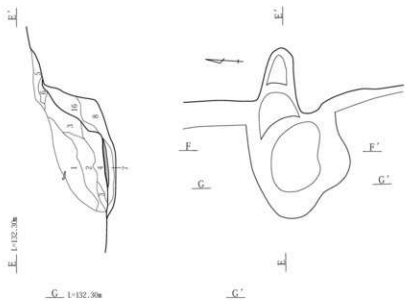
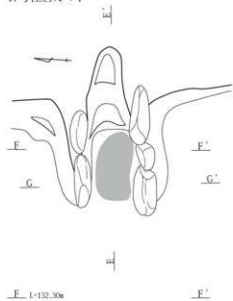
D-D'



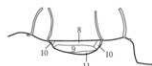
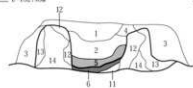
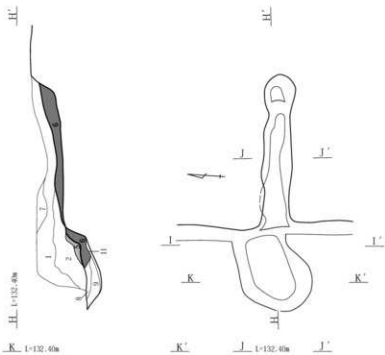
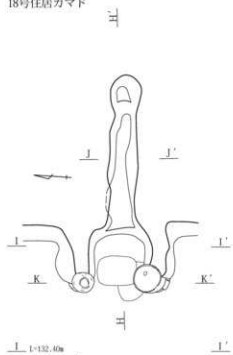
0 1:60 2m

第523図 17号住居遺物出土状況・17・18号住居ピット土層断面図

17号住居カマド



18号住居カマド



第524図 17・18号住居カマド

第5章 2面の調査(中世~古墳時代後期)

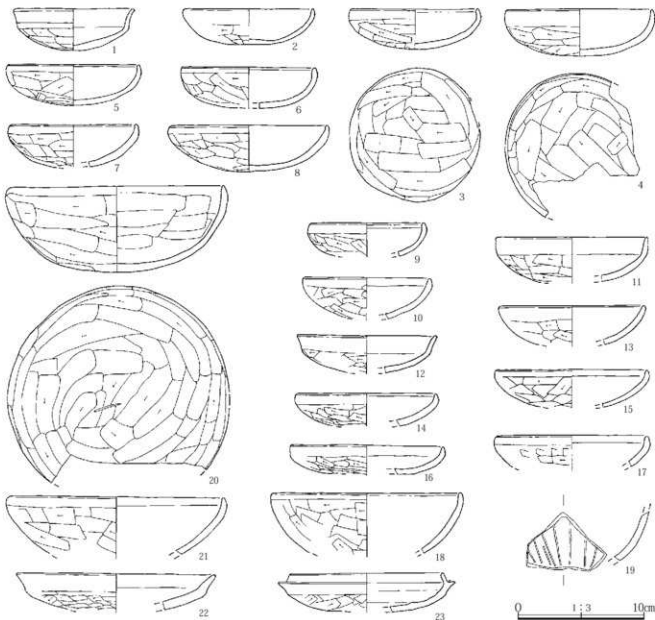
E-E'~G-G'

- 1 暗褐色土 XI層上主体で、As-C・ニッ岳系軽石・焼土ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 XI層上主体で、燻層上ブロック・焼土ブロックを少量、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 XI層上主体で、燻層上ブロックを多く、炭化物・焼土ブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 XI層上主体で、焼土ブロックを多く、燻層上ブロックをやや多く含む、柔らかい。
- 5 暗褐色土 XI層上主体で、As-C・燻層上小ブロック・炭化物・焼土ブロックを少量含む、柔らかい。
- 6 褐色土 XII層上主体で、XI層上小ブロック・焼土ブロックをわずかに含む、柔らかい。
- 7 赤褐色焼土 XII層上が焼土化で、暗褐色土粒をわずかに含む。
- 8 黄褐色土 XII層上主体。
- 9 黄褐色土 XII層上主体。
- 10 黄褐色土 XII層上主体で、焼土粒を多く含む。
- 11 黄褐色土 XII層上主体で、XI層上小ブロックを含む。
- 12 暗褐色土 XII層上主体で、As-Cをわずかに含む。
- 13 黄褐色土 XII層上主体。

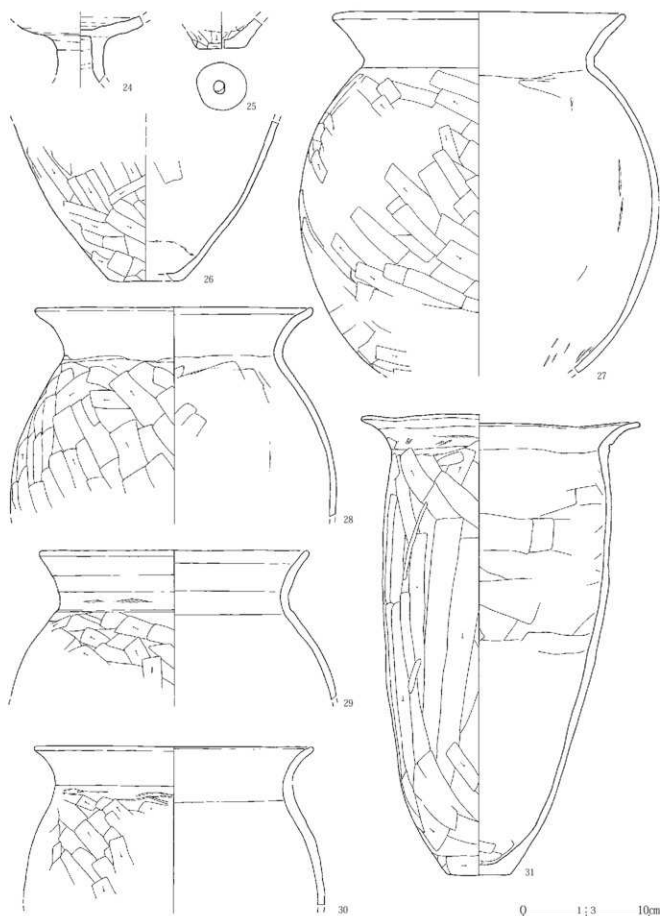
- 14 暗褐色土 暗色の燻層上主体で、As-Cをわずかに含む。
- 15 暗褐色土 XII層上主体で、暗褐色土・As-Cをわずかに含む。
- 16 暗褐色土 XII層上主体で、炭化物・焼土粒を少量含む。

H-H'・I-I'・K-K'

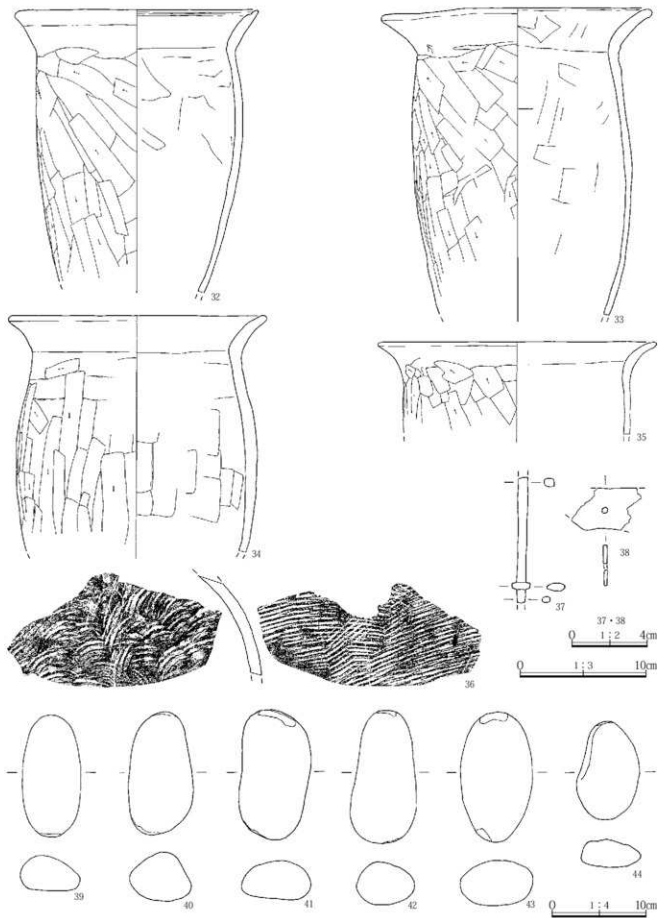
- 1 暗褐色土 VII層上主体で、燻層上小ブロックをわずかに含む。
- 2 暗褐色土 VII層上主体で、焼土粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 I層に類似。
- 4 黄褐色土 XII層上ブロック。
- 5 赤褐色焼土 XII層上が被熱で焼土化。
- 6 黒色灰層
- 7 暗褐色土 I層に類似するが、焼土ブロックを多く含む。
- 8 黄褐色土 XII層上と暗褐色土・黒色灰・焼土粒の混上。
- 9 黄褐色土 XII層上主体で、暗褐色土粒をわずかに含む。
- 10 暗褐色土 XII層上主体で、黒色灰小ブロックを少量含む。
- 11 黄褐色土 XII層上主体。
- 12 黄褐色土 XII層上主体で、As-C・暗褐色土粒を均一に含む。
- 13 暗褐色土 VII層上主体で、燻層上粒を少量含む。
- 14 暗褐色土 I2層に類似するが、全体に暗色を呈する。



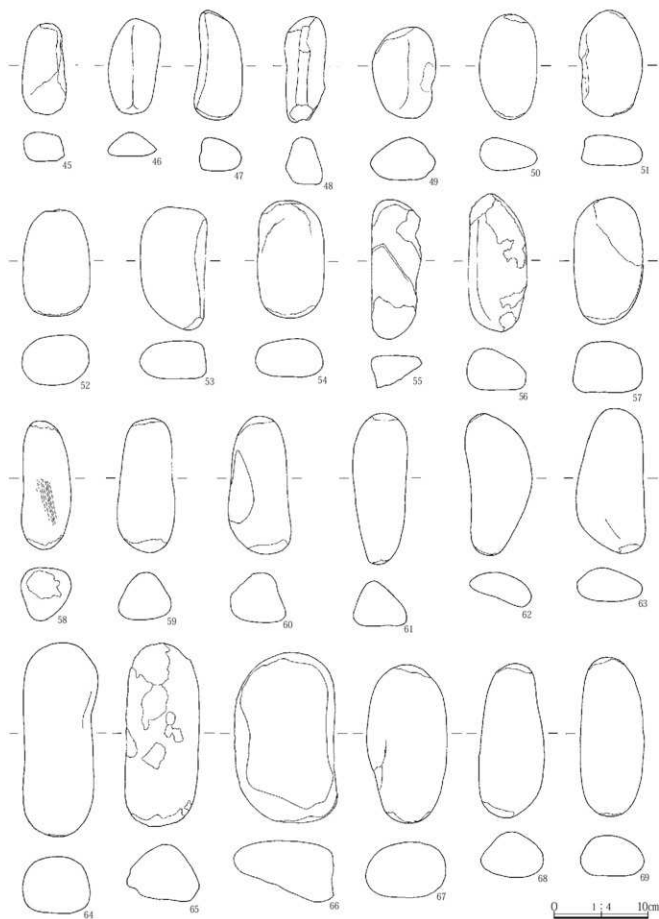
第525図 17・18号住居カマド土層注記・17号住居出土遺物(1)



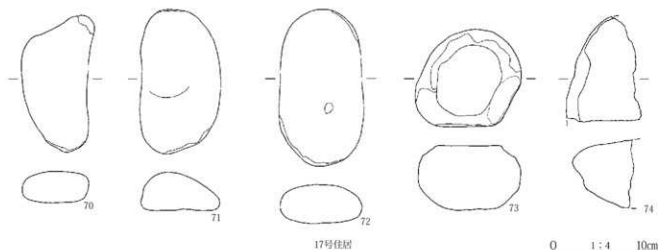
第526図 17号住居出土遺物(2)



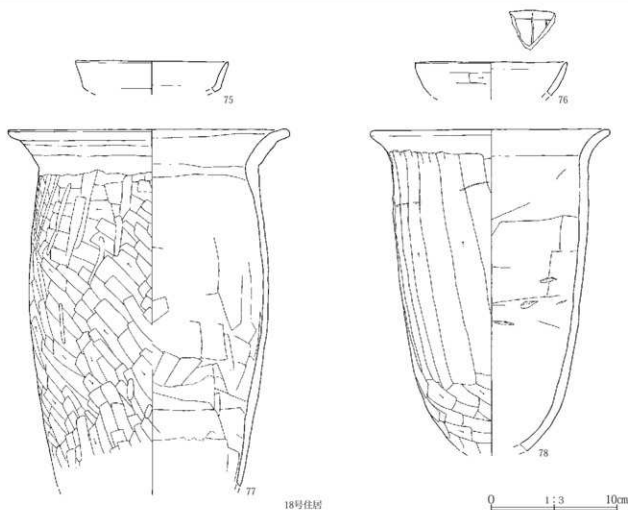
第527図 17号住居出土遺物(3)



第528図 17号住居出土遺物(4)



17号住居



18号住居

第529図 17・18号住居出土遺物

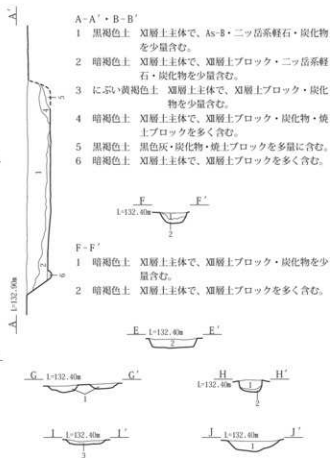
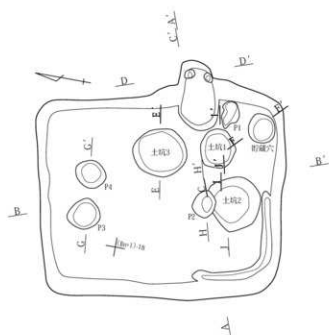
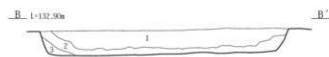
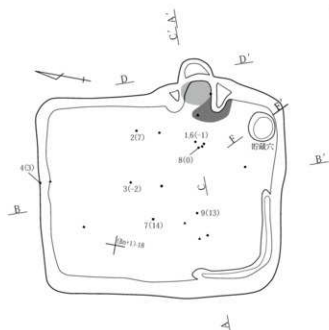
19号住居(第530～532図 P.L.122・123・267)

位置：Bn-17・18グリッド 形状：隅丸長方形 規模：
3.42m×3.91m 残存深度：0.33m 主軸方位：E-
14°-N 埋没土：Ⅶ層土主体でわずかに炭化物粒を含
む。柱穴：未検出 カマド：東壁南寄りに設置されて

いた。わずかに袖らしい張り出しが認められたが、カマ
ド部分の東壁が東側に張り出したように変形しているた
め、燃焼部は壁外に当たる部分に設けられている。燃焼
部底面には焼土が形成され、右袖部を巻くように黒色灰
が広がっていた。竈などのカマド構築材は検出されてい

ないが、掘り方の調査で、奥壁に1対のピット状の掘り込みが検出されていることから、礎の設置があった可能性がある。想定されるカマド主軸方位はE-13°-Nであり、北壁を基準に計測した住居主軸方位とほぼ一致している。遺物：床面付近から出土した遺物はわずかで、種類は須恵器環(2)・埴(3・5)、土師器環(1)、灰釉陶器埴、羽釜(8・9)、釘(7)などである。特筆される

のは、酸化焙焼成された須恵器環(4)の体部外面に「王」の墨書がされていたこと、及び埋没土中から出土した緑釉陶器埴の小片が、南西に10mほど離れた25号住居出土の緑釉陶器(第547図-9)と接合したことである。重複：近い時期の遺構との重複は見られない。所見：調査区北端で検出された住居で、重複もなかったことから壁は全周比較的良好な状態で検出できた。壁は緩い傾斜



- A-A'・B-B'
- 1 黒褐色土 XⅡ層土主体で、As-B・ニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。
 - 2 暗褐色土 XⅡ層土主体で、XⅡ層土ブロック・ニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。
 - 3 にぶい黄褐色土 XⅡ層土主体で、XⅡ層土ブロック・炭化物を少量含む。
 - 4 暗褐色土 XⅡ層土主体で、XⅡ層土ブロック・炭化物・焼土ブロックを多く含む。
 - 5 黒褐色土 黒色灰・炭化物・焼土ブロックを多量を含む。
 - 6 暗褐色土 XⅡ層土主体で、XⅡ層土ブロックを多く含む。
- F-F'
- 1 暗褐色土 XⅡ層土主体で、XⅡ層土ブロック・炭化物を少量含む。
 - 2 暗褐色土 XⅡ層土主体で、XⅡ層土ブロックを多く含む。
- E-E'・C-C'・G-G'・I-I'・J-J'
- 1 暗褐色土 XⅡ層土主体で、暗褐色土ブロックを少量含む。
 - 2 暗褐色土 XⅡ層土主体で、暗褐色土ブロックを多く含む、炭化物を少量含む。
 - 3 暗褐色土 XⅡ層土主体で、暗褐色土ブロック・炭化物・焼土ブロックを少量含む。

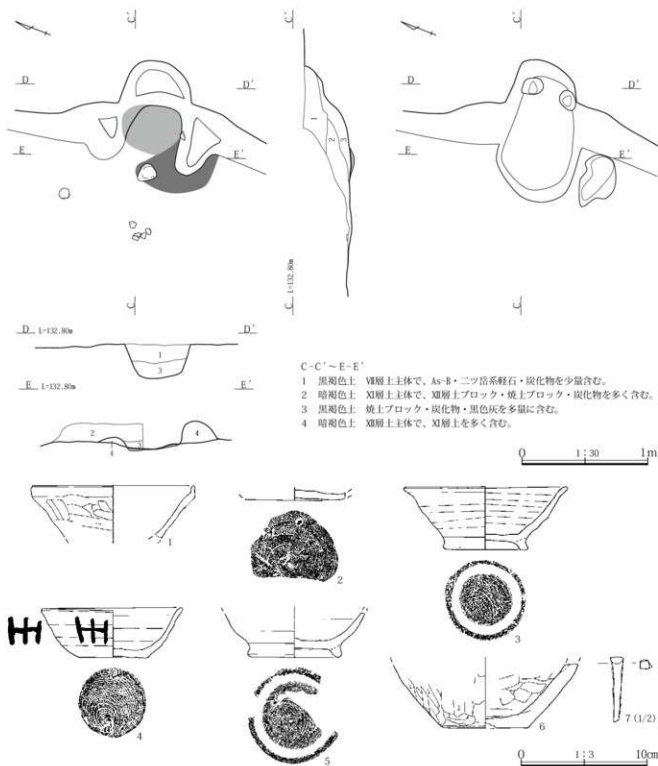
第10表 19号住居 土坑・ピット計測表

番号	規模	深さ	形状
土坑1	0.55	0.07	円形
土坑2	0.87	0.18	円形
土坑3	0.74	0.16	円形
P1	0.46×0.26	0.07	不整楕円形
P2	0.41×0.35	0.11	不整楕円形
P3	0.50	0.09	不整円形
P4	0.44	0.15	不整円形

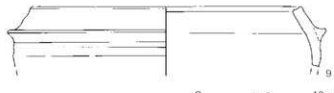
0 1:60 2m

をしていたが、埋没土の状況から崩落によって傾斜したものは考えられず、当初から検出状態のような傾斜で構築されたものと考えられる。床面は、XI層土中に構築され、平坦であるが硬化した面は観察されなかった。南西コーナー付近に幅0.15m、深さ0.07mほどの壁溝が検出されたが、他の部分には痕跡も検出されておらず、

全周することはないものと思われる。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出した径0.43m、深さ0.17mの円形の掘り込みが該当すると考えられる。掘り方は、全体に及ぶものではなく、カマド側に偏った位置に土坑3カ所とピットが2カ所、北寄りにピット2カ所が検出された。 **時期:** 10世紀前半



第531図 19号住居カマド・出土遺物(1)



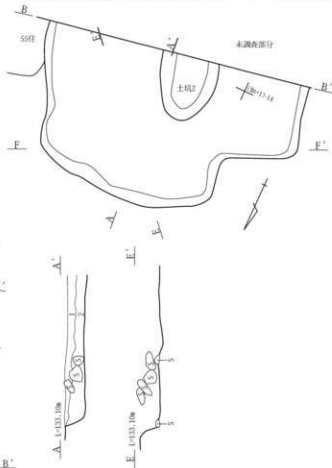
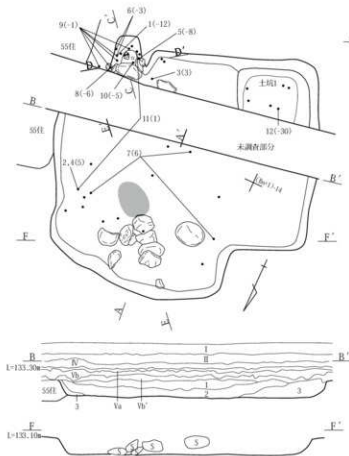
0 1:3 10cm

第532図 19号住居出土遺物(2)

20号住居(第533～535図 P.L.123・267)

位置: Bm・Bn-13・14グリッド 形状: 張り出しを有する隅丸長方形 規模: 3.02～3.94m×4.02m 残存深度: 0.32m 主軸方位: S-24°-E 埋没土: 明るい色調のⅦ層土主体であり、埋没土上面はⅤ層土によって覆われていた。柱穴: 未検出 カマド: カマドはⅢ区とした調査区側で検出された。住居平面形が特異であるため、南壁に設置された南向きカマドと見ることも可能であるが、時期から判断して南東コーナー部に設置されたコーナーカマドと見てよいであろう。左右袖部には礫が2点立てられており、間の焚口部から天井石と見られる大形礫が出土した。燃焼部奥の左に偏った位置から出土した礫は支脚と考えられる。想定されるカマド主軸方

位は S-20°-E である。遺物: 遺物の種類は、須恵器塊(1～4)・羽釜(7～12)、土師器甕(5・6)であり、その中で3はカマド付近から出土した。他に住居北側の張り出しとした部分に礫が集中していた。重複: 55号住居と重複し、検出状況から55号住居→20号住居と考えられる。所見: 調査区域に位置しているため、2次の調査で全体を明らかにしたが、工事との関連で間に未調査部分を残す結果となった。北側の先行調査部分で、張り出し状の施設を検出したが、北西コーナー部付近の直



A-A'・B-B'

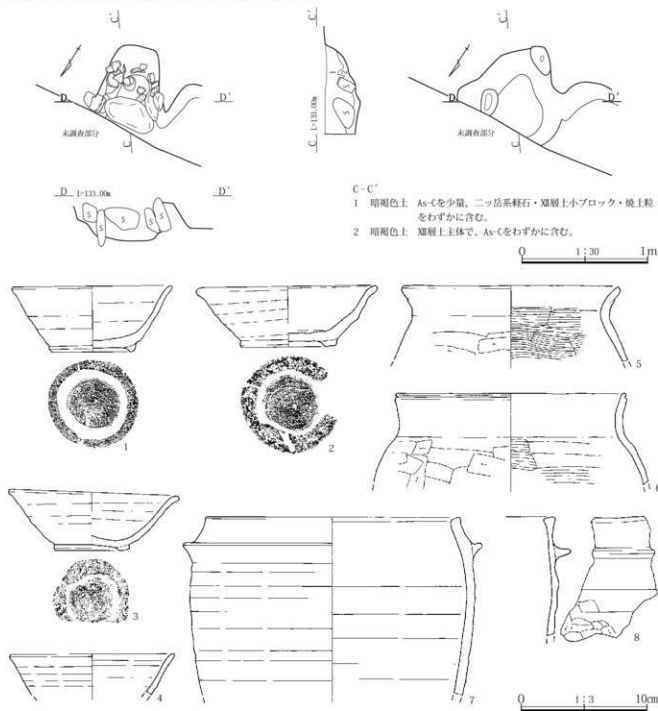
- 1 暗褐色土 XII層土主体で、As-Cを均一に含み、全体にしまりが強い。
- 2 暗褐色土 XII層土とXIII層土の混成土で、As-Cを均一に含み、1層より明るい色調を呈する。
- 3 黄褐色土 XIII層土主体で、As-Cを少量含む。

0 1:60 2m

第533図 20号住居

線的な平面形との違和感があり、またこの部分に礫の集中があったことから、当初は他遺構との重複も考えた。しかし、土層断面の観察を通して重複の確証が得られなかったために、北側に張り出しを持つ1棟の住居と判断した。張り出し部の礫出土状況は、17号住居に見られたごとく壁寄りから屋内に向かって傾斜した出土状況が見られることから、住居埋没過程の中で外部から廃棄されたものであろう。北側の床面に0.60×0.45mの楕円形の焼土が検出されたが、3面の住居との重複は考えにくい

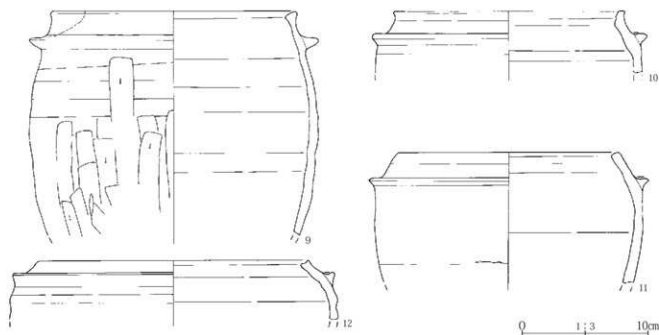
ことから炉とは考えなかった。南側の調査で南西コーナー部に(0.82)×1.16m、深さ0.57mの隅丸長方形を呈すると思われる土坑1が検出された。住居埋没土よりさらに明るい色調のⅧ層土で埋没しており、当該期の住居としては他に例がない規模であることから、貯蔵穴ではなく掘り方の一部と判断した。また、中央部に(1.02)×0.91m、深さ0.09mの楕円形を呈すると思われる土坑2も掘り方の一部であろう。 時期：10世紀前半



C-C'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量、ニッ岳系軽石・Ⅷ層土小ブロック・焼土粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、As-Cをわずかに含む。

第534図 20号住居カマド・出土遺物(1)

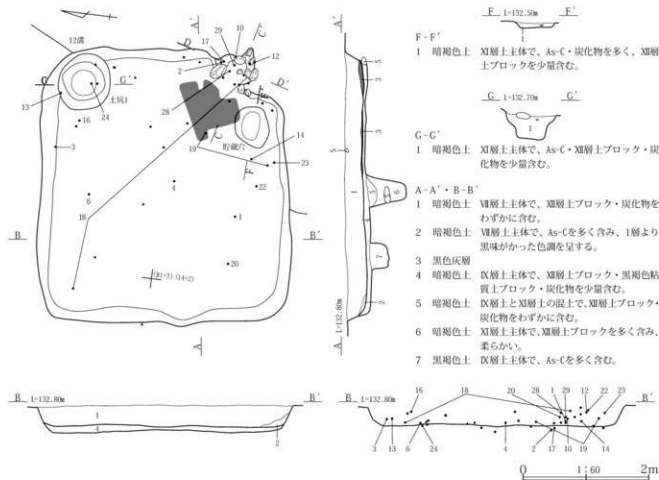


第535図 20号住居出土遺物(2)

22号住居(第536～539図 P.L.124・125・267)

位置: B1・Bm-14グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 4.30
m×4.07m 残存深度: 0.37m 主軸方位: E-7°-S

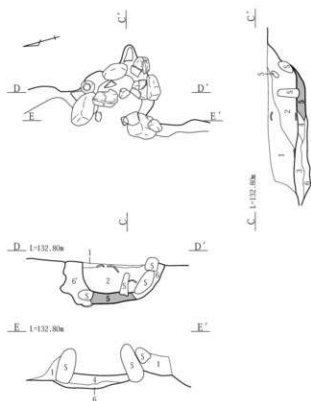
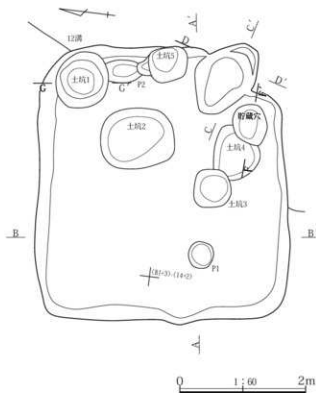
N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 南東
コーナー部に設置されたコーナーカマドであり、両袖間
と煙道部の位置から計測した主軸方位は E-24°-S である



第536図 22号住居

ある。両袖ともにやや屋内に張り出しており、先端部に礫を構築材として据えている。燃焼部奥の側壁にも礫が1カ所ずつ据えられており、燃焼部中央やや右寄りの位置に、棒状礫を1カ所立てて支脚としていた。燃焼部の埋没土中には焼土ブロックと黒色灰がわずかに含まれていただけで、底面に焼土及び灰層の形成はなく、黒色灰の広がりかマカド前面の床面に顕著であった。 **遺物**：マカド燃焼部から須恵器環(2)と羽釜(28・29)の破片が出土し、中央から南壁との間に灰軸陶器壺(19・20)・皿(22・23)、須恵器環(1)・黒色土器壺(14)などが、床面及びやや浮いた位置から出土した他、北西コーナー部からも灰軸陶器壺(18)が出土した。須恵器環としたものは、いずれも酸化焙焼成された「土師質土器」と呼ばれる一群である。 **重複**：近い時期の遺構との重複はなく、中世

以降と考えられる12号溝と東側で重複している。 **所見**：浅い位置で後世の遺構との重複はあるものの、深くまで及んでいないため壁は全周良好に検出された。貯蔵穴は、検出位置から南東コーナー部の0.64×0.55m、深さ0.08mの楕円形を呈する掘り込みと判断したが、北東コーナー部に検出された土坑1(径0.85m、深さ0.37mの円形)の可能性もある。土坑1の上面には床面とほぼ同様の位置から扁平な礫が1点出土している。床面は、平坦に構築されており、全体に及ぶような掘り方はされず、東半に土坑状の掘り込みが比較的顕著に見られた。中でも中央やや南寄りて検出した土坑3(0.59×0.60m、深さ0.62m、隅丸方形)は、底面から0.25mほどの位置に扁平な礫が水平の状態て出土しており、柱穴のような住居構造の一部である可能性がある。 **時期**：10世紀後半



第11表 22号住居 土坑・ピット計測表

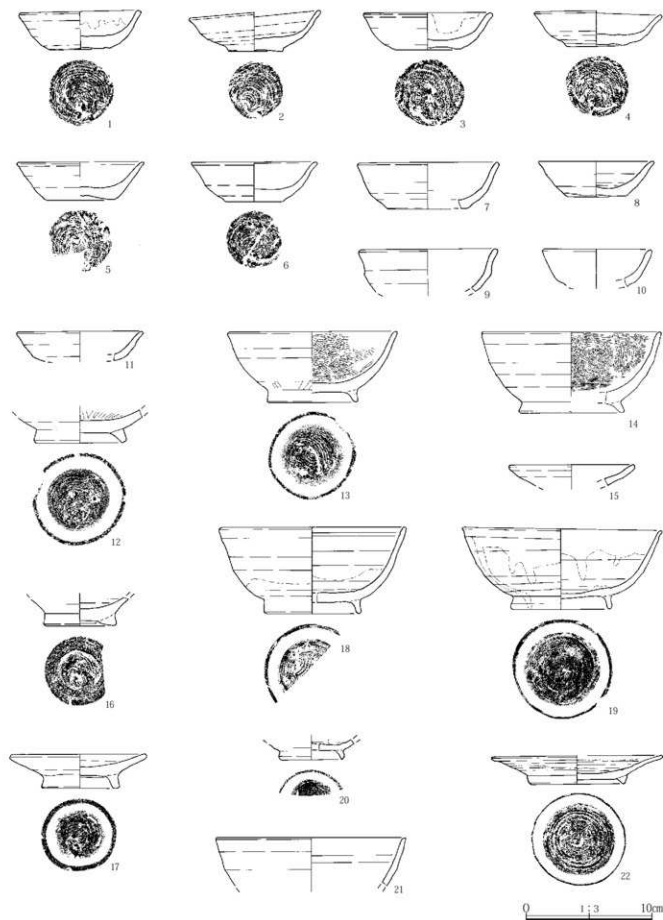
番号	規模	深さ	形状
土坑1	0.85	0.37	円形
土坑2	1.17×0.97	0.21	楕円形
土坑3	0.59	0.60	隅丸方形
土坑4	0.86×0.73	0.14	不整楕円形
土坑5	0.60×0.53	0.64	隅丸方形
P1	0.42	0.42	円形
P2	(0.47)×0.36	0.12	楕円形

C-C'~E-E'

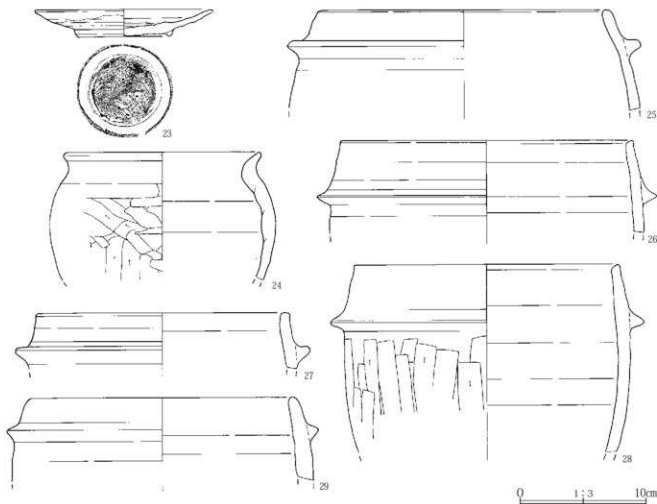
- 1 暗褐色土 V層上主体で、砂質。
- 2 暗褐色土 V層上主体で、黒色灰・焼土粒をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 V層上主体で、炭化物を多く含む。
- 4 暗褐色土 V層上とⅩ層上の混上で、炭化物・焼土ブロックを少量含む。
- 5 赤褐色焼土 Ⅹ層上が焼土化。
- 6 褐色土 Ⅹ層上主体で、V層上ブロックをわずかに含む。
- 6' 褐色土 6層に類似するが、焼土ブロックをわずかに含む。



第537図 22号住居掘り方・マカド



第538図 22号住居出土遺物(1)

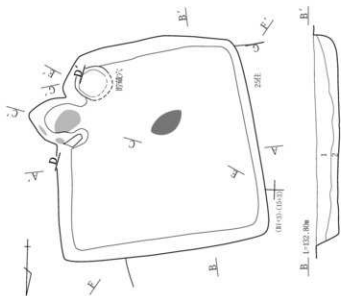


第539図 22号住居出土遺物(2)

23号住居(第540～542図 P.L.125・268)

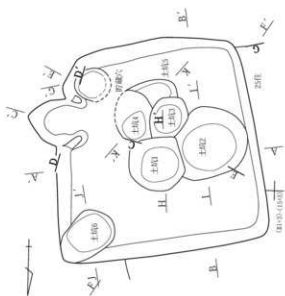
位置: B1・Bm-15グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.84 m×3.43 m 残存深度: 0.36 m 主軸方位: E-11°-N 埋没土: As-C含有の多いⅧ層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りの偏った位置に検出した。Ⅷ層土を主体とする袖がわずかに屋内に張り出して検出されており、燃焼部が屋内と壁外の中間的な位置に設けられたカマドである。想定される主軸方位はE-7°-Sであり、南壁で計測した住居主軸方位より南に振れている。燃焼部底面及び左側壁の一部に焼土が形成されていた。右袖部から出土した礫は、据えられた痕跡がなく構築材とは考えられない。また、燃焼部の掘り方調査においても支脚を据えた痕跡は検出されなかった。遺物: 遺物の多くはカマド周辺から出土した。種類は、須恵器埴(2・3)・羽釜(6～10)、灰釉陶器皿(4)であり、埋没土中から緑釉陶器の高台部(5)の破片が1点出土した。また、住居中央南寄りの床面付近に礫の集中が見ら

れ、埋没土中から馬歯と見られる細片が1点出土した。重複: 西側で25号住居と重複し、検出状況から25号住居→23号住居と考えられる。所見: 新田2時期のカマドがあるものとして調査を進めたが、最終的には重複する25号住居のカマド奥側が残存したものと判断した。23号住居の東壁の検出時点で25号住居のカマド構築材が露出してしまったことから、本来の東壁はもう少し西側であったものと考えられる。礫の集中については、20号住居などでは壁際から住居中央に向かって傾斜した出土状況であったが、23号住居では床面にほぼ接するような位置で出土しており、他の出土例と比較して礫廃棄が住居廃棄直後に行われた可能性が高い。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出した径0.54m、深さ0.05mの円形を呈する浅い掘り込みが該当するものと思われる。掘り方は、床面全体に行われたものではなく、中央付近に5カ所、北東コーナー部に1カ所の土坑状の掘り込みが検出された。時期: 10世紀後半



A-A'・B-B'

- 1 黒褐色土 Ⅷ層土主体で、As-Cを多く、ニッ岳系輝石・明褐色土ブロック・炭化物を少量含む。
- 2 黒褐色土 Ⅷ層土主体で、As-Cを多く、ニッ岳系輝石・Ⅹ層土ブロック・炭化物をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、Ⅹ層土ブロックを多く、As-C・ニッ岳系輝石・炭化物をわずかに含む。



K-K'

- 1 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、Ⅹ層土ブロック・炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 Ⅷ層土ブロック・炭化物をやや多く含む、粘性が強い、硬くしまりが強い。

第12表 23号住居 土坑計測表

番号	組楕	深さ	形状
土坑1	0.86	0.31	円形
土坑2	1.13	0.26	円形
土坑3	0.73×0.55	0.30	楕円形
土坑4	(0.81)×0.64	0.30	楕円形
土坑5	—	0.19	不明
土坑6	1.00×0.67	0.09	不明楕円形

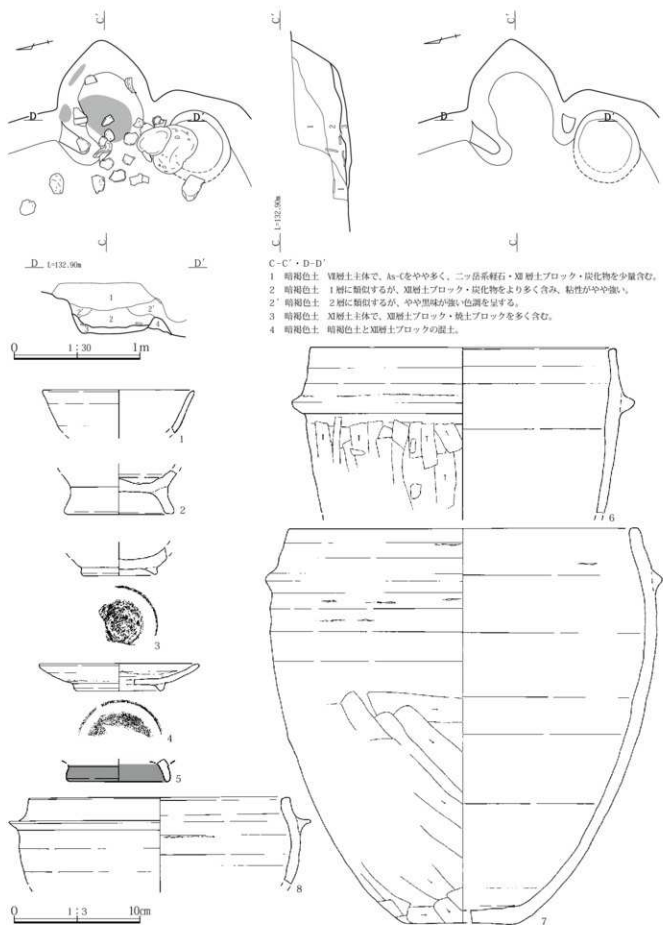


H-H' 1 暗褐色土 Ⅷ層土とⅩ層土の混土で、柔らかい。
2 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、粘性がやや強い。

I-I' 1 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、Ⅹ層土ブロック・炭化物を少量含む。
2 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、Ⅹ層土ブロックを多く含む。
3 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、粘性がやや強い。

J-J' 1 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、Ⅹ層土ブロック・炭化物を少量含む。

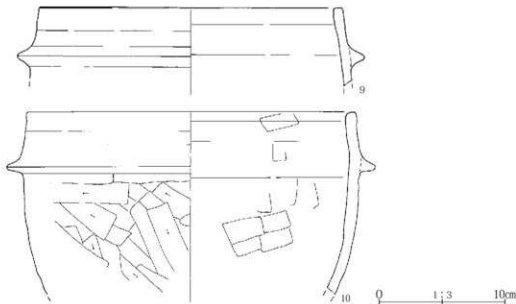
第540図 23号住居



C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 埴土主体で、As-Cをやや多く、二ッ岳系軽石・埴土ブロック・炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、埴土ブロック・炭化物をより多く含む、粘性がやや強い。
- 2' 暗褐色土 2層に類似するが、やや黒味が強い色調を呈する。
- 3 暗褐色土 埴土主体で、埴土ブロック・焼土ブロックを多く含む。
- 4 暗褐色土 暗褐色土と埴土ブロックの混土。

第541図 23号住居カマド・出土遺物(1)

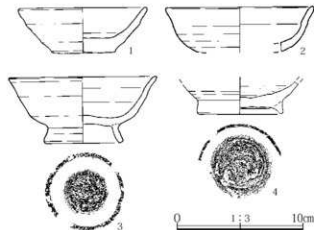


第542図 23号住居出土遺物(2)

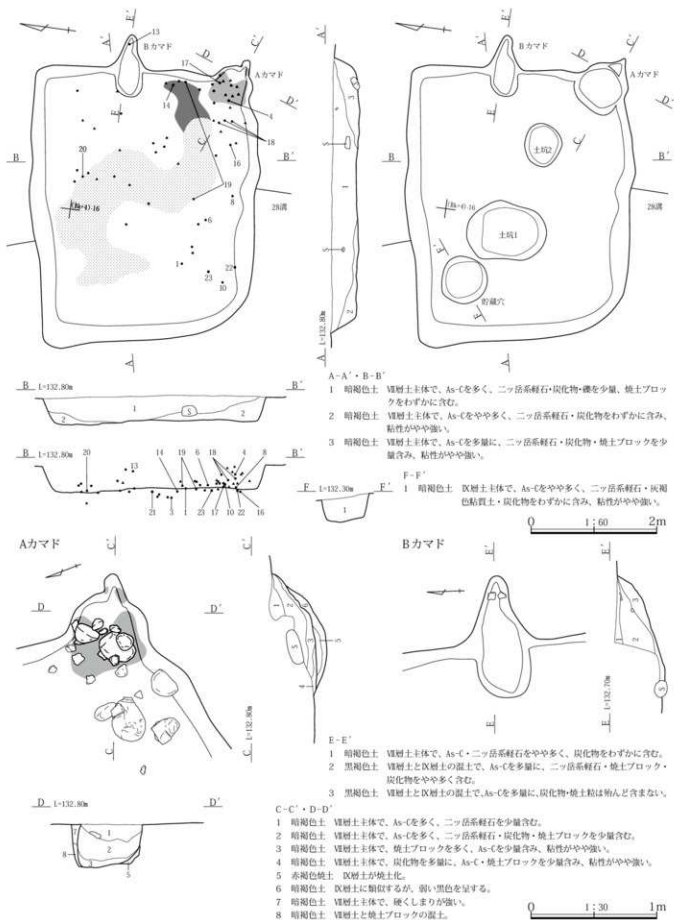
24号住居(第543～545図 P.L.125・126・268)

位置: Bk・B1-15・16グリッド **形状:** 隅丸長方形 **規模:** 4.36m×3.59m **残存深度:** 0.43m **主軸方位:** E-11°-N **埋没土:** As-C含有の多いⅦ層土主体。 **柱穴:** 未検出 **カマド:** 造り替えと見られる新旧2時期のカマドが検出され、新しい段階のものをAカマド、古い段階のものをBカマドとした。Aカマドは、南東コーナー部に設置された凸字状の平面形を呈するコーナーカマドで、主軸方位はE-28°-Sである。焼焼部底面には焼土が形成されていたが顕著な灰層の形成はなく、薄いものではあったが灰面の広がりカマド北側に検出された。焼焼部焼土層の上面から礫がいくつか出土したが、据えられていたような痕跡はなく、構築材として使用されたものとは考えられない。Bカマドは、東壁中央やや北寄りに位置しており、焼焼部の掘り方と壁に掘り込まれた煙道が残存していただけで、焼焼部等に焼土や灰層は残存せず、構築材の痕跡などもまったく認められない。想定される主軸方位はE-4°-Nであり、東壁に対してほぼ直行している。 **遺物:** 出土遺物は破片が多く、Aカマド付近から住居中央部にかけて散在して出土した。種類は、須恵器環(1)・埴(3～7)、灰釉陶器皿(9～11)、羽釜(13～20)の他、棒状の鉄製品(21～23)が出土した。 **重複:** 25号住居及び3号道と重複し、残存状況から25号住居・3号道→24号住居と考えられる。 **所見:** 当初は東壁中央のBカマドについては他の住居との重複と考え、27号住居としていたが、残存状況からカ

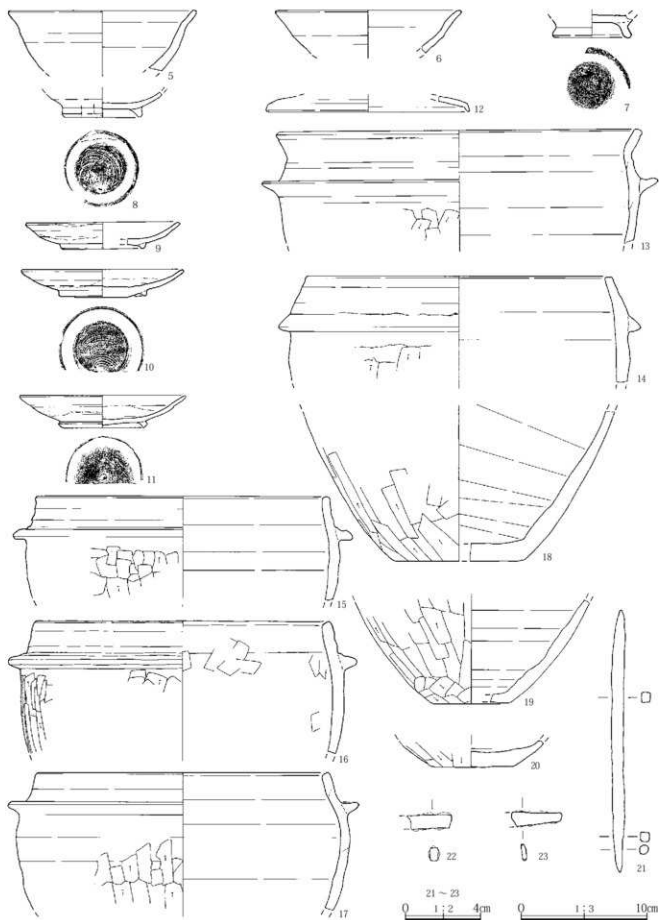
マドの造り替えと判断し、27号住居を欠番とした。壁は東壁及び北壁は直線的であるが、3号道との重複のためか南西コーナー部付近が判然としない。住居埋没土と3号道の埋没土は共に暗褐色を呈するⅦ層土主体であり、新旧関係が平面確認の段階で峻別できただけではなかった。住居が新しい段階との判断のもとに調査を進め、床面が検出された時点でAカマド前面から続く硬化面が3号道と重複している部分にも及んでいることが確認され、住居が新しいことの確証が得られた。掘り方は、全体に行われていたのではなく、住居中央部に土坑1(1.27×0.92m、深さ0.20m、楕円形)と土坑2(0.68×0.59m、深さ0.08m、楕円形)が検出された。北西コーナー部には径0.75m、深さ0.39mの円形を呈する掘り込みが行われていたが、検出位置から貯蔵穴の可能性が高い。 **時期:** 10世紀後半



第543図 24号住居出土遺物(1)



第544図 24号住居

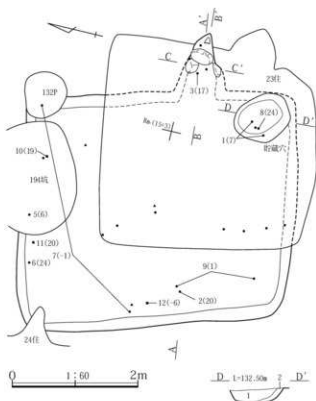


第545図 24号住居出土遺物(2)

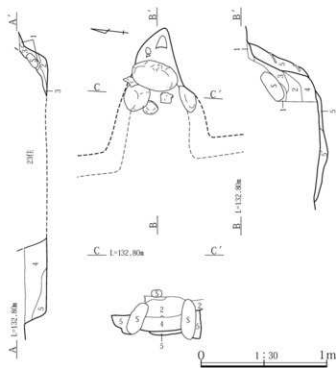
25号住居(第546・547図 P.L.126・268)

位置: B1・Bm-15・16グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 3.73m×4.37m 残存深度: 0.35m 主軸方位: E-18°-N 埋没土: VII層土主体で、23号住居の埋没土よりもAs-C含有が少ない。柱穴: 未検出 カマド: 23号住居との重複で失われたと考えていたが、23号住居の調査時に東壁際に残存することが判明した。東壁の中央やや南寄りに位置しており、燃焼部から煙道部へと続く部分だけが残存した。煙道部との境に2点の礫を0.27mほどの間隔で立て、上に礫を渡して天井としていた。奥の煙道は、23号住居の壁と同等の角度で立てあがっていた。燃焼部はやや深くまで掘り込まれていたために、23号住居との重複によっても削平されず、底面の焼土面が残存していた。残存部分から想定される主軸方位は、E-5°-Nであり、西壁を基準として計測した住居主軸方位よりやや南に振れている。遺物: 23号住居と重複

していない部分からの遺物出土はごく少なく、4の黒色土器境の破片は埋没土中、5と6の灰釉陶器境は北壁際から、2の須恵器境の底部は西壁際からの出土である。また、西壁際から出土した7の灰釉陶器境は、北東コーナー部で重複していた132号ピット出土の破片と接合した。他に、西壁際から12の湾曲した棒状の鉄製品が出土している。重複: 東側で23号住居、北西コーナー部で24号住居と重複し、検出状況から25号住居→23・24号住居と考えられる。所見: 23号住居と同時に調査を進めたが、床面は同一面に構築されていたものと思われ、明確な境は検出されなかった。23号住居には土坑状の掘り方が行われていたが、25号住居には掘り方が行われていない。南東コーナー部に当たる位置に、0.92×0.71m、深さ0.21mの楕円形を呈する貯蔵穴が検出され、遺物がわずかに出土したが、掲載できるほどの残存状況ではなかった。時期: 10世紀前半

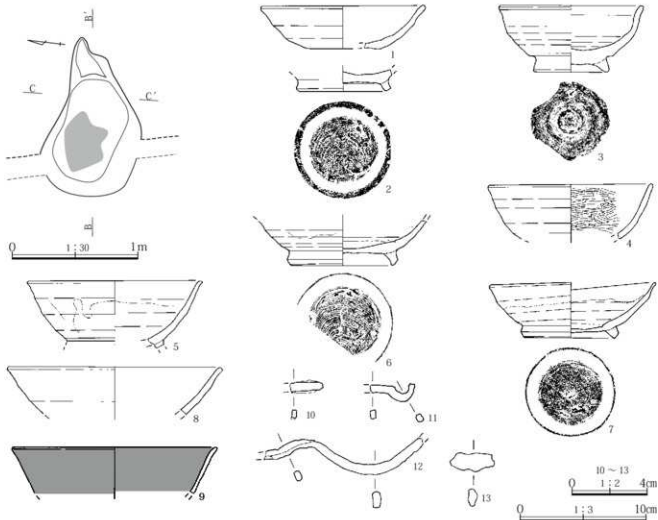


- A-A'
- 1 黒褐色土 VII層土主体で、As-Cを多く、ニッ岳系軽石・炭化物・明褐色土ブロックを少量含む。
 - 2 黒褐色土 VII層土主体で、As-Cを多く、ニッ岳系軽石・炭化物・畑土ブロックをわずかに含む。
 - 3 暗褐色土 VII層土主体で、畑土ブロックを多く、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物をわずかに含む。
 - 4 暗褐色土 VII層土主体で、畑土ブロックを多く、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。
 - 5 暗褐色土 IX層土主体で、As-C・畑土ブロックを少量含む。



- B-B'・C-C'
- 1 暗褐色土 VII層土主体で、ニッ岳系軽石・炭化物を少量、As-Cをわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 VII層土主体で、炭化物・畑土ブロックをやや多く、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含む、柔らかい。
 - 3 暗褐色土 VII層土主体で、畑土ブロック・畑土ブロックをやや多く、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含む、柔らかい。
 - 4 暗褐色土 VII層土主体で、黒色灰・炭化物・畑土ブロックを少量含む。
 - 5 暗褐色土 IX層土主体で、畑土ブロックを多く含む。
 - 5' 赤褐色焼土 3層が焼土化。
- D-D'
- 1 暗褐色土 VII層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。
 - 2 暗褐色土 I層に類似するが、畑土ブロックを多く含む。

第546図 25号住居



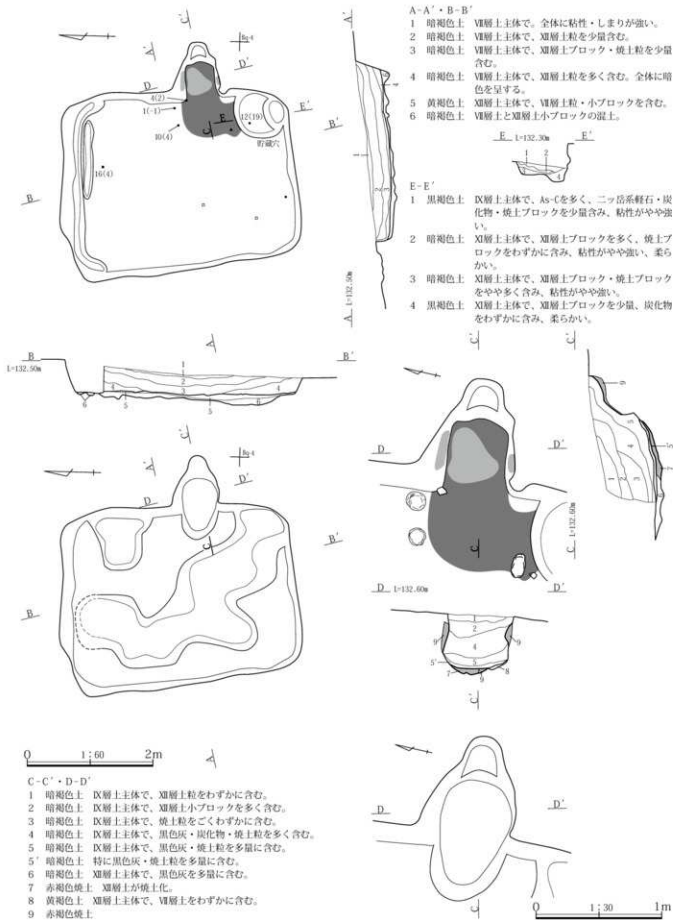
第547図 25号住居カマド掘り方・出土遺物

26号住居(第548～549図 P.L.126・127・268)

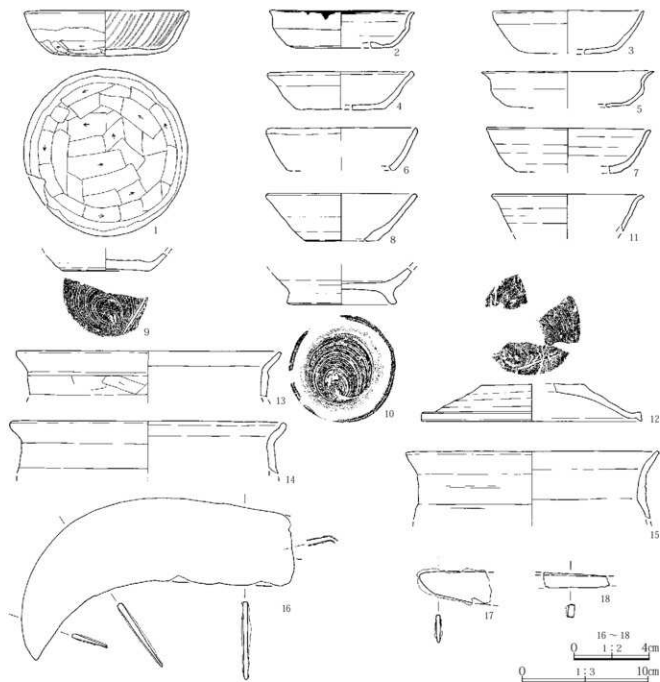
位置: Bp-3・4グリッド **形状:** 隅丸長方形 **規模:** 2.85 m×3.71 m **残存深度:** 0.70 m **主軸方位:** E-10°-N **埋没土:** 粘性の強いⅦ層土主体。 **柱穴:** 未検出
カマド: 東壁中央やや南寄りに検出され、燃焼部を壁外に設け煙道を短く張り出させた凸字形の平面形となるカマドである。燃焼部底面と側壁に焼土が形成されていたが、奥壁側には焼土が認められなかった。カマド前面から右手方向に黒色灰面の広がりが見られ、燃焼部からの灰の掻き出しが南東コーナー部の貯蔵穴方向に行われたことがわかる。燃焼部やカマド周辺から構築材となるような礫などの出土は見られず、掘り方の調査においても構築材を据えた痕跡は見られないことから、Ⅹ層土を掘り抜く形で本体を構築していたものと考えられる。カマド主軸方位は、E-4°-Nであり、東壁には直行する方向であるが、直線的で残存状況の良い西壁を基準と

して計測した住居主軸方位とはわずかなずれがある。

遺物: カマド付近から土師器環(1・4)、須恵器碗の底部(10)が、南東コーナー部の貯蔵穴から須恵器蓋(12)が出土した。特筆されるのは、北壁寄りの床面に16の鎌が出土したことである。重複: 近い時期の遺構との重複は見られない。 **所見:** 調査区域に位置していたために、二次の調査で全体を明らかにした。北側の調査では北壁際に浅い壁溝状の施設が検出されたが、南側の調査ではまったく認識されなかった。床面は平坦であるが、硬化面は検出されなかった。南東コーナー部には、径0.75 m、深さ深さ0.20 mで南側がさらに0.10 mほど深く掘削された円形の掘り込みが検出されており、位置から貯蔵穴と判断した。掘り方は、土坑状の掘り込みの行われた場所はなく、全体に凹凸のある面として掘削され、Ⅶ層土とⅩ層土ブロックの混土で平坦に床面が構築されていた。 **時期:** 9世紀後半



第548図 26号住居



第549図 26号住居出土遺物

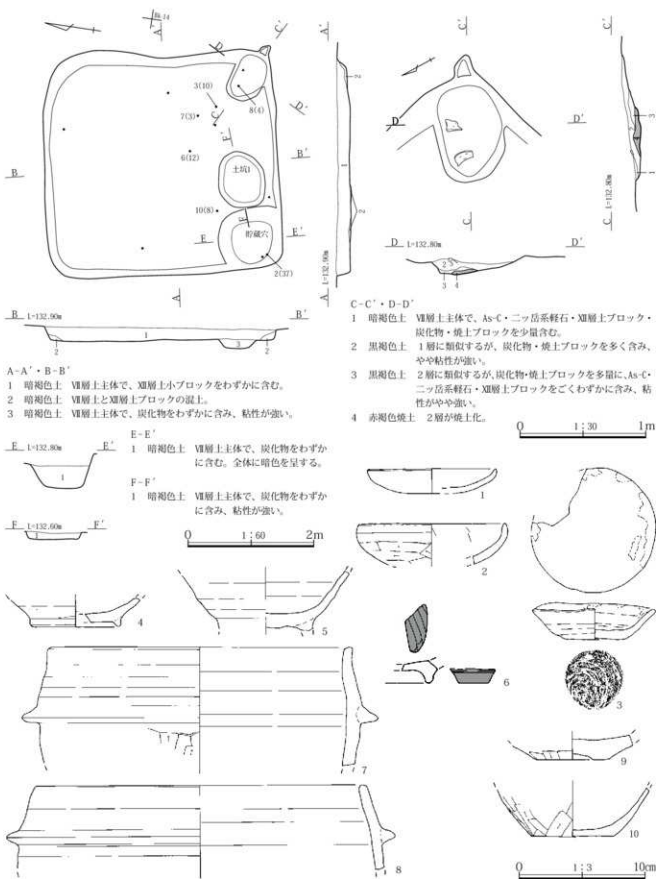
28号住居(第550図 P.L.127・268)

位置: Bj-13・14グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 3.45 m×3.67m 残存深度: 0.22m 主軸方位: E-13°-N 埋没土: 炭化物粒をわずかに含むⅦ層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 南東コーナー部にされ、E-25°-Sの主軸方位となるコーナーカマドである。掘り方の状態が残存したかのように、構築材の痕跡はまったく見られず、焼土・灰層の形成も認められないなど非常に貧弱な印象のカマドである。燃焼部はわずかに掘り窪められた状態で、コーナー部から短く煙道が壁外に掘り込ま

れていた。遺物: 遺物出土は全体に散在するような状態で、カマド周辺から須恵器環(3)が出土した他、緑釉陶器(6)、羽釜(8)の破片が出土した。重複: 近い時期の遺構との重複は見られない。所見: Ⅶ層土上層に酸化鉄の凝集した面があり、この層を剥がして遺構確認をする必要があったため、必然的に確認面が下がり遺構の残存状態は悪くなった。西壁及び南壁は直線的で直行するが、残りの壁はやや曖昧な掘り方が行われている。床面は平坦に構築されているが、硬化面は検出されず、南西コーナー部には、1.03×0.95m、深さ0.36mの隅丸

方形を呈する貯蔵穴が掘削されていた。また、その東側に

土坑1は、唯一の掘り方である。 時期：10世紀後半

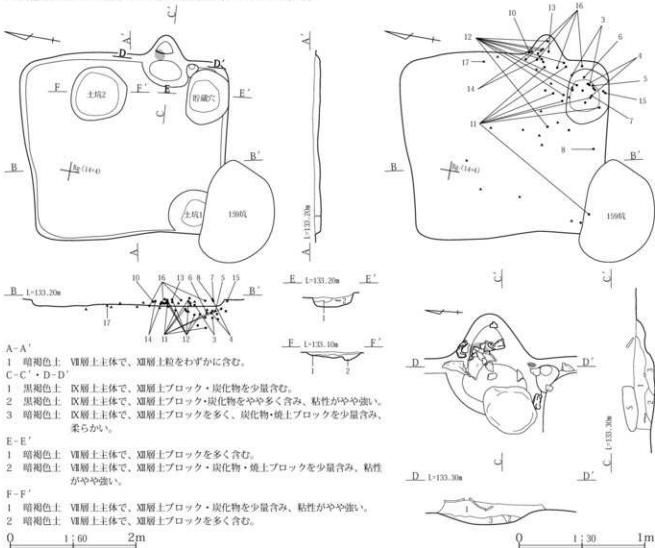


第550図 28号住居・出土遺物

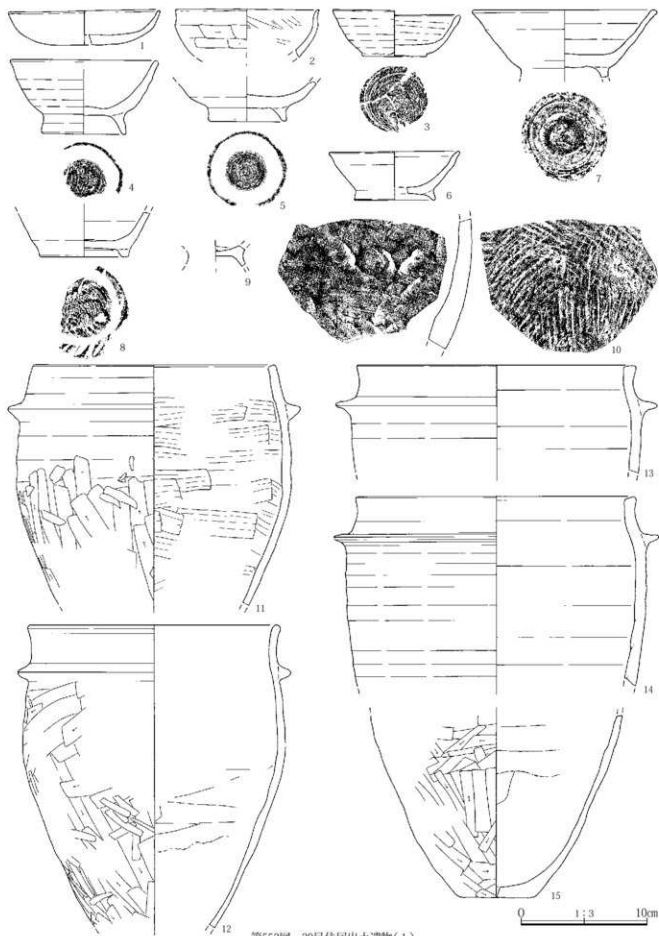
29号住居(第551～553図 P.L.127・128・268・269)

位置: Bf・Bg-14・15グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.95m×3.29m 残存深度: 0.10m 主軸方位: E-7°-N 埋没土: VII層土主体で、壁際にIX層土主体の層が堆積していた。柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに偏った位置に検出した。カマド前面から扁平な礫が出土しているが、構築材として使用されていたような痕跡は見られなかった。燃焼部の壁外への掘り込みはあまり深くないことから、カマドが若干屋内に張り出した構造であった可能性があるが、袖の痕跡がまったく認識できなかった。また、燃焼部の焼土形成は左側のごく狭い範囲だけであり、全体に貧弱な印象を受けるカマドである。想定されるカマド主軸方位はE-4°-Nである。遺物: 遺物の多くはカマド及び南東コーナー部の貯蔵穴周辺から出土している。酸化焙焼成された須恵器環(3)・埴(4～7)は貯蔵穴内から出土し、羽

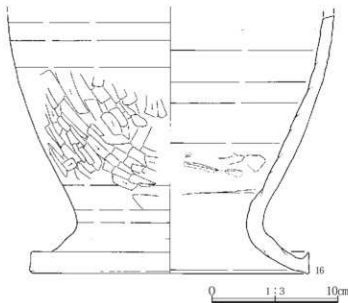
釜(11～14)はカマドとその前面に破片で散在したものが接合した。また、16の須恵器の轆はカマド内から出土した。埋没土中から骨片が1点出土したが、細片であるため固定はできなかった。重複: 北西コーナー部で42号住居と重複しており、検出状況から42号住居→29号住居と考えられる。所見: IX層土面での確認を行い、壁は159号土坑との重複で失われた南西コーナー部以外全周検出できたが、残存高はわずかである。床面はIX層土中で平坦に検出したが、硬化した面はまったく観察されなかった。南東コーナー部には、0.87×0.66m、深さ0.15mの不整楕円形を呈する貯蔵穴が掘削されており、埋没土中から遺物が出土した。また、南西コーナー部に土坑1(径0.70m、深さ0.43m、円形)、東壁寄りに土坑2(径0.83m、深さ0.14m、円形)を検出されたが、2カ所ともに掘り方と判断した。時期: 10世紀後半



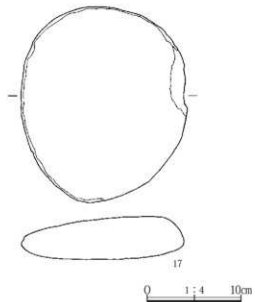
第551図 29号住居



第552図 29号住居出土遺物(1)



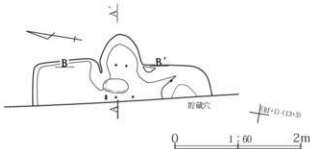
第553図 29号住居出土遺物(2)



30号住居(第554図 P.L.128)

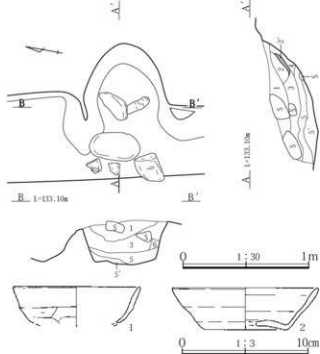
位置：Bf-13・14グリッド 形状：隅丸長方形？ 規模：(0.70)m×2.86m 残存深度：0.45m 主軸方位：E-8°-N 埋没土：Ⅶ層土主体。柱穴：未検出 カマド：東壁中央に設置されており、両袖ともに屋内にわずかに張り出して検出された。焚口部に当たる位置から礫が出土しているが、底面からは浮いており構築材として使用されていたものとは考えられない。燃焼部の埋没土中には焼土ブロックや炭化物が比較的多量に混入していたが、壁面や底面の焼土形成は認められなかった。検出

した平面形をもとに計測した主軸方位はE-11°-Nである。遺物：遺物の出土はごくわずかで、実測できたのは1の土師器環と2の須恵器環だけであった。重複：近い時期の遺構との重複は見られない。所見：調査区西端に位置しており、住居の大半は現道下になるために調査はできなかった。検出できたのはカマドを含む東壁部分であり、全体からみると1/4にも満たない範囲と考えられる。南東コーナー部は床面と比較すると0.16mほど下がっていることから、この位置に貯蔵穴が掘削されていたものと考えられる。時期：9世紀代



A-A'・B-B'

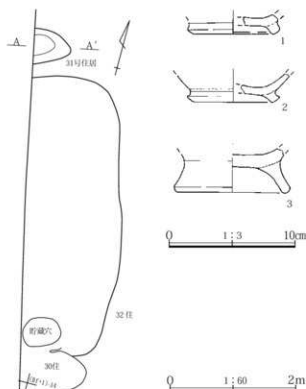
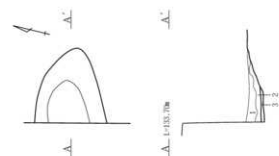
- 1 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅷ層土ブロック・炭化物・焼土ブロックを少量含む、粘性がやや強い。
- 2 暗褐色土 炭化物・焼土ブロックを少量含む。粘性・しまりが非常に強い。
- 2' 赤褐色焼土 2層が焼土化。
- 3 暗褐色土 炭化物・焼土ブロックを多く含む、粘性が強い。
- 4 黒褐色土 炭化物・焼土ブロック・Ⅷ層土ブロックをやや多く含む、柔らかい。
- 5 暗褐色土 炭化物・焼土ブロックを多量に、Ⅷ層土ブロックを多く含む、柔らかい。
- 5' 暗褐色土 Ⅷ層土ブロックを多量に含む。
- 6 褐色土 Ⅷ層土主体で、暗褐色土ブロックを少量含む。



第554図 30号住居・出土遺物

31号住居(第555図 P.L.128・269)

位置: Be・Bf-15グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0.12m 主軸方位: 不明 埋没土: VII層土主体。
 柱穴: 未検出 カマド: 東壁に設置されているが、位置は不明。 遺物: カマド埋没土中から須恵器埴(1～3)の破片が出土した。 重複: 32号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物から32号住居→31号住居である。 所見: 調査区西端にカマドの一部を検出したもので、本体は現道下にあるため調査はできなかった。 時期: 10世紀後半



A-A'

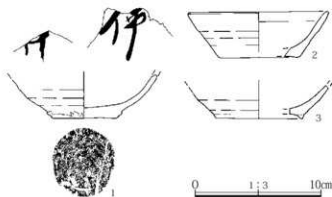
- 1 黒褐色土 VII層土主体で、XII層上ブロック・炭化物・焼土ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 VII層土主体で、XII層上ブロック・焼土ブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土 VII層土主体で、XII層上ブロックを多く、炭化物を少量含む。一部焼土化。

第555図 31号住居・出土遺物

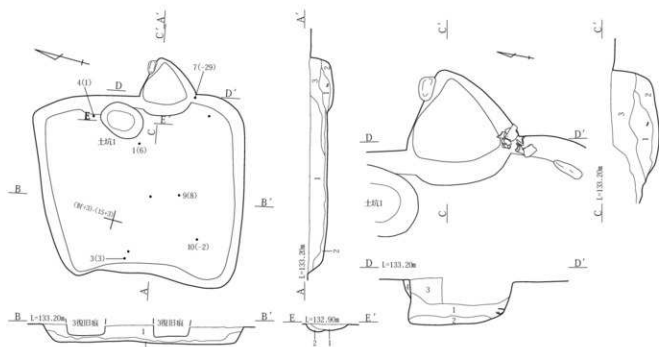
33号住居(第556・557図 P.L.128・269)

位置: Bf・Bg-15グリッド 形状: 隅丸不整形 規模: 2.74～3.29m×3.03m 残存深度: 0.26m 主軸方位: E-17°-N 埋没土: VII層土主体で、As-Cの含有量が比較的多い。 柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに設置されており、燃焼部を壁外に設けた釣鐘状の平面形となるカマドで、残存部分で計測した出軸方位はE-19°-Nである。左側壁の最奥部に構築材と見られる礫が1点検出されており、本来は他の位置にも構築材が据えられていた可能性がある。カマド埋没土中層には焼土ブロックが多く含まれていたが、底面や側面に焼土は形成されていなかった。埋没土を取り去った時点で、あたかも掘り方調査を済ませたかのような状況であったことから、住居廃絶時にカマドが片づけられた可能性が高い。 遺物: 遺物出土は少なく、須恵器埴(4)が東壁際の北寄りの位置から、体部外面に「佛」と墨書された須恵器坏(1)はカマド前面の床面から、土師器甕(7)はカマドから、9は中央部床面付近から出土した。 重複: 41・42号住居と重複しており、検出状況から41・42号住居→33

号住居と考えられる。 所見: IX層土面において、色調の違いと二ツ岳系軽石の含有を目安として平面の確認を行なった。その結果、壁のほぼ全周を検出したが、西壁は他の壁と比較して掘り方がやや曖昧であった。床面はXII層土中に平坦に構築されており、全体に及ぶ掘り方は見られないが、カマドの北側に0.68×0.50m、深さ0.08mの楕円形を呈する土坑1が検出されており、位置的に貯蔵穴とは考えにくいことから、掘り方の時点で掘削されたものと思われる。 時期: 9世紀後半



第556図 33号住居出土遺物(1)



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、As-Cを多く、ニッ岳系軽石・XII層土ブロック・炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 VII層上主体で、XII層土ブロックを多く、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。
- 3 暗褐色土 I層に類似するが、炭化物を多く含む。

E-E'

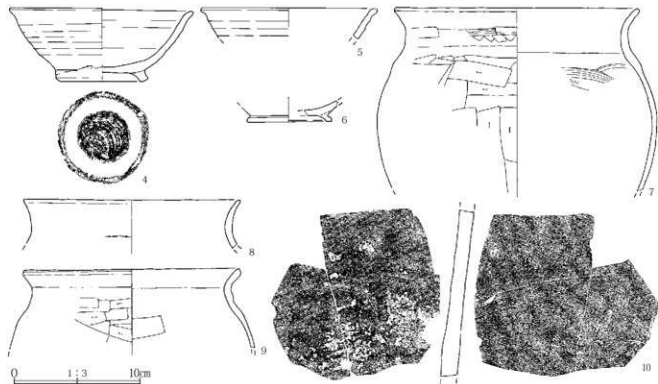
- 1 暗褐色土 VII層上主体で、XII層土ブロック・炭化物・焼土ブロックをやや多く含む、粘性がやや強い。
- 2 濃い黄褐色土 XII層上主体で、I層に暗褐色土ブロックを少量含む、柔らかい。

0 1:60 2m

C-C'・D-D'

- 1 黒褐色土 IX層上主体で、焼土ブロックを多く、炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 XI層上主体で、XII層土ブロック・炭化物・焼土ブロックを少量含む、柔らかい。
- 3 黒褐色土 VII層上主体で、炭化物・焼土ブロックを少量含む。
- 4 赤褐色焼土 IX層上主体で、XII層土ブロックを少量含む、焼土化。

0 1:30 1m

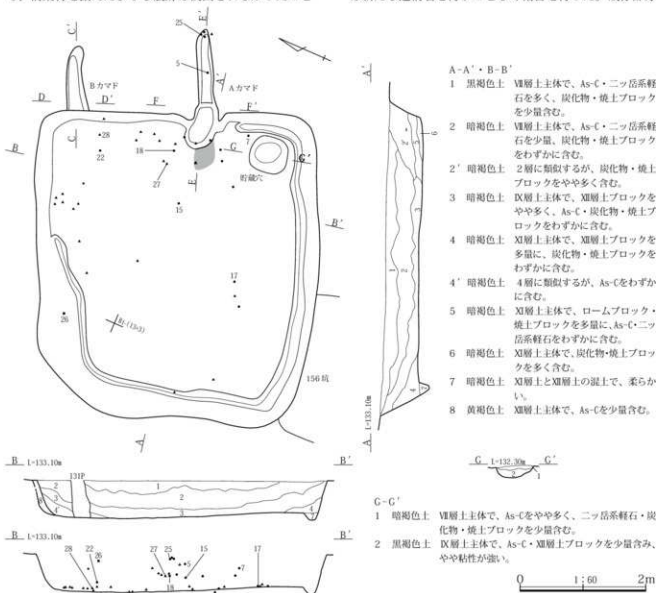


第557図 33号住居・出土遺物(2)

35号住居(第558~560図 P.L.129・269)

位置: Bh・Bi-13・14グリッド 形状: 隅丸不整長方形
 規模: 4.97m×4.48m 残存深度: 0.56m 主軸方位:
 E-24°-N 埋没土: VII層土主体。柱穴: 未検出
 カマド: 東壁中央南寄り及び北東コーナー部に煙道の痕跡を検出したため、中央南寄りのカマドをAカマド、北東コーナー部の痕跡をBカマドとした。Aカマドは、屋内部分に焼土の形成があることから、カマド本体が屋内に張り出し、煙道を壁外に長く掘削したカマドであったものと考えられる。しかし、屋内部分には燃焼部底面と思われるわずかな窪みが検出されただけで、袖などの構造は残存していなかったことから、廢絶時にカマドの片づけが行われたものと考えられる。掘り方の調査において、構築材を据えたような痕跡は検出されなかったこと

から、カマド本体は比較的粘性のあるXI層土を使用して構築されていたものと思われる。煙道をもとに計測した主軸方位はE-25°-Nであり、東壁で計測した住居主軸方位とほぼ一致している。Bカマドとしたものは、東壁北端に位置しており、XI層土中に構築された東壁面に焼土が検出されたことから存在を認識することができた。残存したのは煙道部分だけであり、検出面においては焼土化した天井部も残存していたが、カマド本体に当たる部分はまったく残存していなかった。当初、35号住居のカマドの造り替えを想定したことからBカマドとしたが、南北方向の土層断面北端に、わずかながら重複住居の埋没土と見られる土層が観察されたことから、重複する住居があった可能性が高くなった。しかし、ここでは新たな遺構名を付すことなく報告を行った。残存部分

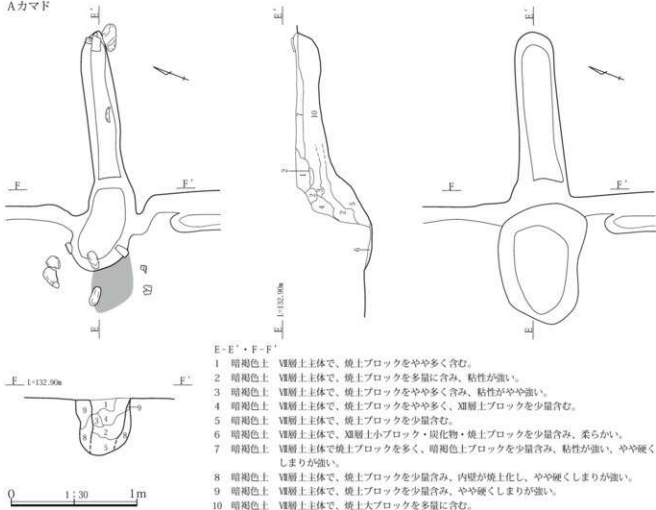


第558図 35号住居

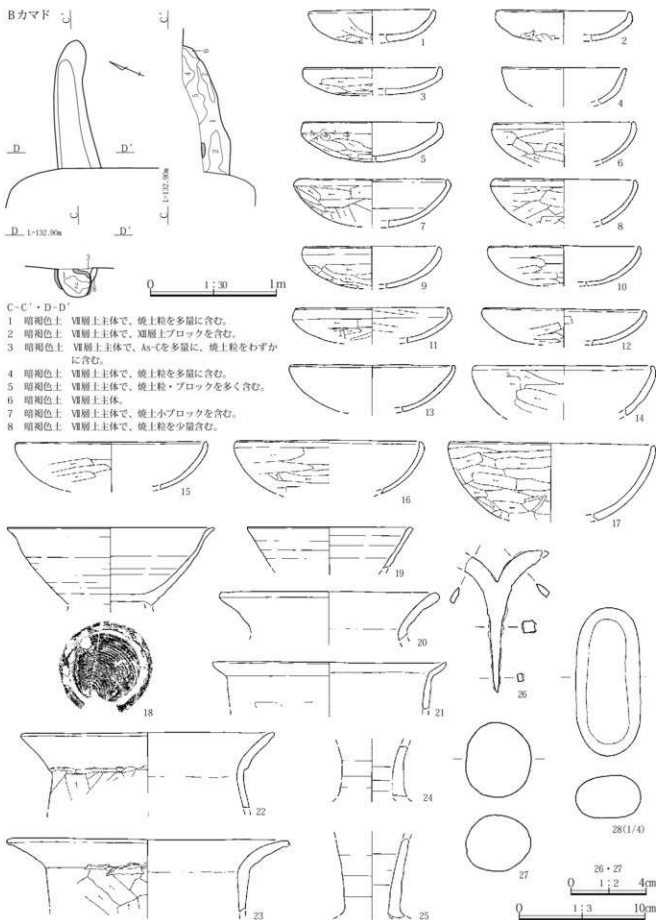
で計測した主軸方位はE-27°-Nであり、Aカマドとの大きな違いはない。遺物：土師器環の破片が出土遺物の主体を占めており、5がカマド煙道部、7が貯蔵穴脇、15がカマド前面、17が中央床面からそれぞれ出土した。他に、22の土師器甕は北東コーナー部付近から、須恵器長頸瓶(25)が煙道先端部から出土しており、明らかに時期の下る18の須恵器壺がカマド前面にあたる埋没土中から出土したことから、土坑等との重複があった可能性がある。また、大小の礫が東壁から北壁より出土した。特筆されるのは、26の雁又鎌が北西コーナー部の壁中位から出土したことである。また、馬歯が1点出土したが、住居に伴うものであるか不明である。重複：南側で53・86号住居と重複しており、検出状況及び住居形態から見て35号住居→53号住居→86号住居と考えられるが、53号住居の掘り込みが浅く、遺構確認段階で削平してしまったために直接に新旧関係を確認することができず、さらに出土遺物がほとんどみられないことから遺

物による判断もできなかった。所見：Ⅻ層土上面で遺構確認を行ったところ、北西コーナー部が切り落とされたような特異な形状に確認され、Bカマドが設置された住居との重複による変形も想定してみたが、南東コーナー部から続く壁溝が変形した北西コーナー部に沿って掘削されていることから、当初から計画されたものであることが確実となった。Bカマドを持つ住居については、35号住居より北側にわずかに広がっていたものと考えられるが、他の部分においては残存しておらず、35号住居よりも小規模であったか、または同規模の住居を想定せざるを得ない。いずれにしても北東コーナー部至近の位置にカマドが設置された特異な住居となろう。35号住居は、Ⅻ層土を直接に床面としており、掘り方はまったく認められない。南東コーナー部には、0.57×0.60m、深さ0.20mの隅丸方形を呈する貯蔵穴を検出した。時期：7世紀後半

Aカマド



第559図 35号住居 Aカマド

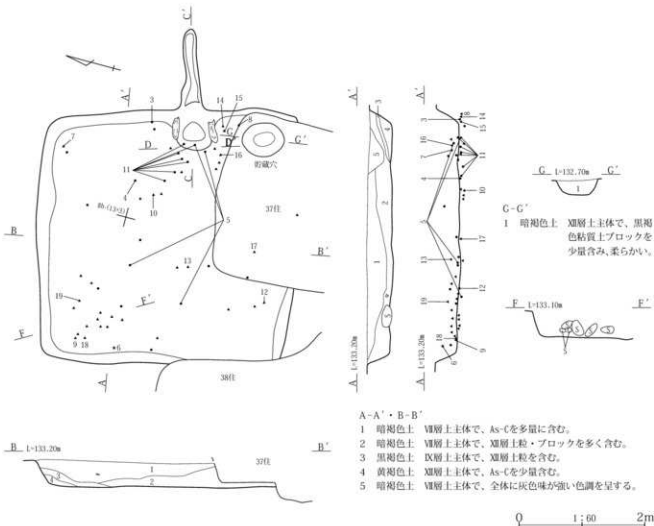


第560図 35号住居Bカマド・出土遺物

36号住居(第561～563図 P.L.129・130・269・270)

位置: Bg・Bh-13グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 4.01m×4.04m 残存深度: 0.35m 主軸方位: E-17°-N 埋没土: VII層土主体で、As-C含有量が多い。柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央わずかに南寄りの位置に設置されていた。カマド本体が屋内側に張り出し、煙道だけを壁外に1.25mほど掘削したカマドである。両袖部には構築材として礫を2カ所に0.5mほどの間隔を置いて立てており、焚口の天井部に使用されたような礫は至近の位置からは出土していないことから、粘性のあるXI層土を用いて本体を築いていたものと考えられる。燃烧部はわずかに窪められており、支脚は検出されていないが、掘り方において燃烧部中央にピット状の窪みが検出されていることから、この位置に支脚が設置されていた可能性がある。カマド埋没土中には焼土ブロックや炭化物が認められたが、燃烧部底面や側面などに焼土の形成や黒

灰色の残存はなかった。カマド主軸方位は、E-17°-Nであり、東壁から計測した住居主軸方位と一致している。遺物: 土器の多くはカマド周辺から出土した。11の土師器裏は、カマド焚口部と中央部床面から出土した破片が接合し、5はカマド前面から出土した。北西コーナー部の床面付近に大きな礫が集中していた他、西壁際の床面から6の土鍾が1点出土したことが特筆される。重複: 37・38号住居と重複し、検出状況及び出土遺物から36号住居→37・38号住居と考えられる。所見: 南壁と西壁の一部は37・38号住居との重複によって失われているが、これ以外は傾斜がやや緩いものの条件良く残存していた。XI層土を平坦に掘削することで直接に床面としており、壁溝は掘削されていない。また、床面に硬化した部分は認められず、掘り方もまったく検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナー部にあり、0.67×0.52m、深さ0.22mで楕円形を呈している。時期: 7世紀後半

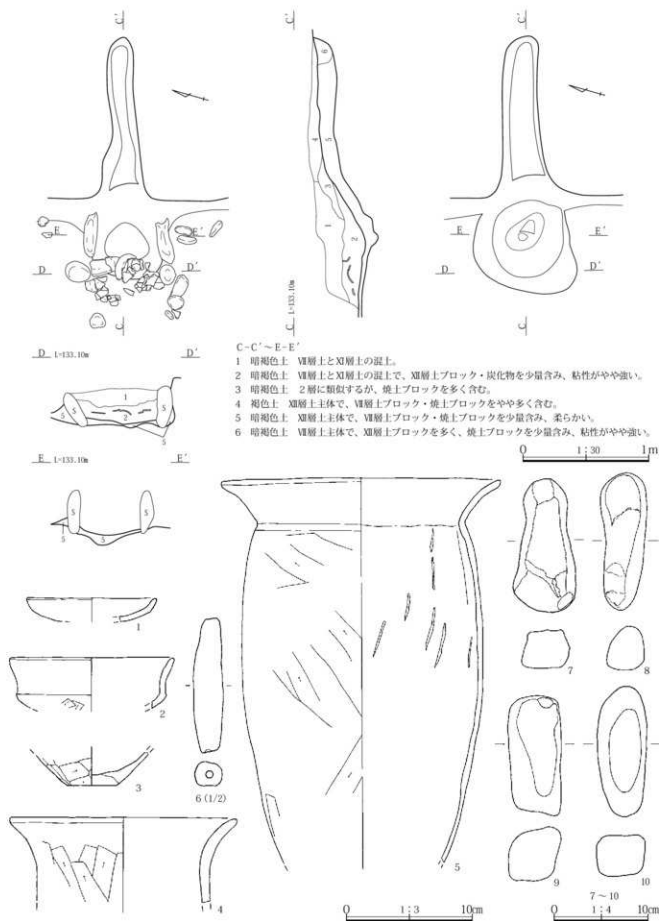


A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、As-Cを多量に含む。
- 2 暗褐色土 VII層土主体で、XI層土粒・ブロックを多く含む。
- 3 黒褐色土 IX層土主体で、XI層土粒を含む。
- 4 黄褐色土 XI層土主体で、As-Cを少量含む。
- 5 暗褐色土 VII層土主体で、全体に灰色味が強い色調を呈する。

0 1:60 2m

第561図 36号住居



C-C' ~ E-E'

1 暗褐色土 VII層土とXI層土の混土。

2 暗褐色土 VII層土とXI層土の混土で、XII層土ブロック・炭化物を少量含み、粘性がやや強い。

3 暗褐色土 2層に類似するが、焼土ブロックを多く含む。

4 褐色土 XII層土主体で、VII層土ブロック・焼土ブロックをやや多く含む。

5 暗褐色土 XII層土主体で、VII層土ブロック・焼土ブロックを少量含み、柔らかい。

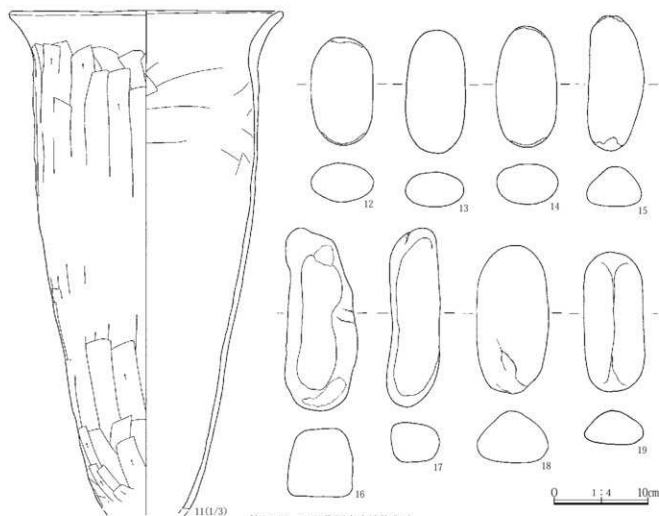
6 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土ブロックを多く、焼土ブロックを少量含み、粘性がやや強い。

0 1/30 1m

0 1/3 10cm

7-10
1/4 10cm

第562図 36号住居カマド・出土遺物(1)

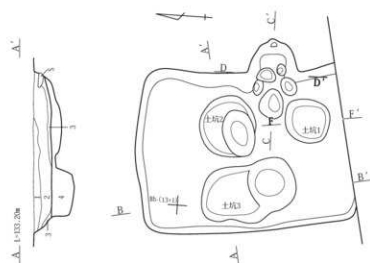
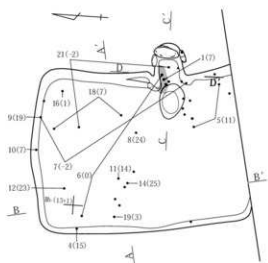


第563図 36号住居出土遺物(2)

37号住居(第564・565図 P.L.130・131・270)

位置：Bg・Bh-12・13グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.60m×3.38m 残存深度：0.30m 主軸方位：E-8°-N 埋没土：Ⅶ層土主体。柱穴：未検出 カマド：東壁中央のわずかに南寄りに設置されており、燃焼部を壁外に設けた凸字形の平面形となるカマドである。左軸部には構築材の礫が据えられた状況で残存し、右軸部には残存しなかったが、掘り方でピット状の掘り込みが検出されたことから、本来は礫が据えられていたものと考えられる。また、奥壁の煙道部との境には礫が立てられ、天井となる礫が燃焼部側にずり落ちた状況で出土した。燃焼部底面の左寄りの部分には焼土が形成されていたが、これ以外の場所は焼土化しておらず、黒色灰面の広がりもなかった。カマドの主軸方位はE-8°-Nであり、西壁で計測した住居主軸方位と一致している。遺物：遺物はカマドを含めて住居全体に散在しており、カマドと北壁寄り出土の破片が接合するような状況であった。酸化焙焼成の須恵器環(1)、埴(6～11)、

土師器甕(16)、羽釜(18)などは住居北半から出土し、緑釉陶器埴(12)の破片は北西コーナー近くから出土した。また、灰釉陶器埴の破片が複埋没土中から出土した他、東壁北寄りに扁平な大礫が水平に出土したことが特筆される。重複：36・49号住居と重複し、検出状況から36・49号住居→37号住居と考えられる。所見：南壁が調査区境に当たり、本来であれば南側調査区(Ⅲ区)において検出されるはずであったが、調査時期の違いから既調査区の際まで掘削できなかったために未検出となった。他の壁は全周検出したが、東壁は直線的ではなく弓なりになっていた。床面はⅦ層土中に平坦に構築され、中央部に土坑1(径0.68m、深さ0.08m、不整形円形)、土坑2(1.00×0.90m、深さ0.24m、楕円形)、土坑3(1.56×0.93m、深さ0.50m、楕円形)の3カ所の掘り方が検出された。貯蔵穴は検出部分の精査によっては検出されなかったが、未調査の南東コーナー部に掘削されていた可能性が高い。時期：10世紀後半



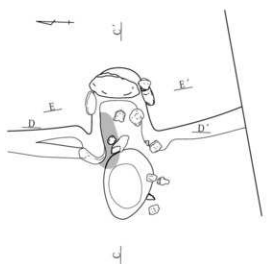
A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 V層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石をやや多く、炭化物を少量含み、やや硬くしまりが強い。
- 2 暗褐色土 IX層土主体で、As-Cを少量、XII層土ブロックをわずかに含む。
- 3 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土ブロック・炭化物をやや多く含み、粘性がやや強い。
- 4 暗褐色土 V層土主体で、XII層土ブロック・炭化物・焼土ブロックを少量含み、粘性がやや強い。

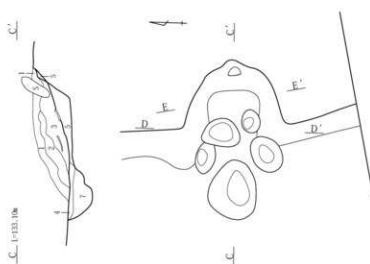
F-F'

- 1 暗褐色土 V層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石・XII層土ブロック・炭化物・焼土ブロックをやや多く含む。
- 2 にぶい黄褐色土 XII層土主体で、V層土ブロックを少量含み、柔らかい。

0 1:60 2m



D-D' 1:133.10m

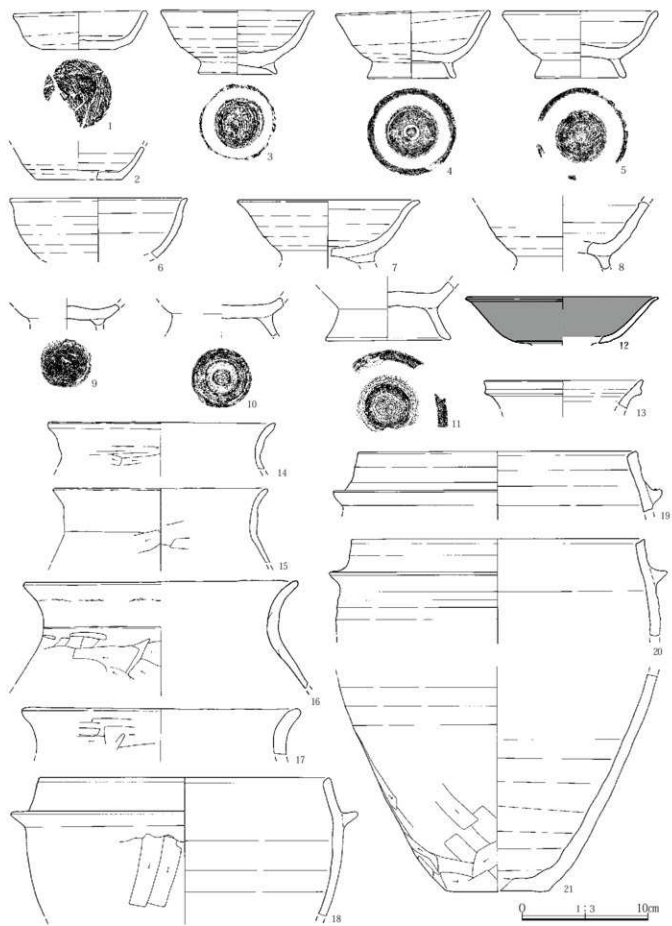


C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 V層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物・焼土ブロックをわずかに含む。
- 2 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土ブロック・炭化物・焼土ブロックを少量含み、柔らかい。
- 3 暗褐色土 XI層土主体で、焼土ブロックをやや多く、XII層土ブロック・炭化物を少量含み、粘性がやや強い。
- 4 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土ブロック・炭化物を多く含み、やや硬くしまりが強い。
- 5 にぶい黄褐色土 XII層土主体で、XI層土ブロックを多く含み、一部焼土化。
- 6 暗褐色土 V層土主体で、XII層土ブロックをやや多く、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含み、内壁が焼土化。
- 7 暗褐色土 XI層土とXII層土の混土で、炭化物を少量含み、柔らかい。

0 1:30 1m

第564図 37号住居

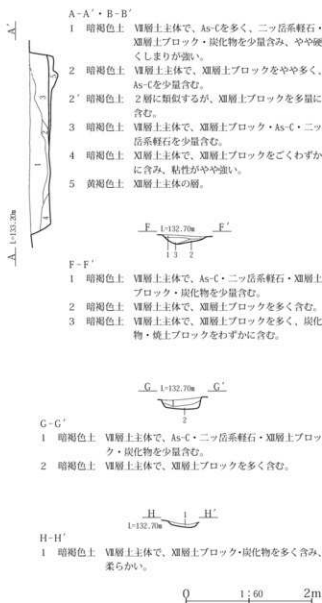
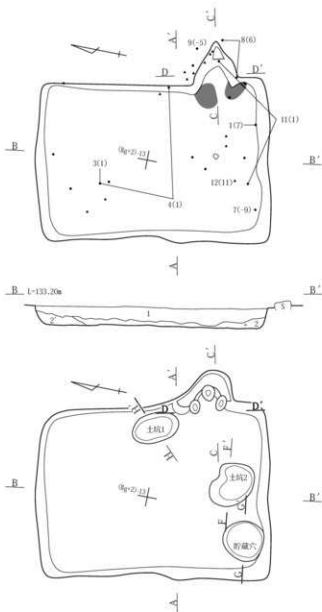


第565図 37号住居出土遺物

38号住居(第566・567図 P.L.131・270)

位置:Bg-12・13グリッド 形状:隅丸長方形 規模:2.65m×3.67m 残存深度:0.33m 主軸方位:E-12°-N 埋没土:Ⅶ層土主体。柱穴:未検出 カマド:東壁南端で南東コーナー部に接するように検出した。煙道部が短く突出した釣鐘状の平面形を呈し、主軸方位はE-13°-Nである。カマド左壁上から礫がまるとまて出土しているが、構築材として使用されていたものとは考えにくい。両袖が屋内に張り出していた痕跡がないことから、燃焼部を壁外に置くタイプである。燃焼部に焼土の形成は認められなかったが、比較的厚く黒色灰層が形成されていた。掘り方の調査では、燃焼部中央と袖に当たる部分にピット状の掘り込みが検出されたことから、

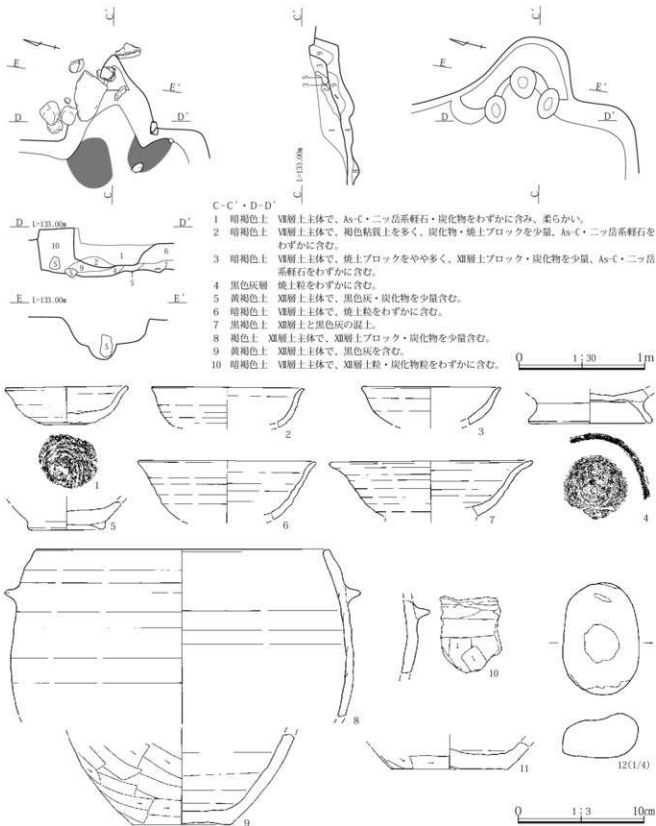
本来はこの位置に袖構築材及び支脚が置かれていた可能性がある。遺物:住居床面の南寄りにやや多く出土した。酸化焙焼成の須恵器環(3)は中央北寄りの床面付近から、環(1)と埴(7)が南壁際、4は東壁際からの出土である。羽釜はカマド部分に集中しており、8は右袖部と煙道部際の壁外から出土した破片が接合した。灰釉陶器境の破片が数点埋没土中から出土した他、細片化した馬歯が1点出土した。重複:36・39・49・50号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物の時期から50号住居→36・39・49号住居→38号住居と考えられる。所見:他住居との重複部分も含めて平面形は比較的容易に捉えることができた。コーナー部の丸みの弱い当該期では特異な形状を呈する。床面はⅩ層土中に平坦に構築されて



第566図 38号住居

おり、掘り方としてカマド北寄りに土坑1 (0.76×0.45 m、深さ0.07 m、楕円形)、南壁中央の壁際に土坑2 (0.81×0.65 m、深さ0.14 m、不整楕円形)が検出され、内部は住居埋没土に類似する土が充填していた。貯蔵穴は、

南西コーナー部に検出した径0.65 m、深さ0.20 mの円形を呈する土坑状の掘り込みと考えられる。 時期：10世紀後半

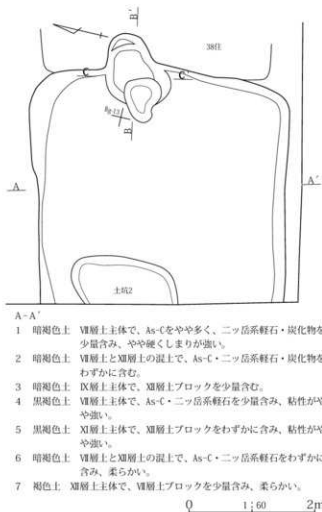
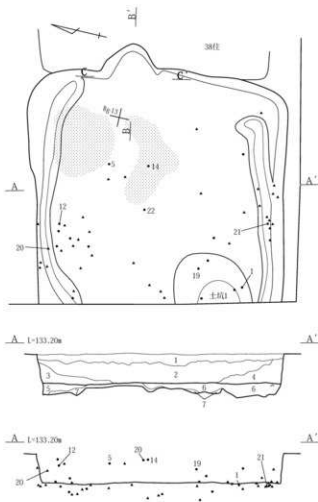


第567図 38号住居カマド・出土遺物

39号住居(第568～570図 P.L.131・132・270)

位置: Bf・Bg-12・13グリッド 形状: 隅丸方形? 規模: (3.73)m×4.11m 残存深度: 0.46m 主軸方位: E-11°-N 埋没土: VII層土主体で、しまりが強い。柱穴: 未検出 カマド: 東壁の北寄りに偏って設置されていた。壁外にわずかに掘り込まれているが、燃焼部としては狭いことから本来は屋内に本体が張り出していたものと考えられる。しかし、屋内側には袖の痕跡等まったく検出されておらず、住居廃絶時に片づけられたものと思われる。また、壁外に掘り込まれた部分の先端から煙道が長く壁外に掘削されていたはずであるが、38号住居との重複によって失われたものと思われる。掘り方の調査においては、袖構築材や支脚を据えつけるための掘り込みなどが検出されていないため、カマド本体構造は判然としない。煙道が失われているため、基準とすべき場所がないが、残存部分から想定される主軸方位はE-11°-Nであり、南壁を基準に計測した住居主軸方位と大

差ない。遺物: 土器片の多くは埋没土中からの出土で、床面付近からは礫の出土が目立った。土師器環の破片が多いが、模倣環(1～3)と北武蔵型環(9～14)があり、いずれも床面からは30cm前後浮いた位置から出土している。同様に22の須恵器環は住居中央部の床面から47cmほど上位からの出土であり、器形や底部切り離し技法からも先の土師器環よりは後出的である。重複: 38・50・51号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物の時期から51号住居→39号住居→38・50号住居である。所見: 調査区の南西端に位置しており、西壁は現道下になるため調査することができなかった。床面は平坦に構築されており、カマド前面に当たる部分に硬化面が検出された。南北壁に沿って壁溝状に掘り込まれた部分があるが、土層断面の観察では、掘り方の埋土との分層ができず、掘り方の一部であった可能性がある。また、掘り方は全体に及んでいるが、掘り込みの深さは一定せず、充填している土層にもしまりが認められない。南西コーナー部に

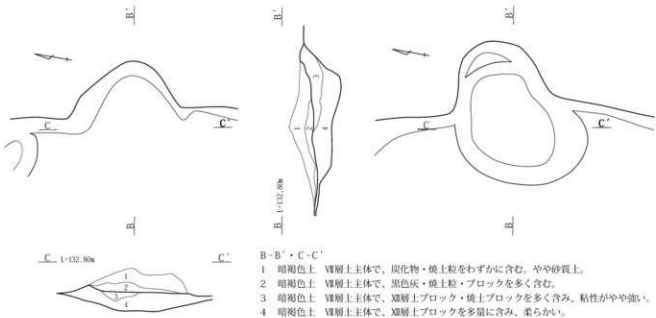


- A-A'
- 1 暗褐色土 VII層土主体で、As-Cをやや多く、二ッ層系軽石・炭化物を少量含む。やや硬くしまりが強い。
 - 2 暗褐色土 VII層土とXII層土の混土で、As-C・二ッ層系軽石・炭化物をわずかに含む。
 - 3 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土ブロックを少量含む。
 - 4 黒褐色土 VII層土主体で、As-C・二ッ層系軽石を少量含む。粘性がやや強い。
 - 5 黒褐色土 XI層土主体で、XII層土ブロックをわずかに含む。粘性がやや強い。
 - 6 暗褐色土 VII層土とXII層土の混土で、As-C・二ッ層系軽石をわずかに含む。柔らかい。
 - 7 褐色土 XII層土主体で、VII層土ブロックを少量含む。柔らかい。

第568図 39号住居

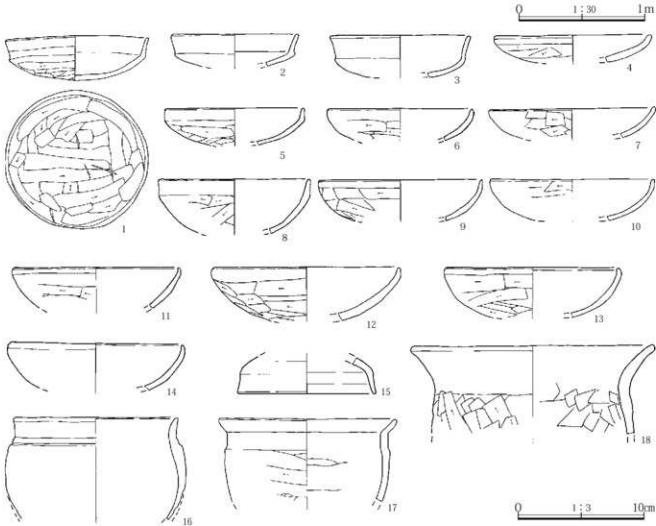
近い位置から径1.20m、深さ0.19mの円形を呈すると思われる土坑1を検出したが、貯蔵穴とするには規模が大きすぎるきらいがあり、掘り方の一部である可能性が強

い。また、北西コーナー部近くに長軸が1.77m、深さが0.07mほどの楕円形を呈する土坑2を検出した。時期：7世紀後半

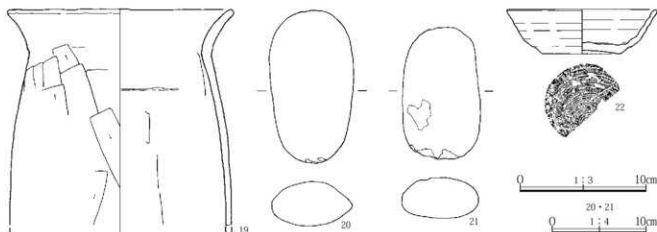


B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土 V層土主体で、炭化物・焼土粒をわずかに含む。やや砂質土。
- 2 暗褐色土 V層土主体で、黒色灰・焼土粒・ブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土 V層土主体で、X層土ブロック・焼土ブロックを多く含む。粘性がやや強い。
- 4 暗褐色土 V層土主体で、X層土ブロックを多量に含む。柔らかい。



第569図 39号住居カマド・出土遺物(1)



第570図 39号住居出土遺物(2)

40号住居(第571・572図 P.L.132)

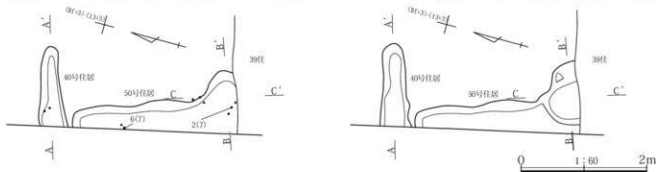
位置: Bf-13グリッド 形状: 不明 規模: 不明 残存深度: 不明 主軸方位: 不明 埋没土: VII層土主体と思われる。柱穴: 未検出 カマド: カマド煙道部だけが検出されたもので、検出部分で1.30mほどになり、主軸方位はE-16°-Nである。遺物: 煙道部の西寄りから土器器裏の破片が出土しているが、胴部破片であり器形がわかりにくいために掲載しなかった。重複: 50号住居と重複しているが、重複部分の調査が行われていないので確実ではないが、カマドの形態から40号住居→50号住居と考えられる。所見: カマド煙道部だけを検出したもので、他は現道下になるため調査できなかった。出土遺物もわずかで時期の特定もし難い状況であるが、煙道部が1m以上も延びるのは本遺跡で検出されている竪穴住居では7世紀代に特徴的なあり方であり、40号住居も7世紀代となる可能性が高い。時期: 7世紀代

50号住居(第571・572図 P.L.137・272)

位置: Bf-13グリッド 形状: 不明 規模: (0.50)m × (2.62)m 残存深度: 0.35m 主軸方位: E-20°-N 埋没土: VII層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 東壁に

設置されているが、正確な位置関係は不明である。南側は39号住居の調査時にカマドの存在が認識できず削平してしまったために残存していない。残存した北半部分では、比較的残存が良好であるにもかかわらず、袖構築材や支脚の検出はなかった。カマド本体は壁外に設けられたものであり、残存していなかったが、奥壁中央から短く煙道が掘削されていたものであろう。燃焼部埋没土中には焼土ブロックの混入が認められるが、底面及び壁面に焼土の形成は認められない。想定される主軸方位は、E-18°-Nであり、東壁を基準として計測した住居主軸方位に近似する方位である。遺物: 須恵器環(1)・塊(2)、土器器裏(3~5)はいずれもカマド及び住居埋没土中から出土したものであり、6の鉄鎌は北東コーナー部近くの床面からわずかに上位から出土した。重複: 39・40号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物の時期から39・40号住居→50号住居と考えられる。

所見: 調査区西端で検出したもので、住居の大半は現道下になるため、カマドを含む東壁際のわずかな部分しか調査できなかった。出土遺物の比較から、39号住居が古いことは明らかなのであるが、調査時点では50号住居のカマドが正確に認識できず、39号住居の掘り下げを先行



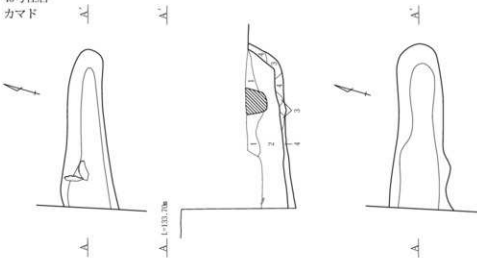
第571図 40・50号住居

したために50号住居のカマド南半と南東コーナ部を削平してしまった。床面は狭い範囲の検出であり確実なこ

とは言い難いが、掘り方は行われていない可能性が高い。

時期：9世紀後半

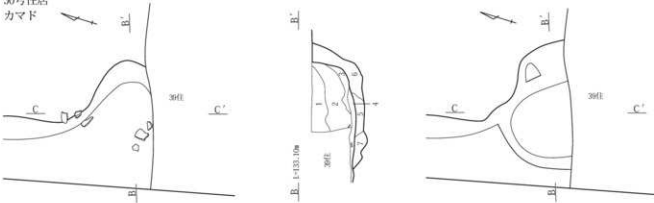
40号住居
カマド



A-A'

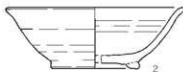
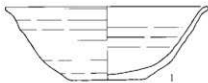
- 1 暗褐色土 VII層上主体で、XI層上ブロックをやや多く、As-C・二ツ岳系軽石・焼土ブロックをわずかに含み、粘性がやや強い。
- 2 暗褐色土 VII層上主体で、XI層上ブロック・黒褐色粘質土ブロック・焼土ブロックをやや多く含み、As-C・二ツ岳系軽石をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 VII層上主体で、XI層上ブロックを多く含み、一部焼土化。
- 4 に近い黄褐色土 XI層上主体で、VII層上ブロックをわずかに含み、一部焼土化。

50号住居
カマド

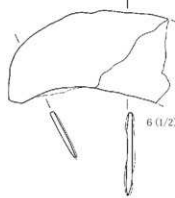
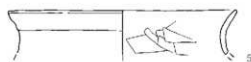
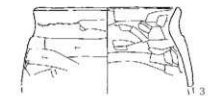


B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、As-Cを多く、二ツ岳系軽石・炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、XI層上ブロック・焼土ブロックをわずかに含む。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、焼土ブロックを多く含む。
- 4 暗褐色土 黒色灰・炭化物を多く、XI層上ブロック・焼土ブロックをやや多く含み、柔らかい。
- 5 暗褐色土 VII層上主体で、焼土ブロックをやや多く、XI層上ブロック・炭化物を少量含む。
- 6 暗褐色土 VII層上主体で、XI層上ブロックをやや多く含む。
- 7 暗褐色土 VII層上主体で、XI層上ブロック・炭化物をやや多く、焼土ブロックをわずかに含む。



0 1:30 1m



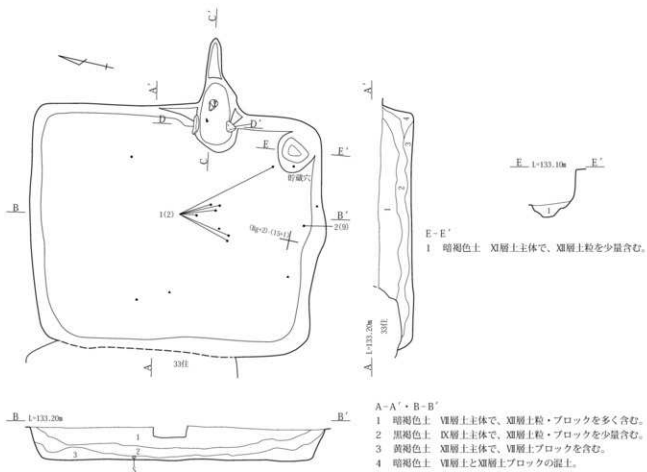
0 1:3 10cm

第572図 40・50号住居カマド・50号住居出土遺物

41号住居(第573・574図 P.L.132・270)

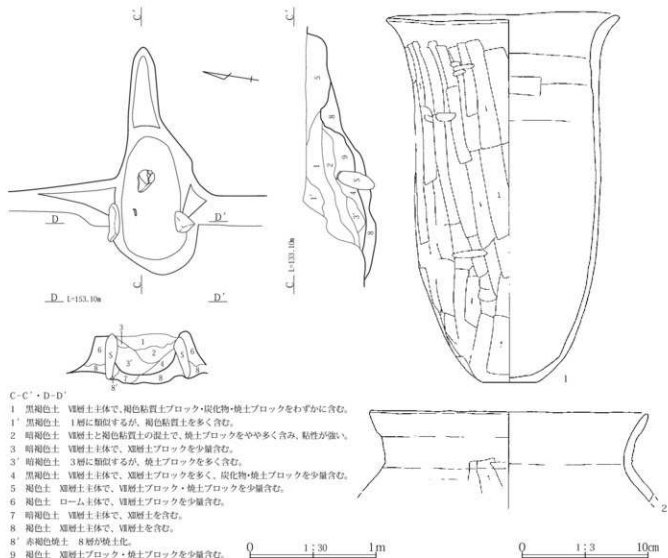
位置: Bf・Bg-15・16グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 3.80m×4.61m 残存深度: 0.51m 主軸方位: E-12°-N 埋没土: XI層土ブロックを多く含むVII層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央のやや南寄りに設置されている。袖の残存は良好ではなかったが、屋内側に0.5mほどの間隔を置いて構築材の礫が左右1カ所据えられており、これを覆うようにXI層土相当の土が見られたことから、本体は粘性のあるXI層土を用いて構築していたものと考えられる。燃焼部の約1/2は壁外に位置しており、燃焼部中央やや奥の左側に偏った位置に支脚の礫が立てられていた。煙道は燃焼部底面から0.2mほど上がった位置から緩い傾斜を持って0.65mほど延びていた。袖構築材の中央と煙道部中央を結んだ線で計測した主軸方位はE-13°-Nであり、ほぼ東壁を基準として計測した住居主軸方位と一致している。遺物: 埋没土中及び

床面付近からの遺物出土はわずかで、掲載可能な遺物は中央床面及び南東コーナー部近くの貯蔵穴際から出土した1の土師器甕と南壁際の中央部から出土した2の土師器甕だけである。小型丸底壇もカマド北側の床面付近から出土しているが、古い時期の遺物が混入したものであろう。重複: 33・42号住居と重複しており、検出状況などから42号住居→41号住居→33号住居と考えられる。所見: 壁は、33号住居との重複により一部削平された西壁を除いて比較的良好な状態で検出された。南壁中央部がわずかに南側に突出したような状況が認められるが、張り出しとして意識的に掘削されたものかは不明である。床面はXI層土中に直接構築されており、掘り方はまったく見られない。南東コーナー部には径0.58m、深さ0.20mの円形を呈する貯蔵穴が掘削されており、XI層土相当の土で埋没していた。時期: 7世紀後半



0 1:60 2m

第573図 41号住居

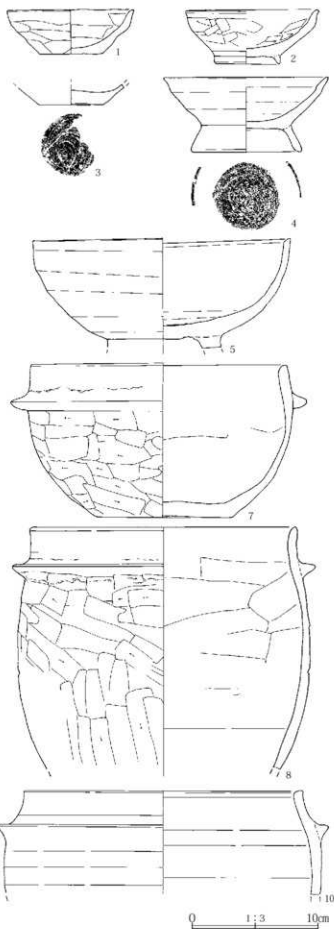
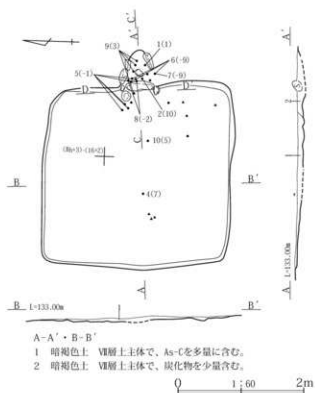


第574図 41号住居カマド・出土遺物

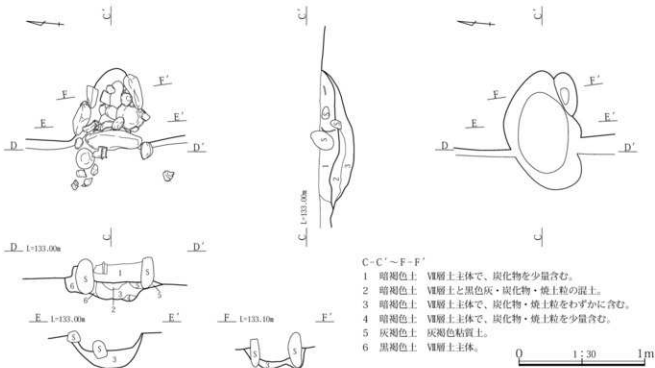
43号住居(第575・576図 P L.133・270・271)

位置: Bh-16グリッド **形状:** 隅丸方形 **規模:** 2.94m × 2.98m **残存深度:** 0.09m **主軸方位:** E-O°-N
埋設土: VII層土主体 **柱穴:** 未検出 **カマド:** 東壁中央に検出した。燃烧部側壁に礫を立てて構築されており、左側壁に5カ所、右側壁に2カ所に礫が残存した。これらの礫の中で屋内に張り出して据えられた2カ所は袖構築材と思われる、間には焚口部の天井石と見られる長さ45cmほどの椀形礫が落ちていた。カマド本体は壁外に設けられたカマドであり、残存深度が浅かったために煙道部の掘り込みまでは確認できなかった。側壁構築材などの位置から想定される主軸方位はE-3°-Nであり、南壁を基準として計測した住居主軸方位と大きな違いは見られない。 **遺物:** 土師器環(1)・埴(2)・羽釜(8・9)・銅形の羽釜(7)・小型の土釜(6)がカマド燃烧部から、

5の酸化焰焼成の須恵器台付鉢はカマド及び前面の床面から、4の須恵器埴は中央床面からそれぞれ出土した。
重複: 54号住居と重複しており、検出状況及び残存状況から54号住居→43号住居と考えられる。 **所見:** 掘り込みが浅かったものか、XII層土で遺構確認を行った時点で、かろうじて住居の輪郭がわかる程度しか残存していなかった。しかし、東側の残存がわずかではあるが良好であったため、カマドは構築材を含めて検出することができた。床面はXII層土中に直接構築されており、わずかな凹凸が見られた。精査を行ったが柱穴、貯蔵穴の検出はなかった。遺物の項目では触れなかったが、カマド前面から出土した台付鉢(5)は、29号住居のカマド燃烧部から出土した破片が接合しており、両住居の廃絶時期が極めて近い時期であったことがわかる。 **時期:** 10世紀後半



第575図 43号住居・出土遺物

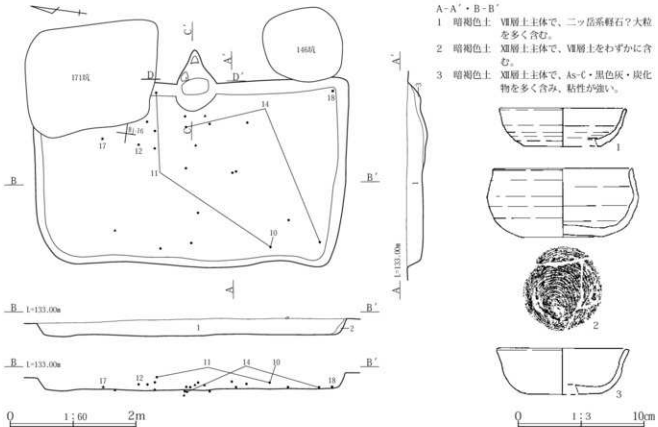


第576図 43号住居カマド

44号住居(第577～579図 P L.133・271)

位置：B1・Bj-15・16グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.92m×4.97m 残存深度：0.26m 主軸方位：E-4°-N 埋没土：Ⅶ層土が主体で、ニッ岳系軽石の

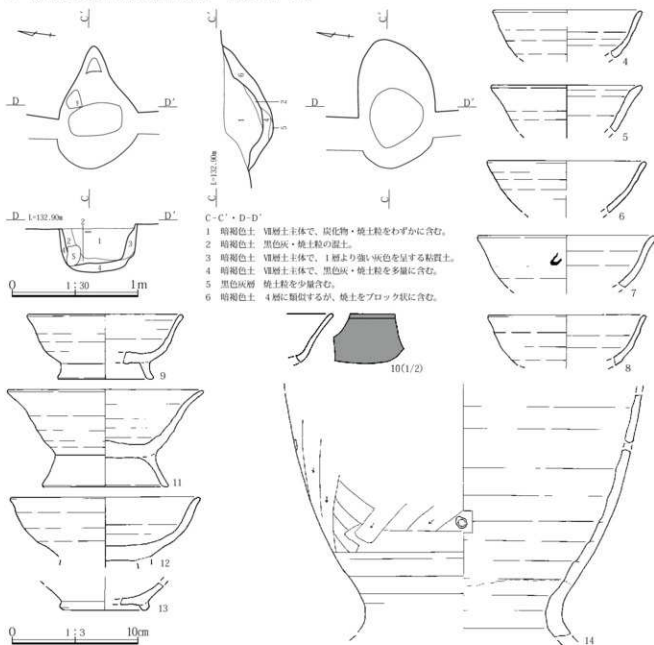
含有が目立つ。柱穴：未検出 カマド：東壁中央に設置されている。残存が不良であるが、煙道部の位置などから想定される主軸方位はE-8°-Nである。残存状態から勘案して燃焼部を壁外に置く形態であり、煙道部



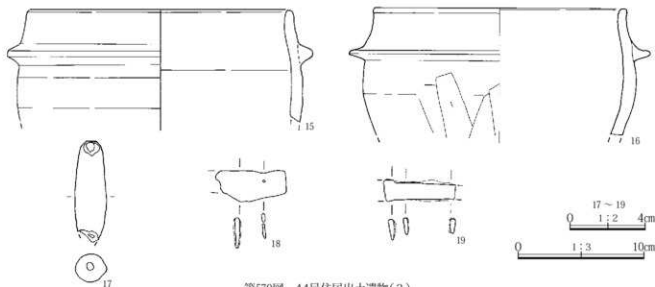
第577図 44号住居・出土遺物(1)

は燃焼部奥壁中央から急角度で壁外へと掘削されていたものと考えられる。左側壁に1カ所構築材の礫が残されており、本来は両側壁に礫が立てられていたものと思われる。燃焼部に明瞭な焼土の形成は見られないが、中央部に黒色灰層が残存していた。**遺物**：床面付近に散在するような出土状態を示しており、カマドからの出土が希薄である。酸化焙焼成の須恵器碗(12)は北寄りの床面から7cmほど上位から、足高台碗(11)はカマド北側の東壁際中位から、17の土鍾は北寄りの床面付近から、18の刀子と見られる鉄製品は南東コーナー部からそれぞれ出土している。また、10の緑軸陶器碗の破片は南西コーナー部付近の埋没土中から出土した。**重複**：45・47号

住居と重複しており、検出状況から45・47号住居→44号住居と考えられる。また、北東コーナー部は171号土坑との重複によって失われている。**所見**：刈層土で遺構確認を行っており、重複している45・47号住居と同時に確認された。該期の標準的な住居と比較して南北方向に長く、カマドを中央に設置したやや特異な形態をとる住居である。壁は171号土坑との重複で失われた北東コーナー部を除いて検出されたが、やや傾斜が緩い傾向がある。床面は刈層土中に構築されており、精査を行った結果、柱穴、貯蔵穴及び掘り方となるような掘り込みは検出されなかった。**時期**：10世紀後半



第578図 44号住居カマド・出土遺物(2)

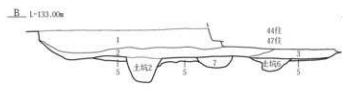
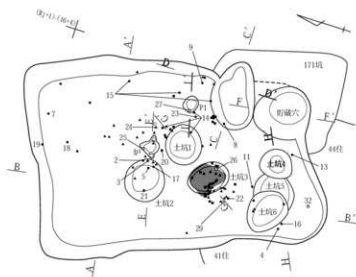


第579図 44号住居出土遺物(3)

45号住居(第580～583図 P.L.133～135・271・272)
位置:B1・Bj-15・16グリッド **形状:**不整圓丸長方形 **規模:**
 3.17m×4.55m **残存深度:**0.45m **主軸方位:**E-20°-N
埋没土:VII層土主体で、重複する47号住居の埋没土と
 比較して色調が明るい。 **柱穴:**未検出 **カマド:**東壁の
 南に偏った位置に設置されているが、47号住居及び171号
 土坑との重複によって上位が削平されており、左側壁構築
 材の礎が1カ所残存していただけで、他の部分は掘り方と
 見られる燃焼部の窪みだけが確認された。残存部分から想
 定される主軸方位はE-6°-Nであり、西壁を基準として
 計測した住居主軸方位よりも南に振れている。 **遺物:**
 住居中央の鍛冶炉周辺からは、炉壁、鉄塊系遺物(30)、椀
 形鍛冶滓(25～29)、不明滓(31)、轆の羽口(23・24)、鍛造
 剥片などの鍛冶関連遺物が集中し、須恵器埴(2～5)、灰
 軸陶器段皿(12)、羽釜(15・16)などが屋内全体に散在した。
 13の緑軸陶器境が南壁際から出土した他、22の曲がった棒
 状の鉄製品がカマド正面の土坑3の南側から出土したこ
 とが特筆される。 **重複:**44・47号住居と重複しており、
 出土状況及び出土遺物の比較から45号住居→47号住居→44号
 住居である可能性が高い。 **所見:**IX層土中で二ッ岳系軽
 石含有の土層範囲として捉えたが、北壁部分はIX層土中
 では捉えきれず、XI層土まで下げた時点で検出した。また、
 南壁については、南西コーナー部が張り出すような形
 状となりやや違和感があるが、44・47号住居との重複部分
 でもあり、捉えきれずに掘り過ぎた可能性がある。床面付
 近の鍛冶関連遺物の出土から、45号住居が鍛冶遺構である
 ことは調査途中で認識できたが、それを裏付けるように床

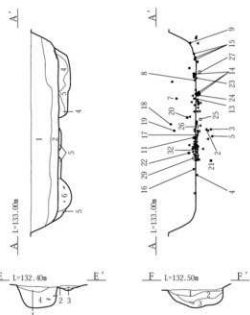
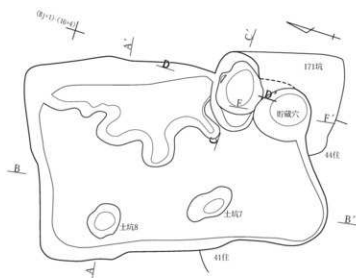
面中央から鍛冶炉と台石が検出された。炉は、周辺が焼土
 化した窪みとして検出されたもので、西寄りの中央部が青
 灰色に還元していた。また、平面形状特徴的で、基本形は
 円形であるが東西と北側の3カ所に小さな突出部が見られ
 る。還元部分の向かいにも見られることから轆の羽口を装
 着した場所である可能性があるが、痕跡を示すような炉壁
 が残存するわけではなく断定はできない。鍛冶炉のすぐ西
 側には台石の花崗岩が突った面を上にして検出され、被熱
 と衝撃によるものか表面がへずれた状態であり、剥離した礫
 片と鍛造剥片が周辺から出土している。炉の南側からは径
 0.60m、深さ0.12mほどの円形の掘り込み(土坑1)が検出
 されているが、作業坑とするには浅すぎるものであり、炉
 と台石が機能した段階では作業坑はなかったものと考えら
 れる。台石設置場所の下面から径0.65m、深さ0.35mの円
 形を呈する土坑2が検出されており、これが作業坑であっ
 たとする、炉の位置に変わりはしないものの、台石は別の
 場所に据えられていたものと考えられる。鉄滓は、炉周辺
 及びカマド前面からの出土はわずかで、炉の南西至近の位
 置に検出された楕円形を呈する炭化物集中部分から多く出
 土した。カマドのすぐ南側からは、径0.86m、深さ0.29m
 の円形を呈する貯蔵穴と見られる掘り込みが検出されてお
 り、この位置に南東コーナー部があったものと考えられる。
 床面精査の段階で確認できたために同時に調査を進めてし
 まったが、南西部に検出した土坑3～土坑6は、本来掘り
 方として掘り込まれたものであろう。また、掘り方調査と
 して精査した時点で、西側に土坑7・8を検出した。

時期:10世紀代



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、As-Cを多く、ニッ岳系軽石・XII層上ブロック・炭化物を少量含む、44号・47号住居より明るい色調を呈する。
- 2 暗褐色土 I層に類似するが、XII層上を多く含む。粘性がやや強い。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、炭化物・焼土ブロックをやや多く含む。
- 4 暗褐色土 VII層上と褐色土の混土で、As-C・ニッ岳系軽石を少量含む。
- 5 褐色土 VII層上ブロックをわずかに含む。
- 6 暗褐色土 VII層上主体で、As-C・ニッ岳系軽石・褐色土ブロックを少量含む。
- 7 暗褐色土 VII層上主体で、As-C・ニッ岳系軽石・褐色土ブロックを少量、炭化物をわずかに含む。



B-B'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、炭化物粒を少量含む。
 - 2 暗褐色土 VII層上主体で、炭化物粒・焼土粒を含む。
 - 3 黒褐色土 炭化物を主体とする。
 - 4 黄褐色土 XI層上主体で、As-C・炭化物を少量含む。
- F-F'
- 1 暗褐色土 VII層上主体で、As-C・炭化物を多く、ニッ岳系軽石・焼土ブロックを少量含む、硬く粘性・しまりが強い。
 - 2 暗褐色土 VII層上主体で、As-Cをやや多く、ニッ岳系軽石・炭化物・焼土ブロックをわずかに含む。粘性が強く柔らかい。
 - 3 暗褐色土 暗褐色粘土とXII層上の混土で、VII層上ブロック・炭化物をわずかに含む、やや硬くしまりが強い。



G-G'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、炭化物を多量に含む。
- 2 茶褐色土 XII層上に近似する土が主体で、鍛造割片を多く、鉄滓小塊を少量含む。



H-H'

- 1 暗褐色土 XII層上主体で、As-Cをわずかに含む。
- 2 暗褐色土 XI層上主体で、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含む。粘性が強い。
- 3 暗褐色土 XI層上主体で、As-C・黒色灰・炭化物を多く含む。
- 4 暗褐色土 XII層上主体で、炭化物粒を多く含む。



I-I'

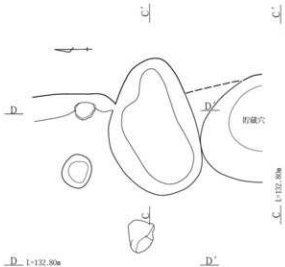
- 1 暗褐色土 VII層上主体で、炭化物(厚さ3mmほど)を含み、粘性が強く柔らかい。
- 2 暗褐色土 VII層上主体で、炭化物・焼土ブロックを少量含む、粘性が強く柔らかい。
- 3 暗褐色土 VII層上主体で、炭化物・焼土ブロックを多く含む、粘性が強く柔らかい。
- 4 暗褐色土 VII層上主体で、炭化物をわずかに含む。

第580図 45号住居

第13表 45号住居 土坑計測表

番号	規模	深さ	形状
土坑1	0.60	0.12	円形
土坑2	0.65	0.35	円形
土坑3	0.67×0.47	0.35	楕円形
土坑4	0.46	0.18	円形
土坑5	0.64	0.09	円形
土坑6	0.73×0.60	0.20	楕円形
土坑7	0.78×0.40	0.14	不整楕円形
土坑8	0.56	0.15	不整円形

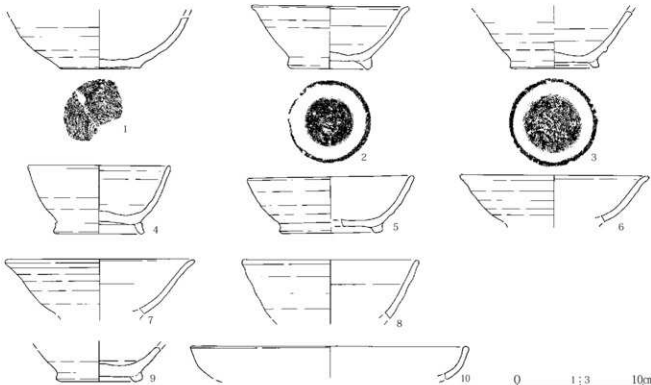
土坑2・竈治炉



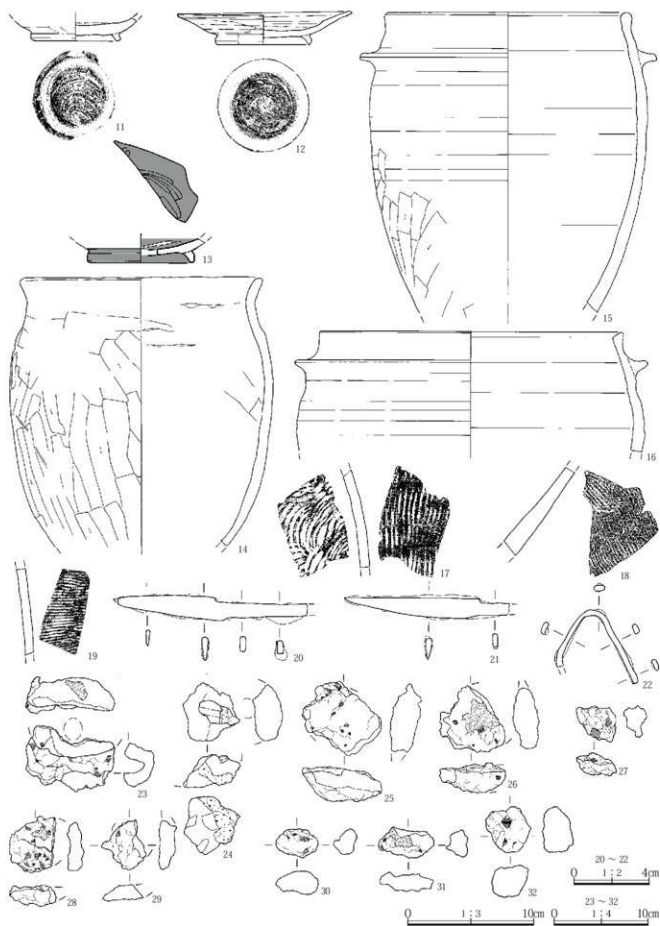
C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 Ⅴ層土主体で、As-C・ニッ层系軽石を少量、炭化物・焼上ブロックをわずかに含む。
- 2 黒色灰層 炭化物を多量に、黒色灰層(厚さ2～3mm)を2層含む。硬く粘性・しまりが強い。
- 3 黒色土 黒色灰・炭化物を多量に、褐色土ブロック・焼上ブロックをわずかに含む。
- 4 暗褐色土 黒色灰・炭化物・褐色土ブロック・焼上ブロックをやや多く含む。
- 5 暗褐色土 Ⅴ層土主体で、As-C・ニッ层系軽石をやや多く、炭化物・焼上ブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土 炭化物・褐色粘質土ブロック・焼上ブロックを多く含む。粘性が強く柔らかい。
- 7 暗褐色土 Ⅴ層土主体で、As-C・ニッ层系軽石を多く、炭化物を少量含む。
- 8 赤褐色焼土 焼土主体で、黒色灰を多く、炭化物をわずかに含む。
- 9 暗褐色土 Ⅴ層土主体で、Ⅹ層土ブロックをわずかに含む。

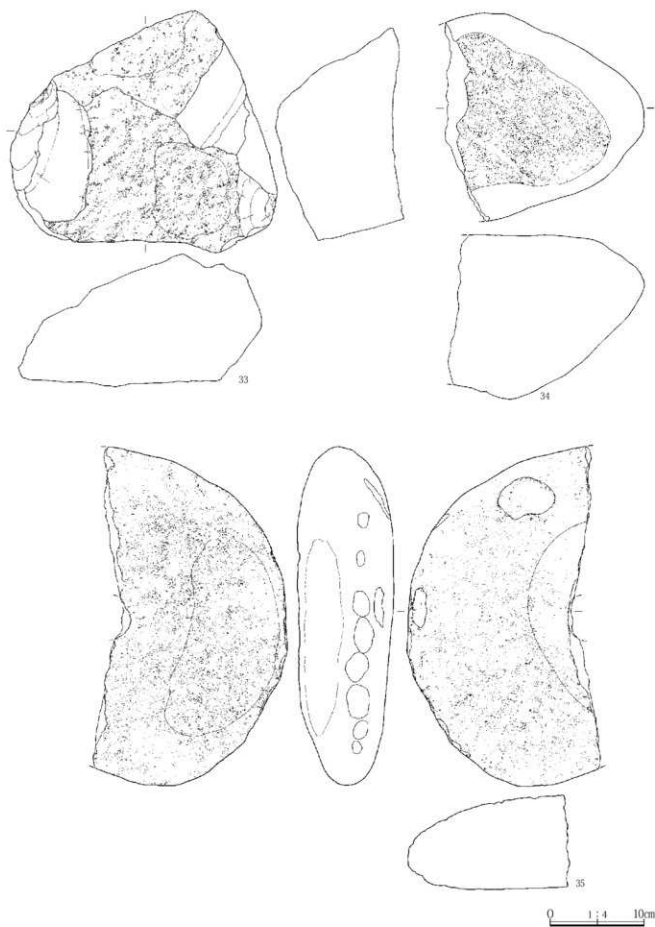
0 1:30 1m



第581図 45号住居カマド・出土遺物(1)



第582図 45号住居出土遺物(2)



第583図 45号住居出土遺物(3)

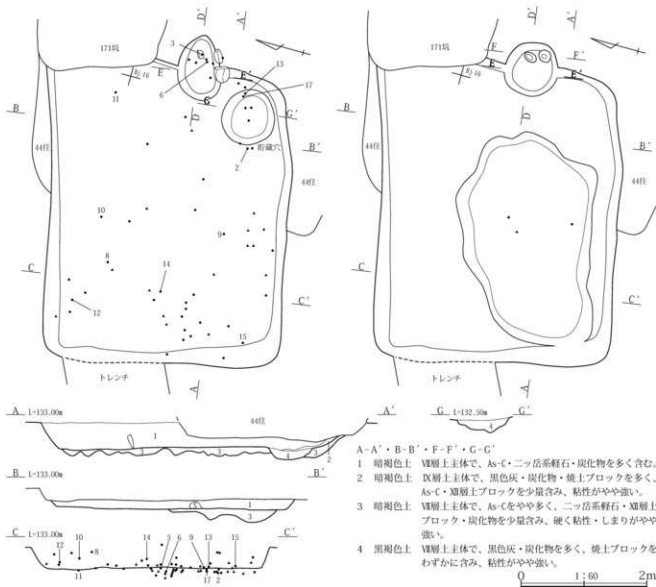
47号住居(第584～586図 P.L.135・136・272)

位置: B1・Bj-15・16グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 4.72m×3.79m 残存深度: 0.40m 主軸方位: E-15°-N

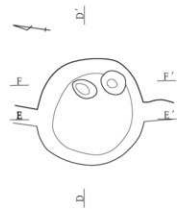
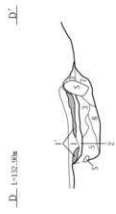
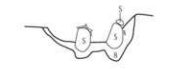
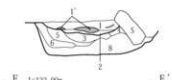
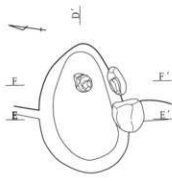
埋没土: 炭化物和灰を多く含むⅦ層土主体。

柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央の南寄り位置に設置されていた。44号住居との重複によって上部が削平されていたが、右袖部及び側壁の構築材が残存していた。側壁の構築材は設置された状態を保っていたが、右袖部の構築材は内側に倒れた状態で検出された。また、燃焼部の奥壁寄り中央には、支脚として礫が立てられており、支脚上部に3の酸化焙焼成の須恵器碗が伏せた状態で出土しており、支脚の一部として機能したのと考えられる。カマド平面形は、釣鐘状を呈するものと思われ、想定される主軸方位はE-11°-Nである。 遺物: カマドから

貯蔵穴周辺及び、西寄りにやや顕著な遺物出土が見られた。掲載はしなかったが、灰釉陶器の破片が多く出土している。 重複: 44・45・54号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物の時期から、45・54号住居→47号住居→44号住居と考えられる。 所見: 東寄りで44号住居と重複しているが、掘り込みが比較的深かったために、171号土坑によって削平された北東コーナー部以外は全周壁を検出することができた。床面は埋没土と類似する土を平坦に埋めて構築されており、比較的硬く締まっている。南東コーナー部には、径0.85m、深さ0.18mの円形を呈する貯蔵穴が掘削されていた。掘り方は全体に及んでおり、特に南西コーナー部からカマド前面にかけて3.50×2.10mの不整楕円形の範囲がやや深くなっていた。 時期: 10世紀後半

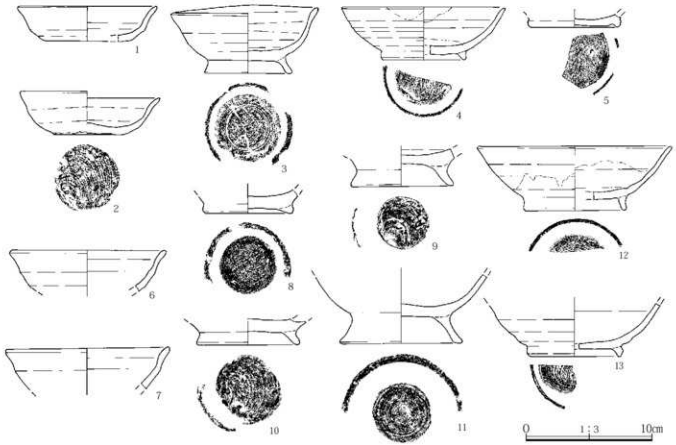


第584図 47号住居

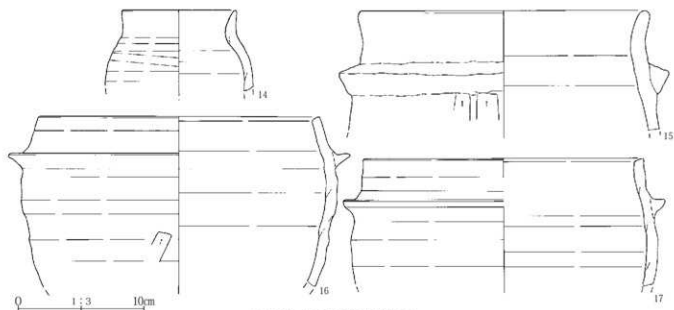


- C-C' ~ F-F'
- 1 暗褐色土 Ⅴ層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物・焼土ブロックをわずかに含む。
 - 1' 赤褐色焼土 1層が焼土化したもので、焼土ブロックが目立つ。
 - 2 黒色灰層 炭化物を多く、焼土ブロックを少量含む。
 - 3 暗褐色土 黒色灰・焼土ブロックを多く含み、粘性がやや強く柔らかい。
 - 4 暗褐色土 Ⅴ層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物をわずかに、褐色粘質土ブロックを少量含む。
 - 5 暗褐色土 Ⅴ層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石・焼土ブロックを少量含み、粘性・しまりが強い。
 - 6 暗褐色土 5層に類似するが、焼土ブロックをわずかに含む。
 - 7 暗褐色土 Ⅴ層土主体で、炭化物・焼土ブロックをやや多く、As-C・ニッ岳系軽石・Ⅹ層土ブロックをわずかに含む。
 - 8 褐色土 Ⅹ層土主体で、暗褐色土ブロック・焼土ブロックをわずかに含む。

0 1:30 1m



第585図 47号住居カマド・出土遺物(1)

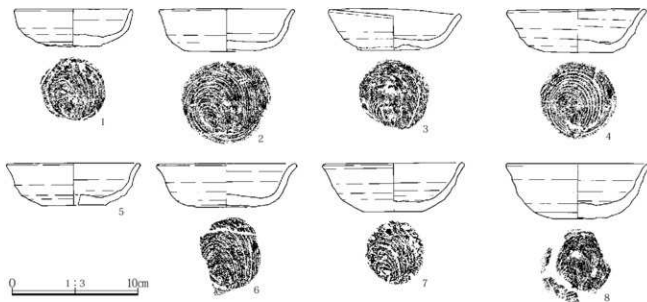


第586図 47号住居出土遺物(2)

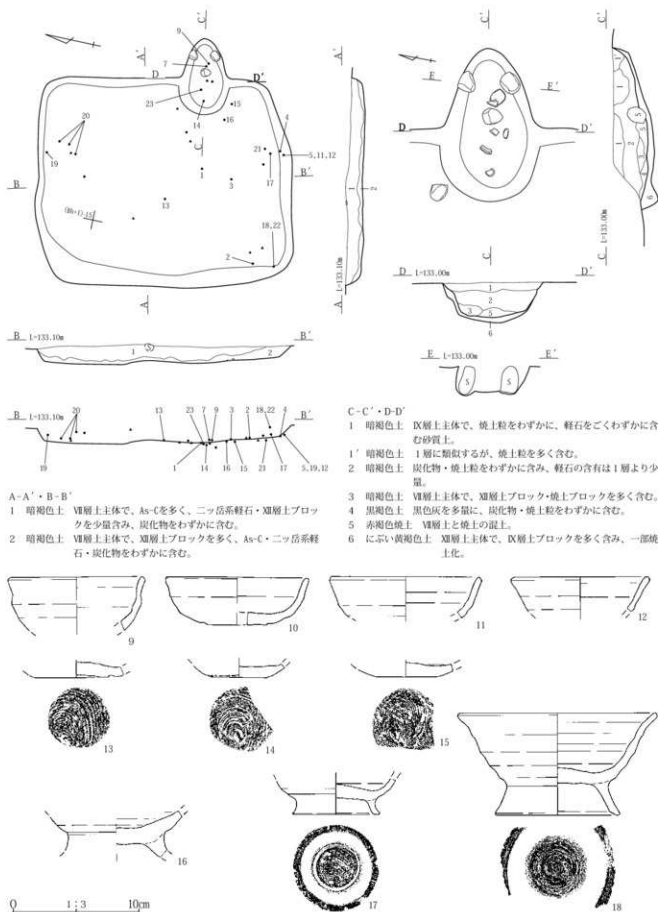
48号住居(第587～589図 P.L.136・137・272)

位置：Bg・Bh-14・15グリッド 形状：隅丸長方形 規模：3.33m×4.03m 残存深度：0.25m 主軸方位：E-11°-N 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁の南寄りに偏った位置に検出した。カマド本体を壁外に設けたカマドであり、主軸方位はE-11°-Nで、住居主軸方位と一致している。屋内側に設けられた焚口から、壁外に主体をもつ燃焼部は浅い窪み状に掘り込まれ、奥壁の両側に竪が1カ所ずつ立てられていた。この竪は、位置的に見て燃焼部から煙道部への境であろうと思われる。燃焼部中央には支脚の竪が1点据えられており、この前面には比較的厚く焼土が形成されていた。

掘り方では、左袖部に当たる位置にビット状の掘り込みが検出されており、右袖部には見られなかったものの本来は袖部にも構築材が置かれていた可能性が高い。遺物：酸化焰焼成の須恵器環の出土が目立っており、1～5は住居中央から南寄りの位置から出土した。また、黒色土器壺(19)と灰軸陶器壺(20)は北壁際から出土した。重複：54号住居と重複しているが、検出状況及び出土遺物から54号住居→48号住居である。所見：Ⅸ層土中で平面確認を行い、壁は全周明瞭に検出することができた。床面はⅩ層土中に平坦に構築されており、掘り方は行われていない。床面精査の時点でも貯蔵穴その他の掘り込みはまったく検出されなかった。 時期：10世紀後半



第587図 48号住居出土遺物(1)



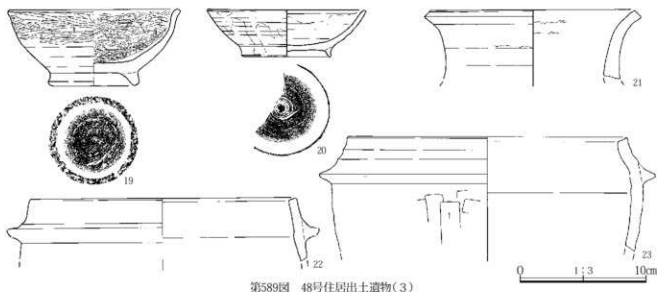
A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、As-Cを多く、ニッ岳系軽石・刈層上ブロックを少量含み、炭化物をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 VII層上主体で、刈層上ブロックを多く、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物をわずかに含む。

C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 IX層上主体で、焼土粒をわずかに、軽石をごくわずかに含む砂質土。
- 1' 暗褐色土 1層に類似するが、焼土粒を多く含む。
- 2 暗褐色土 炭化物・焼土粒をわずかに含み、軽石の含有は1層より少量。
- 3 暗褐色土 VII層上主体で、刈層上ブロック・焼土ブロックを多く含む。
- 4 黒褐色土 黒色灰を多量に、炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 5 赤褐色焼土 VII層上と焼土の混土。
- 6 にぶい黄褐色土 刈層上主体で、IX層上ブロックを多く含み、一部焼土化。

第588図 48号住居・出土遺物(2)



第589図 48号住居出土遺物(3)

49号住居(第590図 P L.137)

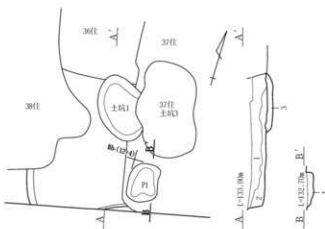
位置:Bg-12・13グリッド 形状:不明 規模:(1.52)m×(2.08)m 残存深度:0.26m 主軸方位:不明 埋没土:Ⅶ層土主体 柱穴:未検出 カマド:未検出 遺物:掲載可能な土器は埋没土中から出土した1点である。重複:36・37・38号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物の時期から36号住居→49号住居→37・38号住居と考えられる。所見:住居の密集部分と調査区境に挟まれた位置で検出したもので、全体像は判然としない。須恵器埴(1)と未掲載の土師器坏には时期的に齟齬があり、住居の所属時期は須恵器埴の時期を想定することができよう。床面は判然としないが、49号住居の掘り方に伴うと思われる土坑I(1.08×0.74m、深さ0.15m、楕円形)及びP1(0.62×0.48m、深さ0.10m、不整楕円形)を検出した。 時期:10世紀代



第590図 49号住居・出土遺物

52号住居(第591図 P L.137・273)

位置:Bg-12グリッド 形状:不明 規模:不明 残存深度:0.18m(土層断面で確認) 主軸方位:不明 埋没土:Ⅶ層土主体 柱穴:未検出 カマド:南東コーナー部に設置されたコーナーカマドと思われ、想定される主軸方位はS-36°-Eである。焼部底面だけが残存したものであり、全体の構造はわからない。カマド側面に



A-A'

- 1 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石・Ⅹ層土ブロック・炭化物・焼土ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅹ層土ブロックを多く、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物・焼土ブロックをわずかに含む。
- 3 褐色土 Ⅹ層土主体で、暗褐色粘質土ブロックを少量含む、柔らかい。

B-B'

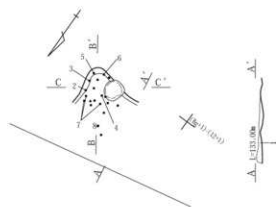
- 1 褐色土 Ⅹ層土主体で、Ⅶ層土ブロックを少量、炭化物・焼土ブロックをわずかに含む、柔らかい。

扁平な礫が出土しているが、構築材とは考えにくい。

遺物:掲載遺物の大半はカマド燃焼部から出土したものであり、酸化焰焼成された須恵器埴(1)・埴(3)・羽釜(6)・甕(7)などがある。重複:37・38・51号住居と重複しており、土層断面観察から51号住居→52号住居であることは確実であるが、37・38号住居との関係は検出状況からも判断できず、出土遺物の比較から37・38号住

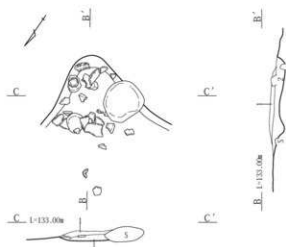
居→52号住居である可能性が高い。 所見：調査区域に位置しており、二次の調査を行った。当初の北側調査区では掘り込みが浅かったことから、遺構確認段階ですでに掘り過ぎてしまい、51号住居の調査時点で南側の土層断面で確認した。これを踏まえて南側調査区の調査では

Ⅹ層土の上から確認を行ったが、上面に酸化鉄の凝集する層があったため、やむを得ず確認面を下げたところカマド燃焼部だけが確認され、結果的に住居平面は南北ともに検出することはできなかった。 時期：10世紀後半



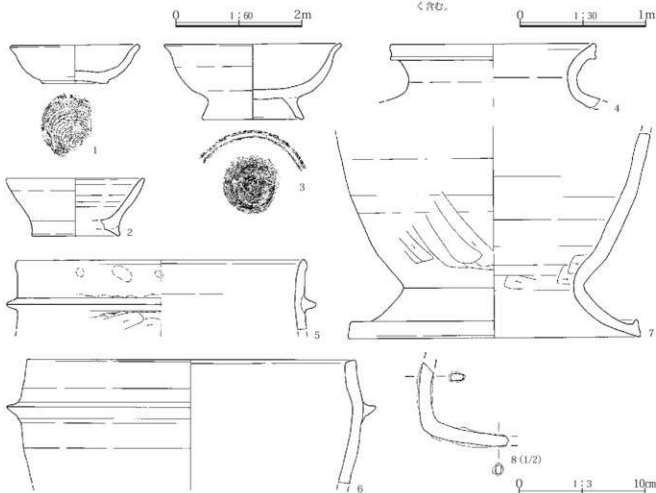
A-A'

1 暗褐色土 As-Cを多く含む埴層土で、下面に灰層を含む。



B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土 炭化物・焼土粒を含み、As-C・二ツ岳系軽石をわずかに含む。
2 黒褐色土 As-Cを多量に含む埴層土主体で、黒色灰・炭化物粒を多く含む。



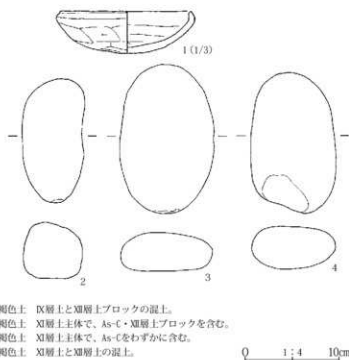
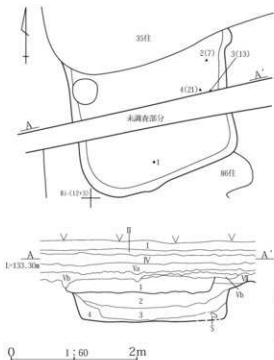
第591図 52号住居・出土遺物

53号住居(第592図 P.L.137・273)

位置: Bh・Bi-12・13グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: 2.55m×(2.34)m 残存深度: 0.50m 主軸方位: E-22°-N 埋没土: As-Cをわずかに含むXI層土主体で、二ッ岳系軽石の含有は確認できない。柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 南壁際の床面から15cmほど上位から1の土師器片が出土した。北側部分では土器の出土はなく礫(2~4)が出土した。重複: 35・86号住居と重複しており、検出状況と出土遺物の比較から53号住居→35号住居→86号住居と考えられる。所見: 調査区境に位置しており、北側調査において53号住居とした遺構に、南側調査時に86号住居の床面で平面を確認し、埋没土の状況から3面の遺構と考え123号住居と新たな遺構名称を付してしまっただけ。しかし、整理段階で123号住居は2面の遺構であり、北側で確認していた53号住居と同一遺構であることが確実となったため、123号住居を欠

番として53号住居に統一した。86号住と53号住居の埋没土が識別できなかったため、土層断面では53号住居が新しい遺構であるかのような分層となってしまった。しかし、これは南側調査区での調査状況では、86号住居の床面精査段階で53号住居の平面形が認識できたので、新旧関係は前述のとおりである。したがって、53号住居の土層断面として提示した土層のうちで2層とした土層は86号住居の埋没土と見るべきであろう。53号住居床面はXI層土中に平坦に構築されており、掘り方は見られない。カマドが設置されていてよい時期の住居であるが、検出部分においては痕跡も見られない。南北調査区の間に来調査部分がわずかに見られるが、この間にカマドが入るとは思われないので、北寄りに設置されていたものが、35号住居との重複によって失われたものと思われる。

時期: 7世紀後半

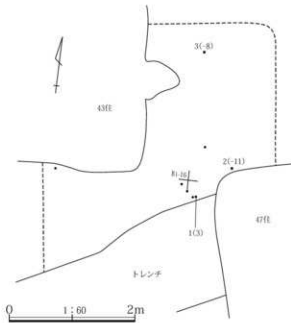


第592図 53号住居・出土遺物

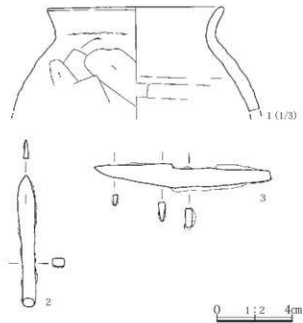
54号住居(第593図 P.L.138・273)

位置: Bh・Bi-15・16グリッド 形状: 不明 規模: 不明 残存深度: 0m 主軸方位: 不明 埋没土: 不明 柱穴: 未検出 カマド: 未検出 遺物: 住居中央と思われる床面から1の土師器片が、北寄りから刀子(3)、及び鉄鏃(2)と見られる鉄製品が出土した。重複: 43・47号住居と重複しており、検出状況から54号住居→43・

47号住居と思われる。所見: 54号住居の周辺はIX層土中で遺構確認を行ったが、この時点ですでに掘り込みは失われており、床面付近がろうじて残存していた。したがって住居範囲も捉えることができなかった。カマドが設置されていたはずであるが、47号住居との重複によって削平されたものか、焼土等の痕跡も検出することができなかった。時期: 7世紀代



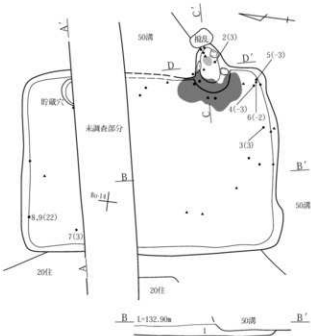
第593図 54号住居・出土遺物



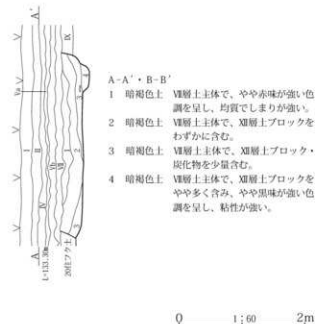
55号住居(第594・595図 P.L.138・273)

位置: Bn・Bo-13・14グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.89m×4.06m 残存深度: 0.34m 主軸方位: E-7°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南東コーナー部近くに設置されていた。燃烧部は壁外に設けられており、焚口部は床面から燃烧部に向かってわずかに掘り窪められている。左側壁に1カ所構築材の礫が立てられた状態で残存していたことから、燃烧部から出土している礫は本来構築材として使用され

ていたものである可能性が高い。カマド平面形は釣鐘状を呈し、想定される主軸方位はE-13°-Nである。燃烧部中央には焼土が形成されており、焚口部より屋内側に黒色灰面が広がっていた。遺物: 遺物出土は全体に希薄で、掲載した遺物の多くはカマド及びその周辺から出土したものである。特筆されるのは北西コーナー部近くの床面から20cmほど上位から鉄鍔2点(8・9)がまとめて出土したことである。重複: 20・77号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物の比較から20号住居



第594図 55号住居

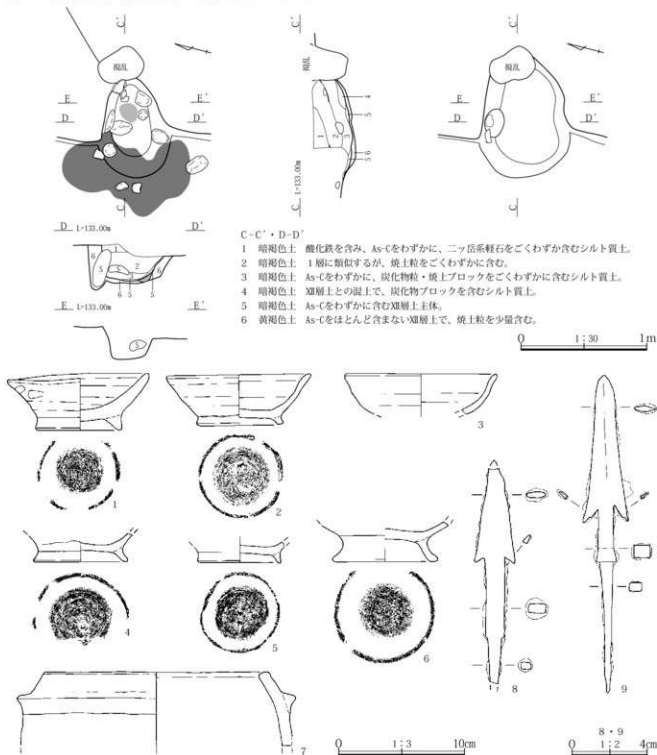


A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、やや赤味が強い色調を呈し、均質でしまりが強い。
- 2 暗褐色土 VII層土主体で、細粒土ブロックをわずかに含む。
- 3 暗褐色土 VII層土主体で、細粒土ブロック・炭化物を少量含む。
- 4 暗褐色土 VII層土主体で、細粒土ブロックをやや多く含む、やや赤味が強い色調を呈し、粘性强い。

→55号住居→77号住居と考えられる。所見：Ⅱ区とⅢ区の調査区境に位置しているため、二次の調査で全体を明らかにした。北側の調査では北寄り1/4ほどを調査し、北東及び北西コーナー部と北壁を比較的状态良く検出することができた。しかし、南側の調査においては、中世以降のものと考えられる50号溝との重複のため東壁が確認しにくく、結果的に掘り足りない部分が生じてしまい、

北側調査区の壁につながらなかった。また、南北調査区の間には工事との関係で幅0.8mほどの未調査部分が出てしまった。床面はⅡ層土中に平坦に構築されており、掘り方は行われていなかった。北側調査区で調査区際に検出した径0.43m、深さ0.12mの円形となると思われる掘り込みが貯蔵穴と考えられる。時期：10世紀後半

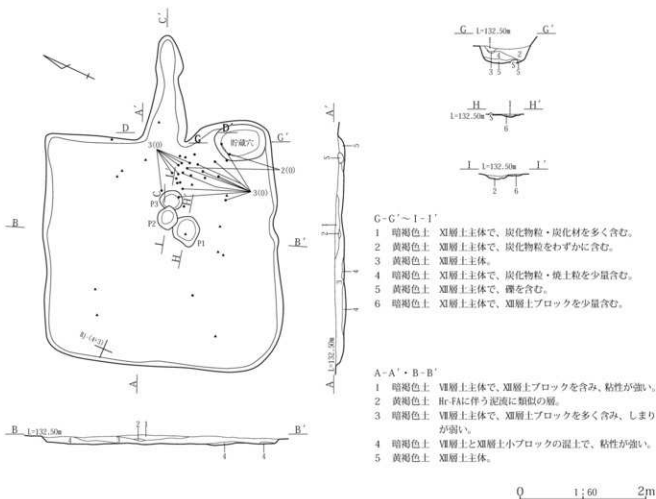


第595図 55号住居カマド・出土遺物

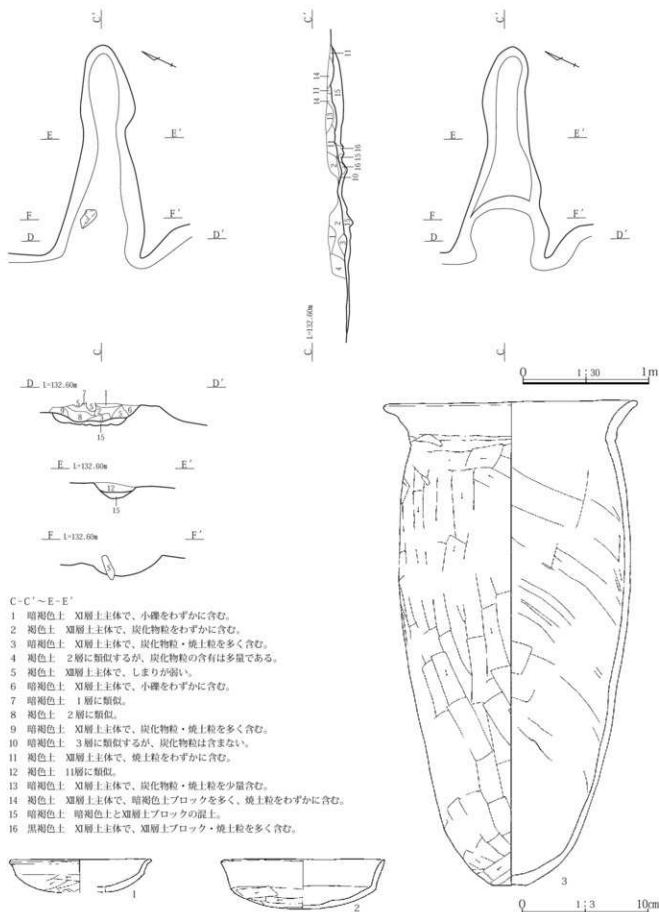
56号住居(第596・597図 P.L.138・139・273)

位置: B1～Bk-4グリッド 形状: 隅丸台形 規模: 3.45
 ～3.96m×3.68m 残存深度: 0.14m 主軸方位: E
 -25°-N 埋設土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマ
 ド: 東壁中央に設置されており、煙道を壁外に1.70mほ
 ど掘削していた。カマド本体の痕跡はまったく認められ
 なかったが、煙道部のあり方から屋内に燃焼部が置かれ
 ていたことは明らかである。掘り方調査においても構築
 材を据えるためのピット状の掘り込みなどは検出されて
 おらず、おそらく粘性のあるXI層土などを使用してカマ
 ド本体を構築していたものと思われる。燃焼部と思われ
 る位置や煙道部などには焼土粒の検出はあっても焼土化
 した部分は見られなかった。煙道部をもとに計測した主
 軸方位はE-24°-Nであり、北壁で計測した住居主軸
 方位と一致している。遺物: カマド前面に破片が集中
 しており、3の土師器類は貯蔵が内も含めてこれらの集
 中部分の破片が接合したものである。また、2の土師器

環も貯蔵穴内の破片とカマド前面出土破片が接合した。
 埋設土中として取り上げられた遺物の中に、灰釉陶器の
 破片が数点見られるが、2や3などの土師器とは時期的
 に齟齬があり、56号住居に伴う遺物とは考えられない。
 重複: 近い時期の遺構との重複はない。所見: XI層土
 中で遺構確認をしたために壁の残存は不良であり、かろ
 うじて住居範囲を捉えることができた。床面はXI層土を
 直接に床面としており、硬化面などの検出はなかった。
 カマド正面にP1(径0.42m、深さ0.02m、不整形形)、
 P2(径0.32m、深さ0.10m、不整形形)、P3(径0.33m、
 深さ0.05m、円形)が検出されているが、掘り方とする
 にはあまりに小規模であり、施設の一部であるのか判断
 ができなかった。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出され、
 0.77×0.58m、深さ0.27mの楕円形を呈し、炭化物粒を
 わずかに含むXI層土主体の上で埋没していた。時期:
 7世紀後半



第596図 56号住居



C-C'～E-E'

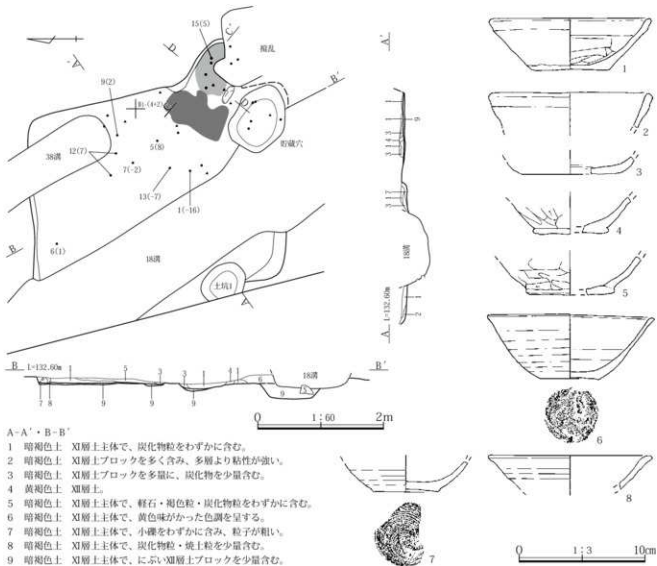
- 1 暗褐色土 XI層上主体で、小礫をわずかに含む。
- 2 褐色土 XII層上主体で、炭化物粒をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 XI層上主体で、炭化物粒・焼土粒を多く含む。
- 4 褐色土 2層に類似するが、炭化物粒の含有は多量である。
- 5 褐色土 XII層上主体で、しまりが弱い。
- 6 暗褐色土 XI層上主体で、小礫をわずかに含む。
- 7 暗褐色土 1層に類似。
- 8 褐色土 2層に類似。
- 9 暗褐色土 XI層上主体で、炭化物粒・焼土粒を多く含む。
- 10 暗褐色土 3層に類似するが、炭化物粒は含まない。
- 11 褐色土 XII層上主体で、焼土粒をわずかに含む。
- 12 褐色土 11層に類似。
- 13 暗褐色土 XI層上主体で、炭化物粒・焼土粒を少量含む。
- 14 褐色土 XII層上主体で、暗褐色土ブロックを多く、焼土粒をわずかに含む。
- 15 暗褐色土 暗褐色土とXII層上ブロックの混土。
- 16 黒褐色土 XI層上主体で、XII層上ブロック・焼土粒を多く含む。

第597図 56号住居カマド・出土遺物

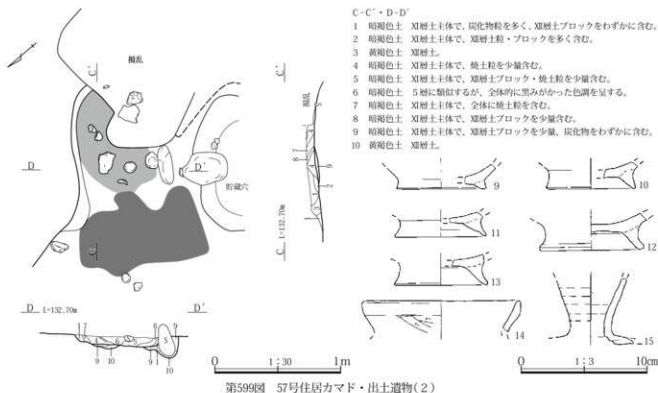
57号住居(第598・599図 P.L.139・273)

位置: Bh・B1-3・4グリッド 形状: 隅丸長方形?
 規模: (3.07)m×3.99m 残存深度: 0.11m 主軸方位:
 E-3°-N 埋没上: 炭化物粒を含むXII層土主体。
 柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに偏った位置に検
 出した。南側は攪乱されており、残存状況は不良であ
 る。残存部から想定される主軸方位はE-5°-Sであ
 り、北壁で計測した住居主軸方位よりもやや南に振れ
 ている。焼土の状況から燃焼部が壁外に設けられたカマ
 ドと見られるが、構築材は右袖部と見られる礫が1カ所検
 出されただけであるが、左袖部にも礫が立てられていた
 ものと考えられる。燃焼部底面の焼土形成は比較的顕著
 であり、焚口部から左手方向の床面に灰面が形成されて
 いた。遺物: カマドから北東コーナー部付近までの床
 面近くから出土したものが大半で、6の須恵器環は、北

壁際の西寄りの位置から出土した。また、埋没土中から
 灰釉陶器境の破片、鞆の羽口が1点出土した。重複:
 後世の18・38号溝との重複によって床面及び壁が削平さ
 れている。所見: 泥流復旧痕がXII層土まで及んでいた
 場所であるため、遺構確認面が深く、また18・38号溝な
 どによる削平も受けているため、相対的に遺構の残存状
 況は悪かった。床面はカマド焚口部に検出された灰面及
 び遺物出土面として捉えたものであるが、微妙な凹凸が
 見られた。カマド南側の南東コーナー部に当たる位置に、
 1.06×0.80m、深さ0.22mの不整楕円形を呈する貯蔵穴
 を検出した。貯蔵穴内にはカマド構築材になると思われ
 る礫が出土した。南西コーナー部近くから土坑1(0.74
 ×0.58)m、深さ0.29m、楕円形)を検出したが、壁よ
 りも西に張り出してしまい住居に伴うものでない可能性
 が高い。時期: 10世紀前半



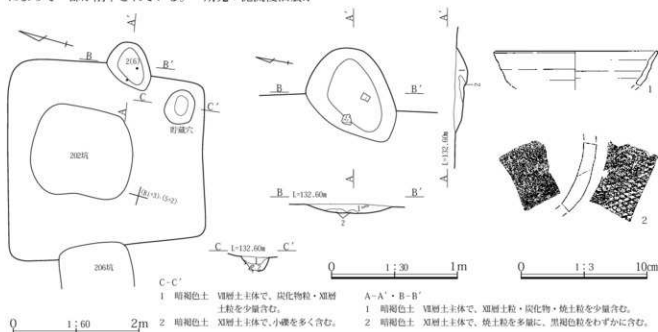
第598図 57号住居・出土遺物(1)



58号住居(第600図 P.L.139)

位置: Bi · Bj-5 グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0m 主軸方位: 不明 埋没土: VII層土主体
 と思われる。柱穴: 未検出 カマド: 東壁と考えられる。燃焼部底面の一部が残存したものであり、構築材や焼土、灰面などの残存もなかった。遺物: カマド燃焼部からわずかに出土した。重複: 墓坑(202・206号土坑)によって一部が削平されている。所見: 泥流復旧痕が

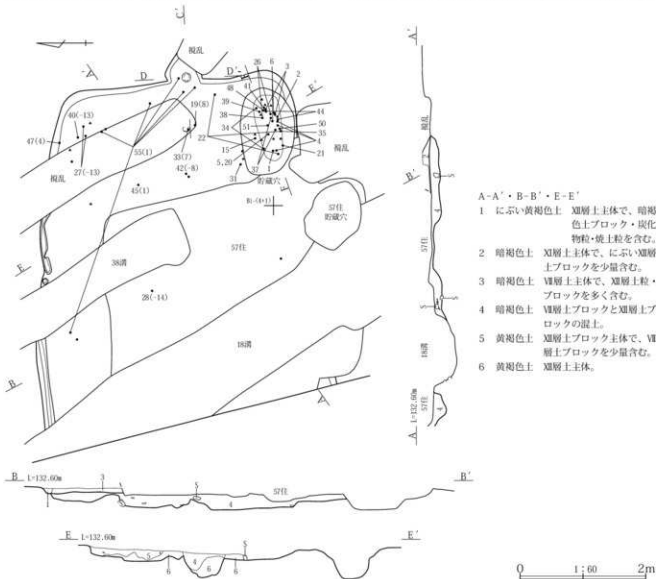
XII層土まで及んでいた場所にカマドの一部と貯蔵穴と見られる掘り込みが検出されたことで、住居の存在を認識したものである。検出時点で壁、床面はまったく認識することができなかった。貯蔵穴と見られる0.56×0.45m、深さ0.22mの楕円形の掘り込みが検出された位置が南東コーナー部に当たるものと考えられるが、住居規模などはわからない。時期: 9世紀代



59号住居(第601～605図 P.L.139・140・273・274)

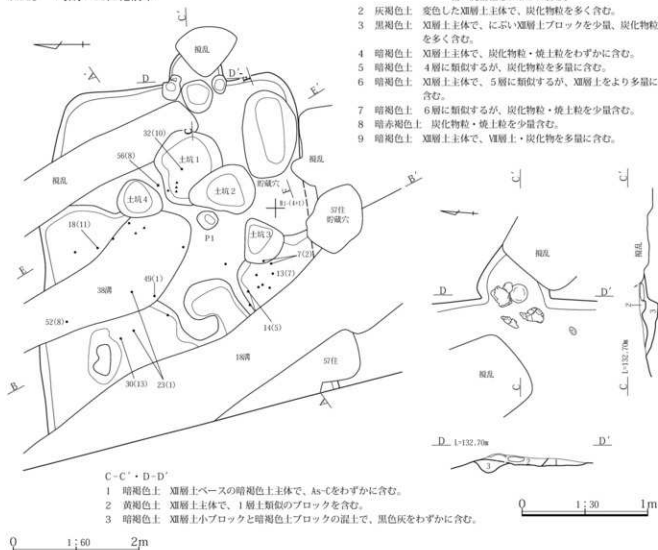
位置: Bb・Bi-4 グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: (5.42)m×4.66m 残存深度: 0.08m 主軸方位: E-4°-N 埋没土: XI層土粒とブロックを多量に含むVII層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 東壁のほぼ中央に検出されたが、東側が攪乱されているため焚口から燃焼部西寄りの部分だけが調査された。燃焼部には焼土、灰層の形成はなく、構築材も残存していなかったが、掘り方調査において、袖に当たる部分に円形を呈するピット状の浅い掘り込みが検出されており、本来は構築材が置かれていた可能性がある。残存部分から想定される主軸方位はE-5°-Nであり、東壁で計測した住居主軸方位とほぼ一致している。遺物: 土師器杯(1～6)、須恵器碗(37～39)、灰軸陶器埴(44)、緑軸陶器埴の破片(48・50・51)などが、南東コーナー部に掘削された大

形の貯蔵穴内から出土した。また、55の羽釜はカマド燃焼部及び北東コーナー部近くの床面から出土した破片が接合したものである。特筆されるのは、北寄りの床面から出土した45の灰軸陶器埴の大形破片に82号住居カマド出土及び98号住居埋没土中から出土した破片が接合したことである。重複: 西側で57号住居と重複しており、検出状況から59号住居→57号住居と考えられる。所見: XI層土まで確認面を下げた時点で検出したもので、57号住居との重複ばかりでなく18・38号溝による削平を受けているため、南壁は南東コーナー部だけが検出されたもので大半は判然としなかった。検出された部分で見ても東西に長い平面形をしているが、西側が現道下にかかっており東西方向にさらにどの程度延びるのか不明である。北壁の東側部分は幅0.15mほどの壁溝状に検出されたものであるが、東壁や南壁には認められず全体に廻っ

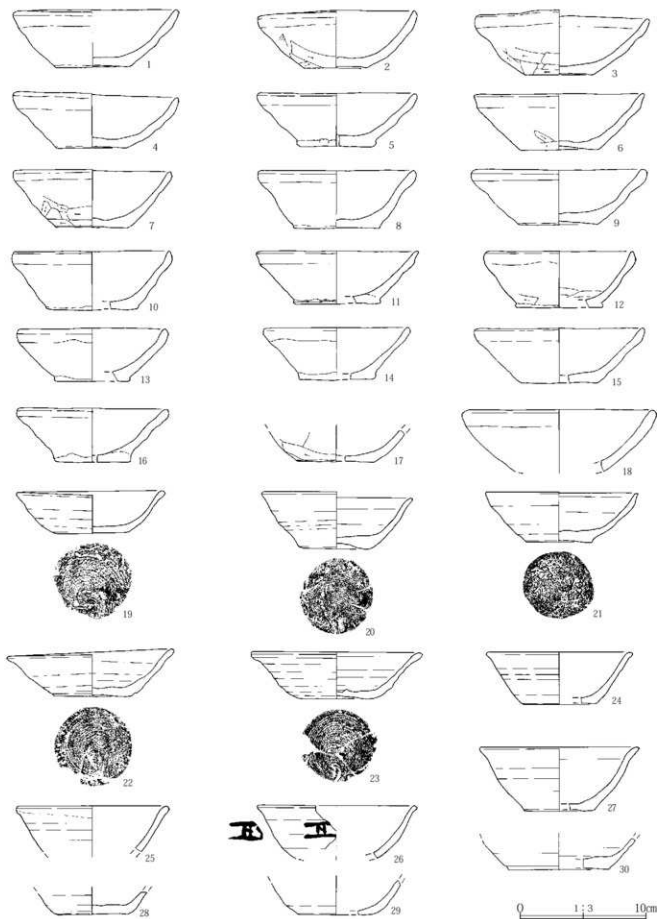


第601図 59号住居

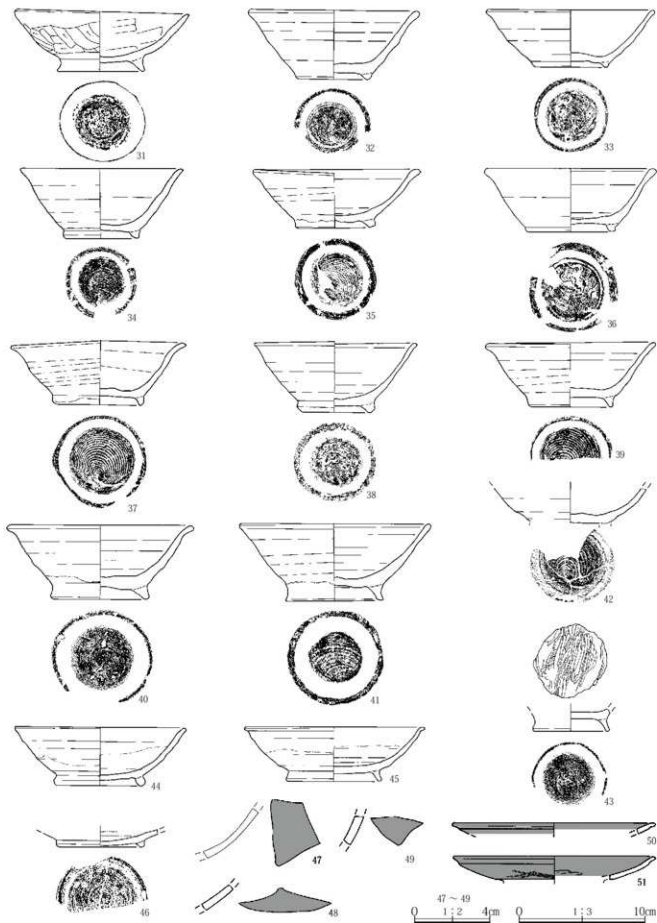
ていたものとは考えられない。南東コーナー部には1.37×0.86m、深さ0.38mの東西に長軸を有する楕円形の貯蔵穴が掘削されており、底部から中層にかけて多量の遺物が出土した。この貯蔵穴は、当該時期の住居に掘削されている貯蔵穴としては規模が大きく、掘り方もしっかりしており、遺跡内では例がないほどの土器が出土している。破片とはいえず、貯蔵穴内から3点の緑軸陶器が出土し、北東コーナー部と中央部から出土した2点を加えると5点の出土というも異例である。掘り方は西側がやや深く掘削されており、東側ではカマド前面には土坑1(径1.10m、深さ0.15m、不整形円形)が検出され、内部から礫が出土した。他に土坑2(1.05×0.79m、深さ0.38m、不整形楕円形)、土坑3(0.75×0.70m、深さ0.37m、不整形)、土坑4(0.72×0.58m、深さ0.46m、不整形楕円形)、P1(径0.29m、深さ0.32m、不整形円形)が検出された。 時期：10世紀前半



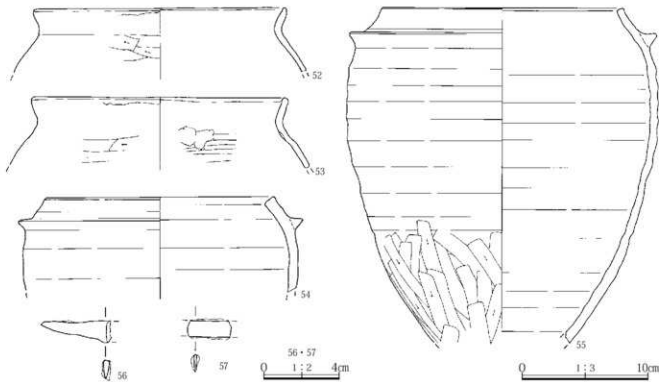
第602図 59号住居掘り方・カマド・貯蔵穴



第603図 59号住居出土遺物(1)



第604図 59号住居出土遺物(2)

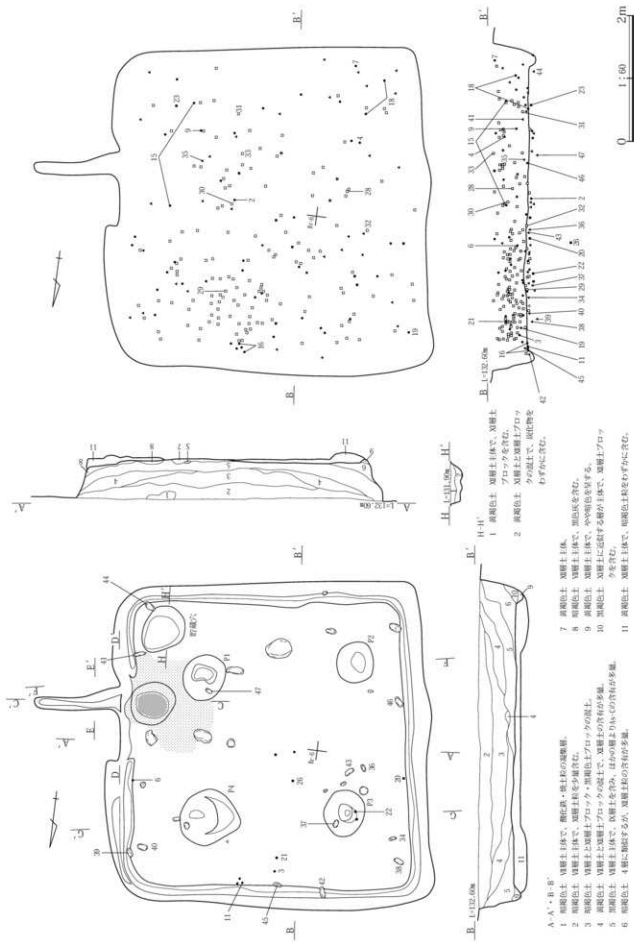


第605図 59号住居出土遺物(3)

60号住居(第606～609図 P L.140・141・274)

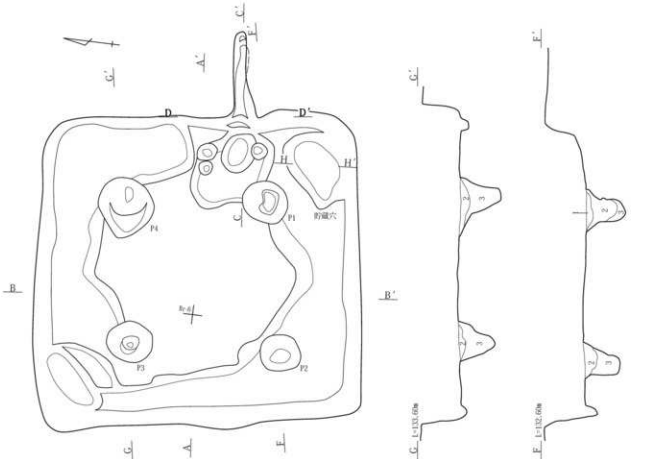
位置：Bq・Br-5・6グリッド 形状：隅丸方形 規模：4.90m×5.18m 残存深度：0.59m 主軸方位：E-9°-N 埋没土：Ⅶ層土主体の層。柱穴：P1(径0.71m、深さ0.71m、円形)、P2(径0.62m、深さ0.64m、円形)、P3(径0.63m、深さ0.62m、円形)、P4(径0.80m、深さ0.69m、不整円形)の4ヵ所検出し、P1-P2間2.43m、P3-P4間2.40m、P4-P1間2.25m、P2-P3間2.40mであり、P4だけが柱抜き取りのためか西側にテラス状の中段が見られる。カマド：東壁の南寄りに偏った位置に検出した。壁外に1.35mほど煙道だけを掘削しており、側壁の一部が焼土化していた。屋内側に袖部などの痕跡は見られなかったが、壁に接するように径0.65mの浅い窪みがあり、その中央部が焼土化していたことから、この位置に燃焼部があったことがわかる。掘り方においてこの燃焼部の側からピット状の浅い掘り込みを3ヵ所検出したが、礎などの構築材を据えるほどの深さはなく、また、屋内からも構築材となり得るような礎は検出されていないことから、礎を構築材としたカマドである可能性は低い。しかし、近い時期の17号住居では長胴甕を構築材としている例などもあり、カマド本体が住居廃絶時に片づけられている可能性が高い

ことから、本来は何らかの構築材が使われていたものと思われる。煙道部をもとに計測した主軸方位はE-7°-Nであり、南壁で計測した住居主軸方位とはほぼ一致している。遺物：埋没土中から多量の遺物出土があり、その中には椀形鍛冶滓6点(28～33)、鞆の羽口1点(27)などの他、17の土師器甕のように9世紀代の遺物も混じっている。しかし、床面近くから出土した土師器環(2～4)などは7世紀代の様相を呈しており、同様に床面付近から出土した多数の棒状礎のあり方もこれを示唆している。また、北西寄りの床面からは鉄製品(20・22)も出土した。重複：66・69・72号住居と重複し、検出状況及び出土遺物の時期から66・69・72号住居-60号住居である。所見：Ⅸ層土中で遺構確認を行い、Ⅶ層土の範囲として明確に平面が捉えられた。壁の残存は良好で、特に南壁は直線的に掘削されていた。カマド部分を除いて上幅0.20m、深さ0.12mほどの壁溝が廻っていた。床面は平坦で、カマド周辺部に硬化面が検出された。貯蔵穴は南東コーナー部に検出され、0.80×0.65m、深さ0.24mの不整楕円形を呈していた。掘り方は全体に行われており、特に壁に沿ってわずかに深く掘削されていた。埋没土中から鞆の羽口や鉄滓が出土しているが、60号住居内で鍛冶作業が行われた痕跡はないことから、埋没過程



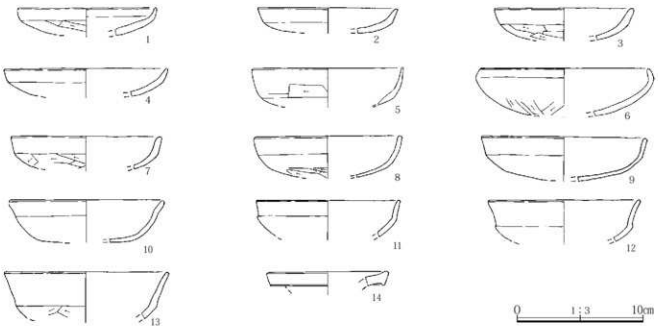
のなかで周辺から廃棄されたものであろう。南西側の低地部に羽口や鉄滓が廃棄されており、この廃棄が低地部西側の5号住居の掘治作業に伴って行われた可能性が高

いことから、一連の廃棄によってもたらされたものではないだろうか。 時期：7世紀後半

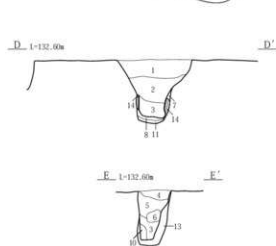
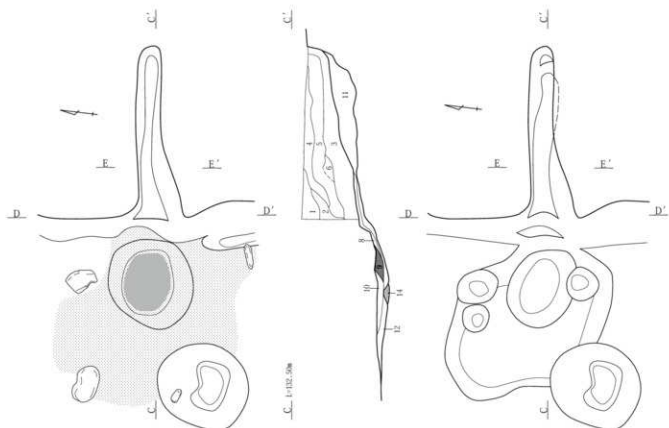


F-F'・G-G'

- 1 暗褐色土 Ⅴ層土主体で、Ⅷ層土ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 Ⅷ層土ベースの暗褐色土で、Ⅷ層土粒・ブロックを多量に含む。
- 3 黄褐色土 Ⅷ層土主体で、暗褐色土小ブロックをわずかに含む。



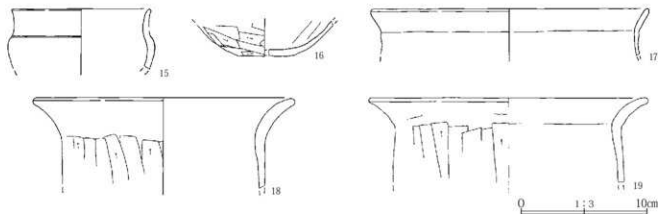
第607図 60号住居掘り方・出土遺物(1)



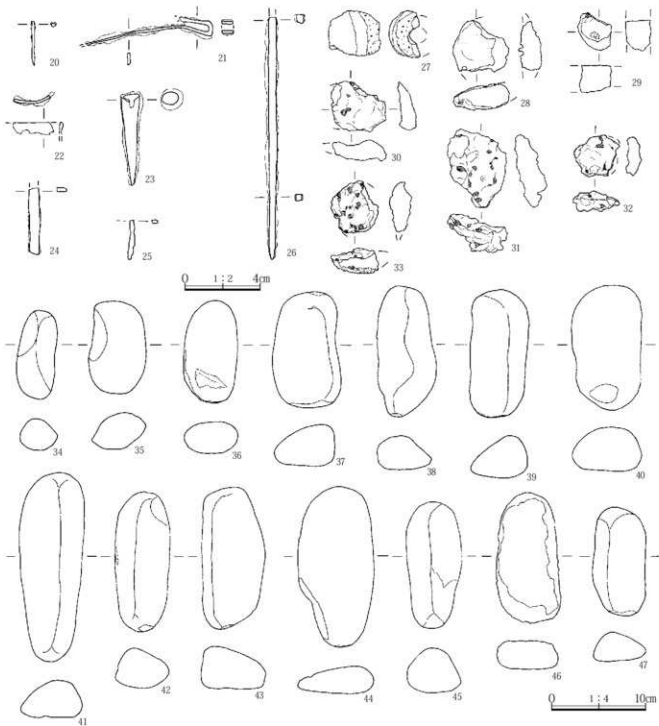
C-C' ~ E-E'

- 1 暗褐色土 VII層土主体。
- 2 暗褐色土 VII層土とX層土の混上。
- 3 黄褐色土 X層土主体で、VII層土ブロック・焼土粒を多く含む。
- 4 黄褐色土 X層土主体で、VII層土小ブロック・焼土粒をわずかに含む。
- 5 黄褐色土 VII層土とX層土ブロックの混上。
- 6 黄褐色土 X層土ブロック・焼土粒を少量含む。
- 7 黄褐色土 X層土主体で、暗褐色土粒を含む。
- 8 黄褐色土 X層土粒と暗褐色土粒の混上。
- 9 黒色灰層 焼土粒を多く含む。
- 10 暗褐色土 VII層土主体で、黒色灰・焼土粒を含む。
- 11 暗褐色土 X層土ブロックと暗褐色土の混上で、焼土粒を少量含む。
- 12 暗褐色土 暗褐色土とX層土ブロックの混上で、黒色灰を多量に含み、焼土粒を含む。
- 13 黄褐色土 X層土主体で、暗褐色土、焼土粒・ブロックを多く含む。
- 14 赤褐色焼土

0 1:60 2m



第608図 60号住居カマド・出土遺物(2)



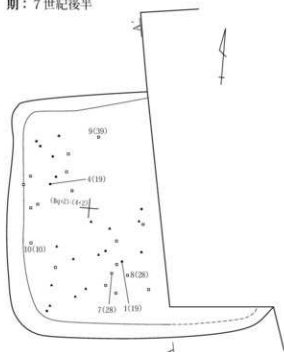
第609図 60号住居出土遺物(3)

61号住居(第610図 P L.141・274)

位置: Bq-3・4グリッド 形状: 隅丸方形? 規模: 3.90 m×(4.10)m 残存深度: 0.55m 主軸方位: E-9°-N 埋没土: 上層はⅧ層土主体であるが、下層はAs-Cを少量含むⅧ層土主体である。柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに設置されているものと考えられるが、看板基礎が未撤去であったため調査できなかった。遺物: 罌が床面付近から多く出土したが、土器はごく少

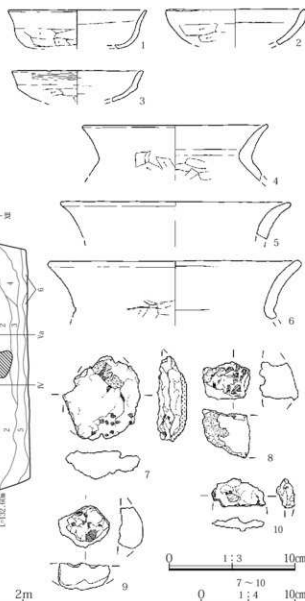
なく61号住居の遺物と見られるのは、土師器環(1)と罌(6)である。また、埋没土上層から7～10の椀形甕治澤が出土している。重複: 72号住居と重複している可能性が高く、出土遺物の比較から72号住居→61号住居である。所見: 調査区の境に位置しており二次の調査を行った。ちょうど看板の基礎が置かれていた場所であり、調査期間内に看板撤去が済まなかったために全体を明らかにすることができなかった。壁の残存は良好で、床面

はXI層土を平坦に掘削することで構築されており、掘り方は行われていない。あまり顕著ではなかったが、北西コーナー部から床面中央にかけて比較的大きな礫が出土しており、北西側から礫の廃棄が行われたものと思われる。貯蔵穴は調査された部分には検出されておらず、南東コーナー部に掘削されていたものと考えられる。 時期：7世紀後半



- A-A'
- 1 暗褐色土 VII層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石?を多く含む、粘性が強い。
 - 2 暗褐色土 XI層土ベースで、As-Cを比較的多く、ニッ岳系軽石?を少量含む砂質土。
 - 3 黒褐色土 2層と黒褐色土の混土。
 - 4 暗褐色土 XI層土とXI層土ブロックの混土で、As-Cを少量含む。
 - 5 暗褐色土 XI層土ベースで、As-Cを均一に少量含む砂質土。
 - 6 黄褐色土 XI層土主体で、XI層土粒を多く含む。

0 1:60 2m

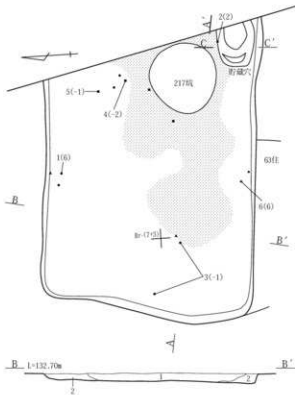


第610図 61号住居・出土遺物

62号住居(第611・612図 P L.141・142・275)

位置：Bq・Br-7グリッド 形状：隅丸長方形 規模：(4.25)m×3.37m 残存深度：0.15m 主軸方位：E-6°-S 埋没上：VII層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁に設置されているものと考えられるが、調査区外であり未検出。 遺物：灰軸陶器輪花皿(1)は北壁際の中央部から、3の羽釜は西壁寄りの2カ所から出土した破片が接合したものである。特筆されるのは刀子と見られる鉄製品2点(4・5)が、北東寄りの床面付近から出土したことで、南壁際の中央から石製巡方(6)が出土したことである。この巡方は、4.2×3.9cm、厚さ0.8cmで、一端を打ち欠いて粗く磨いており、鈍尾に転用しようとしたのではないかと考えている。 重複：63・67号

住居と重複しており、検出状況及び出土遺物から63・67号住居→62号住居と考えられる。 所見：調査区の東端に検出されたもので、東壁とカマド部分は国道17号下にかかるために調査することはできなかった。59号住居にも見られたような主軸方向に長い特徴的な平面形をしている。南東コーナー部に当たると思われる位置に(0.75)×0.60m、深さ0.20mの隅丸長方形を呈する貯蔵穴が掘削されていた。床面は平坦であり、カマドのあたりから南寄りの比較的大きい範囲に硬化面が見られた。掘り方の調査では、中央部に土坑1(1.31×0.95m、深さ0.22m、不整楕円形)、北西コーナー部に土坑2(径0.88m、深さ0.50m、円形)、貯蔵穴西側にP1(径0.34m、深さ0.34m、円形)を検出した。 時期：10世紀前半



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、にぶいXI層上ブロック(径5～15mm)を含む。
- 2 暗褐色土 I層に類似するが、にぶいXI層上(径10～30mm)を多く、As-C・ニツ岳系軽石わずかに含む。
- 3 暗褐色土 XI層上主体で、全体にくすんだ色調を呈する。
- 4 黒褐色土 XI層上主体で、炭化物粒をわずかに含む。

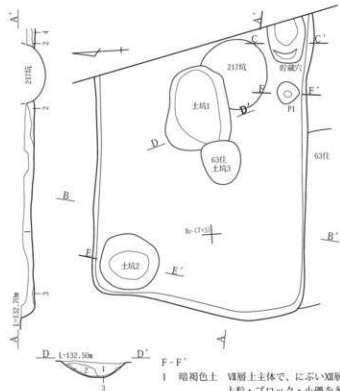
C-C' l=132.60m



C-C'

- 1 暗褐色土 XI層上ベースのXI層上主体で、XI層上大粒・炭化物を少量含む。

0 1:60 2m



F-F'

- 1 暗褐色土 VII層上主体で、にぶいXI層上粒・ブロック・小礫を多く含む。
- 2 にぶい黄褐色土 XI層上主体で、暗褐色土粒を少量含む。

E-E' l=132.60m



E-E'

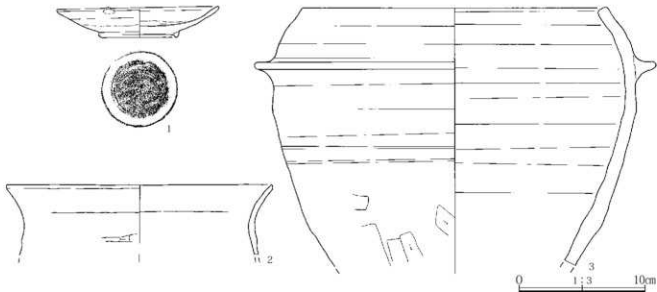
- 1 暗褐色土 VII層上主体で、XI層上粒を多く含む。
- 2 黄褐色土 XI層上主体で、暗褐色土粒を少量含む。

F l=132.50m

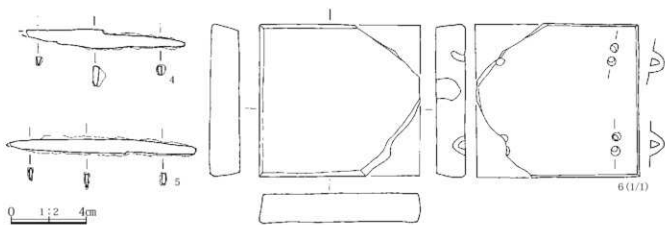


F

- D-D'
- 1 黄褐色土 XI層上主体で、暗褐色土小ブロックを少量含む。
 - 2 暗褐色土 VII層上とXI層上ブロックの混上。
 - 3 暗褐色土 貼り付けた様な暗褐色粘質土。



第611図 62号住居・出土遺物(1)

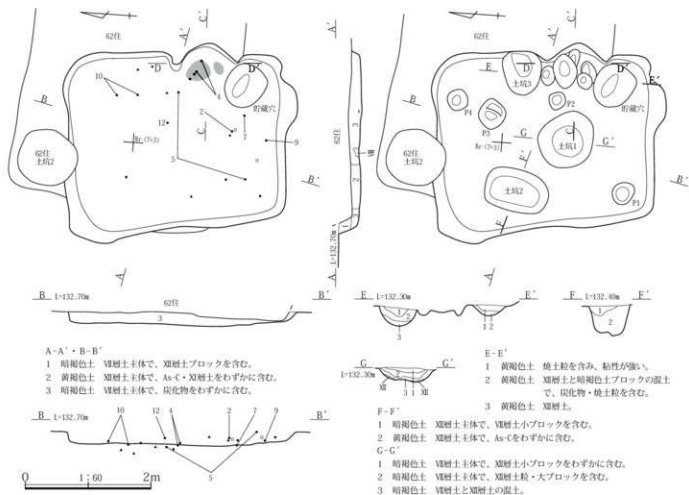


第612図 62号住居出土遺物(2)

63号住居(第613~615図 P.L.142・275)

位置: Bq・Br-7グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.86 m×3.51m 残存深度: 0.33m 主軸方位: E-10°-N 埋設土: 微量の炭化物粒を含むⅦ層土主体。柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに設置されていた。壁外への掘り込みはわずかで、焼部と見られる焼土が屋内側には主体があることから、カマド本体が屋内に張り出し

たカマドであったものと思われる。掘り方では焼部を挟むようにピット状の掘り込みが認められたが、ここにカマド構築材が据えられていたものかどうか判断ができなかった。主軸方位はE-4°-Nで、平面形状から想定される主軸方位であり、西壁をもとに計測した住居主軸方位よりはやや南に振れている。遺物: カマド焼部から須恵器環(4)が、貯蔵穴西側からは須恵器碗底部



A-A'・B-B'

1 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅷ層土ブロックを含む。

2 黄褐色土 Ⅷ層土主体で、As・C・Ⅹ層土をわずかに含む。

3 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、炭化物をわずかに含む。

B-B'

1 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、Ⅶ層土小ブロックを含む。

2 黄褐色土 Ⅷ層土主体で、As・Cをわずかに含む。

G-G'

1 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅷ層土小ブロックをわずかに含む。

2 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅷ層土大ブロックを含む。

3 暗褐色土 Ⅶ層土とⅧ層土の混土。

E-E'

1 黄褐色土 焼土粒を含み、粘性が強い。

2 黄褐色土 Ⅷ層土と暗褐色土ブロックの混土

で、炭化物・焼土粒を含む。

3 黄褐色土 Ⅷ層土。

F-F'

1 暗褐色土 Ⅷ層土主体で、Ⅶ層土小ブロックを含む。

2 黄褐色土 Ⅷ層土主体で、As・Cをわずかに含む。

G-G'

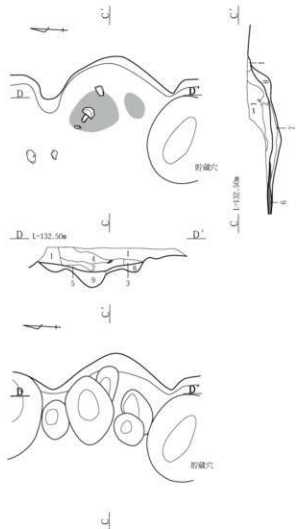
1 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅷ層土小ブロックをわずかに含む。

2 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅷ層土大ブロックを含む。

3 暗褐色土 Ⅶ層土とⅧ層土の混土。

第613図 63号住居

(7)と土師器環(2)が出土し、床面中央部から土師器甕(12)と須恵器甕(5)が出土した。また、土師器小型台付甕(10)及び土師器甕(11)はカマド部分の埋没土中から出土したものである。重複：62号住居→62号住居である。所見：62号住居と同一面で確認されたもので、確認段階で埋没土の微妙な色調の違いから重複関係を捉えることができた。床面は平坦に検出されたが、硬化した面はまったく捉えられなかった。貯蔵穴は、検出位置から南東コーナー部に検出された0.70×0.61m、深さ0.17mの楕円形を呈する掘り込みと思われる。掘り方の調査でカマド北側の位置で検出された土坑3(0.70×0.61m、深さ0.26m、不整楕円形)は、貯蔵穴と相似形でカマドを挟むような位置関係で掘削されており、貯蔵穴と同様の機能を有していた可能性がある。掘り方の調査では、中央部に土坑1(径0.85m、深さ0.19m、不整形)、北西コーナー寄りに土坑2(1.01×0.67m、深さ0.46m、隅丸長方形)を検出した他、P1(径0.35m、深さ0.07m、不整形形)、P2(径0.25m、深さ0.06m、円形)、P3(径0.42m、深さ0.28m、不整形形)、P4(径0.33m、深さ0.34m、円形)を検出した。時期：9世紀後半



C-C'・D-D'

1 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、Ⅹ層土と焼土粒を含む。

2 黒色灰層 Ⅹ層土小ブロックと焼土粒を少量含む。

3 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、焼土粒を少量含む。

4 赤褐色焼土 焼土ブロックとⅩ層土小ブロック・暗褐色土の混土で、炭化物をわずかに含む。

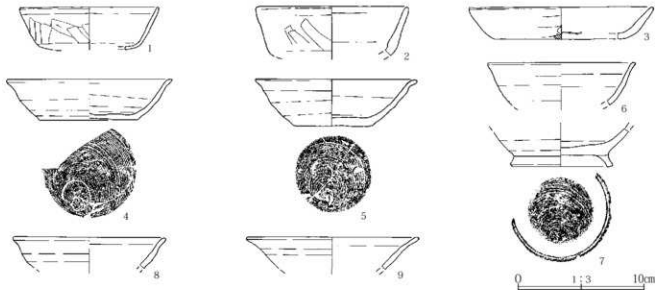
5 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、黒色灰・焼土粒をわずかに含む。

6 黒色灰層

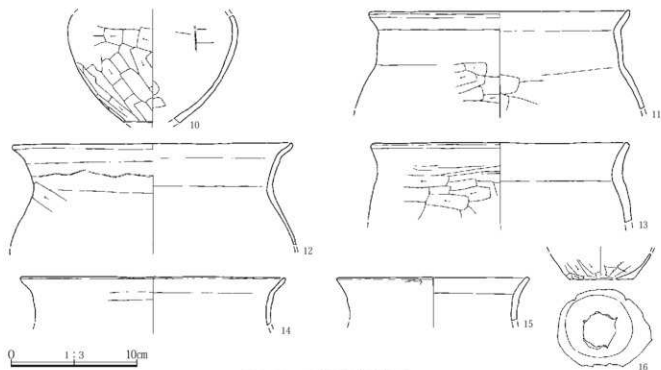
7 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、黒色灰を含む。

8 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、焼土粒を少量含む。

9 黄褐色土 Ⅹ層土主体で、焼土ブロックを多量に、暗褐色土粒を少量含む。



第614図 63号住居カマド・出土遺物(1)

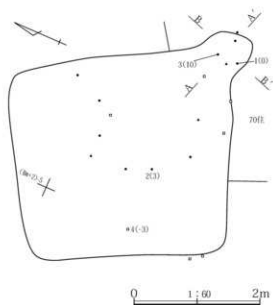


第615図 63号住居出土遺物(2)

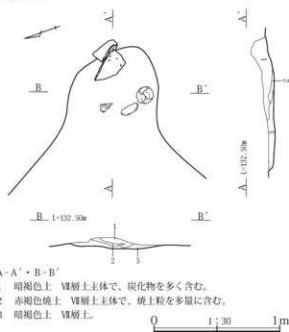
68号住居(第616・617図 P.L.142・275)

位置: Bm・Bn-4・5グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0.10m 主軸方位: 不明 埋没土: VII層土
 柱穴: 未検出 カマド: 焼土粒と炭化物粒の出土状況から南東コーナー部に位置するコーナーカマドと思われるが、残存状況が悪く詳細は不明である。遺物: 土器の小片が散在して出土した。1の須恵器環はカマド燃焼部と思われる位置から出土した。また、椀形鍛冶滓(4)

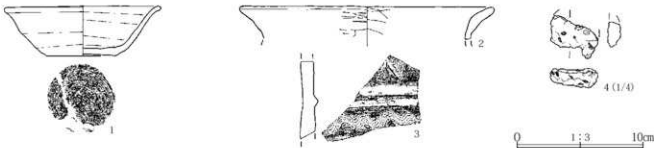
が1点埋没土中から出土している。重複: 70号住居と重複しており、出土遺物の比較から68号住居→70号住居と考えられる。所見: 泥流復旧痕が深くまで及んでいた場所に検出したもので、遺物出土及びカマドと見られる焼土と炭化物が検出されたことから住居と判断した。住居平面については、壁がまったく残存していないため、遺物の出土した範囲として想定したものである。時期: 9世紀後半



第616図 68号住居



- A-A'・B-B'
 1 暗褐色土 VII層土主体で、炭化物を多く含む。
 2 赤褐色焼土 VII層土主体で、焼土粒を多量に含む。
 3 暗褐色土 VII層土。

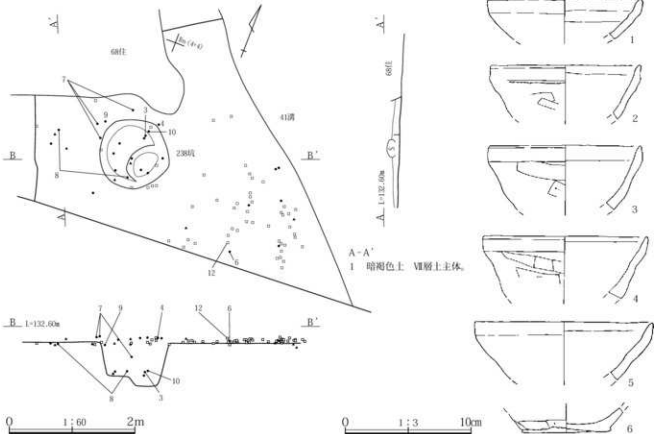


第617図 68号住居出土遺物

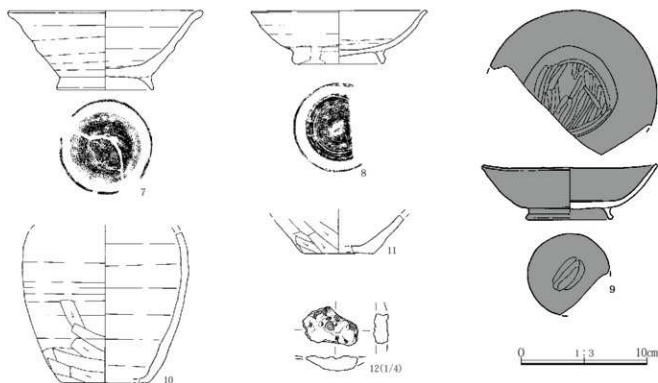
70号住居(第618・619図 P.L.142・275)

位置：Bm・Bn-4グリッド 形状：不明 規模：不明
 残存深度：0.10m 主軸方位：不明 埋没土：Ⅶ層土と
 考えられる。柱穴：未検出 カマド：未検出 遺物：
 東寄りの位置に小礫が主体的に出土し、西寄りの238号
 土坑周辺から須恵器碗(7)、土師器環(4)、灰軸陶器碗
 (8)が出土した。緑軸陶器碗(9)は1/2程度が残存して
 おり、7の須恵器碗に隣接して口縁部を下向きに床面と
 考えられる面から出土した。また、12の椀形鍛冶滓が
 埋没土中から出土した。重複：68号住居と重複してい
 るが、両住居ともに残存が悪く、直接的に新旧関係を確認
 することができなかったが、出土遺物の比較から68号

住居→70号住居と考えられる。 所見：68号住居ととも
 に検出したもので、上部が泥流復旧痕や道路によって削
 平されていたために、平面形などを確認することができ
 なかった。遺物の一面的な出土状況から住居である可能
 性がたかかったため住居番号を付したものである。カマド
 は東壁に敷設されていたものと考えられるが、1面の
 道路によって削平されたものと考えられる。調査時点では、
 238号土坑(径1.07m、深さ0.70m、円形)として別
 遺構と考えていた土坑の出土遺物と住居出土遺物に時期
 差がなく、埋没土の状況が新しい時期のものとも考えら
 れないことから、238号土坑は住居に伴う可能性が高い。
 時期：10世紀前半



第618図 70号住居・出土遺物(1)

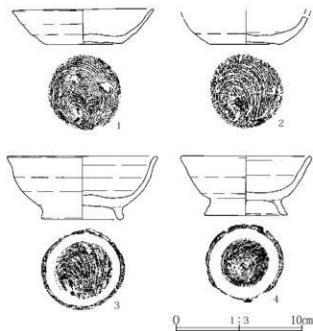


第619図 70号住居出土遺物(2)

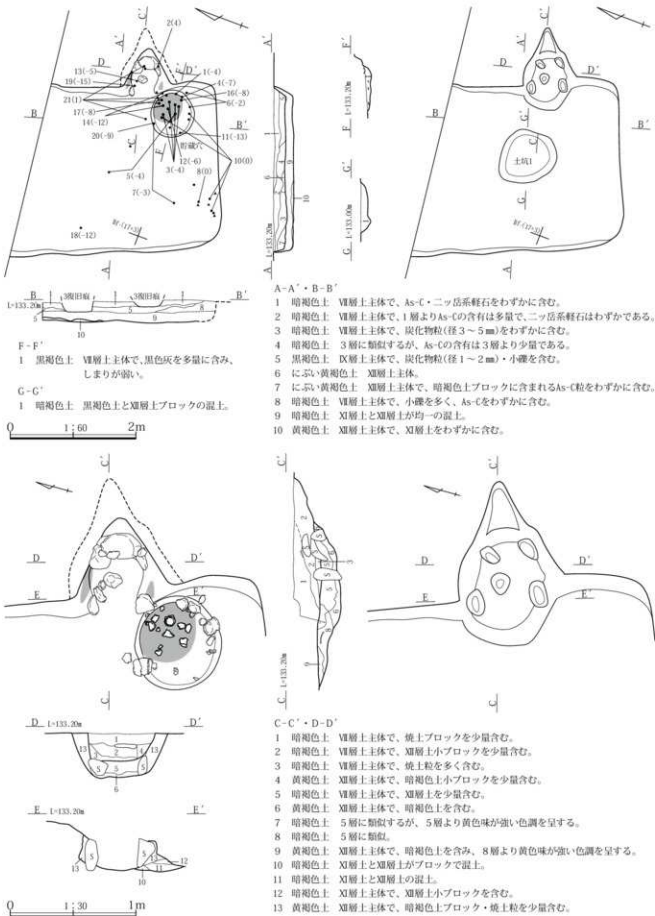
74号住居(第620～622図 P.L.142・143・275・276)

位置: Be・Bf-17グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.61 m×(3.40)m 残存深度: 0.20m 主軸方位: E-22°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南寄りに偏った位置に検出したもので、釣鐘状の平面形から計測した主軸方位はE-20°-Nと、西壁で計測した住居の主軸方位とほぼ一致している。燃焼部が壁外に設けられており、燃焼部中央の左寄りに支脚の礫が据えられていた。袖は屋内にまったく張り出しておらず、壁との接点には構築材としてやや大形の礫を据え、さらに燃焼部と煙道部境にも礫を据えて、これに天井石を載せていた。掘り方調査においても先に述べた構築材の据え方は明瞭に確認することができた。 遺物: 須恵器環(1)・埴(3～5・7)・足高高台の埴(6・16・17)・黒色土器埴(14)・羽釜(20)は貯蔵穴から、環(2)・埴(13)・羽釜(19・21)はカマド燃焼部から、18の羽釜は西壁寄りの位置から、それぞれ出土した。 重複: 75号住居と重複し、住居形態及び出土遺物の比較から75号住居→74号住居である。 所見: 調査区の北端で検出したもので、北壁は調査区外になるため全体を明らかにすることはできなかった。掘り込みの深い75号住居を先行調査してしまっただめに南壁は失ってしまった。床面はカマド燃焼

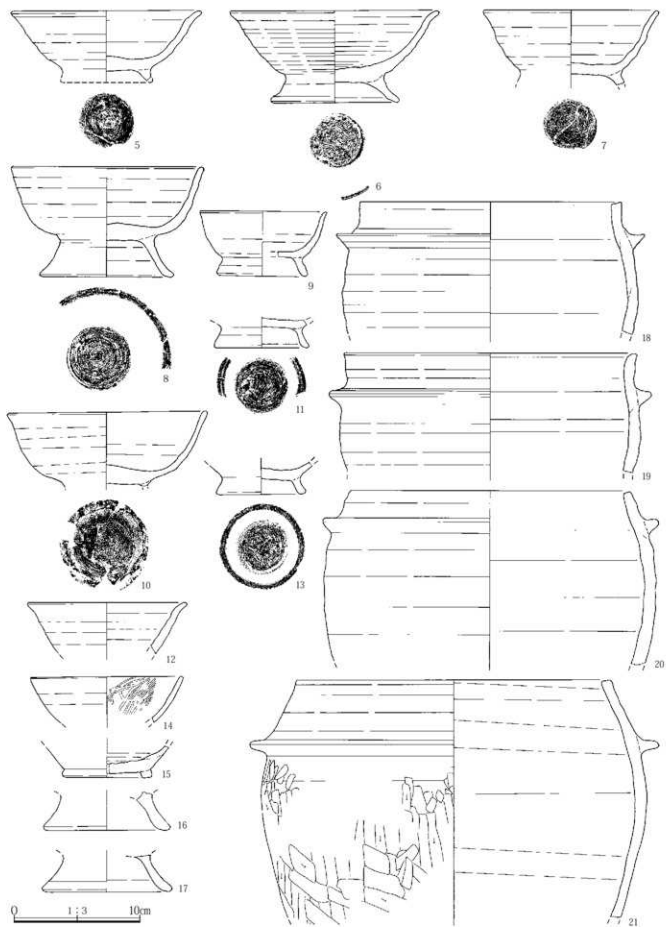
部から連続する面として捉えたもので、この床面確認の一連の作業でカマド右側の位置から径0.75m、深さ0.10mの円形を呈する貯蔵穴を検出した。掘り方は全体に0.15mほど掘り下げられていたものと考えられ、掘り方調査において、床面中央部に径0.85m、深さ0.11mの不整形円形を呈する土坑1を検出した。 時期: 10世紀後半



第620図 74号住居出土遺物(1)



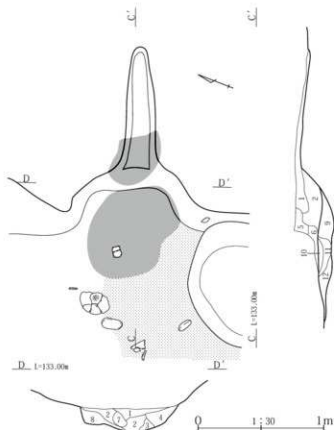
第621図 74号住居



第622図 74号住居出土遺物(2)

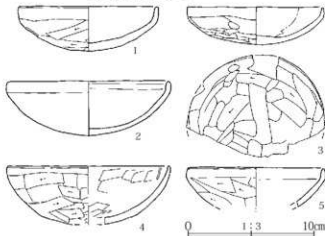
75号住居(第623～625図 P.L.143・276)

位置: Bf・Bg-16・17グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 4.25m×4.40m 残存深度: 0.58m 主軸方位: E-26°-N 埋没土: XI・XII層土が主体で、As-C、二ツ岳系軽石の含有が目立たない。柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央のやや南寄りに検出された。煙道部を壁外に0.95mほど延ばしており、この煙道部を基準に計測した主軸方位はE-22°-Nである。燃焼部は東壁をわずかに掘り込んでいるが、大部分は屋内側に位置しており、本来は袖を屋内に張り出させてカマド本体を構築していたはずである。しかし、屋内には焼土化した燃焼部の浅い窪みだけしか残されておらず、袖構築材が掘えられていた痕跡は掘り方調査においても認められなかったことから、構築材を使わず粘性のあるXII層土を素材としてカマド本体を構築していたものと考えられる。煙道部の燃焼部寄りの底面から側壁にかけては焼土化が顕著であった。遺物: 土師器環(2・5・6)が貯蔵穴周辺から、甕(13)は貯蔵穴内出土及び床面中央から出土した破片が接合した。16の甕は北壁の上位から出土した。掲載した土師器環の多くは埋没土中の出土であるが、ほぼ時期が揃っており、住居の所属時期を示す遺物と見てよいであろう。重複: 74号住居と重複し、住居形態及び出土遺物の比較から、75号住居→74号住居である。所見: 比較的掘り込みが深いため残存状況は良好である。壁は全周確認したが、東壁及び南壁の傾斜が西壁や北壁と比較してややく、崩落している可能性が高い。床面は焼土化したカマド燃焼部の検出面の延長として捉えたもので、カマド前面から住居中央部にかけて帯状の硬化面が捉えられた。カマドから南東コーナー部を除いて、幅0.10m、深さ0.05mほどの壁溝が廻っていた。柱穴は掘り方調査においても検出されなかったが、貯蔵穴は床面精査の時点で、南東コーナー部に検出され、径0.85m、深さ0.11mの円形を呈していた。掘り方は全体に及んでいたが、特に住居南半に不整形円形を呈する土坑状の掘り込みが目立った。 時期: 7世紀後半

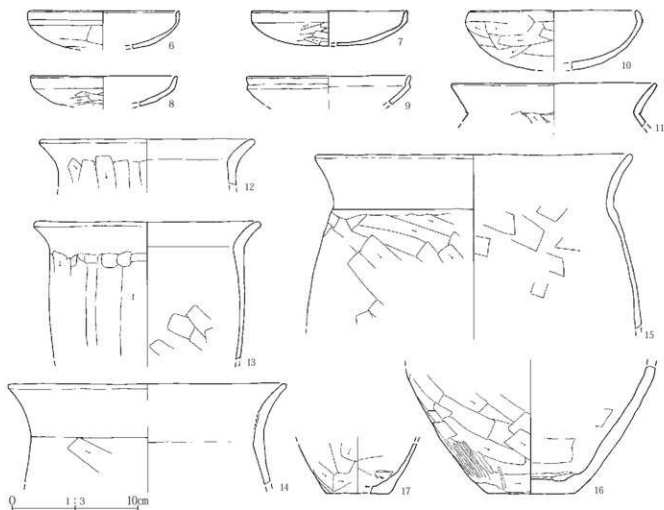


C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 XII層上主体で、暗褐色土・XII層土を含み、焼土粒をわずかに含む。
- 2 黄褐色土 XII層上主体で、XI層土を含む。
- 3 黄褐色土 XII層上主体で、XI層土を少量含む。
- 4 暗褐色土 XI層上主体で、XII層土をわずかに含む。
- 5 暗褐色土 XII層上主体で、他は殆んど含まない。
- 6 暗褐色土 I層に近似。
- 7 暗褐色土 XII層上主体で、XI層土・焼土粒を全体に含む。
- 8 黄褐色土 XII層上主体で、VIII層土小ブロックを少量含む。
- 9 暗褐色土 XI層土とXII層土が全体に混土で、焼土粒・小ブロックを含む。
- 10 暗褐色土 XI層上主体で、炭化物・焼土粒を含む。
- 11 暗褐色土 XII層上主体で、XII層土小ブロックを含み、上層より暗い色調を呈する。
- 12 暗褐色土 XII層上主体で、XII層土小ブロック・焼土粒を少量含む、さらに暗い色調を呈する。



第623図 75号住居カマド・出土遺物(1)

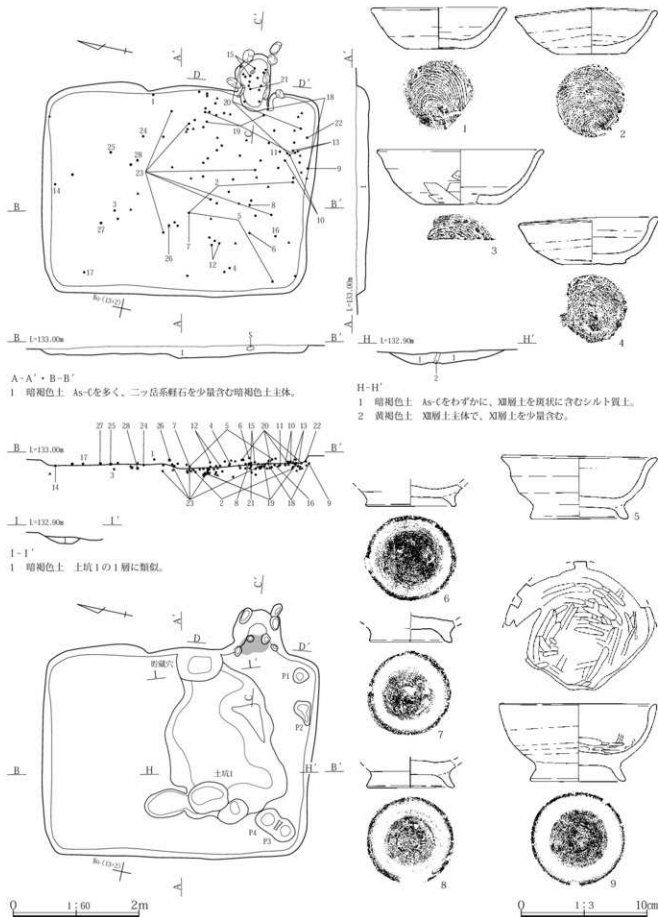


第625図 75号住居出土遺物(2)

77号住居(第626～628図 P L.143・276・277)

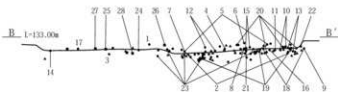
位置：Bo-12・13グリッド 形状：隅丸長方形 規模：4.32m×3.33m 残存深度：0.20m 主軸方位：E-13°-N 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁の南寄りに偏った位置に検出した。左側壁に3カ所、右側壁には4カ所礫を構築材として立てており、最前部の礫は壁との接点部分にあることから、燃焼部が壁外に設けられたカマドであることがわかる。また、燃焼部中央左寄りの位置に棒状礫を立てた支脚が検出されたことも、これを裏付けている。構築材などの位置関係から想定される主軸方位はE-2°-Nである。燃焼部底面にわずかに焼土化した面が確認されているが、灰はほとんど残存していなかった。遺物：遺物出土は住居南半に集中する傾向があり、出土位置も床面からはやや上位にあるものが多い。須恵器環(2・4)・埴(5)・足高台の埴(10～12)・黒色土器埴(9)などが南寄りの場所から出土し、羽釜(19・20)、土釜(21)、鉢(18)はカマド付

近から出土した。重複：北側で55号住居と重複しており、検出状況から55号住居→77号住居と考えられる。所見：Ⅺ層土中で遺構確認を行ったが、掘り込みが浅かったものか壁の残存はわずかであった。床面は、ⅩⅢ層土が確認された面として捉えたが、硬化面の形成はまったく認められず、この時点で北側には55号住居の南壁部分が確認された。床面の精査によって柱穴、貯蔵穴と考えられるような掘り込みは検出されなかったが、掘り方調査でカマド左側から検出した0.73×0.52m、深さ0.28mの楕円形を呈する掘り込みが貯蔵穴である可能性が高い。掘り方は、カマド前面部分に2.35×1.78m、深さ0.20mの不整形土坑状に掘削されていた他、南東コーナ部にP1(径0.24m、深さ0.05m、円形)とP2(0.43×0.26m、深さ0.03m、不整形楕円形)、南西コーナ部にP3(径0.35m、深さ0.18m、円形)とP4(径0.36m、深さ0.16m、円形)、楕円形掘り方の西端に土坑1(0.61×0.48m、深さ0.37m、楕円形)を検出した。時期：10世紀後半



A-A'・B-B'

1 暗褐色土 As-Cを多く、二ヶ居系軽石を少量含む暗褐色土主体。



1-1' 1:132.90m

1-1'

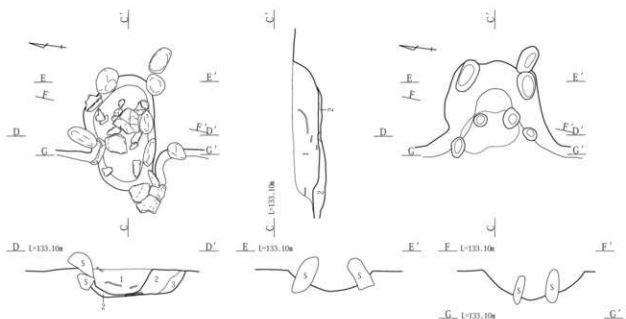
1 暗褐色土 土坑1の1層に類似。

H-H'

1 暗褐色土 As-Cをわずかに、刈層土を斑状に含むシルト質土。

2 黄褐色土 刈層土主体で、刈層土を少量含む。

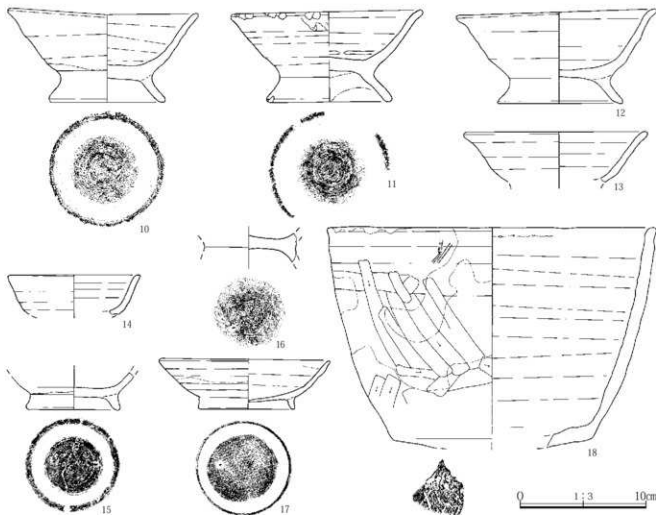
第626図 77号住居・出土遺物(1)



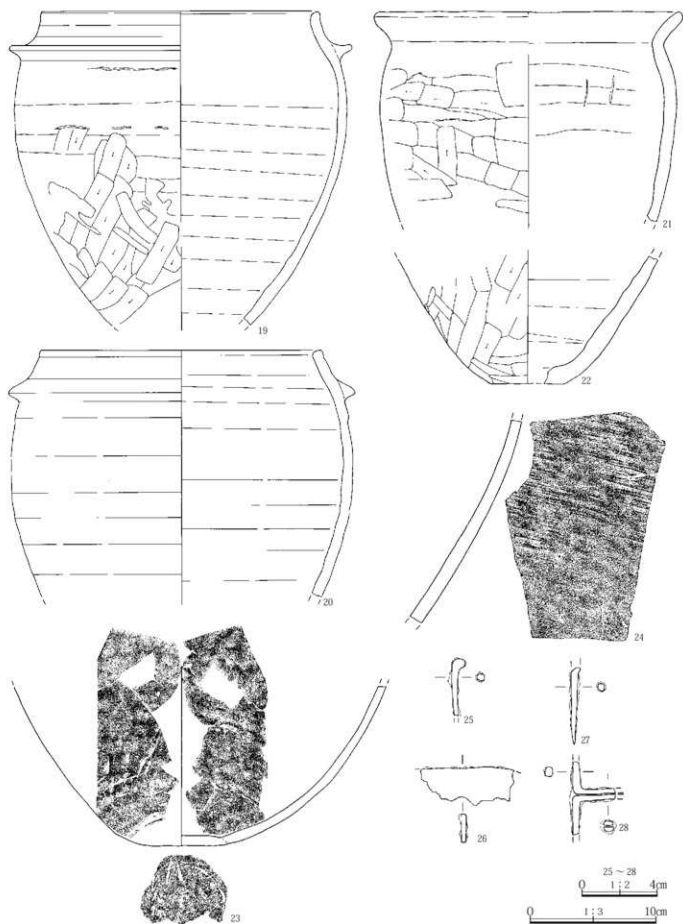
C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 As-Cを多く、二ヶ岳系軽石細粒をこくわずかに含む暗褐色土で、焼土粒は含まず、硬くしまりが強い。
- 2 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、雑屑土・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 雑屑土を多く、As-Cをわずかに含む。

0 1:30 1m



第627図 77号住居カマド・出土遺物(2)

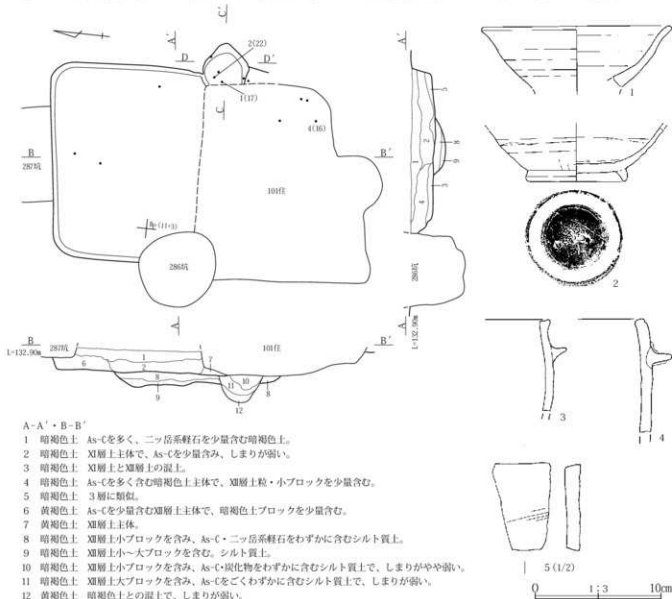


第628図 77号住居出土遺物(3)

78号住居(第629・630図 P.L.144・277)

位置:Bo・Bp-11グリッド 形状:隅丸長方形 規模:3.12m×(3.45)m 残存深度:0.34m 主軸方位:E-7°-N 埋没土:Ⅶ層土主体 柱穴:未検出 カマド:東壁の南寄りに位置している。平面形状から燃燒部を壁外に設けたカマドと考えられ、主軸方位はE-6°-Nである。燃燒部の埋没土上層には焼土粒等はほとんど認められず、下層にわずかに含有されていただけであった。また、底面及び側面に焼土の形成はなく、灰の検出もできなかった。さらに、明瞭な掘り方も確認することはできず、構築材の痕跡も見られなかった。遺物:遺物出土はごく少なく、須恵器碗(1)と灰釉陶器碗(2)がカマド燃燒部から出土した。重複:埋没土101号住居と重複しており、調査状況から78号住居→101号住居と考え

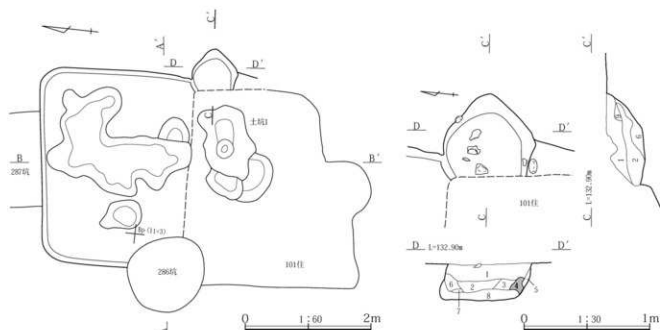
られる。所見:遺構確認の時点では、286・287号土坑との重複については認識できたが、南側に101号住居が存在することはわからず、単独の住居として調査を開始した。調査の進捗にしたがって土層断面に不自然な堆積状況が認められた上に、南側でカマドと見られる礫の集中部が検出されたことで、78号住居よりも新しい段階の住居との重複に気付いた。この重複によって南壁が失われていたことは理解できたが、残存しているはずの南東コーナー部については、土層の違いが識別できず、最終的にも不明のまま調査を終了した。床面は曖昧であったが、この面で掘り方と考えられる掘り込みの平面形が検出できた。掘り方は、カマド前面に検出した土坑1(0.22×0.80m、深さ0.36m、不整形円形)以外は不整形で浅く、土坑番号を付さなかった。時期:10世紀前半



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを多く、二ッ岳系粘石を少量含む暗褐色土。
- 2 暗褐色土 XI層土主体で、As-Cを少量含む、しまりが弱い。
- 3 暗褐色土 XI層土とXI層土の混上。
- 4 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土主体で、XI層土粒・小ブロックを少量含む。
- 5 暗褐色土 3層に類似。
- 6 黄褐色土 As-Cを少量含むXI層土主体で、暗褐色土ブロックを少量含む。
- 7 黄褐色土 XI層土主体。
- 8 暗褐色土 XI層土小ブロックを含み、As-C・二ッ岳系粘石をわずかに含むシルト質上。
- 9 暗褐色土 XI層土小～大ブロックを含む。シルト質上。
- 10 暗褐色土 XI層土小ブロックを含み、As-C炭化物をわずかに含むシルト質上で、しまりがやや弱い。
- 11 暗褐色土 XI層土大ブロックを含み、As-Cをごくわずかに含むシルト質上で、しまりが弱い。
- 12 黄褐色土 暗褐色土との混上で、しまりが弱い。

第629図 78号住居・出土遺物



C-C'・D-D'

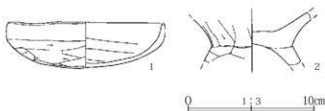
- 1 暗褐色土 101号住居の埋没土上層に類似するが、As-Cを多く、炭化物・焼土粒(下層より大粒)を少量含む砂質土。
- 2 暗褐色土 焼土微粒・ブロックを多量に、As-Cをわずかに含む砂質土で、1・6層よりややしまりが強い。
- 3 明褐色土 下面のみに焼土粒を含み、他は殆んど含まず、2層より粘性・しまりが強い。
- 4 赤褐色土 焼土粒・ブロック主体で、3層が焼土化?したものでAs-C・炭化物をごくわずかに含む。
- 5 暗褐色土 暗褐色土と灰色土の混土で、炭化物・焼土粒は殆んど含まず、埋没土中最も硬質な層。
- 6 暗褐色土 101号住居の埋没土中層主体で、灰色土を含み、炭化物粒・焼土粒をわずかに含む均質な砂質土。
- 7 暗褐色土 XI層土主体で、炭化物を多量に、焼土粒をごくわずかに含む。
- 8 暗褐色土 101号住居の埋没土中層主体で、炭化物粒・焼土粒をわずかに含む均質な砂質土。
- 9 赤褐色土 焼土ブロック主体で、炭化物をわずかに含む。

第630図 78号住居掘り方・カマド

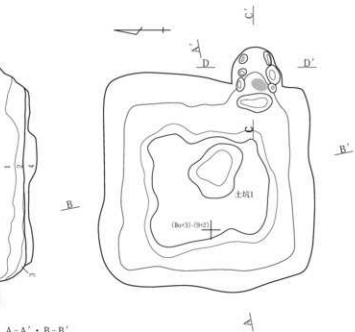
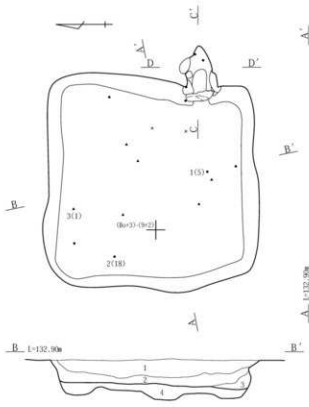
79号住居(第631~633図 P.L.144・277)

位置:Bo・Bp-9グリッド 形状:隅丸方形 規模:3.35m×3.33m 残存深度:0.47m 主軸方位: E-1°-N 埋没土:VII層土主体 柱穴:未検出 カマド:東壁の南東コーナー部に接するような位置に検出したもので、掘り込みが深く残存状況は良好であった。釣鐘状の平面形を呈し、右側壁に2カ所、左側壁に3カ所大形礫が構築材として立てられていたが、燃焼部に支脚が据えられていた痕跡は認められなかった。焚口部には最前列の構築材に乗せられていたと考えられる、長さ45cmほどの被熱のために変色した角礫が、落ちかけたような状況で出土した。焚口寄りの燃焼部底面及び奥壁上位の2カ所に顕著な焼土面の形成が見られた。構築材の位置から推定される主軸方位はE-1°-Nであり、住居の南壁で計測した住居主軸方位と一致している。遺物:遺物の出土はごくわずかで、土師器環(1)は中央南寄りの床面からわずかに上位から出土し、3の砥石は北壁寄りの床面から出土したものである。重複:なし 所見:XI層土中で単独で検出されたもので、掘り込みが深く壁の

残存状況は良好であったが、西壁南寄り及び北壁西寄りの一部に変形が見られることから、壁の崩落があった可能性が高い。床面はXI層土ブロックが斑状に検出された面として捉えたもので、平坦ではあったが硬化面は皆無であった。柱穴、貯蔵穴と見られるような掘り込みは、床面精査及び掘り方においても検出されなかった。掘り方は全体に及んでおり、特に壁に沿って帯状に深く掘削されており、中央部に土坑1(0.93×0.76m、深さ0.18m、不整楕円形)が検出された。これら掘り方内に、XI層土ブロックとVII層土の混土を充填して床を構築していた。わずかではあるが、床面近くから炭化物の出土が見られることから、焼土の可能性もある。時期:8世紀後半



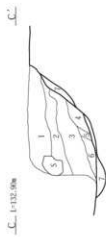
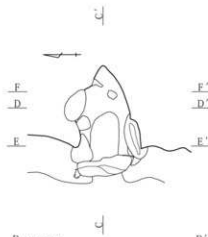
第631図 79号住居出土遺物(1)



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石粒(径5～10mm)を多く含む暗褐色土で、炭化物粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石粒を少量含む暗褐色土主体で、ⅩⅨ層上粒・ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土とⅩⅨ層上ブロックの混土。
- 4 暗褐色土 ⅦⅧ層土とⅩⅨ層上ブロックの混土で、塊状を呈する。

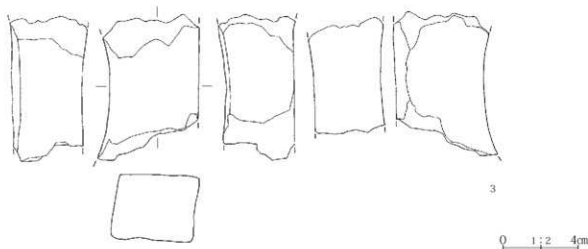
0 1:60 2m



C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 上面に酸化鉄を含み、As-C・ニッ岳系軽石を少量、炭化物細粒をわずかに含み、しまりがやや強い。
- 2 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 ⅩⅨ層上小ブロックを少量、As-Cをごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 4 暗褐色土 ⅩⅨ層上大ブロックを含み、As-C・焼土微粒をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
- 5 暗褐色土 ⅩⅨ層土と暗褐色土の混土。
- 6 暗褐色土 3層に類似するが、焼土細粒を少量含む。
- 7 暗褐色土 ⅦⅧ層土とⅩⅨ層上小ブロックの混土。

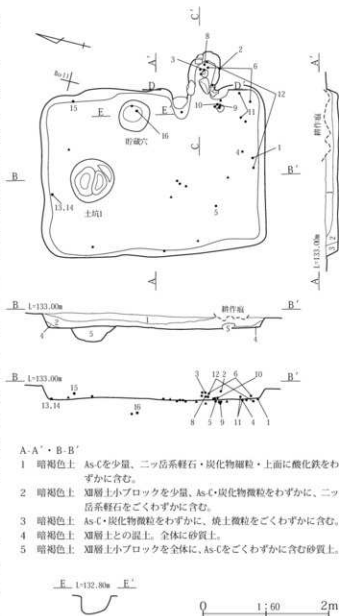
0 1:30 1m



第633図 79号住居出土遺物(2)

80号住居(第634～636図 P.L.144・145・277)

位置：Bn・Bo-10・11グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.57m×3.53m 残存深度：0.20m 主軸方位：E-15°-N 埋没土：Ⅷ層土主体 柱穴：未検出 カマド：釣鐘状の平面形を有する燃焼部を壁外に設けた形態のカマドであり、東壁南寄りの偏った位置に検出された。左軸部のように屋内側から礎が1点出土しているが、床面からわずかに浮いた位置から出土したものであり、構築材として据えられていた痕跡は見られない。本来の構築材は、住居壁との接点部に左右1カ所据えられた大形礎と、左側壁奥に1カ所据えられていた礎である。奥壁の礎については、掘り方の調査で右側にも据えた痕跡が検出されたことから、本来は左右対称の位置に礎があったものと考えられる。燃焼部中央には棒状礎が支脚として据えられており、この位置からも燃焼部が壁外に置かれていたことが確認できる。構築材などの位置関係から想定される主軸方位は、E-5°-Nであり、南壁を基準に計測した住居主軸方位よりも南に振れている。遺物：遺物の多くはカマドから南東コーナー部付近からの出土である。須恵器環(2・3)・羽釜(12)はカマド燃焼部から、坏(1)・埴(4)・足高台の埴(6)、土師器土釜(9・10)は南東コーナー部付近から出土した。鉄鍔2点(13・14)が錆びついた状態で北壁際から出土した他、16の刀子が貯蔵穴内、15の棒状の鉄製品が北東コーナー部から、17の「口」状の鉄製品がカマド燃焼部から出土したことが特筆される。重複：西側で97号住居と重複しており、検出状況から97号住居→80号住居と考えられる。所見：Ⅷ層土中で住居平面形を比較的明確に確認するこ



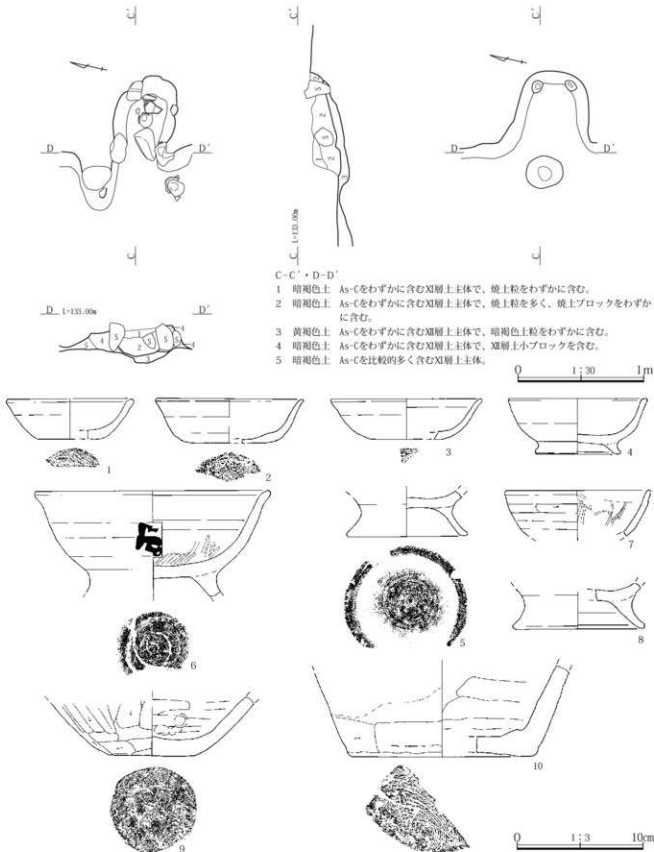
A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量、二ッ岳系軽石・炭化物微粒・上面に酸化鉄をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 Ⅷ層土小ブロックを少量、As-C・炭化物微粒をわずかに、二ッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 3 暗褐色土 As-C・炭化物微粒をわずかに、焼土微粒をごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 Ⅷ層土との混土。全体に砂質上。
- 5 暗褐色土 Ⅷ層土小ブロックを全体に、As-Cをごくわずかに含む砂質上。

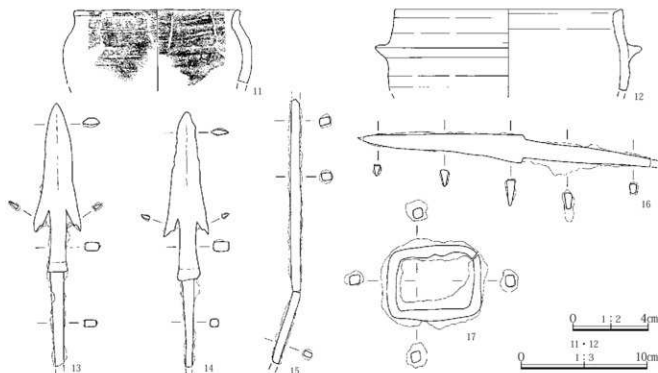
第634図 80号住居

とができた。床面はⅩⅩ層土中に構築されており、掘り方は中央北寄りの位置に径0.7m、深さ0.25mの円形を呈する土坑1が掘り込まれていただけである。カマド左側

で検出した一辺0.48m、深さ0.27mの隅丸方形を呈する掘り込みは、位置は特異ではあるが貯蔵穴と判断した。
時期：10世紀後半



第635図 80号住居カマド・出土遺物(1)

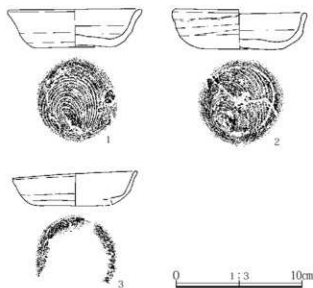


第636図 80号住居出土遺物(2)

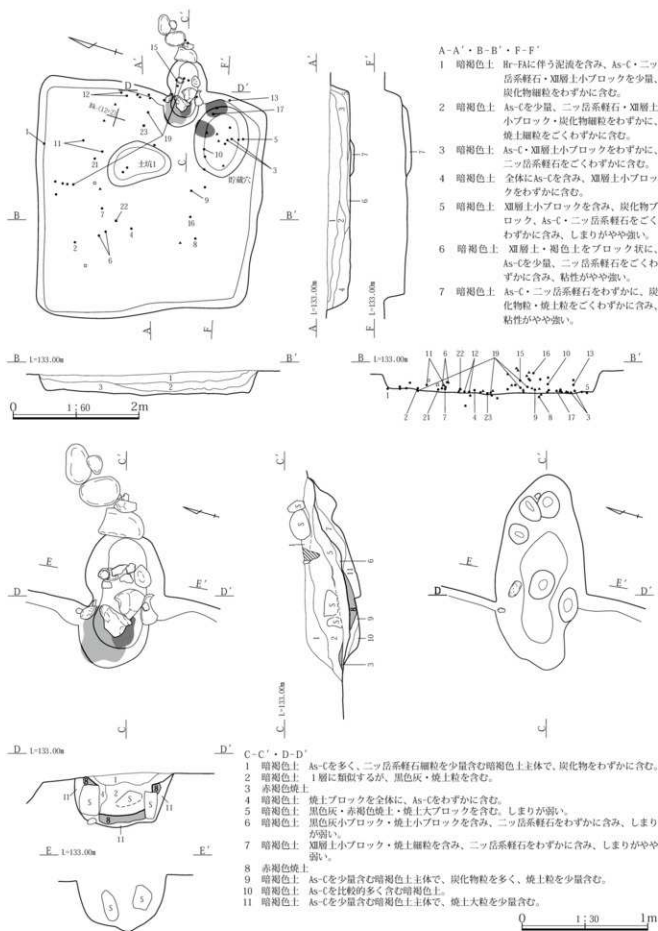
81号住居(第637～639図 P.L.145・277)

位置：Bj・Bk-11・12グリッド 形状：隅丸台形 規模：3.20～3.78m×3.30～3.60m 残存深度：0.37m 主軸方位：E-16°-N 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁の南寄り位置に検出され、確認段階でカマド形状が焼土範囲として明瞭に捉えることができた。平面形は釣鐘状を呈し、焚口部よりも燃焼部幅がやや広くなっており、想定される主軸方位はE-15°-Nである。住居壁との接点部には構築材として礫が据えられており、カマド本体はⅩ層土を使って構築されていたものと考えられる。燃焼部側壁は全体に焼土化していたものと考えられるが、根などの擾乱によるものか焼土がブロック状に残存していた。燃焼部中央に20cmほどの間隔を置いて左右2カ所に礫が立てられた状態で検出されたが、側壁から離れていることから側壁の構築材とは考えられず、双脚の支脚と見てよいであろう。煙道部に当たる位置からは扁平な礫が出土しており、礫の下部から煙道部底面と見られる焼土面が検出されていることから、煙道部の天井構築材であった可能性がある。遺物：住居中央部からの遺物出土が多かったが、8の須恵器境が南西側の床面から、羽釜(19)と埴(15)がカマド燃焼部から、須恵器環(3・5)・埴(10・17)が貯蔵穴内から出土

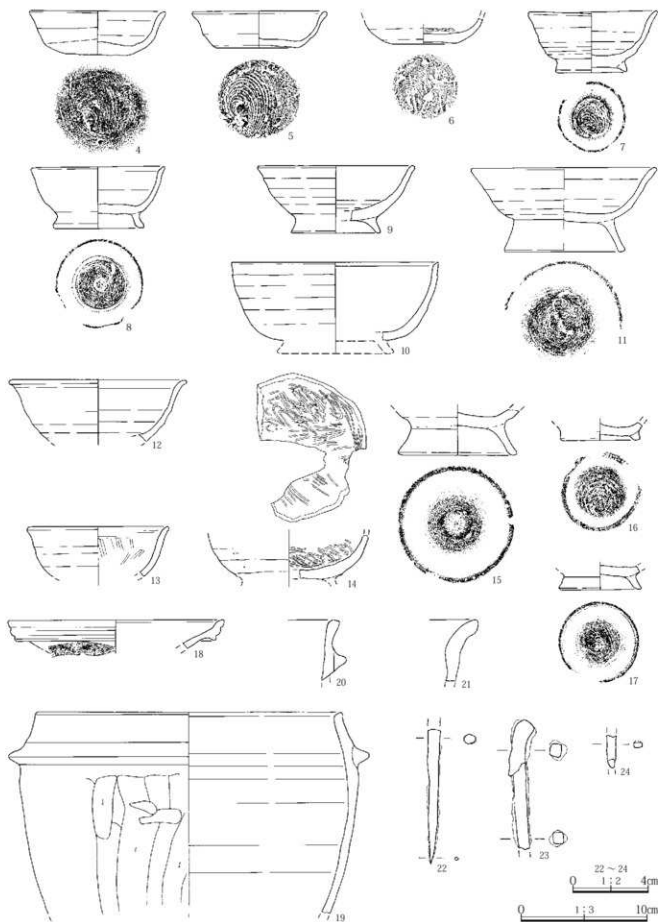
した。重複：なし 所見：Ⅶ層土中で平面を確認したもので、台形状の特異な平面形を呈している。埋没土と周辺土層との違いが明瞭でないため、南壁の一部を掘り過ぎてしまった。床面はⅩ層土が斑状に検出された面として捉えたもので、掘り方はカマド前面に1.01×0.62m、深さ0.05mの不整形円形の土坑1が検出されただけである。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出され、1.13×0.85m、深さ0.10mの楕円形を呈し、カマド寄りの上面には黒色灰層が検出された。時期：10世紀後半



第637図 81号住居出土遺物(1)



第638図 81号住居



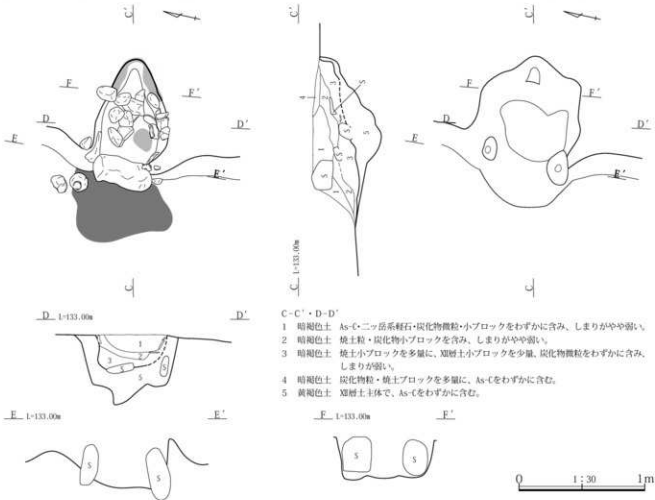
第639図 81号住居出土遺物(2)

82号住居(第640～643図 P.L.145・146・278)

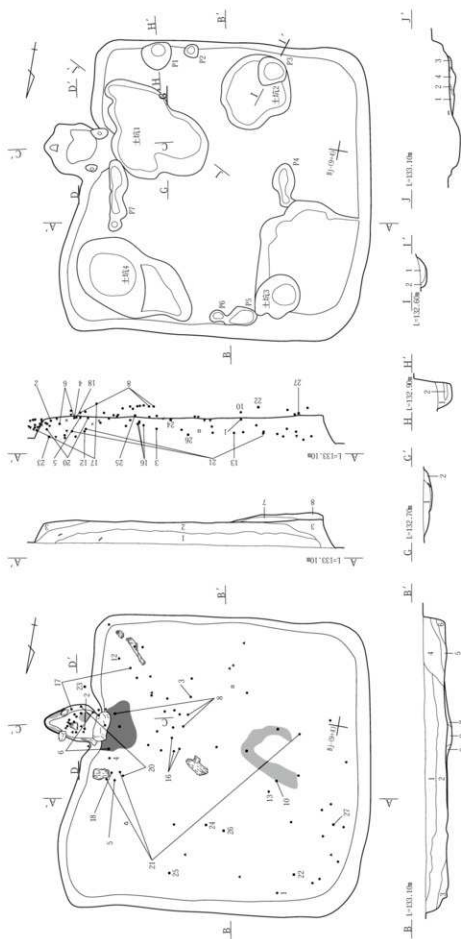
位置: B1・Bj-9・10グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 4.85m×4.70m 残存深度: 0.43m 主軸方位: E-8°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央のわずかに南寄りに検出した。釣鐘状の平面形を呈し、煙道部は焼土化が顕著であったために、平面確認の時点で位置と形状が把握できた。住居壁との接点部、及び燃焼部と煙道部との境には1対の礫が構築材として据えられ、右側壁にはさらに1カ所扁平な礫が据えられていた。住居壁接点部の構築材には焚口部天井となる長さ49cmほどの面取りした角閃石安山岩が載せられた状態で検出された。構築材などの位置から計測した主軸方位は、E-5°-Nであり、南壁で計測した住居主軸方位とはほぼ一致している。燃焼部の焚口部寄りの底面が特に焼土化が顕著で、焚口部から屋内側に黒色灰面の広がりが見られた。燃焼部埋没土中から礫が出土しているが、被熱痕跡のある礫も混じっており、他部位の構築材であった可能性が高い。遺物: カマドからは羽釜

(17)、土師器土釜(20)が出土しており、21の土釜は、複数カ所の破片が接合している。他に灰釉陶器碗(10)は床面中央の西寄りの場所から出土したもので、すぐ側からは13の緑釉陶器碗の破片も出土した。遺物で特筆されるのは、金属製品が比較的多いことで、釘と見られる22、及び刀子(25)は北壁寄りの掘り方から、壺金具(26)と紡錘車(24)は床面中央やや北寄りから、鉄製の鈎板に青銅製の緑金と刺金を組み合わせた特異な鉸具(27)は北西コーナー部に検出した掘り方底面から出土した。また、鉄製工具と見られる23は、カマド南側の壁外から出土したものであるが、この位置に他の遺構は重複していないことから、82号住居に含めて報告した。また、82号住居と103号住居出土の灰釉陶器碗(第693図5)が接合した。

重複: 120号住居と重複しており、検出状況から120号住居→82号住居である。所見: 遺構の確認は、IX層土中で行っており炭化物などの含有によって平面形は比較的容易に確認することができた。壁は全周残存しており、北壁の傾斜が他の壁と比較してやや緩く崩落している可



第640図 82号住居カマド



第15表 82号住居 土坑・ピット計測表

番号	規模	深さ	形状
土坑1	—	0.21	不整形
土坑2	1.20	0.16	不整形
土坑3	0.70	0.32	不整形
土坑4	2.03×1.02	0.27	不整形
P1	0.44	0.60	不整形
P2	0.20	0.19	円形
P3	0.48	0.19	不整形
P4	0.70×0.36	0.16	不整形
P5	0.52×0.32	0.24	楕円形
P6	0.18	0.60	円形
P7	—	0.21	不整形

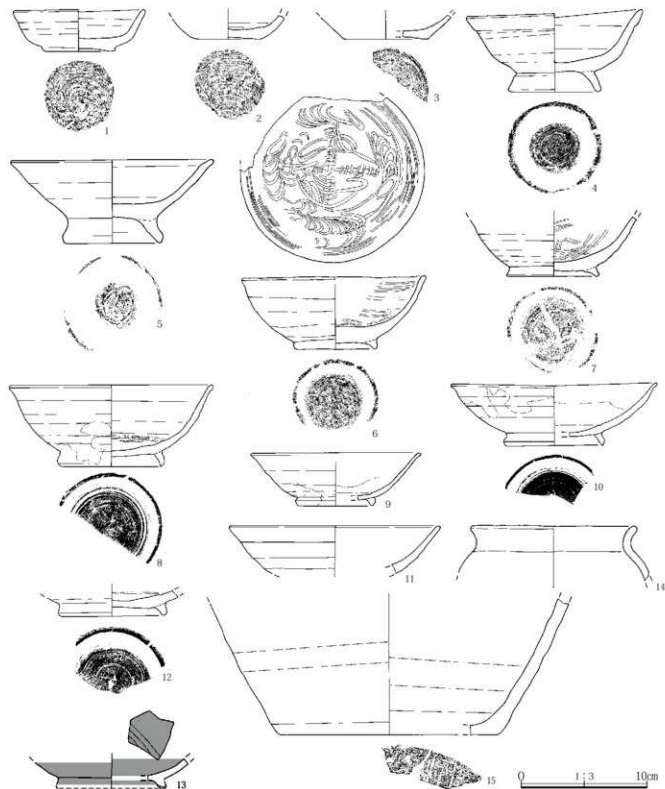
A-A'・B-B'
 1 埴間土 As-C多量に含む埴間土主体、副伴物は多少含む。
 2 埴間土 As-C多量に含む埴間土主体、埴間土を多く含む。
 3 埴間土 埴間土主体で、埴間土プロットをわずかに含む。
 4 埴間土 As-C多量に含む埴間土主体、副伴物をわずかに含む。As-Cの含有は土層より多量である。
 5 埴間土 As-C多量に含む埴間土主体、副伴物は多く含む。
 6 埴間土 As-C多量に含む埴間土主体、副伴物はない。
 7 埴間土 As-C多量に含む埴間土主体、副伴物を少量含む。
 8 埴間土 As-C少量含む埴間土。
 9 埴間土 As-C多量含む埴間土で、土層より埴間土を多く含む。

G-C'・I-I'
 1 埴間土 As-C多量に含む埴間土。
 2 埴間土 As-Cを少量含む埴間土で、埴間土を多く含む。
 H-H'
 1 埴間土 As-Cを少量含む埴間土。
 2 埴間土 As-Cを多く含む埴間土プロット。
 J-J'
 1 埴間土 埴土プロットを少量、副伴物もごくわずかに含むシルト質土で、しまりがやや強い。
 2 埴間土 As-Cをわずかに、埴土粒をごくわずかに含む、シルト質土。
 3 埴間土 埴間土プロットを少量、副伴物をほとんど、埴土粒を多く含むに含み、しまりが強い。
 4 埴間土 埴間土プロットを少量、As-C副伴物プロットをわずかに含む。

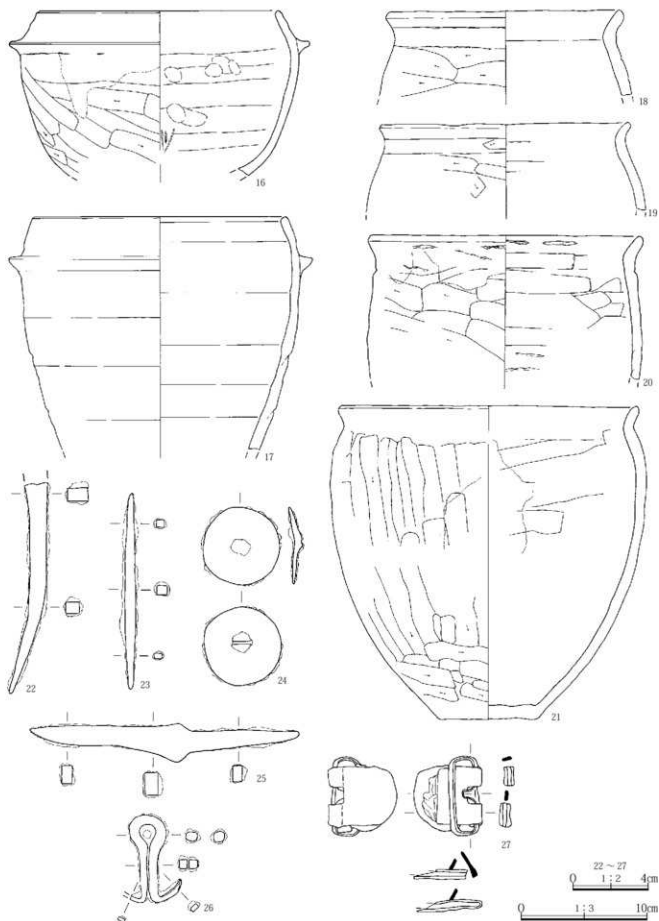
第641図 82号住居

能性がある。床面は平坦に検出されたが、硬化した面は認められず、中央西寄りの一角に「C」字状の焼土面が検出された。また、カマド北側からは炭化材の断片が検出され、さらに南壁際の下層に炭化物が多量に含まれていることなどから、焼失している可能性がある。掘り方は、

カマド前面、北東及び北西コーナー部、南壁寄りに土坑状の浅い掘り込みが行われており、他にピットを7カ所検出したが、貯蔵穴に相当するような掘り込みは見られない。 時期：10世紀後半



第642図 82号住居出土遺物(1)



第643図 82号住居出土遺物(2)